け

發音 ㊀か行第四の音。子音kが母音eに結び附きて發す。その發音の方法・位置に就きては、かの及びえの條下に說けるが如し。濁音げに就きても同樣、かの及びえの條下を見よ。㊁長音はけい又はけー、げい又はげーの如く書す。本書は前者に依れり。㊂字音けい・げいはけ・げの長音として發音すること多し。例へばけいしよく(景色)・げいじゆつ(藝術)の類。㊃下にうふの來る時、卽ちけう・げふは拗長音にして、きやう・きよう・ぎやう・ぎよーと同じく、きよー・ぎよーと發音す。今日(ケフ)・教育(キヤウイク)の如し。濁音のげう・げふも亦これに準ず。例へばげうてん(曉天)・げふむ(業務)の如し。㊄げの上に、つ・き・く等入聲韻の字音ある時は、その つ・き・くは促音に發音せらるること多し。例へば滑稽(コツケイ)をコッケイ、擊劍(ゲキケン)をゲッケン、肉桂(ニクケイ)をニッケイといふが如し。濁音げには此の事なし。㊅濁音げのgeと發音する場合は、語の中間又は下にある時に限る。例へば、おばけ・大袈裟・せんげ(千家)・ささげ(大角豆)の如し。その說明に就いては、かの條下を見よ。㊆漢字音にしてkの又はgより わ行音に連なりて、kwe又はgweと發音せらるるものの、今は全くけ・げに變音するものあり。例へば、くゎんばい(勸盃)のけん ばい、へんぐゎ(變化)のへんげ、ぐゎんじ(源氏)のげんじに於ける等の如し。

字源 平假名けは「計」の草體、變體平假名のゖは「希」、ゖは「介」、ゝは「遣」の草體、片假名ケも「介」の略體。萬葉假名としては、清音の中、宇音に據れる者は、如上の漢字四字の外、「家」・「奚」・「雞」・「藝」等、訓を取れる者は「木」・「毛」・「氣」・「食」・「笥」・「飯」等あり。また濁音には、「宜」・「礙」・「夏」・「碍」・「擬」・「下」等のごとく、音に據れる者多く、稀に「倒」等のごとく、訓に據れるもあり。

け 毛【名】㊀動物の皮膚に生じて、皮膚を保護する細く絲のごとき物。もと表皮が眞皮中に陷入し、その粘質層の細胞增殖して延長し、絲狀をなして、體外に出で、角質に變じたるもの。㊁髮の毛。かみ。毛髮。頭髮。㊂鳥類・昆蟲類などの羽毛。はね。㊃絲のごとく細き物。㊄『ふまう(不毛)を見よ』地上に生ゆる草木。けなしやま(毛無山)參照。㊅稻の穗のみのり。けみ(毛見)參照。㊆鯉の鱗。〔料理の語〕狂言(鏃八)「鯉に限って、鱗をふくとは申さぬ、毛をふくと申す」㊇をさしげ(繊毛)の略。盛衰記「香にても聞知りなん、鎧の毛をも撰りたまへかし」

毛が生ゆ【句】㊀毛生ず。㊁やや勝る。すこしく立ちまさる。㊂功臘(コウラフ)を經(ヘ)。〔俚語〕「海山千年、毛の生えた代物」

毛に謹みて貌を失ふ【句】『淮南子に「畫者謹毛而失レ貌」とあるに本づく』意を小事にのみとどめて、却つて大體を失ふ。〔諺語〕

毛の龍(ケ)き物【句】次條に同じ。(「毛の柔(ニコ)き物」に對して)〔古語〕 祝詞「毛の和(ニコ)き物、毛の荒き物」

毛の龐物(ケダモノ)【句】毛の粗くて大なる獸。毛のあらき物。(「毛の柔物(ケモノ)」に對して)〔古語〕 起毛龐、ケノアラモノ」

毛の靴【句】「靴(クツ)の沓」に同じ。

毛の末【句】極めてわづかなること。いささか。毫末。

毛の柔(ニコ)き物【句】次條に同じ。(「毛の龐(ケダモノ)き物」に對して)〔古語〕 祝詞「毛の和(ニコ)き物、毛の荒き物」

毛の龐物(ケダモノ)【句】毛の粗くて大なる獸。毛のあらき物。(「毛の柔物(ケモノ)」に對して)〔古語〕 起毛龐、ケノアラモノ」

毛の靴【句】「靴(クツ)の沓」に同じ。

毛の末【句】極めてわづかなること。いささか。毫末。

毛の柔(ニコ)き物【句】次條に同じ。(「毛の龐(ケダモノ)き物」に對して)〔古語〕 祝詞「毛の和(ニコ)き物」

毛の柔物(ケモノ)【句】毛の柔くて小さき獸。毛のにごき物。(「毛の龐物(ケダモノ)」に對して)〔古語〕 起毛柔、ケノニゴモノ」

毛の席(ムシロ)【句】かも(鹿)に同じ。〔古語〕 字鏡集「麚、ケノムシロ・カモ」

毛の床(カ)【句】前條に同じ。〔古語〕

毛を植ゑる【句】人又は動物の毛を、人形・假面(メン)などに附く。大悲千鍵本「渠は木偶に毛を植ゑるが巧だから、やつに頼んだら工夫があらうと」

毛を吹いて疵を求む【句】㊀『韓非子の大體篇に「古之(ノ)大體者、不レ吹レ毛而求二小疵一、不レ洗レ垢而察二難レ知一」、又、漢書の景帝紀に「有司吹レ毛求レ疵」とあり。毛の中までも吹き尋ねて、疵を探り出す意」人の缺點を强ひて指摘す。苛察にして、小過失をも見のがさず。〔諺語〕㊁なまじひに手を出して、反りてその災を受く。垢を洗うて瘢を求む。藪をつつきて蛇を出す。〔諺語〕

毛を吹き疵を言ふ【句】前條に同じ。〔諺語〕 後撰「なほき木にまがれる枝もあるものを毛を吹きぎをいふがわりなさ」

毛を吹く【句】『韓非子に「去二仲尼一猶レ吹レ毛耳」とあり』たやすき譬。〔諺語〕

毛を見て馬を相す【句】『鹽鐵論に「以レ言舉レ人、若二以レ毛相レ馬一」とあるに本づく。毛色の美惡によりて、馬の駿・駑を分つに譬へていふ』外貌によりて、全部を判斷す。皮相の觀察をなす。〔諺語〕

愁の毛【句】驚の嘴の基部に生えたる毛。不快なる時に立つるものといふ。

身の毛がよだつ【句】烈しき恐怖のために、全身の毛さかだつ。怖しさにぞっとする。〔俚語〕

食(ケ)【名】くひもの。飲食物。食事。〔古語〕 祝詞「朝の御食(ミケ)、夕の御食」 萬葉「家にあれば笥に盛る飯(イヒ)を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」

け 氣【名】㊀き。いき。いきぼり。威。「火のけ」 蜻蛉「東おもての朝日のけ、いと苦しければ」㊁いき。氣息。呼吸。〔古語〕 萬葉「富士のねのいや遠長き山路をも妹がりとへば氣に呼ばず來ぬ」㊂氣分。氣力。精氣。氣。 大鏡「老のけの甚しきは、みな忘れはべり」〔古語〕㊃けはひ。樣子。痕跡。源氏「いとあいきやうづき、をかしきけさへ添ひたまへり」「酒のけ」「鹽けⅰ」㊄やまひ。病氣。〔古語〕 和名「脚氣、阿之乃介」

氣(ケ)上がる【句】のぼす。逆上す。上氣す。 源氏「御けあがらせたまはん」

氣も無し【句】㊀けはひも無し。けぶりも無し。見る影も無し。〔古語〕 叁遷「けもなく青み痩せて」㊁それに似たる樣子、すこしも無し。 夕顏「河波鳴門」その器量のよさ、おぼこさ、道頓堀の若衆方・女方ひっさらへても、けもないこと」㊂取立てて言ふまでの事なし。とはうもなし。 矢口渡「いや、けもない事、けもない事、さう早まるゆゑ、さきだっても、吉野で、きさま大しくじり」

氣を寒み【句】氣の寒さに。〔古語〕 曾丹集「けをさむみさえゆく冬のよもすがら目だにもあはず衣うすれて」

氣を近み【句】氣の近さに。〔古語〕 夫木「春なれどゆきふる年のけをちかみ小野の炭がまなほやたらん」

氣をぬるみ【句】氣のぬるさに。〔古語〕 後拾遺「こりつめてまきの炭やくけをぬるみ大原山の雪のむらぎえ」

け 故【名】ゆゑ。ため。〔古語〕 竹取「千びばかり申し給ふけにやあらん」 源氏「いふかぎりなき願(ネガ)ども立てさせたまふけにや、たひらかに事なりはてぬれば」

け 木【名】き(木/□)に同じ。**まけばしら(眞木柱)**參照。〔東國の古の方言〕 萬葉「松のけの並みたるみればいはひとのわれを見送ると立たりしもころ」

け 褻【名】ふだんのまま。公(オホヤケ)又は晴(ハレ)にあらぬこと。〔古語〕

褻にも晴にも【句】表面にも、內內にても。不斷にも、儀式ばりたる折にも、

いつもそれのみなる意。 傾城島原蛙合戦「葛西(カサ)の郡司は、一人の男源六は勘當、けにも晴にも、琵琶と申す娘みづから迎へに來り」

褻にも晴にも歌一首【句】褻にも晴にも、歌一首より外に藝なきことすること。いつも同じことを座敷藝などに。〔諺語〕

褻の御所【句】平生、上皇の住ませたまふ御殿。 東鑑「御堂傍褻御所」

け-怪・妛【名】■あやしきこと。〔古語〕 太平記「斯樣の怪ども、未然に凶を示しけれども」 ■もののけ。たたり。〔古語〕 源氏「世の中しづかならぬは、このけなり」

け-卦【名】易(エキ)にて、三爻(サウ)を組合せて、天地間のあらゆる事物の變化を現はし、吉凶の判斷に供するもの。かう(爻)はっけ(八卦)參照。 桑莊「男ども召集めつつ、卦たてさせ給ふほど」

け-罫・界【名】紙又は碁盤・將棋盤などの上にひきたる線。けい。 宇治四經書きたてまつるべき紙、經師に打ちつがせ、けかけさせて」

け-假【名】〔佛〕實有(ジツ)ならぬこと。眞(シン)ならぬこと。かり。けだい(假諦)參照。

け【名】月日を經ること。〔古語〕 萬葉、草枕この旅のけに妻さかり家路おもへばいけるすべなし」

けのこのごろ【句】日數の經ること。〔古語〕 萬葉「近江路のとこの山なるいさや川けのこのごろは戀ひつつもあらむ」

け-消【動自】きゆ(消ゆ)の連用形きえの約。〔古語〕 伊勢「白玉か何ぞと人の問ひしときに露とこたへてけなましものを」

け【貌】■普通と異なるさま。へん。妙。特殊。 萬葉「いもが手をとろしの池のなみのまゆ鳥がねけになく秋すぎぬらし」 天神記「博多小梅がひく牛も、をなご牛とて、けなものや」 ■すぐれたるさま。まさりたる狀。けなげ。 伊勢「ありしよりけにいひかはして、こと心なかりけり」 柏狩劍本地「世繼樣けなお子ぢや」 丹波與作「まあまあ、そちは、けなものぢや」

け【助動】『けりの略』動詞・助動詞の下につきて、過去を現はす辭。 記「ね白の白ただむき巻かずけばこそ知らずともいはめ」「行くといったつけが、未だ行かぬか」

け【接頭】動詞・形容詞の上に續けて、けはひ・樣子等を現し、又は單に意味を强むるに用ふる語。「けどほし」「けぢかし」「けおさる」「け劣る」

け-家【接尾】高貴なる人の官名又は姓氏に添へて、敬意又はその家に屬する意を示す語。「關白家」「將軍家」「松平家」

け【助數】■ひき(匹)に同じ。〔古語〕 起「山のへの小島子ゆゑに入てらふ馬の八つけは惜しけくもなし」 ■『書紀通證に、風俗通を引きて「馬稱レ足者、俗說云、相レ馬及二君子一與レ人相足、故云レ足」あるに由るか』貴人を數ふるに用ふる語。〔古語〕 起「一兒、コノヒトツケ」

け-解【名】げもん(解文)に同じ。

け-牙【名】■きば。 ■ざうげ(象牙)の略。

け【下】【名】■しも。する。 ■劣れること。賤しきこと。

下の下(ゲ)【句】最も下等なること。下下(ゲゲ)の下。(「上の上」に對して)

げ-偈【名】〔佛〕『梵Gāthā(伽陀偈他)の轉訛。頌の義』佛經中にある、主に四句より成る韻文。一句は、三言・四言又はそれ以上等ありて、一樣ならず。四句(ク)。諷頌。偈頌。偈文(ゲモン)。伽陀(ダ)。 源氏「なかばなるげ數へん鬼もがな」

げ-夏【名】〔佛〕げあん(夏安居)の畧。

げ-氣【接尾】『け(氣)の連濁』けはひ・けしきやうすなどの意。 源氏「いたうなげかしげにも言ひたさず」 天の網島「母さまと、をぢ樣がつれだてござるげな」

げ-夏【助數】夏安居(ゲアンゴ)を經過したる度數を示すに用ふる語。夏安居は一年に一度なるが故に、例へば「五夏(ゲ)」は「五年」の意となる。

け-あがり 氣上【名】のぼせ。けあげ。逆上。

け-あがる 氣上る【句】け(氣)の條下を見よ。

げ-あき 夏解【名】〔佛〕夏安居(ゲアンゴ)の最終の日、即ち七月十六日。

げあきをさめ 夏解納【名】『夏解は夏(ゲ)の納といふ意なる上に、更にをさめ(納)を重言せるもの』前條に同じ。

け-あぐ 蹴上ぐ【動下二他】蹴て、跳(ハ)ねあがるやうにす。 桑莊「あないみじや、けあげさせたまふな」

け-あげ 氣上【名】けあがり(氣上)に同じ。

け-あげ 蹴上【名】■蹴上ぐること、又、蹴上げたること、又、蹴上げたる物。はね。 曲關原與市「旅の衣に、馬の蹴上をかくるごと、存外あまりの振舞なり」 也有「かち人の蹴あげや鴛鴦に露しぐれ」 ■足がかりとして踏上がる處。 ■〔建〕階段の一段の高さ。 四けはなし(蹴放)(三)に同じ。

けあげ 蹴上【名】〔地〕京都粟田山の麓、近江國大津に出づる街道の一部。今は京都市に屬す。德川時代には、兩側に弓屋・井筒屋と呼ぶ茶屋ありたり。

蹴上の水【句】前記の蹴上にありし泉。牛若丸の東國に下る途中、平家の侍、關原與市なる者、戲にこの水を牛若に蹴上げしより、牛若怒りて、與市を斬捨てたりと言傳ふ。謠曲の「關原與市」は、これを美濃國にての事として作りかへたり。

けあげ-ふなばり 蹴上船梁【名】船の蹴上の所にある船梁。

け-あし 毛脚【名】■毛の延びゆくこと。「毛脚が早し」 ■毛ぶかき脚。けづね。

け-あし 蹴足【名】蹴る足。

け-あし 氣惡し【形二】模樣すごし。心地わろし。〔古語〕 拾玉「沖つ風けあしけれども漕ぎいでぬと都の人にいかで知らせん」

け-あつ【代】こやつ(此奴)の轉。〔奧羽の方言〕

け-あつむ 蹴集む【動下二他】蹴て、一處に寄せあつむ。 太平記「足を以て、一所に蹴集むるやうにして」

け-あな 毛孔【名】皮膚の、毛の生ずる微細なる孔。

け-あは 毛葉【名】〔植〕おほあは(大粟)に同じ。

け-あひ 蹴合【名】■蹴合ふこと。 ■鷄の互に蹴合ひてたたかふこと。

げあひ 解間【名】〔佛〕一回の夏安居(ゲアンゴ)終りて、次の安居の始まるまでの間。

け-あふ 蹴合ふ【動四自】互に蹴る。

け-あん 化行【名】〔佛〕寺院にて、化主(ケシュ)に隷屬して、その用務を辨ずる役。

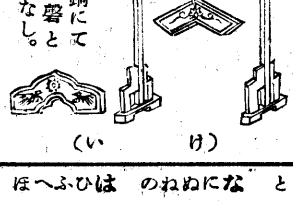
げあん-かふきん 下安甲金【名】かふあんちゆうきん(甲安中金)に同じ。〔俚語〕

げ-あんご 夏安居【名】〔佛〕あんご(安居)見よ。

け-い 敬【名】■つつしみ守りて、邪念を生ぜぬこと。うやうやしきこと。つつしみ。恭敬。 ■つつしみて事ふること。うやまふこと。うやまひ。

け-い 警【名】■いましめ。警戒。用心。「警を傳ふ」 ■けいひつ(警蹕)に同じ。

け-い 磬・罄【名】支那の古代に用ひし石屬の樂器。堅き石をへの字形に刻み、架に懸けたるもの。雅樂の終閧(リウ)に擊ちたりと言傳ふ。後世は、多く銅にて造るに至れり。これを銅磬といふ。うちならし。うちなし。きん(磬)參照。



(い け)

け-い 刑【名】■〔法〕犯罪人を罰する法律上の制裁。刑罰。 ■のり。常法。恒憲。

刑の疑はしきは、輕きに附くべし【句】次條に同じ。〔諺語〕

刑の疑はしきをば輕んぜよ【句】『書經の大禹謨に「罪疑惟輕、功疑惟重、與二其殺二不辜一寧失二不經一」とあるに本づく』罪の疑はしき者に對しては、輕き刑罰を適用せよ。刑の疑はしきは、輕きに附くべし。〔諺語〕 平家「刑の疑はしきをば輕んぜよ、功の疑はしきをば重んぜよとこそ見え候へ」

刑の加重(カヂウ)【句】〔法〕刑科の重き方に從ひて處罰すること。

刑の減輕【句】〔法〕刑科の輕き方に從ひて處罰すること。

刑の時効【句】〔法〕時効の一。刑の宣告確定の後、一定の期間の經過により、その執行を免除すること。(公訴時効に對して)

刑の執行【句】〔法〕適用したる刑法により、實地に處置すること。

刑の執行猶豫【句】〔法〕前に禁錮以上の刑に處せられしことなき者が、二年以下の懲役又は禁錮の宣告を受けたる時、裁判所が、情狀によりて、一年以上五年以下の期間内、その執行を猶豫すること。この宣告の取消さるることなくして、猶豫期間の經過せる時は、その宣告は効力を失ふ。

けい 惠【名】 めぐみ。恩惠。

けい 系【名】 ■〔地〕『英System』地史の系統的類別上の名目の一。界の中の區分に用ふ。例へば太古界を片麻岩系・結晶片岩系の二に分つ類。時代的類別の上よりは、紀といふ。■〔數〕『英Corollary』一つの證明せられたる命題より明確に推定せられ得る他の命題。例へば「平行四邊形とは、四邊形にして、その對邊、互に平行なるものをいふ」との定義よりして、「隣角が補角をなす時は、その四邊形は平行四邊形なり」「對角相等しければ、その四邊形は平行四邊形なり」の二つの系を得るが如き類。

けい 慶【名】 ■よろこび。いはひごと。■任官・敍位の御禮。慶賀。

けい 卦【名】 け(卦)に同じ。

けい 罫【名】 ■け(罫)に同じ。■『英Brass rule』活字と活字との間の境界又は裝飾などに用ふる罫。種類多し。かい。

けい 京【名】 きやう(京)に同じ。

けい 景【名】 けしき。ながめ。みはらし。景色。

けい 圭・珪【名】 上部尖りて、下部方なる玉。支那にて、主に天子の諸侯を封ずる時、璽(シ)として賜ひ、又、神を祭るにも、又、聘問の信としても用ひたり。浦島年代記「碧玉の圭を正しうして、白玉の床に著き」

けい 桂【名】 ■〔植〕樟(クス)科に屬する常綠喬木。支那南部及びビルマ邊の原産。高さ數丈に達し、芳香を有す。葉は全緣の披針形にして、二本の側脈著しく、花は小さくして黃色を呈し、複總狀花序をなす。葉・樹皮及び根は桂葉・桂皮・桂根と稱し、製油用又は藥用に供せらる。■けいま(桂馬)の略。

桂を燒(タ)く【句】「玉を炊ぎ、桂を燒(タ)く」を見よ。

けい 奎【名】 〔天〕二十八宿の一。西宮の第一。アンドロメダ(Andromeda)座の九星と雙魚座の七星とより成る。文運を司るといふ。また九星にては、和善の宿とし、この宿に當る日は、諸藝を學び、婚姻を結び、貴人に見ゆるに吉なりといふ。奎宿。けいうん(奎運)參照。

けい 聲【名】 しはぶき。せきばらひ。又しはぶきをなす聲。きやう。

けい 徑【名】 ■ちひさき路。こみち。〔逕〕■〔數〕『英Diameter』平面圖形にて、兩端がその圖形に終れるすべての平行直線を二等分する直線、また立體にて、兩端がその立體に終りて、且つすべての平行截口(キリクチ)の中點を通過する直線。但しすべての平面圖形及び立體は、必ずこれを有すとは限らず。さしわたし。わたり。直徑。

けい 經【名】 ■織物のたての絲。たて。(緯に對して) ■〔地〕『地圖の南北兩極を連ねたるさま、織物のたての絲に似たるよりいふ』けいせん(經線)の略。緯に對して) ■『織物の經絲(タテイト)は、織る時まづ機に張りて動かさず、緯(ヨコ)を左右より通はせて織込むよりいふ』人の履(フ)行ふべき正しき道。常の道。道德。■けいよ(經書)の略。「幸にこの經の今に存するあり」

けい 卿【名】 ■けうけい(公卿)を見よ。■しやく(爵)■を見よ。

けい 兄【名】 あに(兄)に同じ。

兄たり難し、弟(オト)たり難し【句】『世說の德行篇に「陳元方子長文有二英才一、與二季方子孝先一各論二其父功德一爭レ之不レ能レ決、諮二于太邱一。太邱曰、元方難レ爲二其兄一、季方難レ爲二其弟一」とあるに本づく』優劣なし。甲乙なし。〔諺語〕

けい 啓【名】 ■『もと皇太子に言上する意より出づ』皇太子及び三后に進言する意用ふる文書の樣式。上啓。上書。■〔文〕漢文の一體。臣下より君王に上る論議、又は意見の文書の一種。〔魏晉以後の語〕■贈答の書翰。

けい 蹊【名】 こみち。譬「桃李言はざれども、下おのづから蹊を成す」

けい 契【名】 わりふ。符契。券契。

けい 計【名】 ■はかりごと。計畫。「反間苦肉の計」■計算。合計。

けい 怪異・恠異【名】 くわい(怪異)に同じ。

けい 卿【代】 ■君主の臣下に對して用ふる第二人稱。■身分ある人の間に用ひらるる第二人稱。

けい 兄【代】 輩行の同じき人の名に代へて呼ぶ語。君。貴君。

けい 頃【接尾】 海・田畠などの廣さの單位。一頃は百畝。「萬頃の稻田」「千頃の波」

けい 京【數】 億の一億倍。兆の一萬倍。

げい 藝【名】 ■身に學び得たるわざ。藝術。藝能。■いうげい(遊藝)に同じ。■〔地〕げいしう(藝州)に同じ。「藝備の間」

藝が身を助くるほどの不仕合(フシアハセ)【句】 零落したるために、道樂に學びたる藝を、餬口の資とするに至れる不幸。〔諺語〕 俚言集覽「田宮仲宣が東牖ナドに、藝が身を助くる程の不仕合と云ふ句は、京師醒ケ井高辻の錦花翁隆志といふ人の句にて、海内にゆきみちて、皆唱ふれども、その句主を知る人稀なり」

藝立つ【句】 一藝に達す。

藝は道によりて賢し【句】 人は、各專門とする技藝・學問に就いて明智なり。餅屋は餅屋。〔諺語〕

藝は身の仇【句】 多藝なるために、却りて身を誤る。〔諺語〕

藝は身を助く【句】 身に學び得たる藝あれば、零落するとも、それによりて生計の道を得べし。〔諺語〕 吾吟我集「しめばやととる野の鶉(ウヅラ)靡よくてなれさへ藝は身をたすけぬる」

げい 黥【名】 いれずみ(入墨)■に同じ。

けいあ 京鴉【名】 京都より諸國に下る商人。あきんど。 節用集「京鴉、けいあ、商人也或作二經屋一」

けいあい 閨愛【名】 むつめ。令孃。

けいあい 輕躁【名】 うすもや。うすがすみ。淡靄。

けいあい 敬愛【名】 うやまひいつくしむこと。愛敬。

けいあい 惠愛【名】 めぐみいつくしむこと。

けいあいじ 景愛寺【名】 京都五辻(イツツヂ)にありし寺。足利貞氏の妻出家して創立す。室町幕府、これを尼五山の首位に置きしが、後に廢絕す。

けいあく 輕幄【名】 一方のみを遮る幕。

けいあみ 藝阿彌【名】 〔人〕室町時代の畫家。眞能の子。名は眞藝、學叟と號す。三阿彌の一人。足利義政に仕へて同朋たり。畫を父に學び、又、古美術刀劍・茶器等の鑑定に長じたり。

けいあん 桂庵・慶菴・慶安【名】 『承應の頃、江戸京橋の醫大和慶庵といふ者、好みて緣談の媒介などせしより起るといふ』■奉公人・緣談などに關して、媒介をなす者。■雇人及び奉公人の口入(クチイ)を、業とする人、又その家。やとひにんくちいれやど。うけやど。■追從(ツヰジウ)。又それを言ふ人。〔江戸時代の語〕 譬女五枚羽子板「物もう、どうれい。先づ當年の御吉けいは慶庵」 但城適喜童子來とる能太夫もはだしぢやと慶庵とりどり」

けいあん 桂庵【名】 〔人〕禪僧。朱子學者。周防國山口の人。後土御門天皇の勅命を奉じて明國に入り、歸朝後、島津忠昌の請によりて鹿兒島に來り、桂樹庵の第一世となる。永正六年寂す。年八十二。島陰集・家法和訓の著あり。

けいあん 輕安【名】 身輕にて安全なること。

けいあん 慶安【名】 後光明天皇の御代の年號(紀元二三〇八年—二三一一年)。

慶安の變(ヘン)【名】 慶安四年四月三代將軍德川家光薨じ、子家綱十一歲にて職を嗣ぎたれども、人心おのづから安からざるに乘じ、浪士由井正雪・丸橋忠彌・熊谷

三郎兵衛・金井半兵衛等、亂を圖る。七月に事發覺し、相尋いで誅せられし事變。

けいあんぐち 桂庵口・慶菴口【名】■周旋を業とする者の言語の、信用するに足らぬこと。なかうどぐちの類。■へつらひごと。追從(ツヰジウ)。

けいあんざぶらひ 桂庵侍・慶安侍【名】追從・阿諛をことゝする武士。曾我尼が塵「祐經諛ひの慶安侍、大磯湯方を畫夜徘徊仕る」

けいあんたいへいき 慶安太平記【名】【書】慶安の變を材料としたる歴史小說。

けいあんは 桂庵派【名】清樂(シンガク)の一派。

けいあんもの 桂庵者・慶菴者【名】江戸の人、鏑木(スヽキ)溪庵を祖とす。

けいあんもの 桂庵者・慶菴者【名】追從(ツヰジウ)を言ふ人。おせじもの。

けいあんもの 慶庵者の空笑(ソラワラヒ)【句】輕薄なる者の、相手の歡心を得んとして、心にも無き笑をなすこと。

けいい 敬意【名】うやまひの心。

けいい 敬意を拂ふ【句】心中には避けたく思ひながら、表面には丁寧なる態度を以て接す。

けいいをあらはす 敬意を表す【句】■謙みて尊敬の意を表はす。■『前文の反語』敬して遠ざく。失敬す。(俚語)

けいい 輕衣【名】うす物などの輕き服。

けいい 脛衣【名】きやはん(脚絆)に同じ。

けいい 輕易【名】■てがるなること。平易。容易。■悔り輕んずること。

けいいう 鷄友【名】世を避けて、谿谷の間に住める友。

けいいう 經由【名】『英 Via』道すぢにあたること。そこを通過すること。けいゆ。「シベリヤ鐵道經由」「卿相を經由す」

けいいう 啓誘【名】智能をひらきみちびくこと。啓發・誘導。

けいいう 經遊【名】へめぐり歩くこと。

けいいうかはせ 經由爲替(英 Cross exchange)【名】(商)わうだんかはせ(橫斷爲替)に同じ。

けいいち 形一【名】(語)第一變化の形容詞の略符。即ちく・し・き・けれと變化する形容詞。

けいいつ 驚逸【名】犬馬などが、物に驚きて外(ソ)れ走ること。

けいいふ 京邑【名】みやこ。都會。

けいいん 溪陰【名】谷のかげ。たにかげ。

けいいん 京尹【名】けいてうのいん(京兆尹)に同じ。

けいいん 契印【名】(法)二箇の紙面に跨らせて押捺し、その兩面の連結せるものなることを證する印影。わりいん。

げいいん 鯨飲【名】■鯨の水を飲むに譬へていふ。■酒を甚だ多く飲むこと。大酒。

けいう 輕雨【名】こぶりの雨。こさめ。

けいうん 奎運【名】『孝經に「奎主文昌」とあるに本づく。けい(奎)を見よ』ぶんうん(文運)に同じ。

けいうん 景雲・卿雲・慶雲【名】太平の瑞氣。めでたきしるしの雲。盧藜記「慶雲・壽星とて、御悦來り、御壽(ジユ)永かるべき天變とのみ奏せしかば」

けいうん 慶雲【名】文武天皇の御世の年號(紀元一三六四年—一三六七年)。

けいうん 慶運【名】(人)足利時代の歌人。法印淨辨の子。法印に叙せらる。父淨辨及び頓阿・兼好と共に和歌の四天王と稱せらる。生歿年月詳かならず。

けいうんがん 硅雲岩【名】(鑛)『英 Greisen』花崗岩の一變種。成分中に長石を含まざるもの。

けいうんほふいん-しふ 慶運法印集【名】【書】慶運の歌集。群書類從に收む。

けいうんねん 慶雲院【名】(人)あこがよしかつ(足利義勝)の諡(オクリナ)。

げいうら 藝裏【名】芝居にて、左側の棧敷。(藝表に對して)

けいえい 輕銳【名】甲冑などを著けず、身輕(ミガル)にいでたちたる銳卒。

けいえい 勁銳【名】つよくするどきこと、又その兵士。

けいえい 瓊英【名】うつくしき花。玉のごとき花。(梅花などにいふ)

けいえい 形影【名】かたちと、かげと。形影相弔ふ【句】『李密の陳情表に「煢煢孑立、形影相弔」とあるに本づく』わが身の影法師が、憂を弔ふのみにて、外に同情者なし。(諺語)

けいえい 經營【名】■繩張(ナハバ)して造ること。構へ造ること。(景行天皇甘露頌「わが君北嶽峨に離宮を經營ましまして」■工夫(クフ)をこらして、物事を營むこと。計畫。太平記「御卽位の大禮は、四海の經營」

けいえいさう 輕營倉【名】營倉の一。一日乃至三十日の間、營倉に錮し、演習及び教育の場合を除く外、勤務に服するを禁じ、その間、營內居住者に對しては俸給の十分の五、營外居住者に對しては、その十分の二を減ずるもの。疎慮・懈怠もしくは過失より、或犯行をなしたる下士卒に科す。(重營倉に對して)

けいえう 瓊瑤【名】うつくしき玉。瓊瑤は少なきを以て美とす【句】類(サク)稀なる物は珍重せらる。(諺語)曾我「これや瓊瑤は少なきを以て美なりとし、石礫は多きを以て卑しとす」

げいえつ 迎謁【名】出迎へておめどほりすること。

けいえふ 桂葉【名】桂(イヌ)の葉。

けいえふゆ 桂葉油【名】桂葉より製する食用の油。質、濃稠にして、蔥蘿子(シラヽ)油に類す。

けいえん 經筵【名】經書の講演の席。

けいえん 瓊筵・桂筵【名】■美しき席。■高雅なる宴會。風流文雅の宴席。

けいえん 鯨焉(貌)【名】『鯨は、はるかなる意』遠くへだたりたるさま。はるかに。

けいおう 慶應【名】孝明天皇の御代の年號(紀元二五二五年—二五二七年)。

けいおん 瓊音【名】■玉のおと。ぬなと。■うつくしきおと。うるはしきこと。■妙(ミヤウ)なる音樂、又は詩歌のしらべ。

けいおん 慶恩【名】(人)書家。姓は藤原、春日隆信の第二子、光信の弟。攝津住吉神社の綉所となり、法眼に叙せらる。建仁年間の人。

げいおん 鯨音【名】『祖庭事苑に「物類感志云、海岸有レ獸曰二浦牢一而性長二鯨魚一、食二於海畔一、鯨或躍、浦牢卽鳴、聲如レ鐘、今人多狀二浦牢獸形一、施二鐘上一、斲レ撞爲レ鯨而擊レ之、鯨本無レ聲、因二鯨躍一而浦牢鳴、故曰二鯨音一」とあり』梵鐘の聲。

げいおもて 藝表【名】『舞臺にて技藝を演ずるに、此處を正面の心にて演ずるよりいふ』劇場の右側の棧敷。(藝裏に對して)

けいか 荆軻【名】(人)支那春秋戰國の時の刺客。燕の昭王の太子丹の客となり、荆卿と稱せらる。丹のために、秦王を秦廷に刺さんとして、却りて殺さる。

けいか 輕舸【名】はやふね。てんま。走軻。飛軻。輕艇。

けいが 繫駕【名】車輛に馬を繫留すること。

けいが 慶賀【名】■よろこびいはふこと、祝賀。■任官・叙位の御禮を申上ぐること。よろこびまうし。拜賀。慶。奏慶。

けいが 慶賀の笏(ハク)【句】奏慶の際に用ふる笏。名目抄「慶賀笏、ケイガノシヤク、奏慶之時用之、往昔各別意歟」

けいが 敬賀【名】うやうやしく賀すること。不慮の變に對する準備用心。(儆戒)

げいか 猊下【名】■猊座の下(モト)。高僧のおそば。■高僧の敬稱。■僧に送る書狀の脇附(ワキヅケ)に用ふる語。

けいかい 警戒【名】■いましめ心づくること。■兵)不意の敵襲を戒め、且つこれを拒止し、後方部隊に所要の準備をなさしむること、又すべて事變に對する豫防處置。

けいかい 經界・境界【名】さかひめ。しきり。きやうかい。

けいかい 徑街【名】小路と大路と。みち。

けいかい 醯醢【名】『醯は醋』醋(ス)とひしほと。

けいが 形骸【名】からだ。身體。

けいがい 形骸を土木にす【句】『晉書の嵇康傳に「康宇叔夜、身長七尺八寸、美二詞氣一、有二風儀一、土二木形骸一、不二自藻飾一、又、世說の容止篇に「劉伶身長六尺、貌甚醜悴、而悠悠忽忽、土二木形體一」などとあり』身體を土木視して修飾せず。(諺語)

けいがい 荆芥假蘇【名】(植)唇形(シンケイ)

科に屬する一年生の草。莖は方形にして高さ約二尺に達す。葉は羽狀複葉にて對生し、夏、穗狀の淡紅色の花を開く。種子は藥用に供せらる。ののえ。ありたさう。ねづみぐさ。 遍歩色葉集「荊芥、ケイガイ」

けいーがい 警欬。警咳【名】『警は驚の輕きもの、欬はその重きものをいふと、莊子の徐無鬼篇の註に見ゆ』物いひ、わらふこと。警咳に接す【句】貴人に面會す。面晤の榮を得。おめにかかる。

けいーがい 驚駭【名】おどろきさわぐこと。きやうがい。

けいーがい 傾蓋【名】『孔子家語の致思篇に「孔子之レ郯遭二程子於塗一、傾レ蓋而話、終日甚親、顧謂二子路一曰、取二束帛一以送二先生一」とあるに本づく』■從來面識なかりし者が、途上に相逢ひ、馬車の蓋(かさ)を傾けながら、兩車を接近せしめて相語ること。■かりそめに面會すること。【語】【句】次條に同じ。〔諺〕傾蓋、舊の如し【句】『鄒陽の獄中上二梁王一書に「諺曰、有二白頭如レ新、傾レ蓋如レ故」とあり。又、史記の鄒陽傳にも出づ』一見して、故舊のごとく親しむ。傾蓋舊の如し。〔諺語〕

けいかい-かうぐん 警戒行軍【名】〔兵〕せんびかうぐん(戰備行軍)に同じ。

けいかい-きんむ 警戒勤務【名】〔兵〕敵の軍艦・艦隊の奇襲を豫備するために、特殊の警戒に從事すること。

けいかい-しよく 警戒色【名】〔動〕『英Warning coloration』或動物が有せる、特種の彩色。これを有する動物は、形小さく、毒刺・臭氣を有するを常とし、これらの有毒動物なることを、その特異なる色彩により、他の動物をして、容易に認識せしめ、誤りて害を加へらるることを豫防す。例へば蜂の褐色と黑色との斑ありて、一見、その蜂たるを示す類。ほごしよく(保護色)・きたい(擬態)參照。

けいかい-せん 警戒線【名】〔兵〕警戒のために設けし歩哨線、又は艦艇配備の線。

けいかい-たい 警戒隊【名】〔兵〕警戒に任ずる部隊。

けいかい-はう 啓開砲【名】〔兵〕咽喉部を閉鎖せざる堡壘。眞線堡・凸角堡・眼鏡堡・半角面堡等、これに屬す。

けいかい-あ 桂開會【名】〔佛〕八月十五夜の異稱。けいくわゑ(繼華會)參照。

けいかう 頸硬【名】〔醫〕りうかうせいなうせきずゐまくえん(流行性腦脊髓膜炎)に同じ。

けいかう 馨香【名】よきかをり。にほひ。けいきやう。

けいかう 輕航【名】輕快なる航行。

けいかう 慶幸【名】よろこび。さいはひ。

けいかう 景仰【名】『景は慕ひ仰ぐ意』德をしたひあふぐこと。欽慕。景慕。想望。

けいかう 傾向【名】■一方にかたよる現象。きはだちて流行する現象。かたむき。■〔哲〕『英Tendency』精神物理學にて、心的組織の基礎をなせる神經組織の傾。

けいかう 惠肯【名】『詩經の邶風終風篇に「惠然肯來」とあるに本づく』人を請待(しやうたい)すること。

けいかう 啓行【名】■先に立ちてみちびくこと。先導。■貴人の旅だつこと。

けいかう 携行【名】たづさへゆくこと。

けいかう 徑行【名】『禮記の檀弓下篇に「有二直レ情而徑行者一」とあり。徑はただちにの義』思ふがままに、行ふこと。情を矯めずに踐行すること。

けいかう 經行【名】■〔めぐりゆくこと。經過。■げつけい(月經)に同じ。

けいかう 荊浩【名】〔人〕支那唐の畫家、名は浩然。山水畫に長じ、又、經史に通ず。太行の洪谷に隱れ、洪谷子と號す。吳道子・項容の長を取つて、一家を創めたりといふ。

けいかう 晳康【名】〔人〕支那晉の人。字は叔夜。竹林の七賢の一人。譏にあひて、殺さる。嵇然・晳康も、山澤に遊びて魚鳥を見れば、心樂しむ、といへり」

けいがう 警號【名】■警戒のしらせ。■けいむがう(警寤號)に同じ。

けいかう-こうりやう 携行口糧【名】〔兵〕携行糧秣中の、各自携帶の糧食。

けいかう-せうせつ 傾向小說【名】〔文〕『英Tendency novel』作者の抱ける主張・意見を寓して、その宣傳を目的とせる小說。

けいかう-だんやく 携行彈藥【名】〔兵〕編制上、野戰各隊及び各人の携帶する彈藥。

けいかう-てんわう 景行天皇【名】〔人〕第十二代の天皇。御名は大足彦忍代別(おほたらしひこおしろわけ)。垂仁天皇第三の皇子。御母は日葉酢媛(ひばすひめ)命。在位六十年(紀元七三一年—七九〇年)。即位の六十一年崩ず。壽百〇六。一說に、百四十一。

けいかう-ばりやう 携行馬糧【名】〔兵〕携行糧秣中の、各馬匹の携帶する馬糧。

けいかう-りやうまつ 携行糧秣【名】〔兵〕編制上、野戰各隊及び各人の携帶する豫備の糧秣。非常の場合又は他に給養の途絕えたる場合に、指揮官の命令によりて、初めて使用するものとす。「比較。

けいかく 計較【名】はかりくらぶること。

けいかく 傾角【名】『英Inclination』■理』基準とする平面或は直線に對して、他の平面或は直線のなす角。■ふくかく(伏角)に同じ。

けいかく 圭角【名】■『けい(圭)を見よ』玉のかど。とがり。かど。■言語擧動などのかどかどしくして、圓滿ならぬ氣象。

けいかく 瓊閣【名】玉のうてな。美しき家。玉樓。

けいがく 經學【名】儒敎の經典、卽ち六經・四書を講究する學問。經術。

けいがく 鶩愕【名】おどろくこと。きやうがく。「じ。

けいがく 螢學【名】「螢雪(けいせつ)の學」に同じ。

けいがく 谿壑【名】■深き谷。■極めて慾深きこと。「谿壑の慾」

けいかく-かいめん 硅角海綿【名】〔動〕海綿動物の一目。硅石質の針骨と角質の纖維とを有するもの。海絲瓜(へちま)など、これに屬す。

けいがく-くわん 敬學館【名】備中國吉備(きび)郡岡田村に在りし舊岡田藩の學校。寬政六年の創立、明治に至りて廢す。

けいがく-ゐん 經學院【名】朝鮮總督府の監督に屬し、經學の講究をなし、德化・風敎を裨補するを目的とする處。大提學・副提學・祭酒・司成・直員の職員を置く。

けいがくゐん-かうし 經學院講士【名】經學院を組織する職員。朝鮮の各道に於ける學識德望ある者の中より、朝鮮總督これを選ぶ。

けいが-せん 慶賀錢【名】乾隆通寶の一種。背に鳳龍の圖を現はせるもの。

けいかつ 慧黠【名】さかしくづるきこと、又その人。

けいが-とほほうへい 繫駕徒歩砲兵【名】徒歩砲兵の一。野戰軍隊と共に運動し、陣地の攻守に任ずるため、その砲車及び車輛を繫駕したるもの。又この砲兵の、野戰軍に專屬せるを、野戰重砲兵と稱す。

けいかん 閨閤【名】ねや。ふしど。寢處。閨閤の臣【句】近侍の臣。

けいかん 挂甲【名】うちかけよろひ(打掛甲)に同じ。

けいがふ 契合【名】■割符(わりふ)を合せたるが如く、よく一致すること。■〔哲〕けいがふはふ(契合法)に同じ。

けいがふ 迎合【名】あらかじめ人の意を探り迎ふること。機嫌を取ること。

けいがふ-しゆぎ 迎合主義【名】人の意を迎ふるを主とすること。

けいがふ-てん 契合點【名】互に一致する「點。

けいがふ-はふ 契合法【名】〔哲〕『英Method of agreement』歸納推理の法式の一。種種の現象を綜合比較し、その契合點より通則を發見する方法。例へば固體を液體に變ずるも、液體を氣體に變ずるも、その物體の性質及びその事情の如何に拘らず、熱はその缺くべからざる條件なるより、固體を液化し、又は液體を氣化する原因は熱なりと知る類。一致法・類同法。(差異法・共變法・結合法・剩餘法に對して)

けいかふはん 輕甲板【名】『英Spar deck』商船の甲板の、二層以上ある中にて、上甲板は、構造輕く、その下は、輕量の荷物のみの搭載に適し、その上には、特に局部補强をなすにあらざれば、船樓等を設くるに適せざるもの。(重甲板に對して)

けいかふはんせん 輕甲板船【名】『英 Spar-decked vessel』上甲板が輕甲板の構造なる商船。造船術の進歩せる今日以前にありては、船體强度の點より、多くの乾舷を要し、從つて、多く吃船として用ひられたれども、現今は必ずしも然らず。(重甲板船に對して)

けいがみ 罫紙【名】罫をひきたる紙。けいほるごに同じ。

けいかん 繫桿【名】ほるごに同じ。

けいかん 雞姦 鷄姦【名】おかま。かま。男色。

けいかん 溪間【名】たにま。たにあひ。

げいかん 溪澗【名】たにがは。たに。

けいかん 勁悍【名】つよく、あらあらしきこと。氣立(きだて)あらきこと。勁强。慓悍。

けいかん 徑間【名】さしわたしの距離。

けいかん 輕寒【名】うすらさむきこと。薄寒。

けいかん 輕悍【名】かるはづみにて、氣早きこと。

けいがん 繫岸【名】岸につなぐこと。

けいがん 硅岩【名】(鑛)主に石英の粒にて成れる緻密なる岩石。古き地層に屬し、色は白・灰・赤などあり。

けいがん 啓龍【名】かいちやう(開帳)に同じ。

けいがん 雞眼・鷄眼【名】(醫)うをのめ(魚の目)に同じ。

けいがん 慧眼【名】眼力の鋭きこと。「き眼識。」

けいがん 熠眼【名】『けいけい(熠熠)を見よ』

けいかん 熠熠たる眼光。眼力のするどきこと。

げいかん 迎寒【名】㊀寒冷なる季節を迎ふること。㊁陰歷八月の異稱。

げいがらす 藝烏【名】藝に熟達せる者。(徳川時代の語)

けいき 景氣【名】㊀ありさま。模樣。光景。(幕府侍日記「鳥羽殿の御所のけいきの面白さ、ことわりにも過ぎたり」㊁威勢よきこと。元氣なること。㊂人氣。評判。㊃賣買・取引の狀況。商況。

けいき 刑期【名】(法)刑の執行を受くる期限、即ち裁判の確定により、刑の執行を受けてより執行の滿了するまでの間。

けいき 京畿【名】㊀宮城附近の地。㊁都のめぐりの土地。畿内。近畿。

「騎兵。

けいき 輕騎【名】輕裝せる又は輕捷なる裝置のもの。袋の下部に籠ありて、人を盛る。地上に繫留するものと、空中を浮遊するものとの二種あり。風船。氣球。

けいき 經紀【名】『經綸紀理の義』㊀筋道を立つること。紀綱。「山川を經紀す」㊁善く生活を營むこと。㊂商業の仲買人。すはひ。なかがひ。

けいき 勁騎【名】强き騎兵。驍騎。

けいき 形氣【名】形體と氣象と。

けいき 揭記【名】けいさい(揭載)に同じ。

けいき 傾蓌【名】きけい(奏傾)に同じ。

けいき 傾敧【名】㊀かたむきそばだつこと。かしぐこと。㊁ひづむこと。ねぢくること。

けいき 傾危【名】かたむきてあやふきこと。平準嚴舍傾危し、樓閣荒廢して」

けいき 慶喜【名】よろこび。歡喜。

けいき 計議【名】はかりごと。はからひ。

けいぎ 經義【名】經書の意義。

けいぎ 稽疑【名】『書經の洪範篇に出づ』疑あるとき、卜筮を行ひて考ふること。

げいぎ 藝氣【名】藝事の心得。しばゐぎ。しばゐごころ。(徳川時代の語) 桂川連理柵「でも、げいぎのない奴と」

げいぎ 藝妓【名】音曲・歌舞などをもて、宴席の興を添ふる女。うたひめ。しらびやうし。校書。(關東にては、藝者といひ、關西にては、藝子(ぎい)といふ)

けいきあげ 景氣上【名】景氣のよきを見て値上すること。

けいきいつ 慶紀逸【名】(人)江戸の俳人。倚杜子、又、四時庵と號す。江戸風の俳諧の祖。寶曆十一年歿す。年六十八。

けいきう 輕裘【名】かろき皮ごろも。輕く温き衣服。「肥馬・輕裘」

けいきかう 經義考【名】(書)經書に關する諸說・沿革などを網羅せるもの。三百卷。支那清の朱彝尊の撰。清の翁方綱、その補正十二卷を著はす。

けいきがく 敬義學【名】あんさいがく(闇齋學)に同じ。

けいきがくは 敬義學派【名】あんさいがくは(闇齋學派)に同じ。

けいききう 輕氣球【名】空氣より輕き氣體を絹製の袋に入れて、空中に昇降せしむる裝置のもの。袋の下部に籠ありて、人を盛る。地上に繫留するものと、空中を浮遊するものとの二種あり。風船。氣球。

けいききうたい 輕氣球隊【名】輕氣球を使用して、通信偵察などをなすことを掌る軍隊。

けいききゆう 慶應宮【名】朝鮮王城にある舊李王朝の宮殿の一。約百五年前の建築。正殿を崇政殿と稱す。

けいぎくわん 經誼館【名】近江國淺井郡朝日山にありし舊朝日山藩の學校。享和元年の創立。

けいぎくわん 敬義館【名】播磨國明石郡大明石村に在りし舊明石藩の學校。明治二年の創立、後、幾何もなく廢す。

けいきだう 京畿道【名】(地)朝鮮十三道の一。中央部の一區劃。首都京城あり。

けいきづく 景氣附く【動四自】景氣よくなる。上景氣となる。

けいきづく 景氣附く【動下二他】人爲に因りて、景氣をよくす。景氣をつりあぐ。

けいきづけ 景氣附【名】景氣をつくること。景氣づくること。

けいきてつだう 京義鐵道【名】朝鮮京城附近の龍山に起りて、平壤を經て、鴨綠江岸なる新義州に至る鐵道。延長三一三哩。

けいきふ 警急【名】急變に對して、警戒すること。

けいきふしふがふぢやう 警急集合場【名】(兵)警報ありし時、速に武裝を整へて集合する場所。歩兵は大隊ごとに、その他の兵種は中隊ごとに、その舍營地區内に選定せる一地點。また砲兵は砲廠を以て、これに充つ。

けいきふしやえい 警急舍營【名】(兵)軍隊が、急變に對して、即刻出動し得る用意のために、中隊小隊毎に一家に舍營し、服裝を整へ、銃背嚢を身邊に置き、窓戸を開き、少なくとも、兵卒一名點燈して警戒すること。

けいきん 頸筋【名】(醫)『獨 Halsmuskeln』頸部の筋肉。長筋・短筋より成る淺在頸筋。筋と内列・外列より成る深在頸筋との總稱。隨意筋七大別の一。頸部筋。

けいきん 携琴【名】清樂に用ふる一種の樂器。胡琴のやや大なるもの。太き二絃と細き二絃とを交互に張りて、太きと細きと相合して、同調をなすやうにし、弓の馬尾毛を二分して、太きと細きとの間に插入し、或は太き二絃を、或は細き二絃を、同時に擦奏して、調子を取る。

けいきん 奚琴【名】古、支那より傳はりし一種の樂器。今傳はらざれども、二張より成り、一張は無絃、一張は二絃ありて、竹片を以て軋りて奏せしものといふ。又、胡中奚部の好みしものにて、弦兆跋より出で、形もこれに類し、その製兩絃にして、間は竹片にて軋るともいふ。拾芥抄「奚琴、二張、一張無弦、一張弦二筋」

けいきん 胡琴【名】古、支那より傳はりし一種の樂器。今傳はらねど、もと蜡康の製にして、一絃あり、竹にて軋りて鳴せりといひ、また前條の奚器と同物ならんともいふ。

けいきんこ 輕禁錮【名】(法)舊刑法の禁錮の一。服役せしめずして、禁錮場に留置すること。

けいきんごく 輕禁獄【名】(法)舊刑法の禁獄の一。刑期の短きもの。

けいきんこぢやう 輕禁錮場【名】輕禁錮もしくは拘留の刑に處せられたる者を拘禁する所。又、懲治人を一時留置することあり。

けいきんしん 輕謹愼【名】陸軍の刑法に於ける謹愼の一。減俸の十分の二に止まるもの。

けいきんぞく 輕金屬【名】(化)『英 Light metals』比重四以下の金屬。カルシウム・アルミニウム・ナトリウム等、これなり。(重金屬に對して)

けいきやう 景況【名】やうす。もやう。ありさま。

けいきやう 馨香【名】けいかう(馨香)に同じ。太平記「馨香、座に留まりて、恰も牛頭梅檀のごとし」

けい-ぎやう 圭形【名】〔數〕和算にて、三斜形の二斜相等しきもの、即ち二等邊三角形。

けいきやく-さう 【名】〔植〕ねのもさう(井邊草)に同じ。

けいきやう 瓊宮【名】玉の宮居。宮殿の美稱。 嵯峨天皇甘露頌「瓊宮瑤臺の綺錦にまつはれ」

けいきやう 勁弓【名】がうきゆう(強弓)に同じ。

けいきよ 啓居【名】けいしよ(啓處)に同じ。

けいきよ 瓊琚【名】一美しき玉と美しき佩玉と。二よき贈物。三美しき詩文の譬。

けい-きよ 輕擧【名】一かろがろしき擧動。粗忽なるふるまひ。かるはづみ。二身輕に、高き處に飛びあがること。

げいぎよ 鯨魚【名】〔動〕『古人は、鯨を魚類に屬する者と考へたるよりいふ』くぢら(鯨)一に同じ。

けい-きよう 敬恭【名】きやうけい(恭敬)に同じ。

けい-きよく 荊棘【名】一とげある小さき木。いばら。枳棘。二雜草などの生えて荒れはてたる土地。三『いばらの錯綜せるに譬へていふ』いりみだれたる狀態。四人を害はんとする心。とげ。「肚裏に荊棘を生ず」五蠻民。蠻賊。

けい-ぎよく 瓊玉【名】一うつくしき玉。珠玉。二白き花、又は雪の譬。

けい-ぎよく 桂玉【名】『薪は桂より貴く、食物は玉より貴き意。「玉を食ひ桂を炊(シク)ぐ」を見よ』物價の高値なること。桂薪。桂玉の艱(カン)【句】都に遊學して、艱難すること。

桂玉の地【句】物價高き都會の地。

けいきよく-たい 景曲體【名】〔文〕和歌の一體。

けいぎよく-わかしふ 瓊玉和歌集【名】〔書〕宗尊親王の歌集。十卷。

けいき-わん 京畿灣【名】〔地〕朝鮮中部の西岸にある灣。黃海道と忠淸南道との間に灣入す。

けい-く 警句【名】『英 Aphorism』深遠・奇拔なる感想を、極めて簡單なる句中に言述ぶるもの。奇警なる辭句。古の賢哲の格言の如き、多くはこれなり。

けい-く 雞狗・鷄狗【名】けいけん(雞犬)に同じ。

けい-く 形軀【名】かたち。からだ。身體。

けい-ぐ 刑具【名】體刑を加ふるに用ふる具。即ち枷(カ)・笞(チ)などの類。戒具。

けい-ぐ 敬具【名】書狀の文句の終結に用ふる語。つつしみて申すこと。敬白。

けい-くじやくせき 硅孔雀石【名】〔鑛〕『英(Chrysocolla)含水硅酸銅より成り、腎臟狀もしくは葡萄狀にて、半透明の綠色を呈し、鹽酸に分解す。我が國所在の銅山より產す。

けい-くつ 磬屈・敬屈・警屈【名】『磬の中央に屈折せる形に譬へていふ』一首を垂れてかしこまること。 東鑑「皆以敬屈、敢無一陳謝」二けいせつ(磬折)に同じ。名目抄「警屈、ケイクツ。磬折同事也」

けいくば 雞狗馬・鷄狗馬【名】けいこうば(雞狗馬)に同じ。

けいくはふ 警句法【名】〔文〕『英 Epigram』修辭上にて、奇警なる句を使用する方法。

けい-くん 經訓【名】經書の訓話。

けい-ぐん 雞群・鷄群【名】一にはとりのむれ。二平凡なる人のむれ。

雞群の一鶴【句】晉書の嵇紹傳に「昨於二稠人中一見二嵇紹一、昂昂然、如二野鶴之在二雞群一」とあるに本づく』平凡なる人の中に、一人傑出せる人のまじり居る譬。

げい-ぐん 鯨群【名】くぢらのむれ。

けい-くわ 經過【名】一時のすぎ行くこと。經來りたること。二途中、立寄ること。過訪。三物事のうつりゆくこと。なりゆき。四(天)『英 Transit』天體が、或他の天體又は或坐標線の前を通過すること。子午線を經過するを、子午線經過といふ類。

影の經過【句】(天)木星又は土星の前を、その衞星の影が通過すること。

けい-くわ 螢火【名】螢の光。ほたるび。

螢火を以て須彌(シユ)を燒く【句】能はざることを企つるの譬。〔諺語〕

けい-くわ 桂花【名】一木犀(モクセイ)の花。二月の中に在りといふ桂の木の花。

けい-くわ 薊花【名】あざみの花。

けい-くわ 瓊花【名】うつくしき花。玉のごとき花。

けい-くわ 硅化【名】『英 Silicification』岩石又は生物の遺體の、硅酸に化すること。

けい-くわ 京華【名】みやこ。はなのみやこ。花洛。

けい-くわ 硅華【名】〔鑛〕『英 Siliceous sinter』硅酸を主成分とする、溫泉の沈澱物。蛋白石の一種にして、質、粗糙なり。蛇骨。

けい-くわ 輕科【名】かろき罪科。

けい-ぐわ 傾臥【名】わうぐわ(橫臥)に同じ。

けい-くわい 計會【名】一はからひあはすること。いひあはせて、よりあふこと。二物事の、一度に落合ふこと。太平記「笠置城攻落さるる刻、召捕られ給ひし人人の事、去年は歲末の計會に依りて暫くさしおかれぬ」三くわいけい(會計)〔二〕に同じ。

けい-くわい 輕快【名】一手がるくして、速かなること。二病氣のなほりかかり。

けい-くわい 慶會【名】めでたきあつまり。よろこばしき集會。

けい-くわい 經廻【名】一へめぐりあるくこと。二生存して歲月を過すこと。盛衰記「賴朝世に經廻せば、御方に泰公仕りて、彼の御恩に報い奉るべし」

けい-くわい 傾壞【名】かたむきやぶること。かしぎくづるること。

けい-ぐわい 境外【名】敷地のそと。境域の外。(境内に對して)

けいくわい-せき 硅灰石【名】〔鑛〕『英 Wollastonite』白色、灰色又は黃色等の輝石。花崗岩に觸れて變質せる石灰岩に產し、多くは纖維狀卓狀等をなす。卓石。

けいくわい-てつくわう 硅灰鐵鑛【名】〔鑛〕『英 Lievrite』鐵とカルシウムとの硅酸鑛物。斜方晶形系に屬し、綠黑もしくは褐黑の柱狀、又は絲狀・纖維狀の塊をなし、質脆(モロ)く、鹽酸に溶く。

けい-くわう 螢光【名】一ほたるのひかり。ほたるび。二〔理〕『英 Fluorescence』或透明體を日光に曝すとき、通過光に見たる色以外の色の光を反射するもの。例へば石油を日光に曝せば、青色に光り、これを去れば、その働止む類。螢石・ウラニウム硝子・硫酸キニイネ溶液など、皆この性を有し、紫光線もしくは紫外線を受けて、これよりも波長の大なる赤・青などの光を放つを常とす。

けい-くわう 螢煌【貌】火光のきらめくさ

けいくわう-たい 螢光體【名】〔理〕螢光を發する物體。螢石・石油・硫酸キニイネなど、種種あり。

けいくわう-てんわう 慶光天皇【名】〔人〕

すけひとしんわう 典仁親王に同じ。

けいくわう-ばん 螢光板【名】〔理〕X線の或物體を通過せしや否やを知るに用ふる、青化白金バリウムを塗りたる紙。物體の背後にこの板を置き、此方よりX線を通過したる部分は、ずればX線の物體を通過したる部分は、板面螢光を放ち、遮られたる部分は螢光を發せず。

けいくわう-ゐん 慶光院【名】伊勢國宇治山田市にありし臨濟宗の寺。開山は守悅尼、神宮造營の際、諸國を勸化して、その費用を募り、その功により、紫衣上人號を許さる。明治二年廢寺となる。

けい-くわく 計畫【名】くはだて。はからひ。もくろみ。謀計。畫策。

けいぐわい 傾臥莖【名】〔植〕地上莖の一。平臥して、先端のみ扛起せるもの。

けいくわい-けいやく 經過契約【名】〔商〕事業年度を經過したる生命保險契約。

けい-くわしつ 輕過失【名】〔法〕『獨 Leichte Fahrlässigkeit』善良なる管理者の注意を缺き、或は自己の財產に於けると同一なる注意を缺きたるため、自己の行爲の結果につきて、豫見を缺くもの。抽象的過失と具體的過失とに分つ。(重過失に對して)

けいくわい-じやうふ 京華上布【名】武藏國蒟(ヒヤウ)町附近より產出する木綿織物。

けいくわい-ちぢみ 京華縮【名】武藏國蒟(ヒヤウ)町附近より產出する木綿縮。

けい-くわつ 契闊【名】ぶさた。疎遠。久闊。

けいくわい-はふ 經過法【名】〔法〕『獨 Uebergangsvorschriften』一の法令が改正又は廢止せられ、新法令の實施に伴ふ諸問題を解

決せんがために設けらるる法令。多くは施行法又は施行細則等の名を以て、別に發布せられ、又は新法令中の附則に規定するものにて、經過法といふ名稱は、單に法學者が、便宜上の使用にとどまる。

けいくわぼく 硅化木【名】地中に埋められたる生物の物質の一部もしくは全部は消え去りて、そのあとに硅酸を溶かしたる水の浸込み、沈澱凝固して、以前の生物の形體に擬するに至れるもの。木化石。

けいくわん 圭冠【名】古代に行はれたる一種の冠。紗に漆を塗りたる柔軟なるものにて、髻(モトリ)を中に容れて、額より後方へ絞り寄せ、紐にて結びたる形は、後世の烏帽子に似たり。

けいくわん 警官【名】「官」の略。

けいくわん 京官【名】在京の官吏。きやうくわん(京官)參照。

けいくわん 雞冠・鷄冠【名】にはとりのとさか。

けいくわん 鷄冠【名】〔人〕江戸の俳人。姓は淺岡、天地庵・宇宙庵・蕉堂などの號あり、初め吉原の遊女なりしが、俳諧を好み、雪堂心祇の門人となりて、その奥を究め、名句多し。

けいくわん 桂冠【名】げっけいくわん(月桂冠)參照。

けいくわん 挂冠・掛冠【名】『挂の字の音、正しくはくわい。漢書に、逢萌が王莽の、その字を殺しし時、三綱絶えたり、禍身に及ばんとて、冠を解きて、東都の城門に挂(カ)け、家族を率ゐて、遼東に客居せりとある故事に本づく』官を辭すること。

けいくわん 荊冠【名】棘(イバラ)にて造りたる冠。昔、キリストを愚弄するために被せたりといふ。『荊冠の耶蘇』

けいくわん 經卷【名】けいきやう(經書)に同じ。きやうくわん(經卷)參照。

けいくわん 罄歡【名】歡をつくすこと。十分にたのしむこと。

けいくわん 慶歡【名】めでたきこと。〔肥前國長崎の方言〕

げいくわん 鯢桓【名】『鯢は鯨の雌、卽ち鯨の意に用ふ。桓は盤桓の意』鯨のわだかまること。一說に、桓も魚の名なりと。鯢桓の審(シン)【句】『審は、潘に適じ、水のたまれる處。韭子の應帝王篇に出づ』大なる水たまり、卽ち海。

けいくわん-くわ 雞冠花・鷄冠花【名】〔植〕けいとう(鷄頭)に同じ。

けいくわん-しそう 桂冠詩宗【名】『英Poet-laureate. 古、ギリシヤにて、名譽ある詩人に桂冠を捧げしより起る』英國にて、當代に名ある詩人のうちより一人を選びて、毎年、國王・王子の誕辰又は大なる戰捷等を賀する詩と、新年の祝賀の詞とを作ることを職とせしむるもの。欽定詩宗・宮廷詩宗・勅選詩宗。

けいくわん-せき 雞冠石・鷄冠石【名】〔鑛〕『英Realgar』硫黄と砒石との化合物。單斜晶系に屬し、針狀又は短柱狀をなし、赤黃色にして、脂様の光澤あり。噴火山邊に存す。人造のは、繪具及び烟火に用ふ。長く日光に曝せば、分解して雄黃(オウ)となる。

けいくわん-れんしふじよ 警官練習所【名】警部・巡査を練習せし所。明治十七年設置、同二十二年廢止せらる。

けいくわ-ゑ 繼華會【名】〔佛〕九月十三夜の稱。けいかゑ(桂開會)參照。

けいけい 蹊徑【名】こみち。みち。

けいけい 輕刑【名】かるき刑。(重刑に對して)

けいけい 醯鷄【名】〔動〕ぬかか(糠蚊)に同じ。

けいけい 卿卿【名】支那にて、妻より夫(フ)を呼ぶ稱。

けいけい 荊卿【名】〔人〕けいか(荊軻)を見よ。太平記、荊卿が心は、思のためにつかはれ、侯生・嫌子が命は、義によって輕し」

けいけい 荊溪【名】〔地〕支那江蘇省晉陵郡(今の常州府)に屬する地。荊溪の風(カゼ)【句】〔佛〕『支那天台の第九祖湛然は荊溪の人にて、荊溪大師と稱するよりいふ』天台宗の宗風。太平記「一實圓頓の花の匂を、荊溪の風に薫じ」

けいけう 景教【名】『英Nestorians』支那における基督教の舊稱。もと西暦四三〇年前後、東羅馬の法主たりしネストリウス(Nestrius)が、反對黨より排除せられて創立せし一派にして、その關係、新教各派の西方教會に對すると相似たり。

けいけうだう 敬教堂【名】美濃國安八(アンパチ)郡大垣町に在りし舊大垣藩の學校。天保年間の創立。

けいげき 迎撃【名】敵が攻勢を取れる場合に、此方よりも押寄せて擊ちやぶること。逆擊。

けいけつ 圭臬【名】■ひどけい(日時計)に同じ。■のり。法則。標準。

けいけつ 雞血・鷄血【名】にはとりの血。

けいけつ 經穴【名】『經はすぢの義』人體の、灸を點じ鍼を打つべき箇所。灸を點ずるにつきては灸穴、鍼を刺すにつきては鍼穴といふ。

けいげつ 經月【名】月を經過すること。月のたつこと。「へづき。

けいげつ 桂月【名】陰曆三月の異稱。はらけいげつ 桂月【名】陰曆八月の異稱。かつらづき。桂秋。

けいけつ-せき 雞血石・鷄血石【名】〔鑛〕蠟石の如くにして、赤き筋ありて、美しき石。

けいげふくわん 敬業館【名】播磨國揖保(イボ)郡林田(ハヤシダ)村に在りし舊林田藩の學校。寛政年間の創立。

けいけん 經驗【名】■『實驗を經る意』親しくためしこころみて得たる知識又は技術。■〔哲〕『英Experience』廣義にては、意識に上りたる知覺の狀態。内經驗・外經驗の二種に分つことあり。各その條を見よ。■〔哲〕『英Experience』狹義にては、觀察・實驗等の方法によりて、知識を得ること。(普通には、この意味に用ふ)

けいけん 敬虔【名】■うやまひつつしむこと。つつしみかしこむこと。「敬虔の念」■神佛にうやまひ仕ふること。

けいけん 雞犬・鷄犬【名】雞と犬と、又その鳴聲。雞狗。「雞犬相聞ゆ」

けいけん 勁健【名】つよくしっかりせること。强健。

けいけん 輕軒【名】かろき、上等なる車。太平記「輕軒・香車、地を爭ひ、輕裘・肥馬、繫ぐに處なし」

けいけん 啓建【名】〔佛〕法事を初むること。法會の初日。開啓。

けいけん 契券【名】契約の證書。手形。

けいけん 刑憲【名】おきて。法規。

けいげん 慶源【名】〔地〕朝鮮咸鏡北道の都會。豆滿江に沿ひ、水運の便あり。

けいげん 慶元【名】德川時代の慶長・元和年間。「慶元の頃」

けいげん 輕減【名】へらすこと。輕く減ずること。減輕。

けいけん-しゅぎ 敬虔主義【名】『英Pietism』信念を以て、宗教の眞髓となし、形式及び理性の考察を輕んずる主義。十七世紀の後半に、獨逸の新教が、漸く當初の精神を失ひ、教義・教學の末に拘泥して、個人の信仰を束縛するに至りし反動として起りきて走るを」 領城島原駐台戰「尾上の鹿の亂れづの、末の松山妻戀ひかねて、紅葉踏みわけ、けいけいほろろと鳴くはえ」

けいけい 烟烟【貌】■するどく光りかがやくさま。「眼光烟烟」■かうかう(耿耿)に同じ。

けいけい 熒熒【貌】暗中に少しく光るさま。

けいけい 耿耿【貌】『耿の字、烟にも通ず』かうかう(耿耿)に同じ。

けいけい 熒熒・惸惸【貌】■孤獨なるさま。■憂ふるさま。「憂心惸惸」

けいけい 輕輕【貌】かるがるしきさま。「輕輕に看過す」

けいげい 經藝【名】經學と六藝と。

けいげい 黥刑【名】いれずみの刑。黥罪。

けいげい 鯨鯢【名】■鯨の雄と雌と。■『他の小弱の者を呑食する點を譬へていふ』甚しきわるもの。奸賊。元兇。命を鯨鯢の腮(トヂ)に懸く【句】海洋にて、辛酸をなむることの譬。吉野志鶴「また或時は、海上に風波の危きことを凌ぎ、饑ゑつ凍えつ雨露に濡れ、命を鯨鯢の腮にかけ、遂に平家を攻滅し」

けいけう 景教【名】『英Nestorians』支那における基督教の舊稱。もと西暦四三〇年前後、東羅馬の法主たりしネストリウス(Nestrius)が、反對黨より排除せられて創立せし一派にして、その關係、新教各派の西方教會に對すると相似たり。

けいけうだう 敬教堂【名】美濃國安八(アンパチ)郡大垣町に在りし舊大垣藩の學校。天保年間の創立。

けいげき 迎撃【名】敵が攻勢を取れる場合に、此方よりも押寄せて擊ちやぶること。逆擊。

けいけつ 圭臬【名】■ひどけい(日時計)に同じ。■のり。法則。標準。

けいけつ 雞血・鷄血【名】にはとりの血。

けいけつ 經穴【名】『經はすぢの義』人體の、灸を點じ鍼を打つべき箇所。灸を點ずるにつきては灸穴、鍼を刺すにつきては鍼穴といふ。

けいげつ 經月【名】月を經過すること。月のたつこと。「へづき。

けいげつ 桂月【名】陰曆三月の異稱。はらけいげつ 桂月【名】陰曆八月の異稱。かつらづき。桂秋。

けいけつ-せき 雞血石・鷄血石【名】〔鑛〕蠟石の如くにして、赤き筋ありて、美しき石。

けいげふくわん 敬業館【名】播磨國揖保(イボ)郡林田(ハヤシダ)村に在りし舊林田藩の學校。寛政年間の創立。

けいけん 經驗【名】■『實驗を經る意』親しくためしこころみて得たる知識又は技術。■〔哲〕『英Experience』廣義にては、意識に上りたる知覺の狀態。内經驗・外經驗の二種に分つことあり。各その條を見よ。■〔哲〕『英Experience』狹義にては、觀察・實驗等の方法によりて、知識を得ること。(普通には、この意味に用ふ)

けいけん 敬虔【名】■うやまひつつしむこと。つつしみかしこむこと。「敬虔の念」■神佛にうやまひ仕ふること。

けいけん 雞犬・鷄犬【名】雞と犬と、又その鳴聲。雞狗。「雞犬相聞ゆ」

けいけん 勁健【名】つよくしっかりせること。强健。

けいけん 輕軒【名】かろき、上等なる車。太平記「輕軒・香車、地を爭ひ、輕裘・肥馬、繫ぐに處なし」

けいけん 啓建【名】〔佛〕法事を初むること。法會の初日。開啓。

けいけん 契券【名】契約の證書。手形。

けいけん 刑憲【名】おきて。法規。

けいげん 慶源【名】〔地〕朝鮮咸鏡北道の都會。豆滿江に沿ひ、水運の便あり。

けいげん 慶元【名】德川時代の慶長・元和年間。「慶元の頃」

けいげん 輕減【名】へらすこと。輕く減ずること。減輕。

けいけん-しゅぎ 敬虔主義【名】『英Pietism』信念を以て、宗教の眞髓となし、形式及び理性の考察を輕んずる主義。十七世紀の後半に、獨逸の新教が、漸く當初の精神を失ひ、教義・教學の末に拘泥して、個人の信仰を束縛するに至りし反動として起り

たるもの。處信主義。

けいけんてき 經驗的【貌】『英Empirical』事實に基づき、經驗に重きを置く狀態。(合理的に對して)

けいけんてきくわがく 經驗的科學【名】(哲)經驗に基きて研究する科學。

けいけんてきしんりがく 經驗的心理學【名】『英Empirical psychology』科學としての心理學、即ち純正哲學及び認識論にて論ぜらるる問題はさしおき、專ら歸納的・實驗的方法に據り、事實を基とするもの。現今單に心理學と呼ぶもの、是れなり。

けいけんてきちよくかく 經驗的直覺【名】(哲)後天的の感性知覺、即ち感覺によりて起る知覺。

けいけんてきとうかく 經驗的統覺【名】(哲)普通の內的知覺、即ち自己の內的狀態を意識すること。

けいけんてつだう 京元鐵道【名】朝鮮の京城と元山との間に通ずる鐵道。延長一四〇哩餘。

けいけんろん 經驗論【名】(哲)『英Empiricism』吾人の一切の知識は、經驗によりてのみ正しく得らるる、即ち凡ての眞理は、多くの經驗を重ねて、歸納的に證明せられたるものなりとの、一派の認識論。隨つて、この說には、經驗以外に理性もしくは觀念等の先天的に存在するを認めず。英國の哲學は、概ねこの主義に傾けり。後元論。(純理論に對して)**みやうもくろん**(名目論)**ひはんろん**(批判論)參照。

けいこ 蠛蛄【名】(動)せみ。秋蟬。(朝顏)「蠛蛄は春秋を期せず」

けいこ 稽古【名】■古の事物を考ふること。學問して、物事を知ること。修業。學習。練習。溫習。(公事根源「僧のなかに、稽古の聞えあるをえらびて定む」)■遊藝を習ふこと。

けいこ 瓊戸【名】うつくしき屋。たまのうてな。瓊樓。太平記「瓊戸重ねて閉ぢて、悄然として聲なし」

けいこ 恵顧【名】目をかくること。眷顧。

けいこ 慧悟【名】さときこと。悧口。利發。

けいこ 契語【名】**かたらひ**(語)に同じ。

けいこ 敬語【名】敬意を表する時に用ふる語。うやまひことば。

けいこ 繫語【名】(哲)**けいし**(繫辭)に同じ。

けいこ 警語【名】奇警の語。警句。

けいこ 警悟【名】奇警にして、敏きこと。悟の早きこと。氣の附きかたの早きこと。

けいこ 警固【名】■非常をいましめて、守り固むること、又その人。かため。まもり。警衛。■祭禮の時、神輿の側に附添ふこと、又その人。天神記「汝等兩人、籠輿の警固せよ」

けいこ 警固の六具【句】「番所の六具」に同じ。

けいこ 警護【名】非常をいましめて、護衛すること、又その人。

げいこ 藝子【名】**げいぎ**(藝妓)を見よ。

げいご 囈語【名】ねごと。たはごと。

けいこう 經候【名】女の月經の兆候。

けいこう 磬控【名】『詩經の國風に「抑磬控忌」とありて、註に「謂レ馬曰レ磬、謂レ使二之曲折如レ磬、止レ馬曰レ控、謂下有レ所二控制一不上逸」とあるに本づく』馬を走らせ、又は止むること。馬術の操縱。太平記「されども義貞の兵共、元來機變・磬控・百錬千錬して、己が物と得たる所なれば」

けいこう 雞口・鷄口【名】小さいながらも一群に首領たる者の譬。

雞口となるとも牛後となる勿れ【句】『戰國策の韓の條に「臣聞、鄙語曰、寧爲二雞口一無レ爲二牛後一」とあるに本づく』小なりとも事物の上に立つべし、大なりとも事物の後に立つべからず。大鳥の尾より小鳥の頭。(諺語)

けいこう 慶興【名】(地)朝鮮咸鏡北道の北端の都會。豆滿江の下流に沿ひ、露領沿海州に對す。

けいこう 敬公【名】(人)**とくがはよしなは**(德川義直)の諡(おくりな)。

けいこうば 雞狗馬・鷄狗馬【名】『史記』安世・滋野貞主・南淵弘貞等が、嵯峨上皇の旨を奉じて、天長四年撰集せる詩文集。もと二十卷。今は卷一・十・十一・十三・十四・二十の六卷傳はれるのみ。分類・體裁等は、全く文選に倣へり。

けいこく 經國【名】經國をさめいとなむこと。國家の經營。「業」を見よ。

けいこくのだいぎょう 經國の大業(ダイゲフ)【句】「文章は經國の大業」

けいこく 京國【名】みやこ。都邑。

けいこく 谿谷【名】たに。溪谷。

けいこく 熒惑【名】■『熒は光明ありて眼眩ずる義。惑はまどふ義。惑の字、こくと讀むはその漢音』迷はすこと。■(天)**けいこくせい**(熒惑星)の略。

けいごく 繫獄【名】獄屋につなぐこと。

けいごく 刑獄【名】刑罰と牢獄。刑罰又は牢獄。禁獄。

けいこくしふ 經國集【名】(書)良岑(ヨシミネ)安世・滋野貞主・南淵弘貞等が、嵯峨上皇の旨を奉じて、天長四年撰集せる詩文集。もと二十卷。今は卷一・十・十一・十三・十四・二十の六卷傳はれるのみ。分類・體裁等は、全く文選に倣へり。

けいこくせい 熒惑星【名】(天)**くわせい**(火星)に同じ。

けいこくくわん 稽古館【名】■筑前國朝倉郡秋月にありし舊秋月藩の學校。安永四年の創設。初名、稽古亭、後、稽古觀と改め、又、稽古館と改めたり。■肥前國南高來(ヒゼンクニミナミタカキ)郡島原にありし舊島原藩の學校。寛政五年の創設。■陸奥國津輕郡弘前(ムツノクニツガルグンヒロサキ)にありし舊弘前藩の學校。寛政七年の創立。■近江國犬上郡彦根にありし舊彦根藩の學校。寛政十一年の創設。天保元年弘道館と改稱す。

けいこぐ 稽古著【名】擊劍・柔術などを稽古するときに著る特製の衣服。

けいこく 傾國【名】■**けいせい**(傾城)(一)に同じ。■遊里。遊廓。傾城島原蛙合戰「いひ出すその日に身受とは、傾國開闢の初もの」吉野都女遊花見の、開帳の、又は傾國猿芝居」

けいこく 警告【名】來るべき災害を告げて、警戒せしむること。「申。

けいこく 啓告【名】申し上ぐること。上

けいこく 頃刻【名】『**けいこつ**(頃日)**けいねん**(頃年)參照』しばらくのあひだ。きやうこく。暫時。須臾。

けいこじやうるり 稽古淨瑠璃【名】淨瑠璃節の溫習、また溫習のために語る淨瑠璃。

けいこじよ 稽古所【名】■物事を習ふ場所。■淨瑠璃小唄または三味線などを敎ふる家。**けいこや**。**けいこば**。(江戸時代の語)

けいこじよばいり 稽古所入【名】三味線の稽古をする女師匠の家に出入すること。(江戸時代の語)

けいこだう 稽古堂【名】但馬國城崎郡豐岡にありし舊豐岡藩の學校。天保四年の創立。

けいこつ 輕忽【名】かろがろしきこと。ゆるがせなること。粗忽。(常盤「あゝ輕忽な、七夜のうちは、横褒さへさせぬもの」

けいこつ 雞骨・鷄骨【名】にはとりの骨。

けいこつ 頸骨【名】くびの骨。

けいこつ 脛骨【名】■脛部の骨。■(醫)脚部下腿の內側にある長骨。上端は大腿骨に接して、膝關節をなし、下端は距骨に連なる。

けいこつ 顱骨【名】くぢらの骨。

けいこつしんけい 脛骨神經【名】(醫)坐骨神經の二分枝の一。膝關窩中より下腿を經て、內踝に出で、足蹠に達するもの。

けいごでん 警固田【名】王朝時代に、太宰府の警固の士の粮米に充てし、筑前國の剩田の一部。「同じ。

けいごと 藝事【名】しよさごと(所作事)にする事柄。「人。

けいごにん 警固人【名】警固の任に當る

けいこのう 稽古能【名】稽古のために行ふ能。一代男「稽古能過ぎて、人の歸りしあとは」

けいこば 稽古場【名】稽古する場所。稽古

けいこばかま 稽古袴【名】擊劍・柔術などを稽古する際に著くる袴。稽古著の袴。

けいこはじめ 稽古初【名】正月始めて稽古をはじむること、又その日、又その式。

けいごはふ 敬語法【名】(語)敬語を使用

する語法。

けいこ-ぶえ 稽古笛【名】練習のために笛を吹鳴らすこと。二茎。稽古笛田はことごとく青みけり」

けいこ-ぼん 稽古本【名】淨瑠璃・長唄などを、稽古用として、印刷又は謄寫せる本。

けい-こん 桂根【名】桂(カツラ)の根。

けい-こんゆ 桂根油【名】『獨Zimtwurzelöl』桂根より製したる食用油。質、稀薄にして、桂皮と丁香(クチナシ)とに類する佳快なる香氣を有す。桂皮油とは成分を異にし、桂(ケイ)アルデヒドを含むことなく、多量のオイゲノル(Eugenol)を有す。

けいこや 稽古矢【名】弓術の練習に用ふる矢。俳諧新選(雲蕉)「稽古矢をまた失ひし花野かな」

けいこや 稽古屋【名】けいこじょ(稽古所)[1]に同じ。

けいころう 撃壺郎【名】ろうこくほかせ(漏刻博士)の唐名。

けい-さ 繋鎖【名】■鎖(クサリ)にてつなぐこと、又その鎖。■つなぎ止めて、自由に運動せしめぬこと。

けい-さ 扃鎖【名】錠前(ジョウ)をおろすこと、又その錠前。

けい-さ 稽査【名】かんがへしらぶること。

けい-さ 傾差【名】『英Dip』磁針の水平面より下方へ傾く角度。

けい-さ 經差【名】〔理〕『英Longitude difference』二地點の經度の差。經度を時・分・秒にて表せば、經差は二地の眞の時差なり。

げい-ざ 猊座【名】『猊は獅猊、即ち獅子の義』ししざ(獅子座)に同じ。

けいさい 綱齋【名】〔人〕あさみけいさい(淺見綱齋)を見よ。

けい-さい 繼妻【名】のちぞひの妻。後妻。

けい-さい 荊妻【名】他人に對して、わが妻の謙稱。愚妻。山妻。荊婦。

けい-さい 掲載【名】書籍・新聞・雜誌などに掲げ載すること。

けい-さい 輕載【名】日方の萬(カラ)まぬやう、輕少に物を載すること。

けい-さい 輕細【名】輕くてこまかきこと。

けい-さい 頃歲【名】『けいこく(頃刻)けいじつ(頃日)參照』この歲ごろ。このごろの歲。頃年。近年。

けい-さい 經濟【名】■『經世・濟民の義』國家を經營し、民衆を救濟すること。爲政。「經濟の才」■〔經〕『英Economy』人類が、財貨を獲得し、又これを使用して、慾望を達せんとする、各種の行爲又は狀態。■費用を少なくして、生活を營むこと。儉約。

經濟の要件【句】〔經〕けいざいえうけん(經濟主義)に同じ。

經濟の本則【句】〔經〕けいざいこゆぎ(經濟要件)に同じ。

けい-ざい 輕罪【名】■輕き罪。■〔法〕舊刑法に於ける犯罪の一。禁錮又は罰金の刑に處せらるるもの。(重罪に對して)

けい-ざい 刑罪【名】刑と罪と。刑罰。國姓爺後日合戰「刑罪極まって、三度奏するなどとは、天下一統の代の政」

けい-ざい 徑材【名】『英Stringer』主として、橋梁の横桁の上に、縦に並列する小桁。

げい-ざい 迎妻【名】妻をめとること。

げい-ざい 藝才【名】たくみ。大工。工匠。〔足利時代の語〕庭訓往來「藝才七座之店」

げい-ざい 黥罪【名】げいけい(黥刑)に同じ。

けいざい-えうけん 經濟要件【名】〔經〕經濟現象變動の要件。經濟の發達・進歩の原因。經濟の要件。

けいざい-か 經濟家【名】■經濟の道に明かなる人。■たくみに費用を節する人。節儉家。四十八藝「季氏歷がやうに、冬も蚊帳を內に置き、他所行の上下(カミシモ)を持って居るやうな經濟家ではない」

けいざい-かい 經濟界【名】『英Economic circles』人類社會にて、經濟的活動の行はるる範圍。即ち生產・交換・賣買などの行はるる社會。

けいざい-かうね 經濟行爲【名】〔經〕『英Economical activity』財貨を獲得し、使用して、經濟的欲望を滿足せしめんとする行爲。生產・交換・分配・消費の四種に分つ。

けいざい-がく 經濟學【名】■國家を經營し、民衆を救濟する方法を研究する學問。■『英Economics』經濟行爲の法則を研究する學問。理財學。

けいざいがく-し 經濟學史【名】經濟學に關する學說の沿革史。

けいざいがく-は 經濟學派【名】經濟學の研究方法に關する學派。

けいざい-ぎやうせい 經濟行政【名】〔法〕助長行政の一。經濟政策の目的を達するためのもの。

けいざい-けん 刑罪權【名】〔法〕國家の、犯罪者を罰する權利。

けいざい-こうはん 輕罪公判【名】輕罪事件の公判。(重罪公判に對して)

けいざい-し 經濟史【名】『英Economic history』經濟上の事實、並びにこれに關する制度・文物の發達・沿革、又はその原因・結果を記述するもの。

けいざい-しくわん 經濟史觀【名】『獨Oekonomische Geschichtsauffassung』人類の歷史を、專ら經濟的方面の原因より說明せんとする見かた。唯物史觀。

けいざい-じけん 輕罪事件【名】裁判所にて、輕罪として取扱ふ事件。場合に依り、豫審を經ずして、直ちに公判に付することを得。(重罪事件に對して)

けいざい-しそう 經濟思想【名】■人類が、財貨を獲得し、使用して、生活を持續し、向上せしめんとする思想。■簡易・儉約を重んずる思想。

けいざい-しゅぎ 經濟主義【名】〔經〕『獨Prinzip der Mitschaftlichkeit』最少の勞費を以て、最大の効果を收めんとする、經濟上の原則。經濟の本則。

けいざい-せいさく 經濟政策【名】〔經〕『英Economic policy』國家及びその機關が、國民の經濟上の利益を保護・助長するための手段。その方面によりて、交通政策・保險政策・社會政策・銀行政策・農業政策・工業政策・商業政策などに區別す。

けいざい-せいさく-がく 經濟政策學【名】經濟政策を研究する學問。

けいざい-たんゐ 經濟單位【名】或人格の支配の下に、財貨の供給及び需要を爲す範圍。その範圍の如何によりて、個人經濟と共同經濟とに分つ。

けいざいてき 經濟的【貌】『英Economical』■財貨を獲得し、使用して、慾望を滿足せしめんとする狀態。「經濟的活動」「經濟的行爲」■利益又は儉約となるべきさま。

けいざいてき-くわつどう 經濟的活動【名】經濟動機にもとづき、財貨を獲得し、利用せんとしてなす活動。

けいざいてき-ざいくわ 經濟的財貨【名】〔經〕外界的財貨の一。多少の勞力と報酬とを必要として獲取するもの。貨物・勤勞。關係の三種に分つ。

けいざいてき-よくばう 經濟的慾望【名】〔經〕『英Economic want』經濟動機に動かされて、財貨を獲得し、利用せんとする人類の慾。

けいざい-どうき 經濟動機【名】〔經〕『英Economic motive』財貨を得て、生活を維持・發展せんとする念慮。

けいざい-とうけい 經濟統計【名】統計學の一。社會の經濟的組織の狀態、及びその作用、並びに結果を、統計の方法により、數量の上より研究するもの。

けいざい-どうめい 經濟同盟【名】『英Economical alliance』同盟各國を包含せる大なる關稅區域を設け、且つその各國間に特惠關稅を制定して互に助けあふこと。

けいざい-りん 經濟林【名】利益收得のために經營する森林。民有林は多くこれに屬す。

けいざい-ろく 經濟錄【名】〔書〕經世・濟民に關することを記せるもの。支那歷代の事蹟を引證す。十卷。太宰春臺の著。

けい-さう 係爭【名】〔法〕爭訟に係(カカ)ること。紛爭中。

けい-さう 稽顙【名】『稽は額、額を地に稽(ト)むる義。けいこゆ(稽首)・けいりう(稽留)參照』額を地に觸れ、暫くそのまま留めて、禮拜すること。

けい-さう 敬相【名】〔語〕動詞の相の上にて、尊敬の意を示せるもの。す・さす・しむ・給ふ等の助動詞を添へてあらはす。例へ

ば、「行幸あらせらる」の類。「に同じ。

けい-さう 形相【名】〔哲〕**けいしき**(形式)(四)に同じ。

けい-さう 雞窓・鷄窗【名】『支那宋の處宗が、書窓に寄ひし雞が、後に言語を發して、宗と談論し、宗の功業、ために大いに進みきといふ故事(幽冥錄に見ゆ)に據る』**しょさう**(書窓)に同じ。

けい-さう 輕粧・輕妝【名】輕く化粧を施すこと。うすげしやう。淡粧。

けい-さう 輕裝【名】身がるのいでたち。

けい-さう 輕躁【名】かろがろしきこと。おちつかぬこと。「類」に同じ。

けい-さう 硅藻【名】〔植〕**けいさうるゐ**(硅藻類)に同じ。

けいさう-けんり 係爭權利【名】〔法〕訴訟當事者間の爭となれる權利。

けいさう-じじつ 係爭事實【名】〔法〕訴訟當事者間の爭となる事實。例へば原告は、何年何月何日、被告に金若干圓を貸與したりといふに對して、被告は、決してさる覺えなしと抗辯する時、その金錢貸與が、係爭事實なるが如き類。**けいさうぶつ**(係爭物)參照。

けいさう-せき 硅藻石【名】〔鑛〕古代の硅藻が、化石となりて產するもの。我が國には、北海道に多し。

けいさう-ど 硅藻土【名】〔地〕『英Diatomaceous earth又Infusorial earth』硅藻の遺體が堆積して生じたる地層。土狀をなし、灰白色を呈す。多くは無水硅酸より成る。甲斐國及び北海道に多し。採掘してダイナマイトの製造・磨粉等に用ふ。

けいさう-ど 輕燥土【名】〔農〕乾燥して、耕耘するに力を要せざる土壤。例へば乾燥せる砂土及び砂質壤土などの類。

けいさう-るゐ 硅藻類【名】〔植〕隱花植物の一類。下等植物にして、單細胞より成り、葉綠質を有し、硅酸を含み、種種の體形をなす。濕地及び淡水・鹹水の別なく生ず。

けい-さく 繫索【名】しばること。つなぐこと。

けい-さく 警策【名】(一)馬に策(ムチ)をあてて、警め走らしむること。(二)〔佛〕禪堂にて、僧衆坐禪の時、惰氣・睡魔を警醒する策顋。長さ四尺二寸、幅は上部少しく廣く二寸弱あり。睡れると睡らざるとを問はず打ち、打たるるものは、合掌・低頭して、これを謝す。曹洞宗にては、警策(キヤウサク)といふ。(三)**きやうさく**(警策)に同じ。

けい-さく 計策【名】はかりごと。策略。

けい-さつ 警察【名】(一)警戒・視察すること。(二)〔法〕行政の一。個人を强制して、直接に公共の安寧・幸福を維持するためのもの。國家警察と地方警察と、又、保安警察と行政警察と、又、高等警察と通常警察と、又、司法警察と行政警察とに分つ。警察行政。(三)**けいさつしょ**(警察署)の略。

けい-さつ 詞察【名】うかがふこと。見て推察すること。みぬくこと。

けいさつ-い 警察醫【名】衞生警察及び衞生事務を掌る警視廳及び各府・縣廳に置かるる判任官。

けいさつ-いぬ 警察犬【名】『英Police dog』犯人搜索に使役する犬。

けいさつ-かうしふじょ 警察講習所【名】警察及び消防に從事する官吏、又はその官吏たるべきものに、その職務に關する學術並びにその運用を敎授する所。內務大臣の管理に屬し、所長・敎授・助敎授及び書記の職員を置く。

けいさつかうしふじょ-ちやう 警察講習所長【名】警察講習所の長官。勅任官又は奏任官を以て之に充つ。

けいさつ-かうゐ 警察行爲【名】〔法〕警察行政を行ふ國家の行爲。警察法規と警察處分とに分つ。

けいさつ-かんごく-がくかう 警察監獄學校【名】內務大臣の監督の下に、警察官及び監獄官たるべき者を養成せし學校。明治三十二年設置、同三十七年廢止。

けいさつ-きそく 警察規則【名】〔法〕**けいさつめいれい**(警察命令)に同じ。

けいさつ-ぎやうせい 警察行政【名】〔法〕**けいさつ**(警察(二))に同じ。

けいさつ-くわ 警察化【名】『英Policise』物質文明の進步の極、罪惡のますます多くなること。

けいさつ-くわん 警察官【名】警察處分の執行を事務とする官職、及びその職にある官吏。例へば警視總監・警務長・警視・警部・巡査など。警察官吏。

けいさつ-くわんしょ 警察官署【名】主として警察處分を執行する官署。警察署・警察分署など、これなり。警察官廳。警察官吏。警察所。

けいさつ-くわんちやう 警察官廳【名】(一)警察命令を發し、又、警察處分をなすべき權限ある官廳。內務大臣・北海道長官・警視總監・府縣知事・警務署長などを、その主なるものとす。(二)前條に同じ。

けいさつ-くわんふ 警察官府【名】前條に同じ。

けいさつ-くわんり 警察官吏【名】**けいさつくわん**(警察官)に同じ。

けいさつ-けん 警察權【名】〔法〕警察官廳が警察行政を行ふ權力又は權限。

けいさつ-じうゐ 警察獸醫【名】屠獸・肉乳又は獸疫の取締等に關して、警察事務に從事する獸醫。

けいさつ-じむ 警察事務【名】警察行政に關する案件を處理する總ての事務。

けいさつ-しゅっちやうじょ 警察出張所【名】**けいさつしょ**(警察官署)に同じ。

けいさつ-しょ 警察所【名】**けいさつくわんしょ**(警察官署)に同じ。

けいさつ-しょ 警察署【名】北海道及び各府縣にて、各郡區又は各郡市、及びその他必要なる地方に置きて、その區域內なる警察事務を取扱はしむる所。必要ある場合には、その下に警察分署を置く。**けいさつしゅっちやうじょ**(警察出張所)參照。

けいさつしょ-ちやう 警察署長【名】警察署の長官。一警視又は警部これに任ず。

けいさつ-しょぶん 警察處分【名】〔法〕警察行爲の一。警察權に基づきて行動する行政處分。即ち國家及び人民の安寧・幸福に對する危害を防止し、又は排除するを、直接の目的として行ふ行政上の處分。例へば集會の解散を命じ、交通を遮斷する類。

けいさつせいばつ-れんしふじょ 警察消防練習所【名】警察及び消防に從事する職員の敎習・訓練に關する事項を掌りたる所。**けいさつかうしふじょ**(警察講習所)參照。

けいさつせいばつれんしふじょ-ちやう 警察消防練習所長【名】警察消防練習所の長官。巡視官たる警視これに補す。

けいさつ-とんしょ 警察屯所【名】**けいさつぶんしょ**(警察分署)の舊稱。**けいさつしゅっちやうじょ**(警察出張所)參照。

けいさつ-ばつ 警察罰【名】警察の法規に違反せる者に課する行政罰。行政罰の一にして、普通の刑罰とは、性質を異にす。

けいさつ-はふき 警察法規【名】〔法〕警察行爲の一。警察行政の目的のために發したる法規。出版法・治安警察法の類。

けいさつ-はん 警察犯【名】〔法〕實害もしくは危險を本質とせず、單に外形上、警察法規に違反せる行爲。(刑事犯に對して)

けいさつ-ひ 警察費【名】警察に關する費用。

けいさつ-ぶんしょ 警察分署【名】必要ある場合に、警察署の下に置き、警察分署長が事務を總括して行ふ、一種の支官署。**けいさつとんしょ**(警察屯所)參照。

けいさつ-ほんぶ 警察本部【名】**けいむぶ**(警務部)の舊稱。

けいさつ-めいれい 警察命令【名】〔法〕私人に對する、警察上の行政命令。警察令。警察規則。「吏。

けいさつり 警察吏【名】警察の役人。警

けいさつれい 警察令【名】〔法〕**けいさつめいれい**(警察命令)に同じ。

けい-さん 卦算・圭算【名】『易の算木の狀をなすよりいふ』**けさん**(卦算)に同じ。

けい-さん 計算【名】(一)はかりかぞふること。かんじやう。(二)(數)與へられたる式の運算を行ひて、その結果を求むること。

けいさん 慶讃・慶懺【名】■らくけい(落慶)に同じ。■八佛供養などの儀式。

けいさん 桂酸【名】〔化〕『英Cinnamic acid』桂皮油即ち桂(ケイ)アルデヒドを酸化して得る酸。無色・無臭の針狀晶をなし、熱水・酒精・エヘテル等に溶けやすし。

けいさん 硅酸・珪酸【名】〔化〕■『英Silicic acid』無水硅酸と水との結合して成れる酸、即ち二酸化硅素。天然には瑪瑙・蛋白石などとなりて産し、又、硅酸鹽に强酸を加ふる時、白色膠狀の沈澱をなして生ず。乾燥の度によりて、結晶水の割合一定せず。全く乾燥すれば、無水硅酸となる。■むすびけいさん(無水硅酸)の略。

けいさん 建蓋【名】けんさん(建蓋)の訛。

けいざん 瑩山【名】〔人〕■さくがはなりあき(德川齊昭)の號。■ほりけいざん(堀景山)を見よ。

けいざん 荆山【名】〔地〕支那湖北省襄陽府南漳縣の西北にある山。

荆山の璞(ボク)【句】「和氏(シ)の璧(ヘキ)」に同じ。

けいさん-あるかり 硅酸亞留加里《英Alkali silicate》【名】〔化〕硅酸鹽の一。無定形の無水硅酸を、苛性加里又は苛性ソオダに溶して製したるもの。水に溶け、水ガラスの稱あり。木材に塗りて、防火用とす。

けいさん-あるみにうむ 硅酸アルミニウム《英Aluminium silicate》【名】〔化〕硅酸鹽の一。種種なる鐵石の主成分となりて、天然に多量に散在す。例へば正長石・曹達長石・灰曹石・灰曹長石・雲母の如き、又純粹なる陶土の如き、その主成分をなす。

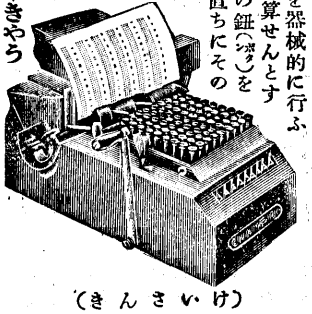
けいさん-えん 硅酸鹽【名】〔化〕『英Silicate』無水硅酸と金屬酸化物との結合物。地殼を構成する諸種の岩石の多數は、各種の金屬を含む硅酸鹽が、數種結合して成れること、恰も明礬が數種の硫酸鹽より成れるが如きなり。

けいさん-かた 計算方【名】各種の計算に從事する人。勘定方。會計方。

けいさん-かりうむ 硅酸加留母《英Kalium silicate》【名】〔化〕硅酸鹽の一。炭酸加里と石英末とを熔解すれば得らるる物質。水に溶融して、アルカリ性反應を呈す。

けいさん-かるしうむ 硅酸加爾叟母《英Calcium silicate》【名】〔化〕硅酸鹽の一。硅酸の水素原子をカルシウムにて置換して得る化合物。水及び酸に浸さるることなく、化學的に安定なる性を有す。硝子の主成分をなし、自然には、硅灰石として産す。

けいさん-き 計算器【名】『英Calculating machine又Adding machine』加・減・乘・除の計算を器械的に行ふ器具。計算せんとする數字の鈕(ボタン)を押せば直ちにその結果の現はるる裝置のもの。形・種種あり。加算器。



(けいさんき)

けいさんきやうそう 計算競爭【名】學校などにて行ふ競走遊戲の一。前方若干の距離に、算術の問題をかかげ、石盤と石筆とを備へ、早く解答をなし、姓名を記して、早く出發點に戻り來りし者を、勝と定む。

けいさん-くわうぶつ 硅酸鑛物【名】〔鑛〕『英Silicates』硅酸化せる鑛物の總稱。種類甚だ多く、成分また多くは複雜を極め、又殆ど皆金屬光澤を呈することなく、岩石の合分となれるもの多し。例へば雲母・長石・輝石等の類。

けいさん-くわへい 計算貨幣【名】取引上有効に計算を終了し得べき貨幣。

けいさん-じけん 計算事件【名】〔法〕民事訴訟にて、訴訟の目的が計算の當否にあるもの。

けいさん-じやく 計算尺【名】『英Sliding scale又Slide rule』兩側に目盛せる一の尺度の中央に、また兩側に目盛せる尺度を插入したるもの。これを左右に横たへ、中央なるその目盛と、外側なる尺度の目盛との組合せによりて、算術・代數學・幾何學・三角法などの計算を容易・迅速になし得る具。目盛は、對數の原理を基礎としたものにて、西暦一八五一年佛人マンハイム(Mannheim)の發明に係る。計算棒。

けいさん-しよ 計算書【名】■計算の結果を記せる書類。例へば賣上仕切狀・小荷物賣上書などの類。■かきだし(書出)■に同じ。

けいさん-せきくわい 硅酸石灰【名】〔化〕硅酸鹽の一。石灰と硅酸との化合物。硅酸アルカリと共に硝子の原料となる。

けいさん-そおだ 硅酸曹達《英Sodium silicate》【名】〔化〕硅酸鹽の一。炭酸ソオダと砂とに少量の木炭粉を混じて熔解し、炭酸瓦斯の逸出したる後、熱湯と共に蒸發して製す。無色半透明なり。水硝子。

けいさん-なとりうむ 硅酸那篤留謨《英Natrium silicate》【名】〔化〕硅酸鹽の一。炭酸ソオダと石英末とを溶して得る物質。白色・無臭にして、水に溶けやすく、濃き溶液は水飴狀をなす。みづがらす。

けいさん-なまり 硅酸鉛【名】〔化〕硅酸鹽の一。フリント硝子またクラウン硝子の一成分。酸化鉛と石英末とを熔して得る物質。但し未だ組成一定せるものを分離すること能はず。

けいさんばん 計算盤【名】〔數〕加・減の兩法を練習する器具。

けいさんふうたい 計算風袋【名】さんていふうたい(算定風袋)に同じ。

けいさんぼう 計算棒【名】けいさんじやく(計算尺)に同じ。

けいさんれんぐわ 硅酸煉瓦【名】さんせいれんぐわ(酸性煉瓦)に同じ。

けいし 卿士【名】公卿と士と。

けいし 繼嗣【名】あとつぎ。あとめ。

けいし 繼子【名】ままこ(繼子)に同じ。

けいし 勁矢【名】勁き弓にて射たる矢。つよき矢。

けいし 勁節【名】えいし(銳師)に同じ。

けいし 輕颸【名】輕き颸。勁風。

けいし 輕駛【名】かろがろと疾走すること。かろくて速きこと。

けいし 輕視【名】かるがるしく見ること。侮ること。(重視に對して)

けいし 恵賜【名】めぐみ。たまもの。

けいし 啓示【名】■あらはし示すこと。さとし敎ふること。■〔基〕『英Revelation』神が人間に對して、自己を顯示すること。天啓。默示。現示。

けいし 敬始【名】祖先を敬ふこと。

けいし 刑死【名】死刑に處せられて、死ぬること。

けいし 瓊姿【名】きよくよう(玉容)に同じ。

けいし 瓊枝【名】■玉の枝。玉にてかざりたる枝。■すぐれたる物事の譬。瓊枝桁檀(ケイダン)【句】『藝林伐山故事に「佛經云、瓊枝寸寸是玉、桁檀片片是香」とあるに本づく』德の備はれる人、また字句の巧なる詩文の譬。

けいし 桂枝【名】■月桂樹の枝。■桂の皮。肉桂の枝。藥用とす。■月の世界にありといふ桂の枝。

けいし 桂芝【名】〔植〕れいし(靈芝)に同じ。

けいし 桂子【名】他人の子の美稱。

けいし 京師【名】『京は大の義、師は衆の義、即ち大衆の住居する所の意』みやこ。京都。

けいし 屐子【名】『屐(ゲキ)子(シ)の音便』古の履物(ハキモノ)。下駄・足駄の類。げきし。〔古語〕拾遺「けいしのつやかなるが、革に、土多くついたるをはきて」

けいし 罫紙【名】けいがみ(罫紙)に同じ。

けいし 警視【名】警視廳・北海道廳・各府縣・臺灣總督府・朝鮮總督府・關東廳等に置く、奏任の警察官。警視廳にては、各部に分屬し、その他にありては、各部又は警察部に屬し、或は出でて警察署長となる。

けいし 家司【名】『家(ケ)司(シ)の延語』■王朝時代に、親王・攝關・大臣・職事(シキ)及び三位以上の者の家に祇候して、その雜務を統べ掌りし家令以下、書吏以上の役。源氏「やんごとなきまろうどのおはすると聞きても、つとめざりけるけいしなど、うちつ

けにまゐりて」 ㊁武家にて、別當・令・案主・知家事などの總稱。

家司の役 【句】任官・拜賀などの大禮を行ふにあたりて、朝廷の官人を、臨時に幕府の家司・下家司(シモケイシ)に補したるもの。足利義滿以後より起る。

上(カミ)の家司 【句】 **かみけいし**(上家司)に同じ。〔古語〕 紫花(シカ)闥白殿の上の家司、因幡の前司ちかただをば」

下(シモ)の家司 【句】 **しもけいし**(下家司)に同じ。〔古語〕

けいし 惠子 【名】〔人〕支那周代の詭辯家。莊子と同時代の人。

けいし 擊子 【名】『擊は捧げ擧ぐる義、子は接尾語』かはらけなどの下部。しすゑ。ちさ擊子(カイシ)の下部。しすゑ。

けいし 計子 【名】〔數〕『棊子を並べて算ふる意』 **めのこざん**(目子算)に同じ。

けいし 經始 【名】經營に著手すること。

けいし 經史 【名】經書と歷史と。

けいし 經師 【名】支那の漢代に、學校にて、經書を授くる教官。

けいし 兄事 【名】他人を兄として、敬ひ事(カ)ふること。

けいし 揭示 【名】揭げて人に示すこと、又「その文書。

けいし 刑事 【名】 ㊀〔法〕刑罰法の適用に關する事件。刑事事件。(民事に對して) ㊁ **けいじじゆん**(刑事巡査)の略。

刑事上の責任 【句】〔法〕 **けいじせいさい**(刑事制裁)を見よ。

けいし 慶事 【名】めでたき事がら。よろこびごと。いはひごと。

けいし 敬事 【名】うやまひつかふること。

けいし 啓事 【名】上に事を啓する書面。

けいし 祓事 【名】神前に參拜の時、又は神事を行はんとする時、息を淸め、淨衣(ジヤウエ)又は袴・肩衣(カタギヌ)等を著し、被串を取りて、身を祓ふこと。

けいし 形似 【名】形の似たること、又そ「の物。

けいし 繫辭 【名】 ㊀『辭を繫(カ)くる義』或物事又は言說に關する說明の言葉。特に易の卦(ケ)と爻(カウ)との說明にいふ。 **えきさ**(易經)參照。 ㊁〔哲〕『英 Copula』命題の主辭と賓辭とを連結して、否定もしくは肯定の意を言ひあらはす短き語。例へば、「これは花なり」といふ命題中の「なり」の類。繫辭。連辭。

けいし 携貳 【名】『左傳の閔公元年・文公七年等の條に見ゆ。攜は離の義』二心を抱きて危疑し、離反すること。「同じ。

けいし 鷄寺 【名】 **けいじやくじ**(鷄雀寺)に同じ。

けいし 齷齪 【名】 ㊀老人の齒の、一旦脫落して、更に生えたる小さき齒。 ㊁九十歲の老人。

けいじ 藝事 【名】身に覺えたる技藝。げいごと。「の季節。

けいしう 勁秋 【名】風霜の氣のつよき、秋

けいしう 輕舟 【名】輕くて早く走る小船。あしはやぶね。輕艇。

けいしう 輕袖 【名】羅(ウス)などにて仕立てたる婦人。「し輕き袖。

けいしう 閨秀 【名】才學又は技藝などのすぐれたる婦人。「月。

けいしう 桂秋 【名】陰曆八月の異稱。桂

けいしう 繫囚 【名】縛られて牢獄などに囚(ウ)はること、又その人。囚人。

けいしう 慶州 【名】〔地〕朝鮮慶尙南道の東南部なる都會。古、新羅朝九百年間の舊都たりし處。

けいしう 瓊州 【名】〔地〕支那廣東省海南島の北岸に位する開港場。

けいしう 荊州 【名】〔地〕 ㊀支那古代の九州の一。今の湖南省及びその附近の地域を含みたり。 ㊁支那陝西(セン)省商州の唐代の稱。 **けいそ**(荊楚)參照。

荊州の玉(ギヨク) 【句】 ㊀支那の荊州に產する玉。 ㊁よき玉。名玉。美玉。

けいしう 藝州 【名】〔地〕 **あき**(安藝)㊀に同じ。「人。

けいしう-かじん 閨秀歌人 【名】女の歌

けいしう-ぐわか 閨秀畫家 【名】婦人の畫家。

けいしう-さくか 閨秀作家 【名】婦人の著「作者。

けいしう-しじん 閨秀詩人 【名】女の詩人。

けいしう-せうせつ 閨秀小說 【名】婦人の手に成りたる小說。

けいしう-だか 藝州鷹 【名】紋所の一。丸の中に、鷹の羽を打ちちがへにしたるもの。安藝國淺野侯の所用。

けいじか 形而下 【名】『易經の繫辭に「形而上者謂二之道一、形而下者謂二之器一」とあるに本づく。「形よりして下」と訓ず「而」は助辭。英 Concrete』形にあらはれたる物、即ち物質。(形而上に對して)

けいじかがく 形而下學 【名】『英 Concrete science』形而下に關する學問、即ち一般の自然科學。(形而上學に對して)

けいじがく 刑事學 【名】犯罰及び刑罰に關する科學の總稱。

けいしき 形式 【名】 ㊀かたち。ありさま。外形。 ㊁一定の狀態又は手續。かた。 ㊂〔哲〕『英 Form』外形。(內容に對して) ㊃〔哲〕『英 Form』物の物たる本性。物の內容を規定する排列の方式。質料の由つて簡體となる素質。これを根本の原理と見る見解は、即ち唯心論なり。形相。

けいしき 契識 【名】我れに神は存し、神に我れは存すと確認する信仰の形式。

けいしき-しゆぎ 形式主義 【名】『英 Formalism』 ㊀內容・實質よりは形式・規則に重きを置く主義。 ㊁〔哲〕形式即ち物の內容を規定する排列の方式に重きを置く見解。カント(Kant)の學說は、この主義を代表す。倫理學上の形式主義は、一に直覺說といふ。また敎育上には、敎授の材料を注入的に理解せしむるを目的とするに至る。形式說。「同じ。

けいしき-せつ 形式說 【名】〔哲〕前條㊁に

けいしき-てき 形式的 【稱】 ㊀『英 Formal』形式を主とするさま。 ㊁かたばかり。形だけ。

けいしきてき-けんぱふ 形式的憲法 【名】〔法〕憲法といふ名を以て公布せられたる法典。例へば我が國・舊獨逸帝國・オーストリヤ國等の憲法の類。(實質的憲法に對して)

けいしきてき-だんかい 形式的段階 【名】〔哲〕五段敎授法・三段敎授法などの如き、敎授の順序。

けいしきてき-ほふりつ 形式的法律 【名】〔法〕『獨 Materielles Gesetz』憲法規定の手續に依りて制定せられたる法律。即ち帝國議會の協贊を經、御裁可を得、國務大臣の副署に依り、官報にて公布せられたるもの。(實質的法律に對して)

けいしきは-ほふ 形式法 【名】〔法〕『英 Adjective law』議院法・民事訴訟法などのごとく、權利・義務の實質を規定せずして、その權利・義務を實行する形式、即ち手續を規定したる法律。即ち刑事訴訟法・民事訴訟法・非訟事件手續法の類。助法。從法。(實質法に對して)

けいしきは-ふそく 形式法則 【名】『英 Formal law』藝術上、內延的形式に關する法則として、統調・漸層調和・對照あり。外延的形式に關しては、繰返・均齊權衡等の法則あるが如く、總べて形式に關する法則。

けいしきび 形式美 【名】〔文・美〕『英 Formal beauty』形式のよく調ひたる上に生ずる美。表面美。(內容美に對して)

けいじきんぢさんしや 刑事禁治產者 【名】〔法〕禁治產の附加刑を科せられたる人。

けいしきよく 警視局 【名】 **けいほきよく**(警保局)の舊稱。

けいしきよく 刑事局 【名】司法省中の一局。司法大臣の統轄に屬し、刑事上の事件に關し、裁判所を監督するところ。 **みんけいきよく**(民刑局) **はふむきよく**(法務局)參照。

けいしきろん 形式論 【名】〔哲〕 **きせいろん**(機制論)に同じ。

けいしきろり 形式論理 【名】〔哲〕『英 Formal logic』論理學の中、特に思惟の形式的法則のみを論究するもの。

けいじさいばん 刑事裁判 【名】〔法〕犯罪事件に就き、刑罰を審判・適用するために、司法裁判所にて行ふ裁判。(民事裁判に對して)

けいじさいばんしよ 刑事裁判所 【名】刑事上の罪惡を訊問する裁判所。

けいじさいばんひよう 刑事裁判費用 【名】〔法〕刑事裁判に關して當然要すべき費用、即ち證人・鑑定人又は通常の日當・旅

費・止術料などの類。

けいじ-じかう 刑事時効【名】〔法〕時効の一。一定の期間の經過によりて、公訴權及び刑の執行權の消滅を來すもの。公訴時効と刑の時効とに分つ。

けいじ-じけん 刑事事件【名】**けいじ**(刑事)〔一〕に同じ。(民事事件に對して)

けいじ-じんるゐがく 刑事人類學【名】『英Criminal anthropology』犯罪人を生物學上より研究して、犯罪の科學的研究をなす學問。

けいししや 刑死者【名】〔法〕死刑の執行を受けて死亡したる者。

けいし-じやう 形而上【名】『**けいじか**(形而下)を見よ。「形よりして上」と訓ず。英Metaphysical』無形にして、心にのみ知り得るもの、即ち道・道理・道德・學問・靈魂・神などに關すること。精神的なる物事。(形而下に對して)

けいじじやう-がく 形而上學【名】『英Metaphysics』形而上に關する學問、即ち純正哲學。超物理學。(形而下學に對して)

けいじ-しやくわいがく 刑事社會學【名】『英Criminal sociology』社會の狀況と犯罪との關係を研究する學問。

けいじ-じゆんさ 刑事巡査【名】刑事上の犯罪人を逮捕する職務を帶びたる巡査。通常、平服にて、その職務に從事す。かくそで。刑事。

けいじ-しよくけんはふ 刑事職權法【名】〔法〕『英Law of criminal authority』刑事法の一。刑罰法の適用を掌る國家機關の組織權限を定むるもの。即ち裁判所構成法の類。

けいじ-せいさい 刑事制裁【名】〔法〕國家が刑法上の犯罪者に加ふる制裁。刑罰がその一部なるは勿論なれど、その他すべての犯罪者に對する法益の剝奪をも含む。(民事制裁に對して)**けいじせきにん**(刑事責任)參照。

けいじ-せいさく 刑事政策【名】〔法〕『英Criminal politics』犯罪鎭壓の目的のために、刑罰法令上、國家の執るべき政策。

けいじ-せきにん 刑事責任【名】〔法〕『英Penal responsibility』一定の不法行爲に基づきて、刑事制裁を受けざるべからざる、法律上の地位。場合によりては、刑事制裁そのものの意に用ひらるることもあり。刑事上の責任。

けいし-そうかん 警視總監【名】地方官の一。警視廳の長官。勅任官にして、內務大臣の指揮・監督を承け、東京府下の警察消防及び特に內務大臣の指定する衞生事務を管理し、各省の主務に關する警察事務につきては、各省大臣の指揮・監督を承く。

けいし-そうちやう 警視總長【名】**けいむそうちやう**(警務總長)の舊稱。

けいじ-そしよう 刑事訴訟【名】〔法〕訴訟の一。刑罰法の適用を司法裁判所に請求するもの。犯罪の審理・判決をなすもの。刑訴。(民事訴訟に對して)

けいじそしよう-じけん 刑事訴訟事件【名】〔法〕**けいじじけん**(刑事事件)に同じ。

けいじそしよう-てつづき 刑事訴訟手續【名】〔法〕刑事訴訟の手續。

けいじそしよう-てつづきはふ 刑事訴訟手續法【名】〔法〕次條に同じ。

けいじそしようはふ 刑事訴訟法【名】〔法〕刑事訴訟の手續を規定したる法律。明治二十三年の公布。刑事訴訟手續法。

けいじそしようはふ-がく 刑事訴訟法學【名】〔法〕刑事訴訟法の手續に關する法理を研究する學問。

けいじ-そつね 刑事訴追【名】〔法〕檢事が起訴すること。

けいし-したいふ 卿士大夫【名】公卿と士と大夫と。

けいし-だつ 家司だつ【動四自】一かどの家司らしく見ゆ。(古語)源氏「はかばかしきけいしだつ人なども見えず」

けいし-ちやう 警視廳【名】警視總監の、その事務を取扱ふ地方廳。總監官房・警務部(警務と刑事とに關する事項を掌る)保安部(建築・風俗・危險物・營業・交通等に關する事項を掌る)衞生部(衞生に關する事項を掌る)及び消防部(水火消防に關する事項を掌る)の各部を置き、職員として、總監の外、警視・技師・警部・屬・技手・消防士・警察醫・消防機關士・通譯などを置く。

けいじ-ちやう 掲示場【名】掲示をなす場所。けいじば。

けいしちやうれい 警視廳令【名】警視總監が、職權又は委任によりて、管內一般又はその一部に發する行政命令。

けいし-ちゆう 酣侍中【名】〔人〕**けいそう**(秘紹)に同じ。

けいし-つ 閨室【名】〔一〕ねや。閨房。〔二〕つま。內室。

けいし-つ 形質【名】〔一〕形狀と性質。かたちとたち。形式と實質と。〔二〕〔哲〕きしつ(氣質)〔二〕に同じ。

けいし-つ 硅質【名】〔地〕『英Siliceous又Arenaceous』岩石・鑛物の硅酸に富む性質。

けいし-つ 輕疾【名】**けいしやう**(輕症)に同じ。

けいし-つ 勁疾【名】甚だ早きこと。迅速。

けいし-つ 繼室【名】**けいさい**(繼妻)に同じ。

けいし-つ 頃日【名】『**けいこく**(頃刻)・**けいねん**(頃年)參照』ひごろ。このごろ。

けいし-つ 雞日・鷄日【名】**ぐわんじつ**(元日)の異稱。**けいたん**(鷄旦)參照。

げいじつ-わん 迎日灣【名】〔地〕朝鮮慶尙北道の東岸、日本海に面する海灣。

けいじ-てつづきはふ 刑事手續法【名】〔法〕刑事法の一。刑事の訴訟及び犯罪の搜査、裁判の執行等に關する法式を定めたるもの。

けいじてん 繫辭傳【名】〔書〕『**けいじ**(繫辭)〔一〕を見よ』易經の十翼の一。文王と周公とが卦(クワ)と爻(カウ)とに繫けたる辭を解釋せるもの。上・下二篇あり。**えききやう**(易經)參照。

けいじとうけいがく 刑事統計學【名】刑事上の諸現象の研究を目的とする統計學。

けいし-の-やく 家司の役【句】**けいし**(家司)の條下を見よ。

けいじば 掲示場【名】**けいじちやう**(掲示場)に同じ。

けいじ-はふ 刑事法【名】〔法〕刑事に關する法規。刑事職權法・刑事律例法・刑事手續法の三に分つ。(民事法に對して)

けいじ-はん 刑事犯【名】〔法〕〔一〕重大なる法益を侵害し、又は侵害せんとしたる事に由りて、刑罰を科せらるる行爲。(警察犯に對して)〔二〕犯罪を構成する行爲。つみ。犯罪。(民事犯に對して)

けいじ-ばん 掲示板【名】掲示に用ふる板。

けいじ-はんけつ 刑事判決【名】〔法〕刑事訴訟に對する、裁判所の判決。

けいじ-ひこく-じけん 刑事被告事件【名】〔法〕刑事上の責任ある行爲に對する審理事件。(民事被告事件に對して)

けいじ-ひこくにん 刑事被告人【名】〔法〕刑事訴追を受けて、未だその裁判の確定せざるもの。判決確定後は、囚人又は囚徒といひて、區別す。(民事被告人に對して)

けいし-ふ 桂樹・桂楊【名】桂(カツラ)の木にて造りたるかち。けいせふ。「桂樹・蘭橈」

けいじ-ぶ 刑事部【名】合議裁判所に於ける部の一。刑事事件の審理・裁判をなすもの。(民事部に對して)

げいじまん 藝自慢【名】我が藝に自負すること、又その人。

けいし-ん 敬心【名】うやまふ心。敬虔の「心。

けいし-ん 慧心【名】さとき心。聰敏なる心。美しき意。

けいし-ん 桂心【名】〔一〕肉桂の一部。皮に近き、黃色なる部分。藥劑に用ふ。今萱桂の木…桂心といふ藥…刀を以て桂心ある所をば切取りて」〔二〕〔植〕**にくけい**(肉桂)に同じ。〔三〕古の餅菓子の一。肉桂の細末を附けしものといふ。建武年中行事「內膳など、碓に、未だ挽ねとはず。てんせいひつら・かっこ、けいしんなどやうのものなり」

けいし-ん 桂薪【名】『桂を薪とする義。**けいぎよく**(桂玉)を見よ』**けいぎよく**(桂玉)に同じ。

けいし-ん 雞晨・鷄晨【名】あした。あさ。よあけ。あかつき。あけがた。雞旦。

けいし-ん 輕進【名】輕率に進むこと。

けいし-ん 輕信【名】かろがろしく信ずること。

けい-しん 京津【名】〔地〕㊀けいせつ(京摂)に同じ。㊁京都と近江國の大津と。

けい-しん 敬神【名】神をあがめ敬ふこと。

けい-しん 敬信【名】うやまひ信ずること。

けい-しん 荊榛【名】㊀いばらと、はしばみと。㊁草木の亂れ生ずること、又その處。荊棘。

けい-しん 熠心【名】あきらかなる心。

けい-じん 京人【名】みやこびと。都人士。

けい-じん 刑人【名】刑罰を受けたる人。刑餘の人。

けい-じん 鶏人・雞人【名】㊀支那にて、周の代に、皇居を護衛し、夜を警めし人。㊁古、我が國の宮中にて、時刻を奏せし役の人。太平記「鶏人、鼓を唱へし聲」

げい-しん 迎新【名】新年を迎ふること。迎春。

げい-じん 藝人【名】技藝に長じたる人。藝

けいじん-てつだう 京仁鐵道【名】朝鮮京城の西大門より京釜鐵道線を通じ、永登浦より分れて、仁川に達する鐵道。延長二十五哩。

けい-しや 輕車【名】かろき車。

輕車熟路【句】『唐の韓愈の「送二石處士一序」に見ゆ』㊀輕車に乘りて、なれたる路を行くこと。㊁物事に熟達して容易なる譬。

けい-しや 輕者【名】輕鋭の兵。「紗。

けい-しや 輕紗【名】薄くして輕らかなる

けい-しや 傾瀉【名】㊀かしげそそぐこと。㊁心のかぎりを盡すこと。傾倒。

けい-しや 傾斜【名】㊀かたむき斜になること。かたむき。㊁〔地〕『英Dip』地層が水平面に對する傾の度、即ち地層面と水平面との挟む二面角。その角度を傾斜度又は傾度といふ。「じや。

けい-しや 雞舍・鶏舎【名】鶏の小屋。とり

げい-しや 藝者【名】㊀多藝なる人。藝人。風俗文選「信長公も、藝者と見えたり」㊁遊藝に巧みなる人。「足利時代以後、元祿・享保頃の語」世間娘氣質「親に似ぬ不器用もの、これでは、藝者の家たたず」㊂『をんなげいしや(女藝者)の略』**げいぎ**(藝妓)を見よ。

㊃たいこもち。幇間。(大阪の語)

けい-しやう 刑賞【名】刑罰と賞與と。仕置と褒美と。

けい-しやう 啓將【名】古、啓陣に立つ六衛府(エフ)の者を指揮せし將校。「に同じ。

けい-しやう 經商【名】たびあきうど(旅商人)

けい-しやう 輕症【名】輕微なる病症。輕疾。(重症に對して)

けい-しやう 輕傷【名】輕微なる創傷。うすで。あさで。(重傷に對して)

けい-しやう 奎章【名】『けい(奎)を見よ』ぶんしやう(文章)に同じ。

けい-しやう 雞唱・鶏唱【名】けいめい(雞鳴)に同じ。

けい-しやう 雞障・鶏障【名】きんけいしやう(錦雞障)の略。太平記「金屋の内によそほひを閉ぢ、雞障の下に媚を深くして」

けい-しやう 珪璋【名】堆朱(ツイシユ)・堆黒(ツイコク)の一種。色黒くして、彫目に赤き筋一條又は二條あるものをいひ、又、地を赤く塗り、上を黒く塗るものを、地紅の珪璋といふといへり。世に傳ふるもの、甚だ稀なり。

けい-しやう 卿相【名】くぎやう(公卿)に同じ。太平記「主上をはじめ參らせて、宮宮、卿相・雲客、皆皆かちはだしなる體にて」

けい-しやう 形相【名】〔哲〕けいしき(形式)㊃に同じ。

けい-しやう 形象【名】かたち。さま。形狀。

けい-しやう 形像【名】㊀前條に同じ。㊁人物または禽獸などの形。多くは記念裝飾又は廣告などのために造る。銅像も亦その一なり。「形像取締」

けい-しやう 啓請【名】〔佛〕諷經の前に、佛・菩薩を奉請すること。

けい-じやう 契狀【名】契約の狀。約束狀。(鎌倉時代の語)

けい-じやう 形狀【名】すがた。かたち。ありさま。狀態。

けい-じやう 啓上【名】まうすこと。申上ぐること。(手紙の文に用ふ)

けい-じやう 計上【名】かぞへいるること。計算の中に入ること。

けい-じやう 經常【名】ながくつづきて、變らざること。つね。ふだん。(臨時に對して)

けい-じやう 頸狀【名】〔鑛〕岩石中に存する裂罅(コツ)を通じて噴出したる熔岩が、凝固して、岩頸をなす時の形狀。

けい-じやう 京城【名】『京は大の義。けいし(京師)を見よ』みやこ。京華。

けいじやう 京城【名】〔地〕朝鮮の首都。京畿道に屬し、もと漢城・漢陽と稱したり。北に北漢山、南に南山あり、西には漢江を通ず。朝鮮總督府の所在地。

げい-じやう 猊床【名】『げいざ(猊座)を見よ』しゝざ(獅子座)に同じ。

げい-じやう 霓裳【名】㊀虹霓のごとく美どき裳。天人・天女・仙人などの衣の形容にいふ。㊁次條㊁に同じ。太平記「霓裳一曲の聲の中」

霓裳羽衣【句】㊀霓裳と羽衣と。天人・天女・仙人などのころも。㊁〔音〕ぎよくじゅうてきわ(玉樹後庭花)に同じ。源注「玉樹後庭花、號二霓裳羽衣曲一、但舞與別也」

げい-しやう-ぎ 藝娼妓【名】藝妓と娼妓と。

けいじやう-げん 形狀言【名】〔語〕語尾の、くし・きけれ又はしくし・しきしけれと働きて、事物の性質・狀態などを表はすに用ふる語。例へば、「面白し」・「美し」・「輕し」・「輕輕し」などの類。形容詞。

けいじやう-さいしゆつ 經常歳出【名】毎會計年度に、規則正しく又は甚しき增減なしに支出する金額。(臨時歳出に對して)

けいじやう-さいにふ 經常歳入【名】毎會計年度に、規則正しく又は甚しき增減なくして、國庫の收入となる金額。(臨時歳入に對して)

けいじやう-じ 形象字【名】しやうけいもんじ(象形文字)に同じ。

けいじやう-しんがう 形象信號【名】圓錐形・球形・鼓形の三つの形象に依りて行ふ信號。遠距離信號。

けいしやう-だう 慶尚道【名】〔地〕朝鮮十三道の一。今は、これを南道・北道に分つ。

けいしやう-とりしまり 形像取締【名】形像の建設・移轉・改造・除却に關する取締。

けいしやう(形像)㊀參照。

けいしやう-なんだう 慶尚南道【名】〔地〕朝鮮慶尚道南部の一區劃。首都を晉州といふ。

けいじやう ひ 經常費【名】〔英Current expense.〕毎會計年度に、規則正しく又は甚しき增減なしに要する經費。平生の經費。(臨時費に對して)

けいしやう-ほくだう 慶尚北道【名】〔地〕朝鮮慶尚道北部の一區劃。首都を大邱(タイク)といふ。

けい-じやう みやく 頸靜脈【名】〔醫〕頸部より來る一對の太き靜脈。內頸靜脈と外頸靜脈との二つに分つ。

けいしやう-もんじ 形象文字【名】しやうけいもんじ(象形文字)に同じ。

けいしやう-ゐん 桂昌院【名】〔人〕德川五代將軍綱吉の生母。名は宗子、お玉の方といひ、秋野殿と稱す。京都の人。實父不詳、その歿後、母、本莊宗利に再嫁し、依つて宗利に養はる。家光の妾永好姫(お滿の方)の江戸に赴くに從ひて、幕府の大奥に入り、春日局に憑り、つひに家光の寵を受け、從三位に叙せられ、又從一位に進む。寛永二年薨ず。年八十二。

げいしやか ひ 藝者買【名】茶屋・待合などに藝者㊁をあげて遊興すること。

けいしやぎ 傾斜儀【名】〔地〕『英Clinometer』地層の傾斜度を計るに用ふる器械。形、種種あり。

けいしやく 景迹・遺迹【名】きやうざく(景迹)に同じ。㊁死にて物思はせとて、喜びていだしたつる母や候ふべき、御けいしやくとぞ申しける」

けいじやく-じ 鶏雀寺【名】昔、印度の摩訶陀(マカ)國巴多梨弗多羅(パタリプタラ)城、即ち(今のパトナPatna)市附近にありし寺。阿育王の創立。一名、鶏寺・鶏園寺。正統記「阿育王の崇めし雞雀寺」

けいしやく-しけん 傾斜試驗【名】『英Inclination experiment』船を靜水に浮べ、甲板上に乘せたる重量を、一方の舷に偏らしめ、船を横に傾けて、その角度を計り、これによりて重心點の高さを算出するために行

ふ試験。

けいしやしん 傾斜針【名】飛行機の傾斜を極めて容易に、且つ精密に測定するに用ふる機械。眞鍮製にて、茶碗形をなし、操縦者の前に手輕に据附けらる。

けいしやせん 傾斜線【名】■傾斜せる線。■(地)地層の傾度を測定するための、その走向に直角をなしたる方向。「に同じ。

けいしやど 傾斜度【名】(地)けいど(傾度)

けいしやみ 藝者身【名】藝者になりたるつもりにてゐること。藝者風を裝ふこと。高慢齋行脚日記「藝者づきあひ廣くなりて、今はわが身も藝者身になり」

けいしやや 藝者屋【名】藝妓をかかへおく家。

けいしややまち 藝者屋町【名】藝者屋の連なれる町。

けいしゃく 謦咳【名】『九拜とて、周禮の春官に見えたる拜禮の九種の方式中、最も重かりしものにて、稽は留止の義。けいさう(稽類)けいりう(稽留)參照』頭を地につくほど下げ、暫くそのままにして、のち擧ぐるもの。とんしゅ(頓首)參照。

けいしゅ 擊手【名】手をさしあぐること。

けいしゅ 警手【名】くわうきゅうけいしゅ(皇宮警手)の略。「警衛。

けいしゅ 警守【名】いましめまもること。

けいしゅ 景趣【名】おもむき。ありさま。景致。風致。

けいじゅ 瓊樹【名】■ぎょくじゅ(玉樹)(■)に同じ。■えうりんけいじゅ(瑤林瓊樹)を見よ。

けいじゅ 桂樹【名】(植)けい(桂)に同じ。

けいじゅ 京儒【名】京都の儒者。洛儒。

けいじゅ 慶壽【名】天子の誕生日。

けいじゅ 繼受【名】うけつぐこと。

けいじゅ 鯨首【名】(植)はまびは(濱枇杷)に同じ。

けいじゅ 鯨首【名】額に入墨(いれずみ)を施すこと、又その刑。

けいじゅ 鯨鬚【名】くぢらひげ(鯨鬚)に同じ。

けいじゅ 景從【名】影の形に從ふごとくにつきまとふこと。

けいしゅく 慶祝【名】よろこびいはふこと。ことほぎ。祝賀。「ひごし。

けいしゅく 經宿【名】一夜を經ること。よ

けいしゅく 奎宿【名】けい(奎)に同じ。

けいしゅくや 嵇叔夜【名】(人)けいかう(嵇康)に同じ。

けいじゅしゅとく 繼受取得【名】(法)前權利者に屬せし權利を、法律又は意思表示によりて取得すること。繼受的取得。(原始取得に對して)

けいじゅつ 經術【名】けいがく(經學)に同

けいじゅつ 繼述【名】先人の業を承けつぎて發展せしむること。繼承して祖述すること。

けいじゅつ 藝術【名】■學藝と技術とわざ。技術。■『英Art』人生及び自然に觸れて生ずる人の感覺・情緒・氣分・感性等を、眞實に表現するもの。その表現の形式により、文學・美術・音樂・劇等に分る。文藝。藝術の要素【句】(美)『英Element of art』けいじゅつてきえうそ(藝術的要素)に同じ。

げいじゅつ 藝術のための藝術【句】(文・美)『英Art for art's sake』藝術は藝術そのもののために存在すべきものにして、人生のために存在すべきものにあらざること。(「人生のための藝術」に對して)

げいじゅつ 藝術の轉換【句】(文・美)『英Transposition of art』各種藝術の境界を混亂せしめて、或種類の藝術の特色を他の藝術の上に現さんとすること。例へば繪畫に音樂の感じを出さんとし、詩歌に繪畫の氣分を表現せしめんとする類。「官能の交錯」參照。

げいじゅつ 人生のための藝術【句】(文・美)『英Art for life's sake』藝術は、人生の實生活に効果あるものならざるべからざること。(「藝術のための藝術」に對して)

げいじゅつか 藝術家【名】『英Artist』藝術に從事する人。藝術美の表現を理想とする人。藝術に巧なる人。詩人・美術家・音樂家などの類。

げいじゅつかいばうがく 藝術解剖學【名】(美)解剖學の中、美術家に必要なる部分。

げいじゅつがく 藝術學【名】『獨Kunstwissenschaft』藝術を科學的に研究する學。

げいじゅつくわつどう 藝術活動【名】『英Art activity』藝術を製作し、又は鑑賞する、人間精神の活動。

げいじゅつしじやうしゅぎ 藝術至上主義【名】(文・美)『英Theory of art for art's sake』藝術のための藝術を奉ずる一派。即ち藝術は藝術そのもののために存すべきものにして、人生のために存すべきものにあらずといふ主義。唯美說。

げいじゅつしようどう 藝術衝動【名】(哲・美)『英art impulse』藝術本能の發作。藝術を製作し、又は鑑賞する感興。

げいじゅつてき 藝術的【貌】『英Artistic』藝術本位の狀態。「藝術のための藝術」としての標準より見たるさま。

げいじゅつてきえうそ 藝術的要素【名】(美)藝術に具備すべき三つの要素、即ち材料・形式・內容。藝術の要素。

げいじゅつてきかうくわ 藝術的效果【名】(美)藝術が人生社會に與ふる影響、知的に人生を知り、且つ考察せしめ、感情的又は意志的に精神を昂奮せしめ、若しくは沈靜せしむ。かくして、その影響は甚だ細緻にして、又頗る複雜なり。

げいじゅつてきりやうしん 藝術的良心【名】(美)純粹の藝術衝動に由つて製作し、鑑賞することを固守する、藝術家の良心。

げいじゅつてきりやうしんは 藝術派【名】(文・美)『英Theory of art for art's sake』藝術至上主義を奉ずる一派の人人。(人生派に對して)

げいじゅつび 藝術美【名】(哲)『英Artistic beauty』藝術により表現せられたる美。感興ある實體を理想化してあらはす美。(自然美に對して)

げいじゅつほんのう 藝術本能【名】(哲・美)『英Art instinct』人類が生命の內に、本來具有せる藝術活動の本能。

げいじゅつしゅとく 繼受的取得【名】(法)けいじゅしゅとく(繼受取得)に同じ。(原始取得に對して)

げいじゅつほふ 繼受法【名】(法)『英Acceptal law』直接・間接に、他國の法律を模範として制定せる法律。又その模範となりたるもとの法律を、母法といふ。(固有法に對して)

けいじゅん 警巡【名】非常をいましめて見廻ること。みまはり。「迎新。

けいしゅん 迎春【名】新春を迎ふること。

けいしゅんくわ 迎春花【名】(植)わうばい(黃梅)に同じ。

けいしゅんでん 迎春殿【名】京都御所內にある殿舍。孝明天皇の時、新に營造せられたり。

けいじゅんやうかん 輕巡洋艦【名】巡洋艦にて、裝甲せざるもの。(裝甲巡洋艦に對して)

けいじゅんゐん 慶壽院【名】(人)烈女。將軍足利義晴の夫人。義輝の母。永祿八年三好松永の徒叛きて、幕府を攻め、義輝遂に自刃せし時、火炎中に投じて死す。

けいしょ 經書【名】支那、賢人の、人道の教を書きたる書籍、即ち四書・五經の類の總稱。經典。經卷。經籍。經(きやう)。

けいしょ 刑書【名】刑律の書。

けいしょ 啓所【名】啓陣に供奉する人の詰むる處。「と。啓居。

けいしょ 啓處【名】家に安坐してをることびと。■『論語の微子篇に「殺レ雞爲レ黍而食レ之」とあるに本づく」雞を殺して羹(あつもの)とし、黍を炊きて飯とすること。(多くは人を款待・饗應するにいふ)

けいしょ 雞黍【名】■にはとりと、きびと。

けいしょ 繼承【名】先代・先任者などの地位・身分・權利・義務等を相續して、同一なる地位に立つこと。

けいしょう 景勝【名】景色のよきこと、又その處。今國難急「九の鼎を鑄させ、山川草木まで、その國の景勝を鑄つけ」

けいしょう 形勝【名】土地の形勢・風景などのすぐれたること、又その處。

けいしょう 勁松【名】風霜にあひても衰へぬつよき松。

けい-しよう 警鐘【名】非常を警(イマシ)むるかね。危険を警戒するために鳴らす鐘。

けい-しよう 敬承【名】つつしみてうけたまはること。拝承。

けい-しよう 敬稱【名】敬意をあらはす稱。

けい-しよき 啓書記【名】〔人〕畫家。姓は丸眞(ガン)、名は祥啓、字は雪溪、休月齋龍杏又は貧樂齋と號す。下野國宇都宮の人。鎌倉建長寺の書記たり。

けい-しよく 頸飾【名】一くびを飾る具。くびかざり。二天勳位菊花章を喉の下に佩ぶる時に用ふるもの。菊花・菊葉の形の圖と古篆(ショテ)文の「明治」の二字とを以て飾る。明治二十一年の設定に係る。

けい-しよく 景色【名】山水・風物などの、眼に見ゆるさま。けしき。風景。

けいじ-りつれい-はふ 刑事律例法【名】〔法〕『英Criminal Law』刑事法の一。刑罰權の範圍、即ち犯罪と刑罰との分量、關係などを規定せるもの。

けいす 詣す【動佐變自】まうづ(詣づ)に同じ。盛衰記「汝宇佐宮に詣して」「す。

けいす 警す【動佐變他】いましむ。警戒す。

けいす 刑す【動佐變他】つみす。仕置す。

けいす 敬す【動佐變他】うやまふ。敬して遠ざく【句】一『論語』の雍也篇に「敬二鬼神一而遠レ之」、又、禮記の表記篇に「尊レ命事レ鬼、敬レ神而遠レ之」とあるに本づく『鬼神を敬して遠ざく』、且つ禍福の事に心を惑はさず。〔諺語〕二うはべには敬を加へて、實際は、その人又はその物事に關與せず、又はこれを疎んず。

けいすん(敬遠)參照。〔諺語〕

けいす 啓す【動佐變他】申し上ぐ。きこえたてまつる。(主に三宮及び東宮に對するときに用ふ)並「いかでか知らん、よきに奏したまへ、けいしたまへ」

けいす 慶す【動佐變他】いはふ。よろこぶ。

けいず 窩主【名】かひず(窩主)の訛。

けいぜん 鯨鬚【名】くぢらひげ(鯨鬚)に同じ。

けい-すう 係數【名】〔數〕『英Coefficient又はCo-factor』積の因數のうち、前方にあるものを、後方にあるものに對していふ稱。例へば、5ab²に於ける5が、ab²の係數なる類。又、yより見れば、5aがその係數なるが故に、係數は、數字(即ち、數字係數)又、數係數)なることあり、文字(即ち文字係數)なることあり。段數。用。計算。

けい-すう 計數【名】かずを計ふること。算

けいすうき 計數器【名】『英Counting machine』計數に用ふる器械。算盤もその一種なること勿論なれど、おもに歐米にて、幼童に數の基本觀念を與ふるために製出したる一種の器械。

けいすう-くわへい 計數貨幣【名】〔經〕『英Money of account』本位制度の一。貨幣を鑄造するに、純分・重量・形狀等をすべて一定し、使用者をして、その箇數計算のみによりて、授受を遂げしむる貨幣。(秤量貨幣に對して)

けいず-かひ 窩主買【名】『けいずは、かひす(窩主)の訛』ぬけものかひ(脫物買)に同じ。

けい-すん 徑寸【名】直徑の一寸あること。「徑寸の珠」

けい-すゐ 經水【名】げっけい(月經)に同じ。

けい-すゐ 溪水【名】たにみづ。澗水。

けいすゐ-き 慰水期【名】〔地〕『英Slack tide又slack water』潮汐の進退する際の、停憩期。憩潮。

けい-せい 形聲【名】かいせい(諧聲)に同じ。

けい-せい 溪聲【名】溪川のながれの音。たにがはのおと。澗聲。

溪聲これ長廣舌【句】谷川の水の絶えず音を立つるを、長廣舌を弄するに譬へていふ。「ゑ。

けい-せい 雞聲・鷄聲【名】にはとりのこえ。

けい-せい 刑政【名】刑罰と政治。

けい-せい 慧性【名】さときうまれ。さかしき性質。

けい-せい 奎星【名】けい(奎)に同じ。

けい-せい 景星【名】めでたき星。瑞星。

けい-せい 形成【名】形を成すこと。かたちづくること。

けい-せい 經世【名】世ををさむること。

けい-せい 警世【名】世人を警醒すること。

けい-せい 警醒【名】警戒して覺醒せしむること。

けい-せい 契情【名】次條二に同じ。用明天皇職人鑑「花の情の契と書いて、契情とは名付けたりや」

けい-せい 傾城【名】一『詩經の大雅瞻卬篇に「哲夫成レ城、哲婦傾レ城」とあるに本づく』婦人が國を亂すこと。二『漢書の外戚傳に「寧不レ知二傾レ城與傾レ國、佳人難再得一」、又、「李延年歌曰、北方有二佳人一絕世而獨立、一顧傾二人城一、再顧傾二人國一」とあり』非常なる美人。傾國。契情。三うかれめ。遊女。宇治「ある男、とまりにて、けいせいと臥したりけるに」四しばゐ。〔京都の語〕

傾城に信(マコト)無し【句】遊女は、實意なければ、頼むべからず。〔諺語〕遊君三世相「傾城に誠なしと、世の人の申せども、それは皆僻言、わけ知らずの詞ぞや」

傾城の空泣(カネギ)【句】遊女は、心にも無き涙を流して、嫖客を欺くこと。傾城の空涙。〔諺語〕

傾城の空涙(ソラナミダ)【句】前條に同じ。〔諺語〕

けい-せい 形勢【名】かたち。ありさま。〔きほひ。

けい-せい 蓂生【名】〔植〕蓂の上に生ずること。くきだち。

けい-ぜい 輕稅【名】一租稅を輕くすること、又その租稅。(重稅に對して)二王朝時代の附加稅の一。京都及び諸國の官吏の月俸として、田租に課したり。

けい-ぜい 契稅【名】〔法〕臺灣にて、土地・建物を買受け、又は質入れしたる者に對し、一定の率によりて取立つる登錄稅。

けいせい-あさまがだけ 傾城淺間嶽【名】歌舞伎狂言の一。傾城逢州と巴之丞との事を作れるもの。元祿十年中村七三郎(少長)京都にて初演、大當にて百二十日間興行せりといふ。少長自作。

けいせい-あはのなると 傾城阿波鳴戸【名】淨瑠璃の一。近松門左衞門の夕霧阿波鳴渡に據りて、國次の名劍紛失の事を作りこみたるもの。うち順禮歌の一齣最も有名なり。近松半二等五人の合作。

けいせい-いろざみせん 傾城色三味線【名】〔書〕八文字屋自笑作の浮世草子。京の卷・大坂の卷・江戸の卷・鄙の卷・湊の卷の五册より成り、各卷の始に、島原・吉原・新町・揚屋町(アゲヤマチ)・宇津(ウツ)の遊女の名寄(ナヨセ)と、每卷に五條の小話とを添へたり。

けいせい-えふ 蓂生葉【名】〔植〕蓂上に生じたる葉。

けいせい-か 經世家【名】經世の事に携はる人。政治家。

けいせい-かひ 傾城買【名】ぢょうかひ(女郎買)に同じ。傳藏新選(瓜流)「よぎをしや傾城買の冬ごもり」

傾城買ふ灰吹は、青いうちが賞翫【句】灰吹は竹の色青き內、傾城買は年の若き間をよしとす。〔諺語〕

けいせい-かひ-とらのまき 傾城買虎之卷【名】〔書〕田螺(タニシ)金魚(江戸神田三河町邊の町醫の子なりといふ)の作れる洒落本(ホンヤレ)。天明年中、島山檢挍が江戸吉原の松葉屋の妓、瀨川に懸想せしに、瀨川の承知せざりしを、强ひて身受けせりといふ巷談を材として作れるもの。

けいせい-かひ-ふたすぢみち 傾城買二筋道【名】〔書〕『二筋道とは、文武の二道に寓したる意』梅暮里(ボリ)谷峨(コク)の作れる洒落本(ホンヤレ)。主人公を文里といひ、全部三篇より成る。

けいせい-きんたんき 傾城禁短氣【名】〔書〕『禁短氣は、讃歎記の音調をもじりて、名づけたるもの』八文字屋自笑作の浮世草子。當時、流行せし法論・談義に擬して、女色の男色にまされるよしを記せるもの。

けいせい-ぐるひ 傾城狂【名】遊女におぼれること。賀古敎信七番經「金も持たいで傾城ぐるひがなるものか」

けいせい-けん 形成權【名】〔法〕『獨Gestaltungsrecht』相手方の行爲を要せずして、その權利者の一方的行爲のみにて、法律關係を形成する權利。例へば取消權・解除權・買戻權・解約申入・選擇權等の類。

けいせい-ごと 傾城事【名】遊女に關する事がら。冥途飛脚「節季・しはすに、この在

所は、傾城ごとで煮えかへる」

けいせい-さう 桂仙草【名】〔植〕『けいせんくわ(桂仙花)を見よ』おきなぐさ(翁草)を云ふ。(甲斐國の方言)

けいせい-しゆてんどうじ 傾城酒呑童子【名】浄瑠璃の一。茨木屋幸齋の豪奢を極めたることを種とし、大江山の趣向を加へて、脚色せるもの。近松門左衛門の作。

けいせい-そう 形成層【名】〔植〕『羅 Cambium』高等なる植物の莖の木質部と靱皮部との間に介在し、その細胞の盛んに分裂して、内方に向っては木質部を、外方に向っては靱皮部を形成する薄き組織。幹の發達上最も緊要なる部分にして、冬期には、分裂作用一時停止し、翌春に至りて更に始まるが故に、新・舊兩層間に自然に境界を生ず。これを年輪といふ。

けいせい-そしき 形成組織【名】〔植〕形成層と同じく絶えず分裂・増殖して、種種の部分を形成する組織。

けいせい-たい 型成體【名】『英Cast』化石の形を、天然又は人工にて、他の物質にて造りたるもの。

けいせい-たい 傾城代【名】遊女の揚代。(近松門左衛門「母が命が一夜さの傾城代にもなるならば」

けいせい-づか 傾城柄【名】傾城買についての威勢。(傾城佛屋)この男も傾城柄を握ったなれの果てぢや」

けいせい-づか 傾城塚【名】いうれうづか(遊女塚)に同じ。

けいせい-ばな 傾城花【名】〔植〕なつずゐせん(夏水仙)に同じ。

けいせい-はんごんかう 傾城反魂香【名】浄瑠璃の一。狩野元信・土佐光信・浮世又平等の畫工の事蹟を附會して作れるもの。なかんづく名古屋山三と不破伴左衛門との確執、又、吃(ど)又平の條など、有名なり。近松門左衛門の作。

けいせい-まち 傾城町【名】遊女屋のある町。いうぢょまち。いろざと。(太平記)壁つづる傾城町や秋の暮」

けいせい-みやく 頸靜脈【名】〔醫〕けいじやうみやく(頸靜脈)に同じ。

けいせい-や 傾城屋【名】おやらうや(女郎屋)に同じ。(拾玖天皇歌軍法)后に立てると敢して、傾城屋へ賣らうといふこと」

けいせう 輕少【名】わづか。すこし。いささか。輕微。

けいせう 輕笑【名】■かろんじわらふこと。嘲笑。■少し笑ふこと。ほほゑむこと。微笑。

けいせう 替紹【名】〔人〕支那晉代の人。稽康の子。字は延祖。官、累進して侍中に至る。永興元年河間・成都の兩王兵を起すに當り、惠帝に從って戰死し、その血御衣に濺ぎしに、帝、これ侍中の記念なりとて洗はしめざりきといふ。

けいせき 經籍【名】けいよ(經書)に同じ。

けいせき 形迹・形跡【名】あとに殘りたるしるし。あとかた。痕跡。

けいせき 螢石【名】〔鑛〕ほたるいし(螢石)に同じ。「の鑛物。

けいせき 硅石【名】〔鑛〕石英又は石英質の石。■黑色・堅硬にして、打てば鏗鏗(カウカウ)の音を發する一種の石。讃岐國綾歌(アヤウタ)郡西庄(ニシノシヤウ)村に産す。

けいせき-き 計積器【名】『英Planimeter又Platometer』平面圖により、その面積を計り出すに用ふる器械。形、種種あり。

けいせき-さんこ 經籍纂詁【名】〔書〕古代より唐初までの諸儒の經史の註解を、韻字にて分類・編纂せるもの。補遺と合せて、百六卷あり。支那淸の阮元の編。

けいせき-ど 硅石土【名】〔鑛〕けいさうど(硅藻土)に同じ。

けいせき-はり 硅石玻璃【名】硅石を電氣爐にて溶融したるもの。外觀普通の硝子に似て、しかも高熱を與へたる後、直ちに冷水に浸すも破裂せず、故に燃燒管等に使用せらる。「語」

けいせつ 磬折【名】けいせつ(磬折)の轉。「古けいぜち 雞舌・鷄舌【名】けいぜつ(雞舌)に同じ。「古語」桑花五節に、中宮の女房、梅・けいぜちを含んでといふ詩をさうぞきたり」

けいせつ 磬折【名】けいくつ(磬屈)に同じ。

けいせつ 螢雪【名】■ほたると、ゆきと。■『支那晉の車胤が螢を集め、孫康が雪を積みその光を燈にかへて讀書せし故事に本づく』苦勞して行ふこと。

螢雪の學【句】くがく(苦學)に同じ。

螢雪の功(カウ)【句】苦學の功果。「と。

けいせつ 敬節【名】敬みて禮節を盡すこと。

けいせつ 經說【名】經書につきての言論。

けいせつ 勁節【名】■竹の節のつよきこと。■氣質のつよきこと。

けいせつ 勁雪【名】消えがたき雪。「勁雪嚴霜」

けいせつ 勁切【名】つよくせまること。ぴしきこと。

けいせつ 京攝【名】〔地〕京都と攝津國と。「京津。

けいぜつ 雞舌・鷄舌【名】けいぜつかう(雞舌香)の略。太平記、獅頭の香爐に、雞舌の沈香を薫じたれば、春風、香あたたかにして、覺えず梅檀の林に入るかと怪しまる」

けいせつ 迎接【名】人の來るを迎ふること。でむかへ。「の一。

けいぜつ-かう 雞舌香・鷄舌香【名】藏香

けいせつ 桂楫・桂檝【名】けいしふ(桂楫)に同じ。「こと。跋渉。

けいせふ 經涉【名】山水をあるきまはる

けいせふ 輕捷【名】みがるきこと。輕快。敏捷。趫捷。「と。

けいせふ 勁捷【名】強くしてすばやきこと。

けいせふ-うんどう 輕捷運動【名】けいたいそう(輕體操)に同じ。

けいせふ-たいそう 輕捷體操【名】けいたいそう(輕體操)に同じ。

けいせん 傾城【名】けいせい(傾城)の訛。異途飛脚「けいせん買うて、人の金を盜み、そのけいせんつれて走られたといふて代官殿より御詮議」

けいせん 溪泉【名】溪間より涌く水。

けいせん 罫線【名】け(罫)に同じ。

けいせん 頸腺【名】〔醫〕頸部の淋巴腺。

けいせん 警巡【名】けいじゆん(警巡)に同じ。桑花「けいせんするや誰れの人や」

けいせん 輕賤【名】■かろんじいやしむこと、又その人。卑賤。■輕く少なきこと。輕少。輕微。「ふぐ扇。

けいせん 輕扇【名】輕くして、風をよくあ

けいせん 經線【名】〔地〕『英Meridian』地球の表面の某地點の位置を精しく知らんがために、假想して、縱線と横線とを設くる、その縱線の稱。地球の南極と北極とを貫通して、大圓をなす。子午線。(緯線に對して)けいど(經度)參照。

けいせん 繋船【名】■船舶をつなぐこと。■かこひぶね(圍船)に同じ。ふながかり。

けいせん 勁箭【名】強き洞貫の力ある矢。勁弓の矢。勁矢。

けいせん 景川【名】〔人〕高僧。名は宗隆(一說には、紹隆)。伊勢國の人。勅諡、本如實性禪師。大德寺妙心寺等の諸大刹に住す。明應九年寂す。年七十六。

けいぜん 僾然・廆然【貌】はるかなるさま。「さま。

けいぜん 煢然【貌】孤獨にてよるべなきさま。

けいぜん 惠然【貌】人の懇に訪來るさま。

けいせん-がん 繋船岸【名】船を繋ぐべき岸壁。繋船壁。

けいせん-き 繋船器【名】『英Bollard head』甲板上又はドックの岸壁などに建設して、船舶を繋留するに用ふる柱。「じ。

けいせん-ぎ 經線儀【名】くろのめそろに同

けいせん-きょ 繋船渠【名】『英Wet dock』船舶を繋留し、旅客の昇降及び貨物の揚卸をなすに便利なる水面。周圍に繋船岸及びこれに必要なる設備を施す。

けいせん-くひ 繋船杭・繋船杙【名】『英Dolphin』港内にて、船舶を繋留するために、三本以上の杭を組立て設置するもの。

けいせん-くわ 桂仙花【名】〔植〕おきなぐさ(翁草)を云ふ。〔美作國・備前國の方言〕生玉心中「似たりや似たり桂仙花、しばし休らふ木蔭を宿の」

けいせん-くわん 繋船環【名】『英Mooring ring』船舶を繋留するため、岸壁の前面に施設する鐵環。

けいせんさ 傾船差【名】『英Heeling-error』船體傾斜のために、羅針に生ずる自差。

けいせん-せき 硅線石【名】〔鑛〕成分は硅酸礬土なる一種の鑛物。岩石の副成分となりて産出し、棒狀又は纖維狀の集塊をなし、透明乃至半透明にして、黃灰・灰綠・褐等の色を呈し、脂肪光澤を有す。我が國にては、常陸・三河等に顯微鏡的小晶を産す。

けいせん-ちゅう 繫船柱【名】『英Mooring host』船舶を繫留するため、岸壁・埠頭・棧橋又はドックの周壁等に施設する柱。

けいせん-ふへう 繫船浮標【名】『英Mooring buoy』船舶の、港灣内にて、自己の鎖を投下することなき場合に、その鎖を結びつけて繫留するため、碇置せる浮標。

けいせん-へき 繫船壁【名】**けいせんがん**(繫船岸)に同じ。

けい-そ 硅素・珪素【名】〔化〕『英Silicon』非金屬元素の一。天然に遊離して存することなく、殆ど常に酸素と化合し、硅土及び硅酸鹽となりて、地殼中、酸素に次ぎて最も多量に分布す。即ち水晶・石英・燧石等となりて存在し、又、土砂の主成分を成すのみならず、竹・木賊(トクサ)・木本類の莖・葉の硬きも、これを含めるに因り、動物體にては、骨・歯・穀食鳥の羽等に含まる。

けい-そ 鼷鼠【名】〔動〕**はつかねずみ**(鼷鼠)に同じ。

けい-そ 荊楚【名】〔地〕『禹貢及び周禮職方氏に荊州といへるもの、又、春秋・戰國時代の楚國の領域にほぼ相當するよりいふ』支那の湖南・湖北兩省の地の雅稱。

けい-そ 刑訴【名】**けいじそしょう**(刑事訴訟)「の略。

けい-そ 藝祖【名】『書經の舜典篇に「歸格于藝祖用特」とあり』**そせん**(祖先)の敬稱。

けい-そう 輕鬆【名】輕くして、質荒くさらさらとしたること。「土壤、輕鬆」

けい-そう 恵贈【名】人より物を贈與せられたることの敬稱。恵投。

げい-そう 迎送【名】**そうげい**(送迎)に同じ。

げいそう-しき 迎送式【名】〔兵〕陸軍の儀式の一。兩陸下又は高貴の發著に對して、その地に屯在せる軍隊の整列すること。

けいそうど 輕鬆土【名】耕鋤して膨軟ならしめたる土壤、又は自然的膨軟なる土壤。

けいそ-がくは 荊楚學派【名】支那の學問の、老子の系統を引けるもの。(鄒魯學派に對して)

けい-そく 繫束【名】**一**しばること。つかぬること。束縛。**二**自由を得しめぬこと。束縛。

けいそく 雞足・鷄足【名】〔地〕**けいそくせん**(雞足山)の略。(續本朝文粹「雞足金縷之衣」)

けいそくのどう 雞足洞【名】印度の鷄足山の洞窟。

けいそくせん 雞足山)參照。平家「かの摩訶迦せふの、雞足のほらにこもつて」

けい-そく 繫屬【名】つながりつくこと。かかりつくこと。つなぎつくること。かけつづくること。

けい-そく 傾屬【名】心を寄せて慕ふこと。

けい-ぞく 繼續【名】**一**つづくこと。つづくること。つなぎ。繼承・持續。**二**あとをうけつぐこと。繼承。

けい-そくえん 輕測鉛【名】『英Hand lead』測鉛の一。輕鉛を附けたるもの。淺海の測量に用ふ。(重測鉛に對して)

けいぞく-かうかい 繼續航海【名】〔法〕『英Continuous voyage』戰時禁制品の輸送又は封鎖違反の企圖ある船舶が、仕向地として、敵港又は封鎖港に直に航海する危險を避くるために、先づ一中立港より一中立港を仕向地として航海し、次いで目的の港に航する場合に、この二航路を單一の航路と看做すこと。連續航海。

けいぞくかうかい-しゅぎ 繼續航海主義【名】〔法〕『英Theory of continuous voyage』海上戰時公法にて、封鎖・衝破もしくは戰時禁利品の輸送につきて行はるる一種の解釋法。連續航海主義。前條參照。

けいぞく-きふふ 繼續給付【名】〔法〕繼續せる時間を要する給付。(一時給付・複雜給付に對して)

けいぞく-じ 雞足寺【名】**一**下野國足利(シガ)郡小俣(オマタ)村雞足山の麓にある眞言宗の寺。佛手山と號す。關東檀林の一。意教派の本寺。本尊は五大明王。朱雀天皇の御祈願所たり。**二**近江國伊香(カゴ)郡高時村にある天台宗の寺。已高山と號す。本尊は十一面觀音。行基菩薩の創立。舊稱、東光山・常樂寺。「じ。

けいぞく-し 繼續齒【名】つぎば(繼齒)に同

けいぞく-しだ 【名】〔植〕**ねのもさう**(井邊草)に同じ。

けいぞく-しゃいん 繼續社員【名】〔法〕『英Continuing partner』合名會社又は合資會社にて、解散の事由發生の時、合名會社にては社員の全部又は一部、合資會社にては無限責任社員の同意を得て、會社を繼續せる社員。業務繼續社員。

けいぞく-せん 雞足山【名】〔地〕『梵Kukkuṭapāda 屈屈吒波陀の譯語』印度、伽耶(ガヤ)城の東南にある山。迦葉(カショウ)この山の洞窟に入定(ニュウジョウ)し、如來附屬の金襴衣を奉持して、彌勒(ミロク)出世を待つといふ。狼跡山(ラクソクセン)。雞峯。雞嶺。梵花「今は雞足山の古き道には、竹茂りて、人の跡も見えず」

けいぞく-せんいう 繼續占有【名】〔法〕『英Continuing possession』前後兩時の間における占有成立の要素、即ち自己のためにする意思と物の所持との繼續して存在せる時の占有。前後兩時において占有をなしたる證據ある時は、その間占有を喪失したる反證の生ずるまでは、證明なくとも、繼續占有者と見做さるるものにして、その効果は、取得時効の基礎となるにあり。

けいぞく-ちえき 繼續地役【名】〔法〕『英Continuing servitude』間斷なく要役地の上に行はるる地役。例へば水道の如き、一たび敷設したる後は、水はその水道により絕えず要役地より流れ來り、特に人の行爲を必要とすることなき類。(不繼續地役に對して)

けいぞく-ちえきけん 繼續地役權【名】〔法〕前條に同じ。(不繼續地役權に對して)

けいそく-どう 鷄足洞【名】「雞足の洞(ほら)」に同じ。盛衰記「迦葉尊者の、鷄足洞に入り」

けいぞく-とりひき 繼續取引【名】〔商〕**くりこしとりひき**(繰越取引)に同じ。

けいぞく-にっすう 繼續日數【名】〔商〕『英Running days』傭船契約において、碇泊日數を定むるに當り、繼續せる日數を以て積込をなし、大祭日・日曜等も碇泊日數中に算入するもの。

けいぞく-はふ 繼續法【名】〔哲〕事物を回想するに、鏈鎖の如く、前後相接して、その序を誤らずおもひおこす法。

けいぞく-はん 繼續犯【名】〔法〕『英Continuing crime』犯罪が已遂狀態に達したる後、なほその狀態の繼續するもの。例へば服飾僭用罪の如きは、僭用の行爲あると同時に、已遂に屬すれども、その僭用行爲の繼續する間は、犯罪は已遂の狀態において繼續する類。又、一般に不法監禁罪の如きも、その一種とせらる。(即時犯に對して)

けいぞく-はんさい 繼續犯罪【名】〔法〕前條に同じ。

けいぞく-ひ 繼續費【名】豫算中、數年度に亘りて支出すべき經費。豫算は、原則として、毎年更新すべきなれど、工事その他の事業にて、數年に亘り繼續して經費を支出する必要ある場合に、豫め年限を定め、これに要する費用の全額を議決するなり。

けいぞく-ほけん 繼續保險【名】一定の期間同一の契約にて、同種の保險を幾度も契約するもの。

けいぞく-ほけんしょうけん 繼續保險證券【名】『英Running policy』一定の期間、同一の契約書にて、同種の繼續保險を幾度も契約する證券。即ち一回の契約ごとに證券を發行する手數を省くために、毎回その事項の確定せるものだけを被保險者より保險者に通告し、同時に保險證券に裏書して、契約の成立を證するもの。

けいぞく-をんよく 繼續溫浴【名】〔醫〕患者を、湯中に數日間、晝夜連續して入浴せしむること。

けいそ-さいじき 荊楚歲時記【名】〔書〕荊楚間の年中行事を記せるもの。一卷。支那梁の宗懍(リン)の撰。

けい-そつ 輕率【名】しわざのかろがろし

きこと。かろはづみ。

けいそつ 軽卒【名】■身がるに扮(ヨソホ)ひたる兵卒。■身分の軽き兵卒。「ヒ。

けいそつ 勁卒【名】きやうそつ(強卒)に同じ。

けいだ 鯨蛇【名】■物に驚きたる蛇。■草書の書體のすぐれたるにいふ語。驚龍。「張旭の草書は、驚蛇の草に入り、飛鳥の林を出づるが如し」

けいだ 圭垛【名】(數)和算にて、杉形(スギナリ)に積重ねたる形の稱。この總數を算出するには、例へば下の(甲)圖のごとき杉形においては、最下層の數四とこれに一を加へたる數五との相乗積を二分すれば可なる類。その理は、(甲)圖の白點の外に、黒點を加へ、(乙)圖のごとき形に改めて考ふれば了解せらるべし。

(甲)
○○
○○○
○○○○
○○○○○

(乙)
●○
●●○
●●●○
●●●●○

(だ)(け)(い)

けいたい 繼體【名】正統を嗣ぎて、天下の位に即かせ給ふこと。けいてい。正統記「父のみかど、繼體のために顧命しましましけるにこそ」「ぎやうたい。

けいたい 形體【名】なりかたち。すがた。

けいたい 形態【名】かたち。なり。ふり。やうす。

けいたい 景體【名】ありさま。容子。盛衰記「容貌花美にして、景體優美なり」

けいたい 携帯【名】たづさふること。ともなふこと。

けいたい 敬待【名】あつきもてなし。款待。優遇。「と。傾敗。

けいたい 傾頽【名】かたむきくづるること。

けいだい 瓊臺【名】玉のうてな。立派なる宮殿。瑤臺。

けいだい 境内・竟内【名】■さかひのうち。しきりのうち。(境外に對して)■社寺の敷地の内。

けいたい-がく 形態學【名】『英 Morphology』■(生)生物の機關の外形、及びその形の因つて起る所以を論ずる學問。外部形態學と内部形態學とに分つ。■(鑛)けっしやうがく(結晶學)に同じ。

けいたい-きぐ 携帯器具【名】(兵)歩兵及び工兵の背嚢に裝著して携行する工具。その種類は、歩兵のは方匙・小十字鍬・小斧・疊鋸・工兵のは圓匙・十字鍬・斧・手斧・鉈・鋸・疊鋸等にて、歩兵は中隊の約半員、工兵は全員、少なくとも、その一箇を携帯す。

けいたい-くわへい 携帯火兵【名】(兵)携帯兵器の一。即ち一人の力にて容易に使用し得べき火兵。例へば歩兵銃・騎銃・拳銃などの類。

けいたい-とうりやう 携帯口糧【名】(兵)携行糧秣の一。各自の携帯する糧食。

けいたいさう 輕體操【名】徒手又は輕くして使用し易き器具を用ひて行ふ體操。その他、すべて一時に力量を要すること比較的少なくして、動作の敏捷を主とする種類の體操。學校生徒等の行ふ普通體操の類。輕捷運動。輕捷體操。(重體操に對して)

けいだい-しや 境内社・竟内社【名】他の神社の境内にある神社。

けいだいち 境内地・竟内地【名】神社・佛閣の敷地。社寺の敷地。

けいたい-てんわう 繼體天皇【名】(人)第二十六代の天皇。御名は男大迹(ヲホド)皇、又、彦太(ヒコフト)尊。應神天皇の曾孫彦主人(ヒコウシ)命。在位二十五年(紀元一一六七年—一一九三年)。即位の二十五年崩ず。壽四十三。一説に、八十二。

けいたい-でんわき 携帯電話機【名】『英 Portable telephoneset』電話機の一。線路障碍修理のために派遣せられる工夫、又は敵情偵察の任務を帯ぶる兵士等が、隨所假に通話し得るため、機具の一切を一箇の箱に收めて、負革を附け、隨所に携帯するに便せるもの。

けいたい-ばりやう 携帯馬糧【名】(兵)携行糧秣の一。各馬の携帯する馬糧。

けいたい-ひん 携帯品【名】携帯せる品。所持品。

けいたいふ 卿大夫【名】卿と大夫と。

けいたう 傾倒【名】■傾きたふること、又傾けたふすこと。■さかさにして、中なる物を出し盡すこと。■深く傾慕すること。傾瀉。「と。

けいたう 敬禱【名】つつしみていのること。

けいだう 啓道【名】せんだう(先導)に同じ。

けいたう 藝當【名】■げいごと。げい。演藝。■仕組みてなす事柄。殊更に巧みてなす行爲。所業。

けいだう 藝道【名】わざのみち。技藝。

けいだう-くわん 敬道館【名】尾張國丹羽(ニハ)郡犬山町に在りし舊犬山藩の學校。天保十一年の創立。

けいたく 恵澤【名】めぐみ。恩澤。

けいだく 輕諾【名】かろがろしく承諾すること。やすうけあひ。「上。

けいたつ 啓達【名】申し入るること。啓上。

けいだつ 閨闥【名】■ねや。ねま。寢室。■官女の部屋。つぼね。

けいだつ 廻脫【名】『廻は竟に通じ、逸の義』言句の外に超出せること。

けいたん 雞蛋・鷄蛋【名】にはとりのたまご。又その白味(シロミ)。

けいたん 雞旦・鷄旦【名】■けいしん(雞晨)に同じ。■正月元旦の異稱。元旦。けいじつ(雞日)參照。

けいたん 敬憚【名】うやまひはばかること。「と。

けいたん 敬歎【名】うやまひ歎息すること。

けいたん 輕煖【名】■少しあたたかなること。輕煖。■衣服の輕くして暖きこと、又その衣服。

けいだん 雞壇・鷄壇【名】『北戸錄に「越人毎ニ相交ニ作レ壇、祭以ニ白犬・丹雞一」とあるに本づく』友人の相會するところ。

けいたんくわ-すゐそ 輕炭火水素【名】(化)めたんに同じ。

けいたん-しよ 檢斷所【名】けんだんしよ(檢斷所)に同じ。吉野拾遺「うたへ人は早く參りて、けいだん所に待ち給ひけるほどに、大理の康材を尋ねさせけれども」

けいち 辰子【名】けいし(辰子)に同じ。幸若舞曲(景清)「はいたりけいちを、とある所にぬぎすて」

けいち 境致【名】一境の風致。

けいち 景致【名】おもむき。風致。風趣。

けいち 携持【名】たづさへもつこと。提攜。

けいちう 瓊廚【名】玉にて造れる器物のみを用ひて食事をすること。

けいちつ 啓蟄・驚蟄【名】『蟄の字の音、正しくはちふ。蟄蟲の這出づる氣候の義』二十四節の一。太陽の黄經三四五度に當れる時にして、太陰曆にては二月、太陽曆にては三月六日前後に來るを常とす。

けいちつ 敬昵【名】うやまひ親しむこと。

けいちふ 啓蟄【名】けいちつ(啓蟄)に同じ。

けいちん 警枕【名】『吳越備史に「在レ軍未レ嘗レ睡、末年用ニ圓木一、作レ枕、熟睡則欲レ名ニ警枕一」又、書言故事に「宋司馬溫公、以ニ圓木一爲ニ警枕一、纔睡則枕轉而覺、乃起讀書」とあり』熟睡を防ぐための枕。即ち圓き木などを枕とし、眠れば、ただちにころがりなどして、目覺るやうにせるもの。

けいぢん 啓陣【名】中古、立后・立太子の儀ありし後の始めての行啓に、六衞府の官人の護衞に立ちしこと。陣。けいしよう(啓將)けいしよ(啓所)參照。

けいちやう 計帳【名】だいちやう(大帳)に同じ。

けいちやう 敬聽【名】「と。謹聽。

けいちやう 傾聽【名】つつしみて聽くこと。耳をかたむけて聽くこと。注意して聽くこと。

けいちやう 慶長【名】後陽成天皇の御代の年號(紀元二二五六年—二二七五年)。

けいちやう 慶長の地震【句】慶長年間における二回の大地震、即ち慶長元年閏七月十二日における山城・攝津・和泉等の諸國のと、同九年十二月十六日における上總安房・武藏・相模等のと。殊に、前者は「地震加藤」の狂言にも仕組まれて有名なり。

けいちやう 刑場【名】死刑を執行する場所。しおきば。

けいちやう-いちぶきん 慶長一分金【名】

刑場の露と消ゆ【句】次條に同じ。

刑場の露となる【句】死刑に處せられて死す。刑死す。刑場の露と消ゆ。

次條に同じ。「次條の略。

けいちやう-いちぶばん 慶長一分判【名】

けいちやう-いちぶばんきん 慶長一分判金【名】江戸幕府の通貨の一。慶長六年より元祿年間まで通用せる一分判金。大いさは、縦五分五厘・横三分強なると、縦六分強・横三分五厘なると、縦五分五厘・横三分強なるとの三種ありて、表面に桐章と「一分」の字とを有し、裏面に光次花押の文を有す。その十兩は慶長小判金十兩と價格同じ。慶長一分判。慶長一分金。

けいちやう-えどざこばん 慶長江戸座小判【名】次條の略。

けいちやう-えどざこばんきん 慶長江戸座小判金【名】けいちやうこばんきん(慶長小判金)を見よ。「の略。

けいちやう-おほばん 慶長大判【名】次條

けいちやう-おほばんきん 慶長大判金【名】江戸幕府の通貨の一。慶長六年より元祿年間まで發行せる大判金。大いさは、縦四寸八分五厘・横三寸四分五厘弱なると、縦四寸七分五厘・横二寸九分なると、縦四寸八分・横二寸九分五厘なるとの三種ありて、表面に「十兩後藤」の四字並びに花押を書き、表・裏共に桐章を有す。慶長大判。

けいちやう-きん 慶長金【名】慶長大判金。慶長小判金・慶長一分判金の總稱。**けいちやうきんぎん(慶長金銀)**參照。

けいちやう-ぎん 慶長銀【名】慶長豆板銀。慶長丁銀の總稱。**けいちやうぎんぎん(慶長金銀)**參照。

けいちやう-きんぎん 慶長金銀【名】江戸幕府の通貨の一。慶長六年以後約九十四年間、江戸幕府の發行せし貨幣、即ち慶長大判金・慶長小判金・慶長一分判金・慶長丁銀・慶長豆板銀の總稱。爾後の貨幣に比し、品質の優劣なるを以て珍重せらる。

けいちやう-きやうざこばんきん 慶長京座小判金【名】けいちやうこばんきん(慶長小判金)を見よ。

けいちやう-くわつじぼん 慶長活字本【名】慶長年間に、木製又は銅製の活字にて印刷せし書物。**けいちやうぼん(慶長本)**參照。

けいちやう-けんもんしふ 慶長見聞集【名】〔書〕慶長ごろの江戸の雜事を記したる隨筆。十卷。三浦浄心の著。「略。

けいちやう-こばん 慶長小判【名】次條の

けいちやう-こばんきん 慶長小判金【名】江戸幕府の通貨の一。慶長六年より元祿年間まで、江戸に江戸座、京都に京座、駿河に駿河座ありて鑄造發行せし小判金の總稱。大いさは多少の差あり。江戸判。慶長小判。慶長江戸座小判。慶長江戸座小判金。

けいちやう-ざん 鷄頂山【名】〔地〕下野國鹽谷(ヤシホ)郡の中央、鹽原温泉場の南にある山。高原(ハラ)火山群中、最も西方にある一峰。高さ五二一四尺。別稱、高原山。

けいちやうし 計帳使【名】だいちやうし(大帳使)に同じ。

けいちやう-するがこばんきん 慶長駿河小判金【名】次條に同じ。

けいちやう-するがざこばんきん 慶長駿河座小判金【名】けいちやうこばんきん(慶長小判金)を見よ。

けいちやう-ちやうぎん 慶長丁銀【名】江戸幕府の通貨の一。慶長六年發行せし丁銀。形、海鼠(ナマコ)の如くにて、大小・輕重一ならざれども、概ね縦二寸六分五厘・横一寸・重さ四拾三匁内外にして、極印に、「常是」・「寳」の文字及び大黒像などあり。品位は、百分中、銀八十分・銅二十分の比といふ。

けいちやう-ちよくばん 慶長勅版【名】けいちやうばん(慶長版)を見よ。

けいちやう-つうはう 慶長通寳【名】次條に同じ。

けいちやう-つうはうせん 慶長通寳錢【名】江戸幕府の通貨の一。慶長十一年に發行せる銀錢と銅錢と。前者は徑七分五厘・弱・重量一匁一分強、後者は徑七分五厘・重量六分二厘、文に「慶長通寳」とあり。

けいちやう-ねんぢゆうき 慶長年中記【名】〔書〕いたさかぼくさいおぼえがき(板坂卜齋覺書)に同じ。

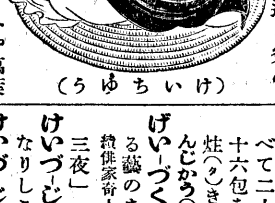
けいちやうばん 慶長版【名】慶長年間に出版したる書籍。文祿征韓の役に、活版の朝鮮より傳はり、出版の事、年を逐うて隆盛に赴き、その内、後陽成天皇の勅に因れるを、特に慶長勅版といひ、その他、徳川家康の出版せしめしもの、民間の商人の開版せしもの等あり。多くは活字本なるにより、慶長活字本の名なり。

けいちやう-まめいたぎん 慶長豆板銀【名】江戸幕府の通貨の一。慶長六年に鑄造發行せし豆板銀。大小・輕重一ならず。極印及び品位は、慶長丁銀に同じ。

けい-ちゆう 閨中【名】ねやのうち。ふしどのうち。

けいちゆう 閨中の祕戯【句】男女の交合。房事。

けいちゆう 契沖【名】〔人〕學僧。名は空心、俗姓は下川。高野山に登りて佛道を究め、大阪生玉(イクタ)の曼陀羅院・攝津國今里の妙法寺に住し、老母の死後、高津(カウヅ)の里に小庵を結び、圓珠庵といふ。佛學の傍、國學を好みて、造詣深く、最も語學に精しく、又和歌を善くす。萬葉集代匠記(水戸義公の嘱に依り、下河邊長流の遺業を繼ぎしもの)・和字正濫抄等の著あり。元祿十四年寂す。年六十二。


(うゆちいけ)

けい-ちゆう 傾注【名】一 器を傾けて、中に在る液をこぼすこと。「百千の金を傾注す」 二 或事に心を集中すること。專心に事に當ること。

けい-おゆう 輕重【名】かろきと、おもきと。かろんずると、おもんずると。

けい-ちよう 輕重【名】前條に同じ。

けい-ちよう 敬重【名】うやまひおもんずること。尊重。

けい-ちようえき 輕懲役【名】〔法〕舊刑法における懲役の一。六年乃至八年の間、內地の獄に入れて、定役に服せしめしもの。(重懲役に對して)「直。

けい-ちよく 勁直【名】剛毅にして正直。剛

けい-おようう 藝女郎【名】遊藝に達したる女郎。曾我扇八曳竹を吹き、糸を彈くこと、藝女郎と分明なり」

けい-づ 系圖【名】一 先祖より、代代の系統を書きしるしたる表(ヘウ)。うちぶみ。系譜。譜圖。譜牒。家譜。 二 らいれき。ゆゐしよ。狂言「音曲猿」「これも、よほどのけいづもや。さらば、身どもがけいづを語って聞かさう。よう聞かしめ」

けいづ-かう 系圖香【名】「もと源氏香と呼びしも、中古十組の源氏香始まりてより、この香は試香を後に焚きて本香を知ること、子孫より祖先を求むるに似たる故に名づけたりといふ」組香(クミカウ)の一。古十組の一式。四種の香を、各種五色づつ、都らす べて二十包になし、內四包を試香とし、殘十六包を打交ぜ、その內より四包取出して炷(タ)き、つぎに試香を炷きて行ふもの。げんじかう(源氏香)參照。

げい-づくし 藝盡【名】互に身におぼえたる藝のあらん限りをあらはしあふこと。錢佛家奇人談「柿に六つ藝づくしあり十三夜」

けいづ-じまん 系圖自慢【名】先祖の立派なりしことを自慢すること。

けいづ-じやうご 系圖上戸【名】酒に醉ひて、系圖自慢をなすこと、又その人。

けいづ-しり 系圖知【名】一 系圖に精しき者。 二 諸家の系圖を妄りに僞作する者。

けいづ-だて 系圖立【名】やもすれば系圖を云ひたてにすること。曾我會盤山「その時時の身の程知らぬ無用の本田が系圖立」

けい-つゐ 頸椎【名】〔醫〕脊椎骨中の、最上にある七箇の椎骨より成れるもの。胸椎の上部、後頭骨の大後頭孔の下部に在り。

けいつゐしんけい 頸椎神經【名】〔醫〕頸椎の各側より發する八對の脊髓神經。

けい-つゐほう 輕追放【名】江戸幕府の刑罰の一。追放の犯人の居住地及び犯罪地の外、江戸十里四方・京・大阪・東海道驛路・日光及び日光驛路等の地に入るを禁じ、なほ屬刑として、家財を除く外、田畑・家屋敷の缺所を科せしもの。

けいてい 徑庭・逕庭【名】『逕路と中庭とは偏正殊絶するによりていふとも、逕は門前の路、庭は堂外の地、その間隔あるに因るとも、又、逕は狹く庭は廣きに因るともいふ』かけちがひたること。似寄らざること。相違あること。懸隔。

けいてい 兄弟【名】あにと、おとうとと。きやうだい。

兄弟、牆(カキ)に鬩(イテ)ぐ【句】『詩經の小雅棠棣篇に「兄弟鬩二于牆一、外禦二其務一」とあるに本づく。務は侮に通ず』兄と弟と又は仲間どうしが、互に爭ふ。

兄弟は左右の手の如し【句】『後漢書に出づ』兄弟は、相依り相助けて離るべからず。兄弟(ダイヤウ)は兩の手。〔諺語〕

兄弟は手足たり【句】『莊子に「兄弟爲二手足一、夫婦如二衣服一、衣服破時更得レ新、手足斷時難二再續一」とあるに本づく』兄と弟とは、我が身の手足のごときものにて、一度失へば、再び得る能はず。〔諺語〕

けいてい 輕艇【名】けいか(輕舸)に同じ。

けいてい 繼體【名】けいたい(繼體)に同じ。曾我「彼れは繼體相ぶんの器量なり」

けいてい 繫釘【名】ぼるとに同じ。

けいてい 京兆【名】『支那漢の代に、京兆・左馮翊(ヨクヒツ)・右扶風を三輔と稱し、帝室の輔翼とし、京兆は長安縣等凡そ十二を領せしに倣へる稱。兆の義は、韻會に「京兆、兆者衆數言二大衆所レ在也」とあり』左京職(キン)・右京職の唐名。

けいてう 憩潮【名】〔地〕けいすゐ(憩水)に同じ。

けいてう 輕佻・輕窕【名】かるはずみにて、眞面目ならぬこと。輕忽。輕率。

けいてう 慶兆【名】きつてう(吉兆)に同じ。

けいてう 慶弔【名】■慶ぶべき事と弔ふべき事と。慶事と凶事と。吉凶。■めでたき事には賀し、凶事にはくやむこと。

けいてう-しろく 京兆司錄【名】左京進右京進の唐名。

けいてう-せうねん 京兆小尹【名】左京亮(ケス)右京亮の唐名。

けいてう-の-ねん 京兆尹【名】左京大夫(ミ)右京大夫の唐名。

けいてう-ろくじ 京兆錄事【名】左京屬(サクワン)右京屬の唐名。

けいてき 警笛【名】警戒のために鳴らす笛。〔誘〕

けいてき 啓迪【名】ひらき導くこと。啓誘。

けいてき 勁敵【名】つよき敵。强敵。

けいてつ 輕鐵【名】けいべんてつだう(輕便鐵道)の略。

けいてん 刑典【名】刑罰に關する法典。

けいてん 經典【名】■一定不變の法式・道理。■けいよ(經書)に同じ。

けいてん 經傳【名】『でん(傳)四を見よ』經書と先賢の解說と。

けいてん 驚天【名】次條を見よ。

けいてん 驚天動地【句】『天地を驚動する義』天地を驚かすほど、めざましき功業をたつること。きやうてんどうち。

けいてん 桂殿【名】美しき宮殿。金殿。

けいてん-き 繼電器【名】『英 Relay』電信・電話の受信器の一部。距離遠きために弱くなる電流の力を補ふ、電磁石應用の裝置。即ち甲局より來る電流は、乙局の繼電器の電磁石を經て地に入り、その際、乙局の受信部なる電池と、受信器との電路を閉ぢて受信せしむ。

けいてん-くわ 景天科【名】〔植〕べんけいさうくわ(景天科)に同じ。

けいてん-しやくし 經典釋詞【名】〔書〕西漢以前の書の助語を解釋せるもの。十卷。支那清の王引之の撰。

けいてん-しやくぶん 經典釋文【名】〔書〕漢・魏・六朝及び唐初の諸家を援引して、周易・古文・毛詩・儀禮・禮記・春秋左氏傳・同公羊傳・同穀梁傳・孝經・論語・老子・莊子・爾雅の音切・訓話を蒐載せるもの。三十卷。支那唐の博士陸德明の撰。清の盧文弨(ロブン)は、これに基づきて、經典釋文考證三十卷を著せり。

けいてん-しやくぶん-こうしよう 經典釋文考證【名】〔書〕前條を見よ。

けいてん-よし 經典餘師【名】〔書〕四書の讀方と講義とを記したるもの。十卷。溪(ケイ)百年の著。

けいと 毛絲【名】獸毛を絲の如くよりたるもの。編物などに用ふ。

けいと 鷄頭・雞頭【名】〔植〕けいとう(鷄頭)の訛。

けいと 刑徒【名】處刑せられたる者。刑餘の人。

けいと 計圖【名】はかりごと。もくろみ。くはだて。畫策。計畫。

けいと 計都【名】けいせい(計都星)の略。

けいど 瑩土【名】えいど(塋土)の誤讀。

けいど 勁弩【名】きやうど(强弩)に同じ。

けいど 經度【名】〔地〕『英 Longitude』一地點の地球上における位置を定むる座標の一。即ちその地點を通過する經線の、或一定の基準となる經線よりの角距離。基準たる經線より東に測るを東經、西に測るを西經といひ、各百八十度に至る。緯度に對して)ほんしよしせん(本初子午線)參照。

けいど 輕土【名】〔農〕砂分多きため、粘氣(ネバリ)少なくして、耕しやすき土壤。例へば砂土・灰土の類。

けいど 硅土【名】〔化〕むすんけいさん(無水硅酸)に同じ。

けいど 傾度【名】■傾斜したる度合。■〔地〕地層の傾斜の度。一直線に傾斜すること少なく、左右・上下に屈曲せること多きが故に、一小部分の傾度を局部傾度といひ、全部に亘り、平均を取りたるを平均傾度といふ。傾斜度。けいしや(傾斜)■參照。

けいど 奚奴【名】『奚は僕・嫁に通じ、僕隷の義』しもべ。下男。

けいと 【名】『けいとうの訛か』さまたげ。邪魔。

けいど 鼷徒【名】古、支那にて、刑を受け、面部に入墨(イレズミ)せられて、奴となれる者。

けいとう 系統【名】■一族間の血統。ちすぢ。■順序を追ひてつづくこと。すぢみち。■〔哲〕『英 system』幾多の部分が、一原理によりて統一せられ、聯絡的關係を保ちて一全體をなせるもの。例へば結晶體の一定の形に配列せられたる科學的知識の、一定の原理にて統一せられたる等。體系。組織。統制。統態。

けいとう 恵投【名】人より物を贈られることの敬稱。惠贈。「同じ。

けいとう 圭竇・閨竇【名】けいゆ(圭竇)に同じ。

けいとう 挂燈【名】燈火をかくること。

けいとう 繼統【名】皇位を繼承すること。

けいとう 雞頭・鷄冠【名】■鷄の頭。■〔植〕莧(ヒユ)科に屬する一年生の草。原産地は熱帶地方。高さ一尺乃至數尺に達し、莖は赤くして平滑、葉は互生し、卵狀又は心臟狀卵形にして、先端鋭し。秋の頃、往往幅數寸に達する鷄冠狀の花を開き、その色紅なるを普通とすれど、又、紫・黃等あり。古來、各國に栽培せられ、從つて變種も少なからず。からあゐ。けいとうげ。芭蕉・雞頭や雁の來る時なほ赤し」



(けいとう)

けいとう 【名】ひそかに淫を鬻(ヒサ)ぐものの所に不意に押入りて、捕ふること。〔江戸時代の語〕入代目桃太郎「なじみのうちへけいどうに行つたやうで、どうにもしにくいとて」

けいとう-かいばうがく 系統解剖學【名】〔醫〕『縱 Anatomia systematica』解剖學の一。人體の構造を、類別に從つて論證する學科。

けいとう-きんらん 鷄頭金襴【名】紫地の金襴。鳶色に見ゆる雞頭一房づつ立て、地合荒く振れて、雲齋織の如し。

けいとう-げ 雞頭花【名】〔植〕けいとう(雞頭)■に同じ。

けいとう-てき 系統的【形】『英 Systematic』系統あるさま。組織的。

けいとうてきはつせい 系統的發生【名】〔生〕けいとうはつせい(系統發生)に同じ。個體的發生に對して)

けいとう-にく 雞頭肉【名】『楊妃外傳に「楊妃出レ浴、…露二一乳一、明皇捫弄良久、軟温新剝二鷄頭肉一、安祿山在傍、對曰、潤滑由來塞上酥、妃笑曰、信是胡兒只識レ酥」とある

に本づく』美人の乳房。

けいとう-はっせい 系統發生【名】〔生〕『英 Phylogeny』生物がその最初の祖先よりして、漸次進化・分岐し來りし進程。系統的發生。(個體發生に對して)

けいとうふへう 挂燈浮標【名】瓦斯或は石油を點燈する裝置の浮標。一度點火すれば、數十日間燈火を持續す。

けいどうみやく 頸動脈【名】〔醫〕動脈弓より發して、頭部に達する一對の太き動脈。內頸動脈と外頸動脈とに分つ。

げいとうゆ 鯨頭油【名】『英 Junk』抹香鯨(ハクカダ)の頭蓋窩中にある油。空氣に觸るれば、雲母狀の白片結晶となる。**げいなうゆ**(鯨腦油)參照。

けいとぎ 雞頭花・鷄頭花【名】〔植〕**けいとう**(雞頭花)の誤。

けいどく 煢獨・惸獨【名】『煢は單獨依る所なき義、又、兄弟無きを惸といひ、子孫無きを獨といふと解すれど、煢と惸とは畢竟同字なり。惸獨の字面は、詩經の小雅正月篇に見え、孟子に、詩を引きて、煢獨と記せり。**けいけい**(煢煢)參照』たよるところなきひとりもの。獨身者。孤獨。

けいどくてん 惸獨田【名】不輸租田の一。孤獨の者を賑恤するための官田。

けいとくゐん 景德院【名】甲斐國東山梨郡田野(ダノ)村にある曹洞宗の寺。天童山と稱す。武田勝頼この地に自盡し、今も勝頼同夫人及びその子信勝の墳墓あれど、荒廢して、舊觀なし。

けいとざいく 毛絲細工【名】毛絲にて物を造ること、又その作りたる物。

けいとし 經度時【名】〔地〕『英 Longitude in time』本初子午線と或一地點との間の經度の差を、時・分・秒に換算したるもの。

けいとせい 計都星【名】〔天〕・鼻星(ヘビボシ)宿にある星。支那にては九曜の一とし、兩手に日月をささげ、忿怒の相をそなへて、青龍に乘れる狀に描きなす。

けいとばうさき 毛絲紡績【名】獸毛を紡(ツム)ぎて、毛絲に作ること。

けいとばり 毛絲針【名】毛絲を編むに用ふる針。あみばう。

「同じ。

けいとん 輕噸【名】〔商〕**たんとん**(短噸)に同じ。

けいとん 雞豚・鷄豚【名】■にはとりとぶたと。■家畜の總稱。

げいとり 藝鳥【名】藝をなす鳥。娥歌加留多「この山雀(ヤマガラ)は…輪をくぐり、水を汲みさまざまの藝鳥」

けいなう 奚囊【名】『きんなう(錦囊)を見よ。奚は、娘僕に通じ、僕隷の意』しなう(詩囊)に同じ。

げいなうゆ 鯨腦油【名】『英 Spermaceti』鯨頭油より鯨蠟を取りたる殘りの油。透明にして淡黄色を呈し、紡績機・時計等に用ふる器械油とす。くぢらあぶら。

げいなし 藝無【名】技藝の心得なきこと、又その人。無藝(ムゲイ)。

げいなしざる 藝無猿【名】技藝の心得なき者を嘲りていふ語。浮世風呂「三味線は、湯舟の隅に屈み居る藝無猿の藏れ口」

げいに 【副】がいにに同じ。〔甲斐國の方言〕

けいにく 雞肉・鷄肉【名】にはとりの肉。

けいにっけるくわう 硅ニッケル鑛【名】〔鑛〕『英 Garnierite』ニッケル製造の原鑛。ニッケルの外、マグネシヤ及び硅酸を含み、纖維質にして綠色なる塊狀又は顆粒狀をなし、楸灘岩中に產出す。南洋ニュウカレドニヤ(New Caledonia)及び北米合衆國なるオレゴン(Oregon)に產す。

けいにん 繼任【名】任務を繼承すること。前任者のあとをうけつぐこと。

げいにん 藝人【名】■藝能に巧みなる人。即ち俳優・落語家・淨瑠璃かたり等。■遊藝を演ずるを、職業とする人。

けいにんしや 繼任者【名】繼任する人。

けいねん 頃年【名】『けいこく(頃刻)・けいじつ(頃日)參照』このとしごろ。としごろ。近來。近年。

けいねん 繫念・挂念・係念【名】**けねん**(懸念)に同じ。

げいのう 藝能【名】學び得たる藝又は能力、又その人。わざまへ。松風村雨東帶鑒「廣き都に二人とは、よも在原の行平卿。美男藝能色好」

けいば 競馬【名】區域を定め、その範圍內に於いて、人の乘りたる馬の速力を競ひ、勝負を決すること。うまかけ。かけうま。きほひうま。くらべうま。こまくらべ。非筒業平河內通「天の時到らず、競馬相撲の勝負にまけ」

けいば 桂馬【名】**けいま**(桂馬)■に同じ。

げいは 鯨波・鯢波【名】『祖庭事苑の四に「鯨常以二五月一就レ岸、生二數萬子一、至二八月一引レ子還レ海、鼓レ波成レ雷、噴レ水成レ雨」とあるに本づく』■おほなみ。激浪。鯨浪。

けいはい 輕輩【名】身分の輕き者。卑賤の者。

けいはい 敬拜【名】つつしみてをがむこと。かしぎつぶるること。傾頽。

けいはい 傾敗【名】かたむきやぶるること。

けいはい 迎拜【名】迎へて拜すること。

げいばいう 迎梅雨【名】三月に降る雨。

けいばいらく 傾杯樂【名】〔音〕大食調(イヂキテウ)の舞樂の一。支那唐の高祖の長孫無忌の作とも、唐の宣宗の作ともいふ。

けいはう 輕砲【名】〔兵〕陸軍にては、口徑九サンチメエトル以下、海軍にては、同十二サンチメエトル未滿の火砲。(重砲に對して)

けいはう 繫匏【名】『論語の陽貨篇に「子曰、吾豈匏瓜也哉、焉能繫而不レ食」とあるに本づく。匏瓜は、苦くして食ふに堪へざるが故に、人に採られず、何時までも垣根などに垂れ懸りてあれども、吾は匏瓜と同樣に、少しも人に益する所なくして空しく日を送るを得ずとの意』■柵にさがれる匏(ヒサゴ)。■空しく日を送ること。

けいはう 警報【名】■警戒すべき事件の報知用心のしらせ。■**ばうふうけいはう**(暴風警報)の略。

けいはう 警保【名】**けいほ**(警保)に同じ。

けいはう 競望【名】われがちに希望すること。あながちに要(モト)むること。

けいはう 警防【名】いましめふせぐこと。

けいばう 形貌【名】かたち。すがた。容姿。

けいばう 閨房【名】ねや。ふしど。

けいはう-きしやうてんばう 警報氣象電報【名】氣象局報の一。中央氣象臺より測候所に宛てて發送する、暴風雨警戒の電報。片假名八箇以內を列記す。

けいはう-しんがうへう 警報信號標【名】**ばうふうけいはうしんがうへう**(暴風警報信號標)の略。

けいはうばう 桂芳坊【名】平安城の大內裡にありし殿舍の一。朔平門內の東方、華芳坊の西。

けいば-かう 競馬香【名】組香(クミカウ)の一。中古十組中の一式。賀茂の競馬に擬して、赤馬に乘れる赤裝束の人形と、黑馬に乘れる黑裝束の人形とを、盤の左右に對立せしめ、連衆も雙方に分屬して、香を聞當てたる方は、その馬を進ませ、早く決勝點に入りし方を勝とする戲。

けいはく 輕薄【名】■物の輕く薄きこと。■人と交はりて、信實をつくさぬこと。心の篤實ならぬこと。輕佻浮薄。(重厚に對して)■退從(コンジュ)。せじ。女殺油地獄「まま父のわれら、輕薄らしうとめられず」 物櫓

けいはく 敬白【名】■つつしみてまうすこと。うやまって申すこと。■願文・書翰文などの結尾に用ふる語。「じ。

けいはく 啓白【名】**けいびやく**(啓白)に同じ。

けいばく 繫縛【名】■つなぎしばること。つなぎしばらるること。■運命又は罪業(ゴフ)にとらへられて、心身を苦しむること。げばく。

けいはく-ざけ 輕薄酒【名】甘くはなけれども、交際のために、餘儀なく飲む酒。我扁入扇「さればこの身も、今までつとめ、面白からぬ輕薄酒に氣がつきはて」

けいはく-し 輕薄子【名】次條に同じ。

けいはく-じ 輕薄兒【名】輕薄なる者。けいはくし。

けいばくぐみ 競馬組【名】昔、賀茂祭などの競馬にて、組合ひし人人。其鳥馬船とわかる松魚(カツオ)やけいばぐみ」

けいばくわい 競馬會【名】■競馬を行ふための會合。■(法)競馬の開催を目的と

する社團法人又は財團法人。業務に關しては、馬政長官の監督を受け、又、競馬の開催に必要なる建物と、一哩以上の馬場とを設備し、毎年、新馬四を加へ、四歳以上の馬のみにて、二回以上、定期競馬を行ひ、毎年度剰餘金の幾分を、產馬奬勵の目的に使用するを要す。明治三十九年に規定せらる。

けいはたて 毛岩蓼【名】〔植〕蓼科に屬する草。所在の山地に自生す。莖は高さ一二尺に達し、葉は披針形にて、裏に毛茸(コマカシ)密生し、白色を呈す。夏、淡紅の小花、穗狀花序をなして開く。うらじろたで。

けいはち 警八【名】『警視廳令第八號』を以て布告せられしよりいふ。淫賣の嚴重なる取締。(明治三十年前後の東京の俚語)

けいはちかぜ 警八風【名】前條の嚴重なる實施を、風の遍く到るに譬へていふ語。

けいはつ 啓發【名】『論語の、述而篇に「子曰、不レ憤不レ啓、不レ悱不レ發」とあり。啓はその意を開く義、發はその辭を達する義』智能などをひらくこと。開發。

けいばつ 警拔【名】ぬけいですぐれたること。奇拔。奇警・卓拔。

けいばつ 刑罰【名】〔法〕■刑と罰とをいふ。しおき。つみ。■國家が、犯罪者の法益を剝奪する制裁。主刑と附加刑とに分ち、又、生命刑・身體刑・自由刑・名譽刑・財產刑の五種に分つ。

けいばつ 輕罰【名】輕き刑罰。輕き科(カ)。「輕科。

けいばつけん 刑罰權【名】〔法〕犯罪者に對して刑罰を加ふる、國家の權能。

けいばつせん 刑罰錢【名】『私鑄の錢にて、鑄造の輩、皆刑罰にあひしよりいふ』は**ねくわえいせん**(跋寬永錢)の異稱。

けいばつにん 刑罰人【名】**さがにん**(科人)に同じ。(歐洲加留多總じて、刑罰人に槍・長刀を拔身にして嚴しく警固すること」

けいばつはふ 刑罰法【名】〔法〕一定の犯罪に對して、常に一定の刑罰を科することを規定せる法規。刑法■も、その一にして、その他の刑罰法令をも含む。刑律。

けいはつびやう 繼發病【名】一つの病氣の癒えたる後に、つづきて發する他種の病氣。後病。

けいはふ 刑法【名】■刑罰の法則。おきて。保元刑法限あることなれば」■〔法〕**けいじりつれいはふ**(刑事律令法)の略。(民法に對して)■〔法〕次條の略。

けいはふがく 刑法學【名】〔法〕刑法の原理又は適用を攻究する學問。

けいはふくわん 刑法官【名】明治元年閏四月に設置せられ、翌年七月廢止せられし七官の一。法律を總判し、監察・糺彈・捕亡・斷獄等を掌りしもの。

けいはふじむきよく 刑法事務局【名】明治元年二月に設置せられ、翌年七月廢止せられし七局の一。監察・糺彈・捕亡・斷獄・刑律等を掌りたり。

けいはふもん 敬法門【名】平安城の大內裡に在りし八省院の二十五門の一。西面し、章善門の南、章義門の北に在りしもの。

けいはふもんゐん 敬法門院【名】〔人〕**ふぢはらむねこ**(藤原宗子)に同じ。

けいはん 京阪【名】〔地〕京都と大阪と。

けいはん 京播【名】〔地〕『播の字の音、正しくは』京都と播磨國と。「の版木。

けいばん 罫版【名】罫紙を印刷するための版木。

けいばん 景盤【名】錦庭の一種。盤中に土を盛り、石と小樹とを排置し、假山を作れるもの。

けいばん 荊蠻【名】〔地〕『蠻は南方の夷の義』支那上代に、未だ漢族の文明に潤はざる夷民の住せし、楊子江以南の地域。**けいそ**(荊楚)參照。

けいばんがん 硅板岩【名】〔鑛〕『英 Lydian stone』硅石質の一種の岩石。石英の集合物にして、粘土・炭素・酸化鐵等を含有し、緻密・堅硬にして、暗黑色を呈し、板狀に剝げやすし。その純黑にして、質きはめて緻密なるものは、古、金銀の條痕を試みるに用ひられしより、試金石の名あり。紀伊國那智(ナチ)の海邊に產する那智黑(ナチ)も、また試金石と同質なり。

けいひ 桂皮【名】■桂(ケイ)の皮部を剝離したるもの。主成分は桂皮油にして、佳快なる香氣と辛甘なる味とを有す。食品の附加物に供せらるることあれども、多くは桂皮油・桂皮水・桂皮舍利別として用ふ。かつら。(桂心に對して)■〔植〕**けい**(桂)に同じ。

けいひ 經費【名】■經常の入費。定まりたる平常の費用。かかり。■經營に必要なる費用。いりめ。

けいひ 雞皮・鷄皮【名】■鷄の皮膚。■老衰して、皺の生じたる皮膚。「鷄皮・鶴髮」

けいひ 輕肥【名】■衣かろく、馬肥ゆること、又、輕く美しき衣と肥えたる馬と。輕裘と肥馬と。■贅澤なる生活を爲すこと。

けいひ 繫臂【名】ひぢに繫くること。

けいひ 繫臂の寵【句】『晉書に「武帝胡貴嬪名芳、鎭軍胡奮女也、帝多簡二良家子女一以充二內職一、自擇二美者一以綠紗一繫レ臂、芳既入選、…帝每有二顧問一不レ節二言辭一、輒侍御而答、進退方雅、有二專房之寵一」とあるに本づく』宮女が、君王より、特別なる寵遇を受くること。

けいひ 警備【名】いましめそなふること。かため。守備・警戒。

けいび 輕微【名】いささか。すこし。輕少。

けいび 藝備【名】〔地〕安藝國と備後國と。

けいびかん 警備艦【名】警備の役務に從事する軍艦。

けいびき 罫引【名】紙に罫を引くこと、又その用具、又その引きたる紙。けびき。

けいびきかい 罫引器械【名】斷線もしくは直線を平均に引く器械。

けいひしやりべつ 桂皮舍利別【名】桂皮の粉末に桂皮水を注ぎ、二日間しばしば振盪したる後、濾過して得たる液に、白糖を溶解せしめたる、類赤褐色の藥品。

けいひすゐ 桂皮水【名】蒸溜水に千分の二の桂皮油を混和し、振盪して得たる藥品。透明にして、微香を有す。月桂水。

けいびたい 警備隊【名】■警備の任に服する部隊。■〔兵〕重要なる諸島の警備に任ずる陸軍の常備隊。明治十九年はじめて對馬國に設置し、歩兵大隊より成り、對馬警備隊司令官の統率に屬す。

けいびたいく 警備隊區【名】陸軍管區の一。警備隊司令官の管轄區域。明治二十九年陸軍管區制定の際は、對馬・沖繩・佐渡その他數箇の諸島に定められしが、明治四十年に至り、對馬・沖繩の二箇所に改められたり。次條參照。

けいびたいくしれいくわん 警備隊區司令官【名】警備隊の司令官。管轄師團長に隷屬し、在島陸軍諸隊を統率して、この警備隊區內の警備・保護に任じ、且つ聯隊區司令官と同一の事務をも兼掌する軍職。對馬は第十二師團長、沖繩縣は第六師團長に隷屬す。前條參照。

けいびたいくちようへいくわん 警備隊區徵兵官【名】徵兵官の一。警備隊區司令官及び島司・郡長を以てこれに充て、警備隊區司令官を首座として、その區內の徵兵事務を執行するもの。

けいびたいくちようへいしよ 警備隊區徵兵署【名】警備隊區徵兵官がその徵募事務を取扱ふ所。

けいびたいしれいぶ 警備隊司令部【名】警備隊區司令官がその事務を取扱ふ所。對馬にては參謀・副官・部員・軍醫正・主計及び淮士官・下士・判任文官、沖繩には副官・書記の職員を置く。

けいひち 警蹕【名】次條に同じ。(古語)

けいひつ 警蹕【名】『警戒蹕止の義、卽ち蹕は道行く者を止めて、道を淸むる義』古、天皇の出御又は御膳を供ふる時、又は貴人の通行及び神事の時などに、聲をかけて、人人を警(イマシ)めて、先を拂ひしこと。下を向きて「おおしし・おし」又は「おし・おしし」などと云へりとぞ。今は「けいひつ」と字音のままに叫ぶ。さきばらひ。さきおふ(先追ふ)參照。盛衰記・警蹕など事事しくして、美美しき儀式なり」

けいひつ 勁筆【名】筆あたりの强きこと。つよき筆力。

けいひん 景品【名】主たる品物に添へて、賈客に贈る品。景物。

けいひん 罽賓【名】〔地〕『西域記卷三に「迦濕彌羅國、舊曰二罽賓一訛也」とあり』印度の

西北裔、ヒマラヤ山系中に在るカシミヤ(Kashmir 又は Cashmere)、即ち元のカシミラ(Kāśmira 迦濕彌羅・羯濕彌羅・迦濕弥羅 迦葉彌羅)國の古稱。西洋紀元第一世紀の頃、大月氏國の迦膩色迦(カニカ)王、この地に佛經の結集を行へり。盛衰記「彼罽賓國秋池澤渓流」

罽賓國の龍池 【句】罽賓國内にありて、阿羅婆樓(Aravala)龍王の棲みきといふ池。この龍、大雨を降らし、禾稻を流し、阿育王の時、大德末田底迦(Madhyantika)の爲に、敎化を受けたること、西域記に見ゆ。

けい-ひん 京濱 【名】〔地〕東京と横濱と。

けい-びん 慧敏 【名】智慧ありて、敏捷なること。さときこと。

げい-ひん 迎賓 【名】賓客を迎ふること。

けい-びやく 啓白 【名】〔佛〕■佛・神などに告ぐること、又その文、又は詞。けいはく。表白。 宇治「淨藏本尊に啓白して」■經文の小口ばかりを讀むこと。けいはく。

けいびやく-にち 啓白日 【名】〔佛〕かいびやく(開白)に同じ。

けいひゆ 桂皮油 【名】細末にしたる桂皮に食鹽水を加へ、蒸溜して得たる揮發性の油狀物。やや濃厚にして、澄明なる淡黃色を呈し、辛味と芳香とを有す。主成分は桂アルデヒドにして、藥用及び香料に供す。

けいひゆ(桂根油) 參照。

けいびらん 雞尾蘭・雞尾蘭 【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。葉は、根に六七葉簇生し、平行脈を有して、狹長なり。夏、花莖を抽きて、多く白色の花を開く。伊勢國・紀伊國などに多し。

けい-ふ 輕浮 【名】■輕くて、水に浮ぶこと。■輕跳・浮薄なること。輕薄。

けい-ふ 系譜 【名】けいづ(系圖)に同じ。

けい-ふ 繼夫 【名】二度めのをっと。

けい-ふ 繼父 【名】ままちち(繼父)に同じ。

けい-ふ 荊婦 【名】けいさい(荊妻)に同じ。

けい-ふ 契符 【名】わりふ。符節。

けい-ぶ 警部 【名】巡査の上に立つ警察官。判任官たり。

けい 頸部 【名】くびの部分。くびすぢ。

けい-ぶ 刑部 【名】刑部省(ギヤウブ)の唐名。

けい-ぶ 輕侮 【名】あなどり、かろんずること。けいべつ。

げい-ふ 黥布 【名】〔人〕支那前漢の豪傑。本姓は英。嘗て罪ありて黥せられしより、黥を姓とす。秦末に兵を起し、一たび楚の項羽に從ひ、終に漢に歸す。淮南王に封ぜられ、高祖の十一年に反し、翌年誅せらる。

けい-ふう 勁風 【名】冬の強き風。嚴風。

けい-ふう 輕風 【名】■そよそよと吹く風。■『爾雅』に「四時和謂二之景風一」とあり』四時の和風。■『淮南子の天文訓に「西南曰二景風一」、又、史記の律書に「景風居二南方一景者曰二陽氣道竟一」とあり』西南風とも南風ともいふ。

けい-ふう 惠風 【名】陰曆三月の異稱。

げい-ふう 藝風 【名】技藝の手法。げいぶり。 浮世風呂「體を動かさずにするのが昔の藝風よ」

けい-ふく 敬復 【名】敬(ケッ)んで返事すること。拜復。(書翰文の冒頭に用ふ)

けい-ふく 敬服 【名】敬ひて感服すること。

けい-ふく 圭復 【名】『論語の先進篇に「南容三復白圭一」とあり、白圭とは、詩經の大雅抑の篇の「白圭之玷、尙可レ磨也、斯言之玷、不レ可レ爲也」とある詩をいふ』他人よりの手紙を、再三くりかへして讀むこと。

けい-ふく 傾覆 【名】■くつがへること。くつがへすこと。顚覆。「國家傾覆の際」■亡び倒るること。亡し倒すこと。

けい-ふく 慶福 【名】めでたきこと。さいはひ。吉慶。

けい-ふく 輕服 【名】輕き衣服。「じ。

けい-ふく 輕服 【名】きやうぶく(輕服)に同じ。

けいふく-きゆう 景福宮 【名】朝鮮京城にある舊王宮の一。李王家の太祖の建築。豐太閤征韓の役、浮田秀家これを管し、師を班(カヘ)す時、これを燒きしが、我が國の慶應二年、攝政大院君、資を普く民間に强徵して再興に著手し、明治三年竣工し、明治二十九年まで、李太王の宮殿たりき。

けいぶ-しやうしよ 刑部尙書 【名】刑部卿(ギヤウブキヤウ)の唐名。

けいぶ-しゆじ 刑部主事 【名】刑部錄(ギヤウブサクヮン)の唐名。

けいぶ-じらう 刑部侍郎 【名】刑部大輔(ギヤウブタイフ)の唐名。

けいぶ-ちやう 警部長 【名】けいむちやう(警務長)の舊稱。

けい-ぶつ 景物 【名】■その時時の景致を添へて、賞觀すべき自然物、即ち月・雪・花の類。風物。■その折の興を添ふるに足る、珍しき物。 盛衰記「時のけいぶつたづねて、酒すすめ奉らん」■連歌・俳諧の點取の賞として與ふる品物。■けいひん(景品)に同じ。

四箇の景物 【句】〔文〕俳諧にて、花・郭公(ホトトギス)・月・雪の四つの物。

五箇の景物 【句】〔文〕俳諧にて、前條の四つの物に、紅葉を加へたる呼稱。

けい-ぶつ 輕物 【名】『稻穀よりも輕しといふ義』絹布などの類。かるもの。

けいふつ-くわすあそ 硅弗化水素 【名】〔化〕『英 Hydrofluosilicic acid』硅土・螢石及び濃硫酸を煖めて發生する弗化硅素を水に導き、又は弗化水素の溶液を硅土に加ふれば得る無色の二鹽基酸。

けいふ-てつだう 京釜鐵道 【名】朝鮮慶尙南道の草梁に起り、釜山・大邱(タイク)を經て、京城の西大門に至る鐵道。また支線に京仁線・馬山線あり。延長二七五哩。

けい-ふぼ 繼父母 【名】ままちちと、ままはは。

けいぶほ 警部補 【名】警部の見習として、その職を執る者。

けい-ふん 輕粉 【名】〔化〕えんくわだいいちすゐぎん(鹽化第一水銀)に同じ。

けい-ふん 瓊粉 【名】こうふん(紅粉)の美稱。太平記「紅顏翠黛は元來天のなせる質なれば、何ぞ必ずしも、瓊粉・金鈿の假なる色を事とせん」

けい-ふん 雞糞・鷄糞 【名】雞の糞。肥料に供せらる。

けい-ぶん 奎文 【名】『けい(奎)を見よ』學問。文物。「奎文大に興る」

けいぶん 景文 【名】〔人〕まつむらけいぶん(松村景文)を見よ。

げい-ぶん 藝文 【名】學藝。文物。文藝。

けい-ぶんがく 輕文學 【名】なんぶんがく(軟文學)に同じ。

けい-ぶんくわい 謦文會 【名】〔文〕佛像の彫刻家。河內國の人とも支那より歸化せる人ともいふ。神龜元年弟稽主勳と共に大和國長谷寺(ハセデラ)及び法隆寺の十一面觀世音、又、多武峰(タウノミネ)の彌陀三尊等の像を造れりと傳へらる。

げいぶん-るゐじゆう 藝文類聚 【名】〔書〕支那唐の歐陽詢等の勅を奉じて撰したるもの。天・歲時・地・州・郡・山・水・符命・帝王・后妃等の四十六門に類別して、各その事實を記し、卷末に、これに關せる詩文を擧ぐ。一百卷。

けいぶ-らちゆう 刑部郎中 【名】刑部丞(ギヤウブジヨウ)の唐名。

げい-ぶり 藝振 【名】げいふう(藝風)に同じ。 緣田兵衛名所盡「かねて親子言合せ…仕組の樣な合戰、藝ぶりが見どもなし」

けい-へい 啓閉 【名】■かいへい(開閉)に同じ。■立春・立夏と、立秋・立冬と。

けい-へい 勁兵 【名】■たけき兵士。勁銳なる兵。強兵。■輕銳なる兵器。

けい-へい 輕兵 【名】輕裝せる兵。

けい-へい 迎聘 【名】禮物を送りて、招きむかふること。

けいへいき 啓閉器 【名】海底水雷もしくは浮標水雷を視發・觸發の兩樣に兼用せんとする際、その上部に繫維して、同時に敷設する物。

けい-へいきん 輕弊禁 【名】〔法〕在監者に對する懲罰の一。罰室内に晝夜屛居せしむること。(重屛禁に對して)

けい-へう 警標 【名】警戒を要する旨を示せる標札。

けい-へう 輕剽 【名】へうけい(剽輕)に同じ。

けいへき 刑辟 【名】『辟も刑罰の義。たいへき(大辟)參照』つみ。とが。しおき。

げい-べし 藝減 【名】『金は藝減』を見よ。

けい-べつ 輕蔑 【名】かろんじ侮ること。ないがしろにすること。輕侮。

けい-べん 輕便【名】てがるにて便利なること。輕易。簡易。

けい-べん 輕鞭【名】かるきむち。

けい-べん 刑鞭【名】刑具として用ふるむち。太平記「虞芮(ぐぜい)の訴、たちまちに停まりて、刑鞭も朽ちはて、諫鼓も打つ人無かりけり」

刑鞭蒲朽(けいべんほきう)【句】『和漢朗詠集』なる小野國風(一説には大江朝綱)の「刑鞭蒲朽螢空去、諫鼓苔深鳥不驚」といふ詩に本づく。刑鞭を蒲にて造るは、即ち寛宥を示すもの。その蒲鞭の朽ちて用ふる所なきは、即ち輕微の罪をも犯す者無きためなり』世の太平に治まること。

けいべん-きどう 輕便軌條【名】『英 Light rail』軌便鐵道に使用する軌條。我が國にては、普通に、その重量、長さ一ヤアドにつき、三十ポンド以下なるものを指す。

けいべん-せうくわき 輕便消火器【名】携帶し得る程度の筒狀金屬製の器に、硫酸と炭酸ソオダとを入れおき、使用の際、それ等を化合せしむれば、炭酸瓦斯發生し、その壓力によりて、水を迸發せしめ、且つ含有瓦斯によりて、燃燒を防遏するやうにせる消火器。

けいべん-てつだう 輕便鐵道【名】『英 Light railway』軌間狹くして、その構造簡單なる鐵道。歐米にては、我が國に普通なる軌間三フィイト六インチのをも指していへど、我が國にては、これ以下なるを指していひ、地方における一部の交通機關として、又は工事中建設用の土砂・石材等の運搬用に敷設す。けいべんきどう(輕便軌條)參照。

けいべん-ぽんぷ 輕便喞筒【名】壓搾空氣を用ひ、一人の力にて、水を噴出せしめ得るやうにせる喞筒。金屬製の圓筒狀の器の下部に水を入れ、上部に仕掛けたる有瓣活栓を上下して、空氣を押込み、その壓力にて、水を噴出口より噴出せしむ。外部の形狀・大小等は、種種あり。

けい-ほ 警保【名】〔法〕警(いまし)めて、安を保つこと。即ち保安警察といふが如し。

けい-ぼ 景慕【名】あふぎ慕ふこと。欽慕。

けい-ぼ 敬慕【名】うやまひ慕ふこと。

けい-ぼ 傾慕【名】心を傾けてしたふこと。

けい-ぼ 繼母【名】**ままはは**(繼母)に同じ。太平記「われ少年の昔は母を失ひて、ながねんの今繼母に逢へり」

けい-ほう 雞峯・鷄峰【名】〔地〕**けいそくせん**(雞足山)に同じ。

けい-ぼう 計謀【名】はかりごと。たくらみ。謀略。計策。

けいほ-きょく 警保局【名】內務省中の一局。內務大臣の統轄に屬し、行政警察・高等警察・圖書出版及び著作權に關する事項を扱ふ所。舊稱、警視局・警保寮。

けい-ぼく 雞鶩・鷄鶩【名】□にはとりと、あひると。□凡庸なる人の譬。

けい-ぼく 雞卜・鷄卜【名】古、支那にて、鷄を用ひて行ひし占。

けい-ぼく 荊璞【名】「荊山の璞」に同じ。

けいほ-れう 警保寮【名】**けいほきょく**(警保局)の舊稱。

けい-ま 桂馬【名】□將棋の棋木(ぎぼく)の一。盤の目を、一盡隔てたる前の右又は左にのみ進み得るもの。なりては、金將と同一のはたらきをなす。うま。けいば。□圍碁にて、將棊の桂馬の進むべき方向に、左右前後、何れにか、間を隔てて、石をおくこと。又、二間隔てて、同じさきに飛ぶを、大桂馬といふ。

桂馬の高上(たかあがり)**歩**(ふ)の餌食【句】□桂馬の前進し過ぎて窮すること。□身分に不相應なる上席に著くこと。〔諺語〕

けい-まう 勁猛【名】**ゆうまう**(勇猛)に同じ。

けい-まう 雞盲・鷄盲【名】**とりめ**(鳥目)に同じ。〔國の方言〕

けい-まき 綿筒【名】**あめ**(綿筒)を云ふ。〔西〕

げい-みやう 藝名【名】藝人などが、本名以外に附くる、技術上の名。げいめい。〔じ。

けい-みやく 經脈【名】**けいらく**(經絡)に同じ。

けい-む 警務【名】警察上の事務。

けいむ-がう 警務號【名】航路標識の一。海上濃霧の際に、船舶をして、その位置を知らしむるために吊ふる音響信號。霧砲・霧鐘・霧笛などの種別あり。警號。

けいむ-きょく 警務局【名】臺灣總督府民政部の一局。警察に關する事務を掌る所。舊稱、警察本部。

けいむ-しょ 警務署【名】南滿洲鐵道附屬地に設置し、その鐵路の保護及び取締の事務を分掌する役所。

けいむ-そうちやう 警務總長【名】臺灣總督府民政部警務局の長官。警視をこれに補す。舊稱、警視總長。

けいむ-ちやう 警務長【名】北海道及び各府縣の事務官。警務の執行に關し、道長官又は府・縣知事の命を受け、警視・警部及び巡査を指揮監督するもの。但し東京府には、警視總監あるが故に、これを置かず。舊稱、警部長。

げ-いん 外印【名】古、六位以下の位記及び太政官より、諸司・諸國に下す文案に捺用せし印。大さ方二寸五分、文に「太政官印」とあり。(內印に對して)

けい-めい 景命【名】大なる運命。大なる命令。太平記「奉レ歸二皇天之景命一」

けい-めい 傾命【名】老い衰へたるいのち。衰殘の齡。

けい-めい 敬命【名】つつしみ敬ふこと。

けい-めい 雞鳴・鷄鳴【名】□曉に鷄の鳴くこと。鷄唱。□『一番鷄(いちばんどり)』の鳴く頃なるよりいふ。丑の時、卽ち今の午前二時頃の異稱。五更。□あけがた。早朝。四『「雞鳴・狗盜」の意にていふ』小策を弄すること、又その人。

鷄鳴狗盜【句】『「支那の孟嘗君、秦の昭王の相となりしが、後、昭王のために殺されんとせしより、昭王の寵姬に頼りて救解を求む。姬、狐白裘を獲ば應ぜんといふ。食客中に、狗盜をよくする者あり、昭王の藏に入りて盜み出して姬に獻じ、爲めに、姬の斡旋を得て釋されて、馳せ去り、函谷關に至る。關の法、鷄鳴後にあらざれば、人を通過せしめず、時に又食客に鷄鳴の聲をよくする者あり、由つて無事に關を出づるを得といふ』雞の鳴くに聲を眞似、又は狗に裝ひ、人家に潛み入りて、物を盜む賤劣なる人物。「函谷關の雞鳴(かけいめい)」參照。

鷄鳴の三時(さんじ)【句】一番鷄(いちばんどり)・二番鷄・三番鷄の三つ。

鷄鳴の助(すけ)【句】『詩經の齊風鷄鳴篇に、「鷄既鳴矣、朝既盈矣、匪二鷄則鳴一、蒼蠅之聲」とありて、古、支那にて、賢妃、君に御して、夜明けんとするや、鷄すでに鳴き、會朝の臣すでに盈てりと告げて、早起して朝を視ることを勸めしよりいふ』國君に對する、賢婦の內助。

けい-めい 形名【名】形と名と。形體と名稱と。

けい-めい 刑名【名】□つみのな。刑罰の名稱。重罪輕罪、又は死刑・流刑・徒刑などの類。□『刑は、形に通ず』支那にて、鄧析・尹文・惠施・公孫龍などの唱へし學問。名と實と一致せしめ、その名を以て、實を責め、毫も恕すところなきこと。卽ち概念の分析を試みたるものにて、論理學の萌芽とも見るべきもの。

刑名の學【句】前條□に同じ。

けい-めい 啓明【名】曉方に、東方に見ゆる金星。明(みょう)の明星(みょうじょう)。(太白に對して)

けい-めい 經營【名】『**けいえい**(經營)の音轉なりといふ』設けいとなむこと。設備。周旋。〔古語〕源氏「あづかり、いみじくけいめいしありくけしきに、この御有樣知りはてぬ」

げい-めい 藝名【名】**げいみやう**(藝名)に同じ。

けいめい-か 刑名家【名】刑名□を主張又は祖述せる學者。

けいめい-げり 雞鳴下痢・鷄鳴下痢【名】〔醫〕腸結核による慢性下痢の別名。多く曉に發するよりいふ。

けいめいにち 景命日【名】〔佛〕禪宗にて、天皇の寶祚を祝禱するため、佛前にて讀經する日。每月、御卽位の當日に行ふ。

けいめいにち-しゅくさん 景命日祝讚【名】天皇卽位の日に祝讚・諷經すること。

けい-めう 輕妙【名】輕くしてすばしこく、妙味あること。輕快・靈妙。

けい-めう 雞猫・鷄猫【名】能(ノウ)の狂言の一。大名、最愛の猫を殺したる犯人を訴ふる者には、何なりとも與へんと布告せしに、その犯人の子訴へ出で、その賞に依りて、父の助命を得しことを仕組めるもの。

けい-もう 毛芋【名】〔植〕にがかしいも(苦何首烏)に同じ。

けい-もう 啓蒙【名】㊀蒙昧なる者を啓發すること。㊁〔哲〕『英 Illumination 又 Enlightenment』傳來の迷蒙を一掃して、人間の思想を自由ならしむること。

けいもう-てつがく 啓蒙哲學【名】〔哲〕『英 Illumination philosophy』十八世紀において、英・獨・佛の思想界を支配せし學問。高遠・幽玄の哲理を解して、平易・明瞭ならしめ、且つこれを一般の敎化と融和し、一切傳襲の偏見を打破して、專ら人文の普及・開進に力めしもの。人文史上には重大なる意義ありしも、哲學的思想の進歩よりいへば、寧ろ十七世紀の大系統と十九世紀の新系統との間の過渡期を劃するに過ぎず。

けいもう-じだい 啓蒙時代【名】〔哲〕『英 Illumination period』歐洲にて、啓蒙哲學の行はれし時代、即ち十八世紀の頃。一洗時代。

けいもん 瓊門【名】玉のごとき麗(ハル)しき門。

けい-もん 契文【名】しょうもん(證文)に同じ。

けい-もん 閨門【名】㊀閨(ネヤ)の入口。㊁夫婦の間がら。㊂家庭の風儀。

けい-や 警夜【名】よまはり。よばん。

けい-やう 形樣【名】かた。ありさま。形態。

けい-やう 輕漾【名】さざなみ。小波。

けい-やう 揭揚【名】高くかかぐること。しかかぐること。一國旗を揭揚す」

げいやう-せい 迎陽性【名】〔植〕かうじつせい(向日性)に同じ。

けい-やく 契約【名】㊀ちぎり。約束。約定(ヤクヂヤウ)。薩摩歌「おまんと後の契約して、十九の年に薩摩を出で」㊁〔法〕『英 Contract』私法上の効果を生ずることを目的とする、二人以上の間の意思表示の合致。例へば贈與・賣買・交換・貸借・請負・雇傭・委任・寄托などの類。片務契約・雙務契約・有償契約・無償契約・實定契約・射倖契約・要式契約等に分つ。㊂ちよしよく(女色)を云ふ。〔陸奥國南部の方言〕

契約の解除【句】〔法〕契約成立後、これによりて生じたる法律關係を解きて、契約締結以前の狀態に回復せしむること。解除權の行使に基づくものと、解除條件の成就に基づくものとあり。

契約の申込【句】〔法〕相手方の承諾によりて、契約を締結すべき旨の確定的意思表示。

けいやく-いみん 契約移民【名】外國の雇主と謀め契約したる上、募集して渡航せしむる移民。

けいやく-くわんけい 契約關係【名】〔法〕契約により生じたる、當事者間の權利・義務の關係。

けいやく-じこう 契約事項【名】〔法〕契約の當事者。

けいやく-しゃ 契約者【名】〔法〕契約關係の成立・効果など。

けいやく-しょ 契約書【名】〔法〕契約の證明のために、契約事項を文字にて記載し、又は印刷せる書面。契約證書。

けいやく-しょうけん 契約證券【名】前條に同じ。

けいやく-しょうしょ 契約證書【名】前條に同じ。

けいやく-ずみ 契約濟【名】當事者間に契約の成立したること。約束濟。

けいやく-せつ 契約說【名】〔法〕『英 Contract theory』國家と法律とは、人民の契約によりて成立すといふ學說。佛蘭西のルソオ(Rousseau)等の唱導せるもの。民約說。

けいやく-ほしょうきん 契約保證金【名】〔法〕契約を締結するに當り、その權利者が、契約履行の擔保として、相手方より差出さしむる金。

けい-ゆ 圭窬【名】『公羊傳の宣公六年の條に見ゆ。上部銳く、下部方形にして、その狀、圭のごとくなるよりいふ。せんゆ(穿窬)參照』牆を穿ちて作りたる門の傍の小さき出入口。貧家の門牆。圭竇(ケイ)。

けい-ゆ 經由【名】けいいう(經由)に同じ。

けい-ゆ 輕油【名】㊀〔化〕『英 Light oil』鑛物性の揮發油。ガソリンも、石油より製したる輕油の、揮發度最も強きものなり。(重油に對して)㊁『英 Solar distillate と稱する者に相當するが故に、我が國石油業者は、これを輕油と呼ぶも、非なり』石油の原油を分溜する際、揮發油並びに燈油を溜取したる後に殘留する重油を、更に分溜して、最初に得る油。燈油よりも重く、機械油よりも輕し。

げい-ゆ 鯨油【名】鯨の脂肪・肉・骨等より採集したる液油より、更に硬脂を析出したるあとに殘留せる油分。くぢらあぶら。

げいゆ-はつどうき 輕油發動機【名】輕油を燃料として運轉する發動機。飛行機・自働車等に用ふる發動機の類。

けい-よ 惠與【名】めぐみ與ふること。

けい-よ 刑餘【名】㊀刑罰をうけたるのち。㊁『韓非子に出づ』くわんぐわん(宦官)に同じ。

けい-よう 經用【名】平生の費用。

けい-よう 形容【名】㊀なりかたち。すがた。ようす。ありさま。「形容枯槁」㊁『容(チカ)を形(ハラ)すといふ義』物事の姿を譬へていひあらはすこと。

げいよう-かいぼうがく 藝用解剖學【名】畫家・彫刻家等の、人物作製に應用するために、人體の比例・均衡及び筋肉變化等を研究する科學。

けいよう-かく 形容格【名】〔語〕れんたいげん(連體言)に同じ。

けいよう-く 形容句【名】〔語〕『英 Adjective phrase』句にして、形容詞と同樣の役をつとむるもの。例へば、「山より高き恩」「甚だ賢き小兒」の「山より高き」「甚だ賢き」の類。

けいよう-し 形容詞【名】〔語〕『英 Adjective』事物の狀態を形容する品詞。我が國のには、久活(クワツ)と志久活(シクワツ)との二種あり。各その條を見よ。形狀言。

けいよう-せう 螢蛸抄【名】〔書〕『自序中に「こは、螢火の輝く神、五月繩(サバ)なす惡しき神のあちびにて、えみしらの、この國にあだなす事ありとも、やがて神風に吹破られて、遂にうれひなからん理(コトワリ)を、世人に知らせんとて…」とあり』開化天皇の十九年より應永十五年までの、外寇に關する事蹟を、百三十種の史乘によりて抄出せるもの。塙(ハナ)保己一の著。

けいよう-せつ 形容節【名】〔語〕『英 Adjective clause』節にして、形容詞と同樣の役をつとむる附屬節。例へば、「花咲く春」「波のあらき海上」の「花咲く」「波のあらき」の類。

けいよう-はふ 形容法【名】〔語〕れんたいげん(連體言)に同じ。

げいよ-かいけふ 藝豫海峽【名】〔地〕『峽の音、正しくはかふ』瀨戸內海中、安藝國と伊豫國との間に亘れる海區。

けいよく 啓沃【名】『心に思ふことを開陳して、他人の心に沃(ソヽ)ぎいるる義。書經の說命(ヱイ)上篇に「啓乃心沃二朕心一」とあり』傍より、他人の智をひらくこと。いれぢゑすること。開導・誘掖。

けい-ら 輕羅【名】うすき絹布。うすもの。

けい-ら 警邏【名】みまはりて、非常をいましむること、又その人。

げい-らう 鯨浪【名】げいは(鯨波)(二)に同じ。

けい-らく 經絡【名】㊀體中の筋肉のみち。血のすぢ。經脈。心中二枚繪草紙「終に一息切斷の經絡六脈たえだえに」㊁すぢみち。經脈。脈絡。

けい-らく 京洛【名】きやうらく(京洛)に同じ。

げい-らふ 鯨蠟【名】抹香鯨(マツカウ)の頭蓋窩中に存する、白色眞珠樣の光澤ある鱗片狀の塊。蠟燭その他の工業用とす。げいなう(鯨腦油)參照。

けい-らん 蕙蘭【名】〔植〕しらん(紫蘭)に同じ。

けい-らん 雞卵・鷄卵【名】㊀にはとりのたまご。ぎよらん。蛋。㊁次條の略。

けいらん-ざいく 雞卵細飾・鷄卵細飾【名】もち米六分と糀(コウヂ)四分とを粉にし、絹篩(キヌフヒ)にかけ、水にて捏(コ)ねて、黑砂糖を中に包み、金柑大に丸めたる菓子。けいらん。

けいらん-し 雞卵紙・鷄卵紙【名】西洋紙

の表面に卵白と酸化アンモニヤとの混合物を塗りて乾したるもの。寫眞を燒付くるに用ふ。但し感光性なきを以て、硝酸銀の溶液に浮べて塗銀したる上にて使用す。色は白色・藤色・桃色等あり。

けいらん-しゅ 雞卵酒・鷄卵酒 【名】たまござけ(卵酒)に同じ。

けいらん-まき 雞卵巻・鷄卵巻 【名】菓子の一。巻煎餅の上製なるもの。

けいり 警吏 【名】けいさつくわんり(警察官吏)の略。

けいり 計吏 【名】會計の役人。會計官。

けいり 經理 【名】㊀をさめととのふること。經營・處理。㊁會計及び給與に關する事務の處理。

けいりう 繫留 【名】つなぎとむること。

けいりう 溪流 【名】谷川の流、又その音。

けいりう 稽留 【名】とどまること。とどこほること。逗留。

けいりう-ききう 繫留氣球 【名】『英 Captive balloon』索を以て、任意の高さに繫ぎ置く輕氣球。主に軍事上、觀測・信號用等に供せらる。

けいりう-くわん 繫留管 【名】船を繫留する索又は鎖を通ずる管。鑄鐵製又は鑄鋼製にて、舷墻板に取附く。

けいりう-ねつ 稽留熱 【名】〔醫〕熱病の、急に體温上騰し、攝氏四十度前後に達して、約一週間、同温を保ち、また急に減じて、平温もしくは平温以下に下るもの。例へば肺炎の類。持續熱。(間歇熱・弛張熱に對して)

けいりがくかう 經理學校 【名】㊀りくぐんけいりがくかう(陸軍經理學校)の略。㊁かいぐんけいりがくかう(海軍經理學校)の略。

けいりきよく 經理局 【名】陸軍省又は海軍省中の一局。當該大臣の統轄に屬し、各その行政上の會計・給與の事務を取扱ふ所。

けいりこ 【名】〔動〕『かくれご(蛙子)の訛』おたまじゃくし(お玉杓子)を云ふ。〔筑後國の方言〕

けいりつ 刑律 【名】㊀刑と律と。㊁〔法〕けいばつほふ(刑罰法)に同じ。

けいりひ 經理費 【名】經理に要する費用。

けいりぶ 經理部 【名】各軍港に在りて、各その鎮守府に屬し、通常物品の購入・供給等を掌る役所。

けいりん 雞林・鷄林 【名】〔地〕㊀『新羅の脱解王の世に、一夜、城西の始林に、金櫃、樹梢に掛り、白雞その下に鳴くあり。脱解その櫃を開きて、一男兒を得しより、始林を鷄林と改稱し、又、國號ともなせる由、三國史記に見ゆ。もと新羅の舊都、即ち今の慶尚北道慶州の地の稱なりしなり』しらぎ(新羅)の別稱。㊁とうせん(朝鮮)の異稱。とりのはやし。

けいりん 經綸 【名】『易經の上經に「雲雷屯、君子以經綸」とある疏に「經爲二經緯一、綸爲二綱紀一」とあり』天下・國家を治めととのふること。治國濟民の術。政治。

けいりん 桂輪 【名】『桂は月中の桂。「月の桂」を見よ』つき(月)の異稱。

けいりん 桂林 【名】桂(カツ)の林。桂園。〔晉曲安郎花〕「桂林雨を拂って、松風を調む」桂林の一枝 【句】『晉書に「郗詵字廣基、…對策上第拜二議郎一、遷二雍州刺史一、武帝於二東堂一會送、問レ詵曰、卿自以爲二何如一詵答曰、臣舉二賢良一、對策爲二天下第一一、猶二桂林一枝・崑山片玉一、帝笑、詵在レ任、威儀明斷、甚得二擧體一とあるに本づく。「月の桂(カツ)」參照』滿足するに足らぬ少しばかりの立身。

けいりん 瓊林 【名】うつくしき林。

けいりん 瓊林の宴 (エン) 【句】支那にて、科擧に及第せし人人に賜ふ宴。

けいりん 啓稟 【名】申しあぐること。啓上。稟白。啓白・稟申。

げいりん 藝林 【名】演藝のなかま。藝文に携はる人人の社會。藝園。藝苑。

けいりんさう-がくしや 瓊林莊學舍 【名】廣瀬旭莊の學舍。生徒漸く逼むに及んで、居を移し、咸宜園(カンギ)といへり。

けいりん-まんろく 桂林漫錄 【名】〔書〕古書畫・古器物につきて、その考證を記せるもの。一卷。森島中良の撰。

けいりやう 計量 【名】數量をはかること。

けいりやう 輕量 【名】目方の輕きこと。(重量に對して)

けいりやう 輕涼 【名】㊀輕く涼しきこと。㊁少しく涼しきこと。微涼。

けいりやう-き 計量器 【名】計量に使用する器械。

けいりやう-きかがく 計量幾何學 【名】(數)きんせいきかがく(近世幾何學)に同じ。

けいりやう-くわへい 輕量貨幣 【名】〔法〕法定の量目より重量の減少したる貨幣。

けいりやう-ひん 輕量品 【名】〔商〕『英 Light goods 又 Light weight』運賃を計算するに當り、容積を標準として計算する物品。(重量品に對して)

げいりやう-あ 迎涼會 【名】納涼の會合。

けいりやく 經略 【名】『經(カ)リ略(サ)むる義』國家を經營・統治すること。

けいりやく 計略 【名】㊀はかりごと。計畫。㊁偽りのてだて。一慮。思慮。

けいりよ 計慮 【名】考へはかること。考慮。

けいりよ 輕慮 【名】かるがるしき考。輕忽なる思慮。「よ。

けいりよう 驚龍 【名】けいだ(驚蛇)を見よ。

けいるゐ 係累・繫累・係纍 【名】㊀けいばく(繫縛)に同じ。㊁妻子・眷屬などの煩累。

けいれい 敬禮 【名】㊀うやうやしく禮をなすこと。尊敬。㊁うやまひたっとぶこと。尊敬。

けいれい 雞嶺・鷄嶺 【名】〔地〕けいそくせん(「雞足山」)に同じ。

けいれい 刑例 【名】〔法〕刑罰の名稱及びこれを犯人に科する、大體の方法などを示したる規則。「もり。

けいれう 計料 【名】數へはかること。みつもり。

けいれき 經歷 【名】㊀へめぐること。遍歷。遊歷。㊁りれき(履歷)に同じ。

けいれき-しょ 閱歷書 【名】履歷書に同じ。

げいれふ-せん 鯨獵船 【名】くぢらぶね(鯨船)〔一〕に同じ。

けいれん 頸聯 【名】〔文〕律詩及び排律(六韻)の第五・第六の兩句。但し律詩においては後聯といふ。(起聯・領聯・尾聯に對して)

けいれん 痙攣 【名】〔醫〕『羅 Convulsio』筋肉のひきつること、また肉のひきつりて痛む病。病的の筋收縮。「に同じ。

けいれん-さう 腥臜瘡 【名】がんがさ(雁瘡)

けいれん-ちゆうすう 痙攣中樞 【名】〔醫〕『獨 Krampfcentrum』痙攣を起さしむる神經系の中樞。延髓と腦橋との中間に在り、これを刺戟すれば、全身痙攣を起す。

けいろ 毛色 【名】㊀頭髪又は羽毛の色。けなみ。戀八卦柱扈「夫婦つがひは生あるもののならひぞや、てて親さまざまの毛色を生むは、犬猫ならでどこにある」㊁他と區別するに足るおもむき。特色。種類。「毛色の變りたる人」㊂鎧の縅毛(シナド)の色。

けいろ 徑路・逕路 【名】こみち。ほそみち。

けいろ 經路 【名】へて來しみち。とほりみち。

けいろ 輕攏 【名】輕く手に持つこと。

けいろ 溪樓 【名】溪にのぞめる樓。

けいろ 雞冀・鞿韝 【名】けいろう(雞冀鼓)に同じ。

けいろ 毛色 【名】㊀頭髪又は羽毛の色。けなみ。戀八卦柱扈「夫婦つがひは生あるもののならひぞや、てて親さまざまの毛色を生むは、犬猫ならでどこにある」㊁他と區別するに足るおもむき。特色。種類。「毛色の變りたる人」㊂鎧の縅毛(シナド)の色。

けいろ 徑路・逕路 【名】こみち。ほそみち。

けいろ 經路 【名】へて來しみち。とほりみち。

けいろ 輕攏 【名】輕く手に持つこと。

けいろ 溪樓 【名】溪にのぞめる樓。

けいろ 雞冀・鞿韝 【名】けいろう(雞冀鼓)に同じ。

けいろう 雞籠・鷄籠 【名】雞を入れたる籠。

けいろう-こ 雞冀鼓・鞿韝鼓 【名】鼓の一種。革にて甕のごとき形に造り、前後の擊鳴す部分は平なるもの。胴の長さ六寸、面の直徑六寸。紐にて頸に懸け、腋下に繫ぎ、桴(チ)にて擊つ。もと支那より渡來せるもの。

けいろく 雞肋・鷄肋 【名】㊀鷄の肋骨。㊁『鷄の肋骨は、食ふほどの肉はなけれども、また多少の肉の附著せるため、捨つるは何となく惜しき心地せらるる意。後漢書の「楊修傳に「操平二漢中一、欲レ因二討一劉備一。而不レ得レ進、欲レ守レ之、又難レ爲レ功、操出レ教唯曰二雞肋一而已、外曹莫二能曉一。修獨曰、夫雞肋食レ之則無レ所レ得、棄レ之則如レ可レ惜、公歸計決矣、操於レ此廻レ師」とある故事に

本づく』さほど有児なるにはあらねど、さりとて、捨つるには惜しき物事の譬。㊁『晉書の劉伶傳に「伶嘗醉與二俗人一相忤、其人攘袂奮拳而往、伶徐曰、雞肋不レ足三以安二尊拳一、其人笑而止」とあるに本づく』雞の肋骨の小弱なるを、己が體の痩せて弱きに譬へていふ。

けいろけつ 繫驢橛【名】〔佛〕ろけつ（繫驢橛）に同じ。

けいろん 雞籠・鷄籠【名】〔地〕きいろん（基隆）に同じ。

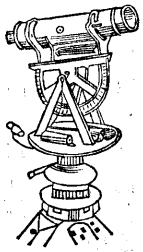
けいわく 煢惑【名】『惑の字、漢音はこく、吳音はわく』けいこく（煢惑）に同じ。

けいわん 慶庵【名】けいあん（慶庵）の誤。

けいわ 經緯【名】㊀竪と横と。よこたて。㊁『大戴禮に「地東西爲レ緯、南北爲レ經」とあり』南北と東西と。㊂組織的に治めとのふること。「天下を經緯す」「禮は、上下の紀、天地の經緯なり」㊃人組みたる事情。いきさつ。㊄〔地〕經線と緯線と、また、經度と緯度と。

けいわき 塋域【名】えいわき（塋域）の誤讀。

けいわぎ 經緯儀【名】『英 Theodolite』陸地測量並びに天體觀測に、方位角と仰角とを測定するに用ふる器械。構造一樣ならざれど、要點は直立せる支柱によりて、水平面に回轉する圓板あり、これに取附けたる二箇の支柱にて、望遠鏡の水平軸を支へ、その支柱の一に、目盛を施せる垂直の圓板、回轉板の下には、同じく目盛せる水平板あり、この水平板にて方位角を、また垂直板にて仰角を測る。



（けいわぎ）

けいわど 經緯度【名】〔地〕經度と緯度と。

けいわい 警衛【名】いましめまもること。かため。そなへ。警護。太平記「例に非ず法に非ずして、警衛・判斷の職を司る」

けいわん 桂園【名】㊀けいりん（桂林）に同じ。㊁〔人〕かがはかげき（香川景樹）の雅號。

けいわん 敬遠【名】㊀敬ひて、近づき狎褻せざること。㊁敬ふ如くにして遠ざくること。

けいをん 閨怨【名】婦人が空閨を守る怨。

けいをん 徑圓【名】〔數〕『英 Meridian circle』球（ボール）の兩極を通過する圓。

げいをん 藝園【名】次條に同じ。

げいをん 藝苑【名】げいりん（藝林）に同じ。

けいをん-いっし 桂園一枝【名】〔書〕香川景樹の歌集。三卷。

けいをん-は 桂園派【名】和歌の一派。香川景樹を祖とす。

けいをく 經屋【名】けいあく（京鴉）に同じ。

けいをん-じ 鷄園寺【名】けいじゃくじ（鷄雀寺）に同じ。

けう 孝【名】かう（孝）に同じ。〔古語〕源氏「かくたまさかにあへる親に、けうせんの心あらば」

けう 竅【名】あな。竅穴。竅孔。

けう 興【名】きょう（興）に同じ。源氏「さまざまの御繪の興、これに皆うつりはてて」興さかす【句】興をさかんにす。ますます興あらしむ。參考「人も聞かぬところにて、おのがどち隱したる手どもあらはして、興さかし侍りけるこそいとになく侍れ」

けう 轎【名】支那及び朝鮮にて用ふる一種の乘物。我國の駕籠（かご）に似たり。

けう 橋【名】そり。

けう 稀有・希有【名】稀に有ること。ふしぎ。きめう。〔古語〕字音「つゆばかりも驚きたるけしきなし。けうの人かな」

けう 假有【名】〔佛〕この世界の森羅萬象は、因緣和合によりて存在せるものにて、みな假の現象なること。（實有に對して）

げう 堯【名】〔人〕支那五帝の一。名は放勳。帝嚳の子。父に嗣ぎて即位し、平陽（今の山西省平陽府臨汾縣）に都す。在位九十八年。舜を擧げて、その二女を娶はし、政を攝せしめ、太平の治を致す。

けう-あ 嬌娃【名】なまめきて美しきこと、又その女。美人。阿嬌。

げう-あ 曉鴉【名】夜あけに鳴くからす。あけがたのもや。

げう-あく 梟惡【名】『梟はその母を食ふ猛惡なる鳥なりといふ』すぐれてあしきこと、又その者。猛惡。保元「忽二諸朝憲一、成二背二綸言一、梟惡頻聞」

けう-あん 教案【名】『英 Teaching plan』豫定の教材を、各時間に配當して、教授の順序・方法等を記したる教授案。

けう-あん 教行【名】〔佛〕『教授行者の略』授戒會の時、教授師に從ひて、その用務を辨ずる役。

けう-い 教意【名】〔佛〕教の意義。教法の本意。

けう-いく 教育【名】㊀をしへそだつること。教へて、智識をひらかしむること。㊁『英 Education』人の身體及び精神上の諸性能を發展せしむる目的にて行ふ働。學校教育・社會教育等の名あれど、主として學校教育を指す。學校教育は、教授と訓育との二つの方法によりて行はれ、訓育は、また管理と訓誡とに分つ。又、智育・意育・體育・情育・美育などの名目あり。又、教育を訓育と同義に解して、單に意志と感情との方面のみに關するものと見、知識の發展を目的とする教授と相對せしむることあり。

けういくきょうじゅ 教育的教授）參照。

けういく-か 教育家【名】教育のことに當る人。

けういく-かれい 教育綱領【名】㊀教育を施す趣旨の要領。㊁陸軍所屬の學校に於ける教育の目的・順序・方法などに關する主要なる規定。該校を統轄する長官規定し、學校長これに基づきて實施す。

けういく-がく 教育學【名】『英 Pedagogics 又 Pedagogy.「兒童の指導」といふ意のギリシャ語より出づ』教育の目的と方法とについて研究する學問。

けういく-ききん 教育基金【名】普通教育費の使途に充つるために、特別會計として、政府が管理する資金。その元資金は、日清戰役の結果、清國より得たる償金の一部たる一千萬圓にして、大藏省に寄託し、利子を毎年基金に編入し、文部大臣は、毎年度の豫算において、一般の歲出として定まりたる金額を、その前年度末の現在生徒數等を標準として、北海道及び各府縣に配當す。

けういく-きゃうせい 教育行政【名】〔法〕『英 Administration of education』內務行政の一。國民の教育の進歩・發達をはかる目的にて行ふ政務。學政。

けういく-くわい 教育會【名】教育に關する人人の團結。

けういく-し 教育史【名】教育の原理とその制度との變遷を記したるもの。

けういく-しきん 教育資金【名】㊀教育費に充つる資金。㊁普通教育費に充つるために、北海道及び府縣が特別會計として管理する資金。教育基金の元資金の收入中より、年年受けたる配當金を元資金とし、これより生ずる收入をも組入る。

けういく-じむ 教育事務【名】教育實施に關するすべての事務。例へば教師の職務は勿論、學校の設立、教科書の選定、學校の監理者が學校に對して爲すすべての施設、教員の任命など。

けういく-しんりがく 教育心理學【名】『英 Pedagogical psychology』教育殊に教授を行ふ上に必要なる心理的法則を研究する應用心理學。教育的心理學。

けういく-せいど 教育制度【名】『英 System of education』國家の教育上の組織。我が國にては、普通教育・專門教育及び特殊教育に分ち、文部省これを統轄す。又、陸海軍・遞信及び宮內の諸省にも、各所屬の學校あり。學制。

けういく-せうしふ 教育召集【名】〔兵〕陸軍召集の一。補充兵を、教育の目的にて召集すること。

けういく-そうかん 教育總監【名】りくぐんけういくそうかんぶ（陸軍教育總監部）の略。

けういく-そうかんぶ 教育總監部【名】りくぐんけういくそうかんぶ（陸軍教育總監部）の略。

けういく-ちょくご 教育勅語【名】『明治二十三年十月三十日發布せられたる、國民教育の大本と國民道德の要旨とを示したる

まへる勅語。

けういく-てうさくわい 教育調査會【名】文部大臣の監督の下に、朝野の主要なる教育家又は教育上の經驗に富める者を以て組織し、教育に關する重要なる事項を調査審議する會議。大正二年の設置。

けういく-てき 教育的【貌】『英 Pedagogic 又は Pedagogical』教育に關する。教育上の。

けういくてき-けうじゆ 教育的教授【名】『英 Educational teaching』智識・技能を教授するに止まらず、品性を陶冶し、人物を作ることをも目的として行ふ教授。獨逸のヘルバルト(Herbart)派の唱導せるもの。

けういく-はくぶつくわん 教育博物館【名】教育用品・成績品・教育圖書類を觀覽せしむる處。

けういく-ばんのうせつ 教育萬能說【名】兒童は恰も白紙の、何事にでも記し得るが如く、教育者の心のままに教育し得るものなりといふ說。(教育不可能說に對して)

けういく-ふかのうせつ 教育不可能說【名】人の運命又は性質は、始より確定し、若しくは絶對に自由なるものにして、教育は効なしといふ說。(教育萬能說に對して)

けういく-ほけん 教育保險【名】がくしやうしきん(學資保險)に同じ。

けういくゐんくわい 教育委員會【名】りんじけういくゐんくわい(臨時教育委員會)の略。

けういく-ゑいせい 教育衛生【名】けうじゆゑいせい(教授衛生)に同じ。

けう-いつ 驕溢【名】おごりたかぶること。分外のおごり。驕盈。

けう-いつ 驕逸【名】おごりてわがままなること。驕淫。

げういん-にふだうしんわう 堯胤入道親王【名】(人)直常親王の子。明應二年天台座主となる。博覽にして、高德の聞えあり。享祿三年薨ず。

げう-う 曉雨【名】あけがたの雨。あさあめ(朝雨)に同じ。

げう-うん 澆運【名】『澆は薄き義』人情の薄くなりたる末世。

げう-うん 曉雲【名】明方の雲。曉天の雲。

けう-え 敎衣【名】〔佛〕禪宗と律宗との外の、天台・法相などにて著用する法衣。けうしゆう(敎宗)參照。

けう-えい 驕盈【名】けういつ(驕溢)に同じ。

けう-えい 橋影【名】橋のかげ。

げう-えい 曉鋭【名】たけくするどきこと。

けう-えう 徼要【名】もとむること。要求。

けう-えん 嬌艶【名】なまめかしく美しきこと。あだっぽく美しきこと。

けう-おん 嬌音【名】けうせい(嬌聲)に同じ。

けう-か 嬌歌【名】なまめかしき歌。

けう-か 橋架【名】橋板を數く支梁となる横木。橋のけた。

けう-か 橋下【名】はしのした。(橋上に對して)

けう-かい 敎戒・敎誡【名】をしへいましむること。

けう-かう 徼幸・徼倖【名】『徼は求むる義』幸をもとむること。仕合せを願ふこと。

けう-がう 驕傲【名】おごりたかぶること。倨傲。驕侈。

けう-がう 叫號【名】きうがう(叫號)に同じ。

げう-かう 曉行【名】一明方に歩むこと。二あかつきの旅行。

げう-かう 僥倖【名】『蘇東坡の上二梅直講一書に「僥二一時之幸一」とあり、僥は徼に通ず。倖は幸に同じく、僥の字の人偏に引かれて倖に變じたるもの』幸のあるべきわけなくして、幸にあふこと。思ひがけなき幸。こぼれざいはひ。まぐれざいはひ。

げう-かう 堯孝【名】(人)歌僧。頓阿の孫。權大僧都。法印となりて、常光院と號す。藤原雅世、新續古今和歌集を撰むに際し、和歌所開闔(カイ)に補せらる。享德四年寂す。年六十五。

けう-かく 礦砢・塙堁【名】かうかく(礦砢)に同じ。

けう-がく 敎學【名】がくけう(學敎)に同じ。

けう-かつ 交割【名】かうかつ(交割)に同じ。

けう-がふ 校合【名】かうせい(校正)に同じ。

けう-がふずり 校合刷【名】かうせいずり(校正刷)に同じ。

けう-かん 驕悍【名】傲慢にてあらあらしきこと。

けう-がん 驕顏【名】なまめかしき顏。愛嬌ある顏。

げう-かん 曉悍【名】氣の强きこと。心のあらあらしきこと。勇悍。

けう-がる 興がる【動四自】きようがる(興がる)に同じ。語源(鉢木)「けうがる法師なり」狂言(箕かづき)「さてもさても、けうがったなりかな、あの箕をかづいだなりは」

けう-き 梟騎【名】强き騎兵。驍騎。勁騎。

けう-き 驕氣【名】たかぶりたる氣質。

けう-き 敎規【名】宗敎上の規式。敎範。

けう-ぎ 敎義【名】敎法の義理。宗敎の各派の主義。しゆうもんのおもむき。

げう-き 澆季【名】一『澆は澆薄にて、うすき義、淳の反對』衰へたる末の世。末世(マッセ)。季世。澆末。二のちの世。後世(コウセ)。末世(マッセ)。平治書かれたる手跡、又妙にして、澆季にこれを傳へけり」と。

げう-き 驍毅【名】たけくしっかりとせること。

げう-き 驍騎【名】つよき騎兵。梟騎。

げう-き 驍氣【名】勇健なる氣性。

げう-き 曉氣【名】明方の氣象。

げう-き 曉起【名】明方に起くること。

げう-き-しやうぐん 驍騎將軍【名】せうしやう(少將)[二]に同じ。(淳仁天皇の代に、一時改められたる稱呼)

げうきしやうぐん-ゐんぐわいしやう 驍騎將軍員外將【名】ちゆうじやう(中將)[二]に同じ。(淳仁天皇の代に、一時改められたる稱呼)

けうぎ-せうせつ 敎義小說【名】宗敎上の道德上・政治上もしくは或他の觀念より生じたる理想の實現を描きたる小說。

けう-きんぞく 稀有金屬【名】〔化〕存在の極めて稀有なる金屬。例へば、イスミウム・ラヂウムの類。稀金屬。きげんぞく(貴金屬)參照。

けうきやう 孝經【名】〔書〕かうきやう(孝經)に同じ。〔古語〕

けうぎやう 敎行【名】〔佛〕敎と行と。佛の說かれたる敎と、その敎によりて修行することと。

けうきやう-しん-しよう 敎行信證【名】

二〔佛〕淨土眞宗の開祖親鸞の立敎の綱領。且つその宗敎の大綱たる敎と行と信と證と。卽ち敎・行・證の三法に信の一法を加へたるもの。けうぎやうしよう(敎行證)・眞宗の四法」參照。三〔書〕僧親鸞の常陸國西茨城(ニシイバラキ)郡稻田の禪房にありて、その宗義を述表するために著ししもの。經・論・釋の要文を抄集し、これを敎・行・信・證及び眞佛化身の二等に分類して、自己の見解を下せるもの。眞宗開立の根本書たるが故に、眞宗にては、これを本書(ホンショ)又は本典と稱し、又、親鸞の晩年、本書中の大要を抄出せる淨土文類聚(ジュルイジュモ)鈔を略文類といふに對し、これを廣文類(クワウモ)といふ。詳しくは「顯淨土眞實敎行信證文類」又は「敎行信證文類」といふ。六卷。

けうぎやう-しん-しよう-もんるゐ 敎行信證文類【名】〔書〕前條三を見よ。

けうぎやう-しよう 敎行證【名】〔佛〕敎と行と證と。佛の說かれたる敎と、その敎によりて修行することと、その修行の結果における開悟と。けうぎやうしんしよう(敎行信證)三參照。

けうぎやうしんしよう-しよ 敎行證書【名】〔書〕釋迦滅後における諸佛敎の敎・行・證と法華經のみの敎・行・證とを對して說示したる敎書。一卷。僧日蓮の著。

けう-きやく 橋脚【名】『英 Bridge pier 又 pier』橋臺の中間に在りて、橋梁を支持する構造物。木・石・鐵などの圓柱を用ひ、又は石材・煉瓦などを積上げて造る。

けうきやく-しろ 橋脚舟【名】〔兵〕軍事架橋材料の一。橋梁を支持するに用ふる船。

けう-きよ 僑居【名】かりずまひ。寓居。寄寓。僑寓。

けう-きよう 驕矜【名】おごりほこること。たかぶりおごること。

げうきよう-ほふしんわう 堯恭法親王【名】〔人〕靈元天皇の第十八の皇子。名は久嘉。母は石衞門佐局。天台座主となる。明和元年薨ず。御年四十八。

けう-く 敎區【名】〔佛〕佛基〕佛敎の各宗、又は耶蘇敎の各敎會にて、土地を區分して、その管理又は受持の區域を定めたるもの。

けうぐ 教具【名】教授用具と教室用具との總稱。各その條を見よ。

げうく 暁鼓【名】曉を報ずる鼓。曉前二刻半に打つ。(昏鼓に對して)

けうぐう 僑寓【名】**けうきょ**(僑居)に同じ。

けうくん 教訓【名】■をしへさとすこと。教戒。■**くんれん**(訓練)に同じ。■いさめ。諫言。盛衰記「是れは小松殿と門脇殿と歎き教訓し給ふしるにや」

けうくんざうし 教訓草子【名】徳川時代の初期における假名草子の一。忠臣・孝子・節婦・烈女の行蹟又は禮式の類に關する物語を、平易なる文章にておもしろく綴りたるもの。この種の作者中、淺井了意最も有名にして、その著に「孝行物語」・「堪忍記」・「本朝女鑑」・「本朝二十四孝」などあり。浮世草子あらはるるに及びて漸く衰へたり。

けうくんしやう 教訓狀【名】教訓の旨を記せる書狀。教訓書。

けうくんしよ 教訓書【名】教訓になるべき事項を記したる書。

けうくわ 教化【名】■敎へて、よきみちにみちびくこと。くわ。教導・感化。■『英Culture, Cultivation 又 Discipline』知識・技能及び見識を養成すること。くわ。■(佛)**けう**(敎化)に同じ。

けうくわ 教科【名】教授する科目。

けうくわ 驕誇【名】たかぶりほこること。

けうくわい 教會【名】■宗教の信徒の集會・結社。■(基)『英Church』キリスト教徒の集會結社。■(基)『英Church』キリスト教徒の一團隊もしくはキリスト教の一宗派に屬する建造物。教徒信者の集會し、又は廣く說教する等に供する建造物。教會堂。會堂。教堂。禮拜堂。

けうくわい 教誨【名】■をしへさとすこと。■囚人をして、罪を悔い、善に遷らしむるため、教誨師の說きさとすこと。

けうくわいし 教誨師【名】監獄職員の一。囚人の教誨に從事する者。佛教の僧侶又はキリスト教の牧師傳道師等、おもにこれに任ず。奏任待遇もしくは判任待遇。

けうくわいじよ 教會所【名】教會の事務所。

けうくわいだう 教誨堂【名】囚徒を教誨するために、監獄内に設けたる建物。

けうくわいだう 教會堂【名】**けうくわい**(敎會)■に同じ。

げうくわう 暁光【名】夜あけの光。あけぼの。

けうくわいぎやうせい 敎化行政【名】(法)助長行政の一。國民の精神上の化育を目的とする行政、即ち教育と宗教との行政。

けうくわいしよ 教科書【名】學校にて、教科に用ふる書物。

けうくわいしよや 教科書屋【名】■教科書の出版を主とする書肆。■教科書の編纂を主とする學者を嘲りていふ語。

けうくわん 教觀【名】(佛)敎相と觀心と。宗義の外相とその内相。教觀二門【句】(佛)教相と觀心との二つの法。教門と觀門と。

けうくわん 驕慢【名】あまやかすこと。

けうくわん 教官【名】■教職に從事する官吏。■陸軍又は海軍の諸學校にて教職に從事する職名。その軍人なるを武官教官、文官なるを文官教官といふ。

けうくわん 叫喚【名】■おらび叫ぶこと。わめき。■(佛)次條の略。謠曲(大原御幸)「聲は叫喚の罪人も斯くや、あさましや」

けうくわんぢごく 叫喚地獄【名】(佛)『梵Raurava(樓擾)の譯語』八熱地獄の第四。諸の罪人が、苦痛に堪へずして、號泣・叫喚するところ。叫喚。

けうくわんもく 教科目【名】教授する科目。

けうくわようづしよてうさゐゐんくわい 教科用圖書調査委員會【名】文部大臣の監督に屬し、小學校の修身・歷史・國語の教科用圖書を調査・審議し、並びに文部大臣の諮問に應じ、その他の教科用圖書に關する事項を調査する會議。

けうけ 毛受【名】月代(ヤキ)などを剃るとき、手に持ちて、その剃りたる毛を受くるに用ひし板。扇面の形のもの多かりき。浮世床「毛受をもつて腰をかくる」

けうけ 教化【名】(佛)衆生を敎へ導きて、善道に轉化せしむること。勸化。杜詩「御産たひらかになど、敎化などしたる」「じ。

けうけ 教誨【名】(佛)**けうくわい**(敎誨)に同じ。

けうけ 教家【名】(佛)■敎相家の略。佛法を種種に分類し、言句によりて說明するもの。(禪家に對して)

けうげ 教化【名】(佛)**けうけ**(敎化)の轉。釋迦如來誕生旦「如來の御けうげ受くること、三世の諸佛も未だ捨てさせ給はぬかや」

けうげ 教外【名】(佛)釋迦の經論・言句を離れ、その心を以て、他の心に印することを。佛祖の心印を以て、人の心におのづから具足せる悟を開かしむること。禪宗の敎法これなり。以心傳心。單傳。敎外別傳。(敎内に對して)(禪宗の語)

けうけい 教系【名】(佛)敎法を師・弟相傳する系統。

げうけい 暁雞・暁鷄【名】鳴きて曉を告ぐる鷄、又その聲、又その時刻。晨雞。和漢朗詠年年別思驚二秋雁一、夜夜出聲到二曉雞一」

けうけう 驕驕【貌】盛んなるさま。

けうけう 矯矯【貌】■勇氣あるさま。たけきさま。■高く擧るさま。猛くさかんなるさま。

けうけう 嘵嘵【貌】■狷の聲の形容。

けうけう 曉曉【貌】たけく勇むさま。

げうげう 嶢嶢【貌】高きさま。

げうげう 譊譊【貌】はやかましきさま。おしやべりのさま。

げうげう 翹翹【貌】■多きさま。■危きさま。特にぬきんでたるさま。■遠きさま。

けうけうし 稀有稀有し・希有希有し【形二】珍しきさまなり。稀なるさまなり。〔古語〕運歩色葉集「希有希有敷、ケウケウシク」

けうげき 矯激【名】中庸を失ひて過激なること。

けうけつ 竅穴【名】あな。竅孔。

けうけつ 激結【名】(文)■繳は繞ひ束ぬる義』けつく(結句)(二)に同じ。

げうげつ 暁月【名】あかつきの月。あけがた。

げうげつ 暁月【名】(人)れいぜいためもり(冷泉爲守)に同じ。

けうげべつてん 敎外別傳【名】(佛)『敎外にて別傳する義。禪門の悟性論に「直指二人心一見二性成佛一、敎外別傳、不レ立二文字一」とあるに本づく』**けうげ**(敎外)に同じ。謠曲(放下僧)「われらが宗體と申すは、敎外別傳にして、言ふも言はれず、說くも說かれず、言句に出せば敎に落ち、文字を立つれば宗體に背く」

けうけん 敎權【名】■敎師の威信を以て、學生を支配敎導する一種の權力。■宗敎上の權力。「もの。

けうけん 敎憲【名】敎の大本を規定せる

けうけん 驕蹇【名】たかぶり威張ること。のさばること。偃蹇。

けうげん 矯言【名】**けうご**(矯語)に同じ。

げうげん 暁健【名】驍勇にして强健なること。

けうこ 叫呼【名】さけびよばふこと。叫喚・疾呼すること。

けうご 矯語【名】なまめかしきことば。あだめきたることば。矯言。

げうご 暁悟【名】さとること。

けうこう 矯喉【名】矯音の出づるのど、又その聲。「嬌嗔を弄す」

けうこう 橋構【名】『英Bridge truss』橋梁に用ふる構桁。その形狀種種あり。

けうこう 竅孔【名】**けうけつ**(竅穴)に同じ。

けうこう 叫吼【名】ほゆること。怒號。

げうこつ 髐骨【名】■されこうべ。白骨。■されこうべのごとく痩せ衰へたること。

けうごと 稀有事【名】めったになきこと。珍事。異事。奇事。今昔「種種の希有事を啓す」

けうさ 敎唆【名】■すすめそそのかすこと。

と。おだて。㊁〔法〕囑託・欺騙・威嚇等、手段の如何に拘らず、すべて他人をして、罪を犯す意思を生ぜしむること。**けうさしや**（教唆者）参照。

教唆の教唆【句】〔法〕かんせつけうさ（間接教唆）に同じ。

教唆の従犯【句】〔法〕次條に同じ。

従犯の教唆【句】〔法〕**かんせつじゅうはん**（間接従犯）に同じ。

けう-さい 徼塞【名】『徼は木柵を以て、蠻夷の界となす意』國境の城塞。邊塞。邊境。邊城。

けう-さい 教材【名】『英 Matter of teaching 又 Teaching matter』教授の材料。

けう-さい 絞罪【名】**かうざい**（絞罪）に同じ。

けう-さい 梟罪【名】さらし首の罪。梟首の罪。

けう-さう 叫騒【名】さけびさわぐこと。喧騒。太平記「如來の權實、徒に堅石・白馬の論となり、祖師の心印空しく、叫騒・怒張の中に墮つべし」

けう-さう 教相【名】〔佛〕『教義の相狀の意』各宗の理論的教義。（觀心に對して）**けうくわん**（教觀）參照。徒然「行雅僧都とて、教相の人の師する僧ありけり」

教相判釋（ハンジャク）【句】〔佛〕『判釋は剖判・解釋の義』釋迦一代の教法を、自己の宗義上より判決すること。例へば天台宗の五時・八教、眞言宗の顯密二教・十住心、法相宗の三時教の類。教判。

けう-さう 【名】譽稱して、制しとどむることなりとも、**きやうさく**（警策）に同じともいふ。〔古語〕源氏「大臣は、いとあざれ、かたくなゝる身にて、けうさうし惑はされなんと宣ひて」

けう-さう 曉霜【名】あけがたの霜。

けうさ-さい 教唆罪【名】〔法〕他人を教唆して、一定の犯罪を構成せしめたる罪。教唆犯。次條參照。

けうさ-しや 教唆者【名】〔法〕教唆罪を犯したる者。拘留・科料のみに處すべき罪につきては、特別の規定あるにあらざれば罰せらるることなけれども、その他に於ては、自ら手を下したると同一の刑罰を受く。けうさにん。

けうさ-にん 教唆人【名】〔法〕前條に同じ。

けうさ-はん 教唆犯【名】〔法〕**けうさざい**（教唆罪）に同じ。

けう-さん 卦算【名】**けさん**（卦算）に同じ。〔古語〕枕「さうしに、けうさんして」

げう-さん 曉參【名】曉に參內すること。玉海「承久二年十一月十五日、此日五節參人也、云云、丑刻讀岐舞姫參入、（三所曉參、密密向二五節所一）」

げうざん-やき 樂山燒【名】出雲國松江市にて製する陶器。慶安年間、陶工倉崎權兵衛が長門國萩の土と釉（ウハグ）とを用ひて、松江の樂山にて製したるに始まる。萩燒に似て、點茶の茶椀・木壺・杯の類を多く作る。一旦廢絕せしを、近世復活す。一名權兵衛燒といひ、富士名（フヂ）燒と共に出雲燒と稱せらる。

けう-し 橋梓【名】『橘も梓も木の名、橘は高くして、父の尊嚴なるに似、梓は俯して、子の卑きに似たるよりいふ。周公その子伯禽と康叔との子道を愼まざるを怒りし時、商子この二樹を譬に引きて、教誡を加へし故事（尚書大傳周傳及び世說に見ゆ）あり』父子の尊卑。

けう-し 教旨【名】㊀をしへの趣意。㊁宗義を教ふる人。教員。㊂宗教の旨を說きて、傳道する人。

けう-し 教示【名】教へ示すこと。しめしてをしふること。

けう-し 孝子【名】**かうし**（孝子）に同じ。曲「松山鏡二「けうしの弔ふ功力に由つて」

けう-し 驕子【名】**けうご**（驕兒）に同じ。

けう-し 驕侈【名】おごりたかぶること。ほしいまま。驕傲。倨傲。

けう-し 嬌姿【名】なまめかしき姿。嬌態。

けう-し 驕肆・驕恣【名】心高ぶりてわがままなること。

けう-じ 驕兒【名】寵愛せられて、わがままなる兒。だだっこ。寵兒。

けう-じ 轎兒【名】かごかき。轎夫。轎子。轎丁。轎人。

けう-じ 教寺【名】**けうゐん**（教院）㊀に同じ。

けう-じ 嬌羞【名】なまめかしくはぢらふこと。はにかむこと。

けうじう-やく 矯臭藥【名】矯正藥の一。厭ふべき臭のある藥物の臭氣を矯めて、これが服用に耐へやすからしむる藥。

けう-じかう 教侍香【名】〔佛〕授戒會の時、教授師に從ひて、侍香の役を勤むる者。

けう-しき 教式【名】『英 Forms of teaching』教授の樣式。カントの分類によれば、講義式（教師の主として働くもの）・疑問式（教師、主として働き、生徒これに副ふもの）及び對話式（教師と兒童との、こもごも主となるもの）の三に分つ。教授樣式。

けう-しつ 教室【名】**けうぢやう**（教場）に同じ。

げう-じつ 曉日【名】あけがた。あかつき。

けうしつ-ようぐ 教室用具【名】教室に備へ付けおくべき器具。例へば机・腰掛・黑板・教壇・教卓などの類。

けう-しふ 教習【名】をしへならはすこと。をしへられて習ふこと。

けう-じん 轎人【名】**けうじ**（轎兒）に同じ。

けう-しん 驕心【名】おごりたかぶる心。慢心。

けう-しや 驕奢【名】おごり。ぜいたく。

けう-しやう 梟將【名】『梟は健の義』つよき大將。するどき將軍。

けう-しやう 驍將【名】つよき大將。勇將。

驍將の下には弱卒なし【句】大將勇悍なれば、おのづから配下にも勇士集まる。〔諺語〕

驍將の下には弱兵なし【句】前條に同じ。〔諺語〕文武五人男「驍將の下には弱兵なし」

けう-しやう 校正【名】**かうせい**（校正）㊀に同じ。〔古語〕遠歩色葉集「校正、ケウシヤウ」

けう-しやう 橋上【名】はしのうへ。

けうしやう-の-いた 交裝板【名】**けしやうのいた**（化裝板）に同じ。

けう-しやく 教跡・教迹【名】〔佛〕佛の說かれたる教の迹。「る書物。

けう-じやく 教籍【名】宗教の教義を記せ

けう-しゆ 教趣【名】教訓のむね。をしへの次第。

けう-しゆ 梟首【名】**ごくもん**（獄門）に同じ。

けう-しゆ 教主【名】㊀教化を垂るる主。㊁宗教の一派の元祖。けうじゅ。教祖。㊂〔佛〕**けうしゅせそん**（教主世尊）に同じ。

けう-じゅ 教授【名】㊀學術又は技藝を教へさづくること、又その人。㊁『英 Teaching 又 Instruction』適當の材料により、適當の智識を與へて、智の作用を開發し、且つその他の心意作用の發達を助くること。訓育・管理と共に、教育上の三大方法。（訓育に對して）㊂『英 Professor』帝國大學・學習院・文部省直轄學校・商船學校等の正教員の職名。㊃〔佛〕傳法・灌頂の時、行法と作法とを授くる僧。

教授の階段【句】**けうじゅかいだん**（教授階段）に同じ。

教授の樣式【句】**けうしき**（教式）に同じ。

けう-じゅ 教主【名】〔佛〕**けうしゅ**（教主）㊂に同じ。用明天皇職人鑑「けうじゅ釋尊再誕とは、後にぞ思に合せける」

けうじゅ-あじやり 教授阿闍梨【名】〔佛〕授戒の時の三師の一として、威儀作法等を教ふる比丘（ビク）。教授師。「に同じ。

けうじゅ-あん 教授案【名】**けうあん**（教案）に同じ。

けうじゅ-しゆう 教宗【名】〔佛〕佛祖の遺せる經論の意義を祖述する教。教內の宗法。**けうえ**（教衣）・**けうゐん**（教院）參照。〔禪宗の語〕

けう-しゆう 交衆【名】乘人に交はること。盛衰記「源空山門の交衆を止めて」「じ。

けう-じゆう 轎從【名】**けうばん**（轎番）に同じ。

けうじゅ-かいだん 教授階段【名】『英 Steps of instruction』或事項を十分に教授了るまでに、教師の取るべき順序。分解・總合・聯想・系統・方法の五段、又は豫備・提示・連結・總括・應用の五段を定め、これを五段教授と呼びたれど、受納・息索・應用の三段、又は豫備・提示・總括・應用の四段に分つもあり。教授の階段。

けうじゅ-がく 教授學【名】『英 Didatics』教授の目的・方法及び教材の選擇と排列とを研究して、系統的に組織する學。

けうじゅ-くわん 教授館【名】 土佐國高知市にありし舊高知藩の學校。寶暦十年の創立。文久二年致道館の設立せらるるに及びて廢す。

けうじゅ-さいもく 教授細目【名】『英Details of teaching plan』各學年・各科目の教材を、實際の教授に充てんがために、校長が適宜に選擇して、各學期・各週に配當し、その分量と進行の豫定とを、精細に示せるもの。主に小學校にて作る。

けうじゅ-し 教授師【名】〔佛〕■住持に代りて、大衆一同を指導する人。■**けうじゅあじゃり**(教授阿闍梨)に同じ。

けうじゅ-せそん 教主世尊【名】〔佛〕『佛教の開祖なるよりいふ』しゃか(釋迦)の敬稱。教主。

けうじゅ-はふ 教授法【名】教師の、生徒を教授する種種の方法。「(教式)に同じ。

けうじゅ-やうしき 教授樣式【名】けうしき

けうじゅ-やうぐ 教授用具【名】教師が生徒に教授する際に、必要なる器具、即ち圖書・器械・標本などの類。

けうじゅ-えいせい 教授衛生【英】『英Teaching hygiene』教授上において注意すべき諸種の衛生事項。例へば幼稚なる者ほど授業時間を少なくし、女生徒の體操は月經時において特に注意する等の類。教育衛生。

けう-しょ 教書【名】■謀侯の發する命令書。■『英Message 使者を以て送る書面の義にて、教示する權力あるにあらざれば、誤譯なり』英吉利にて、國王より議會に、若しくは議會の一院より他の一院に向ひて發する書面、又、亞米利加合衆國にて、大統領もしくは各州の知事より、國會又は州會に事務を報告し、又は立法の必要に注意を促すために發する書面。

けう-しょ 校書【名】かうしょ(校書)に同じ。

けう-しょう 喬松【名】■高き松。長松。文武五人男「喬松却りて風にもろし」■王子喬と赤松子と。ともに、支那古代の仙人。

喬松の壽(ジュ)**【句】**『前條(二)の二人の仙人のごとき壽を保つとの意』ながいき。「る經文。

けう-じょう 教乘【名】〔佛〕釋迦の說きた

げう-しょう 曉鐘【名】あけがたの鐘(ネ)の聲。あけのかね。

けう-しょく 教職【名】生徒に教授し、又は衆人を教導する職務。「色。

げう-しょく 曉色【名】あけがたの景色。曙

けう-しょく 矯飾【名】いつはり飾ること。

けうしょく-やく 矯色藥【名】矯正藥の一。藥劑に美色を與ふる藥。

けうしょ-でん 校書殿【名】平安城の大內裏の殿舍の一。安福殿の右、淸涼殿の左にありて、歷代の種種の書籍を藏め置きしところ。東面して紫宸殿を隔て、宜陽殿に對したり。ふみどの。ふどの。

けうしょ-どころ 校書所【名】校書殿の西廂の南口に位せしところ。

けうす 梟す【動佐變他】首をさらす。獄門にかく。さらしくびにす。

けうす 消失す【動下二自】きえうす(消失す)の約。〔古語〕萬葉「たちまちに心けうせぬ若かりしはだもしわみぬ」

けうす 校す・挍す【動佐變他】校正す。校合す。「同じ。

けうず 興す【動佐變自】きょうず(興ず)に

けうず 孝す【動佐變自】■よく親につかふ。孝行す。〔古語〕榮華「今はけうずると思ひて、出したてまつれ」■『かうし(孝子)■を見よ』亡き親などのために供養を營む。〔古語〕源氏「のちのちの御わざなどけうしつかふまつり給ふさまも、そこらのみこたちの御中にすぐれたまへるを」

けう-せい 教正【名】■をしへ正すこと。■**けうだうしょく**(教導職)を見よ。

けう-せい 教生【名】師範學校にて、その生徒をして、實習のために、附屬小學校の生徒を教へしむるもの。「こと。

けう-せい 矯正【名】曲れるをためなほすまめかしき聲。嬌聲【名】あだめきたる音聲。な

けう-せい 嬌聲【名】あだめきたる音聲。な

けう-せい 曉星【名】■あけがたの空に、まばらに殘れる星。曉天の星。晨星。■稀なる物事の譬。曉天の星。晨星。■明(ケウ)の明星」に同じ。

けうせい-じかん 矯正磁桿【名】羅針盤の自差を矯正するに用ふる人工磁石桿。

けうせい-じゅつ 矯正術【名】■矯正する方法。■**しんたいけうせいじゅつ**(身體矯正術)の略。

けうせい-ちょうかい 矯正懲戒【名】〔法〕公務員に加ふる懲戒の一。本人を矯正するを目的とす。即ち訓俻・譴責・停職などの類。(海汰懲戒に對して)

けうせい-やく 矯正藥【名】『羅Emollientia』矯臭藥・矯味藥・矯色藥の總稱。

けう-せう 嬌笑【名】なまめかしく笑ふこと。愛嬌ある笑。

けうせつ 橋節【名】〔兵〕船橋の一の船より、その次の船まで、又、架柱橋の一の柱より、その次の柱までの稱。

げうせつ 曉雪【名】あけがたのゆき。

けうせふ 交接【名】〔佛〕まじはり接すること。いりまじらふこと。榮花「尊靈、かの四方世界に生れたまひなど、樂をうけたまはんとき、極みもなく、人天交接、二つながらあひ見ることを得たまふ」

けうせふ 趫捷【名】『趫は善く走る意』みがるくすばやきこと。擧動の敏捷なること。輕捷。

けうせん 驕僭【名】おごりたかぶりて、分に過ぎたること。驕慢にて僭越なること。

けうぜん 敎禪【名】〔人〕平安朝時代の佛畫家。後冷泉天皇の勅に依り、法成寺に百二十一體の佛像を描き、佛繪師・僧綱に任ぜらる。承和二年寂す。「同じ。

けうぜん 皎然・皎然【貌】かうぜん(皎然)に

けう-そ 敎祖【名】宗教の各派の始祖。

げう-そ 翹楚【名】『翹は特にぬきんですぐるる義、楚は柴薪中の最もすぐれたるものなるよりいふ』衆にすぐれたること、又その人。拔群。

けう-そく 敎則【名】敎授上の規則。

けう-たい 交代【名】かうたい(交代)に同じ。

けう-たい 驕泰【名】おごり。

けう-たい 嬌態【名】あだめきたる姿。しな。艷態。嬌姿。嬌容。

けうたい 敎待【名】〔人〕古、三井寺の山上に居ること百餘歲、常に龜と魚とを食ひ、智證大師の來るを待ちて、寺を付し、百六十二歲にして逝けりと云傳へられたる人。

けう-だい 橋臺【名】はしだい(橋臺)に同じ。

げうたい 曉臺【名】〔人〕**くむらげうたい**(久村曉臺)を見よ。

げうたい-しちぶしふ 曉臺七部集【名】〔書〕久村(クサ)曉臺及びその門人の句集七部。

けうだう 敎導【名】■をしへみちびくこと。〔敎道〕■**くわんり**(管理)に同じ。

けうだう-しょく 敎導職【名】明治五年太政官より敎部省に下しし「敬神・愛國の旨を體すべき事」・「天理・人道を明かにすべき事」・「皇上を奉戴し、朝旨を遵守せしむべき事」の敎憲に基づきて、國民一般を敎導せしむるために設けし職。敎正・講義・訓導・試補の四階ありて、更に敎正・講義を正・權大・中・少に、訓導を正・權に分ち、多く神官・僧侶を補せしが、明治十七年廢止して、その職掌を各敎派の管長に委任せり。

けうだう-たい 敎導隊【名】陸軍諸兵科學生の訓練及び諸般の研究に充つるため、それぞれの專科學校に設くる特別部隊。各聯隊中より拔擢して派遣する下士を以て組織す。

けうだう-だいたい 敎導大隊【名】大隊組織の敎導隊。前條參照。

けうだう-だん 敎導團【名】りぐんけうだうだん(陸軍敎導團)の略。

けう-たく 敎卓【名】敎授の際に用ふる卓。

けう-だつ 矯奪【名】いつはりて奪ひとること。

げう-たつ 曉達【名】つうげう(通曉)に同じ。

けうたふま 喬答摩【名】〔人〕くたん(瞿曇)に同じ。

けうたふみ 喬答彌【名】〔人〕『もとけうたふま(喬答摩)即ち瞿曇(クダ)姓の女性を示す語』釋迦の叔母。摩耶夫人(マヤ)釋迦を生

みて、七日目に殁せしかば、釋迦はこの婦人に養育せられたり。一名、波闍波提(Pajāpati)。舊稱、憍曇彌(ケウダン)。

けうだん 敎壇【名】かうだん(講壇)に同じ。

けうだん 敎團【名】同一の敎義を奉ずるものの集團。僧團。

げうたん 曉旦【名】よあけ。あかつき。あけがた。

けうち 毛打【名】蒔繪にて、鳥獸の毛などのごとき細き線を、漆にて蒔くこと。

げうち 曉智【名】さとき智能。

けうちんな 憍陳那(梵 Kaundinya 巴利 Koṇḍañña)【名】〔人〕印度の高僧。釋迦に從ひて、六年の苦行を共にしたる五大弟子の隨一。舊稱、憍陳如。

けうちんによ 憍陳如【名】〔人〕前條に同じ。

けうぢやう 敎場【名】學校の、敎授を施す室。敎室。

げうちゆう 蟯蟲【名】〔動〕線蟲類に屬する、絲屑樣の白色なる圓蟲。大なるは三四分に達し、人體(殊に小兒)の盲腸・直腸部などに無數に寄生し、肛門部に痒(カユ)みを感ぜしめ、腟内に侵入しては、腟カタル・潰爛等を發せしむ。



(うゆちうげ)

けうつ 敎父【名】〔基〕『羅 Patres ecclesiæ』天主敎にて、敎皇(ケウクワウ)の稱。

けうつ 敎父【名】〔基〕『羅 Papa』天主敎の僧。名は光壽、顯如の長子。初めて新門跡と稱す。慶長七年本願寺を二派に分ち、敎如東本願寺の開祖となり、權僧正に補せられ、同十九年寂す。年五十七。

けうつう 曉通【名】つうげう(通曉)に同じ。

けうつい 轎丁【名】けうふ(轎夫)に同じ。

けうてい 敎程【名】敎授の程度。

けうでう 敎條【名】しんでう(信條)に同じ。

けうてき 梟敵【名】梟惡な敵手。

けうてぐみ 蹴腕組【名】古の相撲(スマヒ)の手の一。

けうてん 敎典【名】■宗敎の經文又は法式。經典。■敎育上の典範。

げうてん 曉天【名】あけがたのそら。よあけ。あけがた。

曉天の星【句】**げうせい**(曉星(ケウセイ))に同じ。「寥として曉天の星の如し」

けうと 敎徒【名】或宗敎を信奉するともがら。信徒。

けうと 氣疎【名】けうときこと。薩摩歐「じ。

「けうとやこはや」

けうとう 敎頭【名】がくとう(學頭(ガクトウ))に同じ。

けうとう 橋頭【名】■**けうはん**(橋畔)に同じ。■橋の詰(ツメ)。橋のたもと。

けうとうはう 橋頭堡【名】〔兵〕橋梁掩護の目的を以て、その前後に築きたる堡壘。けうとうほ。

けうとうほ 橋頭堡【名】〔兵〕前條に同じ。

けうとし 氣疎し【形一】うとまし。厭はし。きやうとし。(京都にては、今もきようとしの如く發音して用ふ)〔古語〕源氏「しひておぼめかしう、けうとくもてなさせたまふなれば」金平法關諍「上人けうとき顏にて、扱も兵庫殿は風流なる出立」

けうとなし 氣疎無し【形一】『なしは接尾語、無は假借の字』**けうとし**(氣疎し)に同じ。女殺油地獄「ええ、けうとなげな。身も顏も泥だらけ」

けうとまし 氣疎まし【形二】**けうとし**(氣疎し)に同じ。榮花「大風吹き、なゐなどさへ振りて、いとけうとましき事のみあれば」

けうどんみ 橋墩彌【名】〔人〕**けうたふみ**(喬答彌)に同じ。增鏡「けうどんみの釋迦佛養ひ奉りけん心地して」

けうない 敎内【名】〔佛〕釋迦の說法を聞きて、得道すること。經文・言句を以て、敎法を傳へ授くること。禪宗以外の宗風これなり。(敎外に對して)〔禪宗の語〕臨曲(天會「それ、一代の敎法は、五時・八敎をけづり、敎内敎外を分たれたり」

けうなう 膠囊【名】液狀又は不快なる臭味ある等の藥物の服用を容易ならしむるために、これを容るるに用ふる小嚢狀物。晒膠・アラビヤゴムなど、消化管内にて、消化溶解する膠質を用ひて造り、同質の蓋にて被ふ。かうなう。かぶせる。

けうなうざい 膠囊劑【名】膠囊に包みて嚥下する藥劑。かうなうざい。

けうによ 敎如【名】〔人〕本願寺第十二世

けうねんほふしんわう 堯然法親王【名】〔人〕後陽成天皇第六の皇子。俗名は常嘉。書畫を善くし、又、茶事を好む。天台座主となる。寛文元年薨ず。御年六十一。

けうは 敎派【名】宗門のわかれ。宗敎の分派。宗派。

けうはう 橋砲【名】〔兵〕『滑動砲架に架する火砲の義』きうはう(臼砲)の舊稱。

けうばう 驕慢【名】おごりて氣のあらきこと。

けうばう 敎坊【名】■支那にて、樂人を置きて俗樂を司らしめし官署。ないけうばう(內敎坊)參照。■遊者屋町。遊里。

げうばう 翹望【名】首をあげてのぞみまつること。翹首して渴望すること。

げうはく 澆薄【名】世、澆季となりて、人情の浮薄となれること。澆季。澆運。澆漓。

けうばく 蕎麥【名】■〔植〕**そば**(蕎麥)に同じ。■**そばきり**(蕎麥切)に同じ。

けうはん 橋畔【名】はしのほとり。橋頭。

けうはん 敎判【名】〔佛〕「敎相判釋」の略。

けうはん 敎範【名】敎ふるのり。「從。

けうばん 轎番【名】轎を荷ふ僕。轎僕。轎

けうふ 矯誣【名】いつはりしふること。

けうふ 轎夫【名】かごかき。轎兒。轎夫。轎丁。

けうふ 敎父【名】〔基〕■『羅 Papa』天主敎にて、敎皇(ケウクワウ)の稱。■『羅 Patres ecclesiæ』天主敎にて、古昔ドグマを擁護して、キリスト敎會の干城となりたる博士及び文士。■『英 God-father』洗禮の時の保證人。

げうぶ 驍武【名】たけきこと。つよきこと。驍勇。勇武。

けうふう 矯風【名】**けうへい**(矯弊)に同じ。

げうふう 曉風【名】あかつきの風。

けうふーがく 敎父學【名】〔基〕『英 Patristics and patrology』敎父の敎說及び述作に對する批評的及び組織的研究。

けうふく 梜腹【名】『左傳の襄公二十八年の條に「梓愼曰、元梜虛レ中、梜耗名也、土虛而民耗、不饑何爲」、又、正字通に「凡物饑耗曰レ梜、人饑曰二梜腹一」とあり』すきばら。空腹。

けうぶしやう 敎部省【名】明治五年神祇省の廢止と同時に宗敎行政を掌りし中央官廳。卿・大少輔・大少丞・大中少錄等の職員あり。初は敎義・敎派・敎則に關する事を管し、社寺の廢立、祠官・僧侶の等級及び社寺の格式等を理めしが、明治八年改正して、神佛各宗の敎義・敎則また社寺・陵墓等に關する事務を管理し、神官・敎導職を統轄することとなり、同十年廢せらる。

けうふーてつがく 敎父哲學【名】〔哲〕『英 Patristic philosophy』歐洲中世期において、基督敎の敎義を合理的に說明して、信仰の基礎を固からしむるために起りたる哲學。この時期には、敎父等こもごも起りて、ギリシヤ哲學を究め、敎會の敎義を擁護すべき新學說を唱へ出せるによりて、この名あり。

けうへい 矯弊【名】弊風をためなほすこと。矯風。

けうへい 驕兵【名】勝ちほこりたる兵。

けうべん 敎鞭【名】昔、敎師が、生徒を警め訓ふるために持ちし鞭。

けうべん 敎鞭を執る【句】敎師となりて、生徒を敎授す。

けうぼく 敎僕【名】『英 Pedagogue』古、ギリシヤ國の雅典(アテ)にて、家庭に於て、兒童の從者・保護者・監督者且つ相談相手たりしもの。

けうぼく 喬木【名】■たけ高き木。たいぼく。■〔植〕木本の一種。一本の主幹ありて、高さ數丈に成長し、根際より枝を分つことなき性質の木。例へば松・柏・杉・樫などの類。

喬木、風多し【句】次條に同じ。〔諺語〕

喬木、風に折らる【句】高き木は、風に折られ易し。傑出せるものは、人の疾(ニク)などを受易し。〔諺語〕

けうぼく 梟木【名】梟首に用ふる木。さらしぎ。ごくもん臺。

けうぼく 轎僕【名】**けうばん**(轎番)に同じ。

けうぼくたい 喬木帶【名】〔地〕高山における植物分布上の一帶。喬木繁茂して、森林をなす所。その上に灌木帶あり。

けう-ぼふ 教法【名】〔佛〕『教法所詮の義理を理法といひ、理に依って行ずる戒(カイ)・定(ヂャウ)・慧(エ)を行法(ギャウフ)といひ、行滿じて得る所の有爲(ウヰ)・無爲の證果を果法といひ、教法と合せて四法といふ』宗門のをしへ。佛教。

けう-ほふ 教法(ケウホフ)【句】〔佛〕釋迦の一生に説きたる教。ごじけう(五時教)・さんじけう(三時教)參照。

けう-ほん 教本【名】㊀敎化の根本。㊁けうくわしよ(教科書)に同じ。

けうぼんばだい 憍梵婆提・憍梵鉢提(梵 Gavāmpati)【名】〔人〕『牛呵牛王・牛相などと譯す』十六羅漢の一。釋迦の入滅を悲しみ、自身もまた入滅せんとし、神變を現じて、身より大水を出だし、迦葉(カセフ)の處に到りて、水中より「憍梵婆提尊者禮、妙業第一大德僧、聞佛滅度我隨去、如大象去象子去」といふ四句の偈(ゲ)を說けり。槃花「憍梵婆提は、水偈を唱へて、水と流れなどして」

けう-まう 敎網【名】〔佛〕衆生を魚に譬へ、佛敎を網に譬へていふ語。

けう-まう 梟猛【名】つよくたけきこと。梟惡・勇猛なること。

げう-まう 驍猛【名】ゆうまう(勇猛)に同じ。

げう-まつ 澆末【名】げうき(澆季)㊀に同じ。

けう-まん 驕慢・憍慢【名】おごりたかぶること。ほこること。うぬぼれ。日本武尊吾妻鑑「殊に我執驕慢の惡念深く」

けう-まん 驕滿【名】けういつ(驕溢)に同じ。

けう-みやう 交名【名】上進書などに、多くの人名を連ねて書きたるもの。連名。〔古語〕保元「內裏へ召さるべき武士の交名を記し置かせたまへるなり」

けうみ-やく 矯味藥【名】矯正藥の一。不味の藥物に調和して、服用に耐へやすからしむる藥。「門上の事務。㊁宗門上の事務。

けう-む 敎務【名】㊀敎授上の事務。

けう-む 計有無【名】〔佛〕凡夫の三癡の一。萬法と我とを、或は有と斷じ、或は無と斷じて、非有・非無の眞相を知らざること。

げう-む 曉霧【名】朝方のきり。あさぎり。

けうむ-じよ 敎務所【名】㊀宗敎上の事務を扱ふ所。㊁監獄內にありて、在監囚の敎誨及び敎育の事務を掌る所。「こと。

けう-めい 矯命【名】命令を矯めいつはること。

けう-めい 矯名【名】あだめきたる名、即ち藝妓などの名。

げう-めい 驍名【名】驍勇のきこえ。

けう-めう 巧妙【名】かうめう(巧妙)に同じ。

けう-めん 蕎麵【名】けうばく(蕎麥)㊁に同じ。「句。

けう-もん 敎文【名】佛典の文章。經論の文

けう-もん 敎門【名】しゆうもん(宗門)に同じ。「炎陽。

けう-やう 驕陽【名】照りつくる夏の日光。

けう-やう 孝養【名】㊀かうやう(孝養)に同じ。〔古語〕源氏「けうやうの心ふかく」㊁『かう(孝子)を見よ』亡き親などのために、ねんごろに後世を弔ふこと。〔古語〕盛衰記「この妻を、本の形に成したまへ。最後の孝養仕らん」

けう-やう 敎養【名】をしへ、そだつること。しつけ。敎育。

けうやう-くわご 敎養過度【名】『獨 Ueberkultur』敎育を過度に受け、高き思想を有し得たるがために、反って凡俗と伍することの能はず、ために不用なる人間として存在する外なきに至れること。

けうやう-くわん 敎養館【名】遠江國小笠(オガサ)郡掛川(カケガハ)にありし舊掛川藩の學校。文武場の總名にて、文敎を司る處は、德造書院と稱し、享和二年に創立し、明治初年移封の後も、斷續して、同五年に廢す。

けう-やく 交易【名】かうえき(交易)に同じ。〔古語〕叁考「八年といふに、けうやくの船につきて、この國に歸りぬ」

けう-やく 敎益【名】〔佛〕敎法より受くる功德(クドク)・利益(リヤク)。

けう-ゆ 敎諭【名】㊀をしへさとすこと。學術を敎ふる人。㊁師範學校及び公立の中學校・高等女學校又は各種實業學校(實業補習學校を除く)の正敎員の職名。

げう-ゆ 曉諭【名】さとすこと。

げう-ゆ 梟雄【名】梟勇にして、すぐれたること、又その人。

けう-ゆう 梟勇【名】梟惡にして勇猛なること。殘忍にして武勇なること。

げう-ゆう 驍勇【名】たけくつよきこと、又その人。

けう-よ 轎輿【名】人を乘せて舁(カ)き行く、小さき輿。あげごし。かご。

けう-よう 矯容【名】けうたい(矯態)に同じ。

けう-よく 矯抑【名】おさへつくること。ためおさふること。抑制。

げう-よく 樂欲【名】〔佛〕こひねがひ望むこと。愛執欲望すること。徒然「六塵の樂欲多しといへども、みな厭離しつべし」

けう-ら 毛裏【名】衣服の裏に毛の附きたるもの。うら毛の衣。

けう-ら 毛末【名】毛のすゑ。毛のはし。

けう-ら【皎】『けは氣、うらはうらか(麗らか)の義なるべし』うるはしきさま。きよら。〔古語〕榮花「內侍のすけ、いとけうらにさうぞきて」

げう-り 敎理【名】宗敎上の道理又は理論。

げう-り 澆漓【名】『漓は醨に通ず。醨は薄酒の義より轉じて、薄き意に用ふ』げつはく(澆薄)に同じ。

けう-り-がく 敎理學【名】〔哲〕けうりろん(敎理論)に同じ。

けう-り-しんがく 敎理神學【名】〔哲〕けうりろん(敎理論)に同じ。

けう-りん 喬林【名】㊀喬木の森林。㊁『獨 Hochwald』種子或は苗木を用ひて造林せる林。(矮林に對して)

けうりんくわん 敎倫館【名】下總國東葛飾(シカ)郡關宿(セキヤド)にありし舊關宿藩の學校。文政中の創立、明治五年廢止す。

けうりやう 橋梁【名】はし(橋)に同じ。

けうりやう 較量・校量・挍量【名】㊀かうりやう(校量)に同じ。㊁おしはかること。推察。義經記「これを以てけうりやうし給へ」

けうりやう-へう 橋梁標【名】『英 Bridge sign』機關車及び列車の運轉上、並びに線路の保存上、機關車車掌及び保線手に便宜を與ふるため、橋梁の番號・位置・延長等を記入して、その前後に建つる標。

けうり-ろん 敎理論【名】〔哲〕『英 Dogmatics』敎理を論理的に論究する學問。敎義論。敎理學。敎理神學。「と。

けう-れい 敎令【名】敎へ示して命ずること。

けう-れう 校了【名】かうれう(校了)に同じ。

けう-れん 敎練【名】㊀敎へならすこと。㊁くんれん(訓練)㊁に同じ。㊂〔兵〕各級指揮官及び兵卒を訓練して、戰爭の用に供する目的の敎法。

げう-ろ 曉露【名】あけがたの露。あさつゆ。あかつきつゆ。

けう-わ 驕橫【名】おごりたかぶりて、我がままなること。「じ。

けう-わう 敎皇【名】ほふわう(法王)㊁に同じ。

けうわうごこくじ 敎王護國寺【名】とうじ(東寺)に同じ。

けう-ゐん 敎院【名】㊀〔佛〕敎相家の經論を研究する寺。經文の義理を研究する道場。敎宗の寺。敎寺。(禪院・律院に對して)㊁〔佛〕敎務を取扱ふ寺院。㊂明治維新後、敎導職を養成せし講習所。大・中・小の別ありたり。

けう-ゐん 敎員【名】敎授及び訓育の任務を有する者。敎師たる人。

けう-ゐん-くわいぎ 敎員會議【名】一校の敎員が集合して、授業上などの事項について議すること。

けうゐんけんてい 敎員檢定【名】師範學校・中學校・高等女學校及び小學校の敎員たらんことを志願する者の學力・品行・身體を檢定すること。前者には試驗檢定と無試驗檢定との二種あり。

けうゐんけんていしけん 敎員檢定試驗【名】敎員檢定のために行ふ試驗。師範學校・中學校及び高等女學校の敎員の檢定試驗は文部大臣これを行ひ、小學校敎員の檢定試驗は、府・縣知事これを行ふ。

けうゐんけんていゐゐん 敎員檢定委員【名】敎員檢定委員會を組織する委員。文部大臣の奏請により、內閣にて任命す。常任委員と臨時委員とあり。前者は會長の指揮を受けて、敎員檢定に關する事を掌り、

後者は試驗施行の際に命ぜられて、會長の指揮を受け、試驗檢定の事を掌る。

けうねんけんていいゐんくわい 教員檢定委員會【名】文部大臣監督の下に、會長・常任委員・主事及び臨時委員を以て組織し、教員檢定の事務を管掌する會。

けうねんめんきよじやう 教員免許狀【名】中學校・師範學校・高等女學校又は小學校の教員たる資格あることを證明する免狀。前者は文部大臣より下付し、後者には府・縣知事より下付するもの(即ち府・縣免許狀)と、文部大臣より下付するもの(即ち普通免許狀)とあり。

けうねんやうせいじよ 教員養成所【名】教員を養成する學校又は講習所。

けうゑん 教圓【名】〔人〕高僧、華山天皇に師事し、能く唯識論を誦す。大僧都となり、天台座主に任ぜらる。永承二年寂す。年七十。

けえーあるはふそく ケエアル法則(英 K. F. law)【名】〔理〕電話機によりて通話し得る距離制限上の法則。

けえき (英 Cake)【名】次條の訛。

けえく (英 Cake)【名】菓子。けえき。

けえーけえ【名】**けしやう**(化粧)を云ふ。〔江戸時代の小供の語〕浮世風呂「紅をつけて、けえけえをして」

けえけえぶち 貝貝打【名】江戸時代に行はれし遊戯の一。蛤貝の一片を地上に撒(ま)き置きて、手にせる他の一片を投げ當つるもの。浮世風呂「湯から上がったらの、あの、けえけえぶちをしねえか」

けえざるれき ケエザル曆【名】**じゆりやんれき**(英 Gregorian calendar)に同じ。

げえじ (英 Gauge 又は Gage)【名】**きかく**(軌隔)に同じ。

けえす (英 Case)【名】一〔話〕かく(格)五に同じ。二活版所にて、活字を入置くに用ふる、細かき區劃を有する箱。植字臺の上に載せおき、採字の用に供す。三**やくふ**(藥莢)に同じ。四箱。函。

けえす-めいと (英 Case mate)【名】裝甲艦において、六インチ以上の副砲及び砲員等を防護するため、甲板間に設けたる、裝甲の室。最近製造の軍艦は、この裝置を用ひざるに至れり。

げえとる (英 Gaiter)【名】洋裝の場合に、雨天又は旅行などの時、行歩を輕捷ならしむるために、膝より以下にズボンの上より纏ふ裝、即ち我が國在來の脚絆の類。

げーえふ 花葉【名】**くわえふ**(花葉)に同じ。著聞「加持の間、すなはち花葉を出したり」

けえぷ (英 Cape)【名】洋服の外套の一種。袖なくして、身體に纏ふもの。男女共に用ひ、通例、襞を有す。まはし。とんび。

けえぷーからあ (英 Cape-collar)【名】ケエプのごとくに見ゆる襞。主として、婦人又は男女兒の洋服に用ふ。水兵服の肩より背に垂れたるものも、その一種なり。

げえぶん 外聞【名】**ぐわいぶん**(外聞)に同じ。〔江戸時代の俚語〕藤栗毛「お伊勢樣までいって來にゃ、げえぶんがわるい」

けえぶる (英 Cable)【名】一絕緣物にて包裝したる電線の一條もしくは數條を集束し、更にその上に、種種の外裝を施せるもの。その用途に隨ひて、架空ケエブル・地下ケエブル・水底ケエブル・局内ケエブルなどに大別す。**けえぶるしんせん**(けえぶる心線)參照。二鎖に用ふる鐵鎖。普通の鎖の輪に短柱を具へたるもの。鏈鎖。

けえぶるーかあ (英 Cable-car)【名】索條により運轉するに適するやう裝置せる、客車又は貨車。索條は兩端を互に連結して、無端となし、これを發・著兩所における車輪に纏ひ、その車輪の一方に動力を及ぼせば、索條は、これを適當の裝置によりて捉へたる客車又は貨車と共に進行す。

けえぶるーしんせん ケエブル心線(英 Cable core)【名】〔理〕ケエブルの、絕緣せる電線。

げえむ (英 Game)【名】一遊戲。勝負事。競技。闘技。二勝負の得點數。

げえむーせつと (英 Game-set)【名】勝負定まり、競技に一段落附きたり。勝負あったり。

けーえん 化緣【名】〔佛〕敎化の因緣。佛・菩薩のこの世に來るは、化緣あるが故にして、化緣盡くれば、即ち去ると說く。高僧和讃「化緣すでに盡きぬれば、淨土に還りたまひにき」

げーえん 外緣【名】〔佛〕外部より加はる緣。即ち感覺界の媒介によりて生ずる緣。(內緣に對して)**えん**(緣)四參照。

げえりゅさっくーたふ ゲエリュサック塔(英 Gay-Lussac tower)【名】〔化〕硫酸製造に要する硝酸の蒸氣の消費を防ぐ裝置の塔。鉛室內より逃ぐる窒素の酸化物を回收するために、塔の上部より濃硫酸を雨の如く降らし、窒素の酸化物をこれに吸收せしめて、塔底に留まらしむる用をなす。**ぐろおばあたふ**(ぐろおばあ塔)參照。

げえりゅさっくーのーていりつ ゲエリュサックの定律(英 Gay-Lussac's law)【名】〔理〕『佛蘭西の化學者且つ物理學者ゲエリュサック(Gay-Lussac)の、シャアルの研究を知らずして、獨立に發見せしによりていふ』**しやあるのていりつ**(しやあるの定律)に同じ。

けえる (英 Kail)【名】〔植〕**りよくえかんらん**(綠葉甘藍)に同じ。

けーおさる 氣壓さる【動下二自】『け(氣)は接頭語』いきほひにおさる。〔古語〕源氏「御さまげにいと殊なり、花のにほひもけおされて、なかなかことざましになん」

けーおそろし 氣怖し【形二】『け(氣)は接頭語』**おそろし**(怖し)に同じ。〔古語〕源氏「だらにの嶺の高きは、いとけおそろしくて」

けーおとす 蹴落す【動四他】足にて蹴ておとす。二その地位よりおとす。失脚せしむ。排擠す。

けーおとり 氣劣【名】一**け**(氣)は接頭語』**おとり**おとること。〔古語〕蜻蛉「下衆がちなる心地して、けおとりしてぞ覺ゆる」

けーおとる 氣劣る【動四自】『け(氣)は接頭語』**おとる**(劣る)に同じ。〔古語〕源氏「きのふ見し御けはひには、けおとりたれど」

けーおり 毛織【名】毛絲にて織りたること、又その織物。羅紗・フランネル・セル等の類。毛織物。二木綿(もめん)を毛ばだたせて織ること、又その織物。

けーおりーもの 毛織物【名】前條一に同じ。

けーが 怪我【名】一あやまち。そさう。過失。きのふはけふの物語「ある若衆、心者と寢て、怪我をして…、心者、鼻をふさぎて」女殺油地獄「ああお侍樣、けがでござる。御免なませ」二あやまちて、身體にきずつくること。桃記「念なく池中に落ちたりと見えしが……怪我は無きかと打ちよりて見れば」怪我にも【句】あやまちにも。まちがひても。かりそめにも。

怪我の功名【句】「過(あやまち)の功名」一に同じ。吾妻鏡「人しれぬころびてつきし向ふ疵いえぬる後や怪我の功名」

けーが 假我【名】〔佛〕この身は、五蘊(ごうん)の假合(けがふ)によりて成りたるものにて、實在の我れにあらざること。

けが 氣賀【名】〔地〕遠江國引佐(いなさ)郡にある町。濱松町の西北三里半。郡役所を置く。近藤氏の舊藩地。

げーかい 下界【名】一〔佛〕三界の中の慾界。吾人人類の生存する世界。人間の世界。大地。人界。(上界に對して)鰮鰹天皇甘露雨「上界・下界の八大龍王百千眷族の龍神を封じて、水瓶に封じこめたる故」二**りゆうぐう**(龍宮)の異稱。

げーかい 外界【名】〔佛〕六識の內の、地・水・火・風・空の五界。(內界に對して)

げーかい 外海【名】〔佛〕九山(くせん)・八海の內の、七金山(しちきんせん)の外に在りて、外邊を鐵圍山にて圍まれたる海。(內海に對して)盛衰記「第八外界の小龍めら」

げーかい 外階【名】**げだ**(外位)に同じ。(內階に對して)〔古語〕

けかいーなし 結解無し【形一】きまりなし。しどけなし。放埒なり。高野參詣日記「雨けとは見つつも出でて濡れにけりけかいなしなる今日の道かな」「區の町。

けかいーねん 花開院【名】〔地〕京都市上京區の一。盛衰記「佛に花香參らせて、後の世弔ひたまへ」

げーかう 下向【名】一高きより低きへ赴くこと。二都より田舍へゆくこと。盛衰記「十一月ごろ國に下る。衆徒會合して曰く、

理訳を究めずして下向の條いはれなし」
㊁次條に同じ。 ㊂稲前におもひ起して参りたるに…ひつじには下向しぬべし」

げかう 還向【名】神佛に参詣して歸ること、又その時。下向。 今昔「今熊野にまゐりて、兩三日御明し、御幣を捧りて、還向のついでに」

げーかうし 下格子【名】格子をおろすこと。〔古語〕 大鏡「月のあかき夜は、下格子もせで、ながめさせたまひけるに」

げかうーだち 下向道【名】下向の道。げかうみち。 謡曲 吉野靜「これは、都道者(ミヤコビト)にて候ふが、法樂の舞の由承り、下向道を忘れて候ふ」

げかうーみち 下向道【名】前條に同じ。 孕常盤「清水詣の下向みち」

げーがき 毛描【名】日本畫にて、人體又は動物の毛部を細かに描くこと。

げーがき 毛掻【名】㊀織物仕上工程の一。無數の小鉤針を植ゑたるロオル又は刷毛(ケ)などにて、織物の表面を掻搔(カキ)りて毳(ケバ)を起つること。 ㊁製革工程の一。皮面を鈍刀にて摩擦して、細毛を除くこと。

げーがき 罫描【名】『英Marking-off』機械の製作上、旋盤工場及び仕上工場における、重要なる工程の一。鍛冶工及び鑄物工場より來る半製品の粗鬚(ソヂ)なる面を削り、又は「むく」の部分に孔をあくる等、刃物を當つべき標準の線又は點をしるす仕事。

げーがき 夏書【名】〔佛〕夏籠(ゲゴ)して、經文を書寫すること。**げがきをさめ**(夏書納)參照。 天の網島「一つ蓮の頼には、一夏に一部夏書せし大慈大悲の普門品」

げがきーふで 毛描筆【名】面相筆(メンサウデ)の最も小さきもの。毛描に用ふ。

げがきーをさめ 夏書納【名】〔佛〕僧侶が、夏籠(ゲゴ)中に、經文を書寫して、三界の萬靈に廻向(エカウ)するために、七月十六日の夏解(ゲゲ)の日、寺塔に納むること。

げーかく 蹴掛く・蹴懸く【動下二他】㊀蹴ることを仕掛く。 太平記「若黨どもに押隔てられ、馬ざくりの水を蹴懸けられて」 ㊁水などを蹴てあびす。けあく。

げーかけ 褻掛【名】古の女の衣の名なれど、實物詳かならず。「と。

けがし 穢・汚【名】けがすこと。きたなきこと。

けがし 穢し・汚し【形二】**けがらはし**、穢らはしに同じ。〔古語〕 萬葉「いかならむ時にか妹をむぐらふのけがしきやどに入りまさしめむ」

けがす 穢す・汚す【動四他】㊀けがれしむ。不淨になす。よごす。 枕「あいなく、みなつつまれて、書きけがしなどしたるもあり」 ㊁わるくす。あしざまにす。名譽をそこなふ。 ㊂實力德望なくして、高き位地に就く。はづかしむ。 平治「信頼などが身を以て、大將を汚さば、いよいよ奢をきはめ」

けーかち 飢渇【名】きかつ(飢渇)に同じ。〔古語〕 遍歩色葉集「飢渇、ケカチ」

けーかちまけ 毛勝負【名】作毛(サク)の出揃はぬこと。

けーかつ 飢渇【名】きかつ(飢渇)に同じ。〔古語〕 遍歩色葉集「飢渇、ケカツ」

けーがに 毛蟹【名】〔動〕つがに(津蟹)に同じ。

けがにん 怪我人【名】怪我をしたる人。負傷者。

けーがは 毛皮・毛革【名】獣の皮を、毛を去らずに鞣(ナ)したるもの。あらかは。

けがはーざうり 毛皮草履【名】毛皮にて造りたる草履。

けがはり 毛更【名】動物の毛の季節に因りて、脱けて生えかはること、又その生えかはりたるもの。

けーがひ 毛貝【名】〔動〕いがひ(貽貝)を云ふ。〔山陰道の方言〕「同じ。

けーがふ 假合【名】〔佛〕**けわがふ**(假和合)に假合の身【句】〔佛〕人の身は、衆緣の假合によりて成れるものなること。**げがし**。

〔假我參照。〕

けがぶね 怪我船【名】、**われぶね**(破船)に同じ。

けーがへ 毛替【名】田に植うべき農作物を畠に植ゑ、畠に植うべき農作物を田に植うること。〔江戸時代の語〕

けーかへし 蹴返・蹴反【名】㊀けかへすこと。 ㊁相撲(スマ)の手の一。四つに組み、我が足にて、敵の足を蹴て倒すこと。

けーかへす 蹴返す・蹴反す【動四他】㊀蹴て、もとのところへ遣る。 ㊁蹴て、くつがへらしむ。 ㊂他に蹴られて、またこの方より蹴る。 ㊃幾度も蹴る。 ㊄相撲(スマ)にて、けかへしを行ふ。

けがーほけん 怪我保險【名】しやうがいほけん(傷害保險)に同じ。

けがまけ 怪我負【名】過ちて負くること。 曾我「怪我負いたしつるこそ無念に覺え候」

けがみ 罫紙【名】けいがみ(罫紙)に同じ。

げかん 下間【名】佛堂に向ひて右の室。

げかん 下駈【名】馬のはりのなきこと。駈のわるきこと。

げかん 下疳【名】〔醫〕『獨Schanker』梅毒の、男子にありては陰莖及び包皮、女子にありては大陰脣及び子宮頭に發するもの。舊稱。軟性下疳・硬性下疳の二種に分つ。

げかん-さう 下疳瘡【名】〔醫〕前條に同じ。

けーかものはし 毛五瓜草蘚【名】〔植〕禾本(カホ)科に屬する多年生の草。匍匐莖の毎節より根を生じ、葉は線狀にして、莖にも葉にも白き毛茸あり。夏、小穗狀の花を著け、赤、長き白毛密生す。所在の海濱・沙地に自生す。はさみじねんご。

けがらし 穢らし・汚らし【形二】**けがらはし**(穢らはし)に同じ。

けーがらす 毛硝子【名】硝子を極めて細く引きのばして、毛狀にしたるもの。

けがらはし 穢らはし・汚らはし【形二】㊀穢れたるさまなり。けがれて、きたなし。けがらし。 ㊁厭ひ惡むべし。唾棄すべし。 ㊂月經にかかりてあり。經水母衆・出羽の辨・染殿の中將例のけがらはしきに、里にまかでありし」

けがらひ 穢・汚【名】けがらふこと。けがれ。〔古語〕 源氏「かかるけがらひありと、のたまひて」

けがらふ 穢らふ・汚らふ【名】**けがる**、穢るの延。〔古語〕 源氏「けがらひたる人とて、立ちながらおひかへしつ」

けがる 穢る・汚る【動下二自】㊀きたなくなる。俗塵にまみる。よごる。〔汚る〕 長方 蓼「春の內は花にけがるといはるべき庭をも風の朝ぎよめする」 ㊁服忌・産穢月經などにかかる。**しよくぶ**(觸穢)參照。 ㊂女子の操(ミサヲ)ぎづく。 源氏「世にけがれりともおぼしはつまじきを賴みにて」 ㊃純潔失す。雜念起る。 源氏「かぐや姫の、この世のにごりにもけがれず」

けがれ 穢・汚【名】㊀きたなき物事。よごれ。不淨。 ㊁**しよくぶ**(觸穢)に同じ。 蓼「いつよりか、御けがれはやみたまひし」

けがれ 穢(ケガ)の人夫【句】刑人などを扱ふ穢多の人夫。 孕常盤「穢の人夫したり顏に玉襷」

けがれ 穢(ケガ)の筋【句】穢多(エタ)の血筋。 梅若丸「代記」「班女が親と申者をこしらへ、穢の筋と申すたくみを以て、關白公の御前を申かすめ」

けがれーくび 穢首【名】㊀けがれたる首。 ㊁自己の首の謙稱。 雲女五枚羽子板「速に腹きって、汚れくびを差しあぐべし」

けがれーむら 穢村【名】**ゑたむら**(穢多村)に同じ。 雙生隅田川「主殺しの罪惡人、ふみつけて繩をかけ、けがれ村の手に渡し」

けーぎ 化儀【名】〔佛〕人を誘導し、化益(クヤ)する儀式・方法。〔天台宗の語〕

化儀の四方【句】〔佛〕化儀の四つの方式、即ち頓教・漸教・祕密教・不定教。〔天台宗の語〕

けーぎ 褻著【名】**けごろも**(褻衣)に同じ。

げき 劇【名】㊀はげしきこと。はなはだしきこと。 ㊁『俳優の、舞臺にて、劇(ハゲ)しく立ちまはる義』しばゐ。演劇。

げき 隙・隙【名】㊀すきま。あひだ。間隙。 ㊁乘ずべき機會。虛(キョ)。 ㊂不和になること。なかたがひ。間隙。〔隙を生ず〕

げき 屐【名】あしだ。げた。屐子。

げき 檄【名】㊀徵召の文書。古、支那にては、一尺二寸の木簡を用ひたりといふ。めを をわ ろれるり らよゆや もめむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

しぶみ。㊁げきぶん(檄文)の略。檄を飛ばす【句】檄文を急ぎ遣はす。

げき 戟【名】三叉(みつまた)の矛。

げき 鷁【名】鵜に似て、羽の色白しといふ想像上の水鳥。よく風をつきて、大空を翔り、又よく水にも入るといふ。一説には、風鳥なりと。げきしゅ(鷁首)参照。

げき 外記【名】㊀古の太政官にて、少納言の下に屬し、大・少の二等あり。勅詔・上奏文などを作り、更にこれを局中に記錄し、又、除目(じもく)・叙位等の公事を奉行せし役。今の内閣書記官の類。しるすつかさ。(内記に對して)㊁〔佛〕禪宗の僧職の一。頭首・侍司の文案を掌るもの。(内記に對して)

げきぶし 外記節(外記節)の略。外記の政(まつりごと)【句】外記局の執る事務。官符・文書の詔印ある時、行ひたり。外記の政始(はじめ)【句】古、毎年正月に、公卿が始めて外記局に著きて、政事を議せし儀式。「官の政始」と共に、御斎會(ごさいゑ)の儀の畢るを待ち、吉日を擇びて行へり。又、新帝踐祚後、改元後、廢朝後等にも行ふを例とせり。

げきき 下機【名】〔佛〕極めて劣りたる機根。下根。(上機・中機に對して)

げきぎょく 外規【名】矢の的の、三重の黑輪のうちの、最外の輪。(次規・内規に對して)

げきこう 下器【名】朝廷にて、臣下に賜ふ食物を入るる器具。

げきぜん 劇然(闃然)に同じ。

げきぎ 外儀【名】〔佛〕うはべの儀式。外相にあらはれたる威儀。行(ぎゃう)住・坐・臥の四威儀。ぐゑぎ。浄土和讃「外儀の姿はかはらねど」

げぎ 外義【名】〔佛〕經文などの表面の意義。外相。(内義に對して)

げきい 隙意【名】仲わるき心。不和の心。

げきいん 劇飲【名】酒などを、はげしく飲むこと。痛飲。

げきいん 激因【名】激動の原因。

げきえん 喫烟【名】きつえん(喫烟)を見よ。

げきおう づ 撃甕圖【名】支那宋の司馬光が、幼時群童と戯れ居りし時、一兒誤りて水甕中に墜ちしかば、直ちに甕(かめ)を撃破りて救助せし故事を畫きたる圖。

げきかい 劇界【名】演劇俳優などに關する社會。

げきかう 逆行【名】ぎゃくかう(逆行)に同じ。建武年中行事「陳行して、進みよりて、…逆行して、御前の方に向きて、笏(しゃく)を、居ながら左にめぐりて退く」

げきかう 激昂・激仰【名】さかひてはらだつこと。激して心氣のたかぶること。

げきがくき 撃樂器【名】打ちて音を發せしむる樂器。例へば太鼓・鼓・鉦・缶(ほとぎ)などの類。(管樂器・絃樂器・鍵樂器に對して)

げきかん 隙間【名】すきま。罅間。間隙。

げきかん 劇寒【名】こくかん(酷寒)に同じ。

げきかん 激感【名】かんげき(感激)に同じ。

げききん 喫緊【名】きっきん(喫緊)を見よ。

げききやう 喫驚【名】きっきゃう(喫驚)を見よ。

げききょく 外記局【名】外記の事務を執る役所。外記廳(ちゃう)。候廳。

げきけい 撃磬【名】〔兵〕小銃の遊底又は火砲の閉鎖機内に裝置する銅鉄。發條の彈發力又は擊鐵の衝打によりて突進し、その尖頭を以て藥筒底なる雷管を衝撃し、裝藥に點火せしむる働をなす。

げきけい 戟形【名】〔植〕葉の、筒形に似て、葉脚の兩側端の殊に外方に突出せるもの。

げきけつ 隙穴【名】すき。あな。隙孔。

げきけん 撃劍【名】けんじゅつ(劍術)に同じ。

げきけんか 撃劍家【名】撃劍をよくする人。劍道家。劍術遣。

げきご 激語【名】激昂して物言ふこと。過激なる言語。

げきこう 隙孔【名】げきけつ(隙穴)に同じ。

げきこん 屐痕【名】下駄の齒のあと。屐齒の痕跡。

げきさ 喫茶【名】きっさ(喫茶)を見よ。

げきさい 撃砕・撃摧【名】うちくだくこと。

げきさい 劇劑【名】げきやく(劇藥)に同じ。

げきさう 鬩牆【名】せめぎ、あらそふこと。内訌。

げきさく 劇作【名】はげしきあらそひ。

げきさく 戟槊【名】『戟は三叉(みつまた)の矛、槊は長さ一丈八尺の矛』ほこ。槍。

げきさつ 撃殺【名】うちころすこと。

げきし 屐絲【名】下駄の鼻緒。

げきし 屐子【名】げた。はきもの。けいし。

げきし 屐齒【名】下駄の齒。

げきし 劇詩【名】ぎきょく(戯曲)に同じ。

げきし 隙駟【名】げきく(隙駒)に同じ。

げきし 撃刺【名】うち又は刺すこと。又その技。劍(けん)。劍法。

げきしふ 逆襲【名】ぎゃくしふ(逆襲)に同じ。

げきしん 逆臣【名】ぎゃくしん(逆臣)に同じ。

げきしん 劇震【名】はげしき地震。烈震。

げきじん 劇甚【名】はげしきこと。甚しきこと。

げきしやう 激奨【名】はげましすすむること。「ること。

げきしやう 激賞【名】非常にほめたたふること。激讃。

げきしやう 鬩牆【名】『「兄弟(けいてい)牆(かき)に鬩(せめ)ぐ」を見よ』兄弟仲あしく、互に爭ふこと。「らふこと。

げきじやう 撃攘【名】敵を撃ちて、おひはらふこと。

げきじやう 撃壌【名】古、支那にて、土壌をうちたたきて太平を樂しみしこと。一説に、木にて作りたる、履のごとき形の壌といふ物を、地にそばだて、三四歩隔たりて、他の一壌を以て、これを撃ち、あたりたるを勝とせし遊戯なりともいふ。「鼓腹(こふく)撃壌」

撃壌の歌【句】支那の堯の代に、或老人の太平を樂しみて歌へりといふ歌。その詞は「日出而作、日入而息、鑿井而飲、耕田而食、帝力于我何有哉」

げきしゅ 戟手【名】怒りて、兩手を戟(ほこ)のごとくに張ること。こぶしを張って怒ること。

げきしゅ 鷁首【名】鷁(げき)の像を船首に彫刻し、又は畫きたるもの、又その船。船を波浪に溺れざらしめんためにすとも、よく風に耐へしむるためにすともいふ。天子・貴人の乘船に多く用ひたり。げきす。「龍頭(りょうとう)鷁首」参照。

げきしょ 劇暑【名】こくしょ(酷暑)に同じ。

げきしょく 劇職【名】はげしき職務。せはしきつとめ。

げきす 鷁首【名】げきしゅ(鷁首)の約。十訓「大井川に舟樂の時、笛を川の淵におとし入れて、え取らざりければ、龍頭に惟季、笛を吹く、鷁首(げきす)には、笛吹(ふえふ)かなくて、え樂をせず、人これを笑ひけり」

げきす 激す【動佐變目】㊀水、その勢を遮られて、跳躍(やくてう)する。㊁意氣遮られて、はげしくなる。㊂はげしくあたる。衝突する。太平記「かかる處に理を得て、左右に激し、八方を攻ひ」㊃感動して奮發す。感激す。㊄怒る。おこる。滅昂す。「す。

げきす 激す【動佐變他】激せしむ。はげます。

げきす 鷁す【動佐變自】軍陣にて、旗を後方に反す。「檄を傳ふ。

げきす 檄す【動佐變自】檄文をまはす。羽はげしきこゑ。

げきせき 屐寂【貌】げきぜん(闃然)に同じ。

げきせきくわ 撃石火【名】『石を撃ちて發する火の義』せきくわ(石火)㊁に同じ。

げきせつ 激切【名】甚しく切迫すること。甚しく適切なること。

げきぜつ 缺舌【名】『缺は、鴃とも書き、伯勞(もず)をいふ。缺(もず)の囀るごとくなる義。からさへづり(唐囀)参照』外國人の、ものいふさまを卑めていふ語。「南蠻缺舌の人」「その戰。

げきせん 劇戰【名】はげしく戰ふこと。又るさま。闘(げき)。

げきぜん 闃然【貌】ひっそりとしづかなさま。寂(げき)。寂然。閑寂。

げきぞく 劇賊【名】おほぬすびと。大盜。

げきだ 撃打【名】だげき(打撃)㊁に同じ。

げきたい 鷁退・逆退【名】『鷁は、高く飛べども、風に逢へば退くとの義なりといふ』㊀六位の藏人(くらうど)より五位の藏人に

敍せらるべき順に當りても、五位の藏人には、定員あるを以て、闕員なくば、これに任ぜらるるを得ず。この場合には、藏人を去るべきなれども、去るを欲せざる故に、六位の藏人の第一席たる極臈(ごくらふ)を辭し、末席たる新藏人に降りて出仕すること。㊁大法會にて、擬講の人なき時、僧綱の下りて、その役にあたること。「こと。

げきたい 擊退【名】敵をうちしりぞくること。

げきたう 激盪【名】烈しくゆすぶること。甚しくゆるること。

げきだう 劇道【名】演劇のみち。芝居道。

げきたく 擊柝【名】拍子木を打鳴すこと、又これを打鳴して、夜を警むること、又その人。

げ-ぎたなし 氣穢し【形一】『け(氣)は接頭語』きたなし(穢し)に同じ。〔古語〕名義抄「穢、ケガル、ケガラハシ、ケギタナシ」

げきたん 激湍【名】岩石にあたりなどして、水のはげしく流るる瀨。はげしき早瀨。奔湍。急湍。

げきだん 劇壇【名】演劇に關する社會。

げきだん 劇談【名】㊀語調を高くして談話すること。㊁はげしき談判。㊂演劇に關する談話。「すること。

げきだん 擊斷【名】刑罰をほしいままに隙地【名】あき地。空地。「こと。

げきちん 擊沈【名】船艦をうちしづむること。

げきぢん 戟塵【名】せんぢん 戰塵(戰に同じ。

げきちや 喫茶【名】きっちや(喫茶)を見よ。

げきぢやう 劇場【名】えんげきぢやう(演劇場)に同じ。

げきつう 劇通【名】劇道に通じたる人。

げきつう 劇痛【名】はげしくいたむこと。

げきてつ 擊鐵【名】うちがね(打金)に同じ。

げきと 逆徒【名】ぎやくと(逆徒)に同じ。

げきど 激怒【名】はげしくいかること。甚しくおこること。

げきとう 激鬪【名】はげしく爭鬪すること、又その震動。

げきどう 激動【名】烈しく震動すること、又その爭鬪。

げきどく 劇毒【名】はげしき毒。

げきのたいふ 外記大夫【名】五位に敍せられし少外記。

げきのちやう 外記廳【名】げきざふ(外記局)に同じ。

げ-きは 毛際【名】毛のはえぎは。髮のはえぎは。けはえぎは。

げきは 擊破【名】うちやぶること。

げきばくりうだん 劇爆榴彈【名】〔兵〕彈肉厚き鑄鐵もしくは鋼鐵の彈體に、劇烈なる爆藥を多量に塡實し、彈頭に復働信管を、或は彈底に彈底信管を裝著したるもの。使用の目的は、野戰砲において、榴彈と榴霰彈とを兼ねしむるにあり。爆裂榴彈。

げきはつ 激發【名】㊀感激して奮發すること。感激して奮發するやうに仕向くること。㊁はげしき勢を發すること。

げきはん 喫飯【名】きっぱん(喫飯)を見よ。

げきはん 劇繁【名】はんげき(繁劇)に同じ。

げきひやう 劇評【名】演劇の批評。

げきぶし 外記節【名】江戸淨瑠璃の一。薩摩淨雲の弟子長門太夫の甥にして、淨雲の子二代目薩摩次郎右衞門の弟子(一說に、淨雲の門人永閑太夫の弟子)なりし薩摩外記藤原直政の創めしもの。堺町に操(あやつり)座を設け、中山萬太夫と共に芝居を興行し、一流の曲節を語り出ししものにて、年代は天和貞享の頃なるべく、元文頃より廢りしものの如し。くだり薩摩。

げきふん 激憤【名】ふんげき(憤激)に同じ。

げきぶん 檄文【名】㊀軍兵などを徵するためのふれがき。げき。㊁已むべからざる事情を記して、急を告ぐる文書。げき。

げきへん 劇變【名】急劇に變化すること、又その變化。

げきぼう 戟矛【名】『げき(戟)參照』ほこ。〔太平記〕「西には平一揆の勢三千餘騎、戟矛、勢すさまじく」

げきむ 劇務【名】いそがしき事務。繁務。

げきめんちやく 毛巾著【名】毛皮の毛の方を表にあらはして作りたる巾著なるべし。

げ-せった(毛雪踏)參照。一代男「小者に瓢箪・毛巾著、鄙(ひな)びたる事にぞありける」

げきめつ 擊滅【名】うちほろぼすこと。

げきもん 外記門【名】けんしゆんもん(建春門)に同じ。

げきやう 化境【名】(佛)敎化すべき境土。

げきやう 加行【名】(佛)『正位に入る準備として、一段の力を加へて修行する義』受戒灌頂等の儀式を行ふ前に、準備的豫修をなすこと。

げきやう 夏經【名】(佛)夏籠(げごもり)して、經文を誦すること。げがき(夏書)參照。

げきやう 夏行【名】(佛)げあんご(夏安居)に同じ。

げ-ぎやう 顯形・現行【名】神佛などの形をあらはすこと。〔古語〕伊勢「おほん神げぎやうしたまひて」

げ-ぎやう 下行【名】下したまふこと、又その物。たまもの。〔古語〕前太平記「源氏の兵思ひよらぬ得つきて、これまで追ひかけたる下行なりと笑ひ興じ、諸軍これを配分せり」

げぎやう-ゐ 加行位【名】(佛)眞理を證悟する時期に近づける僧の分際。

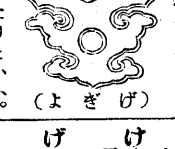
げ-きやく 解却【名】官位を解免すること。解職。免職。〔古語〕

げ-きやく 劇藥【名】㊀性のはげしき藥。㊁(醫)普通の藥劑よりも、人身に對する作用峻劇にして、その度、毒藥よりは弱きもの。㊂くわやく(火藥)に同じ。

げきやく-じさつ 劇藥自殺【名】劇藥を服用して、自殺すること。

げきやく-わうじやう 劇藥往生【名】劇藥を服用して、死ぬること。

げ-ぎよ 懸魚【名】〔建〕破風(はふ)の拜下(はいした)又はその左右に設けたる飾。形は種種あれど、もとは水(よけ)ぎ)をいましめて、火災を防ぐとの意にて、魚の尾の形に刻みたりといふ。



げぎよ 下御【名】貴人の車などより下(お)るることの敬稱。北山抄「天皇下御、興入二南廂西戸一」

げ-ぎよ-し 氣清し【形一】『け(氣)は接頭語』きよし(清し)に同じ。〔古語〕枕「よし、こと時は知らず、今宵は詠めなどせめさせたまへど、げぎよう聞きもいれで」「う。

げきらう 逆浪【名】逆巻く浪。ぎやくらう 四海の逆浪【句】天下の亂るること。太平記「この宮ぞ誠に四海の逆浪をも靜められて」

げきらう 激浪【名】あらきなみ。大なみ。

げきらず-びろおど 毛不切天鷺絨【名】毛織りたるままにて、毛を切らぬビロオド。織りばなしのビロオド。

げ-ぎらひ 毛嫌【名】㊀鳥獸が、相手の毛なみによりて、或は好き、或は嫌ふこと。㊁何といふ理由はなく、ただ感情の上より、物事を好き嫌ひすること。わけもなく嫌ふこと。遷歩色葉集「毛嫌、ケギラヒ」

げきらん 劇亂【名】はげしく狂ひ亂るること。

げ-ぎり 罫切【名】活版印刷にて、罫線(けせん)。インテル類を、必要なる大いさに切るに用ふる機械。

げきりう 激流【名】激して流るること、又その流。はやせ。急流。

げきりん 逆鱗【名】『韓非子の說難篇に、「夫龍之爲レ蟲也、柔可二狎而騎一也、然其喉下有二逆鱗徑尺一、若人有二嬰レ之者一、則必殺人、人主又有二逆鱗一、說者能無二嬰二人主之逆鱗一則幾矣」とあるに本づく』帝王の怒りたまふこと。ぎやくりん。「怒、保元「早く兒徒を追討して、逆鱗を休め奉らば」

げきりよ 逆旅【名】『旅客を逆(むか)ふる義』谷谷。ぎやくりよ。太平記「遠巒の囚れと成つて、逆旅の月にさすらひたまふ」

げきる 蹶切る【動四他】蹴て切る。用明天皇職人鑑「指でもささば、胴をけ切る、寄つて見よ」

げきるゐ 逆類【名】反逆の黨類。ぎやくるゐ。盛衰記「官軍不レ得レ利、星旗電戟之威、逆類似レ乘レ勝、若非二佛神之加被一爭鎭二叛逆之凶亂一」「たる旗。

げきれい 激勵・激厲【名】㊀すすめて、氣を引立たしむること。激奬。㊁性質のきびしくはげしきこと。

げきれつ 激烈【名】極めてはげしきこと。

げきろん 激論・劇論【名】はげしき論。はげしきいさかひ。

けーく 希求【名】〔佛〕こひねがふこと。もとむること。ききう。

けーく 化功【名】〔佛〕人を教化せし功德。

けーく 下句【名】しもの句。

げーぐう 外宮【名】伊勢國の豐受(トヨウケ)大神宮をいふ。(內宮に對して)

げぐうーしんたう 外宮神道【名】神道の一派。外宮の神官度會(ワタラヒ)延眞の主唱せしもの。そし。社家神。社家神道。

げぐうーまつり 外宮祭【名】伊勢豐受(トヨウケ)大神宮の祭禮。六月十六日に行はる。

げーぐり 下括【名】指貫(サシヌキ)の裾を、足首の邊にて締めくくること。したぐくり。〔古語〕貞丈雜記「下袴、本儀綾なり。下括のとき、指貫(サシヌキ)の下に用ひ之」

けーくわん 希求言【名】〔語〕願望の意をあらはす動詞の語法。命令法。

けーぐつ 毛屑【名】毛の屑。

けーぐつ 毛沓【名】毛皮にて作りたる沓。多くは熊の皮を用ふ。大將のはきしもの。

けーくて 結句で【副】**けっく**(結句)【二】に同じ。〔德川時代の語〕淀鯉出世瀧徳「哀しむことも、なんにも無い。けくで、うき世が面白い」

げーぐん 下郡【名】王朝時代の令(リヤウ)の制にて、中郡と小郡との中間の格ありし郡。(上郡・中郡・小郡に對して)「に同じ。

けーぐるま 毛車【名】**いとげのくるま**(絲毛車)

けーくわ 悔過【名】過を悔ゆること。自己の犯せる罪過を懺悔(サンゲ)すること。

げーくわ 外科【名】【一】〔醫〕專ら身體の外部の創傷、又は皮膚病などを療治すること。近來は、內臟諸器官の疾病にも、しばしば外科的手術を施すに至れり。(內科に對して)太平記「本道・外科の醫師、數を盡して參り集まる」【二】**げくわいしや**(外科醫者)の略。〔江戸時代の語〕

げーくわ 下卦【名】六畫の卦の中の、下方の三つ。(上卦に對して)

げくわーい 外科醫【名】外科を專門とする醫士。げくわ。外科醫者。

げくわーいしや 外科醫者【名】〔植〕**こうせんあさがほ**(朝鮮朝顏)を云ふ。〔讃岐國の方言〕

げくわーしつ 外科室【名】**しゅじゅつしつ**(手術室)に同じ。「を見よ。

けーくわん 假觀【名】〔佛〕**さんぐわん**(三觀)

けーくわん 懈緩【名】ぬかり。おこたり。げたい。怠慢。

げーくわん 外官【名】王朝時代の地方官、即ち太宰府の職員、國司・郡司などの類。攝津職のごときは、その政所の京內に在るため、京官とし、ただ同職の官人の參朝は、外官に準じたり。(京官・內官に對して)

外官の除目(ジモク)【句】「縣召(アガタメシ)の除目」に同じ。

げーくわん 解官【名】官を解くこと。かいくわん。免官。保元「父爲義を解官せられて、前撿非違使になさる」

げーくわん 下官【名】官人の身分の低きもの。聖德太子傳曆「雲の上人御垣守、下官の男女に至るまで」

げーくわん 下浣・下澣【名】**げじゅん**(下旬)に同じ。

げーげ 毛毛【名】【一】多くの鎧の、縅毛(オドシゲ)のそれぞれに異なりたること。【二】一つの鎧の、種種の色絲を交へ用ひて縅(オドシ)したること。幸若舞曲「高館」「げげの鎧、兜の緒をしめ」

けーげ 化外【名】〔佛〕佛陀の教化(ケウゲ)區域の外。**くわい**(化外)參照。「生」の略。

げーけ 下化【名】〔佛〕**げけしゅじゃう**(下化衆生)

げーげ 解夏【名】〔佛〕夏安居(アンゴ)の終了すること。げあき。かいげ。解制。

げーげ 下下【名】【一】下等の下等。甚しく劣れること。【二】したじた。しもじも。きのふはふの物語「これは內裡樣と申して、たやすく下下の參る所ではないぞ」【三】次條に同じ。

下下の下【句】最も等級の劣れること。最下等。下の下。

げーげ 芥下・下下【名】【一】**こんがうざうり**(金剛草履)に同じ。〔古語〕平家「馬には乘らで、げげをはき、ゆんづゑをついて」【二】**ざうりとり**(草履取)を云ふ。〔九州の方言〕

げーげ 【名】〔植〕**げげばな**(紫雲英花)の略。

けーげう 化敎【名】〔佛〕道俗に通じて、普く因果の理、邪正の差別を知らしむる敎法。(行法に對して)

げーげさう 夏解草【名】〔植〕【一】**ぶっけさう**(佛華草)の時、この草を取きて坐せりとの傳說に基づき、解夏(ゲゲ)の日、僧侶の色絲にて東(カゲ)ねて、檀家(ダンカ)に贈るよりいふ』**きちじやうさう**(吉祥草)に同じ。【二】**へびおび**(蛇帶)の一種。その大形なるもの。

けーけし 【名】〔動〕**よしはらすずめ**(吉原雀)を云ふ。〔播磨國の方言〕

けーけし 【形二】『特殊・すぐれる等の意あるけを重ねて、志久活に活用せしめたる語』殊なり。かどかどし。きはぎはし。すぐれたり。〔古語〕源氏「殿も用意ことに、すこしけけしきさまにもてなしたまひて」

げけーしゅじやう 下化衆生【名】〔佛〕菩薩は、摩聞(モンヤウ)・緣覺(エンガク)等の自利のみなるとは異にて、自利利他の兩德を具備し、上(カミ)菩提(ボダイ)を求むると同時に、下(モ)衆生を敎化・濟度すること。下化冥闇(ケゲンミャウ)。還相回向(クワンカウ)。下化。(上求菩提に對して)謠曲・敦盛「春の花の樹頭に上るは、上求菩提の機をすすめ、秋の月の水底に沈むは、下化衆生の形をあらはす」

げーけつ 下血【名】血のくだること。血便。

げげな 【名】〔植〕『**げげばな**(紫雲英花)の略』

げげばな 紫雲英花【名】〔植〕**げんげ**(紫雲英)に同じ。源氏十二段長生島蓼つつじ・げげばな・壺菫荒れたる宿と詠みけるは」

げけねーつ 九【數】**ここのつ**(九)の轉。〔遠江國の方言〕

げけみやうあん 下化冥闇【名】〔佛〕**げけしゅじやう**(下化衆生)に同じ。謠曲(西行櫻)「それ、春の花は、上求本來の梢にあらはれ、秋の月、下化冥闇の水に宿る」

けーげん 怪訝【名】いぶかしくして、會得しがたきこと。「けげんな顏をして」

けーげん 化現【名】〔佛〕佛菩薩が、衆生を濟度するために、種種に姿を變へて、この世にあらはるること、又そのもの。化作(ケサ)。現化(ゲンケ)。盛衰記「金峯山の日藏上人、…六道を見たりとは、承り傳へたり。彼れ等はみな、大權の化現たる上」

けーげん 戲言【名】**ぎげん**(戲言)に同じ。遍歩色葉集「戲言、ケゲン、天子無二戲言一」

げーけん 下肩【名】【一】〔佛〕自分より下位に居る人。肩次。(上肩に對して)【二】自己の身の右。肩次。(上肩に對して)「じ。

げーげん 下弦【名】〔天〕**かげん**(下弦)に同じ。

けげん-けい 華原磬【名】**くわげんけい**(華原磬)に同じ。

けーけら 柿【名】こけら(柿)に同じ。名義抄「柿、ケケラ、コケラ」

けける 【動下一他】『**きける**を見よ』の**す**(敬す)に同じ。〔甲斐國・伊豆國の方言〕

けけれ 心【名】『遠江國にて、九つを、**けけね**つといふに等しき轉音』**こころ**(心)の轉訛。〔東國の古の方言〕。古今「かひがねをさやにも見しかけけれなく横ほりふせるさやの中山」

けこ 【名】**やじろま**(彌次馬)を云ふ。〔京都・大阪〕

けーこ 華筥・花筥・花籠【名】法會の時、散華(サンゲ)を入るるに用ふる器。古は竹の籠なりしが、今は眞鍮又は鍍金(メッキ)の薄き皿のごとき物を用ひ、下に長き飾紐を附く。

けーこ 蟻蠶【名】孵化したるままの蠶兒。

けーこ 筒籠【名】古、食物を盛るに用ひし器。〔古語〕伊勢「いひがひとりて、けごのうつはものに盛りけるを見て」

けーこ 家子【名】【一】妻子・奴僕など、すべて家に屬せる人。〔古語〕竹取「然るに、祿いまだ賜はらず、これを賜はりて、分ちて、けごに賜はせん」【二】**げなん**(下男)を云ふ。〔上總國の方言〕

げーこ 下戸【名】『**じやうご**(上戸)を見よ』酒を好まぬ性質の人。さけのまず。(上戸に對して)盤生隅田川「樂おなじ下戸・上戸」

下戸と化物(バケモノ)は無し【句】世中に化物(バケモノ)の無きが如く、誠に酒を好まぬ人はなし。〔諺語〕

下戸の着荒(アラジ)【句】酒を嗜まぬ者は、よく肴を食ひ荒す。〔諺語〕

下戸の建てたる倉は無し【句】下戸は、酒を飲まぬが故に、金を殘し得べきがごとく見ゆれども、事實は然らず、やはり酒を飲むに若かず。〔諺語〕

げご 夏居【名】〔佛〕『げあんご(夏安居)の略。

げご 解悟【名】〔佛〕『了解覺悟の義』迷を去り、眞理を悟ること。大悟徹底。悟人。解脫(ゲダツ)。「轉迷解悟」

げご 偈語【名】〔佛〕偈の文句。「同じ。

げごうーじ 元興寺【名】ぐわごじ(元興寺)に同じ。

げーこく 下國【名】■都より地方へゆくこと。國へくだること。國司の任國に赴くこと。庭訓往來「下國之時者下向書」■恪盛衰記「僧に下國の受領をこそ拜任せしに」

げーこく 下刻【名】古、一時(イトキ)を三分したる、最後の時刻。(上刻・中刻に對して)「子(ネ)の下刻」

げーこくーじやう 下剋上・下尅上【名】『下(モ)、上(カミ)に剋(カ)つ義』臣下として君主を弑(シイ)したり、これを凌ぐこと。かこくじやう。盛衰記「下剋上の至なりと、不思議に存じ候ひき」「じ。

げごーじ 元興寺【名】ぐわごじ(元興寺)に同じ。

げごーぜ 元興寺【名】前條に同じ。

けーこぞう 毛小僧【名】頭髪を剃らずして、寺の小僧となれるもの。

けーごと 食事【名】食物をくふこと。しよくじ。〔古語〕盛衰記「餔、計古止」

けーごと 藝事【名】つねのこと。平生馴れてある事がら。しなれたる仕事。(啻事(コトナシ)に對して)〔古語〕無名抄「かかるけごとによみたる、むねんの事なり」

げこーのーしやく 解虎錫【名】〔佛〕『猛虎の爭をも解く妙用ありといふ義』道人の用ふる錫杖。

けーこみ 蹴込【名】■〔建〕家の上口(アガリ)の土臺附の處。■人力車の、乘人の足を安ずる處。■『切られたる首などを、そこに蹴込むよりいふ』芝居の、舞臺の緣の下の處。

けこみーいし 蹴込石【名】建物の下の柱當りに猫石を置き、その上に土臺を載せ、柱を立て、猫石と猫石との間に、體裁をよくするために差込みたる石。うちこみいし。

けこみーいた 蹴込板【名】〔建〕家の上口(アガリ)の土臺附に取附け、又は階段等にて、段と段との間に、垂直に取附けたる板。

けこみーぎ 蹴込木【名】橋梁面の兩終端において使用すべき木材。普通の橋板より厚く、その上部の一端を削りて、楔(クサビ)形となすこと多し。

けこみーどこ 蹴込床【名】〔建〕床板(トコイタ)と疊寄(タタミ)との間に蹴込板を張り、床框(トコガマチ)を設けぬ床。

けーこむ 蹴込む【動四他】■蹴て、內へ入らしむ。■損亡となる。くひこむ。「蹴出すに對して」〔德川時代の話〕重井筒「四百目といふ銀を、何にするとて、借つたぞ。喰ひこんだか、蹴込んだか、めをとの中の粂糴づかひか」「ふ。

けごむ【動四自】驚きあやぶむ。あやしく思ふ。

けーごん 華嚴【名】■〔佛〕萬行(マンギヤウ)萬德を修習して、德果を莊嚴にすること。■〔佛〕〔書〕けごんきやう(華嚴經)の略。正統記「華嚴・三論は、東大寺に弘めらる」

華嚴の朝(アシタ)【句】〔佛〕釋迦の、成道(ジヤウダウ)後、最初に華嚴經を說きしこと。〔涅槃(ネハン)の夕(ユフベ)に對して〕

けーごん 化權【名】〔佛〕衆生を濟度する方便・手段。

げーごん 下根【名】〔佛〕機根の劣れること。道を修むる力の乏しきこと。下等なる性根。下機。(上根に對して)〔下根の輩〕

けごんーえんぎ 華嚴緣起【名】〔書〕新羅の僧義湘・元曉の二人が、唐土に渡りて、華嚴宗を將來する事實を述べて、これに繪を插めるもの。紙本・著色。もと八卷ありしが、二卷を逸す。一說は土佐光起又は光信の筆といへど、詳かならず。山城國栂尾(トガノヲ)の高山寺の所藏にして、明治三十五年國寶に指定せらる。一名、華嚴祖師繪傳。

けごんーきやう 華嚴經【名】〔書〕釋迦の成道(ジヤウダウ)後、第二七日にして、自內證の相を說きたりといふ經文。法相宗・華嚴宗・天台宗・日蓮宗・禪宗などの所依(エ)とするもの。詳しくは「大方廣佛華嚴經」といひ、また雜華經といふ。

けごんーじ 華嚴寺【名】■美濃國揖斐(イビ)郡谷汲(タニグミ)村にある天台宗の寺。谷汲山と號し、俗に谷汲寺と呼ぶ。本尊は十一面觀世音。延喜中の創建。開山は豐然、開基は大口大領。西國順禮三十三番の札所の打止(ウチドメ)。■朝鮮全羅南道、求禮郡知異山の麓にある寺。眞興王五年の創立。景德王三十三年の再建。新羅時代及び高麗時代の遺物なる塔・燈籠あり。「よ。

けごんーしゆう 華嚴宗【名】〔佛〕八宗の一。華嚴經を所依として立てたるもの。支那にては、唐の杜順を始祖とし、我が國には、聖武天皇の天平八年、唐の道璿律師、華嚴の章疏を齎し來りて弘通す。奈良の東大寺その本山たり。一に、一乘究竟教。

けごんーそしあでん 華嚴祖師繪傳【名】〔書〕けごんえんぎ(華嚴緣起)に同じ。

けごんのーたき 華嚴瀑【名】〔地〕下野國日光山中にある瀑。中禪寺の湖水より流れ落つるもの。高さ約四十丈、幅約四間。その末は、大谷(オホヤ)川となり、鬼怒(キヌ)川に入る。

けごんーゑ 華嚴會【名】華嚴經を講讀する法會。毎年三月十四日、東大寺にて行ふ。宇治・東大寺に、恒例の大法會あり、華嚴會とぞいふ」

けーごも 毛薦【名】毛にて織りたるこも。

けーごも 食薦【名】おんけごも(御食薦)を見よ。「に同じ。

けごもり 夏籠【名】〔佛〕げあんご(夏安居)

けごや 警固屋【名】〔地〕安藝國安藝(アキ)郡にある町。音戸瀨戸の東北岸。室町時代に、衛戍のため、警固の船を置きたる所なりとも、平清盛が音戸瀨戸を開きし時、食糧を置きし所にして、食小屋(ケゴヤ)の訛なりともいふ。

けーごり 蹴轉【名】けころばし(蹴轉)の略。

けーころ 蹴轉【名】小さき丸太。〔中國の方言〕

けーころす 蹴殺す【動四他】蹴て殺す。

けーころばし 蹴轉【名】■蹴ころばすこと。■天明の末頃まで、江戸の下谷廣小路・御數寄屋町・提灯店佛店・廣德寺前・淺草堀田原邊などにありし一種の淫賣婦。玉代二百文を定とす。けころ。けたふし。

けーころばす 蹴轉ばす【動四他】蹴てころばしむ。

げごろーぶな 源五郎鮒【名】〔動〕げんごろぶな(源五郎鮒)の訛。

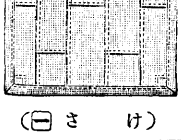
けーごろも 褻衣【名】朝夕著ころも。常に著る衣。ふだんぎ。けぎ。〔古語〕神樂「すべがみはよき日まつればあすよりはあけの衣をけごろもにせむ」

けーごろも 毛衣【名】■毛皮にて造りたる著物。かはごろも。■『人類の衣のごとく、全身を蔽ふよりいふ』鳥の羽毛。新拾遺「鶴の子の巢立ち始むる毛衣は千世に八千代をかさねてぞ著ん」

けごろもを 毛衣を【枕】けごろもは、皮を張りて作るものなるより、はるにかけていふ。萬葉「けごろもをはる冬かたまけていでましし宇陀の大野(オホヌ)はおもほえむかも」

けーさ 今朝【名】今日の朝。こんてう。古今「うゑていにし秋田刈るまで見えこねばけさ初雁の音にぞ鳴きぬる」

けさ 袈裟(梵kaṣāya)【名】■『壞色(エジキ)・不正色など譯す。(如沙曳・加沙野)の訛』法衣の肩にかけて、衣の上に被ふもの。大小によりて、五條・七條・九條の三種に分つ。もと印度の衣なれども、支那・日本等にては、氣候の關係上、衣を著けたる上に纏ふ。本來の色は、黑茶・赤茶・鼠色・木蘭色等なるべきなれど、紫衣(シエ)・金襴衣の如き華美なるものも生ずるに至れり。道服。法衣。功德衣。無垢衣。忍辱鎧。源氏「けさなどは、いかに縫ふ物ぞ」■けさがけ(袈裟懸)の略。平假名盛衰記「ゆん手の肩さき、袈裟にすっぱと斬下げられ」■〔人〕けさ



(二)さ け)

ぜん(袈裟御前)に同じ。

袈裟で尻拭(ふ)く【句】しだらのなき譬。〔諺語〕

袈裟まで憎い【句】坊主を憎しと思へば、その坊主の著たる袈裟までも憎き心地す。川中島合戦「坊主憎さに袈裟まで憎き世の譬」

けさ 化作【名】〔佛〕佛・菩薩が、神通力を以て、種種の身、又は種種の事物を變化し造作すること。化現(ケゲン)。化身(ケシン)。十訓「誰れか、これを權者の化作と知らん」

けさ 華座【名】〔佛〕れんげざ(蓮華座)に同じ。

げさ【接尾】『げさとさを連ねたる語』ありさまの意。〔古語〕 榮花「御心ちよげさ」

げざ 下座【名】〔地〕筑前國の舊郡の一。明治二十九年上座・夜須(ヤス)の二郡と合せて、朝倉郡となる。

げざ 下座【名】■貴人に對する敬禮の法として、座を下りて、平伏すること。もげざ(土下座)參照。■しもての座席。末座。末席。(上座に對して)■〔佛〕法臘(ホフラフ)の一。夏行(ゲアン)を九度なすまでの稱。(中座・上座に對して)四次條に同じ。

げざ 外座・下座【名】芝居・寄席(ヨセ)などの囃子方(ハヤシカタ)、又その座席。

げざ 夏座【名】〔佛〕夏安居(ゲアンゴ)をなすこと。座夏(ザゲ)。

げざ 解座【名】〔佛〕法座を解散すること。

けさい 潔齋【名】けっさい(潔齋)の略。〔古語〕 大鏡「湯たびたびあみ、いみじくけさいして、清まはりて」

げさい 解齋【名】齋戒を解くこと。

解齋の御粥(オンカユ)【句】神今食(ジンジキ)などの神事の翌日、解齋の時に、主水司(モヒトリ)より獻りて、主上の聞召し御堅粥。土器に盛り、菜は荒布(アラメ)を用ひ、盞の御座の床子にて、三口めして、御箸を立てらるる習なりき。

解齋の御手水(オンチヅ)【句】神今食(ジンジキ)の翌日、解齋の時に、主上の召されし御手水。御手水などの神事の間にて、陪膳、杓を以て、三度沃(ソソ)ぎたてまつる。

げさい 夏齋【名】〔佛〕禪寺にて、結夏(ケツゲ)の日に設くる齋會(サイエ)。「ど。

げさい 下劑【名】くだしぐすり(下藥)に同じ。

げさい 下才【名】かねほり。坑夫。 鹽尻「古く金掘る者をげさいといへり」

げさいでん 解齋殿【名】なほらひどの(直會殿)に同じ。

げざいろく 下才六・毛才六【名】『人名に擬していへる語』他人を罵りて呼ぶ語。さいろく(才六)參照。〔德川時代の語〕 奉花五大力「あのげざいろくを殺したあとで、存分いうたが、ようござりやす」 女殺油地獄「や、ちよこざいなげざいろく」

けさう 化粧・假粧【名】けしやう(化粧)の約。〔古語〕 竹取「御身のけさう、いといたくして」

けさう 懸想【名】思をかくること。戀ひしたふこと。れんぼ。

けさう 顯證・見證【名】けせう(顯證)を見よ。

けさう 假相【名】〔佛〕けう(假有)に同じ。

けさう 化相【名】〔佛〕佛陀の衆生を敎化(ケウ)する相狀。

けざう 華藏【名】〔佛〕けざうかい(華藏界)の略。 盛衰記「遍昭遮那の悟開けて、密嚴(ミツゴン)・華藏の上に遊び給ふも、あなめでた」

華藏八葉(ハチエフ)【句】〔佛〕華藏(即ち蓮華藏世界)の香水の海に生ずといふ八葉の蓮華、身蓮の象徵なり。 本朝讀文粹「華藏八葉之風、以二西方一爲レ勝」

げざう 外相【名】〔佛〕善惡美醜の、身上にあらはるるもの、また身(シン)・口(ク)の所作の、外部にあらはるるもの。徒然「外相もし背かざれば、內證かならず熟す」

けざうかい 華藏界【名】〔佛〕れんげざうせかい(蓮華藏世界)の略。

けざうかい-ゑ 華藏界會【名】〔佛〕釋迦の眞身なる毘盧舍那佛(ビルシヤナブツ)の華藏界にて、修せる常恒の法會。 盛衰記「玉殿十一間の寶樓閣は華藏界會」

けざうせかい 華藏世界【名】〔佛〕れんげざうせかい(蓮華藏世界)の略。 野守鏡「あしたは、華藏世界の花を尋ね」

けさうだつ 懸想立つ【動四自】戀慕の心ひらめく。いろめく。けさうばむ。けさうぶ。〔古語〕 源氏「何かは、けさうだちてもてなしたまはんも、なかなか、うたてあらん」

けさうばむ 懸想ばむ【動四自】前條に同じ。〔古語〕 源氏「けさうばみ、なまめかんも、まばゆし」

けさうびと 懸想人【名】戀しき人。おもひびと。情人。〔古語〕 源氏「懸想人は、夜にかくれたるをこそよばひとはいひけれ」

けさうぶ 懸想ぶ【動上二自】けさうだつ(懸想立つ)に同じ。〔古語〕 源氏「初より懸想びても聞えたまはざりしに」

けさうぶみ 懸想文【名】■懸想する意を書きたるふみ。いろごみ。艷書。 枕「よろしう詠みたりと思ふ歌を、人のもとにやりたるに、かへしせぬけさうぶみは、いかがせん」■古、京都にて、懸想文賣の賣りあるきし艷書。細き盤紙(ケタシ)の中に、洗米二三粒を入れたるを、懸想文と稱して渡しもありといふ。男女、良緣を占ひ、富貴を得んとて買ひたり。〔假粧文〕 けさうぶみうり(懸想文賣)參照。

けさうぶみ-あはせ 懸想文合【名】えんしよあはせ(艷書合)に同じ。

けさうぶみ-うり 懸想文賣・假粧文賣【名】懸想文(■)を賣りあるきし人。每年、正月の元日より十五日まで、濃き紅梅の素袍(スハウ)を著け、袴の裾を高く取り、脛巾(ハバキ)に亂緒(レウ)の草履を履き、烏帽子をかぶり、白き布にて覆面して、賣りあるきしもの。德川時代の初期より元祿の頃まで行はれ、一旦中絕せしを、文政の初年頃復活したり。



(りうみぶうさけ)

けざうぬんどうふ 華藏院豆腐【名】貞享・元祿の頃、江戸淺草の華藏院前にて賣りし一種の豆腐。 續江戸砂子「華藏院豆腐。形、饅頭の如し。味常に勝れたり。淺草華藏院門前七軒町」

けさがうり 袈裟行李【名】けさぶくろ(袈裟袋)を懸けたる如く、一方の肩より、斜に他の一方の腋の下に物を佩ぶること。■刀にて、相手の者の肩さきより、斜に斬りつくること。けさぎり。けさ。おほげさ(大袈裟)。(■)うしろげさ(後袈裟)參照。 太平記「或は、胸板を袈裟懸に切りて、被ㇾ落ける程に」

けさがた 袈裟形【名】■袈裟の形。■梵鐘の外側に鑄出したる縱橫の紐線。■手水鉢(テウヅ)の形の一。下部ふくらみ、梵鐘の袈裟形に似たる模樣を表はしたるもの。「ど。

けさがた 今朝方【名】今朝のほど。けさほど。

けさかで 蹴逆手【名】相撲(スマ)の手の一。曾我「蹴逆手蹴腕組」

けさぎぬ 袈裟衣【名】けさ(袈裟)(■)に同じ。 枕「薄墨のけさぎぬなどいみじくて」

けさぎり 袈裟切【名】けさがけ(袈裟懸)(■)に同じ。 太平記「坂本樣の袈裟切に成佛せよといふままに、追攻め追攻め、斬りてまはりける間」

けさく 下策【名】下手なるはかりごと。まづき手段。(上策に對して)

げさく 下作【名】■不出來なるもの。下等なるもの。(上作に對して)■品格のいやしく下れること。げひん。げす。

げさく 戲作【名】■たはむれに著作すること、又その著作。〔德川時代の語〕■げさくぼん(戲作本)の略。

げさく 外戚【名】『げしやく(外戚)の約』ぐわいせき(外戚)に同じ。〔古語〕 增鏡「御げさく弱きは、今も昔もかかるこそいといとほしきわざなりけれ」

げさくしや 戲作者【名】戲作(■)を業とする人。小說家。〔德川時代の語〕

けさくぐどく 袈裟功德【名】〔佛〕袈裟を著くるによりて得る功德、即ち一度袈裟を著くれば、一切の惡を斷じて、正覺を成ずることを得といふもの。

げさくぼん 戲作本【名】戲作の本。娛樂を目的とする讀本(トクホン)。げさく。小說本。〔德川時代の語〕

けざくわん 華座觀【名】〔佛〕佛教十六觀想の一。阿彌陀如來の、蓮臺に坐れる相を觀想する法。華座想。

けざけざ【貌】けざやかに同じ。〔古語〕衾いとけざけざと、ひかるやうに見えさせたまへるに」

けさごぜん 袈裟御前【名】〔人〕節婦。小字は阿都麿(アツマロ)。母を衣川といふ。源渡(ムツ)の妻。容姿端麗、能く夫に仕へしが、遠藤盛遠(モリトホ)即ち後の文覺上人に懸想せられ、遂に節に死す。「阪の話」

けさされ【名】もののけ(物怪)を云ふ。〔京都大觀〕

けざさう 華座想【名】〔佛〕けざくわん(華座觀)に同じ。

けーざし 毛刺【名】刺繍の一種。綾絲(イト)を用ひて、動物の毛の如く、密に刺すこと。

げざだい 下座臺【名】江戸時代に、城門その他の番所等に在りたる下座見の座席。

けさーづきん 袈裟頭巾【名】法師武者が、戰場にて、兜の上にかぶりし頭巾。

げざーづけ 下座附【名】芝居にて、狂言作者より、囃子方に交付する、一幕づつ囃子(ハヤシ)のみを記したる帳簿。

けさて 今朝出【名】今朝出立したること、又その時。津國女夫池「けさ出の旅の一日だに、憂きことの數身につもり」

げざーとこ 下座床【名】茶室の下座の方に設けある床。

けさーのーま 今朝間【名】けさのあひだ。和泉式部物語「けさのまに今はひぬらん夢ばかりぬるとみえつる手枕の袖」

けさーぶくろ 袈裟袋【名】禪僧が旅中に、袈裟その他の資具を入れて、携帶する袋。後には、行李を用ひて、袈裟行李といふ。

けさーぶんこ 袈裟文庫【名】一閑張の筥の、被蓋(カブセ)あるもの。袈裟袋に代用す。

げざーぶれ 下座觸【名】江戸時代に、將軍。諸侯などの通行に當り、庶人に、下座すべきことを、前驅の者の傳呼せしこと。

けさーほど 今朝程【名】けさがた。けさ。

げざーみ 下座見【名】江戸城門、その他番所の下座臺に在りて、三家・老中・若年寄・兩目附などの出入を報告せし職。足輕の長、これを勤めたり。

けーさん 卦算【名】けいさん(罫算)に同じ。

げーさん 下散・下算【名】■くさずり(草摺)に同じ。■鎧の菱縫(ビシ)の板。■擊劍の時、胴の下、腰のまはりにまとふもの。鎧の草摺に似たり。

げーさん 下山【名】山より下ること。(登山「に對して)

げーさん 解散【名】解けちること。消散。かいさん(解散)■參照。太平記「心中の憤、一時はげさんしぬる心地して」

げーさん 偈讃【名】〔佛〕偈句にて、讃嘆せしもの。

げざん 見參【名】■古、節會(エセチ)宴會などの時、伺候したる人人の交名(キヤウメイ)を註して、その主人の前に差出ししこと。〔古語〕延喜式臨時宴會得レ預二見參一者」■げんざん(見參)の略。〔古語〕源氏「大方には參りながら、この御方のげざんに入ることのかたく侍れば」遊君三世相「一時も早く都に上り、父のげざんに入るべしと」

げざんの文(フミ)【句】見參(ケンザン)■の時、交名(キヤウメイ)を書きて進むる文書。紫式部日記「勸學院衆どもも、歩みして參れる、げざんのふみども又啓す」

げざんーのーいた 見參板【名】げんざんのいた(見參板)に同じ。

けさーや 袈裟屋【名】袈裟を造ることを生業とする家、又その人。

けざや 毛鞘【名】鞘卷の鞘尻に、虎の毛皮を被せたるもの。

けーざやか【稱】『けは接頭語』さやか。あざやか。けざけざ。きはやか。げんざり。〔古語〕源氏「御ぐしのすそまで、けざやかに見ゆるは」

けざやぐ【動四自】けざやかに見ゆ。あざやかになる。きはやかになる。きはだつ。〔古語〕源氏「けざやぎたまふべき事にもあらねば」

けし 消【名】消すこと、又、消したるもの。

けし【名】賭博の一。渦卷を地に描き、飴にて二文・三文の錢を粘合せ、これを投げて、渦の中央に止まれるを勝とするもの。

けーし 化絲【名】〔佛〕衆生を敎化(ケウケ)するを、絲にて魚を釣上ぐるに譬へていふ語。

けし 芥子【名】■〔植〕罌粟(ケシ)科に屬する二年生の草。高さ四五尺に達し、葉は葉柄を缺き、長楕圓形又は長卵形にして、缺刻又は鋸齒を有し、全葉淡綠色を呈す。花は、夏、莖頂に開き、四瓣にして、色は紅・白・紫など種種あり。蒴は球形にして平滑、種子は食すべく、また油を搾取すべし。未熟の果皮を傷けて、これより浸出する乳液を取り、乾かしたるを阿片といひ、藥用に供す。亞美蔕。〔罌粟・罌子〕■芥子(シヤ)の種子。その性堅く辛きにより、密敎にては降伏(ガウブク)の相應物となし、これに眞言を加持して、爐に投じ、降伏の用に供す。**けしやき**(芥子燒)參照。源氏「阿闍梨にも、しのびやかにけし燒く事させたまふ」■**けしつぶ**(芥子粒)の略。四**けしだま**(芥子玉)□の略。東海道名所記「芥子鹿子(カノコ)摺縫の手を盡し」五鎧などに細かき鋲(ビヤウ)を、芥子粒のごとく、打附けて飾としたるもの。六きはめて細かなる、または僅少なる物事の譬。狹衣加留多「この文を三遍となへ、討ち給へ、御身にけし程も祟りあらば」異途飛脚「けし程も御損かけませぬ」

芥子に須彌(シユミ)を藏(カク)す【句】『念佛三昧經に「能以二須彌一入二芥子一」とあるに本づく』微細の中にも至大を寓す。〔諺語〕

芥子の油【句】あへん(阿片)に同じ。

芥子の香(カ)【句】芥子燒(ケシヤキ)□の香。源氏「御衣なども、ただ芥子の香にしみたまへり」

芥子の實【句】■芥子の種子。茶色にて、至って細かく、食ふべく、また油を搾り取るを得。■極めて微細なる物の譬にいふ。けしつぶ。

芥子の脂(ニ)【句】あへん(阿片)に同じ。



(けし■)

芥子を針鋒(ボウ)に投ず【句】〔佛〕『涅槃經に「芥子投二針鋒一、佛出難二於此一」とあるに本づく』芥子の實を針の先に投げつけても中(アタ)りがたきを、佛の出世の難きに譬へていふ語。〔諺語〕

けーし 家司【名】けいし(家司)に同じ。

けーし 怪し・異し【形シク】『特殊の意義なるけを志久活に變化せしめたる語』■異なり。常ならず。あやし。〔古語〕榮花「常の御有樣なれば、さりともけしうはおはしまさじなど思したゆめど、なほおぼつかなし」■わろし。あし。**けしかり**(怪しかり)・**けしたり**(怪したり)參照。〔古語〕記「けしき心なしと申したまへば」

怪したり【句】けしかり(怪しかり)に同じ。謠曲(天鼓)「不思議やな、はや更け過ぐる水の面に、けしたる人の見えたるは」同(山姥)「そのさま、けしたる顏ばせはその山姥にてましますか」

けし【感】犬をけしかくる時の言葉。筑波集「我が心菜種ばかりになりにけり人くひ犬をけしといはれて」

けし 芥子【接頭】物の形の極めて小さき意。まめ。「芥子雛」「芥子本」「芥子人形」

けーじ 假時【名】〔佛〕假定の日時。

げーし【名】ぎよし(御寢)の訛。「もうげしになりましたか」

げーし 下至【名】〔佛〕多數を上とし、少數を下とし、多數より少數に及ぼして言ふ時、その中間又は多數の方を略する意をあらはす語。「下至一念」ないし(乃至)參照。賀古敎信七墓廻「下至十聲のその功德」

下至一念【句】〔佛〕「下は一念に至ると訓ず。少なき方を擧げて、多き方を攝(オサ)めたる語。**げし**(下至)參照』上は一期(イチゴ)の念佛より、下は一念の信心に至るまでの稱。

げーし 解司【名】『五位以下の解官(ゲカン)の事に與るによりていふ』しきぶしやう(式部省)の別稱。

げーし 下司【名】■したづかさ(下司)に同じ。■中世以後、莊園の事務を掌りし職。莊官。沙汰人。下司職。

げ-し 夏至【名】(天)二十四氣の一。太陽が黃道上の夏至點に達したる時、即ち毎年六月二十一日頃に當る。この日は、一年中にて、晝きはめて長く、太陽高度最も高し。(冬至に對して)**げしてん**(夏至點)及び**しゅんぶん**(秋分)**しゅんぶん**(春分)參照。

げ-じ 下食【名】**げじきにち**(下食日)の略。

げしあざみ 芥子薊【名】(植)**のげし**(野芥子)に同じ。

げしあたま 芥子頭【名】芥子坊子の頭。今國姓爺・綱手に老若芥子あたま、音頭の唐人團扇をかざし」

げしあひ 消合【名】■けしあふこと。■(商)帳合米取引にて、月に三回の定日に、賣買者雙方より届け出でたる高を對照すること。

げしあひば 消合場【名】(商)取引せる帳合米の清算事務を取扱ふ所。

げしあふ 消合ふ【動四他】互に消す。

げしあぶら 芥子油【名】『英 Poppy oil』芥子粒をしぼりて製する油。上等なるは、白色に近くして、愉快なる香味を帶び、下等なるは暗色を呈す。主に、假漆(ニス)・繪具・石鹼等の製造に用ふ。

げしあへ 芥子和【名】擂(リ)潰きたる芥子粒にてあへたる食物。胡麻あへの類。醒睡笑「けしあへにしてさう程に」

げしあられ 芥子霰【名】**げしだま**(芥子玉)■に同じ。膝栗毛「羽織は龍紋のこりこりするやつの芥子霰なぞが、金持らしくて」

げしいた 芥子板【名】駄菓子の一種。豆板(マメ)の豆の代りに、芥子粒を用ひたるもの。俚言集覽「けしいた、尾張名古屋城下にひさぐ菓子なり。龜都(カヂノ)といふ盲人、はじめて製し出でたるによりて、龜の一ともいふ」

げしいん 消印【名】消したるしるしに押す印。例へば、郵便局にて、郵便切手の使用濟のしるしに押す日附印(イン)の類。

げしいりまはし 消入廻し【名】能樂の廻節(マハシ)の一種。入りまはして、次の字を消すもの。

げしう 【副】たって。敢て。どうしても。傾城反魂香「逢はずに歸って人外の名をとれか、げしう逢はせまいなれば、ここで腹を切らうかと」

げしうし 尤し【形シク】**けやけし**(尤し)に同じ。「古語」字鏡「尤、ケシウシキ・ケヤケシ」

げしかく 嗾く【動下二他】『**けし**を見よ』犬などに勢つけて、相手に向はしむ。すすめはげまして、他に手向はしむ。そのかす。けしけしめかす。煽動す。太平記「虎を入鹿にけしかくる」

げしがね 芥子金【名】德川時代の二朱又は一朱の貨幣。けしぎん。こつぶ。御伽名代誤文「紅皮の金入に、一分が三十七八、けしがねも少ござる」

げしがら 芥子殼【名】武具の指物(サシ)の一。芥子の實に、葉二枚を配したるもの。

げしからず 怪しからず【句】**けしかり**(怪しかり)の條下を見よ。

げしがらす 消硝子【名】つやけしがらす(艶消硝子)の略。

げしかり 怪しかり【動ラ變自】『怪(ケ)しく有りの約』■不思議なり。異樣なり。けし。(主に連體形に用ふ)平家「八葉の車のけしかるに」■一かどありて、おもしろし。わるくはなし。可なり。(主に連體形に用ふ)珊瑚「これもけしかるわざかなとて、御衣脫ぎてかづけたまふ」

げしからず 怪しからず【句】■わるくはあらず。異樣ならず。葉式部日記「けしからぬ人を思ひきこえさすとも」■あしくあり。異樣なり。源氏「あな、けしからず、六條の東の上の御文なり」本朝三國誌「とくとく歸れと、御氣色甚だけしからず」■不都合なり。不道理なり。宇治「けしからぬ主の心ぎはかな」■甚し。いみじ。醒睡笑「けしからず有德(ウトク)になりたるよし」

げしからぬ 【句】前條■■■の口語形。井筒業平河內通「まうし祖母樣、けしからぬ身だしなみ」鎌田兵衛名所盃「あけしからぬ、娘に何をかくすこと」

げしからねえ 【句】前條に同じ。(江戸の俚語)「けしからねえ奴らだ」

げしからん 【句】「怪しからぬ」に同じ。怪しかる振舞【句】けしくある行爲。不埒なる擧動。

げ-しき 氣色【名】■かたち。やうす。ありさま。源氏「いかが思へると、けしきも見がてら」■きしょく。機嫌。著聞「けしき直りてけり」■氣うけ。御おぼえ。著聞「小川瀧口定繼といふ御けしきよき主待りけり」■意中をほのめかすこと。おほせ。御意。源氏「春宮よりも、みけしきあるを、思しわづらふことありけるは、この君に奉ちんの御心なりけり」■變りたること。あやしきこと。わけ。仔細。落窪「雨も夜に夜なかに、ただ二人ゆくはけしきあり。捕へよといへば」■容體をつくろふこと。けしきばむこと。平治「青の袖を掻合せて、庭上に氣色せり」■けしきあしきこと。不興。勘氣。榮花「世にかく漏り聞えたるに、院のみけしきのいといみじきなり」

げしきあり 氣色賜はる【句】氣色をうかがひたてまつる。御意をうかがふ。(古語)源氏「かならず參りて、物習ひきこゆべく、まづ內內にも、けしきたまはりたまへ」

げしきいる 氣色に入る【句】氣に入る。盛衰記「入道の氣色に入らんとて、時の才人ども申しけるは、仰少しも違ふべからず」

げしきとる 氣色を取る【句】**けしきどる**(氣色取る)に同じ。(古語)宇治「その局の女の童、けしきとりて、主の女房に、しかじかと告げければ」

げしきよく 景色【名】(景色)に同じ。

げしきをけ 化色【名】(佛)佛・菩薩の神通力を以て、種種に變化せる形體。

げしき 華色【名】(人)『華は蓮華の意』**やすだら**(耶輸陀羅)に同じ。

げ-しき 氣色【副】**けしきばかり**(氣色許)に同じ。(古語)和泉式部日記「秋風はけしき吹くだに戀しきにかき曇る日はいふ方ぞなき」

げ-じき 下食【名】**げじきにち**(下食日)に同じ。

げしきこむ 氣色込む【動四自】■に同じ。天神記「親子を引立て、うしろに圍ひ、氣色込うでぞ立ったりける」

げしきざけ 景色酒【名】人の意を迎ふるために强ひて呑む酒。壬生大念佛「われは飲まねども、强ひられて飲むをけしき酒」

げしきしん 化色身【名】(佛)**けしん**(化身)に同じ。

げしきだつ 氣色立つ【動四自】■きはだちて樣子見ゆ。けしきづく。けはひづく。(古語)源氏「いつしかとけしきだつ霞に」■氣どる。けしきばむ。いろめきたつ。(古語)甚「女房に、歌よませたまへば、みなけしきだち、ゆるがしいだすに」

げしきづく 氣色附く【動四自】前條に同じ。(古語)源氏「おほどかに女しきものから、けしきづきてぞおはするや」

げしきどる 氣色取る【動四自】氣色を見て取る。氣色を取る。けどる。(古語)源氏「さも思ひたちてのたまふことにはと、けしきどり、心まうけしたまふを見るに」

げじきにち 下食日【名】陰陽家にて、天狗星の精が食を求むといふ日。この日、沐浴すれば、天狗星の精に頭を舐められて、毛髮脫落すといふ。俗に、蚰蜒(ゲジ)に舐められれば禿(ハゲ)になるといふは、この誤傳なりといふ。げじき。げじ。下食の日。

げしきのもり 氣色森【名】(地)大隅國姶良(アヒラ)郡上小川村にありし森。千載「秋のくるけしきの森の下風にたちそふものはあはれなりけり」

げしきばかり 氣色許【副】しるしばかり。いささか。けしき。(古語)源氏「日暮れかかるほどに、けしきばかりうちしぐれて」

げしきばまし 氣色ばまし【形シク】けしきばむやうなり。(古語)源氏「いたうけしきばましや」

げしきばむ 氣色ばむ【動四自】■樣子が外にあらはる。顏色に出づ。きざす。(古語)源氏「おとど、けしきばみ聞えたまふことあれど」■きどる。なまめく。こころばむ。(古語)源氏「わかやかなる殿上人などは、目を立てつつけしきばむ」■怒れるさまあらはる。怒をふくむ。けしきこむ。

けしぎん 芥子銀【名】けしがね(芥子金)に同じ。風俗文選「灸艾は、湯氣のたつまで握られて」

けしきんかん 芥子金柑【名】〔植〕まめきんかん(豆金柑)に同じ。

けしぎり 罌子桐【名】〔植〕あぶらぎり(油桐)

けしぐくり 芥子括【名】袖口を最も細く括ること。徳川時代に、俠者の間に行はれて、風流の仕立方とせられたり。

けしくち 消口【名】火事の延燒を消止めたる方面。「東の消口」「西の消口」

消口を取る【句】消防組が、他の組に先んじて「消口をつくること。

けしくわ 罌粟科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門・離瓣花區の一科。殊に北温帶に多く、藥用として著名なる種類を含む。罌粟・鎌罌粟(カラス)・白屈菜(クサノオウ)・博落廻(ハカタケ)・延胡索(エンゴサク)・花菱草(ハナビシソウ)・繭罌粟(アツミゲシ)・山吹草等これに屬す。あうぞくくわ。

けしけし【貌】勢つよく勃起するさま。びんぴん。〔古語〕「字曾、あのものをかきいだして、腹をそらして、けしけしとおこしければ」

げじげじ 蚰蜒【名】〔動〕げぢげぢ(蚰蜒)に同じ。〔古語〕

けしけしまないた 嗾す【名】〔植〕おきなぐさ(翁草)を云ふ。〔加賀國の方言〕

けしけしめかす 嗾す【動四他】けしかく(嗾く)に同じ。〔古語〕雞歩色葉集「嗾、ケシケシメカス」

けしごふ 芥子劫【名】〔佛〕劫の長さを示すに、方百由旬の城中に芥子を充たし、長壽の人ありて、百年ごとに一粒を取去りて、その盡くるに至るも、劫は盡きずと說明すること。(磐石劫に對して)

けしごむ 消護謨【名】紙の上に鉛筆などにて書きたるあとを消すに用ふるゴム。ごむけし。「じ。

げしじょく 下司職【名】げし(下司)【二】に同じ。

けしず 芥子酢【名】芥子を焙して搗潰(スリツブ)し、味淋に溶きて、裏漉にしたる加減酢。芋苗(ズキ)・蕗菜(フキ)・河魚の刺身などに掛けて食ふ。

けしずみ 消炭【名】【一】薪の火を消したるもの。輕鬆にして、燃えつきやすし。(賀古敎信七墓廻)「蚊遣火の閒の油煙や消炭をかくし忍んでかくし文」【二】吉原の各妓樓の風呂の前にて、風呂番をなし、又は消炭などを取扱ふ男。今は奉公人として雇はれど、昔は拂ひに差支へたる遊客が、從事せしめられしもの。

けしずみいろ 消炭色【名】次條に同じ。

けしずみぐろ 消炭黑【名】灰色を帶びたる黑色。最も濃き鼠色。けしずみいろ。

けしずみねずみ 消炭鼠【名】染色の一。灰色を帶びたる、濃き鼠色。

けしせいゆ 芥子精油【名】黑芥子を搗(キ)碎き、中の芥子油を除去し、その殘滓に水を加へて醱酵せしめ、後、搾出したるもの。主に藥用に供せらる。

げしせん 夏至線【名】〔地〕きたくわいきせん(北回歸線)に同じ。

げしだい 下司代【名】下司職の代人。

けしだま 芥子玉【名】【一】芥子粒のごとき細かなる玉を並べたる模樣。即ち豆絞(ボリ)に似て、一層細かきもの。手拭などの染模樣に用ふ。けしあられ。けし。【二】つゆ(露)の異稱。「を見よ。

けしたり 怪したり【句】げし(怪し)の條下

けしつぶ 假實【名】〔佛〕假相と實相と。

けしつぶ 芥子粒【名】【一】芥子の種子。【二】極めて微小なる物の譬。微塵(ミヂン)。狂言(書樂煉)「寶藥を指の腹に、けしつぶほどつけ」

けしつぼ 消壺【名】ひけしつぼ(火消壺)の略。

けして 決して【副】けっして(決して)に同じ。

げしてん 夏至點【名】〔天〕春分點より測りて、黃經九十度なる黃道上の點。地球上より觀測して、太陽が、この點を通過するは、殆ど毎年六月二十一日にして、その日は、即ち地球上の夏至なり。(冬至點・春分點・秋分點に對して)

けしとぶ 消飛ぶ【動四自】打たれなどして、はげしく高く又は遠くはね返さるる。けしとむ。

けしとむ 消飛む【動四自】前條の轉訛。

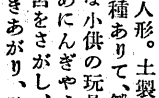
けしとむ 消止む【動下二他】消防して、火の燃えひろがるを止む。

けしなぐさ 芥子菜草【名】〔植〕のげし(野芥子)に同じ。

げしなる 御寢成る【動四自】ぎょしなる(御「寢成る」の訛。

げしにん 解死人・下死人【名】げしゆにん(下手人)に同じ。

けしにんぎやう 芥子人形【名】きはめて小さき人形。土製・紙製・木彫等種種ありて、雛祭に用ひ、又は小供の玩具用に供す。まめにんぎやう。一代男「小宮をさがし、芥子人形、おきあがり、ひばり笛を取揃へ」


(うやぎんにしけ)

けしね【名】ざっこく(雜穀)を云ふ。(東國・西國の方言)

けしねびつ けしね櫃【名】こめびつ(米櫃)を云ふ。(陸奥國津輕の方言)

けしばうず 芥子坊主【名】『形、芥子の實の殼に似たるよりいふ』頭を剃りて、頂のみすこし剃りのこしたるもの。中剃(ナカゾリ)のあるもあり。圓はその毛を延ばしたるもの。おけし。さらげ。すずしろ。なかやま。國姓爺合戰「韃靼頭の芥子坊主」


(ずうばしけ)

けしばたけ 芥子畑【名】芥子を植ゑつけたる畑。けしばたや。猿蓑(乙州)「けしばたや散り殘まりて佛在世」

けしばたけ 芥子畑【名】前條に同じ。

けしびな 芥子雛【名】きはめて小さき雛人形。おへやびな。まめびな。

げしふ 外執【名】〔佛〕外道(ゲダ)の邪なる執見。

けしふん 芥子粉【名】極めて微細なる、蒔繪用の粉。價廉にして、安物に使用す。

けしぼん 芥子坊【名】けしばうず(芥子坊主)の訛。〔京都・大阪邊の語〕

けしぼん 芥子本【名】徳川時代に版行せる小說本の、六枚乃至十二三枚を一部としたる、最も小形なるもの。柳亭種彦の「茶番いろは」「昔話浦島爺」など、この製本にして、もと作者の物ずきより出で、小供の玩弄となりしものなり。まめぼん。

けしまき 芥子蒔【名】芥子の實を畑に蒔くこと、又その人。續猿蓑(空牙)「芥子蒔と畑まで行かん月見かな」

けしまく 消幕【名】芝居にて、殺されたる人の死骸などを蔽ひ隱して、ひそかに舞臺より退かしむるに用ふる、黑き布ぎれ。昔は立者(タテ)に限りて、毛氈を用ひたり。

けしまはし 消廻【名】能樂の廻節(マハシ)の一種。廻(マハ)して、次の字を消すもの。

けしみそ 芥子味噌【名】胡麻味噌と同樣にて、胡麻の代りに、芥子を入れたる味噌。

けしん 化身【名】のみこみ。推察。(俚語)

けしん 化身【名】【一】〔佛〕『佛の化生(ケシヤウ)の身の義』三身の一。佛の衆生を敎化(ケケ)するために、形を變へて、現身に化現(ケゲ)すること、又その身。假現(ケゲ)。化色身(ケシキシン)。化生(ケシヤウ)。化生の身。(應身・法身・報身に對して)【二】芝居にて演ずる妖怪、又それに扮する隈取(クマ)。〔怪神〕

けしん 化身八相(ケシヤウ)【句】〔佛〕化身佛にある、降生より涅槃(ネハン)に至るまでの、八種の相。はっそう(八相)參照。

けしん 化心【名】〔佛〕化身の心。實の識慮なきもの。

けしん 灰身【名】〔佛〕『身を灰にする意、即ち火定(クワヂヤウ)に入り、茶毘(ダビ)に由りなどして、色身を滅却せしむるに譬へていふ』肉體を滅却すること。次條參照。

けしんだんわ 灰身斷惑【句】〔佛〕『身を灰にし、惑を斷つ意』次條に同じ。

けしんめつぢ 灰身滅智【句】〔佛〕『身を灰にし、智を滅する意』二乘の人の最終の目的、即ち灰身し、又或は火定(クワヂヤウ)に入り、或は茶毘(ダビ)に由りて、色身滅止して、空寂(クウジヤク)・無爲の涅槃(ネハン)界に歸入すること。けだん。灰身斷惑。無餘涅槃。けしや(灰沙)參照。

げーしん 解信【名】〔佛〕理論的方面を研究・

理解して後に信ずること。

げしん 解心・下心【名】した心。こころえ。會得(エエトク)。五十年忌歌念佛「げしんのわるい悼めと」

けしんごと 化身事【名】芝居の狂言にて、化身[二]の事を仕組みたるもの、又それを演ずる藝。けしんもの。

けしんもの 化身者【名】[一]前條に同じ。

けしんめん 芥子面【名】小供が唾にて、指の腹に附けて弄ぶ、玩具の小さき假面(メン)。

けしめん けし麵【名】きしめん(碁子麵)の訛。狂言「文蔵」「饂飩か、けいらんか、けしめんか」

けしめる 氣濕る【動四自】『け(氣)は接頭語』しめる(濕る)に同じ。「古語」「雲花」雨のどかに降りて、けしめりわたりけるに」

けしや 灰沙【名】〔佛〕灰身滅智(ケッシンメッチ)を最終の目的とする點について、聲聞(ショウモン)縁覺の悟を斥けていふ語。盛衰記「灰沙の二乗」

げしや 下車【名】車よりおりること。下乗。(乘車に對して)「ること。

げしや 外捨【名】〔佛〕財寶を他に喜捨すること。

けしやう 化粧・假粧【名】[一]べに・白粉(オシロイ)などを附けて、顔などをよそふこと。おつくり。けさう。みじまひ。けはひ。「氣粧・假妝・氣裝」奈良「手盡したる御けしやうをしおはします」[二]美しく飾を添ふること。いろどること。[三]實用を主とせず、外觀を裝ひ飾ること。曾我五人兄弟「この袈裟衣は、伊達に著るか、化粧に著るか」

けしやう 懸想【名】けさう(懸想)に同じ。「古語」「なべてはならひたまはぬ心地に」

けしやう 化生【名】[一]〔佛〕四生(シショウ)の一。依託する所なく、忽然として生ずること、又その物。佛・菩薩・諸天及び劫初の人など、これなり。[二]〔佛〕けしん(化身)[二]に同じ。「水鏡」無量劫の中に、三界に化生して、方便をめぐらして、衆生を導く」[三]ばけること、又そのもの。化生の者。へんげ。妖怪。「文武五人男」「某は武綱なるが、化生の女を組

留めしといふ聲に驚き、立寄り見れば」

けしやう 化生の身【句】〔佛〕けしん(化身)[二]に同じ。

けしやう 化生の者【句】[一]けしやう(化生)[三]に同じ。[二]賣女の、素人の容姿に扮したるもの。[三]手くだの巧なる女。妖婦。

けしやう 假粧【接頭】美しく繪模様などを施せる物の意。「假粧元結(モトユイ)」「けしやう革」

けしやう 化城【名】〔佛〕けじやうゆ(化城喩)を見よ。「を見よ。

けしやう 芥城【名】〔佛〕けしごふ(芥子劫)を見よ。

けしやう 擧狀【名】きよじやう(擧狀)の訛。

けしやう 牙像【名】けそく(華足)に同じ。

けしやう 下生【名】[一][二]〔佛〕極樂往生の階級なる上品(ジョウボン)中品・下品の各の下位なるもの。(上生・中生に對して)くぼん(九品)参照。大原問答青葉笛「それ下品・下生の往生は、四生の苦患をやや遁るるばかりにて」[三]神佛の世に出づること。

げしやう 下姓【名】種姓(シュジョウ)の賤しきこと、又その人。下賤の出。今昔「下姓の人なりと云へども、大きに富みて家豐なり」

げしやう 下性【名】げすの根性。

げしやう 【名】糞便のしかた。〔俚語〕「げしやうが善い」「げしやうが惡い」

げじやう 解狀【名】[一]げぶみ(解文)に同じ。盛衰記「速賜解狀二可二申上一也」[二]鎌倉時代及び室町時代に、訴訟の時、原告と被告とより差出しし訴狀と陳狀と。

げじやう 牙象【名】〔建〕げんじやう(眼象)に同じ。

げじやう 下城【名】勤務を終へて、城より退出すること。(登城に對して)

けしやう-いくさ 化粧軍【名】形式的の軍。みせかけのいくさ。

けしやう-いた 化粧板【名】[一]鉋(カンナ)削りを施したる板。(野板に對して)[二]けしやうのいた(化粧板)に同じ。「る鏡。

けしやう-かがみ 化粧鏡【名】化粧に用ふ

けしやう-がね 化粧金【名】けはひがね(假粧金)に同じ。

けしやう-がは 化粧側【名】井戸側の、地上にあらはれたる部分。

けしやう-がは 化粧革【名】[一]美しき繪、又は模様にて飾りたる革。[二]靴の踵の積上げに用ふる裏質の厚革。

けしやう-がみ 化粧紙【名】相撲(スマヒ)の時、力士が、身體を拭ひ清むるに用ふる切紙。土俵の柱に吊しおくを例とす。その下に、化粧水(ケショウスイ)あり。

けしやう-ぎせる 化粧烟管・化粧煙管【名】美しき模様に彩色したる、瀬戸物などの烟管。主に女の用ふるもの。

けじやう-くづれ 化粧崩【名】顔の白粉(シロイ)の、汗のために剝げてきたなくなること。

けしやう-こころばい 化粧勾配【名】〔建〕化粧だるきの勾配。

けしやう-した 化粧下【名】白粉(シロイ)を塗る下地、又それに用ふる油・クリイム又は特種の液體。おしろいした。浮世風呂「化粧下へは、かほよ香といふ油を塗る」

けしやう-しつ 化粧室【名】けしやうべや(化粧部屋)に同じ。

けしやう-しやぼん 化粧石鹸【名】身體の垢を洗ひおとすに用ふるシャボン。(洗濯石鹸に對して)

けしやう-する 化粧水【名】顔の化粧をなすに用ふる液體。水おしろいの類。化粧みづ。

けしやう-だ 化粧田【名】嫁入の際、化粧料として持參する田地。けはひでん。

けしやう-だい 化粧臺【名】化粧道具を載する臺。「ふる道具。

けしやう-だうぐ 化粧道具【名】化粧に用ふる諸具。

けしやう-だが 化粧籠【名】醬油樽・角樽などに、常の籠以外に、裝飾として嵌むる太き籠。

けしやう-だち 化粧立【名】力士の、土俵の上に相對して仕切りながら、呼吸合はず、更に仕切直さんとて、化粧水を飲み、口を撒くため、味方の柱の方へ行くこと。

けしやう-だな 化粧棚【名】四十八棚の一。床の間・書院などの脇に設けて、化粧の品などを置く飾棚。多くは棚の板の數四枚にて、袋戸を附く。

けしやう-だんす 化粧箪笥【名】寢室に備へて、衣服を藏むるに用ふる箪笥。

けしやう-だるき 化粧垂木【名】〔建〕軒下にあらはるる椽。(野垂木に對して)

けしやう-づみ 化粧積【名】〔建〕外側に面して煉瓦を積みたること、又そのもの。(裏積・中伏(ナカブセ)に對して)

けしやう-づゑ 化粧杖【名】實際には使用せず、從者に持たせて歩く杖。餘情杖。

けしやう-なは 化粧繩【名】酒樽などの薦(コモ)の上に、常の繩以外に、飾に添へたる細き繩。

けしやう-のいた 化粧板【名】鎧の胸板又はその袖の冠板(カムリ)の下にありて、金物を張りて飾れる細き横板。交裝(カウシ)の板。

けしやう-のま 化粧間【名】けしやうべや(化粧部屋)に同じ。

けしやう-ばかま 化粧袴【名】よのばかま(四幅袴)に同じ。

けしやう-ばこ 化粧箱【名】[一]化粧道具を入るる箱。おつくりばこ。[二]進物用などのために、外部を裝飾したる商品の箱。

けしやう-ばん 化粧板【名】こまものわく(小間物枠)に同じ。

けしやう-ばやる 化粧逸る【動四自】化粧に心をこらす。「古語」「落窪」このごろ御心そり出でて、けしやうばやりたり」

けしやう-びやう 化粧鋲【名】模様などの裝飾ある鋲、また裝飾に打つ鋲。

けしやう-ふで 化粧筆【名】化粧の紅(ベニ)をさすに用ふる筆。べにふで。

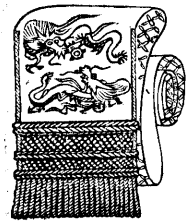
けしやう-べに 化粧紅【名】化粧に用ふる紅。(細工紅に對して)

けしやう-べや 化粧部屋【名】化粧するための部屋。みじたくするへや。化粧室。梳の間(マ)。化粧の間(マ)。「代女」烏羽玉(ウバタマ)の髪の落、みだれ箱・十寸鏡(カガミ)の二面(フタオモテ)見しや化粧べやの風情」

けしやう-まく 化粧幕【名】小紋を染めたる幕。雜幕(ザツマク)。

けしやう-まはし 化粧廻【名】力士の、土俵

入などの時に用ふるまはし。昔は、多く綴子にて造りたるより、「どんす」ともいへり。今は、下圖のごとく、前面に種種の美しき綺模様などをあらはしたる前垂の如き、華美なるものを用ふ。



（しはまうやしけ）。

けしやう-みづ 化粧水【名】㊀けしやうすゐ（化粧水）に同じ。㊁女が、化粧に用ふる水。俗謡「富士の白雪、朝日に融けて、融けて、流れて、三島に落ちて、三島女郎衆の化粧水」㊂相撲（スマフ）の土俵の上、化粧紙を吊（ル）したる下に、桶に汲みおきて、力士の飲用に充つる水。ちからみづ。

けしやう-めぬき 化粧目貫【名】たはらめぬき（俵目貫）に同じ。

けしやう-もとゆひ 化粧元結【名】ゑもとゆひ（繪元結）に同じ。

けしやう-やねうら 化粧屋根裏【名】〔建〕天井を張らずに、わざと露はし置く屋根裏。我が國古代の建築は、悉くこの式なり。

けしやう-やりど 化粧遣戸【名】彩色せるやりどならん。一説に、裝飾のために附けたる戸にて、開閉し得ぬものなるべしと。〔古語〕 盛忠後百首「われといへば問へどこたへず色のむ化粧やりども口をかためて」

けじやう 化城喩【名】〔佛〕法華七喩の一。長途を歩みて寶所に達せんとし、中途に疲れて、一歩も進み難き人のために、導師が一大城を化作（ケサ）して、一旦止息せしめ、英氣を養はせて、これを勵まし、衆人の喜びて疲勞の去る頃、その化作の城即ち化城滅して、更にその寶所に導きたりといふ喩説。方便數を化城に、眞實數を寶所に譬へたるもの。化城喩品。

けしやう-ゆひ 化粧結【名】德川時代の奥女中が、長髪（ナガカ）のもとを、平元結（トリヒモ）にて、二重にまはして結び、その上に、化粧元結を掛けしこと、又その掛けかた。

けじやうゆ-ぼん 化城喩品【名】〔佛〕けじやうゆ（化城喩）に同じ。 聖德太子繪傳記「法華經の三の卷化城喩品を拜せよ、と教へ給へる御牒につれて」

けしやう-れう 化粧料【名】化粧に費す金錢。

けしやう-わざ 化粧業【名】㊀化粧に就きての仕業。㊁體裁をつくろふのみにて、實行せざる行爲。 蕉廬獻「腹切らうと申すとも、よも、切らせはなされまい。すれば、いらぬ化粧業」

けしやき 芥子燒【名】㊀護摩（ゴマ）を燒（タ）くこと。けし（芥子）㊁參照。〔古語〕 蜻蛉「けしやきのやうなるわざすれど、猶しるしなくて」㊂煎餅の類の菓子。「し。

けしやく 掛錫【名】くわしやく（掛錫）に同じ。

けしやく 化迹【名】〔佛〕佛の衆生を敎化（ケウケ）せし遺跡。敎跡（ケウセキ）。「石劫と。

けしやく 芥石【名】〔佛〕芥子劫（コフシ）と磐（ケイ）。 菜花「經の中の心ばへ、例の大意・釋名。入文・解釋より始めて、いみじう聞きよく珍しう言ひもてゆくに」

げじやく 外戚【名】ぐわいせき（外戚）に同じ。〔古語〕 榮華「ないじやくにも、げじやくにも、女といふものなん乏しくはべる」

げしやくばら 外戚腹・下借腹【名】本妻以外の女の生みたること、又その生れたる人。めかけばら。妾腹。庶生。 續無名抄「外戚腹、ゲシャクバラ」 曾我五枚羽子板「鎭西八郎爲朝の外戚腹」

げしやり 牙舍利【名】〔佛〕おっしやり（佛舍利）に同じ。 謠曲「舍利」「これなん足疾鬼が奪ひしを、韋馱天取返したまひし現住奇特の牙舍利の御相好」

けしやう 芥子油【名】けしあぶら（芥子油）に同じ。

けしやう 化主【名】〔佛〕㊀化導（ケダウ）の敎主。例へば阿彌陀は淨土の化主、釋迦は娑婆の化主などいふ類。㊁がいばう（街坊）に同じ。「見よ。

けしやう 繫珠【名】〔佛〕えしゆ（衣珠喩）を見よ。

げしやう 下種【名】〔佛〕『法談を聞きて、一乘の種子を下す義。かしゆ（下種）を見よ』道心を發して修行すること。あしゆ。 孕常鈔「正念の床に坐し、淨土の道を踏分けては、菩提の下種し奉らん」

げしやう 夏首【名】〔佛〕夏安居（アンゴ）の初日。

げしやう 夏衆【名】〔佛〕㊀夏籠（ゲロウ）に集る會衆。㊁昔、比叡山延曆寺にて、佛前の雜用に任ぜし卑しき僧。堂衆。盛衰記「覺等僧正御治山の時より、三塔に結番して、夏衆と號し、佛に花奉りし輩なり」

げじやう 偈頌【名】〔佛〕『偈は、漢譯して頌といふ。梵・漢雙擧の熟語』げ（偈）に同じ。

げしやく 下宿【名】㊀我が家にさがりをること。やどさがり。やどおり。やどいり。㊁やや長き期限を定めて宿泊すること、又その宿。㊂下等なる旅館、又それに宿泊する客。 丹波與作「本陣の上下殘なく、下宿の諸ざむらひ」

げしやく-せいくわつ 下宿生活【名】下宿して生活すること、又その人。

げしやく-にん 下宿人【名】下宿する人。

げしやく-や 下宿屋【名】下宿人を宿泊せしむるを業とする家。げしゅくやど。

げしやく-やど 下宿宿【名】前條に同じ。

げしやく-れう 下宿料【同】下宿人が下宿の代として拂ふ賃錢。

けしやす 毛繻子【名】經（タテ）に綿絲、緯（ヨコ）に毛絲を用ひ織りたる綾織の織物。滑かにして光澤あれど、普通の繻子より下等にして、著物の襟・袖口などに用ふ。

げしやつ 外術・下術【名】『外道の術の義』まほふ（魔法）㊁に同じ。 今昔、京に、下術といふ事を好みて、役とする下衆法師ありけり」

げしゅつ 外術・下術【名】『外道の術の義』外術は七日持たず【句】妖術は、一時人の眼を眩惑するも、永く持續するものにあらず。〔諺語〕

げじゅつ-もの 外術者・下術者【名】まほふつかひ（魔法遣）に同じ。 今昔「げじゅつものなどにてや有りけん」

げしゅ-にん 下手人【名】㊀みづから手を下して、人を殺したる人。 著聞「仲正が所行、しかるべからずとて、下手人など、召出されんずるにて」㊁江戸幕府の刑名の一。單に喧嘩口論等にて人を殺し、又はその指揮・媒助をなしし者等に科する斬首。死罪に比して、一等輕く、斬首の後、檬者（シタイ）にさらさず、又、死骸の埋葬を許したり。

げじゅん 下旬【名】『旬は十日間の義』每月の二十一日より末日までの間。下院。下澣。下浣。（上旬・中旬に對して）

けしよ 化疏【名】㊀〔佛〕寺院にて、米・炭等を勸化する時、施主に示して、その主意を明かにするため、勸化帳の端に書く文言。㊁『化は火化即ち燒くの義』古代に神を祭りし時、紙錢・紙馬等を燒きて、神に告ぐる印となししこと。神・人道を異にし、此に化すれば、彼に享（ウ）くとて行ふなり。

げしよ 下書【名】したがき（下書）に同じ。（主に公邊に奉る文書にいふ）

げしよ 外書【名】〔佛〕げてん（外典）に同じ。

けしよう 顯證・見證【名】けせう（顯證）を見よ。

げじよう 下乘【名】㊀乘物より下るること。かじよう。㊁乘打（ノリウチ）を禁ずること、又その標札。下馬（ゲバ）。乘物禁制。 徒然「退（ノ）凡下乘の卒都婆、外なるは下乘」

げしよく 下職【名】㊀下等なる職業。 當流小栗判官「終に見もせぬ手業にも、下職はやすき習かや」㊁したじよく（下職）に同じ。

げじらくてん 化自樂天【名】〔佛〕けらくてん（化樂天）に同じ。

げしらみ 毛蝨【名】〔動〕有吻（フン）類に屬する昆蟲。體は圓形にして小さく、灰白色又は灰黃色を呈し、腹部・陰部などの毛中に寄生す。つびじらみ。

げしろ 烟管・煙管【名】きせる（煙管）の轉訛。〔伊勢國の方言〕

けす 消す【動四他】『きやす（消す）の約』㊀消えしむ。燃ゆるを止む。㊁無くならしむ。除く。うちけす。㊂塗りつぶす。抹殺す。㊃とどむ。止ましむ。「獨樂（ヤ）を消す」㊄失ふ。つぶす。平家「老少共に魂をけし」㊅けなす（貶す）に同じ。 甲陽軍鑑「そしるも、けすも、無案內なる者ども」

けす 化す【動佐變自】くわす（化す）に同じ。 著聞「流星東北を指して引けるが、その跡化

して、雲となり」

けす 著す【動四他】きる(著る)の敬語。〔古語〕記「さねむとはあれはすれども汝がけせるおすひの裾に月たちにけり」

げ-す 下衆・下種【名】㊀身分のいやしき者。はしたもの。(上衆(ウエヤ)に對して) 大和「げすの心地にも、いと胸いたくなん」 今昔「下衆の小家なれば、程もへだてざれば」 ㊁品位いやしきこと。心の卑しきこと、又その人。

下衆一(チイ)【句】「下衆の一寸戸」の略。〔諺語〕「下衆一、のろ三」

下衆と鷹さに餌(エ)をかへ【句】下衆と鷹とは、こころづけ又は食物を與へて、手なづけよ。〔諺語〕

下衆の後智慧(チエ)【句】身分の卑しき者は、事に臨みて、何の智慧も出でず、事過ぎて後に、やうやくおくれて氣が附く。下衆の智慧はあとから出る。虚假(コケ)の後思案(アトジアン)。〔諺語〕

下衆の一寸(スイン)【句】次條に同じ。〔諺語〕

下衆の一寸戸(スイドス)【句】下衆の者は、戸・障子などを閉つるにも、丁寧にせず、一寸ほどを明放にす。下衆一。下衆の一寸。下郎の一寸戸。〔諺語〕

下衆の一寸、のろまの三寸【句】戸・障子を閉づるに、下衆は一寸ばかりを餘し、のろまは三寸ばかりを殘す。即ち心の到らぬことの譬。〔諺語〕

下衆の子と糠團子は三つまで【句】糠團子は三つ位まではよきも、それ以上は味ふに足らず、下衆の子も三歳位まではよきも、成長するに隨ひ、親の賤しき心あらはれて、養ふに足らず。下衆の子と稗團子。〔諺語〕

下衆の子と稗團子(ヒエダン)【句】前條に同じ。〔諺語〕

下衆の逆恨(サカウラミ)【句】下衆は心の到らぬ者故、己の非をさとらず、却って注意訓戒するものを怨む。〔諺語〕

下衆の謗食(ソシリ)【句】下等なるものは、おのれ常に粗食しながら、みえをはりて、却って美味のものをも誇りながら貪り食ふ。〔諺語〕

下衆の智慧は後(ノチ)から出る【句】「下衆の後智慧」に同じ。〔諺語〕 生玉心中「ええ下主の智恵は跡から、紋付の提灯で尋ぬるは無分別」

下衆は口恥(ハヂ)【句】「大人(オトナ)は目恥下衆は口恥」を見よ。〔諺語〕

下衆は三食(ジサキ)、上臈も三食【句】事によりては、上下の區別なきこと。〔諺語〕

下衆は槌で使へ【句】賤きものには、理を説くよりも、寧ろ鞭韃して使役せよ。〔諺語〕

げ-す 下司【名】こたつかさ(下司)に同じ。〔古語〕 枕「蔵人所の人・下司などにこひて」

げす 解す【動佐變他】㊀會得す。心に分ち知る。解(カイ)す。 ㊁消す。除く。「毒を解す」

げす 解状(ゲジヤウ)を奉る。〔古語〕

げす【動自】ございます。どす。がす。〔江戸の俚語〕「さやうでげすから」「てげして」

げず【名】〔植〕からたち(枸橘)を云ふ。〔西國の方言〕

げすーいた 下寸板・下衆板【名】長火鉢の、横側の引抽(ヒキダシ)の上に敷く板。ねこいた。

げすーがち 下衆勝・下種勝【名】下品なる樣子多きこと。げすびすしきこと。〔古語〕 蜻蛉「げすがちなる心地して、け劣りしてぞおぼゆる」

げすーがめ 下衆瓶・下種瓶・下須瓶【名】大小便を受溜むるために、厠に埋むる瓶。つぼがめ。かめ。**げすをけ**(下衆桶)參照。

げすーげすし 下衆下衆し【形二】下衆の如し。甚だいやし。〔古語〕 源氏「げすげすしくあへなくて、せられぬ事かなと、そしりければ」

げすーこんじやう 下衆根性・下種根性【名】極めて卑賤なる根性。げすばら。

げすさ 毛寸莎【名】古き綫氈(センダン)などを切解きて製したる寸莎。南京すさ。けつた。參照。

げすさまじ 氣凄じ【形二】『け(氣)は接頭語』**すさまじ**(凄じ)に同じ。〔古語〕 枕「ことさまじなどそしる」

げすーさるがく 下衆猿樂・下種猿樂【名】一家を立つる猿樂。

げすし 下衆し【形二】げすの如し。げすびすし。いやし。〔古語〕 傾城女集「賢きはたかき人となり、幼きはげすしき身と定めける」

げすーしごと 下衆仕事・下種仕事【名】いやしき仕事。賤業。日本武尊吾妻鑑「奥のお庭の下主仕事、木の下蔭のからうすも、花の雪踏む景色かや」

げすーたうじん 下衆唐人・下種唐人【名】げすの唐人。品位高からぬ唐人。

げすーだな 下衆棚【名】和船の艫(ト)の方の、湯殿・雪隠などのあるところ。しりだな。

げ-すぢ 毛筋【名】㊀髪の毛一筋ほど。 ㊁毛のすぢ。髪をくしけづりたる痕の筋目。かみすぢ。 ㊂極めて細小なること。かみすぢ。毫末。「毛筋ほどの罪もなし」 ㊃**けすぢだて**(毛筋立)の略。

げすーぢか 下衆近【貌】げすぢかきさま。蜻蛉「いとかなし。げすぢかなる心地して、けおとりしてぞおぼゆる」

げすーぢかし 下衆近し【形一】下衆に似たり。下衆らし。さま・かたち賤し。 最明寺殿百人一首「庭の雪をかき落し…あつめたやと手を吹くも、下衆ぢからして猶やさし」

けすぢ-だて 毛筋立【名】髪の毛筋を正すに用ふる一種の櫛。柄は細長くして、鋭く尖れり、一方には、普通の櫛の如き齒あり。けすぢ。けすぢぼう。すぢぼう。

けすぢ-ぼう 毛筋棒【名】前條に同じ。

げすーてんにん 下衆天人・下種天人【名】品位いやしき天人、また天人を罵りていふ語。

げすーとくにん 下衆德人・下種德人【名】下衆にて金持なる人。 宇治「この山の麓に、いみじき下衆德人あり」

げすーにん 下衆人・下種人【名】下衆の人。品位いやしき人。げす。 曾我「片山里の下衆人の立てあはざるを、夜討などにし」

げ-ずね 毛脛【名】毛の多く生えたる脛。

げすーさるがく 下衆猿樂・下種猿樂【名】一家を立つる猿樂。

げすし 下衆し【形二】げすの如し。げすびすし。いやし。〔古語〕 傾城女集「賢きはたかき人となり、幼きはげすしき身と定めける」

げすーしごと 下衆仕事・下種仕事【名】いやしき仕事。賤業。日本武尊吾妻鑑「奥のお庭の下主仕事、木の下蔭のからうすも、花の雪踏む景色かや」

げすーたうじん 下衆唐人・下種唐人【名】げすの唐人。品位高からぬ唐人。

げすーだな 下衆棚【名】和船の艫(ト)の方の、湯殿・雪隠などのあるところ。しりだな。

げ-すぢ 毛筋【名】㊀髪の毛一筋ほど。 ㊁毛のすぢ。髪をくしけづりたる痕の筋目。かみすぢ。 ㊂極めて細小なること。かみすぢ。毫末。「毛筋ほどの罪もなし」 ㊃**けすぢだて**(毛筋立)の略。

げすーぢか 下衆近【貌】げすぢかきさま。蜻蛉「いとかなし。げすぢかなる心地して、けおとりしてぞおぼゆる」

げすーぢかし 下衆近し【形一】下衆に似たり。下衆らし。さま・かたち賤し。 最明寺殿百人一首「庭の雪をかき落し…あつめたやと手を吹くも、下衆ぢからして猶やさし」

けすぢ-だて 毛筋立【名】髪の毛筋を正すに用ふる一種の櫛。柄は細長くして、鋭く尖れり、一方には、普通の櫛の如き齒あり。けすぢ。けすぢぼう。すぢぼう。

けすぢ-ぼう 毛筋棒【名】前條に同じ。

げすーてんにん 下衆天人・下種天人【名】品位いやしき天人、また天人を罵りていふ語。

げすーとくにん 下衆德人・下種德人【名】下衆にて金持なる人。 宇治「この山の麓に、いみじき下衆德人あり」

げすーにん 下衆人・下種人【名】下衆の人。品位いやしき人。げす。 曾我「片山里の下衆人の立てあはざるを、夜討などにし」

芭蕉「東路の毛ずね恥かし床すずみ」

げすーばら 下衆腹・下種腹【名】㊀その生母の下衆なること。卑賤なる生母。 ㊁**げすこんじやう**(下衆根性)に同じ。

げすばり 下衆張・下種張【名】げすばること。 七偏人「玉子と豆の大ばん振舞が始まったから…ちっとげすばりに來ねえ」

げすーばる 下衆張る【動四自】いやしき言行をなす。下品なる風あり。 七偏人「きはどい處でげすばるなえ」

げすーぼうこう 下衆奉公・下種奉公【名】卑賤なるつとめ奉公。 觀經如來誕生會「緣を求めて下衆奉公、下男・下女・朋輩づきも臆じく」

げすーほふし 下衆法師・下種法師【名】品位いやしき法師。 今昔「京に外術といふ事を好みて役とする下衆法師ありけり」

けすむ【動自】**はにかむ**に同じ。〔越後國の方言〕

げすーやまぶし 下衆山伏・下種山伏【名】品位いやしき山伏。

けすらひ【名】けすらふこと。そぶり。態度。 無名抄「いみじく歌の品もいでき、ふるまへるけすらひともなるなり」

けすらふ【動四自】なずらふ。よそふ。やうす見ゆ。〔古語〕 新拾遺「ゆふなぎにほづつしめなはくりさげてとまりけすらひよする船人」

けーすゐ 華水【名】〔佛〕『華はその清淨の義に取りていふ』閼伽(アカ)の水。

げーすゐ 下水【名】臺所・湯殿・井戸端などの流し水、また溝の水の如き、すべて不潔なる水、又これらの水を流しやる溝。どぶ。(上水に對して)

げすゐ-いた 下水板【名】下水の溝の上をおほふ板。どぶいた。

げすゐ-がす 下水瓦斯【名】『英Sewer gas』下水の成分の分解作用による瓦斯と混合して、汚染せる下水管内の空氣。

けすゐく 華水供【名】〔佛〕閼伽(アカ)を佛に供ふること。

げすゐくわん 下水管【名】下水を流通せしむるために布設せる管。

げすねこうじ 下水工事【名】下水を排除し、若しくはその水位を下降せしむる方法を施行する工事。

げすねーしょぶんはふ 下水處分法【名】下水管によりて集聚したる都市の下水を、無害なるものに變化せしめんがために處理する方法。「の略。

げすねーた 下水板【名】げすいた(下水板)

げすねーだち 下水道【名】『英 Gower』下水管、その他、排水線路の總稱。

げすーをけ 下衆桶・下須桶【名】雪隱に埋めて、大・小便を受溜むるやうにせる桶。げすがめ(下衆瓶)參照。

げすーをとこ 下衆男・下種男【名】一卑賤なる男。下衆生れの男。今昔、攝津國の所知より、下衆男の上りて逗留せるあり」二賤役を執る男。下男。

げすーをのこ 下衆男子・下種男子【名】前條に同じ。〔古語〕「夜宵より寒がりわなゝき居りつる下衆をのこなどは」

げすーをみな 下衆女・下種女【名】次條に同じ。〔古語〕

げすーをんな 下衆女・下種女【名】一身分の卑賤なる女。卑しき生れの女。源氏「ひすましめくもの、ふるきげすをんな、二人ばかりとぞある」二婦人を卑めていふ稱。今昔「下衆女恥を知る」堀山莖「數にも足らぬげす女、何事が仕出かさん」

げーせい 解制【名】〔佛〕かいげ(解夏)に同じ。

けーせう 顯證・見證【名】あらはなること。きはだちたること。けさう。けそう。けしきだちたること。けんしょう。〔古語〕「源氏、髪の筋などもなかなか甚よりはけせうに見えてまばゆけれど」

げーせつ 下說【名】しもじもの者のいふところ。下流社會の風說。曾我「まことは、下說につきて、何となく心安からず過ぎつるに」

げーせつ 下拙【代】第一人稱の謙稱。卑宿鑒「これ體に御太刀を合はされんは勿體なし、下拙こなし申さんと、面もふらず斬りかくる」

けーぜった 毛雪踏【名】毛皮を表に附けたる雪踏。江戸時代に流行せり。もと寒さを防ぐために穿ちしものなりしが、後には小供用のものとなれり。柳塘「火燵にて毛雪踏をはく百白さ」

けせぬま 氣仙沼【名】〔地〕けせんぬま(氣仙沼)に同じ。

けーせん 花扇【名】はなあふぎ(花扇)に同じ。

けーせん 氣仙【名】〔地〕陸前國十三郡の一。郡役所を盛(サカ)町に置く。

げーせん 下賤【名】いやしきこと。身分の低きこと。今國姓爺「讐へ下賤の子にもせよ、一度王と呼ばるる人相」

げーせん 牙籤【名】象牙の小札などに、書物の峽の外に下げて、目標とするもの。

けせんーかご 氣仙籠【名】陸前國氣仙郡より出づる籠。

けせんぐう 外遷宮【名】かりせんぐう(假遷宮)に同じ。

けせんずるめ 氣仙鰯【名】陸前國氣仙郡地方にて製する鰯。柔魚(スルメ)の軟骨を去りて鰯とし、その半ば乾きたる時、體を横に引延ばして、丸形に製造せるもの。きせんずるめ。

けせんぬま 氣仙沼【名】〔地〕陸前國本吉(モトヨシ)郡にある町。氣仙沼灣頭に位し、東濱街道に當る。

けせんぬまーわん 氣仙沼灣【名】〔地〕陸前國本吉(モトヨシ)郡なる岩井崎と唐桑崎との間に灣入せる灣。中央に大島ありて、灣を東西に分つ。

げーせわ 下世話【名】しもじもにて常常口にする語。俚諺。卷花五大力「かの千太郎さま…下世話でいふ智惠つけのため、拙者を、うばのやうに思召してござるは、氣の毒なものでござる」

けーそう 顯證【名】けせう(顯證)を見よ。

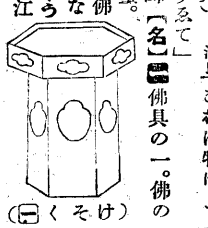
げーそう 夏僧【名】夏籠(ゲゴモリ)をする僧。安居僧(アンゴソウ)。

げーそう 下僧【名】いやしき僧。下法師(シモホウシ)。中間法師(チウゲンホウシ)。飛獸留多「庵は下僧に讓り捨て」

げーそうだち 外僧堂【名】『常外の僧の義』禪宗にて、乞食の僧。

けーそく 華足・花足・華飾【名】猫足(ネコアシ)・鷲足(ワシアシ)などの、花形模樣の附きたるもの。くゑそく。牙像(ゲゾウ)。源氏「これは特に、ちんの華足の机にするて」

けーそく 華束・華飾【名】一佛具の一。佛の供物(クモツ)を盛る臺。くげ。「華足」二佛に供ふる餅菓子などの稱。三ぎょう(供饗)を云ふ。〔江戸・四國の方言〕


(一)くそけ

けーぞく 化俗【名】〔佛〕世俗の人人を敎化(ケウケ)すること。

けぞく 化屬【名】〔佛〕佛、菩薩の敎化(ケウケ)を受くべく、初より定まれる眷屬。

げーそく 下足【名】一脫ぎたるはき物。二げそくばん(下足番)の略。三げそくれう(下足料)の略。四足を下ぐること。講曲雀翹「高足・下足の舞の手を盡し」

けそくだい 華足臺・花足臺・華束臺・華飾臺【名】寺院にて、華束(二)を載する臺。

げそくだい 下足代【名】履物のあづけ賃又は使用料。げそく。下足料。

げそくーばこ 下足箱【名】げたばこ(下駄箱)に同じ。

げそくーばん 下足番【名】人の下足を預りて、番をすること、又その番をする人。げたばん。げそく。「に同じ。

げそくーれう 下足料【名】げそくだい(下足代)

けそけそ【副】恥ぢらひて、顏を赧(カヾ)くするさま。醜然(ゼン)。

けーそん 家損【名】家のきず。家の恥辱。〔古語〕源氏「おのづからけそんなるわざに侍り」

けーぞめ 毛染【名】頭髮の白變し、又は赤色なるを染むること。「化粧藥。

けぞめーぐすり 毛染藥【名】毛染に用ふる藥。

げそり【貌】事物の急に減り、また俄に痩せ衰ふるさま。げっそり。

けた 方【名】かく。四角。

けた 桁【名】一家・櫓などにて、柱・束(カヾ)・壁などの上に据附けて、他の物を承けしむるための横木。(梁(ハリ)に對して)萬葉「をはりだの板田の橋のくづれなばけたよりゆかむな戀ひそ我妹(ワギモ)」二算盤の竪に幾條も並びて、珠をつらぬける串。三(數)數の位。くらゐどり。けたちがひ(桁違)參照。「桁が違ふ」四かたばら(傍)に同じといふ。〔古語〕堀太「とりつなげ玉田よこ野の放駒つつじがけたにあぜみ花咲く」五けたあみ(桁網)を見よ。

けた 桁に歩く【句】『一說には、けたは化他(ケタ)なりとも、また軒別に歩むを、箇箇の桁に比して云ふともいふ』淨瑠璃などかたりて、門づけして行く。

けた 化他【名】〔佛〕他を化益(ケヤク)すること。利他。(自行(ジギヤウ)に對して)平家「取出いて、化他の碑文見せたてまつれ」

げた 下駄【名】一主として、木にて造り、鼻緒をすげたる履物(モノ)。即ち足駄(アシダ)・駒下駄(コマゲタ)・薩摩下駄など、種種あり。二『下駄の齒に似たるよりいふ』ふせじ(伏字)に同じ。

けた 化他【名】〔佛〕他を化益(ケヤク)すること。利他。(自行(ジギヤウ)に對して)平家「取出いて、化他の碑文見せたてまつれ」

げた 下駄【名】一主として、木にて造り、鼻緒をすげたる履物(モノ)。即ち足駄(アシダ)・駒下駄(コマゲタ)・薩摩下駄など、種種あり。二『下駄の齒に似たるよりいふ』ふせじ(伏字)に同じ。

下駄で首たけ【句】「足駄を穿(ハ)いて首たけ」に同じ。〔諺語〕「いや、下駄で思ひ出した。あのお六めに、兵藏めが、下駄で首たけ惚(ホ)けやがった」

下駄と燒味噌(ヤキミソ)【句】味噌を板に附けて燒きたるは、そのさま下駄に似たれど、實は大なる相違なり。相似て雲泥の差あることの譬。〔諺語〕

下駄穿(ハ)いて首たけ【句】「足駄を穿いて首たけ」に同じ。〔諺語〕

下駄も佛も同じ木の切(キ)【句】下駄と佛と尊卑の區別はあれど、本をたづぬれば一つなりとの譬。〔諺語〕佛譬新選(休粹)「佛とも下駄ともならで榾火かな」

下駄を預く【句】油斷をさす。天智天皇「この金輪めが勢に恐れ、とてもかなふまじと御覽じ、奉公せよ、召仕はんなどと、下駄を預け給ひしか」

下駄を穿(ハ)く【句】「足駄を穿(ハ)く」に同じ。

げだ 倨傲・傲他【名】(佛)げ(傲)に同じ。

けたあみ 桁網【名】木製又は金屬製の桁と稱するものにて、網口を擴張する嚢狀の網。種類多し。

けたい 花蹄【名】〔動〕醍醐味を出すといふ雪山の牛の美稱。本朝文粹「論二其法味一、則知レ出於二雪山之花蹄一」よ。

けだい 假諦【名】〔佛〕さんだい(三諦)を見よ。

けたい 卦體【名】占に現れたる象。狂言「居杭」「まづ今日のけたいが、とうとこれに當って居りまする」國姓爺合戰「坤上坎下の卦體」

けたい 懈怠【名】けだい(懈怠)に同じ。

けたい 【名】『奇態の轉か』■さいさき。緣起。續膝栗毛「こっちやの葬禮とは、何ぬかすぞい。けたいの惡い」■不思議。へん。おつ。膝栗毛「さいろくをぜいろくとは、けたいな詞つきぢやなあ」

けたいもなし 【句】大層なり。非常なり。途方もなし。曾我扇八景「けたいもなしの金遣、百八紋日の眠ざまし」

けーだい 懈怠【名】■なまくらこと。おこたり。けたい。げたい。怠慢。■〔佛〕惡を斷じ、善を修する事において、力を盡さざること。源氏「なほまどひさめがたきものは、この道のやみになんはべれば、行もけだいして」薩摩歌「千日の回向(エカウ)まで、一日懈怠も仕らず」

懈怠の賊【句】〔佛〕懈怠は道心を破すること。前條■參照。

けーだい 華臺【名】〔佛〕蓮華の臺座。はすのうてな。れんだい。

けーたい 懈怠【名】けだい(懈怠)に同じ。

げーたい 下代【名】■したやく。屬僚。手代。■德川時代に、江戸の鄉宿(サト)に雇はれ、訴訟當事者の補佐人となりし者。

げーだい 外題【名】■〔佛〕經卷の表紙に記す經題。(內題に對して)■題號。標題。題目。■書籍の標題。書名。書目。■淨瑠璃狂言又は脚本の標題。なだい。〔藝題〕

■下より奉りたる解文(ゲブ)の端に、長官が自署して下し與ふる裁決文。次條及びげだいこくぜん 外題國宣參照。

げだい-あんご 外題安堵【名】土地の安堵に關する申請に對して、執權連署袖判をなしたもの。げだい(外題)■參照。

げだい-がくもん 外題學問【名】ほんやがくもん(本屋學問)に同じ。傾城島原蛙合戰「なう、書面ばかり聞きはつり、義理を知らぬは外題學問」

げだい-かざり 外題飾【名】茶席の床に、外題のある軸物を掛けずして飾り置くもの。軸飾。

げだい-かんばん 外題看板【名】いちまいかんばん(一枚看板)(二)を云ふ。(大阪の語)

げたい-こくぜん 外題國宣【名】陳疏狀に、國司又は守護の下したる判決文。げだい(外題)■參照。

げだい-ねんかん 外題年鑑【名】(書)古淨瑠璃以下各派の淨瑠璃の外題を、年代順に輯めたるもの。一樂の著。寶曆七年の刊行。

げたーいん 下駄印【名】下駄の齒のごとく、一つの印材に彫りたる二字の間を、窪めて離したる印。げたはん。連兩印。



(んいたげ)

けたう 毛唐【名】けたうじん(毛唐人)の略。〔俚語〕

けーたう 遣唐【名】けんたう(遣唐)に同じ。〔古語〕參內する、けたうの大辨なんかけの大臣の一男として、れうたまはれるにや」

けーだう 化導【名】〔佛〕人を敎化(ケウケ)し、指導すること。くわだう。盛衰記「山王の化導もはら受戒灌頂のためなり」

けーだう 化導利生(リシヤウ)【句】〔佛〕化導して、衆生を利益すること。化益(ケウヤク)。

げーだう 夏堂【名】〔佛〕夏籠(ゲゴ)をするに使用する堂舍。

げーだう 外道【名】■〔佛〕『梵 Tirthika』底體迦の譯語』佛敎以外の敎。佛敎者の、邪法とし、眞理の外なるものと思惟する敎。外法(ゲホフ)。異端。■自己の聰明を恃みて、佛の經論を曲解するもの、及び佛の正法に執著して、却りて眞理に入ること能はざるものをもいふ。狹衣「げだうの娘にも、佛はばかられたまはざりけるものを」■邪心をいだけること。あくま。■邪惡の相ある男の顏に刻みなしたる假面(ベン)。■他人を罵りていふ語。「なんだ、この外道。般若(ハンニヤ)めめ」

けたうけいし 桁受石【名】『英 Bed-stone』橋臺又は橋脚の頭部に於て、桁を受くべき石材。

けーたうじん 毛唐人【名】『鬚髯多きより、毛ぶかき唐人の意にていふ』外國人をいやしめていふ語。けたう。〔俚語〕國姓爺合戰「やい、毛唐人、うぬらが耳は何處に附いて、何と聞く」芭蕉「から鮭やなにがし殿は毛唐人」

げだうぜん 外道禪【名】〔佛〕釋迦の正傳にあらざる禪。

けーたうち 擊壤【名】小供の遊戲の一。羽子板のごときもの二枚を、先づ一枚投げ、後、一枚を投げて、先の板にあつるもの。もぎ。めつき。

けたうちまはし 桁打廻【名】帆の上下を滑かならしむるために、帆桁の檣に中る部分に捲きたる編竹。

けたうーぢやうぐわーしやく 加刀杖瓦石【句】たうぢやう(刀杖)の條下を見よ。

けーだえ 氣絕【名】鑛山・炭山などにて、坑內の通氣惡しきために、呼吸の困難を感ずること。

けたえん 桁緣【名】■えんげた(緣桁)に同じ。曾我五人兄弟「長八間・幅二間の松の桁緣釘はなれ」■ろかいばり(艫櫂張)に同じ。

けたか 氣高【名】〔地〕因幡國三郡の一。明治二十九年もとの氣多・高草の二郡を合せたるもの。郡役所を吉岡村に置く。

けたーかくし 桁隱【名】〔建〕切妻(キリ)屋根にて、妻屋桁(ケタ)の端を隱すために取附けたる化粧板。

げたがけ 下駄掛【名】下駄をはきをること。げたばき。春花五大力「からかさ・下駄がけにて、ぶら提灯をともし」

けーだかし 氣高し【形ク】品格よし。風采たふとし。おごそかなり。源氏「よろづの事けだかく、心ことに見ゆれば」

けたがまへ 桁構【名】〔建〕鎹釘(カスガヒ)繫釘等にて、直材を連結するに、三角形を構成するやうに結合すること。屋根組・橋梁などに用ふ。

げたぐみ 下駄組【名】知りたるふりを裝ふ人。〔延寶・貞享頃の隱語〕

けーたぐり 蹴手繰【名】相撲(スマ)の手の一。四つに組み、相手の脚を蹴ると同時に、その體を手繰りて倒すこと。舊稱、手繰蹴返(クリカヘシ)。

けたけた 【貌】きはだちて笑ふ聲。げたげたに同じ。蜀山人「山山の一度に笑ふ雪とけにこころくつくつそこもげたげた」

げたげた 【貌】前條に同じ。蜀山人「た。

けたげたーわらひ けたけた笑【名】げたげたと大に笑ふこと、又その笑。

けーだし 蹴出【名】■けだすこと。■女の、腰より脚にかけて纏ふ布。こしまき。■軍陣にて、陣の前後又は周圍。

けだし 蓋・蓋【副】■もしや。あるひは。萬一。〔古語〕萬葉「わがせこがけだしまからばしろたへの袖をふらさね見つつしぬばむ」■おほかた。たいてい。

けだしくも 蓋しくも【副】前條■に同じ。〔古語〕萬葉「けだしくも人のなかごときけるかもここた待てども君がきまさぬ」

けだしじんじや 氣多神社【名】能登國羽咋(ハクイ)郡一宮(イチノミヤ)村に鎭坐せる國幣中社。もと同國の一の宮。祭神は大己貴(オホナムチ)命、一說には、天活玉(アマノイクタマ)命。舊稱、氣多大神宮・氣多明神。

けだす 蹴出す【動四他】■蹴て出だす。■會計などに、豫算よりへらして、その金高を取りのこす。

けだたいじんぐう 氣多大神宮【名】けだじんじや(氣多神社)に同じ。

けたたまし 【形シク】あわただし。ことごとし。けたまし。生玉心中「あゝ、心もとない、けたたましい、何事が起った」

けたたん 下駄段【名】下駄を脫ぎおくと

ころと定めたる段。

けーたち 氣立【名】たちのぼるいき。いきぼり。盛衰記「けだちしたる飯の黒く粳まじりなりけるをうづたかく盛りあげて」

げーだち 夏斷【名】夏籠(ゲゴモリ)して、飲酒肉食を絶つこと。

けたちがひ 桁違【名】數字の位の取りちがひ。勘定の思はくちがひ。

けーたつ 脚榻【名】きゃたつ(脚榻)に同じ。

けーたつ 蹴立つ【動下二他】■蹴て立たす。蹴て起す。「塵を蹴立てて走る」 ■あらあらしく踏む。「席を蹴立てて去る」

げーだつ 解脫【名】■(佛)『梵Mukti(木底)・Moksa(木叉)の譯語』惑業(ワク)の繋縛(ケバク)を解きて、三界の苦果を脫すること。我執(ガシフ)を脫して、大我に歸すること。迷を出でて、眞如を悟ること。 ■歌舞伎十八番の一。本外題は「鐘入解脫衣(カネイリゲダツゴロモ)」。安珍・清姫の事蹟に、惡七兵衛景清をからませて脚色せるもの。

解脫の風(ゼ)【句】(佛)世間の顚倒・苦惱を炎熱に比し、解脫の境涯を涼風に譬へていふ語。

解脫の衣(コロ)【句】**げだつえ**(解脫衣)に同じ。 謠曲「夕顔」「開くる法華の花ぶさも、變成男子(ヘンジヤウナンシ)の願のままに、解脫の衣の袖ながら、今宵は何をつつまんと」

解脫の耳【句】(佛)解脫の緣となる說法を聞くための耳。

げだつえ 解脫衣【名】『袈裟を著用する功德は廣大にして、よく一切の羈絆を解脫するによりていふ』**けさ**(袈裟)の異稱。

げだつかい 解脫海【名】(佛)解脫の德の深く廣きを、海に譬へていふ語。

げだつーしん 解脫身【名】(佛)解脫したる身、即ち佛身。

げだつーしやうにん 解脫上人【名】(人)**ちやうけい**(貞慶)に同じ。

げだつーどうさうえ 解脫幢相衣【名】(佛)『袈裟は、解脫を求むる人の標幟なるより、幢(ドウ)の相(スガタ)に譬へていふ』**けさ**(袈裟)に同じ。

解脫幢相の衣(コロ)【句】前條に同じ。

解脫幢相の法衣(エ)【句】前條に同じ。 盛衰記「三世の諸佛の解脫幢相の法衣を脫捨てて、忽ち弓箭を帶しおはしまさぬこと」

げだつーどく 解脫德【名】(佛)三體の一。本來具有せる、清淨にして解脫すべき德。

げだつーふく 解脫服【名】**げだつえ**(解脫衣)に同じ。

げだつーぶん 解脫分【名】(佛)『詳しくは「順解脫分」といひ、順福分及び順決擇(ケツヂヤク)分と共に、三順分の一。順は順益の義、分は部分の義、その所順の法の部分を順益するによりて、順分といふ』佛道修行の初位。 盛衰記「既は解脫分の善根を植ゑたり」

けーたて 蹴立【名】けたつること。 盛衰記「猛火の烟、蹴立の灰、逃去る道も見えざりければ」

けーたて 毛蓼【名】(植)蓼科に屬する一年生の草。犬蓼の一種にて、高さ一二尺に達し、葉の上に白き毛あり。夏の初め、桃色の花を開く。關東以北の地に自生す。うづたで。

けたてばし 毛立箸【名】**けぬき**(毛抜)に同じ。 雜兵物語「おれがけせる袋に、毛たてばしがある。矢根を抜くべいと思って入れてきた」

げたーなほし 下駄直【名】下駄の損はれたるを直し、又はその齒を入替(カヘ)などする職業の者。あしだなほし。なほし。

けーたに 毛蝨【名】(動)**つつがむし**(恙蟲)に同じ。

けだにーびやう 毛蝨病【名】**やうちゆうびやう**(恙蟲病)に同じ。

けーたーのき 【名】(植)**やまうつぎ**(山空木)を云ふ。(越中國の方言)

けーたーのーみやうじん 氣多明神【名】**けたじんじや**(氣多神社)に同じ。 謠曲「鵜の祭」「さても、能州氣多の明神は、靈神にて御座候ふ」

けーたば 桁端【名】(建)**けらば**(螻羽)に同じ。

けーたばき 下駄穿【名】**げだがけ**(下駄掛)に同じ。

げーたばこ 下駄箱【名】下駄を入置く箱。

けーたばし 桁橋【名】『英 Beam bridge』橋臺と橋脚とにて支へたる桁に、板を敷きなどしたる橋梁。なげわたし。

けーたばしり 桁走【名】桁の上を走り廻ること。 謠の門松「この度の枡落にようゐうて、夜毎に桁走…あれ廻ることふつふつやめ」

けたはづれ 桁外【名】『けた(桁)■を見よ』 雜算以外の利益。餘祿。

げたばん 下駄判【名】**げたいん**(下駄印)に同じ。

げたばん 下駄番【名】**げそばん**(下足番)に同じ。

けーたび 毛足袋【名】表は羅紗などにて作り、裏を附け、上靴と同樣に趾(ユビ)の股を開けざる足袋。

けーたふし 蹴倒【名】■けたふすこと。 ■**けころばし**(蹴轉)(二)に同じ。 雜道通鑑「白人、呂州茶や・くさや・間短・蹴倒し・夜發まで」

けーたふす 蹴倒【動四他】蹴て倒す。 宇治拾遺「走りかかりてけたふさんと」

けたまし【形二】**けたたまし**に同じ。

けだむ【動四自】はばかる。斟酌す。かだむ。 古事談「この兩人、御棧敷之前、各げだみて通りける」

けーたん 化炭【名】(佛)僧侶の、炭を勤化(ゴンケ)すること。

けーたん 化壇【名】(佛)**ねはんだい**(涅槃臺)に同じ。

けーたん 灰斷【名】(佛)「灰身斷惑」の略。

げーたん 下段【名】■したのだん。つぎのかた。しものきだ。 ■擊劍又は槍術などにて、武器を低く構へて、敵に對すること。(上段・中段に對して)

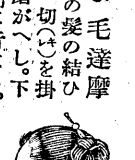
げーだめ 下駄目【名】『下駄には、鼻緒を通す孔、即ち目が三つあるよりいふ』三錢・三十錢・三圓など、すべて三の字の附きたる金高。きり。(雲助・車夫などの隱語)

けだーもの 獸【名】■全身に毛を生じ、四足にて歩む動物、即ち人類・游水類などを除きたる以外の哺乳動物。けもの。獸類。 ■「かくうとましきけだものの中に、それを友として」 ■人を嘲り卑しめて呼ぶ語。 ㊇笑入「おやおや、とんだ獸が來た。だれだ、たれだ」

けーたや 下駄屋【名】下駄を造り、又は商ふ家、又その人。

けたゆき 桁行【名】(建)桁の据附けらるる方向。即ち家の棟の長さ。(梁間(ハリ)に對して)

けーたるま 毛達摩【名】女の髪の結ひ方の一。切(キリ)を掛けぬ達磨がへし。下衆(ゲス)の間に行はる。


(まるだけ)

けーたれ 【名】女の用ふる小さき剃刀(カミソリ)。

けち 闕【名】■**けっくわん**(闕官)に同じ。 ■ゐち。(古語) 盛衰記「只今、そのけちなど、ええあらで」 ■**だめ**(駄目)(二)に同じ。

闕をさす【句】「駄目をさす」に同じ。(古語) 源氏「碁打ちはててけちさすわたり、心とげに見えて」

闕をおす【句】「駄目をおす」(二)に同じ。

けち 結【名】■二人番(ヅ)ひて、弓を射、勝負を定むること、又その時。(古語) 源氏「右の大殿の弓のけち」 ■(佛)**ぼんなう**(煩惱)に同じ。「結を斷ちて成佛す」

けち 【名】**けちぎ**(假契)の略。(德川時代の語) 好色いせ物語「むかし田村と申すけち、おはしますけり」(同書注に「けち、一名、はし女郎」)

けち 【名】凶事の前兆。惡しき緣起。

けちが附く【句】緣起わるきこと起る。さいさきが惡し。

けちを附ける【句】緣起わるきやうにす。さいさきを折る。

けち 【名】■しはきこと。やぶさか。吝嗇。 ■臆病にして卑しきこと。鄙怯。卑劣。

けちな稻荷(イナリ)【句】『鳥居(ヰ)がないを、取柄(エ)がないにかけていふ』とりどころのなきこと。(諺語)

げーち 下地【名】**ていち**(低地)に同じ。

げーち 外智【名】(佛)**さんち**(三智)を見よ。

げぢ 【名】(動)**げぢげぢ**(蚰蜒)に同じ。

げぢ 下知【名】■さしづ。いひつけ。命令。三代實錄「即下二知東海・東山・北陸・山陰・南海道一、依レ件行レ之」 盛衰記「大勢を一所に集むべしと下知したまふ」 ■裁判の判

決、又その判決文。〔鎌倉・室町時代の語〕
義経記「鎌倉殿御げちを添へて遣さる」
下知取捨(シュ)【句】鎌倉時代に裁判する時、奉行・評定衆の集議を基礎として、下知の案を作りて披露すること。

げ-ぢ 下地【名】〔佛〕■**けかい**(下界)に同じ。(上地に對して) ■菩薩の修行上の地位の低きもの。(上地に對して)

けち-いまいまし けち忌忌し【形二】**いまいまし**(忌忌し)を強めていふ語。 時代世話二
挺「又一人前貰った、けちいまいましい」

けち-えん 結縁【名】〔佛〕佛果を得んとする因縁を結ぶこと。佛道に緣を結ぶこと。くゑちえん。けつえん。
結緣の八講【句】〔佛〕死者の追薦のためならず、生者の見佛聞法(モンプ)のために修する八講。 枕 かんだちめ、結緣の八講したまふに」

けち-えん 血緣【名】**けつえん**(血緣)に同じ。

けち-えん 揭焉【貌】『**けつえん**(揭焉)を見よ』いちじるしきさま。目だつさま。あらは。〔古語〕 源氏「白きあはせなどにて、けちえんならぬぞなかなか目やすかりける」

けちえん-ぎやう 結緣經【名】〔佛〕『いづれの經文を書寫するにもいへど、法華經の化城喩品(ケジョウユホン)に大通智勝佛の結緣の事見ゆるより、主に法華經にいふ』結緣のために、佛經を書寫して供養すること。 著聞「使廳(シチョウ)の結緣經は、長保元年三月十日に始めて行ひて、その後、年毎に行はれけるが、絶えて久しくなりにけるを、建久年中、別當兼光卿、式のごとく行ひけり」

けちえん-くわんぢやう 結緣灌頂【名】〔佛〕三種灌頂の一。一般の俗人を灌頂壇に入れて、花を諸尊に投げ、その當りたる尊像を、その人に宿緣あるものとして念ぜしめ、以て佛緣を結ばしむるに止まり、祕法の授受をなさざる灌頂。(傳敎灌頂・自證灌頂に對して) 盛衰記「三種の灌頂あり、謂はゆる結緣灌頂・尊法灌頂・自證灌頂なり」

けちえん-ふぎん 結緣諷經【名】〔佛〕結緣のために、經文を讀誦して回向すること。

け-ぢかし 氣近し【形一】『**け**(氣)は接頭語』■**ちかし**(近し)に同じ。 榮華「娘のために、けぢかき賓とならん物を奉らん」 ■近づき易し。親しみやすし。 榮花「けぢかき御けはひぞあらまほしき」

け-ちがひ 蹴違【名】けちがふこと。

け-ちがふ 蹴違ふ【動四自】■ゆきちがひになる。齟齬す。 ■失策す。

け-ちがふ 蹴違ふ【動下二他】蹴て、筋違をなさしむ。 女殺油地獄「刷毛がおとがひ蹴違へられ」

けちかふざ 結跏趺坐【名】〔佛〕**けつかふざ**(結跏趺坐)に同じ。

げ-ぢき 下直【名】■價の低きこと。やすね。廉價。(高直(カウヂキ)に對して) 入代目桃太郎「何に致せ、いくらでも下直な物と存じられます」 ■手輕きこと。やすっぽきこと。 四十八癖「裏店、裏店と、下直に取扱やあがっても、店並は一つだあ」

け-ちぎり 假契・化契【名】**はしちよらう**(端女郎)に同じ。

げぢ-ぎれ 下知切【名】〔文〕俳諧にて、句の切字が命令言なること。例へば「昔聞け秩父殿さへ角力取」の類。

げ-ぢく 牙軸【名】『軸の音、もとは**おゆく**』卷物・幅物などの軸の、象牙にて造れるもの。小口のみを象牙にしたるもあり。

けちくさし けち臭し【形一】けちなるさまなり。規模・度量等小さし。

けちくそ けち糞【名】■極めて僅少なること。瓜のあかほど。〔俚語〕 ■けちなる人。鄙吝家。〔俚語〕

げぢくひ-あたま 蚰蜒食頭【名】**はげあたま**(禿頭)に同じ。

けちぐわん 結願【名】〔佛〕法會の最終の日の作法。(開白(カイビャク)に對して) 源氏「はての日の、わが御事をけちぐわんにて、世をそむきたまふよし、佛に申させたまふに」

けちぐわん-び 結願日【名】〔佛〕結願にあたれる日。

けちぐわん-もん 結願文【名】神・佛に祈願をかけて、その成就したる時、又は祈願期日の終りに唱ふる文。

けち-ぐわん 【形一】『**け**(氣)は接頭語』 けちなるさま。しわきさま。

げぢ-げぢ 蚰蜒【名】■〔動〕多足類に屬する節足動物。長さ約一寸。人家の床下などに棲む。脚は細長くして、十五對を有し、巧に疾行す。口はよく發達して、咬むに適し、眼は複眼。觸角は長くして、體長を越ゆ。かぢはらむし。げぢ。 ■他より忌嫌はるる人。〔俚語〕 ■『非の字の、げぢげぢの形に似たるよりいふ』非職となること、又その人。〔俚語〕

蚰蜒に舐めらる【句】蚰蜒に舐められたる部分は、毛髪脫すといふ俗說。 慶長遣「げぢげぢにどこねぶられてよめが顏」

げぢげぢ-しだ 蚰蜒羊齒【名】〔植〕水龍骨(ポウヂン)科に屬する多年生の草。葉は披針形、羽狀に深裂し、大いさ一尺五六寸、中肋葉柄共に褐色の毛茸を有す。地下莖にして、子嚢群は葉裏に散生す。陰濕の地に生ず。

げぢげぢ-まないた 蚰蜒俎板【名】〔植〕**おきなぐさ**(白頭翁)を云ふ。〔加賀國の方言〕

げぢげぢ-まゆ 蚰蜒眉【名】『げぢげぢの如くに見ゆるよりいふ』濃く太き眉毛。

げぢ-さつ 下知札【名】**せいさつ**(制札)に同じ。

けち-じふ 結集【名】〔佛〕**けつじふ**(結集)に同じ。

げぢ-じやう 下知狀【名】鎌倉・室町時代に、幕府の執權又は奉行人が、將軍の仰を奉じて、下知せし文書。鎌倉時代の初には、下文(クダシブミ)といへり。

けちずん 闕巡【名】**けつずん**(闕巡)に同じ。 建武年中行事「侍從代少納言經たる者、おなじくつく。四獻のたび、盃下りて、けちずんを飲ましむ」

けち-ぢやう 決定【名】〔佛〕**けつぢやう**(決定)に同じ。

けち-つく【動四自】■けちけちとす。ものをしみす。けちなまねをなす。けちなことをなす。 浮世床「地者(ヂモ)にけちつく奴は、根性のあつかましいものだから」 ■いぢる。ほしがる。

け-ちどり 【名】**けちぎり**(假契)に同じ。

けちばな 闕鼻・結鼻【名】『鼻は物の先なる處の意』圍碁にて、闕(ケチ)をおす初の方。

けち-ばん 結番【名】**けつばん**(結番)に同じ。

盛衰記「覺尊僧正御治山の時より、三塔にけち番して、夏衆と號して」 「じ。

げぢ-ふだ 下知札【名】**せいさつ**(制札)に同じ。

けち-べや けち部屋【名】『**けちはけちぎり**(假契)の略』**つぼね**(局)■に同じ。

けち-みやく 血脈【名】〔佛〕『**けつみやく**(血脈)を見よ』 ■法門を傳授・相續すること。法脈。 ■次條の略。 夕霧阿波鳴渡「野邊よりあなたの友とては、血脈一つに珠數一連」

けちみやく-ふ 血脈譜【名】〔佛〕在家(ザイケ)結緣の者に與ふる、法門相承の略譜。與へられたる者死したる場合には、棺内に入るるを例とす。けちみやく。

けちみやく-ぶくろ 血脈袋【名】血脈譜を入れたる袋。

げぢん 外陣【名】神社又は寺院の內陣の外のところ。 醒睡笑「誓願寺に參りけるが、げぢんにある額の六字を見て」

げ-ぢん 解陣【名】禁中にて、警固又は廢朝の式を解かること。〔古語〕 續世繼「二十日ぞ解陣とかいひて、對のはざまにて、御殿のみすなども卷きあげられ」

けちん-ぼう 吝嗇坊【名】『**けちばう**の音便』けちなる人を罵りていふ語。しわんばう。けちんぼ。

けちん坊の柿の種【句】「しわん坊の柿の種」に同じ。〔諺語〕

けちん-ぼ 吝嗇坊【名】前條に同じ。〔俚語〕

けぢめ【名】きは。わいだめ。わかち。へだて。區別。〔古語〕 源氏「そのけぢめをば、いかがわくべき」

げ-ぢやう 外定【名】**げしやう**(眼象)に同じ。

げ-ぢやうじやう 外長上【名】外位(ゲヰ)の最上。〔古語〕

げ-ちやく 下著【名】都より田舍に到著すること。(京著(チャク)に對して) 保元「さるほどに、新院は八月十日に御下著の由」 曾我 虎が磨「定家の卿鎌倉に御下著ありければ」

けぢやく 繫著【名】『**けねん**(繫念)を見よ』

しふちやく(執著)に同じ。

げ-ちゆう 夏中【名】〔佛〕夏籠(ゲゴ)してゐる九十日の間。げごもりちゆう。

け-おや 化女【名】けにょ(化女)に同じ。今昔「かの糸を、この化女に授けたまふ」

げ-おや 解除【名】■ちょふく(除服)に同じ。■穢を祓ひ清むること。

げ-おや 下女【名】■しもじもの女。下臈の女。げすをんな。〔古語〕徒然「山階左大臣は、あやしの下女の見奉るも、いと恥しく心づかひせらるるとこそ仰せられけれ」■しもをんな。はしため。みづしめ。下婢。

下女腹よければ、主腹知らず【句】■下人は、己だに食に飽けば、主人の空腹をも察せず。〔諺語〕■おのれのことのみ謀りて、主人を思はぬこと。〔諺語〕

け-ちらかす 蹴散かす【動四他】■次條に同じ。先代萩「けちらかしたる折は、散亂」■非常に低き値を附けて、然も購はず。安値をつけてひやかす。〔俚語〕

け-ちらす 蹴散らす【動四他】■蹴て散亂せしむ。けちらかす。■逐拂ふ。けちらかす。

けち-りん 【名】きはめて少なきこと。いささか。〔徳川時代の語〕浮世風呂「おれが濟み濟ましを附けたから、けちりんも間違はねえ」

けつ 玦【名】環(クワン)に似て、一部分缺けたる玉の佩物(ハイブツ)。古、支那にて、人に交遊を絶つを示す時の章に用ひたり。

けつ 決【名】■さだめ。きはめ。とりきめ。■ぎけつ(議決)に同じ。

決を採る【句】衆議の決定を行ふ。採決す。

けつ 碣【名】圓く造りたる石碑。

けつ 闕【名】■足らぬこと。かけめ。あき。■『もと支那にて、宮城のしるしとして、その門外の兩傍に設け、上に樓觀を作りたる兩箇の臺の稱。中央闕けて、通路たるより、闕といへるなり』御所などの門。宮城。

けつ 橛【名】■門のしきみ。戸じきみ。■眞言宗にて、檀上の四隅にある小さき柱。下學集「橛、眞言檀上四隅之小柱」

けつ 桀【名】〔人〕支那夏(カ)の朝の末の暴君。名は癸、桀はその稱號。湯王に南巢に放たれて、夏の朝亡びたり。

桀の狗、堯に吠ゆ【句】『鄒陽の獄中上二梁王一書』に「桀之犬可レ使レ吠レ堯」とあり』己れの仕ふるところに忠實を致す譬。桀狗、堯に吠ゆ。〔諺語〕

けつ 穴【名】■しり(尻)に同じ。〔俚語〕■鍼術にて、鍼を打つべき箇所。■あな。「鳥の一穴」

けつ 消つ【動四他】■けす(消す)に同じ。〔古語〕六歌仙「おく露をけたで玉とはなしつつも人の心をいかが頼まん」■あしざまに言ひなす。けなす。そしる。おとしむ。〔古語〕源兵「かたちよき人は、人をけつこそにくけれ」■おさへつく。壓倒す。

げつ 月【名】■月數を示す語。つき。「二箇月」■『げっえう(月曜)の略。「悪げつあく 桀惡【名】わるづよきこと。暴

けつあつ 血壓【名】〔醫〕『獨 Blutdruck』血管内の血液の壓力。心臟の一伸一縮によりて生ずるその力の差によりて、血液は體内を循環す。

けつ-い 決意【名】意志を決定すること。かくご。決心。

けつ-いん 血印【名】打たれたるあとの、血ちすぢ。血族。血裔。

けつ-いん 血胤【名】血統をひきたる子孫。

けつ-いん 結印【名】〔佛〕印相を結ぶこと、即ち兩手の指を以て、種種の相を作すこと。

けつ-いん 訣飲【名】訣別のために酒を飲むこと。わかれの酒宴。

けつ-いん 結姻【名】姻戚の關係を結ぶこと。姻族となること。

けつ-うん 血暈【名】〔醫〕ちぶるひ(血振)に同じ。

けつ-えい 血裔【名】血統をひきたる子孫。

けつ-えい 缺盈【名】かくると、みつると。盈虧。榮枯。太平記「自誇二超涯之皇澤一、不レ顧二缺盈之天眞一」

げつ-えい 月影【名】つきかげ(月影)に同じ。

げつ-えう 月曜【名】七曜の一。日曜の次、火曜の前の日。ぐわつえう。

げつえう-び 月曜日【名】月曜にあたる日。

けつ-えき 血液【名】〔醫〕動物體の組織を營養する赤色の流動液。血球と血漿とより成り、血管内を循流す。ち。

血液の循環【句】〔醫〕血液が間斷なく血管内を循環する作用。血壓の差異より起る。大循環・小循環の二種あり。血行。

けつ-えき 闕腋【名】『けってきと讀むを例とす』■兩腋の下を縫附けずに、あけておくこと。■次條の略。(縫腋に對して)

闕腋の袍(ホウ)【句】袖附より下の兩腋を縫はず、裾に襴を附けざる袍、武官の束帶の表衣とす。わきあけ。(縫腋の袍に對して)

けつ-えき 闕掖【名】きゅうえき(宮掖)に同じ。

けつえき-せうばん 血液小板【名】〔醫〕けっせうばん(血小板)に同じ。

けつ-えん 結緣【名】〔佛〕けちえん(結緣)に同じ。

けつ-えん 血緣【名】ちすぢ。血族。けちえん。

けつ-えん 訣宴【名】わかれを惜しみて催す。闕然。闕如。

けつ-えん 揭焉【貌】『文選に「揭焉以嶷嶷」とあり』高く擧ぐるさま。けちえん(揭焉)參照。

げつ-えん 月掩【名】〔天〕『英 Occultation of the moon』月が、遊星又は恒星を、一時掩ふこと。

けつ-か 闕下【名】宮闕のもと。ここの(への)下だる義』勢力の互に相上下すること。ともに優劣なきこと。きっかう。

けつ-か 結河【名】〔佛〕『結は繋縛の義。河は人を溺れしむる意にて、譬喩していふ』ぼんなう(煩惱)に同じ。

けつ-が 決河【名】河水の溢れて、堤を破決河の勢【句】『國語に「勢之加也、如レ決レ河」とあり』決河の水の迸出(ホウシュツ)するが如き猛烈なる勢。

げつ-か 月下【名】月の光の下。

けつ-かい 結界【名】■〔佛〕衣食・人數及び地界に、制限・區域を立つること。■〔佛〕法力を以て界をむすび、即ち伽藍を建て、或は戒壇を作るに、一種の作法を行ひて、地域を限定し、外道(ゲダウ)・惡魔の入りくるを禦ぐこと。■寺院の本堂に、僧の座と俗の座とを別ちたる、横長きしきりの格子。■出入を禁ずること。禁制。大原問答雜要抄「一人坊主の庵室なれば、女人は結界。結界」■ちゃうばがう(帳場格子)に同じ。

結界の地【句】〔佛〕■法力を以て、限定せられたる土地。けっかいば。本平記「この山を吾れに與へよ。結界の地となし、佛法を弘めん」■『女人結界の地といふべきを略していふ語』昔の寺院にて、女の參拜を許さざりし靈地。比叡山・高野山・金峰山(キンプ)等の地。けっかいば。

けっ-かい 結改【名】■結番を改むること。親長卿記「明日御番結改」■古、陰暦の五月と九月との二十五日に、楊弓を射る人の、相集りて、的中の勝負の競點をなしたること。■楊弓にて、賭弓(カケユミ)を行ふに、籤によりて定めたる二人二組を、數番の後に、籤を引直して、更改すること。「じ。

げっ-かい 月界【名】**げっせかい**(月世界)に同じ。

けっかい-せき 結界石【名】かいだんせき(戒壇石)に同じ。

けっかい-ば 結界場【名】「結界の地」に同じ。

けっ-かう 桔槹【名】はねつるべ(桔槹)に同じ。

けっ-かう 血行【名】「血液の循環」に同じ。

けっ-かう 決行【名】決心して行ふこと。

けっ-かう 頡頏【名】『頡は飛上がる、頏は飛下だる義』勢力の互に相上下すること。ともに優劣なきこと。きっかう。

けっかう-かんかく 血行感覺【名】〔哲〕『英 Circulatory sensation』血液循環の狀態が刺戟となりて起る感覺。

けっかう-き 血行器【名】〔醫〕じゅんくわんき(循環器)に同じ。

けっかう-はん 缺效犯【名】〔法〕『英 Unsuccessful crime』犯罪人が、犯罪を實行すれども、目的を遂げざりし所爲。

けっかう-みすゐはん 缺效未遂犯【名】

〔法〕未遂犯の一。犯人が、その罪の實行を終りたるに、未だその結果の生ぜざる前に、意外の錯誤を來して、豫期の結果を見る能はざりしもの。(著手未遂犯に對して)

けっかかう 月下香 【名】〔植〕じやがたらずゐせん(馬鈴水仙)に同じ。

けっかく 結核 【名】〔醫〕結核菌が體内にて、小結節及び炎症を生じ、その部の組織を漸次白色乾燥せる質に化し、且つその近傍に、化膿を起すこと。(結核病)の略。 ㊁〔鑛〕『英 Concretion』岩石中に存する鑛物の塊の、内部より次第に外部に向ひて、物質の增加せるもの。球形・卵形・亞鈴形又は不規則なる形をなす。

けっかく 月客 【名】『天皇を目に譬ふるによりていふ』てんじやうびと(殿上人)に同じ。

けっかく 月角 【名】人相にて、天庭の右の方。(月角に對して)

けつがく 月額 【名】每月の定額。

けっかく-きん 結核菌 【名】〔動〕『獨 Tuberkelbazillus』結核病の原因をなす細菌。細長き桿狀をなし、多くは多少彎曲す。西曆一八八二年獨逸人コッホ(Koch)の發見に係る。最も多く肺結核患者の喀痰・糞尿等の中に存す。

けっかく-さ 月角差 【名】〔天〕『英 Parallactic insquality of the moon』月の位置により、その太陽への距離に遠近の差あり、從つて相互間の引力にも差あるに因り、從つて生ずる、月の運動の變差、即ち上弦の起る時刻は早からんとし、下弦の起る時刻は遲れんとすること。

けっかく-しつ 結核質 【名】結核症にかかり易き體質、即ち體長に比して、胸圍の小なるもの。

けっかく-しやう 結核症 【名】次條に同じ。

けっかく-びやう 結核病 【名】 ㊀結節を生ずる病の總稱。けっかく。 ㊁『羅 Tuberculosis』結節の有無を問はず、結核菌の、體中に侵入し、且つ傳播するによりて起る病。人及びその他の大抵の哺乳動物にあらはる。けっかく。結核症。

けっかく-ぶつ 結核物 【名】「點。

けっかつ 桀黠 【名】わるがしこきこと。狡猾。

けっかてん 月下點 【名】〔天〕『英 Selenapoint』月を天頂に見る地點。

けっかひようじん 月下氷人 【名】『續幽怪錄に「唐韋固、少未レ娶。旅二次宋城一、遇二異人一、倚レ囊坐、向二月下一檢レ書。固問、答曰、天下之婚爾。因問二囊中之赤繩子一。云、此以繫二夫妻之足一。雖二仇家・異域一、繩一繫之、終不レ可レ易、君妻乃此店北、賣二菜陳媼女一爾」、又、晉書の索紞傳に「令孤策夢立二氷上一、與二氷下人一語。紞曰、氷上爲レ陽、氷下爲レ陰、陰陽事也。士如歸レ妻迨二氷未一レ泮、婚姻事也。君在二氷上一、與二氷下人一語、爲二陽語一陰、媒介事也。君當二爲一人爲一レ媒、氷泮而婚成」とあるに本づく』むすぶの神。なかうど。媒妁。月下老人。月下老。月下翁。月光。月下公明。せきじよう(赤繩)參照。

けっ-がふ 結合 【名】結びあふこと。結びあはすること。くみあひ。むすびあひ。連結。

結合の法則 【句】〔數〕「組合(ハヘ)の法則」に同じ。

けつがふ-わん 結合音 【名】〔音〕『英 Combination tone』差音と和音との總稱。合音。

けつがふ-こく 結合國 【名】〔法〕ふくざつこく(複雜國)に同じ。

けつがふ-こくか 結合國家 【名】〔法〕「に同じ。前條

けっか-ふざ 結跏趺坐 【名】〔佛〕『跏は加趺(足背)を交結・加重して坐る義』座禪・修行の坐り方。即ち胡坐(アグラ)に似て、左右の足背を交叉して、互に左右の膝(モモ)の上に安んずること。座禪を組むこと。圓滿安坐。全跏趺坐。全跏坐。又、片足を他の足の上に載するのみなるを、半跏趺坐、又は半跏坐といふ。けちかふざ。跏趺。跏坐。

けつがふ-ざい 結合罪 【名】〔法〕二箇以上の行爲が、各別に犯罪たるべき場合に、法律上、一括して一罪とせるもの。例へば强盜殺人罪・强盜强姦罪の類。結合犯。

けつがふ-さいむ 結合債務 【名】〔法〕債權の目的の二つ以上あるもの。

けつがふ-せつ 結合說 【名】〔哲〕『英 Composition theory』すべての心意狀態は、一定の根本的要素の種種の結合より成るとなす說。

けつがふ-たい 結合體 【名】二つ以上の個體が結合して成りたる體。

けつがふ-なめし 結合鞣 【名】同時に、或は相前後して、鐵物鞣と植物鞣とを、同一の皮に應用して鞣化する方法。

けつがふ-はふ 結合法 【名】〔哲〕『英 Method of double agreement』歸納推理の法式の一。契合法と差異法との結合より成るもの。合一法。二重契合法。二重類同法。(契合法・差異法・共變法・剩餘法に對して)

けつがふ-はん 結合犯 【名】〔法〕けつがふざい(結合罪)に同じ。

けつがふ-ほけん 結合保險 【名】二人以上相結合して、一の保險契約を結ぶこと。

けつ-かん 缺陷 【名】かけて足らぬこと、又その部分。不備。

けつ-がん 頁岩 【名】〔鑛〕『英 Shale』水成岩の一。粘土の固結して成りしものにて、柔軟にして、やや板狀を呈し、色は淡灰・暗灰・黑等あり。石灰岩・砂岩等と相重なりて、主に中世層第三紀層の地層をなし、時に化石を藏す。泥板岩。

けっ-かん 月刊 【名】月每に出版すること。

けっかん-らう 月下老 【名】次條の略。

けっかんらうじん 月下老人 【名】けっかひようじん(月下氷人)に同じ。

けつかる 【動自】居る。在る。(すべて他人の動作を卑しむる意にて用ふ)〔俚語〕生玉心中「氣味わるさうに、店の手水鉢で頬を洗うてけつかった」今宮心中「由兵衞駈けつけ、爰にけつかるか、よう舟へ石打ったと」

けっかをう 月下翁 【名】けっからうじん(月下老人)に同じ。

けつき 衣類 【名】衣類を掛くる竿。

けっ-き 血氣 【名】 ㊀血液と氣力と。生活を持續する精氣。俚然「若き時は、血氣內に餘り、心物に動きて、情慾多し」 ㊁年若く、さかんなる氣象。少年の客氣。はやりぎ。

血氣盛(サカ)に神祟(タタ)らず 【句】血氣壯なれば、少しの惡事ありとも、災を蒙らず。〔諺語〕

血氣の勇(ユウ) 【句】一時の血氣に任せたる勇氣。

けっ-き 蹶起 【名】はね起くること。飛立つこと。

けっ-き 決起 【名】決然として起ること。いきほひよく立ちあがること。

けっ-き 譎詭 【名】いつはり正しからざること。欺くこと。譎詐。詭譎。

けっ-き 血忌 【名】ちいみ(血忌)に同じ。

けっ-き 桀黠 【名】〔人〕けつ(桀)に同じ。

けつぎ 決議 【名】多數人の會議に依りて、或事項を決定すること、又その決定したる條項。

けつぎ 闕疑 【名】『論語の爲政篇に「子曰、多聞闕レ疑、愼言二其餘一、則寡尤」とあり』疑はしきことは、とりのけておくこと。

けっ-き 月氣 【名】月の光のさすさま。

けつぎ-あん 決議案 【名】決議にかくる議案。

けっ-きう 血球 【名】〔醫〕『獨 Blutkörperchen』血液の中に含有せらるる有形成分。肉眼にては見ることを得ず。赤血球と白血球との二種あり。

げっ-きう 月球 【名】〔天〕つき(月)に同じ。

けっきう-きせいちゆう 血球寄生蟲 【名】〔動〕『獨 Blutkörperchenparasit』動物白血球內にありて生活・發育する細胞寄生蟲。人類のマラリヤ原蟲のごとく、赤血球內に寄生するものと、白血球內に寄生するものとあり。

けっきう-けいさんき 血球計算器 【名】『獨 Hämocytometer』血液中の血球を計算する器械。貧血症の診斷に應用せらる。

けつぎ-こうげきけん 決議攻擊權 【名】〔法〕株式會社などにて、株主總會の召集手續・決議の方法が、法令又は定款に反する場合に、その決議の無效なる旨の宣告を、裁判所に請求し得る權利。但し決議の日より一箇月以內に請求するを要す。

けっき-さかん 血氣盛 【副】次條の音便。

けっき-ざかり 血氣盛 【名】血氣の滿ちて居ること、又その年齡。元氣の充溢。

けっき-ざけ 血氣酒 【名】血氣にまかせて飲む酒。

源氏浴衣節「若侍の血氣酒」

げっきつ 月橘 【名】〔植〕芸香(ウンカウ)科に屬する常綠灌木。印度・支那・南洋諸島及び臺灣・琉球などに産す。枝は細く、葉は平滑、花は漏斗狀純白にして、甚だ佳香あり。球形・紅色の漿果を結ぶ。材は甚だ堅し。

げっきにち 月忌日 【名】九星にて、祭祀・宴會・療病その他、垣牆を繕ひ、道路を修むる等に忌むといふ日。毎月の五日・十四日・二十三日。

げっきふ 月給 【名】月毎にはらふ給料。月俸。

げっきふがく 月級額 【名】月級のたか。月俸額。

げっきふとり 月給取 【名】月給をとる人。「き所定の日。

げっきふび 月給日 【名】月給を受取るべ

げっきん 缺勤・闕勤 【名】勤務を缺くこと。出勤せぬこと。

けづきん 毛頭巾 【名】毛皮の頭巾。天網島「毛頭巾とって入るを見れば、南無三寶、しうと五左衞門」

げっきん 月琴 【名】㊀清樂に用ふる絃樂器。琵琶に似て小さく、胴は圓くして遍く、中に針金一條を收めて共鳴せしむ。四絃にして、二絃は太く、二絃は細く、別に八箇の柱(ヂ)ありて、音階を作る。即ち上(ジャウ)・尺(チエ)・工(コウ)・凡(ハン)・合(ホ)・四(ス)・乙(イ)。又、これに人偏を附して仜(ジャウ)・伬(チエ)・仜(コウ)等の高音を作る。太き二絃は上(ジャウ)に合せ、細き二絃は合(ホ)に合せ、二絃づつ一時に彈ず。上(ジャウ)は二調の1に相當す。㊁げんかん(阮咸)に同じ。



(㊀げんきっげ)

けっきもの 血氣者 【名】血氣ざかりの人。心中乃は氷の如し」「あたり近所の血氣もの」

けっきやう 結經 【名】〔佛〕本經たる經典の要旨を述べて、その結論と見るべき經典。かいけつにきやう(開結二經)參照。

げっきゆう 月宮 【名】ぐわっくうでん(月光殿)に同じ。

けっきよ 穴居 【名】土中に穴を掘りて、住居とすること。開けぬ世の風俗にて、竪穴と横穴とあり。竪穴は防寒の効著しきを以て、主として、北國の住民により作らる。あなずまひ。穴處。

けっきよ 拮据 【名】『說文には、手と口と共に作す所ある意と說き、韓詩外傳には、口と足とにて事を爲す意といへり』仕事に骨折ること。つとめ働くこと。きっきょ。

けっきよく 結局 【名】つまり。はて。をはり。終局。

けっきよく-じやうたい 結局狀態 【名】〔哲〕『英 End-state』努力の目的となる狀態。例へば、思慮は、選擇に達せんがためなるが故に、選擇は思慮の結局狀態なる類。

けつぎろく 決議錄 【名】決議の記錄。議案の確定せられしまでの經過、及びその結果を記したるもの。

けっく 絜矩 【名】次條を見よ。

けっく 絜矩の道 【句】『大學に「是以君子有二絜矩之道一也。所レ惡於上、毋二以使一レ下、所レ惡於下、毋二以事一レ上、所レ惡於前、毋二以先一レ後、所レ惡於後、毋二以從一レ前、所レ惡二於右一毋二以交一於左、所レ惡二於左一毋三以交二於右一、此之謂二絜矩之道一」とあり。絜は執る、矩は曲尺(カネジャク)の義、即ち矩を執りて度るに、尺寸を誤らざる意』一擧一動、事毎に方正なる道。

けっく 桀狗 【名】支那の古の暴君桀の飼養せる狗。

桀狗、堯に吠ゆ 【句】「桀の狗、堯に吠ゆ」に同じ。〔諺語〕

けっく 結句 【名】詩歌の末の句。

けっく 結句 【副】㊀はてには。つまるところ。とうとう。結局。盛衰記「能登殿こそゆゆしく振舞ひたりしか。結句、舟に乘り、海に入りたまひぬ」㊁かへりて。なかなかに。いっそ。むしろ。けくで。謠曲(烏頭)「結句、主を追っさげて、下人に使ふべき謂はればしあるか」繪田長衛名所記「それでは、結句、各の居憎くからんと存ずる故、何も構はぬが御馳走」

けっく 蹴附く 【動下二自】蹴て、物につきあつ。けつまづきて、物に觸る。浮世床「伊勢屋の前まで來ると、ひよいと石へけつけて」

げっくり 【貌】喉に物のつまるさま。〔德川時代の語〕「に同じ。

けっくわ 血菓 【名】〔醫〕けつべい(血餅)に同じ。

けっくわ 缺課 【名】所定の課目の中、あるいは一部分のみ缺くこと。

けっくわ 結果 【名】㊀原因によりて到りたる結末。できはて。できばえ。なれのはて。㊁〔哲〕『英 Consequence』行爲の最終の要素にして、動作の到達したる結末。けっくわせつ(結果說)參照。

けっくわ 月華 【名】㊀月のひかり。月光。㊁つきやく。月經。月事。

げっくわ 月花 【名】㊀月と花と。花月。㊁〔文〕連俳にて、花の句に月を結ぶこと。

けっくわい 決潰 【名】充溢してくづるること。はちきること。潰決。

けっくわい 決壞 【名】堤防などを切りくづすこと、又、自然に切れくづるること。壞決。

けっくわい 缺壞 【名】かけやぶるること。

けっくわい 血塊 【名】㊀〔醫〕體腔内において出血し、血液その部分に蓄溜して、凝結せるもの。例へば子宮内に出血して、血塊を形成するときは、子宮血腫を生ずる類。㊁畸形兒の類。浦島年代記「何しに先帝の御子、血塊・腹などの病」「色。

けっくわう 月光 【名】月の光。月のかげ。月

けっくわく 閥畫 【名】文章の行間中に、天皇その他、貴く諱むべき人の御名などと同じ漢字の現はるる時、憚りて、その畫を省くこと。例へば仁は𠆢と書き、惠は恵と書く類。かけじ。闕筆。けつじ(闕字)參照。

けっくわ-せつ 結果說 【名】〔哲〕『英 Consequentism』行爲の外面的要素、即ち結果を重んじ、その善惡により、道德的判斷を下さんとする主義。快樂說は必然的にこの說に歸著す。目的說。結果論。(動機說に對して)

けっくわん 結卷 【名】〔佛〕經典の最終の一卷。

けっくわん 閥官 【名】㊀その官に任ずべき人の、闕けてあること。㊁免官。解官(ゲカン)。平治、少納言入道信西が子息五人、閥官せらる」

けっくわん 血管 【名】〔醫〕『獨 Blutgefäss』血液を循環せしむる管、即ち動脈管・靜脈管・毛細管の總稱。「に同じ。

けつ-ぐわん 結願 【名】〔佛〕けちぐわん(結願)に同じ。

けっくわん-うんどう-しんけい 血管運動神經 【名】〔醫〕『獨 Vasomotorische Nerven』けっくわんしうしゅくしんけい(血管收縮神經)に同じ。

けっくわん-がく 血管學 【名】〔醫〕血管系統を論ずる學。

けっくわん-くわくちやう-しんけい 血管擴張神經 【名】〔醫〕『獨 Vasodilatatorische Nerven』血管を擴張せしむる神經。その中樞は、未だ審かならざれども、延髓に在るなるべしと想像せらる。

けっくわん-けいとう 血管系統 【名】〔醫〕血管全部の系統。

けっくわん-しうしゅく-しんけい 血管收縮神經 【名】〔醫〕『獨 Vasokonstriktorische Nerven』血管を收縮せしむる神經。動脈系統の筋肉に分布せる運動神經にして、その主中樞は延髓に在り。

けっくわん-しゅ 血管腫 【名】〔醫〕『獨 Angiom』皮膚の血管の增加・擴張して、紅き斑點を作り、又は腫(ハルるもの。あかあざ。

けっくわんせい-ぼはん 血管性母斑 【名】〔醫〕母斑の一種。皮下の血管の異狀に增大するに起因するもの。血痣。

けっくわん-せん 血管腺 【名】〔醫〕『獨 Blutgefässdrüse』腺質の構造を有しながら、排泄管を有せず、且つ血管に富める器官。内分泌を營む。甲狀腺・脾臟・頸動脈腺など、これなり。

けっくわん-ちやう 閥官帳 【名】古、閥官を記しおかれし帳簿。外記(ゲ)これが記錄を掌りたり。建武年中行事「闕官帳(官の闕どを忍ねわ ろれるりら よゆや もめむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

もを記したり)を奏す。十年の勞を奏するが如し。これは、正官二卷あるなり」

けつぐわんび 結願日【名】〔佛〕**けちぐわんび**(結願日)に同じ。

けつぐわん-もん 結願文【名】〔佛〕**けちぐわんもん**(結願文)に同じ。

げっくわ-もん 月華門【名】舊內裏に在りて、紫宸殿前の大庭の西に面せる門。校書殿(キョウデン)に通じ、日華門と相對す。右近陣。

げっくわ-もんゐん 月華門院【名】〔人〕後嵯峨天皇の第一の皇女。綜子(シュウシ)內親王と稱す。三宮に準ぜられ、文永六年薨ず。

けっくわ-ろん 結果論【名】〔哲〕**けっくわせつ**(結果說)に同じ。

けっ-げ 結夏【名】〔佛〕夏安居(ゲアン)の最初の日、卽ち四月十六日。結制。

けっ-げ 結解【名】■〔佛〕煩惱に縛せられて、自在ならざると、理を悟りて、これを脫すること。■『結は算を置くこと、解は算用終ること』計算の仕上(ガン)。庭訓往來、公文田所結解勘定」■盲人にて、官金出納の事を掌ること、又これを掌りし職。

けっ-づけ 毛附【名】■馬の毛色。 散木「望月の駒の毛づけをあふ坂の杉間のかげにあはせてぞ見る」■馬の毛色を、帳面などに書きつくること、又その文書、又その役。御駒(オン)の解文(ゲモ)。 禁祕抄「上卿進二發子一候二毛附一也」■豫め敵の鎧の毛色に注文をつけ、同輩と競爭して討取ること。

げっ-けい 月桂【名】■「月の桂」に同じ。■月。月の光。つきかげ。 謠曲、箱垣「雲岸頭に定まって、月桂まどかなり」

げっ-けい 月經【名】子宮より、毎月定期に、血の下ること、又その血。平均、十四五歲より初めて下り、約四十五六歲まで、殆ど四週間ごとに來る。月經通ずる間は、生殖力あるを示すものなれども、その原因につきては、學理上いまだ不明の點多く、ただ卵巢の作用と卵胞及び卵の成熟とに密接なる關係を有することは疑なしといふ。つきのさはり。つきのめぐり。つきのもの。さはり。めぐり。つきやく。おりもの。かりや。けがれ。たや。月水。經水。經行。

げっけい 月經過多【句】〔醫〕月經の多量劇甚にして、且つ久しきに亘り、ために健康を害するもの。

げっけい 月經缺損【句】〔醫〕生殖器成熟期において、月經の甚しく少量なるか、又は全く缺損せること。

げっけい 月經困難【句】〔醫〕月經の際、下腹部に烈しき痛痛、或は腰部に痙攣を感じ、又は嘔氣、頭痛等をひき起すこと。

げっけい 月經閉止【句】〔醫〕■年老いて月經なきに至ること。■月經の、例期に通ぜず、又は中途に閉止すること。原因は萎黃病、腺病、結核、貧血等を多しとす。

げっけい 月溪【名】月光の映ぜる溪。

げっけい 月溪【名】〔人〕**ごしゅん**(吳春)に同じ。

げっけい 月卿【名】『**げっかく**(月客)を見よ』

げっけい-くぎょう(公卿)に同じ。

げっけい 月計【名】毎月の會計。つきじめ。

げっけい 擊莖【名】**げきけい**(擊莖)を見よ。

げっけい-かく 月形角【名】〔數〕月形の二つの弧のなす角。

げっけい-くわん 月桂冠【名】■『英 Crown of laurel 又 Laurel』古代ギリシャ國にて、月桂樹をアポロ神の靈樹とし、その枝葉にて冠を造り、競技の優勝者などに冠らせて、賞讚の意を表せしもの。桂冠。■最も名譽ある地位。

けっ-けいし 揭傒斯【名】〔人〕支那元代の儒者。字は曼清。文を能くし、經世大典及び遼・金二史の編修に與り、卒して豫章郡公に追封せられ、文安と諡(オクリナ)せらる。

げっけい-じゅ 月桂樹【名】〔植〕『英 Laurel』月中の桂に擬して、この名に譯せるなり』樟(クス)科に屬する常綠喬木。高さ數丈に及ぶ。枝繁り、葉は互生し、暗褐色にして厚く、披針狀をなし、葉



(ゆじいけっげ)

腋に黃白色なる小花、繖狀花序をなして開く。果實は暗褐色、球形の核果にして、豌豆の種子よりやや大なり。葉も實も香料に供せらる。南歐羅巴の原產。ろおれる。**げっけいくわん**(月桂冠)□參照。

げっけい-つう 月經痛【名】〔醫〕月經に伴ひて下腹部又は子宮等に起る痛みの總稱。

けっけい-もんじ 楔形文字【名】**せっけいもんじ**(楔形文字)の誤讀。

けっけ-かうみやう 毛附高名【名】毛附■をして、討取りたる戰功。

けっ-げき 穴隙【名】あな。すきま。

けっけ-さい 結夏齋【名】〔佛〕結夏の時に設くる齋(キ)。

けっけつ 快快【貌】鳥の鳴く聲。

けっけつ 蹶蹶【貌】踊りはぬるさま。發動のさま。

けっけつ 決決【貌】水の決するさま。

けっけつ 缺缺・鍥鍥【貌】智慧の少なきさま。「これ小丈夫鍥鍥たる者の事のみ」

けっけつ 孑孑【貌】■ひとりぬきんでたるさま。孑然。「孑孑たる旌旗」■孤立し、又は他と和合せざるさま。孑然。

けっけつ 孑孑【名】〔動〕**ぼうふり**(孑孑)に同じ。

けっけつ 月月【名】つきづき。毎月。

けっけつ-ぬし 毛付主【名】軍隊にて、定められたる軍馬の扱者。

けっけん 闕減・缺減【名】缺けてへること。へり。かん。

けっ-けん 擊劍【名】**げきけん**(擊劍)の訛。

けっ-こ 結構【名】**けっこう**(結構)の略。 丹波與隹大名のうちよりも、こちのうちがけっこで御座る」

けっ-ご 歇後【名】■後を歇(ヤ)むる意』一連の語句のうち、後部を略して用ひざること。例へば杜牧の山行の詩に「霜葉紅二於二月花一」とある「紅二於二月花一」を略して「紅於」といひて、霜葉即ち紅葉の意に用ふる類。

けっ-こい 【形】■『結構の音を、形容詞に活かせたるものなるべし』**うつく**(美し)に同じ。「紅色。遠江國の方言」

けっ-こう 血紅【名】血のごとき赤き色。血立つること、又そのさま。■〔建〕『英 Structure 又 Framed structure』關節の接合によりて、數多の材片を結合して作りたる構造の、應力に堪へ得べきもの。構桁・架構・架臺など、皆これに屬す。**こうざい**(構材)參照。■たくむこと。くはだて。計畫。平家「山攻めらるべき御結構とこそ聞け」四用意。支度。まうけ。五みごとなること。俳諧好(コウ)すべきこと。すぐれたること。新選「曦山」「結構の雨や野山も錦著て」六おとなしきこと。好人物なること。春花五大力「亨主の結構に、女房のけはしいは、當世のはやりものでござる」

けっ-こう 結構【句】結構けだらけ、猫(ネコ)灰だらけ【句】結構と賞歎するを嘲りていふ語。けっこうまっか。〔諺語〕

けっ-こう 結構は阿房(アハウ)の唐名(カラ)【句】次條に同じ。〔諺語〕 當世誰身上「結構はあはうの唐名といふ諺、よく覺悟すべきことなり」

けっ-こう 結構は馬鹿の唐名(カラ)【句】結構人とは、馬鹿といふを婉曲に言ひ換へたるものなり。結構は阿房(アハウ)の唐名。結構人は阿房(アハウ)の內。〔諺語〕

けっ-こう 結講【名】〔佛〕幾日か續きて行はるる說教の最終の日。

けっ-こう 結喉【名】頤(アゴ)の下、喉の軟骨の少しく突出したる所。男子のは、著しく目立つ。ほねぼとけ。

げっ-こう 月虹【名】月光によりて現はるる虹。光度弱く、判然たる色彩を有せず。

けっこう-きゃうじゃくろん 結構強弱論【名】『英 Strength of structure』構造□の強弱を研究する學問。

けっこう-ざくろいし 血紅柘榴石【名】〔鑛〕柘榴石の一種。優美なる血紅色を帶ぶるも

の。寶石として貴重す。

けっこうじん 結構人【名】■おとなしき人。好人物。結構者。■おとなし過ぎて、才の鈍き人。馬鹿正直なる人。ぐづ。おひとよし。結構者。

結構人は馬鹿の唐名」に同じ。

けっこうしや 結構者【名】前條に同じ。國姓爺合戰「今はこれまで、結構しやも事による」「に同じ。

けっこうしよく 血紅色【名】けっこうそ(血紅)

けっこうそ 血紅素【名】〔醫〕けっしきそ(血色素)に同じ。

けっこうだて 結構立【名】『だて(立)は接尾語』結構五六の樣子をあらはし示すこと。好人物めかすこと。蟲丸はや廣眼に角をたて、ええ、いひ甲斐なし、結構だても事による」「人」に同じ。

けっこうもの 結構者【名】けっこうじん(結構人)

けっこく 闕國【名】國司・領主の闕けたる國。闕所たる國。けっしよ(闕所)〔一〕參照。平家「勸賞(カンジャウ)には、闕國を給ふべき仰せ下されける」

けっこく 缺刻【名】■かけ。きざみ。きだ。■〔植〕『英 Incision』葉緣(ヨウエン)の、鋸齒よりも更に深く缺けたるもの。その形と度とによりて、淺裂・深裂・全裂・羽狀・掌狀などの別あり。(鋸齒・全緣に對して)

けっこくごつ 決獄【名】訴訟の判決。

けっこつごつ 臭穴(貌)ごつぐつ(杭窪)に同じ。

けっこん 血痕【名】血の附きたるあと。

けっこん 結婚【名】夫婦となること。えんぐみ。えんむすび。婚姻。

げっこん 月痕【名】つきかげ。月影。

けっさ 譎詐【名】あざむきいつはること。

けっざ 結座【名】〔佛〕法座を終結すること。

げっさ 月差【名】〔天〕『英 Monstrual equation in the sun's longitude』月が地球を一週する時間と白道上の或一點(例へば交點)に復歸する時間との時差。月には、地球の外、太陽及び諸惑星の作用するため、白道は大約楕圓狀をなすのみにて、その形一定せざるによりて、この時差を生ず。

けっさい 決裁【名】さいけつ(裁決)に同じ。

けっさい 潔齋【名】神事・佛事の嚴儀をなすに先だちて、婬事を止め、酒肉を斷つこと。ものいみ。きよまはり。けさい。精進(シャウジン)。蟲山姥「千日潔齋してうつたる利劍」

けっさい 血祭【名】〔基〕モオゼ(Moses)が制定したるユダヤ敎の二種の祭典の一。血ある物、卽ち牛・羊・山羊・鳩などの潔き動物を捧ぐるもの。無血祭に對して)

けっさいけん 決裁權【名】〔法〕『英 Casting vote』議事にて、可・否同數なる時に、それを決する權利又は權限。

けっさう 血相【名】顏の相(ソウ)。かほつき。「同じ。

血相を變ふ【句】「顏色(カホイロ)を變ふ」に

けっさう 結裝【名】身じたく。結束。

けっさう 結草【名】■草と草とを結合はすること。■『左傳に見ゆ』次條に同じ。結草の報(ムクヒ)【句】草を結びて敵に抗し、舊恩に報いしこと。「に同じ。

けっさう 纈草【名】〔植〕かのこさう(鹿子草)

けっさうこん 纈草根【名】『羅 Radix valerianae』鹿子草(カノコサウ)の根を、根莖と共に採集して乾燥したる、芳香・苦味を有する藥物。ヒステリイ・神經衰弱、その他の神經病、殊に婦人の鎭痙(チンケイ)藥として用ふ。

けっさく 傑作【名】著作物又は製作品の、すぐれたるもの。名作。

けっさく 決策【名】はかりごとを定むること。「たち。

げっさく 月朔【名】月のはじめの日。ついたち。

けっさん 決算【名】■勘定の仕上(シアゲ)、また仕上げたる勘定。■〔法〕『英 Audit』政府が、一年度間の支出を、豫算どほりになしたることを證明するため、會計檢査院の檢査を經て、帝國議會に提出する報告、即ち議會が政府の會計を、事後に監督する方便。(豫算に對して)■〔商〕『英 Closing』一期間に起りたる、すべての取引を精算・調査し、その狀況を確知するために行ふ手續。平常決算と閉業決算との別あり。

げっさん 月山【名】〔地〕ぐわっさん(月山)を見よ。

けっさんあん 決算案【名】決算の草案。未だ確定の手續を經ざる決算。

けっさんき 決算期【名】決算を行ふ時期。

けっさんくりこし 決算繰越【名】〔商〕株式取引所にて、定期取引當事者が、契約の期日に至り、自己の見込の外れたる時、相手方に、一定の猶豫金を支拂ひて、株券の受渡を次期まで延ばし、同方針にて、賣買を繼續すること。歐羅巴にては盛んに行はれど、我が國にては未だ行はれず。

けっさんくりこしび 決算繰越日【名】〔商〕『英 Carrying over day』株式取引所にて、定期取引の決算繰越をなす日。

けっさんはうこく 決算報告【名】〔商〕每事業年度の終において、關係者に示すために、その期間內の營業成績を決算して、調製したる書類。

けっさんび 決算日【名】〔商〕『英 Setting day』■年末・半期末等に、取引より生じたる貸借を計算し、その期間の取引の結果を明かにする日。清算日。■取引所における定期取引の受渡の日。

けっさんゐゐん 決算委員【名】■決算に關して選ばれたる委員。■國家の歲出・歲入の決算に關する帝國議會の審査權に基づき、あらかじめその審査をなすために選定せられたる委員。

けっし 傑士【名】すぐれたる人。傑人。

けっし 楔子【名】せっし(楔子)の誤讀。

けっし 決死【名】死なんと思ひ定むること。死ぬる覺悟をすること。必死。

けっし 決志【名】けっしん(決心)に同じ。

けっし 結使【名】〔佛〕『心身を繫縛して、苦果を結成するにより結といひ、衆生に隨逼し、又は衆生を驅使するによりて、使といふ』ぼんなう(煩惱)に同じ。

けっし 血嗣【名】血すぢのあとつぎ。

けっし 血痣【名】〔醫〕けっくわんせいぼはん(血管性母斑)に同じ。

けっじ 闕字【名】■文章・語句の間にあるべき文字の、闕けてあること。又その文字。かけじ。■文章などにて、天皇・貴人の御名などを書くとき、尊敬の意を表して、その字の上を、一字或は二字缺きて、空白にすること。へいじゆつ(平出)・たいとう(擡頭)參照。

けつじ 訣辭【名】訣別のことば。別辭。

げっし 孽子【名】しよし(庶子)に同じ。

げっし 月氏・月支【名】古、支那の西域にありし種族の一。西藏(ツチ)種に屬し、秦初、部屬強大にして、勢匈奴を壓し、漢代に、葱嶺の西に國を建て、又、西方に移り、バクトリヤ(Bactria)地方なる大夏を征服して、大月氏國を建てしが、餘衆の舊地に殘留せしものを小月氏といへり。西紀二世紀の頃、迦膩色(シカニ)王出でし時、隆昌の頂點に達したり。ぐわっし。

月氏の靈山(リヤウザン)【句】〔地〕りやうじゆせん(靈鷲山)を見よ。盛衰記「彼の月氏の靈山は、王城の東北を擊づ」

げつじ 月事【名】つきやく。月經。

げっしう 月收【名】每月の收入だか。

けっしき 【名】毛髮を抜くに使用する木製のはさみ。

けっしきそ 血色素【名】〔醫〕『獨 Hämoglobin』血液に赤色を與ふる色素。血液の實質中重要なるものにて、主に赤血球の外筋組織中に含まれ、血漿中にも存す。結晶性を有し、鐵分を含むが故に、よく酸素と化合して、酸化血色素となり、又、容易に酸素を失ふ性あり。へもぐろびん。血紅素。

げっしこく 月氏國・月支國【名】〔地〕げっし(月氏)を見よ。

けっしたい 決死隊【名】決死の覺悟にて、敵に突擊せんとする人の一隊。

けっしつ 潔疾【名】けっぺき(潔癖)に同じ。

けっしつ 蹇膝【名】はやる馬。勢たけき馬。下學集「蹇膝(シツク)馬也」

けっしつ 闕失・缺失【名】■かけうすこと。■あやまち。過失。

けっじつ 結實【名】草木の實を結ぶこと。

けっして 決して【副】かならず。どうしても。うたがひなく。まちがひなく。(下には、必ず打消の語を伴ふ)「と。

けっしふ 決拾【名】ゆがけと、おしてかけ

けつ-じふ 結集【名】〔佛〕『梵 Saṅgīta』釋迦の歿後、弟子たちの、その教の滅せんこと、及び邪義の生ぜんことを恐れて、生前四十五年間に說敎せし片言隻語を結合、撰集せしこと。「ぐみ。

けつ-しん 結親【名】親族となること。緣

けっ-しん 決心【名】心を決定すること。思慮を一途に定めて決すること。おもひこみ。かくご。おもひきり。

けっ-しん 闕脣・缺唇【名】みつくち。いぐ

けつ-じん 傑人【名】けっし(傑士)に同じ。

けつ-じん 闕人【名】ほりものし。彫刻師。欽闕氏。

けつ-じん 竭盡【名】盡くること。滅盡。

けっ-しや 結社【名】多數の人が、共同の目的を以て、互に團結すること、又その團體。くみあひ。

げっ-しや 月謝【名】月ごとにいだす謝禮の金。(主に、生徒より、學校又は先生へ出だす授業料にいふ)

げっ-しや 月榭【名】月見の座敷。

けっ-しやう 結晶【名】■『英 Crystal』天然又は人工の物質の、平面にて圍まれ、規則正しき形をなすこと。その形は、物質により異なるが故に、化學成分の明かならざる物質にても、その結晶の形によりて、その何物たるかを明かにするを得。けっしやうけい(結晶系)參照。■形式を備へたる物となりて出現すること。

けっ-しやう 血漿【名】〔醫〕『獨 Blutplasma』血液の一成分にして、血球を浮ばしむる液體。血清と纖維素とより成り、やや濃厚・透明なり。體外に出でて、空氣に觸るる時は、十數分間にして、纖維素は粘膠質に變じて凝結し、血清のみ分離滲出す。

けつ-じやう 潔淨【名】きよきこと。けぎよきこと。清潔。「誤讀。

けつ-じやう 楔狀【名】せつじやう(楔狀)の

げっ-しやう 月性【名】〔人〕周防國の奇僧。字は智圓。清狂と號し、遠崎の妙圓寺に住す。頗る攘夷と海防とを心とし、その遊說、海防の事に關せざるなかりしため、海防僧の名を得。安政五年寂す。年四十二。

げつ-じやう 月城【名】二の丸の外廓、即ち三の丸。

けっしやう-がく 結晶學【名】『英 Crystallography』鑛物の結晶に關する理論、即ちその形狀・物理性・化學性等を研究する學問。

けっしやう-きがう 結晶記號【名】『英 Crystallographic notation』結晶面の性質を簡單に表はす記號。

けっしやう-くわうぶつ 結晶鑛物【名】〔鑛〕結晶して產出する鑛物。

けっしやう-けい 結晶系【名】『英 Crystall system』結晶の體を、その結晶軸の數と位置と長さとによりて分ちたるもの。等軸・正方・斜方・單斜・三斜・六方の六種に分ち、これを六晶系といふ。晶系。「晶形。

けっしやう-けい 結晶形【名】結晶せる形。

けっしやうけい-たんそ 結晶形炭素【名】〔化〕結晶せる炭素。金剛石・石墨など、これなり。

けっしやう-しつ 結晶質【名】〔鑛〕『英 Crystalline』外部は規則正しき平面に圍まれ居らざれども、內部の分子の排列は、規則正しく一定せるもの。例へば雲母・大理石・自然石・自然銀などの類。

けっしやうじやう-くわうぶつ 結晶狀鑛物【名】〔鑛〕りふじやうくわうぶつ(粒狀鑛物)に同じ。

けっしやう-すゐ 結晶水【名】『英 Water of crystallisation』含水化合物の結晶中の水分。硫酸銅は五分子の水を要するが如き、これなり。ふくわ(風化)參照。

けっしやう-せん 結晶腺【名】數多の結晶の相簇(ガイ)りて著生する時の全體。

けっしやう-そゐだ 結晶曹達【名】せんたくそゐだ(洗濯曹達)の異稱。

けっしやう-たい 結晶體【名】結晶して生じたる、一定の形を有する物體。

けっしやう-ちく 結晶軸【名】結晶體の中心を貫通して走る、想像上の數箇の直線。各結晶系の面の位置は、この軸に關する關係によりて定まる。晶軸。

けっしやう-はふ 結晶法【名】『英 Crystallization』■(化)不純の固形物を純清ならしめ、又は固形體の混合物を分別するために、結晶せしむる方法。■(文)活喩法と反對に、生物を無生物化し、動くものに靜的趣味を加ふる修辭法。例へば、「活字引」、「酒藏・飯袋」などいふ類。

けっしやう-へんがん 結晶片岩【名】〔鑛〕『英 Crystalline schists』火成岩と水成岩との中間に位し、結晶性にして、剝離し易き岩石。例へば綠泥片岩・雲母片岩の類。晶質剝岩。剝岩。變成岩。

けっしやう-めん 結晶面【名】結晶を取りかこむ平面。

けつじやう-もじ 楔狀文字【名】せつじやうもんじ(楔狀文字)の誤讀。

けっしやう-りふ 結晶粒【名】結晶の形の微小なるもの。その面の全體を完全に具へざるを常とす。

けっしやえいげふ 結社營業【名】〔商〕二人以上、數人又は數百人の資本を合し、損益を分擔する約束にてなす營業、即ち會社・組合などの類。

けっしゆ 結衆【名】〔佛〕寺院に夏籠(ゲゴ)すること。すぐる道俗。

けっしゆつ 傑出【名】ひいづること。すぐること。拔群・卓出。「よ。

けつ-じゆん 闕巡【名】けつずん(闕巡)を見よ。

けっ-しよ 穴處【名】けつきよ(穴居)に同じ。

けっ-しよ 血書【名】己の血にて、文字を書くこと、又その書きたる文書。

けっ-しよ 闕所【名】■莊園などの、前の領主が、犯罪などによりて亡び、未だ新領主の定まらぬもの。闕地。けっこ(闕國)參照。〔足利時代の語〕■德川時代の刑罰の一。磔・火罪・獄門・死罪・遠島・追放等の附加刑として、その田・畑を官に取上げしこと。重きは、家屋敷をも、又一切の家財をも、併せて取上げたり。沒收(モツシウ)。籍沒。

けつ-じよ 闕如【名】■かけたること。■けつじ(闕字)(二)に同じ。

けつ-じよ 缺如【貌】窟のみたぬさま。不平。缺然。「と。

けつ-しよう 決勝【名】勝敗を決定すること。

けつ-じよう 結繩【名】支那にて、太古未だ文字なかりしころ、繩を結びて、互に意を通じ、又は物事の記憶に便ぜしこと。但し支那のみならず、未開時代にこの法を取りし證跡、他にも尠なからず。

結繩の政(マツリゴト)【句】『易の繫辭下傳に「上古結繩而治、後世聖人易之以書契」、又、孔安國の尙書の序に「古者伏羲之王天下也、始畫八卦、造書契、以代結繩之政」とあり』古代の政治。

けつしよう-てん 決勝點【名】競走・競馬などの時、到著の先後によりて、勝敗を定むる標準となる地點。

けつじよう-もじ 結繩文字【名】繩を結びて記號となせしもの。けつじようもんじ。「同じ。

けつじよう-もんじ 結繩文字【名】前條に

けつしよ-きん 闕所金【名】闕所の處刑を受けし者の貨財・田宅を賣りて得たる金子。

けっ-しよく 血色【名】■血のいろ。■血のごとくに赤き色。■かほ色。いろつや。

けっ-しよく 血食【名】■血は祭祀に供する牲(イケニヘ)の血の義』子孫相つぎて、先祖の祭を絕やさぬこと。ちしよく(廟食)參照。

げっ-しよく 月蝕【名】〔天〕ぐわつしよく(月蝕)に同じ。げ。「月光。

けつ-しよく 月色【名】月のいろ。つきかげ。

けつしよく-そ 血色素【名】〔醫〕けっしきそ(血色素)に同じ。

けつしよ-ぐら 闕所藏【名】德川時代に、闕所の刑によりて沒收したる物を入れおきし藏。

けっしよ-ぶん 闕所分【名】闕所(二)になりたる部分。太平記「江州の闕所分三百餘箇所を行はれて」

けつしよもの-ぶぎやう 闕所物奉行【名】江戸幕府の職制の一。大目付に屬し、官に沒收せし財貨・家宅・地所を賣却することを掌りし奉行。

けっしるゐ 齧齒類【名】〔動〕哺乳類の一目。特有の齒列と齒の構造とを具へ、門齒は、上下二枚づつあり。犬齒なく、門齒と臼齒との間には廣き間隙あり。門齒は鑿狀をなし、臼齒は食物を咀嚼する便あり。こ

れに屬する者は、概ね小形の草食獣にして、好みて群棲し、繁殖極めて速かなり。即ち兎・鼠・栗鼠(リス)・海狸などの類。

けつ-じろ 尻白・驌【名】馬の毛色の一。

けっす 決す【動佐變他】㊀堤防を破りて、水流れ出づ。決潰す。㊁きまる。さだまる。決定す。

けっす 決す【動佐變他】㊀堤防崩れて、水を流し出す。㊁きむ。定む。決定す。

けっす 結す【動佐變自】大便滯りて、通ぜず。祕結す。便祕す。

けっす 結す【動佐變他】結論す。盛衰記「梵網十重禁をぞ說きたまふ。上人結して曰く、塔中の釋迦は、この法を說きて、佛位を千界の衆生に授け」

けつ-ずん 闕巡【名】古、朝廷にて、賜宴の時、巡流(メグリナガ)て、缺座の人あれば、その來るを待ち、巡流れたるだけの數を連飲せしめて、闕を補はしめしこと。江次第「四獻(最末參議降レ庭、轉二盃於侍從座一、計二度數一、飲二闕巡一)」同抄「四獻、召二侍從一、賜レ酒之時、以二前三獻分一令レ飲也、故號二闕巡一也一巡之時不レ飲之闕也」

けっ-ずゐ 決水【名】堤防・水閘などを毀壞して、水を抑流すこと、また自然に是等の毀壞して、水の氾濫すること、又その水。

けつ-ずゐ 血髓【名】血と髓と。盛衰記「血髓を屠り、身體を拋ちても」

げっすゐ 月水【名】げっけい(月經)に同じ。

けっすゐ-ざい 決水罪【名】〔法〕舊刑法にて、決水の所爲を行ひて、人の住家・田園などを漂失又は荒廢せしむる罪。その結果の輕重によりて、罰を輕懲役・重懲役・無期徒刑の三等に分ちたり。

けっ-せい 血清【名】〔醫〕『獨 Blutserum』血漿の凝結する時、その外部に滲出する、やや黃ばみて見ゆる、透明なる一種の液。成分は水・蛋白質及び鹽類。**けっせいちれう**(血清治療)參照。

けっ-せい 血誠【名】**せいせい**(赤誠)に同じ。

けっ-せい 結成【名】こしらへあぐること。構成。大成。

けっ-せい 結制【名】〔佛〕**けっげ**(結夏)に

けっ-せい 潔清【名】**せいけつ**(清潔)に同じ。

けつ-ぜい 血稅【名】『英 Blood tax 身血を稅とする義』**ちようへい**(徵兵)の異稱。明治五年太政官告諭「凡そ、天地の間、一事一物として稅あらざるはなし、以て國用に充つ。然らば則ち人たるもの、固より心力を盡し國に報ぜざるべからず。西人之を稱して、血稅と曰ふ。その生血を以て、國に報ずるを謂ふなり」

げつ-ぜい 月稅【名】月ごとに納むる稅。

けっ-ぜい-あるぶみん 血清アルブミン《英 Serum albumin》【名】〔化〕黃色・無定形の物質、血液中に存する一種の蛋白質にて、六七十度の溫度にて凝固し、水に溶けて、透明の液となる。

げっ-ぜい-きより 月星距離【名】〔天〕『英 Lunar distance』月の中心と太陽の中心との角距離、また月とその軌道の近くに見ゆる大なる恒星或は遊星との角距離。太陰距離。

げつせい-しふ 月清集【名】〔書〕藤原良經「の歌集。

けっせい-しんだん 血清診斷【名】〔醫〕『英 Serum diagnosis』抗毒素の發生は新陳代謝の異常を意味するものなる理に基づき、血清中の抗毒素の有無、及びその性質により、その人の生理的及び病的狀態の如何を斷定すること。

けっせい-しよ 結成所【名】かたなしどころ(結成所)に同じ。

けっせい-せき 結成石【名】こんくりいと(混凝土)に同じ。

けっせい-ちれう 血清治療【名】〔醫〕人體中にある有毒微菌を、固有の血清のみにては防ぎ得ぬとき、その病氣に對して、免疫となりたる他の動物の血清を注射して、治療すること。西曆一八九〇年我が國の北里博士及び獨逸のベェリング(Behring)の創始に係る。

けっせい-やくゐん 血清藥院【名】內務大臣の管理の下に、血清の製造に關する事務を掌りし所。院長・技師・技手・書記の職員を置きしが、明治三十八年廢せらる。

けっせい-れうはふ 血清療法【名】〔醫〕『英 Serum therapy』血清治療の方法。**けっせいちれう**(血清治療)參照。

げっせう 月照【名】〔人〕京都清水寺成就院の住僧。俗姓は玉井、初名は宗久、後、忍向と改む。和歌を善くす。尊王攘夷を唱へて、近衞忠熙・西鄉隆盛等と結ぶ。終に幕府に忌まれ、薩摩國に遁れしが、逮捕いよいよ急にして、身を容るる地なく、遂に隆盛と薩摩の海に投じて死す。年四十二。

けつ-せうばん 血小板【名】〔醫〕『獨 Blutplättchen』血球と共に血液中の有形成分をなすもの。無色・粘膠にして、兩面凹き、大小不定なる小圓板にて、アミバ樣の運動をなす。或學者は、赤血球の分離せるものとし、また破碎せる白血球ともいふ。血液小板。

げっせかい 月世界【名】月の中にありといふ世界。月界。

けっせき 闕席【名】學校・集會などの席に出でぬこと。(出席に對して)

けっせき 血石【名】■〔鑛〕たいしや(代赭)に同じ。■〔醫〕『英 Sanguinary calculus』血液中の石灰鹽類の、齒根部に沈著せるもの。多少暗綠色を呈し、剝離しがたし。

けっせき 結石【名】〔醫〕『獨 Steine』有機性基又は異物に、鹽類の沈澱することにより、體內に生ずる石のごとき物。種種の管及び腔に生ず。糞石・齒石・膽石・膀胱結石・尿石等、これなり。

げっせき 月石【名】〔鑛〕『英 Moon stone』長石の一種。透明にして、青色の光彩あり。裝飾品とせらる。

げっせき 月夕【名】■つきのよ。月夜。「花朝・月夕」■八月の十五夜。

けっせき-さいけつ 闕席裁決【名】〔法〕海員審判所の呼出を受けし被審人が、當日出頭せざる場合に、理事官の請求に基きて與ふる判決。

けっせき-さいばん 闕席裁判【名】〔法〕**けっせきはんけつ**(闕席判決)に同じ。(對席裁判に對して)

けっせき-しや 闕席者【名】闕席する者。

けっせき-はんけつ 闕席判決【名】〔法〕裁判の當日、當事者の一方出頭せざる時、民事にありては、相手方の申立により、訴訟を裁斷し、刑事にありては、裁判所は呼出を受けたる被告人又は罰金以下の刑に該當すべき事件につき、その代人が公判の期日に出頭せざる時は、檢事の請求により、この判決を行ひ、又、控訴申立人出頭せざる時は、この判決によりて、控訴を棄却し、相手方出頭せざる時は、申立人の意見を聽取したる上、證據調等の審理手續を行ひて、この判決をなす。民事・刑事共に故障の申立を許し、その期間は、民事は十四日間、刑事は三日とす。缺席裁判。(對席判決に對して)

けっせつ 結節【名】結び合ひて、交叉せる部分。むすびめ。ふし。「こと。縅口。

けつ-ぜつ 結舌【名】物いはぬこと。もだす。

けつぜつ-らい 結節癩【名】〔醫〕癩病の一種。神經癩よりも重症にして、紅斑と白斑とを生じ、豆大より桃李大の結節を呈す。遂次、皮膚・粘膜などの潰瘍を來し、遂に斷落を見る。

けっ-せん 結撰【名】文章を作ること。

けっ-せん 決戰【名】勝敗を決せんと欲して行ふ戰鬪。

けっ-せん 決選【名】選擧せられたる者の數人ある場合に、その中より、更に或者を選びて決定すること。

けっ-せん 血戰【名】血にまみれて、はげしく戰ふこと。ちまみれのいくさ。

けっ-せん 血腺【名】〔醫〕人體の中にありて、血球及び血漿を作るに必要なる、脾臟・甲狀腺・胸腺・副腎腦粘液腺・尾骶腺・頸動脈腺などの總稱。

けっ-せん 血栓【名】〔醫〕『羅 Thrombus』生活中、心臟又は血管中において、凝固したる血液或は血液より固形體の析出したるものが、心臟又は血管壁に附著し、或は血管の內腔を閉塞するもの。

けつ-ぜん 決然【貌】決心するさま。おもひきりて。きっぱりと。すっぱりと。

けつ-ぜん 缺然【貌】**けつじよ**(缺如)に同じ。

けつ-ぜん 闕然【貌】闕けて全からぬさま。闕如。闕焉。

けつ-ぜん 蹶然【貌】跳ねおくるさま。がば。むっく。「蹶然として起つ」

けつぜん 傑然【貌】すぐれたるさま。

けつ-ぜん 孑然【貌】〓孤立せるさま。孑子。〓獨り拔出でたるさま。孑子。

げっせん 月僊【名】〔人〕畫僧。名は元瑞、字は玉成。伊勢國山田の寂照寺に住す。畫を櫻井山興及び圓山應擧に受く。文化六年寂す。年八十九。

げつ-ぜん 月前【名】月の光のさすまへ。月下。「月前の櫻」

けっせん-とうへう 決選投票【名】『英Casting-vote』選擧の投票に、豫定の最少投票數をも得たるものなき場合、又、何れを當選者とも認めがたき得票者が二名以上ある場合に、その被選者二名以上に就き、更に投票を行ひて當選者を決定すること。

げっそう 月奏【名】上番の月を調査して、毎月一日に奏聞すること。

けっそく 血速【名】血液の運行する速度。

けっそく 血族【名】血管系の部分により大差あり。

けっそく 結束【名】〓たばぬること。ゆはふること。しばること。〓ほださるること。拘束。〓身支度をなすこと。〓同志の者の互に結びあふこと。圖結。

けつ-ぞく 血族【名】〓同じ先祖より出でて、血統の關係ある人。〓〔法〕『英Consanguinity』血統の相連絡せる者、及び法律がこれと同視せる者。後者は養子緣組・繼親子及び嫡母と庶子との場合。

けつぞく-けっこん 血族結婚【名】『英Consanguine marriage』血族間の男女が、夫婦となること。我が民法にては、直系血族間の全部、及び三親等以内の傍系血族間の結婚を禁止せり。血族婚姻。

けつぞく-こくか 血族國家【名】血統上の關係によりて、社會の秩序を定めて成立せる國家。即ち一の國家が、恰も大なる一家族の如くなるもの。上代に於ける我が國の如き類。

けつぞく-こんいん 血族婚姻【名】けつぞくけっこん(血族結婚)に同じ。「血族。

けつぞく-しん 血族親【名】六親等以内のみより成れる團體。

けつぞく-だんたい 血族團體【名】血族の

けつ-そしき 結組織【名】〔醫〕けっていそしき(結締組織)に同じ。

けつ-そん 缺損【名】〓そこなふこと。かけ損ずること。〓決算上の損失。

げっそり 【貌】げそりに同じ。「じ。

けつた 毛寸莎【名】けすさ(毛寸莎)に同

けつ-たい 結隊【名】隊を結成すること。

けつ-たい 結體【名】體形を結成すること、又その體形。

けったい 【貌】けたいに同じ。「臺。

げつ-だい 月臺【名】屋根なきうてな。露

げったい-しょく 月帶蝕【名】〔天〕ぐわったいしょく(月帶蝕)に同じ。

けったう 血刀【名】ちがたな(血刀)に同じ。

けったう 結黨【名】〓黨派を結ぶこと。〓(特に)、政黨を結ぶこと。

げったう 月桃【名】〔植〕蘘荷(ミョウガ)科に屬する多年生の草。高さ四五尺乃至一丈餘。葉は長さ一尺乃至三尺、莖頭に總狀の香氣ある淡紅花を綴る。我が國にては、鹿兒島縣の大島・琉球・臺灣などに産し、香港(ホンコン)及び瓊州にも分布す。

けったう-しき 結黨式【名】結黨のしるしとして執行する儀式。

けったく 結託【名】互に結びつきて、力になりあふこと。相容れて、たよりにしあふこと。

けったく 決擇【名】けっちゃく(決擇)に同じ。

けったふ 決答【名】決定したる返答。確答。

けったん 血痰【名】〔醫〕『獨Blutige Sputum』血のまじりたる痰。

けつ-だん 決斷【名】きめ。さだめ。さばき。

げったん 月旦【名】〓月の初日。月朔。〓

げったんひゃう(月旦評)に同じ。

げったん 月單【名】寺院にて、毎月一回、收支を結算して掲示する表。

げつ-だん 月檀【名】『月光の常に到る境の義』殿堂の緣。

げったん-くわい 月旦會【名】『支那宋の劉子平が月の初毎に、同族を集めて、互に善あれば告げ、過あれば諫めたる故事に本づく』月旦をする會。批評會。

けつだん-しょ 決斷所【名】〓くじしょ(公事所)に同じ。〓建武中興の際置かれて、所領などの訴訟を裁決することを掌りし所。雜訴決斷所。

げったん-ひゃう 月旦評【名】『支那後漢の許劭、從兄なる靖と共に高名ありしが、毎月、品題を更めて、鄕黨の人物を批評せし故事に本づく。』人物の批評。しなさだめ。月旦。

けつだん-れい 決斷令【名】だいはんじ(大判事)の唐名。

けったるい 【形】かったるいの轉訛。

けっち 闕地【名】けっしょ(闕所)〔一〕に同じ。

けっち (英Ketch)【名】二本の檣を有する、一種の小船。

けっち (英Kedge)【名】港内にて、船の位置を轉じ、流潮のために、船の位置の轉移するを防ぐ等に用ふる小錨。

けっちう 桀紂【名】〔人〕桀と紂と。ともに、古の支那の暴君。

けっちゃう 結腸【名】〔醫〕『羅Intestinum crassum 管壁やや强厚にして、大に絞結し、出沒不等の隆起を呈するによりていふ』大腸の小腸に連なる部分。

けっちゃう 蹶張【名】弩を足にてふまへて、つよく張ること。(臂張に對して)

けつ-ぢやう 決定【名】決定(ケテイ)すること。疑無きこと。必定(ヒツヂヤウ)。盛衰記「異說雖二口多、死亡決定也」

けつ-ぢやう 決定【副】かならず。きっと。必定(ヒツヂヤウ)。太平記「尋常の如くに合戰を致し候はば、御方決定打負け候ひぬと覺え候ふなれば」

けっちやう-ごふ 決定業【名】〔佛〕ちやうごふ(定業)に同じ。

けっちやう-しん 決定心【名】〔佛〕心の決定して動かざること、又その心。植城島原鮭合戰「指先より血を出し、徒黨固まる決定心」

けつぢやう-しん 決定信【名】〔佛〕疑念をまじへざる信心。

けつぢやう-わうじやう 決定往生【名】〔佛〕疑なく極樂に往生すること。謠曲「賣顧寺」「決定往生南無阿彌陀佛と唯一筋に念ずるならば」

けっちゃく 決著【名】〓きまりのつくこと。かたづくこと。落著。歸著。〓つまり。をはり。ぎりぎり。ごくごく。

けっちゃく 決擇【名】〔佛〕『けったく(決擇)の異音』疑を決して、理非を分別すること。知の作用。太平記「擧海に殊を拾へる證義・論斷を決擇して」

けっちゅう 穴中【名】あなのなか。孔中。

げっちゅう 月中【名】〓月のなか。〓月影のさすところ。月下。

げっちゅうぎやうじ 月中行事【名】一箇月中の豫定の行事。(年中行事に對して)

けっちょ 闕除【名】缺除【名】取りのくること。はぶくこと。はぶかること。

けつ-づ 血途【名】〔佛〕ちくしやうだう(畜生道)に同じ。

けってい 決定【名】〓定まること。定むること。確定。〓〔法〕司法裁判所が判決をなす準備として、或事實を確定すること。

けってい 闕廷【名】禁中。朝廷。

けってい 挈提【名】〓さげもつこと。たづさふること。攜帶。〓互に扶持すること。たすけあふこと。

けってい 結締【名】ていけつ(締結)に同じ。

けってい-しつ 結締質【名】〔醫〕『獨Bindesubstanz』弘く內臟器管等に分布して、その基礎となり、間質となり、支柱となる組織。分ちて結締組織・彈力組織・脂肪組織・軟骨組織・骨組織の五種とす。

けってい-そしき 結締組織【名】〔醫〕『獨Bindegewebe』結締質の一。某質やや柔軟にして、細胞僅少なる組織。結組織。

けってい-ろん 決定論【名】〔哲〕ていめいろん(定命論)に同じ。

けっ-てき 闕腋【名】けつえき(闕腋)を見よ。

けってん 闕典・缺典【名】不完全なる典章、又は儀式。

けってん 闕點・缺點【名】㊀事の不足せる點。かけめ。短所。弱點。㊁あやまち。過失。

けってん 蹶顛【名】つまづきたふること。顛蹶。質蹶。

けってんはふ 結點法【名】用器畫にて、拋物線などの曲線を畫くに、まづその線の通過すべき數點を求め、それらの點を結びつけて、所要の曲線を現すこと。

けっと 毛布【名】『ぶらんけっとの略』まうふ(毛布)に同じ。

けっとう 血統【名】ちすぢ、血脈。

けっとう 決鬪【名】雙方の間に、遺恨又は解決しがたき爭論ある場合に、腕力によりて、勝負を決すること。はたしあひ。

けっとう 毛布【名】けっとの訛。

けっとう 月頭【名】つきはじめ。つきがしら。(月尾に對して)

けっとうざい 決鬪罪【名】〔法〕決鬪を行ひ、又はその立會人(セコンド)となり、又はその場所を貸したる等、すべて決鬪に關與せるに依りて成立する罪。

けっとうじゃう 決鬪狀【名】決鬪を申込む書狀。はたしじゃう。

けっとうしゅぎ 血統主義【名】〔法〕血統を標準として、地位又は財産の承繼者を定むる主義。皇位の繼承又は個人の國籍を定むる時などに於ける者、これなり。

けっどく 結毒【名】〔醫〕結核・黴毒などの病の、骨にまでもからまること。ほねがらみ。〔漢方の語〕

げっとく 月德【名】九星にて、月中の陽德なりといふもの。正・五・九の三箇月は丙の方、即ち巳・午の間、二・六・十の三箇月は甲の方、即ち寅・卯の間、三・七・十一の三箇月は壬の方、即ち亥・子の間、四・八・十二の三箇月は庚の方、即ち申・酉の間に在りといひ、此の方角に向ひて修營し、又、土を取るに宜しく、また仕官して、貴人に謁し、出行移轉・婚娶・埋葬に大吉なりといふ。

けっとるどらむ (英 Kettle drum)【名】西洋樂器の一。太鼓の一種。銅製又は眞鍮製にて、椀形をなし、開きたる一面に、獸革を張りたるもの。二箇を合せて一組とす。

けっとな 毛綱【名】毛髮にて造れる綱。

けっとなふ 結納【名】結託して、深き關係を作ること。

けっとにく 血肉【名】㊀血と肉と。生身。㊁骨肉。

けっね 狐【名】〔動〕きつね(狐)㊀の轉訛。〔關西の方言〕

けっねう 血尿【名】〔醫〕『獨 Bluthamen』血液を混じて排泄する尿。外傷又は疾病のために、膀胱・腎臟又は尿道より出血するに因る。

けっぱい 【名】けっかい(結界)の轉訛。「七里けっぱい、おさらばさらば」

けっぱい 蹶敗【名】『蹶(ママ)き敗るる意』しっぱい(失敗)に同じ。

けっぱう 缺望・缺望【名】望を達せず、うらみおもふこと。不滿足に思ふこと。

けっぱう 月報【名】毎月報知すること、又その圖書。

けっぱく 結縛【名】〔佛〕『心身を繫縛して、解脫・出離せしめざる義』ぼんなう(煩惱)に同じ。

けっぱく 潔白【名】㊀清潔にして純白なること。まっしろ。㊁心の穢れてをらぬこと。不正ならぬこと。高明・正大。清廉。

げっぱく 月迫【名】㊀月末にせまりたる日。つきづめ。㊁十二月の末。

けっぱつ 決罰【名】刑罰を處決すること。

けっぱつ 結髮【名】㊀髮を結び上ぐること、又その結びたる髮。かみあげ。㊁元服。加冠。(支那の俗にては、男子は二十歲、女子は十五才)

げっぱつ 月末【名】げっまつ(月末)に同じ。

けっぱふ 闕乏・缺乏【名】物の足らずして乏しきこと。ふそく。

けっぱん 結番【名】番組を設けて、順次に出仕又は宿直せしこと。中古以後の朝廷の官人、又は武家の職員などの間に行はれし制度。例へば鎌倉幕府の評定衆・引付衆など、その他某番と呼びし者のごとき、又江戸幕府時代にも、各番頭の統率の下に屬して、何何番と呼びし者の類。保元日夜に結番し、禁闕を守りたまふ」

けっぱん 血判【名】神文・誓文などに、信實にして違はずといふ意を示すために、指より血を出して、署名の下に捺(き)すこと。大鏡「永く野心あるまじきとの神文血判せらるべきか」

けっぱんじゃう 血判狀【名】血判したる「文書。

けっぴ 結尾【名】とぢめ。をはり。はて。すゑ。末尾。結末。「ふるもの。

けっぴ 血肥【名】畜類の血を肥料として用ふること。

げっぴ 月尾【名】一箇月のをはり。つきづゑ。月末。(月頭に對して)

げっぴーたう 月尾島【名】〔地〕朝鮮京畿道京畿灣なる濟物浦群島の一。周回一里餘。仁川港口に在りて、これを內・外の二部に分つ。

けっぴつ 闕筆【名】けっくわく(闕畫)に同じ。

けっぴやう 結病【名】〔佛〕『けっばく(結縛)を見よ』ぼんなう(煩惱)に同じ。

げっぴやう 月評【名】毎月、最近に起りたる出來事を批評すること。「の氷。

けっぴょうじき 結氷【名】氷のはること、又そはじむる時節。「ん(氷點)に同じ。

けっぴょうてん 結氷點【名】〔理〕ひょうてん(氷點)に同じ。

げっぷ 月賦【名】或一定の金額を、或月數に分割し、その割當額を毎月仕拂ふこと。つきわり。

げっぷ 【名】おくび(噯氣)に同じ。〔俚語〕

げっぷ 【貌】噯氣(おくび)の出づる音。

げっぷきん 月賦金【名】月賦拂の金子。

けっぷーぶつ 傑物【名】すぐれたる人物。人傑。「よる支拂。

げっぷーばらひ 月賦拂【名】月賦の方法に

けっぷん 闕文【名】文章の中に、字句の脫したること、又その文句。脫文。

けっぷん 結文【名】文章の結末、又はその文句。末文。

けっぷん 血粉【名】肥料の一。屠獸の血液を蒸熟して凝固せしめ、乾燥して後、粉碎せしもの。

けっぺい 血餅【名】〔醫〕『獨 Blutkuchen』血液を器物に入れて放置する時、醱酵素の作用により、血漿中より纖維素を析出し、血球を纏絡して成る暗赤色の塊。その外部に、血清のみ遊離す。血菓。

けっぺい 潔病【名】けっぺき(潔癖)に同じ。

けっぺい 挈瓶【名】手にさぐるほどの、小さき瓶。

挈瓶の智【句】『手にさぐるほどの瓶は、容るるところの小なるが如くなる義』小さき智慧。

げっぺう 月表【名】事實を月ごとに書きわけて、見易きやうに排列したるもの。月のかきたて。

けっぺき 潔癖【名】㊀清潔なることを好む癖。きれいずき。けっぺい。潔疾。好潔。㊁不正・邪曲を憎むこと。品行の不純なるを忌む性分。けっぺい。潔疾。

けっべつ 訣別【名】永く別るること。いとまごひ。永訣。永別。

げっべつ 月鼈【名】『月と鼈(スッポン)との義』兩者の優劣の度が甚しく相違する譬。雲泥。天地。霄壤。

けっべん 血便【名】〔醫〕『獨 Blutstuhl』血液の附著・混和して出づる糞便。

げっぽう 月峯【名】〔人〕京都東山雙林寺長老庵の僧。名は辰堯、別號は菊澗。靈を池野大雅に學びて、その眞意を得、世に二世大雅堂と稱せらる。

げっぽう 月俸【名】㊀げっきふ(月給)に同じ。(年俸に對して)東鑑「今日召二御前一則可レ賜二月俸等一こ㊁月月のまかなひ料。

げっぽうがく 月俸額【名】げっきふがく(月給額)に同じ。「の形容。

けっぽん 血盆【名】赤くして大きなる口

けっぽん 闕本【名】卷數の足らぬ書册。

(完本に對して)

けつ-ぼん 血本【名】『血を流して得たる義』辛苦して得たるもとで。

けつ-まく 蹴爪【名】相撲(スマヒ)の手の一。

けつ-まく 結膜【名】〔醫〕『獨 Bindehaut』眼球の壁の、三層の膜より成れるが中にて、最も外面に位するもの、即ち眼瞼の裏面に接するもの。眼球の全形を造り、内部の諸裝置を支持・保護するために存す。堅きこと軟骨の如く、白色・不透明にして、血管に富む。

けつまく-えん 結膜炎【名】〔醫〕『羅 Conjunctivitis』結膜に發する諸種の炎症。カタル性結膜炎・顆粒性結膜炎(トラホーム)・膿胞性結膜炎・膿漏性結膜炎(風眼)等、種種なり。いづれも分泌と結膜充血とありて、素人には辨別しがたく、はやり目・ぼせ目・おこり目など呼ぶもの、多くはこれらを混同せるなり。

けつまつ 結末【名】とぢめ。をはり。はて。

げつまつ 月末【名】月のをはり。つきづゑ。げつばつ。月尾。

けつまづき 蹴躓【名】けつまづくこと。

けつまづく 蹴躓く【動四自】㊀蹴て、つまづく。字音「大門にてけつまづきて、うつぶしに倒れにけり」聖徳太子繪傳記「歩む疊に目はあれど、けつまづき夜も闇の夜も」㊁中途にて失敗す。しくじる。蹉跌す。頓挫す。

けづまり 毛詰【名】毛の短き狆(チン)。

けつ-みやく 血脈【名】㊀**けっくわん**(血管)に同じ。㊁血液を分けたる親族。ちすぢ。血族。**けちみやく**(血脈)參照。源氏鳥鴨子折「我れその血脈を續ぐべき人相」

血脈貫通【句】『身體に血脈の通じをるに譬へていふ』文章の主意の、一篇に互りて連絡あること。文のすぢの通りてあること。

けづめ 蹴爪・距【名】〔動〕㊀鷄類の雄の蹠蹠骨の下部にある爭鬪用の突出物。表皮の角質化せるもの。かけづめ。あごえ。距爪。㊁牛・馬、その他有蹄類の趾の小さくして、地に觸れざるもの。懸蹄。生玉心中、蹴爪にけられて、長作が轉ぶ所を、どうと乘り」

けつ-めい 決明【名】〔植〕**えびすぐさ**(惠比須草)(一)に同じ。源氏「うへの御梳髪にさぶらひけるを、はてにければ」

げつ-めい 月明【名】月のあかるきこと。

けつめい-ぐわん 決明丸【名】古、用ひし目藥。和名抄「決明丸。治二目不レ明一」

けつめい-さん 決明散【名】古、用ひし目藥。和名抄「決明散。治二目不レ明一」

けつめい-し 決明子【名】〔植〕**えびすぐさ**(惠比須草)(一)に同じ。

けづめ-げ 距毛【名】『英 Pollock』馬の距を被ひて生ゆる、房狀の毛。

けつめど【名】㊀尻の穴。肛門。〔俚語〕㊁人を罵りていふ語。「けつめど野郎」「けつめどの小さい奴」

げつ-めん 月面【名】月の表面。

けつめん-たい 闕面體【名】〔鑛〕その結晶系に特有の相稱面を悉くは備へざるもの。(完面體に對して)

けつ-もの 食津物【名】たべもの。調膳。

げつ-や 月夜【名】**つきよ**(月夜)に同じ。

けつ-やく 結約【名】契約を結ぶこと、又その約束。

げつ-よ 月餘【名】一箇月あまり。ひとつきあまり。

げつ-よ 月來【副】つきごろ。

げつ-よ 子餘【名】**げっね**(子遺)に同じ。

げつ-らい 月老【名】**げっからうじん**(月下老人)の略。「足すること。

けつ-らく 闕落【名】かけておつること。不足せしなり。詩經の豳風東山篇に「之子于歸、皇駁其馬、親結其縭九二十其儀」とあるに本づく。緩ぐみ。結婚。

けつ-り 血痢【名】**りびやう**(痢病)に同じ。

けづり 削【名】けづること、又けづる方法。

けづ-り 月利【名】一箇月を基として定めたる利息。

げつ-り 月離【名】〔天〕『英 Lunar distance』月と或恒星又は遊星との間の距離。

けづり-あぐ 梳上ぐ【動下二他】くしけづりをはる。髪を理(サ)めをはる。

けづり-あめ 削飴【名】削りて食ふ、極めてかたき飴。

けつりうけい 血流計【名】『英 Hæmodrometer』血管中に於ける血液流通の速度を計る器械。構造種種あれども、硝子管又は硝子球を血管に連繫し、その中を流通する血液の進行もしくは量によりて測定す。

げつり-がく 月理學【名】『英 Selenography』月面の形態學、即ちその嶽・谿谷・原野などに命名し、且つ圖形に現はす學。

けづり-かけ 削掛【名】㊀柳・檜などの枝の先を縦に細く削り、圖の如く、恰も多量の紙き紙を結び附けたるが如き形に作りたるもの。古、邪氣を拂ひ、また福を招く効ありとて、正月十五日より二十日まで、家家の門戸に吊しあるきたり。㊁「削掛の神事」の略。



(一)けづりかけ

削掛の宵(カヅ)【句】古、端午に飾りたる菖蒲を削掛と稱し、削掛を懸置きしこと。魔を拂ふためなりといふ。鷹筑波「けづりかけの宵のだしは鰹節」樗良「君が代の宵手輕し削掛」

削掛の神事【句】古、京都の祇園社にて、十二月晦日の夜、子(ネ)の刻に行はれし神事。十二箇月に象(カタ)れる十二本の削掛を燒きて、近江・丹波兩國の豐凶を占ひしこと。この夜、參詣人、貴賤を論ぜず、行きちがひに、互に惡口・雜言を吐きあふを例とす。おけら祭。けづりかけ。

けづりがな 削刀【名】印判の彫刻にて、版面を削るに用ふる刀。

けづりがほ 梳顏【名】梳(カツシ)るがごとき樣子。堀太「青柳の絲は綠の髪なれや吹きくる風のけづり顏なる」

けづり-ぎ 削木【名】**けづりばな**(削花)に同じ。〔古語〕蜻蛉「かみ屋紙に書かせて、堅文にて、けづり木につけたり」

けづり-ぎは 削際・鑢際【名】犬追物(イヌオフモノ)の馬場の圍。內榜示(ウチジルシ)の外側。

けづり-ぐし 梳髪【名】髪をくしけづること、又その櫛。かみゆひ。かみあげ。〔古語〕源氏「うへの御梳髪にさぶらひけるを、はてにければ」「屑。

けづり-くづ 削屑【名】削りて生じたる殘

けづり-こんぶ 削昆布【名】昆布を幅二三寸ほどに縦に切り、その端を細く割りかけ、五分ほど殘して、火に炙りたるもの。

けづり-ごや 削小屋【名】鉋削(カンナ)を行ふために、造れる小屋組。「に同じ。

けづり-ざるめ 削鰑【名】**きざみざるめ**(刻鰑)

けづり-だい 削臺【名】㊀鉋(カンナ)削の細工をなす時に、用材の動くを防ぐ裝置ある臺。㊁酒の肴。(大工の語)

けづり-だこ 削章魚【名】章魚を煮て乾し、鰹節を削ると同じ方法にて、薄片となせるもの。伊勢國の特産。きざみだこ。

けづり-たつ 削立つ【動下二他】美しく削る。削りあぐ。狂言(蚓)「削り立てたるまないたの上に」

けづり-ともだち 削友達【名】『身代を削り減らす友達といふ意。**けづる**(削る)(四)を見よ』酒飲み仲間。飲み友だち。膝栗毛「近所の削友達が打寄って」「へらす。

けづり-とる 削取る【動四他】削りて除きたる防風。肴のつまなどに用ふ。㊁〔植〕「じ。

けづり-ばな 削花【名】削掛(カケツケ)の如く、木をふさふさに削りかけて造りたる造花。〔古語〕古今「めどに、けづりばなさせりけるを、よませたまひける」

けづり-ひ 削氷【名】削りたる氷。〔古語〕枕「けづりひの、あまづらに入りて」

けづり-まはし 削廻【名】㊀けづりまはすこと。㊁さまざまの目論(モク)を企つること、又その人。小刀細工をすること。聖徳太子繪傳記「守屋あせって、芹摘を隱し置いたる削廻はおのれよな」

けづり-まはす 削廻す【動四他】あちこち、少しづつ削る。「づる痲病。

けつ-りん 血痲【名】尿に血のまじりて出

げつりん 月輪【名】『形圓くして、輪のごとくなるよりいふ』つき(月)[一]に同じ。

げつりん 月林【名】月下の林。

げつりもち 削餅【名】かきもち(缺餅)を云ふ。〔越後國の方言〕

けづりもの 削物【名】魚介の肉の、乾固めて、削りて食ふもの。庭訓往來「削物者、干鰹・圓鮑・干蝗・魚卵・煎海鼠」

五種の削物【句】五種の乾固めたる魚を削りて食ふ物。魚の種類は、流派によりて一定せず。

けつりやく 闕略・缺略【名】しやうりやく(省略)に同じ。

けづりよす 梳寄す【動下二他】毛髪を梳(ケヅ)りて、一所に寄す。

けづる 削る【動四他】[一]少しづつ殺(ソ)ぎ切る。うすくそぐ。へぐ。[二]微し上ぐ。のぞく。抹殺す。取上ぐ。沒收す。源氏「御ふだけづられて、つかさも取られて」頓城酒呑童子「その褒美には、頼光の官職を削り、安盛を鎭守府將軍になさるる由」[三]へらす。減少す。[四]『酒を多く飲めば、身代を削り減らすよりいふ。**けづりもだち**(削友達)を見よ』酒を飲む。〔大工の語〕[五]そしる。けなす。頓城島原鮭合壘「二親の命日忘れず、夫は佛法けづるとも、そっと隱して回向しや」聖德太子繪傳記「心中に望あって佛教をけづる守屋が母」

けづる 梳る【動四他】くしにて、髪を解く。くしけづる。櫛にてすく。萬葉「ねくたれの髪けづる世もあらざれば戀しきものを今日はくらしつ」

けつるめ 【名】毛深くして、蠶(カヒコ)などの長く垂れたる馬。〔古語〕新六「見わたせばみな青鷺のけつるめをひきつづけたる馬づかさかな」

けつるゐ 血涙【名】悽慨・悲憤などに堪へずして流す涙。ちのなみだ。

けつ-れい 厥冷・蹶冷【名】『厥は、氣閉ぢて目まひのする義。蹶に通ず』血液運行止みて、身體の冷ゆること。〔同じ。〕

けつ-れい 闕禮・缺禮【名】しつれい(失禮)に同じ。

げつ-れい 月令【名】一年間に行はるる定例の政事・儀式などを、月月の順序に記したるもの。年中行事。ぐわつりやう。

げつ-れい 月齡【名】〔天〕『英 Moon's age』新月の時を零として起算し、次の新月に至るまで、即ち二十九日餘の日數。明治四十三年以來、本邦曆には太陰曆を添ふることを止めしより、これを記入するに至れり。

けつ-れつ 結了【名】をはること。はて。をはり。とぢめ。終結。終了。

けつ-れつ 決了【名】義理を決定し、明了ならしむること。

けつ-れつ 決裂【名】きれさくること。きりさくこと。

「の兩句。

けつ-れん 結聯【名】〔文〕律詩の第七・第八

けづれる 削れる【動下一自】削られて、小さくなる。次第に減損して、細くなる。

けつ-ろ 血路【名】[一]獵場などにて、獸の殺されたるため、血痕をとどめたる道筋。[二]敵に圍まれたる時、辛うじて斬りひらく一方のにげ路。にげみち。[三]策盡きたるとき、纔に得たる活路。

げつ-ろ 月露【名】月と露と、また月の光の

月露風雲【句】『隋書の李諤傳に「競二雕蟲之奇一、爭二一字之巧一、連篇累牘、不レ出二月露風雲之狀一、積案盈レ緗、唯是月露風雲之狀」とあるに本づく』無用の閑文字。空詞浮文。

けつ-ろう 闕漏・缺漏【名】足らぬところ。かけ。もれ。「闕漏を裨補す」

げつ-ろく 月錄【名】每月の出來事の記錄。

けつろ-てん 結露點【名】〔理〕ろてん(露點)に同じ。

けつ-ろん 結論【名】[一]論をむすぶこと。議論の結末。[二]〔哲〕だんてい(斷定)に同じ。[三]〔哲〕だんあん(斷案)に同じ。

けつ-ゐ 闕遺・缺遺【名】かけもれたること。おち。かけ。脫漏。

けつ-ゐ 闕位・缺位【名】〔法〕法規に基づきて、官吏及びその他の公務員の充すべき地位に、闕員あること。

けつ-ゐ 子遺【名】『子は、獨の義にて、わづかにひとり殘る意』すこし殘ること。又その物。餘類。殘餘。子餘。「先朝の黎民、子遺有ることなし」

けつ-ゐん 闕員・缺員【名】定員の足らぬこと。又その人員。

けつ-ゑん 闕圓・缺圓【名】〔數〕きゅうけい(弓形)[二]に同じ。

けつ-をん 血溫【名】血の溫度。

けて 【名】けたい の訛。

けてがわるい【句】『けたいが惡い』の訛』みにく(醜し)に同じ。〔豐後國の方言〕

げて 外出【名】江戸時代に、徒(ダチ)鳥に苦役する囚人の、滿期近くなりて、使などに外出せしめらるること。

けてう 怪鳥・恠鳥【名】くわいてう(怪鳥)に同じ。盛衰記「これは恠鳥か變化か」

けてう 化鳥【名】鳥のばけもの。ばけたる鳥。謠曲(善知鳥)「娑婆にては、善知鳥やすかたと見えしも、冥途にしては、化鳥となり」

げてう 牙彫【名】象牙を材としたる彫刻。

けてう-たい 化鳥體【名】〔文〕享保年間、立羽(バウ)不角の唱導せし句體。變化を專らとし、異樣に附句を働かせしもの。

けてう-ふう 化鳥風【名】〔文〕立羽(バウ)不角を祖とする俳諸の一派。

けてふ 化蝶【名】ぜに(錢)の異稱。慶長簡用集「器財部、化蝶、けてふ」

けてん 化轉【名】〔佛〕敎化(ケウゲ)して、惡を善に轉ぜしむること。

けてん 化天【名】〔佛〕けらくてん(化樂天)に同じ。謠曲(金札)「化天・耶摩天・他化自在天、三十三天攀ぢのぼりて」と。

けてん 華天【名】〔佛〕華嚴宗と天台宗とを入るなどいふ。偶人より出でたる詞也。炎をかまへて、人にかくる貌也」

けてん 怪顚化轉【名】驚きあやぶむこと。當惑。〔元祿頃の語〕心中二腹鬱「半兵衛、はっとけてんして、さわぐ心をおししづめ」

けてん ケ傳【名】『ケは箋の字の略』詩經の、鄭玄(ジヤウゲン)の作りし箋と毛氏の作りし詩傳との略稱。いてん(イ傳)參照。〔古の博士家の語〕

げてん 外典【名】〔佛〕佛經のほかの書類。外書(ゲシヨ)。(內典に對して) 太平記「學窓の雪に向ひて、外典の書に心をぞ慰むらんと覺えて」曾我五人兄弟「嫂水に溺るとも、手を取って上げぬとは、外典のいましめ」

げてん 下殿【名】御殿より退出すること。著聞「一家の人人皆下殿せられける」

げてん 下田【名】わるき田。下等の田地。やせた。(上田に對して)

けてんがほ 怪顚顏・化轉顏【名】あやしみ驚きたるかほつき。豐生隅田川「あれ伯母伯母と指せば、女房を見て、けてん顏」

けと 計都【名】けいと(計都)に同じ。

けと 【名】けちを附くること。惡しき緣起。

けとを入る【句】けちをつく。けとを附ける。色道大鑑「けと。けとを附ける、けとを入るなどいふ。偶人より出でたる詞也。炎をかまへて、人にかくる貌也」

けど 化度【名】〔佛〕衆生を敎化(ケウゲ)・濟度すること。くるど。藥草喩「觀音の、衆生化度のために現れさせたまへるとぞ」

けど 化土【名】〔佛〕三佛土の一。佛が二乘凡夫を度せんがために、化作(ケサ)する國土、即ち化身(ケシン)の佛の住する土。淨土と穢土(エド)との別ありて、兜率(トソツ)天のごときは、その前者、娑婆世界のごときはその後者。娑婆世界は、衆生よりいへば、その自業(ジゴフ)より招きたる穢土なれども、所住の佛身より見て、化土といふなり。變化土。應土。

けとう 化燈【名】寺院にて、燈油を勸化(クワンゲ)すること。

けどう 戯動【名】[一]たはむれの動作。[二]陣入鳥「戯言も思より出で、戯動もはかるよりおこる」[三]昔、仙臺藩にて、每春の初めに行へる、今の陸軍の演習の如きもの。

げとう 下等【名】かとう(下等)に同じ。

げとう 【名】〔植〕けいとう(雞頭花)の訛。

けどき 食時【名】食事の時。盛衰記「いかが、食時におはしたるに、物召さではあるべき」「どくけし。

げどく 解毒【名】體中の毒を解消すること。

げどくざい 解毒劑【名】解毒の藥。げどを ろ ね わ れ る り ら よ ゆ や も め む み ま ほ へ ふ ひ は の ね ぬ に な と て つ ち た そ せ す し さ こ け く き か お え う い あ

くやく。

けとく-ぼさつ 華徳菩薩【名】〔佛〕法華經の妙莊嚴王本事品に出でる菩薩。前身は妙莊嚴王といふ惡王なりしが、夫人淨德と二王子淨藏・淨眼とが華智佛に由て悟道し、神變を現じて、惡王を諫めたるため、終に菩薩果を得たりといふ。狹義淨藏・淨眼の往反遊行(ユサン)したまひけんを見たまひてこそ、妙莊嚴王も、心淸き三昧どもを勤めたまひて、華德菩薩ともなりたまひけれ」

げどく-やく 解毒藥【名】**げどざい**(解毒劑)に同じ。

げ-どころ 褻所【名】あさゆふ居るところ。ふだんの居所。ねま。居室。〔古語〕

けとばかす 蹴飛ばかす【動四他】次條に同じ。天の網島「や、がんだうめ、獄門めとては、けとばかし」

けとばす 蹴飛ばす【動四他】㊀蹴ってあなたに飛ばす。けとばかす。㊁うけつけず。けちらす。

けとぶ 蹴飛ぶ【動四自】蹴って飛ぶ。平治「惡源太の乘りたまへる馬、片なづけの駒にて、材木にや驚きけん、馬手(メテ)の方へ蹴飛んで」

けとほし 氣遠し【形一】㊀人氣(ケハヒ)遠し。さびしくうとまし。〔古語〕源氏「うとましうけどほき木だちに」㊁うとうとしし。うとまし。〔古語〕源氏「年ごろのつもりには、過ぎにし方いとどけどほくのみなん侍るを」

けとま 毛苫【名】苫の一種。茅又は菅にて作りたるもの。(桐油紙などにて作りたるものと區別していふ)

けとんじ 【名】〔植〕**けいとうげ**(鷄頭花)の訛。

けとんす 毛緞子【名】毛織にしたる緞子。地薄く、織紋あり。窓掛・卓子(テエブル)掛などに用ふ。

け-ども 【接】けれども。然しながら。

け-どる 氣取る【動四他】㊀氣を取る。魂を奪ふ。〔古語〕源氏「なよなよとして、物も言はず、息もしはべらず。物にけどられにける人にこそ」㊁氣色を見て、さとり知る。けしきどる。心中宵庚申「半兵衛は…けどられまいと、そらとぼけ」

けど-わうじやう 化土往生【名】〔佛〕化土にうまるること。**けど**(化土)參照。

げな 【名】〔動〕**いさむし**(石鬘)を云ふ。〔關西の方言〕

げな 【助】推測の意。さうな。心中宵庚申「去られて戻らしやったげな」

け-ない 家内【名】かない(家内)に同じ。狂言「姪子大黒殿」「しめなど張り、けないを淸め」

けない-ど 氣無人【名】その樣子なき人。

けながいぬ 毛長犬【名】毛の長き犬。むらいぬ。

け-ながし け長し【形一】『**けならぶ**(け並ぶ)を見よ』時長し。久しく經たり。〔古語〕記「君がゆきけながくなりぬやまたづのむかへをゆかむまつにはまたじ」

けながき妹(モイ)【句】別れて以來、久しく經たる女。〔古語〕萬葉「よひにあひてあした面なみ名張にかけながき妹がいほりせりけむ」「殊勝。

け-なげ 健氣【貌】かひがひしきさま。神妙。

けなげだて 健氣立【名】けなげなる樣子を見せかくること。狂言「生捕鎗術」「その時賴朝、汝繩のざいにいたって、けなげだてはいらざることよ」

けなげ-もの 健氣者【名】かひがひしき人。義經記「けなげ者ならば行きて對面せん」

けなし 【名】『氣(ケ)無しの義か』たやすきこと。容易なること。

け-なし 無毛【名】毛のなきこと。

けなし-いも 毛無芋【名】〔植〕**しびとばな**(死人花)に同じ。

けなし-の-をか 毛無岡【名】〔地〕大和國にありし岡。古歌に時鳥(ホトトギス)などの名所として詠まる。萬葉「神なびのいはせのもりの時鳥けなしの岡にいつか來鳴かむ」

けなし-はぎ 毛無脛【名】鷹の、あしかはを附くるところ。

けなし-まなこな 毛無まなこな【名】〔植〕ままこなの一種。毛の無きもの。

け-なし-いも 毛無芋【名】〔植〕**しびとばな**(死人花)に同じ。

け-なし-の-をか 毛無岡【名】〔地〕大和國にありし岡。古歌に時鳥(ホトトギス)などの名所として詠まる。萬葉「神なびのいはせのもりの時鳥けなしの岡にいつか來鳴かむ」

けなし-はぎ 毛無脛【名】鷹の、あしかはを附くるところ。

けなし-まなこな 毛無まなこな【名】〔植〕ままこなの一種。毛の無きもの。

けなし-やま 毛無山【名】『け(毛)㊄を見よ』

はげやま。秀山。

けなす 【動四他】あしざまにいひくたす。いひまるること。**け**(化土)參照。

けなだらか 毛なだらか【貌】家畜を、その毛のなだらかになるやうに、何不足なく飼養するさま。曾我「一疋持ちたる馬をさへ、けなだらかに飼はず」

け-なつかし 氣懷し【形二】何となくなつかし。〔古語〕源氏「けなつかしう、心ばへをかしう、うちとけぬさまにて」「じ。

け-なひと 健人【名】**けなげもの**(健氣者)に同じ。

け-なみ 毛並【名】㊀毛のならび。毛のさま。後京極攝三百首「紅の末摘む花のけなみさへおとしかねたる夏のとやだか」㊁やうす。けいろ。「けなみの變りたる人」

げ-なん 下男【名】しもべ。下隷。奴僕。

げなん-がしら 下男頭【名】江戸幕府の職制の一。下男を指揮する役。十五俵三人扶持を給せられたり。

けなもの 健者【名】**けなげもの**(健氣者)に同じ。丹波與作「三吉そこにか。…そちは、けな者ぢや」

け-ならぶ け並ぶ【動下二他】『**けなが**し(け長し)を見よ』多くの日數をすごす。〔古語〕萬葉「馬ならいたく打ちてな行きそけならべて見てもわがゆく滋賀にあらなくに」

け-なり 褻形【名】平生の服裝。けのなり。不斷のみなり。袋雙紙「古曾部入道の、秋風ぞ吹く白河の關と詠まれたる所をば、いかで、けなりにては過ぎん」

け-なり 【貌】『次條の語の語幹』けなりくあるさま。羨しき狀。狂言「連歌毘沙門」「災難を拂ふ鉾を、汝に取らせけり。やらやら、けなりやけなりや」

け-なりい 【形一】㊀殊(ケ)なるさまなり。すぐれたり。沙石集「痩せて候へども、この犬はけなりげに候」㊁うらやまし。狂言「ぬけがら」「やれ、とのさま、身どもに、このやうにお氣をつけられまするをば、傍輩どもも、いかうけなりう思ひまする」

けなり-がる 【動四他】けなりく思ふ。うらやましがる。

け-なる 【貌】けなりに同じ。心中二枚繪草紙「こなさんは弟の身で、けなるや機嫉がよささうな禮いふことがある。ござんせと」

けなるし 【形一】うらやまし。俳諧新選「眼「樽の火にけなるき樽や馬のつら」

け-に 化尼【名】〔佛〕佛菩薩の、みづから變化(ヘンゲ)して、尼となりたるもの。權化(ゴンゲ)の比丘尼。著聞「化人(ケニン)女、忽ちに來りて、化尼に絲すでに調へりやと問ふ」

げ-に 實に【副】㊀まことに、その如く。現に思ひあたりて。源氏「僧都も、げにと、うなづきて」㊁まことに。じつに。たしかに。枕「あまりうるさくもげにあれば」

げに、まこと【句】『**げにとまことと**の重言』ほんにさうさう。(ふと思ひ出したる時などにいふ。娘歌加留多「げにまことみづからがいひ樣のわるい故」

げにや、げに【句】**げにげに**に同じ。

げに-かは 實にかは【副】**げに**(實に)に同じ。浮世床「召しあげられまして、げにかは我が口上に違はず」

げ-にくし 氣憎し【形一】何となくにくし。腹だたし。〔古語〕源氏「けにくく心づきなき山伏」

げに-げに 實實【副】**げに**(實)を重ねて、その意を强めたる語。げにやげに。枕草紙「名みの眉ひらけさせたまへば、見たてまつる人人、げにげにあはれと見たてまつる」

げにげにし 實實し【形二】うべうべしい。かにも道理らし。〔古語〕徒然「げにげにしく、ところどころうちおぼめき」

げにごし 牽牛子【名】〔植〕**あさがほ**(朝顏)㊁に同じ。〔古語〕古今「けにごし。うちつけにこしとや花の色を見んおく白露の染むるばかりを」

け-にさい 毛二才【名】年若き者を罵りいふ語。あをにさい。にさい。〔俚語〕

け-にしきぎ 毛衝矛【名】〔植〕衝矛(ニギ)の一變種。葉裏に短毛あり、花梗に一箇乃至三箇の花を著く。

け-にん 化人【名】神佛などの、假に人の形をして現るるもの。權化(ゴンゲ)の人。宇治「化人にやありけんとおもひけり」

けにん 家人【名】㊀『私家の賤民の義にて、唐制の部曲に相當す』私賤(シセン)の一。

百家の者との婚姻を禁ぜられ、又、賣買を許されざりし點は、奴婢に異なれども、その主人にして、謀反・大逆を犯す時は、沒收せられて、官戶となる定なりき。㊁朝臣又は武家に久しく仕へ來れる者。家來。家の子。郎等。家臣。家僕。家士。**ごけにん**(御家人)參照。平治「伊賀・伊勢の家人等」

げ-にん 下人 【名】㊀身分いやしきもの。㊁しもをとこ。しもをんな。東鑑「下人等引二用水一」

げ-にん 解任 【名】つかさ解けてなくなること。任じむこと。かいにん。

げ-にん 外任 【名】外官(ゲクワン)に任ずること。外任の奏(ソウ) 【句】中古、元日・白馬(アヲウマ)・踏歌等の節會(セチエ)に、諸國司の未だ任符を賜はらざる者、任符を賜はりながら未だ赴任せざる者、又は近國の國司の入京せし者などの姓名を錄して、その日の節會に與らしめんことを、外記(ゲキ)より奏請すること。

げ-にん-だい 下人代 【名】下人の代理。今國姓爺「總領の朱貴一が下人代する强力者」

げ-にん-なみ 下人並 【名】下人と同樣なる待遇。

げ-にん-ぶん 下人分 【名】召仕たる身分。下人の身分。薩摩歌「その方へ出入衆公下人分の事介、今日より元の菱川源五兵衛」

げ-に-も 實にも 【副】**げ-に**(實に)に同じ。玉葉「げにもその心の程やみえくらん夢にもつらき氣色なりつる」

げ-に-も-はれ-に-も 褻にも晴にも 【句】**け**(褻)の條下を見よ。

げ-に-や 實にや 【副】**げ-に**(實に)に同じ。玉葉「げにやさぞ西に心は急がるる傾く月を今はをしまじ」

げ-に-やう 假寧 【名】『假は休暇、寧は歸寧の義』古、六日ごとに、官吏に賜はりし休暇。かねい。〔古語〕

け-によ 化女 【名】〔佛〕女の化人。化現したる女。權化(ゴン)の女。著聞「かの絲をこの化女に授けたまふ」

けぬ 毛野 【名】〔地〕『毛は草木の義とも、又、食(ケ)にて、御食(ケ)を產する野の義とも いふ』上野・下野兩國の古稱。仁德天皇の御代に、兩國に分ち、上毛野・下毛野と書きしが、元明天皇の御代に、國名を二字と定められしより、毛の字を省きしなれど、後世、兩國を併稱して兩毛といふことあり。古、上毛野(カミツケヌ)・下毛野(シモツケヌ)の兩氏、この地に繁衍せり。

けぬが-は 毛野川 【名】〔地〕きぬがは(鬼怒川)の舊稱。

け-ぬき 毛拔・鑷子 【名】㊀毛を拔く具。金屬にて作り、はさみの如く、頭のくひあふやうにしたるもの。 草物よく拔くる、しろがねのけぬき」㊁**けぬきだんじやう**(毛拔彈正)の略。

けぬき-あはせ 毛拔合・鑷合 【名】㊀『毛拔の頭をくひあはせたるがごとき形にする意』密接に合はすること。 琉球裝束毛、琉球裝を、毛拔あはせに敷詰め」㊁裁縫にて、布片(ヘン)を縫合はせて折る時、その折目と縫目との一致するやうにすること。㊂紙の折目を重ぬる時、雙方の正しく揃ふやうにすること。

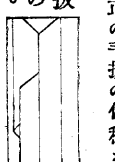
けぬき-おや 毛拔親 【名】童女の成人の式を行ふ時に、眉拔をする人。

けぬきがた-の-たち 毛拔形太刀 【名】「蒔繪の野太刀(ヂタチ)」に同じ。

けぬきがね 毛拔金 【名】昔の鐵砲の附屬具。一部分に附きたるもの。

けぬき-だんじやう 鑷彈正 【名】歌舞伎十八番の一。本外題は「雷不動北山櫻(ナルカミフドウキタヤマザクラ)」粂寺(クメデラ)彈正の毛拔の仕種を演ずるもの。けぬき。

けぬき-づつみ 毛拔包 【名】包の包方の一。下の圖を見よ。


(毛拔包)

けぬき-をんな 毛拔女 【名】わたりめかけ(渡妾)に同じ。〔元祿時代の語〕

け-ぬくし 氣溫し 【形一】何となくぬくし。ぼかぼかと暖かし。〔古語〕 相模集「下氷けぬくくならばうちとけん何のつらら か今はあるべき」

け-ぬるし 微溫し 【形】『けは發語』ぬるし(溫し)に同じ。〔古語〕 東乙女集「こち風もいぬるくなればわが宿のうめの匂をりをりぞみる」

げ-ねつ 解熱 【名】體熱をさますこと。ねつさまし。

げ-ねつ-ざい 解熱劑 【名】解熱のために用ふる藥劑。ねつさまし。げねつやく。

げ-ねつ-やく 解熱藥 【名】前條に同じ。

け-ねん 繫念・係念・懸念・掛念 【名】㊀〔佛〕念を一處に繫けて、他を思はぬこと。執念。執著。㊁しんぱい。きがかり。こころがかり。

けねん-むりやうこう 繫念無量劫(ムリヤウコフ) 【句】〔佛〕『大智度論に「一念五百生、繫念無量劫」とあり』もし繫著の念を生ずる時は、恩・怨共に無量劫の久しきに亙りて、受報の因となること。 盛衰記「後の世には、繫念無量劫とかやの罪をも免れたまへかし」

げ-ねんぶつ 夏念佛 【名】〔佛〕夏籠(ゲコモリ)して念佛すること。 狹衣「手まはしに朝の間涼し夏念佛」

け-の-あらき-もの 毛の麁き物 【句】**け**(毛)の條下を見よ。

け-の-あらもの 毛の麁物 【句】**け**(毛)の條下を見よ。

け-の-く 蹴退く 【動下二他】蹴ってのかす。蹴って移動せしむ。「よ。

け-の-くつ 毛の靴 【句】**け**(毛)の條下を見よ。

け-の-ごしよ 褻の御所 【句】**け**(褻)の條下を見よ。

け-の-こり 消殘 【名】けのこりたること、又その物。古語「萬葉「けのこりの雪にあへ照る足曳の山橘をつとに摘み來な」

け-の-こる 消殘る 【動四自】きえのこる(消殘る)㊀の約。〔古語〕 萬葉「この雪のけのこる時にいざゆかなやまたちばなのみのてるも見む」

け-の-にごきもの 毛の柔き物 【句】**け**(毛)の條下を見よ。

け-の-にごもの 毛の柔物 【句】**け**(毛)の條下を見よ。

け-の-ぼる 氣上る 【動四自】**けあがる**(氣上る)に同じ。『見よ。

け-の-むしろ 毛の席 【句】**け**(毛)の條下を見よ。

け-の-めす 蹴踏す 【動四他】蹴ってのめらし む。「よ。

け-の-ゆか 毛の床 【句】**け**(毛)の條下を見よ。

け-ば 毛羽・毳 【名】㊀布紙などの揉(モ)めなどして、その面にこまかく立つ、毛のごときもの。けばけば。「紙のけば」㊁地圖にて、山形及び傾斜を示すに用ふる細線。その粗密によりて、緩急の別を示す。

げ-ば 下馬 【名】㊀下等なる馬。(上馬に對して)㊁馬より下(オ)ること。又、乘打(ノリウチ)を禁ずること。下乘。 頓城酒呑童子「三公だに下馬する作法」㊂**げばさき**(下馬先)に同じ。 頓城島原蛙合戰「下馬に乘馬をつないだは、旋下・大名の參りか」

げばい 下輩 【名】㊀身分のかろきともがら。いやしきもの。げす。かはい。(上輩に對して)㊁自分より身分低き者。めした。かはい。(上輩に對して)

げ-ばうき 毛箒 【名】鳥の毛を束ねてこしらへたる箒。

げ-ばうし 毛帽子 【名】毛を植ゑつけたる帽子。毛のあるものにて、造りたる帽子。

げ-ばうず 毛坊主 【名】貴飛驒國の山中にありて、平素は農樵に從事し、死人ありたる場合に、葬式に頼まれし者。剃髮せずして、常の百姓よりは、身分劣りたるものとして扱はれ、本尊は多く大津繪の十三佛なりといふ。

げ-ばうり 下馬賞 【名】昔、商人が、江戶城の下馬先にて、物を賣りしこと、又その商人。「し。

けはえ-ぎは 毛生際 【名】**げぎは**(毛際)に同

けはえ-ぐすり 毛生藥 【名】毛を生ぜしむるために附くる藥。

げば-おとし 下馬落 【名】主人の他出の時、供に立つ槍持の、玄關先にて、立てたる槍を橫たへ、穗先を主人の右の方へさし出して檢閱を乞ひ、主人、鞘をはづし、改め見て、槍持といふ時、持上げて、押立てて持つこと。

げ-ばく 繫縛 【名】〔佛〕煩惱(ナウ)又は佛力などのために、自由を奪はるること。 謠曲

(飛雲)「鬼神の通力、たちまちに、明王の縶縛にかかると見えしが」

げ-はく 下白【名】白米の下等なるもの。(上白に對して)

けば-けば 毛羽毛羽・毳毳【名】一けば(毛羽)に同じ。二けばけばしきこと。

けば-けばし 毛羽毛羽し・毳毳し【形二】目立ちてあり。きはやかなり。きはぎはし。炭俵(孤屋)「鍋蓋のけばけばしさよ年の暮」

けばけばだつ 毛羽毛羽立つ・毳毳立つ【動四自】けばだつ(毛羽立つ)に同じ。

け-ばこ 食箱・餉筥【名】托鉢僧の、米を盛るために、首にかけなどする箱。

けば-さき 下馬先【名】下馬すべき場所のあたり、又、下馬札の立てるところ。本朝三國志「下馬先・供さき・玄關前」

けはし 險し・嶮し【形二】一道路危し。險阻なり。源氏「道のほどはるけく、けはしき山道のありさまを見たまふにぞ」二荒し。はげし。山家「磯にをる浪のけはしく見ゆるかな沖になごろや高くなるらん」孕常盤「いつにないけはしい聲、何事かはと出でければ」三人の心ばへするどし。とんとんとん」謡入鹿桂歷「門の戸けはしく、はげし。きつし。【徳川時代の語】春花五大力「亭主のけっこうに、女房のけはしいは、當世のはやりものでござる」四せはし。いそがし。狂言(粟田口)「汝は都へ參り、急いで求めてこい。長ってござる。急げ。はあ、さてもさてもけはしい事を云ひつけられて御座る」

げば-しやうぐん 下馬將軍【名】(人)さかねだきよ(酒井忠清)の異稱。

げば-しゆう 下馬衆【名】室町幕府時代に吉良(ケラ)・澁河・石橋の三家の稱。

けば-すずめ 下馬雀【名】下馬評をなすこと、又その人。

けば-だち 毛羽立・毳立【名】(人)さかねだきよ(酒井忠清)の異稱。

けば-だつ 毛羽立つ・毳立つ【動四自】毳が生ず。けばけばだつ。

け-はづす 蹴外す【動四他】蹴んとして、ねらひを外す。けそこなふ。宇治「目をかけて、背を撓めて、ちがひければ、蹴はづして」

け-ばな 毛花【名】鷹狩にて、鳥の毛の花のごとく散ること。(古語)

げ-ばな 夏花【名】(佛)夏安居(ゲアン)の時、佛に供ふる花。一茎「夕影や鴛(オシ)の小脇の夏花持」

け-はなし 蹴放【名】一蹴放すこと。二溝なくして、坂外すことを得る國(シキ)。門の下などに、內外の仕切とするに用ふ。三和船の艫床(トコ)の一部。けあげ。

け-はなす 蹴放す【動四他】蹴って、戸などをあく。蹴てはなす。「同じ。

げば-はい 下馬牌【名】げばふだ(下馬札)に同じ。

けはひ 化粧【名】けしやう。おつくり。井簡業牢河內通「鏡でも、ろくに目が見えぬ、けはひ頼むと、白粉とき、差出せば」

けはひ-がしは 化粧柏【名】檜筥の類なりといふ。(古語)

けはひ-がね 化粧金【名】物を裝飾するために用ふる金具。けしやうがね。甲銅。

けはひ-ざか 假粧坂・氣生坂【名】(地)相模國鎌倉の西部にありて、扇谷(オウギヤツ)よりの出口に當る。鎌倉七口の一。

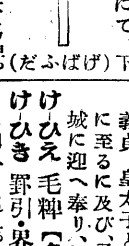
けはひ-づく【名】樣子にあらはる。少し外部にあらはる。(古語)「御年廿三四ばかりにおはしませば、さかりにめでたく、髪なども、少しけはひづかせ給へる」

けはひ-でん 化粧殿【名】化粧をなす御殿。

けはひ-でん 化粧田【名】けしやうだ(化粧田)に同じ。

げば ひやう 下馬評【名】一徳川時代に、江戸城の下馬札の立てる附近にて、下下の者が、將軍などを批評せしこと。二轉じて、門外者の批評。しろうとひやう。

げば-ふだ 下馬札【名】社寺等の境內のごとき神聖なる處に建てて、その處にて、下馬すべきことを示す札。下馬又は下乘の二字を書す。下馬牌。



(だふばげ)

俳諧新選(丹波西條社中)「下馬札の奥しづかなる柳かな」

け-ばん 罫版【名】罫をほりたる版木。

けばや【貌】けばけばしくきはだつさま。けざやか。はでやか。盛衰記「義忠が裝束けばやに見ゆ」

けば-やき 毛羽燒・毳燒【名】絲又は布の毳を燒きて、表面を滑かならしむること。瓦斯絲(イト)は、即ちこの工程を經たる木綿絲なり。

けばらかす 蹴ばらかす【動四他】蹴ひろぐ。けちらす。百合若大臣野守鏡「弓箭(ユミヤ)を振立て、堅庭を踏んで、淡雪の如く蹴ばらかし、日本振袖始「袴の裾けばらかし、禮儀を頽して責めかくる」

け-はらひ 毛拂【名】木に硬き獸の毛を植ゑつけたる刷毛(ケ)又は箒。衣服などの塵を拂ふに用ふ。

け-はらふ 蹴拂ふ【動四他】蹴て逐拂ふ。

け-ばり 毛鍼【名】鍼術にて、治療に用ふる鍼の、最も細きもの。その上に、一番・二番・三番ありて、順次に太くなる。

けばり-ねずみ 毛針鼠【名】(動)はりねずみ(針鼠)に同じ。

け-はれ 褻晴【名】褻(ケ)の時と晴(ハレ)の時と。(古語)「徒然「ことにうちとけぬべき折節、けはれなく引きつくろはまほし」

け-び【名】けぶ(希有)の訛。ふしぎ。奇妙。豐後國の方言)

げ-び 下卑【名】一下劣にして卑しきこと。げすばりてあること。げびたること。壽門松「代りには、以前の小判貰ひましたと、取る手を、母がはったと打ち…下卑た奴めと叱られて」二遠ざけたきこと。

けひ-うぢはる 氣比氏治【名】(人)勤王家。越前國の人。氣比神社の大宮司。城を敦賀に築きて、官軍の聲援をなし、後、新田義貞、皇太子と尊良親王とを奉じて、敦賀に至るに及び、子齊晴(ハル)と共に金崎(カナサキ)城に迎へ奉り、城陷りて、親王に殉ず。

け-ひえ 毛粋【名】(植)ひえ(粋)に同じ。

け-ひき 罫引・界引【名】工匠の罫を引くに用ふる道具。鋸の小さきもの。

け-びき 罫引【名】紙などに罫を引くこと、又その引きたるもの。

け-びき 毛引【名】鎧の縅(ドウ)し方の一。絲目をこまかにして、小札(コサネ)を綴ること。

けひき-がみ 罫引紙【名】罫を引きたる紙。けいし。

けひき-をどし 毛引縅【名】毛引にしたる鎧の縅。

げび-さう 下卑藏【名】『藏は、人名のごとく言ひなすために添へたる語』げびたる者を卑しめていふ語。げびすけ。富士之人穴見物「おはぐろを附けてしまったら、何ぞ下卑藏をしいしやう」

けひ-じんぐう 氣比神宮【名】越前國敦賀(ツルガ)郡敦賀町大字曙に鎭坐せる官幣大社。もと當國の一の宮。祭神は伊奢沙別(イササワケ)命・仲哀天皇・神功皇后・應神天皇・豐姬命・武內(タケシウチ)宿禰。

けひ-じんじや 氣比神社【名】羽前國西田川郡豐浦(トヨラ)村三瀨に鎭坐せる縣社。祭神は氣比神宮に同じ。

げび-すけ 下卑助【名】げびざう(下卑藏)に同じ。會我虎が塵「さっても、げびたるげびすけかな」

けひ-づくり 氣比造【名】(建)神社の建築式の一。氣比神宮の本殿の如き、これなり。

げ-びと 食人【名】死人の鬘前に供ふる食物を取扱ふ人。(古語)記「翠鳥(ソニ)を、御食人(ヒトビト)とし」

けひ-のうら 氣比浦【名】(地)越前國敦賀の別稱。

けひん 【名】(動)アラビヤ馬の一種。

けびん 闕賓【名】(地)けいひん(闕賓)に同じ。

けびん 《英Cabin》【名】一軍艦內にある、艦隊司令官・參謀長・艦長等の公務を處理する所。二汽船の上等室。船室。きやびん。

げ-ひん 下品【名】㊀下等の品がら。品がらの劣れること。㊁下等なる品格。(上品に對して)

け-ひやう 華瓶・花瓶【名】佛具の一。花を佛前に供ふるに用ふる口窄(せば)く、腹大なる瓶。

け-びやう 假病【名】病といつはることに。せやまひ。さくびやう。虚病。

假病、脈を作らず【句】いつはりは隱しきれぬ證跡を殘す。〔諺語〕

げびる 下卑る【動上一自】下等になる。品格いやしく見ゆ。〔十訓〕「おほやけの御前にて、ふぐりあぶらんなど候はんこと、むげにげびて懼れや候はんずらん」

けびて(サイク)も息災【句】品格いやしくとも、達者なるがよし。〔諺語〕

けびゐし 檢非違使【名】㊀古、京中の非法・非違を檢察せし官職。嵯峨天皇の時、始めて置かれ、祭祀・法會などの場に臨み、又は道路・橋梁を巡視し、又は糺彈・追捕・斷罪・聽訟等の事をも掌りしもの。令外(リヤウゲ)の官の一。令制の刑部省・衞府・彈正臺・左右京職等、効果を擧ぐる能はざるに至りて、設置せられしなり。**げびゐしちやう**(檢非違使廳)參照。其「むしろばりの車のおそひ、けびゐしのはかま」㊁古、國郡又は伊勢神宮・鹿島神宮などに置かれ、國司に屬して、檢察・追捕を掌りし職。文德實錄「大和國檢非違使正六位上伊勢朝臣諸繼」

けびゐし-しよ 檢非違使所【名】**けびゐしどころ**(檢非違使所)に同じ。

けびゐし-ちやう 檢非違使廳【名】檢非違使㊀の政務を行ふ所。古くは左右衞門府内に在り、寛平七年左右檢非違使廳設けられ、天曆元年右廳は廢せられたり。別當・佐(スケ)・尉(ジヨウ)・志(サカン)・看督長(カドノヲサ)・案主長(アンジユノヲサ)・放免・下部(シモベ)等の職員を置かれ、佐以下は、兵衞・衞門兩府の官人をして兼任せしむる例なりき。使廳(シチヤウ)。靱負廳(ユケヒチヤウ)。

檢非違使廳の下文(クダシブミ)【句】**ちやうせん**(廳宣)㊀を見よ。

けびゐし-どころ 檢非違使所【名】檢非違使㊀の役所。けびゐどころ。

けびゐし-の-じよう 檢非違使尉【名】檢非違使廳の被官。左大尉・右大尉・左小尉・右小尉の總稱。**はうぐわん**(判官)參照。

けびゐし-の-べっとう 檢非違使別當【名】檢非違使廳の長官。宣旨によりて補せられ、參議以上の器に堪へたる者にて、兵衞督たる者を任ずる例なりき。大理別當。大理卿。平家「中納言經房の卿檢非違使の別當左衞門督實家兩人、院の殿上のすのこに候ひて」

けびゐし-どころ 檢非違所【名】**けびゐどころ**(檢非違使所)に同じ。東鑑「給二安藝國檢非違所井庄公一」

けふ 今日【名】この日。今の日。こんにち。こんにつた。(きのふ・あす等に對して)

今日明日(アス)【句】今日又は明日。今日と明日と。源氏「けふあす歸りなんと」

今日明日に【句】今日か明日かのうちに。二三日のうちに。天の網島「すぐに、その大盡が、けふあすに詰けだすとのとりざた」

今日あって明日(アス)ない身【句】人生の無常なるをいふ。〔諺語〕

今日か明日(アス)か【句】心に待つさま。萬葉「たくぶすましらぎへいます君がめをけふかあすかといはひてまたむ」

今日が日【句】今日といふ日。「けふが日まで知らなんだ」

今日今日【句】今日か今日か。けふこそはけふこそは。けふやけふや。萬葉「けふけふとわが待つ君はいしかはのかひにまじりてありといはずやも」

今日この頃【句】このごろ。近頃。昨今。

今日しもあれ【句】今日に限りて。今日も今日とて。後拾遺「女郎花おほかる野べに今日しもあれうしろめたくも思ひやるかな」

今日こいふ今日【句】今日を强めていふ語。けふこそ。國姓爺合戰「毎日毎日時を違へず變った風俗、今日といふ今日、跡を暮うて見付けしが」

今日の朝(アシ)【句】けさ。今朝。萬葉「玉ゆらにきのふの夕見しものをけふのあしたに戀ふべきものか」

今日の今【句】たった今。現在。

今日の今朝(ケサ)【句】「今日の朝(アシ)」に同じ。落葉「老の世に戀もし知らぬ人はさぞ今日のけさをも思ひわかれじ」

今日の今宵(コヨヒ)【句】特に今夜。今夕。新古今「花にあかぬ歎はいつもせしかども今日の今宵に似る時はなし」

今日の月【句】〔文〕「月今宵(コヨヒ)」に同じ。芭蕉「三井寺の門叩かばや今日の月」

今日の日【句】この今日。萬葉「日くれなば人知りぬべしけふの日のちとせのごともありこせぬかも」

今日の昔【句】過去に出來事のありたる日にあたる今日。昔の今日。玉葉「ねをそへて猶こそしのべあやめ草忘れぬつまの今日の昔を」

今日の情(ケサ)は明日(アス)の仇【句】人情の反覆さだめがたきこと。〔諺語〕

今日の後に、今日は無し【句】一度過ぎたる日は再びかへらず。〔諺語〕

今日は人の上、明日(アス)は我が身の上【句】「昨日(キノフ)は人の上、今日は我が身の上に同じ。〔諺語〕

今日や今日や【句】「今日今日」に同じ。

けふ 希婦・狹布【名】㊀〔地〕陸奥國にあり。六帖「大空に渡るちどりのわれならばけふのわたりをいかになかまし」曲鉢木「袖せばき細布、みちのくのけふの裏さをいかにせん」㊁「希婦の細布」に同じ。散木「卯の花の垣根なりけり山がつのはつきにさらすけふとみつれば」

希婦が細布(ホソヌノ)【句】次條に同じ。

希婦が細布(ホソヌノ)【句】次條に同じ。曲檜垣「心ぞつらき、陸奥(ミチノク)の希婦が細布胸合はず」

希婦の狹布(サノ)【句】次條に同じ。夫木「思へただけふのさぬのの廉ごろもきてもあひ見ぬ胸の苦しさ」

希婦の狹布(サノ)【句】次條に同じ。夫木「石ぶみのけふのせ布はつつにあひ見てもなほあかぬ今朝かな」

希婦の細布(ホソヌノ)【句】古、陸奥國希婦の地より出し、白くして幅の狹き布。一說には、鳥の毛にて織りたるものといふ。希婦が細布。希婦の狹布。拾遺「錦木は立てながらこそ朽ちにけれけふのほそ布胸あはじとや」

けふ 莢【名】〔植〕さや(莢)に同じ。

けふ 烟・煙【名】㊀けぶり(烟)の略。㊁物事の跡形なくなること。

けふ 希有【名】合點のゆかぬこと。不思議。彦山權現誓助劍「とんと譯が知れぬ。今日ほどけふな日はない。見ず知らずのわろ達が、いや、親にならうの、かかやのと」

げふ 【名】おくび。げっぷ。

げふ 業【名】㊀學問。技藝。㊁わざ。しわざ。生業。㊂つとめ。なりはひ。すぎはひ。職業。

業を創め、統を垂る【句】『孟子の梁惠王下篇に「君子創レ業垂レ統爲レ可レ繼也」とあるに本づく』まづ基業をつくりて、後世に、統緒を垂る。

げふ 鄴【名】〔地〕支那三國の時の魏の都。今の河南省彰德府臨漳縣の西なる鄴鎭の地。城は齊の桓公の築きしもの。「鄴下の七子」參照。

げふ 解部【名】さきべ(解部)に同じ。

げふ 下部【名】腰より下のかた。かぶ。

げふあい 狹隘・峽隘【名】せまくして、くつろぎなきこと。せまくるしきこと。

げふあす 今日明日【句】**けふ**(今日)の條下を見よ。

げふう 峽雨【名】『峽の字の音、正しくは**かふ**』山と山との間に降る雨。谷間の雨。

げふえん 峽烟・峽煙【名】『峽の字の音、正しくは**かふ**』山あひに立つ烟。谷間の烟。

げふおん 協音【名】〔音〕**けふわをん**(協和音)に同じ。

げふおんてい 協音程【名】〔音〕**けふわおんてい**(協和音程)に同じ。

げふか 毛深【名】『毛深しの語幹』毛の多きこと。又そのもの。

げふか 鄴下【名】〔地〕『下は、府下・縣下などの下なり』支那三國の時の魏の都な

る鄴の地。鄴中。

鄴下の七子【句】〔文〕支那魏の代の七人の詩人、即ち孔融・陳琳・王粲・徐幹・阮瑀・應瑒・劉楨。文帝(曹丕)の即位以前、五官將軍たりし時、これを中心として集りたる人なり。建安の七子。鄴中七子。

けふかい・けいやく 協調契約【名】〔法〕『英Composition』破産者又は破産者のために參加したる者と、債權者との間に締結する一種の和解。破産手續より生ずる無益の費用と時間とを省き、且つ破産者の回復に便ならしむるために、一定の時期以内に、破産者より相當の辨償方法を提供し、債權者の多數これを承諾せし場合に、裁判所がこれを審査・認可して、その方法に依らしむること。強制和議。

けふかう 俠行【名】をとこだての行。をとこぎの仕方。

けふかう 峽江【名】〔地〕『峽の字の音、正しくはかふ』細長き入江の、兩岸多くは急傾斜をなし、灣内の水深きもの。ノルウェエの海岸に列なれる數多の港灣は、大抵これに屬す。峽灣。

けふかう 狹巷【名】せまきちまた。ろぢ。

けふかく 夾角【名】〔數〕『英Included angle 又は Contained angle』二つの直線又は二つの弧の間に挾まれたる角。「じ。

けふかく 脅嚇【名】きょうかつ(恐喝)に同

けふかく 俠客【名】をとこぎの人。をとこだて。

けふかし 氣深し【形ク】けはひふかし。こころぶかし。〔古語〕大貳典「たなばたに心寄せけるけふかさは渡りもしなんかささぎのはし」

けふかし 毛深し【形ク】毛多く生えてあり。拾芥「東路の毛ぶかき馬にくつかけて我がむかはぎもおほれがちなる」毛深い者は色深い【句】身體に毛の多きものは、婬念多し。〔諺語〕

けふかふ 協洽【名】『爾雅に「大歲…在レ未曰二協洽一」とあり』未(ヒツジ)の歲の異稱。

けふがふ 協合【名】**けふわ**(協和)に同じ。

けふかん 峽間【名】『峽の字の音、正しくはかふ』たにあひ。はざま。たにまかひ。

けぶがる 烟がる・煙がる【動四自】けぶく思ふ。けぶたがる。

けふき 狹軌【名】『英Narrow gauge』汽車の軌道の、標準軌隔より狹きもの。歐・米にては八呎六吋以下、我が國にては三呎六吋。(廣軌に對して)「俠心。

けふき 俠氣【名】男だての心。をとこぎ。

けふぎ 協議【名】きょうだん。ひやうぎ。

けふぎ 狹義【名】意義の範圍を制限して、狹くせるもの。せまき意味。(廣義に對して)「狹義に解す」

けふぎあん 協議案【名】協議に付すべき議案、また協議によりて成立せる案。

けふきぐさ 毛吹草【名】〔書〕俳諧の節用。七卷。松江重頼の著。正保二年の刊行。

けふぎくわい 協議會【名】協議するために開く會合。

けふきしき 狹軌式【名】きかく(軌隔)を見よ。(廣軌式に對して)

けふきてつだう 狹軌鐵道【名】狹軌により敷設したる鐵道。(廣軌鐵道に對して)

けふぎひ 協議費【名】協議のための費用。

けふきん 頰筋【名】〔醫〕頰部を形成し、齒槽に向ひて壓迫し、口裂を閉鎖する作用をなす筋。「と。

けふきょう 協恭【名】恭敬にして和ぐこと。

けふぎゐん 協議委員【名】協議するために選任せる委員。協議員。

けふぎゐん 協議員【名】前條に同じ。

けふくなら 【名】『毛ふくれ實の義なりといふ』男の陰部。男陰。〔古語〕催馬樂「くぼの名をば、何とかいふ、つびたり、けふくなうたもろ、ひのなかの、ひつきめな、けふくなうたもろ」

けふくむ 【動四自】毛深く覆ふ。〔古語〕名義抄「氈 ケブクム・フクダム・ケフクダム」

けふくわ 莢果【名】〔植〕『羅Legumen』乾燥果の一種。莢(サヤ)を以て被はるるもの。豌豆・大豆等の萱科の植物に多く、概ね多種子なれど、萩においては單種子なり。

けふくわい 協和【名】**けふわ**(協和)に同じ。

けふくわい 協會【名】會員の協力して設立維持する會。

けぶくわん 外武官【名】中古に於ける軍團の大毅・小毅などの稱。(內武官に對して)

けふげき 挾撃・夾撃【名】敵を、兩方よりはさみて擊つこと。はさみうち。挾攻。

けふけち 夾纈【名】かうけち(交纈)に同じ。

けふ・げふ 業業【貌】あやぶみ懼るるさま。

けふげふし 業業し【形シク】ぎょうぎょうし(仰仰し)を見よ。大鏡虎雜物語「むむ、本田殿か、業業し」「に同じ。

けふこう 挾攻・夾攻【名】**けふげき**(挾撃)

けふこく 峽谷【名】〔地〕『英Canyon 又Ravine 峽の字の音、正しくはかふ』兩方の崖の相接近して、けはしき谷。成因は流水・氷河等の侵蝕、又は斷層作用による。

けふこつ 俠骨【名】俠氣の心だて。氣骨。

けふごとに 今日毎に【副】その日ごとに。日日に。新古今「今日毎に今日やかぎりと思へども又も今年にあひにけるかな」

けふさく 狹窄【名】間のすぼまりて、せまきこと。

けふさく・しゃげき 狹窄射撃【名】〔兵〕小銃射撃の方法の一。少量の火藥を用ひ、近距離より、特製の實彈を以て發射すること。照準の規則、射撃の姿勢、殊に引金の引方を教習し、なほ射撃の熟練を維持するために行ふものにて、標的も、十分一または五分一に縮少したるものを用ふ。「雜。

けふざつ・ぶつ 夾雜【名】入りまじること。混

けふざつぶつ 夾雜物【名】入りまじりたる物。まざりもの。

けふさん 夾竿【名】卷物・書物などに插みおきて、檢出用又は讀みかけのしるしとするもの。木又は竹を、薄く、長さ三寸、廣さ五分ほどに削り、頭部を薄く二片に割り、その一片を短く切り、割れどまりの處を、裂けざるやうに、絲又は、紙捻(ヒネリ)にて纏ひたるもの。後世の栞(シヲリ)は、この遺制なり。枕御さうしに、けふさんして、みとのごもりぬるも、いとめでたしかし」

けふさん 協贊【名】同意して、共に力をつくすこと。協議・襄贊。「議會の協贊を經て」

けふさん 〔法〕帝國議會が、法律案又は豫算案に對して議決すること。この手續を經ざるものは、法律としての効力なし。

けふさん・けん 協贊權【名】〔法〕憲法の明文によりて、帝國議會が有する協贊の權限。

けふし 篋笥【名】はこ。たんす。けふ。

けふし 挾屍【名】馬の背の脇にある旋毛。

けふじ 夾侍【名】■左右にはべること。又その人。■〔佛〕次條に同じ。稱迦如來說生寶、忝くも釋尊は、目連・舍利弗・ふるな尊者を夾侍として、槃特沙彌は御鉢の役」

けふじ 脇士・夾侍・脇侍・脇仕【名】〔佛〕『士は大士(即ち菩薩の譯語)の義』佛・菩薩又は明王の左右兩脇に立つ菩薩。即ち不動の制吒迦(セイタカ)・毘羯羅(コンガラ)、彌陀の觀音・勢至、藥師の日光(ニッコウ)・月光(ガッコウ)、釋迦の文殊(モンジュ)・普賢(フゲン)などの類。小乘によれば迦葉(カセフ)・阿難を釋迦の脇士とす。わきだち。わいだち。わきし。挾持。盛衰記「八幡之本地者、觀音本師阿彌陀也、白山御體者、彌陀脇士觀世音也」

けふじ 脇士の菩薩【句】〔佛〕前條に同じ。源氏「阿彌陀佛・けふじの菩薩、おのおのびやくだんして、造り奉りたる」

けふし 烟し・煙し【形シク】**けぶたし**(烟たし)■に同じ。

けふしぐろ 毛節黑【名】〔植〕石竹(セキチク)科に屬する多年生の草。山地に自生す。高さ二三尺、分枝せず。葉は全緣、廣披針形、莖・葉共に帶紫紅色にして、毛茸(ヨウジュ)密生し、夏季、上部の葉腋に、白色の小花を開く。

けふしつ 夾室【名】大なる室の兩傍にある副室。

けふしん 俠心【名】**けふき**(俠氣)に同じ。

けふしん 協心【名】心を合はすること。協力同心。「う。

けふしん 劫心【名】怯懦なる心。おくびやう。

けふしゃ 狹斜【名】『古樂府に「長安有二狹斜一道狹不レ容レ車」とありて、もと支那長安の娼婦の巢窟たりし處』花柳の巷。いろざと。いろまち。遊里。

狹斜の巷(チマタ)【句】前條に同じ。

けふしゃ 俠者【名】俠氣ある人。だてしゃ。

けふしやう 協商【名】Ⅰ協議して、とりはからふこと。Ⅱ〔法〕けふやく(協約)に同じ。「日露協商」

けふじやく 怯弱【名】けふだ 怯懦に同じ。

けふしゆ 業主【名】〔法〕業主權を有する者。「じ。

けふじゆう 脅從【名】けふしよう(協從)に同じ。

けふしゆけん 業主權【名】〔法〕臺灣に於ける一種の物權。內地の土地所有權に似て、一種の負擔を伴ふ者。即ちその土地を使用し、收益を處分することを得れども、大租權者に對して、大租又は地基租を收むる義務あるもの。

けふしよ 挾書【名】『禦雅繹言に、挾は藏の意とあり』書籍を貯ふること。

挾書の禁【句】次條に同じ。

挾書の律【句】支那にて、秦の始皇帝の時、民間に書籍を貯ふるを禁じ、もし竊にこれを藏する者あれば、これを坑せしこと。漢の惠帝四年に、これを解けり。

挾書の禁。

けふしやう 夾鐘【名】Ⅰ十二律の一。二月に相當するもの。Ⅱ陰曆二月の異稱。

けふしよう 脅從【名】おびやかされて惡人に從ふこと。けふじゆう。「棋」に同じ。

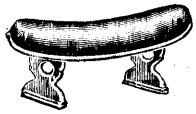
けふしよく 夾食【名】はさみしやうぎ(挾將棋)

けふーせう 狹小【名】せまくちひさきこと。(廣大に對して)

けふせーばり 毛伏張【名】布帛の毳(ケバ)を伏するために、薄く葛糊を施して張ること。專ら白絹物に應用せられ、乾きたる後、槌にて打ちて軟ぐ。

けふせんせい 協線性【名】〔數〕『英Collinearity』三つ以上の點が、一直線上に在ること。けふてんせい(協點性)參照。

けふそく 脇息【名】座側におき、體をよせ、臂をかけて、もたれかかる具。形は小さき机の如し。おしまづき。ひぢかけ。おさへ。源氏「けふそくによりおはす。いと安らかなる御ふるまひなりや」



(くそふけ)

けふそく 脅息【名】懼るるあまりに、氣を斂めて呼吸すること。

けふだ 怯懦【名】臆病にて、決斷する心の乏しきこと。意志の弱きこと。怯弱。

げふたい 業體【名】げふてい(業體)に同じ。

けふだう 脇堂【名】『脇堂に住する故に名づく』鶴岡八幡宮寺の社僧の名。雜務を掌ふ。

けふたーがる 烟たがる・煙たがる【動四、自】けふたく思ふ。けむたがる。

けふたし 烟たし・煙たし【形ク】Ⅰけぶりのために、苦しく感ず。甚だけぶし。けむたし。けぶりたし。和名鈔、俗語云二介布太之一烟氣也」Ⅱ氣づまりなり。氣がねなり。けむたし。源氏「宮いと苦しき判者にもあたりて侍るかな、いとけぶたしやとなやみ給ふ」(枕草子「わしをけぶたさうにして、そなたの文を燒いて捨ておつたて」の略。

けぶだし 烟出・煙出【名】けぶりだし(烟出)

けふだんじ 俠男兒【名】俠氣ある男子。

けふたんそう 夾炭層・挾炭層【名】〔地〕『英Productive coal measure』古生代の石炭紀中、最も新しき地層。主として砂岩・頁岩・石炭等より成る。歐洲の石炭は、大抵この層より採掘す。

けふぢ 挾持【名】Ⅰ傍より扶け支ふること。Ⅱ〔佛〕けふじ(脇士)に同じ。「じ。

けふちくさう 夾竹草【名】〔植〕次條に同じ。

けふちくたう 夾竹桃【名】〔植〕夾竹桃科に屬する常綠灌木。原產地は東印度。高さ一丈內外に達し、葉は全緣・革質の披針形にして、三葉づつ輪生す。花は白色又は淡紅色にして、夏季開き、我が國暖地に觀賞用として栽培せらるれども、有毒なり。けふちくさう。

けふちくたうくわ 夾竹桃科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門・合瓣花區の一科。多年生草本・灌木・喬木等あり。廣く世界に分布し、殊に熱帶地方に產し、有毒のもの多し。夾竹桃・絡石(ティカカ)等、これに屬す。

けふちやう 狹長【名】せまくして長きこと。細長。

けふちゆう 峽中【名】『峽の字の音、正しくはかふ』Ⅰ山のはざまのなか。たにあひ。Ⅱ〔地〕甲斐國の中部、即ち甲府の雅稱。

けふちゆう 篋中【名】はこの中。廣襄。

げふちゆう 鄰中【名】〔地〕げふか(鄰下)に同じ。

けふちよ 俠女【名】俠氣ある婦人。けふをんな。俠婦。

けふちよざう 夾紵像【名】古、支那にて、漆・泥及び布を用ひて造りし像。

けーふつ 化佛【名】〔佛〕衆生濟度のために、佛のこの世に化現すること、又その佛。化身のほとけ。けぼさつ(化菩薩)參照。

げーふつ 【名】こめつ(米櫃)を云ふ。〔大阪及び和泉國・陸奥國・陸前國の方言〕

けふてい 篋底【名】はこのそこ。はこの中。「と。匣底。

けふてい 協定【名】協議して決定すること。

げふてい 業體【名】Ⅰなりはひのさま。世わたりのかたち。家業のすぢ。げふたい。Ⅱおこなひ。すがた。げふたい。風體。

けふていかうゐ 協定行爲【名】〔法〕『獨Gesmtakt 又 Vereinbarung』各當事者が共同の目的のために、表示したる意思の合致によりて、法律上有效なる單一の意思の作成せらるるもの。

けふていーかかく 協定價格【名】〔法〕Ⅰ國際間に於て協定したる、輸出入貨物の價格。Ⅱはふていかかく(法定價格)に同じ。

けふていーくわんぜい 協定關稅【名】〔法〕條約を以て、その稅率を協定したる關稅。(國定關稅に對して)

けふていーけんぽふ 協定憲法【名】〔法〕ぎていけんぽふ(議定憲法)に同じ。

けふていーぜいりつ 協定稅率【名】〔法〕『英Conventional tariff』輸入貨物に課する關稅に就き、特に條約を以て、他國と協定したる稅率。從つて、同一物品の輸入に對しても、相手の國の如何によりて、その率の異なることあり。(國定稅率に對して)

けふてう 協調【名】協議して調和すること。「勞資協調」

けふてんーせい 協點性【名】〔數〕『英Concurrency』三つ以上の直線が、同一の點を通過すること。けふせんせい(協線性)參照。

けふどう 協同【名】心力をあはせて、ともにすること。

けふどうきげふ 協同企業【名】〔經〕『獨Unternelmerverbände』共同企業の一。各企業家が、組合又は會社の如き法律上の合同をなさず、內部の協約によりて、合同又は聯合すること。各企業家が各自の獨立を保つと同時に、他方において、協同聯結して企業を行ふシンヂケエトの類と、各企業家が各自の事業を全く合同し、中央機關を設けて、その總指揮の下に、全企業を營むトラストの類との二種あれど、主に後者を指していひ、前者は、企業聯合と呼びて、區別す。

けふとん 毛蒲團【名】Ⅰ鳥類又は獸類の羽毛を入れたる蒲團。Ⅱ毛皮の敷物。大猿荒・唐獅子の毛蒲團三十枚」

けふにん 俠任【名】にんけふ(任俠)に同じ。

げふはい 業俳【名】宗匠などの、趣味を主とせず、ただ點料など得るを目的とする俳諧。

けふはく 脅迫【名】Ⅰおどしつくること。おびやかしせまること。脅嚇。威嚇。Ⅱ〔法〕生命・身體・自由・名譽又は財產に對して、害惡を加ふべきことを通知し、依つて他人に恐怖の念を生ぜしむること。

けふはくざい 脅迫罪【名】〔法〕親告罪の一。脅迫の行爲ありたるによりて成立する罪。

けふばんきん 夾板筋【名】〔醫〕頭部の廻轉をつかさどる筋肉。頸椎より起り、頭骨に終る。

けふび 今日【名】今日の日。今日このごろ。近頃。

けふびしんけい 狹披針形【名】〔植〕葉の、狹き披針形。

けふびるね 狹鼻類【名】〔動〕哺乳動物、猿類の一亞目。兩鼻孔は相接近して、前方に向ひ、尾は纏絡の用をなさざるもの。多

くは頬輔と脾胝とを有せず。舊世界の猿類は、これに屬す。

けふふ 怯夫【名】卑怯(ひけう)なる男。

けふふ 俠婦【名】**けふぢよ** 俠女)に同じ。

けふ-ふ 挾扶【名】挾持して扶助すること。

けふ-ほ 夾輔【名】〓左右よりたすくること。〓つらがまち。ほほ。

げぶみ 外文【名】**げぶん**(外文)に同じ。

げぶみ 解文【名】〓解とは、文心彫龍に「百官誥レ事則有二闕刺解牒一」とありて、註に「解者繹也、解二繹結滯一、徵レ事以封也」とあり。即ち支那にては、百官相諮問する時の解答の義なるを、轉用せしならんといふ』八省以下、內外の諸司より、太政官もしくは所管に上る公文書の樣式、即ち太政官より符の樣式にて發する公文に對して用ふる上申書の樣式。げじやう。げもん。解(ゲ)。

げふむ 業務【名】つとめ。しごと。わざ。

げふむ-けいぞく 業務繼續【名】業務をつづくること。

げふむけいぞく-しやゐん 業務繼續社員【名】〔法〕**けいぞくしやゐん**(繼續社員)に同じ。

げふむ-しっかう 業務執行【名】業務をとりおこなふこと。

げふむしっかう-しや 業務執行者【名】〔法〕『獨 Geschäftsführer』組合又は法人等において、業務を實際に執行する權限と責任とを有する者。狹義には、組合のをのみ稱し、會社のは、普通に業務執行社員と呼びて、これを區別す。法人の理事の如き、これなり。

げふむしっかう-しやゐん 業務執行社員【名】〔法〕『獨 Geschäftsführer』合名會社・合資會社又は株式會社にて、その會社の目的とする業務につき、すべての衝に當りて執行する權限と責任とを有する社員。これを定むるは、定款の規定を要し、規定せざる場合には、合名會社にありては各社員、合資會社又は株式會社にありては各無限責任社員、みなその權利と義務とを負ふ。

げふむたんたう-しやゐん 業務擔當社員【名】〔法〕前條に同じ。

げふむ-よう 業務用【名】業務上に用ふること、又その物。

げふむよう-しよるゐ 業務用書類【名】〓業務に用ふる書類。〓第四種郵便物の一。全部又は一部を筆記したる各種の業務用の文書にて、特定の人に宛てたる通信文の性質を有せざるもの。

げ-ふん 外吻【名】くちわきの意。〔古語〕字音「つゆばかり、けふんの口によりたるも、ものをつきまどひ」

げ-ぶん 外文【名】外印(ゲイ)を捺したる文書。げぶみ。〔古語〕

げふ-やく 協約【名】〓協議して契約すること。〓〔法〕『英 Understanding 佛 Entente』二國以上が、外交上の事項、殊に勢力平均に關する消極的事項を妥協するために締結する、略式の條約。大抵、通牒の形式を取り、又時としては、書柬の交換に止まることあり。元首又は國會の批准を要せず、政府の委任により、外務大臣及び外交官の職權内にて訂約す。從つて、これが更改も容易なれども、その政府を拘束する効力においては、正式條約に讓らず。協商。

げふやく-けんぱふ 協約憲法【名】〔法〕**ぎていけんぱふ**(議定憲法)に同じ。

げふゆう 怯男【名】怯懦なると剛勇なるとを。勇怯。

げふ-ゆう 俠男【名】俠氣あり勇氣あること、又その人。いさみ。

げふら 今日ら【名】今日あたり。今日ごろ。萬葉「いや彦の神のふもとに今日らもか鹿のこやすらむ皮のきぬ著て角つきながら」

げふら-かす 烟らかす・煙らかす【動四他】**けぶらす**(烟らす)に同じ。

げふら-くさい 烟臭・煙臭【形】**かんくさい**(紙子臭い)に同じ。〔土佐國の方言〕

げ-ふらひ 氣振【名】**けぶり**(氣振)の延。伊賀越道中雙六「身どもが本名、けぶらひでも知らされぬ、大事のところ」

けふり 煙裏【名】はこのうち。筵中。

けぶり 氣振【名】けはひ。そぶり。やうす。けぶらひ。

けぶり 烟・煙【名】〓火をたく時、立ちのぼる氣。けぶ。けむ。けむり。萬葉「國原はけぶり立ちこめ海原はかまめ立ちたつ」〓水など、細かく飛散して、烟の如く、朦朧と見ゆるもの。「水けぶり」「血けぶり」〓草木の芽又は眉毛などの生ひ出でて、遠く眺むれば、薄く霞みて見ゆるもの。夫木「下もえのふる木の柳末見えてけぶりものうき春の色かな」四死にて、火葬せらるること。孕當鑒「惜みても、厭ひても、誰れかは一人とどまらん、はてはけぶりの室町やう」五くらし。活計。夫木「國とめる民の烟のほど見えて雲間の山にかすむ炭竈」

けぶり-なす 烟なす【句】火葬す。心中萬年草「明くる二日に烟となし」

けぶり-になる 烟になる【句】死にて、火葬せらる。雲となる。けぶる。生玉心中「生きて添はれぬ浮世なら、いつそ烟になりたやな」

けぶり-の-きぬ 烟の桐【句】『せうびきん(焦尾琴)を見よ』

けぶり-の-こと 烟の琴(こと)〓に同じ。

けぶり-の-くも 烟の雲【句】烟の立迷ひて、雲の如く見ゆるもの。

けぶり-の-よ 烟の代(よ)【句】生計の資。世渡のもと。「で。

けぶり-の-なみ 烟の波【句】〓浪のかすみて、烟の如く見ゆるをいふ。〓烟の立ちさなりて、浪の如く見ゆるをいふ。桑苧「雲の浪烟の波と立ちへだてあひ見んことのはるかなるかな」

けぶり-の-まゆ 烟の眉【句】にほひやかなる美しき眉。

けぶり-の-やみ 烟の闇(やみ)【句】烟の濃く立ちこめて、闇の如くなること。

けぶり-を-たつ 烟を立つ【句】活計を立つ。くらす。烟(ケブリ)を立つ。懷寶「膝の下に石火鉢、古綴の火繩、僅に烟を立てて、綾煙草を樂むより外に自ら求少なきは」

けぶり-となる 烟となる【句】同じ烟となる【句】同じ樣に、火葬に付せらる。桑苧「かぎりなき御身なれど、同じけぶりとならせたまふも、いみじう悲し」

けぶり-の-ぼる 下(シタ)焚く烟に薰(ユク)る【句】火の燃上らずして、下に薰る烟のごとく、面にはあらはさずに、人を戀ひおもふ。したくゆる。增鏡「いかなる御心かありけん。下たく烟ぶりにくゆりわびたまふぞ、いとほしかりける」

けぶり-を-たつ 烟を立つ【句】辛うじて生計を營む。

けぶり-がへし 烟返・煙返【名】**けむりがへし**(烟返)に同じ。用明天皇職人鑑「身はすみがまと、焦熱のけぶり、かへしは、誰れ故ぞや」

けぶり-ぐさ 烟草・煙草【名】〔植〕**たばこ**(烟草)に同じ。

けぶり-くさし 烟臭し・煙臭し【形二】煙のにほひあり。いぶりくさし。

けぶり-くらべ 烟競・煙競【名】『思の烟』を見よ』思ひ焦るる深さをくらぶること。〔古語〕源氏「たちそひて消えやしなましうきことを思ひみだるるけぶりくらべに」

けぶり-す 烟す・煙す【動佐變自】烟が立つ。烟たなびく。一葉「烟して蝙蝠の世もよかりけり」

けぶり-たし 烟たし・煙たし【形二】**けぶたし**(烟たし)〓に同じ。字鏡集「燻、ケブリタシ」

けぶり-たし 烟出・煙出【名】〓烟をいだし去るために、あけたる窓、又は屋根に穴を穿ちて立てたる筒。けむりだし。けむだし。けむぬき。烟突。烟筒。今園莊鑒「鞴のけぶりだしより屋根傳ひ」〓魚の頭の一部。眼と口吻との間。

けぶり-つ-らう 烟律郎【名】**うたのかみ**(雅樂「頭」の唐名。

けぶり-やう 烟量【名】小量。(廣量に對して)

けぶり-やく 劫掠・脅掠・劫略【名】おびやかしてかすむること。

けふりよく 協力【名】〓力を合すること。合力。協同。〓〔經〕『英 Cooperation』同一の仕事を完成するため、二人以上の人が協同して勞働すること。合力と分業に依る協力との二種あり。前者は、數人にて、一の巨石を轉ずる類、後者は、一人は運轉手となり、一人は車掌となりて、電車を行る類。

けぶる 烟る・煙る【動四自】〓けぶりたつ。けむる。紀寬宴「たかどのに上りて見れば天の下よもにけぶりて今ぞとみぬる」〓うすき烟の如く見ゆ。霞みて見ゆ。源氏「いつしかとけしきだつ霞に、木の芽もう

ちけぶり」㊁「烟(ケブリ)になる」に同じ。〔古語〕和泉式部歌集「向ひゐて見るにも哀し烟りにし人をおもひの灰によそへて」

けふれつ 狭劣【名】度量狭く劣れること。

けぷれるのほふそく ケプレルの法則(英 Kepler's laws)【名】〔天〕デンマアク人ケプレル(Johann Kepler)の發見せる、遊星の運行の法則。(一)各遊星は、太陽を焦點とする楕圓形の軌道によりて運行す。(二)太陽より各遊星に至る直線によりてゑがかるる面積は、これをゑがく時間に正比例す。(三)各遊星の週期の平方を、その太陽に至る平均距離の立方にて除したる商は、各遊星に通じて、同一なりとの三則、これなり。**せつどう**(擾動)参照。

けふろ 狭路【名】せまき道路。隘路。

けふわ 協和【名】㊀心をあはせて、なかよくすること。隔てごころのなきこと。けふくわ。協合。和協。㊁〔音〕『英 Concord』二つの音の、同時に發して、互によく調和して、人に快感を與ふること。協合。

けふわおん 協和音【名】〔音〕互に協和する二つの音。協音。

けふわおんてい 協和音程【名】〔音〕協和音の音程。現今の樂制にては、基音に對し八度・五度・四度・三度及び六度の音程をいひ、その中、四度までを普通に完全協和音程、以下を不完全協和音程と名づくれど、また八度と五度との二音程のみを呼ぶ者もあり。協音程。

けふ-わん 峡灣【名】〔地〕『峡の字の音、正しくはかふ』**けふかう**(峡江)に同じ。

けふ-ね 脅威【名】〔兵〕敵をして、他の目的に向ひて動作すること能はざらしむるやうにおどすこと。

けふ-ねん 叶韻【名】〔語〕『この韻とかの韻とを通叶して用ふる意。但し後世の唐韻を標準とするによりて、かく稱するものにて、古代は彼此共に同韻なりしなり』詩經・離騒などの古韻の、唐韻と異なるもの。

げふ-ねん 業位様【名】朝鮮人の信仰する神の一。家宅に屬して、幸福を司ると稱し、箱又は瓶の中に米錢を入れて、その神體とす。

けふゑん 峡猿【名】『峡の字の音、正しくはかふ』山あひに居る猿。たにまの猿。

げへ【名】小供の遊戯の一。竹がへしなどすることならんといふ。

げへいでん 外幣殿【名】伊勢神宮にありて、皇后宮・東宮の幣帛、並びに國國よりの調物を納むる所。

げ-べん 外辨【名】古、朝廷にて、公事(クジ)ある場合に、承明門外に在りて、内辨の下に屬し、事務を補助せし役。**ないべん**(内辨)参照。

げへん-げへん【貌】咳(セキ)をせく音。ごほんごほん。日本振神始「げへんげへんと喘き上げて」

げべる-じゅう ゲベル銃【名】外國製の小銃の一。舊式にて、現時は用ひられず。

げほう 下豐【名】**げほふ**(外法)㊁に同じ。平假名盛衰記「下豐殿のあたまへ、梯子さいて、月代剃る大津繪」

げ-ほくめん 下北面【名】かほくめん(下北面)に同じ。

げ-ぼさつ 化菩薩【名】〔佛〕化身(ケシン)の菩薩。衆生濟度のために現れたる菩薩。**けぶつ**(化佛)参照。著聞集のあたり宮殿・宮樹を見、化佛・化菩薩を現じたてまつる」

けほふ 假法【名】〔佛〕因緣の假合(ケガ)によりて、假に存在する物。(實法に對して)

げほふ 外法【名】㊀佛法外の法。例へば茶吉尼(ダキニ)の法、阿尾捨(アビシャ)の法など。邪法。外術。(正法(シャウホフ)に對して)増鏡、十月二日失せたまひぬ。…御顔のしもみじかにて、なかばほどに御目のおはしましければ、外法とかやまつるに、かかるなまかうべの入る事にて、何がしのひじりとかや、東山のほとりなる人」㊁**げほふあたま**(外法頭)の略。㊂**ふくろくじゅ**(福錄壽)に同じ。〔下豐〕㊃**げほふげた**(外法下駄)の略。我妻「江戸塗下駄のはじめは、げほふなり」

げほふ 外法【名】㊀佛法外の法。例へば茶吉尼(ダキニ)の法、阿尾捨(アビシャ)の法など。邪法。外術。(正法(シャウホフ)に對して)増鏡、十月二日失せたまひぬ。…御顔のしもみじかにて、なかばほどに御目のおはしましければ、外法とかやまつるに、かかるなまかうべの入る事にて、何がしのひじりとかや、東山のほとりなる人」㊁**げほふあたま**(外法頭)の略。㊂**ふくろくじゅ**(福錄壽)に同じ。〔下豐〕㊃**げほふげた**(外法下駄)の略。我妻「江戸塗下駄のはじめは、げほふなり」

げほふの下坂(ゲホフノクダリザカ)【句】㊀外法即ち魔法は一時勢を得とも、一たび破れかくる時は、到底とりかへしのつかぬものなること。〔諺語〕㊁一たび失敗すれば、終に全く回復しがたきに至ることの譬。〔諺語〕吾妻我集「かしらより山嵐して散る花をいはばげほふのくだり坂なる」

げほふ-あたま 外法頭【名】㊀外法を行ふ時用ふる髑髏(ドクロ)の首。げほふがしら。げほふ。**げほふ**(外法)㊀参照。㊁上部大きく、下部小さき頭。

げほふ-がしら 外法頭【名】前條㊀に同じ。見聞集「世に色色の術法ありて、外法がしら、うしろ佛などいふものを持ちぬれば、奇特をいふとかや」

げほふ-げた 外法下駄【名】寶永・正徳の頃、俳優などの間に流行せし下駄。表は桐の柾目にて、樫(カシ)の丸齒を指し、赤く塗りたるもの。今は、かど丸き薩摩下駄をいふ。

げほふ-さま 外法様【名】『外法の術を行ふものとしての尊稱』**てんぐ**(天狗)の異稱。

げほふそう 外法僧【名】外法を行ふ僧。

げほふつかひ 外法遣【名】外法を行ふ人。まほふつかひ。

けぼん 華梵【名】〔地〕中華と梵土と。支那と天竺と。

げぼん 下品【名】㊀〔佛〕**くぼん**(九品)を見よ。大原問答言葉尽「それ下品・下生の往生は、六道四生の苦患をやや遁るるばかりにて」㊁下等。

げぼん-かい 下品戒【名】〔佛〕三種の受戒の一。釋迦滅後、受戒の師なく、佛父は菩薩の像の前にて、自ら誓って爲す受戒。

けぼり 毛彫・毛刻【名】金屬の上に、毛髪のごとく細き線にて、四に圖様を彫ること。横谷宗珉(ソウミン)に始まる。

げぼん 外凡【名】〔佛〕二凡の一。ただ教法を聞きて、信ずるのみなる凡位。(内凡に對して)

げぼん-かい 下品戒【名】〔佛〕三種の受戒の一。釋迦滅後、受戒の師なく、佛父は菩薩の像の前にて、自ら誓って爲す受戒。

けぼり 毛彫・毛刻【名】金屬の上に、毛髪のごとく細き線にて、四に圖様を彫ること。横谷宗珉(ソウミン)に始まる。佶誠反魂香「對の金鍔、毛彫は波に山王祭」

げ-ぼり 牙彫【名】**げぞう**(牙彫)に同じ。

けぼり-ざうがん 毛彫象眼【名】彫金にて色繪にしたる上に、毛彫・片切(カタキリ)を施したるもの。細野攻守の創意に出づ。

けぼり-たがね 毛彫鏨【名】毛彫に用ふる、先端の細き鏨。

け-まい 化米【名】寺院にて、米を勸化(クワンゲ)すること。施米を募ること。

け-まう 希望【名】**きばう**(希望)に同じ。下學集「希望、ケマウ」

け-まき 毛巻【名】女の髪の結ひ方の一。江戸時代に深川に流行したる、毛にて巻きくくりたる島田髷。今は喪の時にのみ結ぶ。けまきしまだ。船頭深話「さうさ、元結紙なしに、毛巻にするからね」

けまき-しまだ 毛巻島田【名】前條に同じ。

けまく【助動】**けむ**の延。(但しけむのごとく、文章の結びとなることなし)〔古語〕萬葉「あさよひにゐみゐまずも打嘆きかたりけまくは」

げまつ 夏末【名】〔佛〕夏安居(ゲアン)の終。

けまない 毛馬内【名】〔地〕陸中國鹿角(カヅノ)郡の西部にある町。北に小坂(コサカ)鑛山、南に尾去澤(ヲサリザハ)鑛山あるを以て賑ふ。

けまはし 蹴廻【名】袴又は衣の裾の、足にかかる部分。運歩色葉集「蹴廻、ケマハシ、袴」日本武尊吾妻鑑「肩から裾のけまはしまで、五色の縫のたぐり紐」

けまん 華鬘【名】〔佛〕『梵 Kusumamālā(倶蘇摩摩縄)の譯語』印度の風俗として、男女共に花を多く絲にて綴りて、髪頭・身體等の飾とするもの。從って、佛像又天人の像等に於てもこれを見、或は佛前を莊嚴する用にも供す。支那・日本の寺院にては、適當なる華の得がたきより、專ら金屬にて造れる扁平なる輪に、蓮華などの造花を綴りて懸垂せしめ、これを華鬘代(ケマンダイ)または單に華鬘ともいふ。



(うゆじるべけ)



(んまけ)

けまん 懈慢【名】〔佛〕怠る心と、みだりにたかぶる心と。懈怠と驕慢と。

げまん 夏滿【名】〔佛〕夏安居(ゲアンゴ)の滿じたる日。

けまんかい 懈慢界【名】〔佛〕『菩薩處胎經の所說』彌陀如來の誓願を聞けども、疑の心深く、專念にこれを信ずることなくして、雜行と雜修とを修むる自力の行者が生るといふ世界。閻浮提(ダイブ)の西方十二億那由陀(分ュ)、極樂國に至る中途にあり。この國に生ずる者、その國土の快樂(分ラク)に染著停滯して、懈慢の心を生じ、身は蓮花の中に閉ぢられて、耳に法音を聞けども、眼に佛身を見るを得ず、ここに在ること五百歲にして、更に極樂淨土に生れ得といふ。けまんごく。懈慢邊地。

けまんごく 懈慢國【名】〔佛〕前條に同じ。

けまんさう 華鬘草・荷包牡丹・魚兒牡丹【名】〔植〕罌粟(ケシ)科に屬する多年生の草。高さ二尺に達す。葉は莖に生じ、數回羽狀に細裂し、各裂片は倒卵狀楔形をなし、二三の粗齒牙又は小缺刻を有す。春、莖頂又は葉腋より花枝を抽き、大いさ一寸ほどの淡紅色なる美花、總狀花序をなして開く。支那滿洲に產し、我が國にも園藝せらる。けまんぼたん。こうせんぼたん。くさぼたん。ふぢぼたん。まるさんちやく。やうらくぼたん。

けまんだい 華鬘代【名】〔佛〕**けまん**(華鬘)を見よ。

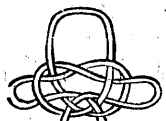
【俚語】

けまんだう 毛饅頭【名】女の陰部の異稱。

けまんへんち 懈慢邊地【名】〔佛〕**けまん**(懈慢界)に同じ。

けまんぼたん 華鬘牡丹【名】〔植〕**けまんさう**(華鬘草)に同じ。

けまんむすび 華鬘結【名】紐の結び方の一。華鬘のごとき形に結ぶもの。どうしんむすび。



(ぴすむんまけ)

けまり 毛鞠【名】內部に毛を固くつめたる鞠。即ちベースボオル等に用ふるもの。

けまり 蹴鞠【名】㊀古、革にて造れる徑七八寸の鞠を、足にて、且つ蹴あげ且つ受けて、地に落さじとする遊戲、又その鞠。多く公卿などの上流に行はれたり。



(りまけ)

くるまり。しうきく。**かかり**(懸)㊀參照。㊁紋所の一。蹴鞠(一)を象(カタド)れるもの。

けまろばす 蹴轉ばす【動四他】蹴てころばす。今言「舍人を蹴まろばして走る馬もあり」

けみ 毛見・檢見【名】㊀『け(毛)』(六)を見よ』田地の年貢の高を定むるために、その作毛(サクモウ)の熟不熟を見ること。室町時代以來行はれしことにて、幕府又は領主より役人を遣して、實地につきて檢せしめ、又德川時代には、手代を各地に遣りて豫檢せしめしを、小毛見といひ、小毛見の後、數日を經て、代官みづからその地に就きて檢せしを、大毛見といへり。けんみ。**らふけみ**(蠟檢見)參照。

けみの衆【句】毛見の役人たち。 蒔村「毛見の衆の舟さし下せ最上(モガミ)川」

けみがは 檢見川【名】〔地〕下總國千葉郡にある町。花見川の河口左岸。東京灣に臨む。千葉町の西北二里。大字稻毛(イナゲ)に鐵道總武線稻毛驛あり。

けみす 閲す【動佐變他】あらためてみる。しらべてみる。ただしみる。

けみだて 毛見立・檢見立【名】小毛見(コケン)終りたるも、大毛見(オホケミ)の遲延せし時、その田の刈入を許すに際して、中央の二間四方を刈殘さしめしこと。「じ。

けみち 顯密【名】〔佛〕**けんみつ**(顯密)に同

けみち 褻道【名】馬術にて、馬の足どりの法に叶はずに、常の道を行く足なみ。

けみとり 毛見立・檢見取【名】毛見により、租を徵すること。**おやうめんとり**(定免取)參照。

げみん 下民【名】**かみん**(下民)に同じ。

げみや【名】ものおき(物置物)を云ふ。〔信濃國の方言〕

げみやう 家名【名】**みやうじ**(名字)に同じ。 蟹嶼「天皇甘露雨」委しき次第は、宿所にて、家名を名のれば得心の筈」

けみやう 假名【名】㊀普通の名の外に、假に附けたる名。よびな。(實名に對して) 賀古敎信「七墓遇」敵の假名實名は中務が知りつらん」㊁**さくめい**(諱名)に同じ。

けみやうしゆう 假名宗【名】〔佛〕諸法は實性なく、ただ假名あるのみと立つる宗派。小乘の經部及び成實(ジヤウジツ)宗の類。

げみやうぶ 外命婦【名】古の五位以上の官人の妻。時を以て參內したり。(內命婦に對して)

けむ 烟・煙【名】㊀**けむり**(烟)に同じ。㊁**けぶ**(烟)(二)に同じ。

けむ 烟【句】あとかたなくなる。形、「消え失す。

烟になる 烟に捲かる【句】㊀烟に籠められて窒息す。㊁相手の氣勢にのまれて自失す。あつけにとらる。芥(ゴミ)に醉はさる。

けむ【名】〔植〕**けむのき**の略。

けむ 閲む【動四他】**けみす**(閲す)に同じ。〔古語〕

けむ【助動】動詞の連用形に添ひて、過去を推量するに用ふるもの。けん。**けまく**參照。起山川にをし二つゐてたぐひよくたぐへる妹を誰れかもにけむ」

けむ【助動】形容詞の語根に添ひて、未來を推量するに用ふ。但しもと形容詞の語尾くと、**あらむ**(有らむ)との約まりたる**からむ**の轉訛。「起一命の全(マタ)けむ人は」 萬葉「春の日のうらがなしきにおくれゐて君に戀ひつつうつしけめやも」

けむかし【名】〔植〕**すかしたばう**に同じ。

けむがへし 烟返・煙返【名】〔建〕**けむりがへし**(烟返)に同じ。

けむがる 烟がる・煙がる【動四自】けむく思ふ。けぶたがる。けむたがる。

けむくじやら 毛むくじやら【名】毛のむくむくと生ひたること、又その人。

けむくだつ 毛むく立つ【動四自】毛、そけて立つ。

けむし 毛蟲・蛞蝓・蝸螺【名】㊀(動)鱗翅(シン)類に屬する昆蟲の幼蟲の、全身に長毛の生えたるものの總稱。植物の蕾又は葉を食害す。かはむし。㊁氣むづかしくして忌嫌はるる者。 鶏衣「毛蟲はむづかしき親仁の號とす」

けむし 枲【名】〔植〕『む(苧)を見よ』をあさ、雄麻)に同じ。〔古語〕 和名「枲、介无之、麻之有レ子名也」

けむし 烟し・煙し【形一】**けぶし**(烟し)の轉。

けむしまゆ 毛蟲眉【名】太く、濃くして、毛蟲の形のごとくなる眉毛。

けむしろ 毛席・毛筵【名】毛織のむしろ。毛織の敷物。毛氈。

けむたがる 烟たがる・煙たがる【動四自】**けぶたがる**(烟たがる)に同じ。

けむたし 烟たし・煙たし【形一】**けぶたし**(烟たし)の轉。 「同じ。

けむだし 烟出し・煙出【名】**けぶだし**(烟出)に同じ。

けむつかし【形二】何となくむづかし。むくつけし。〔古語〕 十訓「大なる蜂一二百、二三百、うちむれて、いくらともなく入り集るさま、いとけむつかしく見えたり」

けむつたし 烟ったし・煙ったし【形】**けむたし**(烟たし)の訛。 色男十人三奴「おれを誰れだと思ふ。鞍馬山の僧正坊が子分の義經と云って、蚊帳のない家で、けむって(へ男だ」 「同じ。

けむぬき・どくわん 烟抜・煙抜【名】**けぶだし**(烟出)に同じ。

けむぬき・どくわん 烟抜土管・煙抜土管【名】土管にて造りたる煙道。

けむのき【名】〔植〕**けんぽなし**(枳殼)に同じ。 「同じ。

けむらさき【名】〔植〕**やぶむらさき**(藪紫)に

けむり 烟・煙【名】**けぶり**(烟)の轉。

烟になる【句】「烟(ケブ)になる」に同じ。

けむりがへし 烟返・煙返【名】㊀(建)土藏の戸前の下方にある石。けむがへし。㊁炭竈に於ける裝置の一。

けむりすゐしやう 烟水晶・煙水晶【名】

(鑛) 水晶の一種。透明又は不透明の煙褐色乃至黒色を呈するもの。我が國にては、近江國田上(タナカミ)山・美濃國苗木町地方に産す。からすずめしやう。くろずめしやう。

けむり-たけ 烟茸・煙茸 【名】(植)ほこりたけ(埃茸)に同じ。

けむり-だし 烟出・煙出 【名】けぶりだし(烟出)に同じ。

けむり-の-みや 烟宮・煙宮 【名】京都の北野神社の末社の一。心敬僧都を祀るといふ。

けむる 烟る・煙る 【動四自】けぶる(烟る)の「轉。

げ-むる 外無爲 【名】(佛)外境に心を動かされぬこと。六塵のために、六根の汚さることなきこと。(内無爲に對して)

けん 劍・剣 【名】■つるぎ(劍)に同じ。■劍を使ふ技。撃刺(ゲキシ)の技。劍法。劍術。■じゅうけん(銃劍)に同じ。■蜂などの尾端にある針。五紋所の一。劍を象(カタド)りたるもの。種種あり。

劍に伏す 【句】劍の上にうつぶしになりて死す。自刃す。

劍の印(ジルシ) 【句】けんいん(劍印)に同じ。

劍を落して、船を刻む 【句】『呂氏春秋の察今篇に見ゆ』楚の人の、楊子江を渉りし時、その劍、船より水にすべり落ちしかば、あわてて、劍の落ちし船の部分に刻目(キザミ)を附け、船の止まりし時、その刻目の處より水中に入りて、劍を探しも見當らざりきといふ說話。迂愚にして、變通のすなき譬。船にきだ附く。〔諺語〕

けん 縣 【名】■あがた(縣)に同じ。■明治の初年に、藩に對して、朝廷の直轄地の稱。■郡及び市を以て構成する地方自治團體の最上級なるもの。四國の行政區劃の一。縣知事の管轄區劃。ふ(府)參照。

けん 兼 【名】かぬること。兼務。兼任。

けん 謙 【名】へりくだること。謙讓。

けん 乾 【名】■八卦の一。卽ち☰の形にてあらはすもの。純陽にして、その德は健、天にかたどる。(坤に對して)■そら。天空。■西北の方位。いぬゐ。四君主。帝王。

乾を旋らし、坤を轉ず 【句】『韓愈の潮謝上表に「旋乾轉坤」とあるに本づく』天下の面目を一新す。〔諺語〕

けん 健 【名】すこやかなること。たけきこと。剛健。

けん 鍵 【名】『英 Key』■鍵樂器の、指にて押して、發音せしむるもの。白鍵・黒鍵の二種あり。前者は基礎音、後者はその半音づつの高低音を發す。■タイプライターにて、字を印するため、指にて押すところ。

けん 腱 【名】〔醫〕『獨 Sehn』筋肉に連結する纖維樣結締組織の索條。帶白色にて、主として、筋肉を骨に附著する作用をなす。

腱の感覺 【句】〔哲〕『英 Sensation of tendons』腱には感覺神經の末端の終れるため、筋肉の收縮する場合に、腱の緊張して、一種引締むるがごとく、張詰むるがごとき感覺。

けん 顯 【名】■あきらかなること。あらはし。■〔佛〕けんけう(顯敎)に同じ。大眞聞答書 素萬「私に釋尊御一代の經文を披き、つらつら出離の樣を案ずるに、顯につき密につき、その悟容易からず」

けん 壎・塤 【名】支那の古樂器の一。陶製にて、上尖りて底扁く、壺狀をなし、吹きて鳴らすに、その音叫ぶが如し。西洋のオカリナ(Ocarina)はこれより出でたりといふ。

けん 儉 【名】費用を節約すること。つつましやか。しまつ。儉約。節儉。

けん 險 【名】■けはしきこと、又その所。險阻。■むづかしきこと。恐るべきこと。よこしま。■けんそう(險相)の略。〔權〕重雛子「髭がまちつと下った、額もけんで、愛想がない」浮世風呂「全體能い御器量だ。ちっと險があるよ。あれで愛敬があれやあ鬼に鐵棒さ」

けん 驗 【名】しるし。きき。

けん 賢 【名】才德のすぐれたること。かしこきこと、又その人。「賢を愛す」

賢が子、賢ならず 【句】賢者の子なりとて、必ずしも賢人ならず。〔諺語〕

賢は愚に歸る 【句】賢者も、時としては、愚人のごとくなる。〔諺語〕

賢を賢として、色に易ふ 【句】『論語の學而篇に出づ』賢者の賢を認めて、女色を愛するが如く、日常親炙す。〔諺語〕

けん 堅 【名】■かたきこと、又そのもの。■甲冑。堅甲。

堅を被(カブ)る 【句】甲冑を被(キ)る。「甲を著す。」

けん 券 【名】金錢貸借の證書。田宅莊園などの所有權を證する手形。てがた。わりふ。券狀。卷書。源氏「けんなどは、ここになんあれど」

券を折る 【句】『古の券書は、竹簡を用ひしより、折るといふ』券書を毀ち折りて、約を止む。債權を棄つ。

けん 拳 【名】掌(テノヒラ)の開握又は指の屈伸などにより、勝負を爭ふ遊戲。本拳(ケンポン)・藤八拳(トウハチケン)・石拳(イシケン)・蟲拳(ムシケン)・狐拳(キツネケン)等の種類あり。異途贅辨「お客待間のささごと、拳をしてござんする、こなさんもお氣晴に、一拳して、ささ一つ」

けん 權 【名】■衡(ハカリ)のおもり。錘。■はかりごと。術數。■事を處置する力。いきほひ。權力。權威。權柄。「權に乘じ、勢を藉(カ)る」■權利。權限。

權に借る 【句】權威をかさにきる。浮世風呂「大勢の子持を權に借って、内の事は、ひとつばも構はねえ」

權に就く 【句】權力ある人に從ふ。

權に募る 【句】權勢を恃みて增長す。

權振(ケンフリ)、棒振(ボウフリ) 【句】權勢を振廻すこと。〔諺語〕

けん 妍 【名】美しきこと。かほよきこと。

けん 件 【名】一くだりの事。こと柄。事件。

けん 見 【名】■目のつけかた。みこみ。かんが(へ)。見解。「井蛙の見」■逢ふこと。相見ること。顏を見ること。〔京都の語〕けしすみ「けんに行きても首尾なく、はや歸らんとせしに」

けん 【名】料理のつけあはせ。つまの類。椀酒合章子「飯も汁もがんぞう鱠。けんに置きたるめうがの程ぞ恐ろしき」

けん 【助動】けむの音便。「言」

けん 【助】からよりなどに同じ。〔石見國の方言〕

けん 軒 【接尾】雅號・家號などに添ふる語。堂・齋・庵などの類。「逍遙軒松永貞德」

けん 軒 【助數】家屋を數ふるに用ふる語。戶(コ)。「野中の一軒家」「る語。

けん 件 【助數】物又は事柄を數ふるに用ふ

けん 間 【助數】■〔建〕古代の日本建築にて、正面なる柱と柱との間。側面の柱と柱との間は、面といひ、即ち七間・四面といへば正面の柱八本、側面の柱五本の意にて、方七間の義にあらず。■長さの單位。曲尺の六尺を一間とするを普通とすれど、畿内の建築にては、六尺三寸を一間とし、これを大間(オホマ)又は京間(キヤウマ)といひ、又これに對して、五尺八寸を田舍間(カナカ)といふ。

けん 卷 【助數】くわん(卷)に同じ。

げん 玄 【名】■深遠なる理義。■老子の說く絕對。■『坊主・醫者などの名に多く玄を附けたるよりいふ』坊主・醫者などをいふ。〔江戸時代吉原の語〕吉原つねつね草「淺草あたりの玄、色里にうかれゆき」

玄の又(マタ)玄 【句】『老子に出づ』道の、最も深遠なる意。

げん 弦 【名】■ゆみづる。つる。■げん(絃)に同じ。■一升枡の上部にわたす四角形の鐵。四〔天〕新月より七八日前及び七八日後において、月の半面正しく光り、他の半面の暗黑なる時。前者を下弦、後者を上弦といふ。ゆみはりづき。弦月。五〔數〕『英 Hypothenuse』直角三角形の直線に對する邊。斜邊。こうこげん(鉤股弦)參照。六〔數〕『英 Chord』曲線上の二點を連結する直線を、その曲線に對して呼ぶ稱。例へば圓周上の二點を連結する直線は、すべてその圓の弦なる類。

弦に應じて倒る 【句】射たる矢の見事に命中して、弦音と共に倒る。

弦を佩(ハ)びて、自ら急にす 【句】『韓非子の觀行篇に「董安于之性緩、故佩レ弦以自急」とあるに本づく』弦は張りてゆるみなきものなれば、これを佩びて、自ら戒め、氣質をきびしくす。(「草(ソウ)を佩びて自ら緩くす」に對して)。〔諺語〕

げん 絃 【名】■樂器に張亙して、彈(ヒ)き、又は摩擦して、音を發せしむる絲、又は針

金。いと。つる。㊁絃樂器。絃を絕つ【句】『呂氏春秋に「鍾子期死、伯牙破レ琴絕レ絃、終身不二復鼓一レ琴、以爲無二足レ爲レ鼓者一」とあるに本づく。ちいん（智音）參照』すぐれたる音樂、世に傳はらず。絃を續（つ）ぐ【句】『ぞくげん（續絃）及び「琴瑟（ビシツ）和ぐ」㊁を見よ』二度めの妻を娶る。

げん 舷【名】ふなべり。ふなばた。舷舷相摩す【句】艦・艇などが、絃の觸れあはんばかりに互に接近す。

げん 驗【名】『けん（驗）の轉』㊀修驗者の行ふ不思議なるわざ。佛道の修行を積みたるしるし。加持・藥などのききめ。源氏、まだげんつくばかりのおこなひにもあらねば」㊁ききめ。しるし。功能。効驗。五人玄「はや…げんを見せて、手たたきても返事せず」今宮心中「灸が早うききましたと云へども、我が身の上とも知らず、おおト庵が名人御覽あれ、一炷（ピト）でげんが見えましよと」㊂見ば。見え。やうす。〔京都の語〕「げんの惡い子」

げん 驗無き神に、驗附ける【句】靈驗なき神を靈驗あるやうに云ひふらす。本人の知らざることを、他よりまことらしくもてはやす。〔諺語〕〔に對して〕

げん 嚴【名】おごそかなること。嚴粭。〔寛

げん 言【名】㊀ことば。げんぎよ。げんご。「卑俗の言」㊁語。句。㊂字。文字。言近くして、指（ゆび）遠し【句】「言（ゲン）近くして指遠し」を見よ。言なほ耳に在り【句】「言（ゲン）なほ耳に在り」を見よ。言に訥（ト）にして、行（オコナ）に敏（ビン）【句】「言（ゲン）に訥にして行に敏」を見よ。言悖（モト）りて出づる者は、亦悖りて入る【句】「言（ゲン）悖りて出づる者は亦悖りて入る」を見よ。言を以て人を取る【句】「言（ゲン）を以て人を取る」を見よ。言を食（ハ）む【句】約束に背く。食言（ショクゲン）す。

げん 減【名】㊀へること。へらすこと。減少。㊁ひきざん。減法。㊂中古の刑法上の特典として、六位・七位、又、勳五・六等の人、官位・勳等の應請者の祖父母・父母・妻子・孫が流刑以下の罪を犯ししとき、特に一等減じて、處刑せしこと。おうげんしや（應減者）・れいげん（例減）參照。

げん 原【名】㊀もと。ねもと。みなもと。本原。根原。根本。㊁〔文〕『韓退之の五原とて、原人・原道・原毀・原性・原鬼といふ五篇の文章に始まる』漢文の一體。論說の一種にて、事物の本原を推論するもの。原に逢ふ【句】『孟子の離婁下篇に「君子深造之以レ道、欲三其自二得之一也…、資レ之深、則取二之左右一、逢二其原一」とあるに本づく』宇宙・人道の根原を知り得。

げん 源【名】みなもと（源）に同じ。

げん 愿【名】つつしむこと。すなほ。

げん 監【名】『官員を任じて、これを臨監せしむるよりいふ』古太政官直轄の國の稱。和泉國のみに存せり。監國。

げん 元【名】㊀天地のおこり。氣の始。正氣。根元。㊁はじめ。おこり。もと。原始。㊂改曆の第一年。年號の第一年。帝王の代がはりの年。革命の第一年。㊃王朝の革命。君王の即位。「元を闕く」㊄げんがう（元號）に同じ。「元を改めて、明治といふ」㊅を見よ。㊆首長。㊇（數）方程式代數式等における未知數又は變數。その一箇のみなるを一元、二箇なる時を二元、三箇以上なるを多元といふ。㊈支那の古の國號の一。蒙古第五代の大汗忽必烈（フビライ）の、宋を滅して、建國せるもの。凡そ十帝・九十年（紀元一九三九年―二〇二八年）にして、明祖朱元璋に滅さる。

元軽白俗、郊寒島瘦【句】〔文〕『珊瑚鈎詩話に「詩以意爲レ主、又須二篇中練一レ句、句中練レ字、乃得レ工耳、以二氣韻清高深眇者一爲レ上、格力雅健豪者一勝、元軽白俗、郊寒島瘦、皆其病也」とあり』支那唐の有名なる四詩人の詩を評したる語。即ち元稹の詩は輕浮、白居易のは淺俗、孟郊のは寒素、賈島のは瘦衰の氣味ありといふ意。〔諺語〕

げん 眼【名】〔佛〕げんしき（眼識）の略。

げん 閑【名】〔佛〕終行の暇ある境界。（不閑に對して）

げん 現【名】㊀世に現存せること。うつつ。現實。實在。㊁げんぜ（現世）の略。㊂まのあたり。あること。ありあはすること。現在。㊃〔商〕おき（直）に同じ。〔取引所の語〕

げん 嚴・儼【貌】げんぜん（儼然）に同じ。

げん 元【助數】㊀支那の貨幣の單位。角の十倍、我が國の約一圓に相當す。㊁朝鮮の貨幣の單位。二元を以て、一圓に當つ。

げん 現【接頭】現在の意。「現內閣」

けん-あい 險隘【名】けはしくせまきこと、又その所。險阻・狹隘。

けん-あい 涓埃【名】㊀水の一滴と、塵埃と。㊁微細なる物の譬。涓滴。「涓埃の力」

けん-あい 兼愛【名】自他・親疎の差別なく、すべての人を一樣に愛すること。古、支那の學者墨翟（ボクテキ）は、これを道德上の主義として、說を立てたり。博愛。

けん-あい 眷愛【名】なさけをかくること。かはゆがること。「こと。

けん-あう 玄奧【名】幽玄にして、深奧なること。

けん-あく 險惡【名】道路・天候・人情などのあらくけはしきこと。

けん-あく 元惡【名】わる者のかしら。元兇。

けん-あつ 驗壓【名】壓力を檢査すること。

けん-あつ 減壓【名】壓力を減ずること。

けん-あつ-き 檢壓機【名】㊀火藥瓦斯の砲腔面に及ぼす壓力を檢するための器具。㊁せいうけい（晴雨計）に同じ。

けんあつ-べん 減壓瓣【名】『英 Reducing valve』汽罐より來る高壓蒸氣を、一定の壓力まで減壓して使用する場合に用ふる汽瓣。

けん-あん 檢案・撿按【名】形跡・狀況等をしらべただすこと。「案。

けん-あん 懸案【名】解決せられずにある事。

けんあん 建安【名】支那の福建省泉州府德化縣（今は永春州に屬す）より產せし黑盞。

げんあん 原案【名】はじめて會議に掛けたる議案。（修正案に對して）「原案の通り可決す」

けんあん-しよ 檢案書【名】〔法〕犯罪の嫌疑などある場合に、醫師が死體を檢案せし始末を記載せる證書。

けんあん-たい 建安體【名】〔文〕『南宋の嚴滄浪の命名に係る。けんあん（建安）㊁を見よ』支那の詩の流派の一。曹植父子及び鄴下七子の詩風に基くもの。これらの諸人の詩、氣象と風骨とを以て、特色とす。

けん-い 險易【名】㊀むづかしきと、やさしきと。難易。㊁次條に同じ。

けん-い 險夷【名】けはしきことと、たひらかなることと。

けん-い 顓頊【名】『顓は尖りたる顏、頊は頗（ケツ）』あごの細く尖りたる顏。保元「顓頊と頤細に、隅目と目尻（ガン）みたり」

げん-い 原意【名】もとの意味。原義。

げん-い 言意【名】ことばの意義。

けん-い 縣有【名】縣といふ地方自治體の所有。「縣有財產」

けん-う 賢友【名】かしこきとも。

けん-う 懸抗【名】㊀いぼ。こぶ。㊁無用の長物。贅物。贅疣。蛇足。「有。

けん-いう 兼有【名】あはせもつこと。併同じ。

げん-いう 原由【名】物事の由りて起るところ。おこり。起因。原因。

けん-いう-しや 硯友社【名】明治十八九年の交、尾崎紅葉・山田美妙・石橋思案・川上眉山等の組織せし文學的結社。二十一年機關雜誌「我樂多（ガラク）文庫」を發刊するにあたり、山田美妙故ありて脫退し、巖谷小波・江見水蔭・廣津柳浪・大橋乙羽・中村雪後等入社し、畫工として、武內桂舟も加盟せり。

げん-いう-ゐん 嚴有院【名】〔人〕さくがはいへつな（德川家綱の諡（オクリ）。

けん-いし 劍石【名】かなめいし（要石）㊁に同じ。

けん-いち 見一【名】〔數〕㊀和算にて、法二桁以上なる場合に、法の首位一を見て割ること。㊁〔數〕『見一の外、法の首位二・三・

四等を見て割る場合を、それぞれ見二見三・見四等と呼ぶ。これを、一括して見一といふ。珠算にて、二桁以上の數にて、割算すること。はっさん(八算)參照。

見一無頭(ケンイツムトウ)**作九**(サキウ)**の一** 【句】〔數〕珠算における割算九九の一。法の首位にて割るに、實の數一にして、その以下の數が法の次位以下の數に滿たざる時は、一進が十を進むること能はざるより、實の一を見て頭位なく、よりて、その一を十と見て、一にて割れば、初商九を得て、一殘るとの義にて、實の一を九となし、その次の桁に、一を加ふる場合に唱ふるもの。

けんいてふ 劍銀杏 【名】 **けんみついとふ**(劍三銀杏)に同じ。

けんいん 獷狁・嚴狁 【名】**くんいく**(獷鬻)を見よ。

けんいん 劍印 【名】〔佛〕眞言密敎の印相の一。大日如來劍印と不動明王の劍印との二種あり。前者は二手を胸に當てて、外縛合掌し、兩中指の上節を屈して、横に相拄(サヘ)へ、兩拇指を以て、兩中指の中節を押へて、劍形の如くするもの、後者は左手の拇指を藥指と小指とに加へ、食指と中指とを直く伸べ、右手も同樣にし、その食指と中指とを左手の空處に入るるもの。劍の印。著聞、不動尊の仕者形をあらはして…左の手に劍並びに索を持ち、右の手に劍印をなす」

けんいん 檢印 【名】檢査のしるしに、印を捺(オ)すこと、又その印影。

けんいん 見印 【名】**みとめいん**(認印)に同じ。

けん-いん 牽引 【名】ひっぱること。引寄すること。

げん-いん 原因 【名】事のもと。おこり。はじまり。基因。原由。

原因の多數 【句】〔哲〕『英 Plurality of causes』異なる原因の同一なる結果を生ずること。例へば疾病・窒息・刃傷等の諸種の原因が、同じく死といふ結果を生ずしむる類。歸納法によりて、因果の關係を發見するにあたりての困難の一原因たり。

げん-いん 幻淫・幻婬 【名】〔哲〕幻覺の一。外來の刺戟なくして、婬行の感覺を起すこと。幻姦。

げんいん-がく 原因學 【名】『英 Etiology 又 Science of causes』 ■〔哲〕原因及び結果を研究する學。 ■〔醫〕體肉及び精神上の病症の原因を研究する學。病原學。 ■〔生〕有機體の起原及び發達の方法を研究する學。

けんいん-かんかく 牽引感覺 【名】〔哲〕『英 Pull sensation 又 Traction sensation』皮膚が筋肉より上方に引上げらるる時に起る一種の感覺、即ち壓覺の場合とは反對の刺戟に應ずる感覺。

けんいん-しょう 檢印證 【名】檢印を捺(オ)し難き貨物の船積を許すしるしとして、稅關より發する證。

けんいん-ていかう 牽引抵抗 【名】〔植〕植物體が牽引力に對する抵抗。牽引力は、體の中央部において最も大なるが故に、中央部に堅牢組織あり。

けんいん-りょく 牽引力 【名】『英 Hauling power』 ■牽引する力。 ■機關車が、列車の抵抗力に打勝ちて、牽引し得る力。

げんう 幻有 【名】〔佛〕諸法の假有(ケウ)なることを幻(マボロシ)に譬へたる語。

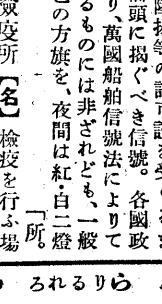
げんうふ 源右府 【名】〔人〕**みなもとよりとも**(源賴朝)に同じ。

けん-うん 卷雲 【名】〔地〕高き天空にあらはるる、白色にして纖維狀又は羽毛狀なる雲。細微なる氷雪片より成れるもの。(卷層雲・卷積雲・積卷雲・層卷雲・層積雲・亂雲・積雲・積亂雲・層雲に對して)

げん-うん 玄雲 【名】 ■**こくうん**(黑雲)に同じ。 ■**すみ-ぐも**(一)の異稱。

げん-うん 眩暈 【名】目のくらむこと。めまい。

げん-うめばち 劍梅鉢 【名】紋所の一。下の圖を見よ。



(ちばめうんけ)

けん-うろこかたばみ 劍鱗酸漿 【名】紋所の一。かたばみの各花瓣の間に、鋭き三箇の劍尖を介(ハ)みて、全形をして、略三角形をなさしむるもの。

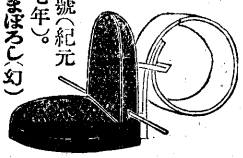
けん-えい 顯榮 【名】位高く、世に時めくこと。榮顯。

けん-えい 獻詠 【名】宮中・神社・佛閣などに、詩歌をたてまつること、又その詩歌。

けん-えい 卷纓 【名】古、武官が、冠の纓(エイ)の端を內方に卷き、黑く塗りたる木にて夾みおきしもの。まきえい。くわんえい。くゑんえい。

けんえい 建永 【名】土御門天皇の御代の年號(紀元二六六六年—一八六七年)。

げん-えい 幻影 【名】 ■**まぼろし**(幻)に同じ。 ■〔哲〕『英 Illusion』思想又は感覺の錯誤によりて、事實ならざるものを、事實の如く認むる現象。幻像。幻影消滅 【句】**げんめつ**(幻滅)に同じ。幻影の知覺 【句】〔哲〕**げんかく**(幻覺)に同じ。



(いえんけ)

げんえい 元永 【名】鳥羽天皇の御代の年號(紀元一七七八年—一七八〇年)。

げん-えい 玄英 【名】『玄は黑にて、冬又は北方の象。**げんとう**(玄冬)・**げんぷ**(玄武)參照』ふゆ(冬)の異稱。玄冥・青陽・朱明・白藏に對して)

げんえい-じん 玄英神 【名】冬を司るといふ神。

げん-えき 險要 【名】地勢の險岨にして、要害なること、又その地。險害。

げん-えき 權要 【名】權威ありて重要なる地位、又その地位にある人。

げん-えき 顯要 【名】高くして、樞要なる地位。顯官要職。「くこと。

げん-えき 眩燿 【名】まばゆきまできらめ

げん-えき 炫燿 【名】光りかがやくこと。

げん-えき 衒燿 【名】てらひかがやかすこと。見せびらかすこと。

けん-えき 檢疫 【名】傳染病などの蔓延を豫防するために、その流行地より來り、又はその地を通過し來れる船舶・汽車貨物・旅客などに就きて、檢診又は消毒などを行ふこと。

げん-えき 現役 【名】 ■軍人の服役期區分の一。現に軍務を執じ、又は修學中などにて、各その所屬隊に兵籍を有し、定限年齡に至るまで服役すること。兵卒・下士・准士官・將校及び同相當官の階級によりて、その期間一樣ならず。豫備役と合して、常備兵役といふ。(豫備・後備に對して) ■**げんえきへい**(現役兵)の略。

現役志願 【句】海・陸軍の現役服役を志願すること。海軍にては滿十七歲以上二十六歲未滿の男子、陸軍にては、滿十七歲以上二十歲未滿の男子、志願することを得。また陸軍には、別に一年志願兵の定あり。

けんえき-い 檢疫醫 【名】檢疫を行ふ醫員。

けんえき-かう 檢疫港 【名】『英 Quarantine harbour』乘客・船員及び貨物に檢疫と消毒とを施すべき特別設備を有する港。

けんえき-くわん 檢疫官 【名】 ■檢疫事務を行ふ官吏。傳染病流行し、又は流行の兆ある時、內務大臣の指定したる道又は府・縣にて、醫師・藥劑師等に就き、警視總監又は地方長官の任ずるもの、又は港務部の官吏を、場合によりて檢疫官と呼ぶ類にて、共に官名にあらず。 ■檢疫の事務を掌る職、即ち海港檢疫官・臨時檢疫部檢疫官などの類。

げんえき-しう 現役囚 【名】〔法〕公判にて確定したる刑に服し居る囚人。現役。(未決囚に對して)

けんえき-じうい 檢疫獸醫 【名】獸疫の發生したる時、その地方に於ける獸疫の有無を檢査するために、臨時に任命する獸醫官。

けんえき-しんがう 檢疫信號 【名】檢疫を要する船舶が、檢疫を施行する港に來れる時、交通・入港・陸揚等の許可證を受くるまで、その船の檣頭に揭ぐべき信號。各國政府の特定に係り、萬國船舶信號法によりて規定せられたるものには非ざれども、一般に、晝間は黃色の方旗を、夜間は紅・白二燈を連揭す。「所。

けんえき-しょ 檢疫所 【名】檢疫を行ふ場

けんえき-せん 檢疫船 【名】船舶の乘客に對して、檢疫を行ふ檢疫醫・檢疫官の乘船。

げんえき-ていげんねんれい 現役定限年齢【名】陸海軍武官及び兵卒が、現役として在職し得る最高の年齢。階級・兵種により一樣ならず。

げんえき-へい 現役兵【名】現役に服しつつある兵卒。(豫備兵・後備兵に對して)

げんえき-ぼう 現役俸【名】現役中の武官の俸給。

けんえき-ねん 檢疫委員【名】府・縣知事又は警視總監の指揮監督に屬して、檢疫の事務を取扱ふ委員。

けん-えつ 檢閲【名】Ⅰ檢査し、閲覽すること。校閲。Ⅱ(兵)りくかいぐんけんえつ(陸海軍檢閲)の略。

けんえつ-し 檢閲使【名】さくめいけんえつし(特命檢閲使)の略。

げんえふ-たい 原葉體【名】(植)『羅 Prothallium』羊齒(ダ)植物の胞子の發芽して後、生殖器官を著生するもの。即ち有性・無性兩生代交番の中の、有性生代における體にして、扁平・綠色を普通とすれど、絲狀・蠕蟲狀・紡錘狀等もあり。色も褐色なるもの、又、地中に埋もれて、無色なるもあり。又、同一體中に雌雄兩生殖器を生ずるものと、雌雄別體に生ずるものとあり。扁平體。

けん-えん 妍艶・妍豔【名】美しきこと。あでやかなること。「と。

けん-えん 倦厭【名】あきていやになること。

けん-えん 嫌厭【名】きらひいとふこと。

けんえん 慊焉【貌】あき足る感じ。慊如。(主に打消の場合にのみいふ)「心に慊焉たらず」

けんえん-き 檢鹽器【名】『英 Salinometer』水中の鹽分又はその他の固形體の多少を測定するに用ふる、一種の比重計。

けんえ-をう 懸衣翁【名】(佛)『十王經に見ゆ。じふわうきやう(十王經)を見よ』奪衣婆(エバ)と共に、三途川(サンヅ)の對岸、衣領樹(エリサン)の蔭に居るといふ鬼。奪衣婆の剝ぎたる罪人の衣服を、樹の枝に懸けて、罪の輕重を量るといふ。

げん-おう 玄應【名】(佛)『應の字、上の玄の字の韻に引かれて、ノウと發音す』唐玄昌曰、高帝封三王子弟、地犬牙相制、此所レ謂磐石之宗也」とあるに本づく』兩國の境土を、犬牙のごとくに相交はり接せしめて、互に控制せしむ。(諺語)

げん-か 元歌【名】もとうた(元歌)に同じ。

げん-か 嚴苛【名】きびしくむごきこと。苛嚴。苛酷。

げん-か 絃歌・弦歌【名】絃樂器の彈奏につれて、歌をうたふこと。彈(ひ)くと歌ふと。

げん-か 現價【名】現在のねだん。時のさうば。

げん-か 減價【名】Ⅰあたひを安くすること。ねさげ。ねびき。Ⅱ壓價を落すこと。

げん-か 原價・元價【名】『英 Prime cost』Ⅰ(商)しいれねだん(仕入値段)に同じ。Ⅱ(經)せいさんひ(生產費)に同じ。

げん-か 現下【名】げんざい。目下。

げん-か 玄關【名】げんくわん(玄關)の訛。

げん-か 言下【副】ことばのした。一言のもと。言下(カン)。甲陽軍鑑「批判して見給へと、小山田彌三郎言下よりいふ」

げん-が 嚴駕【名】『げんてい(嚴程)を見よ』

けんかい 硯海【名】Ⅰ硯(スズ)の海」に同じ。Ⅱ地)『赤間關(カラキ)は硯石の名産地、門司(モ)は文字と、音相通ずるによりていふ』くわんもんかいけふ(關門海峽)の雅稱。

けんかい 兼海【名】(人)高僧。字は淨法。密嚴尊者に師事し、最も密藏の法に通ず。世に密嚴第二世と稱せられ、終はる所を知らず。

けん-かい 見解【名】意味のときかた。さとりかた。みどころ。けんげ。「見解を下(クダ)す」「見解を異にす」

けん-かい 狷介【名】『狷は己が分を守りて、不義をなさざる意、介は堅確・不拔の貌』固く執りて、少しも人と相容れざる性質。孤介。「狷介の士」「小心・狷介」

けん-かい 縣界【名】縣のさかひ。

けん-かい 劍界【名】劍道に携はる人人の仲間。「劍界の名人」

けん-がい 險害【名】Ⅰけはしくして、要害なること、又その所。險要。Ⅱ險惡にして、害心あること。

けん-がい 兼該【名】かね具ふること。

けん-がい 懸崖【名】Ⅰ山の斜面の、切立てたるがごとくなるところ。きりぎし。がけ。斷崖。Ⅱ盆栽の樹勢の、山の斜面に生えたる形をなし、その幹枝の、根よりも卑く懸垂せるがごとき狀をなせるもの。又、幹の直くして、未だ懸崖といふ程に至らぬものを、半懸崖といふ。

けん-がい 懸崖撒手(サツ)【句】(佛)『懸崖より、手をはなして落る意。無門關に「劍刃上行、氷稜上走、不レ涉二階梯一、懸崖撒レ手」とあるに本づく』進退きはまりたる場合に、更に勇氣をおこし、思切りて奮進する譬。死中に活を求む。

げんかい 顯界【名】この世。現世。現世界。(幽界に對して)「り。經界。

げん-かい 限界【名】しきり。さかひ。かぎること。嚴重に用心すること。

げん-かい 諺解【名】平易・通俗の言葉にて解釋すること。

げんかい-かうよう 限界效用【名】(經)『英 Marginal(又 final) utility』財貨の各部の効用は、その最初に於て最大なれども、順次に減少し、最後に最少となるべきこと。例へば水を使用するにも、その順序は、飲料・洗濯・沐浴・撒布等多く必要を感ずる用途より、必要少なき用途に及ぶを常とする類の、その最後の部分における最少の部分の効用。財貨は、普通その用途に限あるが故に、その供給量多きに從ひて、終に用途に苦しむに至り、これに對する慾望は益減少するにより、限界効用は供給量と常に反比例す。最少効用。最終効用。

げんかい-かく 限界角【名】(理)りんかいかく(臨界角)に同じ。

げんかい-が-しま 玄海島【名】(地)次條に同じ。百合若大臣野守鏡「いたはしや、百合若はもくりの大敵悉く攻亡し、玄海が島に凱陣あり」

げんかい-しま 玄界島【名】(地)筑前國玄海洋に在る島。絲島郡北崎村に屬し、福岡

瀧口の西側を成す。周回約一里。弘安四年蒙古兵船の襲攻せりといふ鷹島(タカシマ)も、この島なりとの説あり。

げんかい-せん 限界線【名】限界とせる線。

げんかいてき-せいさんひ 限界的生産費【名】〔經〕財貨を實却して得たる收入が、その生産に要したる費用を償ひて、過不及なき場合の生産費。

げんかいてき-りじゅん 限界的利潤【名】〔經〕利潤が資本を投下するに足るべき限界にあること。

げんかい-なだ 玄界洋【名】〔地〕筑前國絲島郡の西北方に位する海洋。東方響灘(ナダ)に連なり、風波の險惡を以て名高く、南岸に福岡・唐津(カラ)の二灣あり、又、洋中に大島・小呂(コロ)島・名島・烏帽子島・姫島・玄界島・相島(アイノシマ)等の島嶼あり。別稱、九州洋(カイ)。

けん-かう 權衡【名】㊀秤(ハカリ)の錘(オモリ)と竿(サヲ)と。㊁物と物との平均。つりあひ。「權衡を得」「權衡を失(ウシナ)す」

けん-かう 權綱【名】政綱。政權。

けん-かう 乾綱【名】帝王の施政の大綱。政事のおほづな。

けん-かう 健康【名】すこやかなること。たっしゃ。丈夫。壯健。

けん-かう 堅硬【名】固きこと。堅固。

けん-かう 檢校【名】『檢知・校量の義』とりしらべ、考へあはすること。點檢。**けんげう**(撿挍)參照。

けん-かう 建櫜【名】『建は、鍵にて鎖(サ)す義、櫜は、兵甲をさめおく袋』戰爭のやみたること。

けん-かう 兼行【名】㊀急ぎて、普通に倍する路を行くこと。兼程。「晝夜兼行」㊁普通に倍する事をなすこと。㊂かねて行ふこと。愚管抄「女人入眼の孝養・報恩の方も、兼行してよからめ」

けんかう 兼好【名】〔人〕よしだけんかう(吉田兼好)を見よ。

けん-かう 軒昂【名】『軒も昂も、高くあがる義』意氣の昂進すること。

けん-がう 軒號【名】軒といふ接尾語を添へたる名號。**けん**(軒)參照。

けん-がう 諠囂・喧囂【名】かまびすしきこと。

けん-がう 賢豪【名】かしこくすぐれたること、又その人。

けん-がう 堅剛【名】**がうけん**(剛堅)に同じ。

けん-がう 健剛【名】**がうけん**(剛健)に同じ。

けん-かう 言行【名】ことばと、おこなひと。云爲(ウンヰ)。「筆。

けん-かう 原稿【名】したがき。草稿。草

けん-かう 現行【名】現在行ふこと、また行はるること。目の前にて行ふこと。

けんかう 元亨【名】後醍醐天皇の御代の年號(紀元一九八一年—一九八四年)。

けん-がう 元號【名】**ねんがう**(年號)に同じ。

けん-がう 減號【名】〔數〕『英 Minus』引算の符號、即ち15−8の−の類。まいなす。

けん-がう 減耗【名】へること。減少。

けんかうかく 權衡覺【名】〔哲〕「均勢の感覺」に同じ。

けん-がうし 原稿紙【名】原稿を書くための紙。普通は、縱橫に罫を引きありて、字數を數ふるに便す。原稿用紙。

けんかう-しんだん 健康診斷【名】『英 Medical examination』傳染病傳播の危險などある時、健康者の身體をも檢査して、その異狀の有無を察すること。

げんかう-しゃくしょ 元亨釋書【名】〔書〕推古天皇より、元亨年間に至るまで、七百餘年間の僧侶の傳記・評論及び各派傳來の次第を漢文にて記せるもの。略して、釋書ともいふ。三十卷。虎關師尚の作。

けんかう-しょう 健康證【名】健康狀態に關する診斷の結果を、醫師の署名を以て記錄したる證。健康證書。「に同じ。

けんかう-しょうしょ 健康證書【名】前條

けんかう-しょうめいしょ 健康證明書【名】けんぜんしょうしょ(健全證書)に同じ。

けんかうてうやく 現行條約【名】現在に於て効力を有する條約。

けんかうはふ 現行法【名】〔法〕現に行はれて、効力を有する法律。現行法規。(舊法に對して)

げんかう-はふき 現行法規【名】〔法〕前條に同じ。

げんかう-はん 現行犯【名】〔法〕現に行へる際、又は行ひ了はりたる際に發覺せる犯罪。この犯罪者は、何人にても逮捕するを得べく、又これが逮捕に、令狀を要せざる等、手續簡易なり。現行犯罪。(非現行犯に對して)**こいげんかうはん**(準現行犯參照。

げんかう-はんざい 現行犯罪【名】〔法〕前條に同じ。

げんかう-はんにん 現行犯人【名】〔法〕現行犯として發覺したる場合の犯人。

げんかう-ほふし 兼好法師【人】よしだけんかう(吉田兼好)に同じ。

げんかうもん 元好問【名】〔人〕**げんねさん**(元遺山)に同じ。

げんかう-ようし 原稿用紙【名】**げんかうし**(原稿紙)に同じ。

けんかうらいし 遣高麗使【名】中古、我が國より高麗に遣りたる使者。遣新羅使・遣隋使・遣渤海使の類。

けんかう-りつ 建孝流【名】槍術の一派。伊東紀伊守佐忠を祖とす。

げん-かうりてい 元亨利貞【名】『易經の乾卦に「乾、元亨、利貞」とありて、もと占辭なるを、孔子の文言傳を作るや「元者善之長也、亨者嘉之會也、利者義之和也、貞者事之幹也、君子體レ仁足二以長一レ人、嘉會足二以合一レ禮、利レ物足二以和一レ義、貞固、足二以幹一レ事、君子行二此四德一者、故曰、乾元亨利貞」と說明して、四德と立てしなり』天の四德なりといふ元と亨と利と貞と。元は萬物發生の根元にて、春に屬し、仁と爲し、亨は萬物の長ずることにて、夏に屬し、禮と爲し、利は萬物の熟することにて、秋に屬し、義と爲し、貞は萬物の成就することにて、冬に屬し、智と爲す。

げんかうれう 原稿料【名】原稿の起草に對して仕拂ふ報酬。

けんがうゐん 遣迎院【名】京都市上京區北之邊町に在る淨土宗の寺。西山派四箇本山の一。もと藤原道家、善惠に歸依して創建し、當時淨土・天台・眞言・律四宗兼學の道場たりき。天正十三年今の地に移る。本尊は元三大師作の撥遣釋迦・來迎彌陀。

けん-かく 研覈【名】こまかに論究すること。研究。「こと。

けん-かく 檢覈【名】きびしく取り調ぶること。

けん-かく 堅確【名】かたく、しっかりとしたること。

けん-かく 懸隔・縣隔【名】『懸は遠く隔たる意。けんぐん(懸軍)を見よ』かけはなれること。かけへだたり。懸絕。「者。

けん-かく 劍客【名】劍術をつかふ人。劍客

けん-かく 堅革【名】堅きなめしがは。

けん-かく 繭殼【名】まゆのから。

けん-かく 顯赫【名】あきらかなること。

けん-かく 劍閣【名】〔地〕支那四川省保寧府劍州の東北に在る劍門關の舊稱。蜀壁千仞、閣道を以て行派を通じ、古來、巴蜀の重險と稱せらる。

けん-がく 見學【名】實地を見て學ぶこと。

けん-がく 衒學【名】學識をてらふこと。

けん-がく 研學【名】學問を研究すること。

けん-がく 兼學【名】種種の學問を兼ねまなぶこと。

けん-がく 謇諤・蹇諤【名】『謇は忠實また直言の義、諤も直言の義』忠實にして、正直に論議すること。

けん-がく 懸隔【名】**けんかく**(懸隔)に同じ。

けん-がく 懸隔【副】かけはなれて。ことのほか。思の外に。日本武尊吾妻鑑「始の一人に落著いて、各釜に手をさし入れ、前後を爭ひ、高笑、これはけんがく心安い」

げん-かく 嚴格【名】きびしく、おごそかなること。嚴重。

げん-かく 儼恪【名】おごそかにして、つつしむこと。謹嚴。

げん-かく 幻覺【名】〔哲〕『英 Hallucination』知覺の一。感覺機關が外界より何等の刺戟をも受くることなきに、誤りて、外界に實物あるがごとくに知覺すること。多くは精神病者に於て見る。幻視・幻聽・幻觸・幻味・幻嗅・幻婬等の種類なり。夢もまたその一。幻影の知覺。妄覺。幻想。

げん-かく 玄鶴【名】黒色のつる。

げん-かく 減格【名】品位又は品格をおとすこと。

げん-がく 減額【名】數をへらすこと、又その數。「の數。

げん-がく 玄學【名】幽玄なる學問。佛學又は老莊學などの稱。

けん-がく 鍵樂器【名】『英Keyed instruments』樂器の一。ピヤノ・オルガン等の如く、鍵(ケン)を押して奏するもの。(管樂器・絃樂器・擊樂器に對して)

げん-がく 絃樂器【名】『英Stringed instruments』樂器の一。琴・三味線・バイオリン等の如く、絃を張りたるもの。(管樂器・鍵樂器・擊樂器に對して)「に同じ。

けんかくし 劍客者【名】けんかく(劍客)

けんかく-しゃぎ 嚴格主義【名】〔哲〕げんしゅくしゅぎ(嚴肅主義)に同じ。

げんかく-はん 幻覺犯【名】〔法〕ごうはん(誤想犯)に同じ。

けんかく-もの 劍客者【名】けんかく(劍客)

劍客者劍を賣らず、槍術者槍を賣らず、馬術者なぜに馬を賣る【句】劍客・槍客皆その道具を愛惜するに、獨り馬術者のみは、多く馬に篤からず。〔諺語〕

けんがさう 犬牙草【名】〔植〕こまつなぎ(駒繋)に同じ。

けん-がしら 間頭【名】江戸時代の檢地用の具。田地を丈量する時、四隅に標竿を樹て、間數の出入を見るに用ふるもの。長さ一丈三四尺にて、頭に幅一寸ほどの紅又は白の布を束ねたるもの。

けん-かず 軒數【名】けんすう(軒數)に同じ。

けんがせき 犬牙石【名】〔鑛〕『英Dog-tooth spar』方解石の尖りたる結晶が岩上に犬牙狀をなして簇生するもの。我が國にては、陸中國・羽後國等より產し、裝飾品に供す。

けん-がた 劍形【名】紋所にて、劍のかたち。薩摩歌「劍形は日向大名」

げん-がた 驗方【名】修驗(シュゲン)に關する方面、又は人。驗者。〔古語〕源氏「今は、この世の事を思ひたまへねば、げんがたの行も捨て忘れてはべるを」

けんかだ 兼霞堂【名】〔人〕きむらけんかだう(木村蒹霞堂)を見よ。

けん-かたばみ 劍酸漿【名】紋所の一。酸漿(カタバミ)の葉の間に、劍さきを介(サ)みたるもの。

けん-かぢや 劍鍛冶屋【名】劍を鍛ふるを專らとする鍛冶。今國姓爺「家の名も、手業と合に相槌の音に聞えし劍鍛冶屋、陶民子が細工所に」

げん-かはせてがた 原爲替手形【名】〔商〕爲替手形の振出し後、一回も裏書せられずして、直ちに割引せらるるもの。

けん-かふ 堅甲【名】■丈夫なるよろひ。堅(ケン)。■堅き甲冑。「骨」の略。

けん-かふ 肩胛【名】〔醫〕けんかふこつ(肩胛骨)の略。

げん-かふ 嚴閤【名】げんかふ(嚴父)に同じ。十劃「嚴閤の助成を疑ひて、院門を閉ぢて往反せしめず」

けんかふ-きん 肩胛筋【名】〔醫〕上肢筋の一。肩の筋肉、即ち三稜筋・棘上筋・棘下筋・小圓筋・肩胛下筋の五筋の總稱。

けんかふ-くわんせつ 肩胛關節【名】〔醫〕肩胛骨と上膊(ジョウハク)骨頭とより成る關節。

けんかふ-こつ 肩胛骨【名】〔醫〕肩の兩側の背面にある、扁平・三角形なる骨。上肢を軀幹に連結する用をなす。かいがね。かひがねぼね。かひがらぼね。かひがね。肩胛。肩帶。

けんかふ-たい 肩胛帶【名】〔醫〕上肢骨を軀幹に繫く骨。肩胛骨と鎖骨とより成る。かたぼね。上肢帶。

けんかふ-だっきう 肩胛脫臼【名】〔醫〕上膊骨頭の關節窩を脫出すること、即ち俗に腕の脫(ヌ)けるといふもの。上膊脫臼。

けん-かん 險艱【名】けはしくして、登りがたきこと。けはしくむづかしきこと。

けん-かん 建艦【名】軍艦を建造すること。

けん-かん 堅艦【名】堅牢なる軍艦。

けん-かん 軒檻【名】らんかん(欄干)に同じ。和泉式部集「手すさびに軒檻にかきつく」

けん-がん 堅岩【名】■地■『獨Hornfels』硬化せる粘板岩の一種。水成層が火成岩に接し、變質して生ずるもの。我が國花崗岩地方に多し。

げん-かん 嚴寒【名】つよきさむさ。きびしきさむさ。

げん-かん 玄鑑・玄鑒【名】『玄妙なる鑑(カガミ)の意』人の心。太平記「玄鑑、空(クウ)に似たり、神(シン)もし神たらば、君なんぞ君たらざる」「同じ。

げん-かん 幻姦【名】〔哲〕げんいん(幻婬)に同じ。

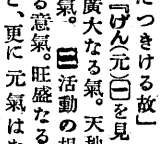
げん-かん 阮咸【名】■〔人〕支那晉代の人。竹林七賢の一。字は仲容。鄰下七子の一人なる阮瑀(ウ)の孫、阮籍の兄の子。仕へて散騎侍郎に至り、音律に妙にして、よく琵琶を彈ず。■『上記の阮咸の造れるによりての名といふ』支那古代の樂器。琵琶の變形にて、月琴の一種と見るべきもの。明樂にては月琴と呼べども、清樂の月琴とは異なり。今傳はれるは、胴圓形なれども、楕圓形・方形などのもあり。■清樂に用ふる樂器。花櫚(カユ)にて造り、四絃・十四柱にして、胴は八角の花形をなし、その表裏に桐板を張り、紫檀又は黑檀にて造れる棹を附けたるもの。徽枕には象牙を用ふ。


(阮咸(二))

げん-がん 嚴顏【名】■嚴正なる顏つき。太平記「事君之禮、値二其有一レ非、犯二嚴顏一以レ道諫諍」■〔人〕支那三國の時の劉璋の將。江左を守りしに、蜀の張飛に擒にせられ、飛その擧動を壯として、釋(ユル)せり。

けんがん-きやう 檢眼鏡【名】眼球内を照して、その底を檢査する眼鏡。暗室内にて、一定の光線を眼底に送り、レンズに照して檢査す。西曆一八五一年物理學者として有名なる獨逸人ヘルモホルツ(H. L. F. Helmholtz)の發明せしものにて、この發明によりて、眼科醫術は、一大光明を得たり。

けん-からばな 劍唐花【名】紋所の一。下の圖を見よ。


(なばらかんけ)

げんかれき 元嘉曆【名】支那宋の元嘉二十年に、何承天の造りし曆。我が國には欽明天皇の御代に傳はり、持統天皇の四年十一月(一說に推古天皇の十二年正月)より用ひしが、その曆太陽の躔度(テンド)に後ること五十三刻なりしため、文武天皇の七年儀鳳曆これに代れり。

けん-き 遣歸【名】かへしやること。つかはしかへすこと。

けん-き 險危【名】きけん(危險)に同じ。

けん-き 軒岐【名】『古、支那にて、黃帝軒轅氏が、岐伯をして、醫藥の事をつかさどらしめ、民の疾を癒さしめしよりいふ』いじゅつ(醫術)の異稱。

けん-き 軒騎【名】車に乘ることと馬に乘ることと、又その車馬。平家「軒騎群集して、門前市をなす」

けん-き 險嶮・險巇【名】けはしく高きこと。

けん-き 嫌忌【名】いみきらふこと。厭忌。

けん-き 顯貴【名】貴き位にあること、又その人。貴顯。

けん-き 權貴【名】權勢ありて、貴き地位にあること、又その人。長明寺藏百人上臈「德をかくして、權貴にほこらず」

けん-き 權奇【名】■奇にして、尋常に異なること。■權謀にして、奇道なること。

けん-ぎ 權義【名】權利と義務と。

けん-ぎ 權宜【名】その時の便宜。機宜。

けん-ぎ 嫌疑【名】『嫌は此を以て、彼を疑ねて、まぎらはしき意、疑は彼・此相似てうたがはしき義』うたがひ。あやしみ。源氏「さやうのけんぎはなれても、又かのゆゑごんはたがへじと」

けん-ぎ 建議【名】■意見を申し出づること。建白。■一の國家機關より同等もしくは上級の國家機關に、又は私人より政府に、その希望を陳述すること。

げん-き 驗氣【名】治療の効あること。げん。今昔「母は驗氣につきける故」

げん-き 元氣【名】■『げん(元)■を見よ』萬物發生の根本たる、廣大なる氣。天地間に磅礴する、廣大なる氣。■活動の根本となる氣力。■壯なる意氣。旺盛なる氣力。文武五人男「養生すれど、更に元氣はなかりけり」■『チイハの用語より出でしといふ』なんこん(男根)の隱語。〔元貴〕〔俚語〕

げん-き 原器【名】『英 Prototype』同種類の物の、其本標準として製作せられたる器。例へば度量衡の原器の類これなり。我が國のは、西暦一八七二年萬國度量衡委員會の設計・製造に係る、白金とイリヂウムとの合金にて造れる棒と分銅とにて、農商務大臣これを保管し、なほその代用として、副原器二箇を製作せしめ、又、副原器により、更に檢定原器を製作せしめて、度量衡器檢定の標準に供す。

げん-き 衒氣【名】高ぶりてらふ氣風。てらふ氣味。

げん-き 嚴毅【名】おごそかにして、たけきこと。

げん-き 玄機【名】玄妙にして測るべからざる機用。

げん-き 玄軌【名】『軌はのっとるべき道の義』玄妙なる一定の道。

げん-き 元龜【名】『元は大の義。げんぶ(玄武)を見よ』卜(ウラナヒ)に用ふる龜の甲。

げんき 元龜【名】正親町天皇の御代の年號。紀元二二三〇年—二二三二年)。

げん-ぎ 讞議【名】『讞は罪を議する意』罪を議し定むること。

げん-ぎ 原義【名】根本の意義。原意。

げん-ぎ 紘妓【名】うたひめ。藝妓。

げん-ぎ 嚴儀【名】おごそかなる儀式。太平記「言語同斷の嚴儀なり」

げん-ぎ 玄義【名】■玄妙なる義理。沙石集「この玄義の中に侍るにや」■(佛)經論を講ずるに、まづ文前において、一經の深義を分別すること。玄談。■(基)『佛教の語』『英 Mystère』神妙不可思議なる事がら。(天主)

げん-ぎ 言議【名】げんろん(言論)に同じ。

げんぎ-あん 建議案【名】建議の草案又は議案。

げん-きう 研究【名】修めきはむること。みがききはむること。研鑽。

げんきう 建久【名】後鳥羽天皇の御代の年號(紀元一八五〇年—一八五八年)。

げん-ぎう 牽牛【名】**げんぎうせい**(牽牛星)の略。川中島合戰「君が牽く牛の綱手のとりなりは彼の牽牛の姿よなう」

げんきう 元久【名】土御門天皇の御代の年號(紀元一八六四年—一八六五年)。

げん-きう 幻覺【名】(哲)『英 Hallucination, smell』幻覺の一。外來の刺戟なくして、覺を生ずること。幻臭。

げん-ぎう 原牛【名】(動)『羅 Bos primigenius』牛の原種。通例、原始牛・短角又は長額牛・大額牛・短頭牛の四類となす。

げんぎう-くわ 牽牛花【名】(植)あさがほ朝顏■に同じ。

げんぎう-せい 牽牛星【名】(天)俗に織女(シヨク)星の夫なりといふ星。天河(カハ)中、鷲座(ザ)の附近に在り、三星より成る。ひこぼし。いぬかひぼし。いなみぼし。うしくひぼし。たなばた(棚機)■參照。

げん-きき 驗氣器【名】■氣體の容量と組成とを試驗するに用ふる器具。■せいうぎ(晴雨儀)に同じ。

げん-ききやう 劍桔梗【名】紋所の一。桔梗の花瓣五箇の間に、五箇の劍先を插みたるもの。

げんぎく 劍菊【名】紋所の一。十六瓣の菊花の花瓣の端を、劍のごとく尖らしたるもの。

げんぎ-けん 建議權【名】(法)議會が政府に建議し得る權。

げんき-こだつ 劍氣褪脫【名】(音)唐樂の一。盤涉(ヤキ)調二十二曲の一。散樂。

げんぎ-しや 嫌疑者【名】嫌疑を受けたる人。

げんぎ-しよ 建議書【名】建議の趣を記したる書面。

げんきせい-さいきん 嫌氣性細菌【名】(動)『獨 Anaerobe Bakterien』酸素の存在せざる所にて發育し、空氣に觸るれば死する細菌。破傷風菌・惡性水腫菌等の類、これに屬す。

げん-きつかふ 劍龜甲【名】げんさき(劍先)■に同じ。

げん-きふ 嚴急【名】きびしくはげしきこと。きびしく氣短かなること。せっかち。

げん-きふ 原級【名】(語)『英 Positive』副詞又は形容詞の、程度の普通なるを示す形。主に西洋の文法にていふ。(比較級・最上級に對して)

げん-きふ 元級【名】もとの等級、又はもとの學級。「元級に留まる」

げん-きふ 減給【名】■給料又は給與の額を減ずること、又その減じたる額。(增給に對して)■(法)海員懲戒の一。給料の月額十分の一以下を減ずるもの。

げん-きふ 言及【名】いひおよぼすこと。

げん-きん 兼勤【名】二つ以上の役目を兼ねつとむること。

げん-きん 獻金【名】■金を獻上すること、又その金。■基督敎の信徒が、その敎會へ、臨時又は月月金を捧ぐること、又その金。

げん-きん 獻芹【名】■『呂氏春秋に「野人、美芹、願レ獻二之至尊一」とあるに本づく』人に物を贈ることの謙稱。粗品。寸心。「獻芹の微誠を致す」■物を贈ること。太平記「獻芹の賂は爲レ奪レ心なれば」■忠義を盡すことの謙稱。

げん-きん 獻勤【名】追從して、奉公ぶりを示すこと。御前追從(オヨウ)。「こと。

げん-きん 懸金【名】金錢にて、懸賞をなすこと。

げん-きん 兼金【名】價が普通のものの二倍にも達する黃金。「じ。

げん-きん 拳錦【名】げんまはし(拳回)に同じ。

げんきん 乾金【名】げんごきん(乾字金)の略。「同じ。

げん-きん 元金【名】げんろくきん(元祿金)に同じ。

げん-きん 嚴禁【名】きびしくさしとどむること。

げん-きん 現金・見金【名】■現にその場に在る金。ありがね。■「英 Cash』證書・手形・債券・目錄などにあらざる、實際の金錢。げんなま。通貨(證書・手形・債券・目錄などに區別していふ)■(經)『英 Cash』通貨。小切手・一覽拂手形の總稱。(小切手・一覽佛手形は何時にても通貨に換へ得るものなるより、併せていふ)■即時支拂ふ代金。即金。現銀。■その場にて、金錢を授受すること。即金。現銀。「現金掛直なし」■利益の如何によりて、直ちにその仕むけを變ふること、又その性質の人。

げん-ぎん 現銀【名】前條に同じ。會我虎が聾、いっそ現銀に割付のともがらは、この世にては無比の野らを盡し」

げんきん-あきなひ 現金商【名】現金と引換に、賣りたる品を買人にわたすあきなひの仕方。現金賣買。(掛商に對して)

げんきん-うり 現金賣【名】現金と引換に商品を賣ること。(掛賣に對して)

げんきん-うり-ねだん 現金賣値段【名】(商)

げんきん-がひ 現金買【名】現金と引換に商品を買ふこと。(掛買に對して)

げんきん-かんぢやう 現金勘定【名】(商)

げんきん-かんぢやう(金銀勘定)に同じ。

げんきん-きやく 現金客【名】現金買をする客。

げんきん-さうば 現金相場【名】(商)現金拂にて取引するときの商品の相場。現金實値段(ゲンキンジツ)。

げんきん-しばり 現金主義【名】その場のみの利益を標準として、萬事をなすこと。

げんきん-すゐたふちやう 現金出納帳【名】

きんせんすゐたふちやう(金錢出納帳)に同じ。

げんきん-すゐたふぼ 現金出納簿【名】前條に同じ。

げんきん-ぜんと 現金前渡【名】一般會計に屬するものにては、國債の元利拂、軍隊軍艦・官船に屬する經費、在外各廳の經費・外國にて支拂をなす經費等、又、特別會計における學校の標本品購入費等のごとき、一定の經費につき、現金支拂をなさしむるため、國務大臣の發したる支拂命令により、金庫より、これを受くる資格ある官吏、又は政府の命じたる銀行に、豫め現金を渡すこと。

げんきん-ぜんと-くわんり 現金前渡官吏【名】現金前渡を受くる官吏の俗稱。この官吏は、一に所屬長官の任命による。

げんきん-てもと-ありだか 現金手許有高【名】簿記上にて、現に手許にある現金の額。即ち現金の收入額と支出額との差。

げんきん-とりたて 現金取立【名】■現金を取立つること。■次條の略。

げんきん-とりたて-いうびん 現金取立郵

便【名】特殊郵便の一。送付する郵便物に對する現金取立を、郵便局が私人に代りて行ふもの。現金取立。次條參照。

げんきんとりたて-いうびんぶつ 現金取立郵便物【名】 現金取立郵便物として取扱はるる郵便物。即ち持參人に支拂はるべき代金受領證・株式配當券・公債又は社債の利券・保險掛金受領證にて、一口の金額一千圓以下なるもの。郵便局は、これらの物を、委託書と共に郵便局が受取りて、受領書を交付し、これを受けたる郵便局は、更に取立郵便局に送付し、取立郵便局より、委託者に對して、現金取立の通知ありたる時、委託者は、その通知書と先の受領書と取立金送達料とを、委託郵便局に差出して、取立金の交付を受く。

げんきんとりたてれう 現金取立料【名】 現金取立郵便の料金。

げんきんとりたて-ねたくしよ 現金取立委託書【名】 現金取立郵便の依託を爲さんとする者が、取立つべき金額の證券と共に、郵便局に差出すべき書面。

げんきん-とりひき 現金取引【名】〔商〕次條に同じ。(掛取引に對して)

げんきん-ばいばい 現金賣買【名】〔商〕『英 cash on cash』商品の引渡と同時に、現金の代價を受取りて、賣買すること。現金取引。(掛賣買に對して)

げんきん-はふ 現金法【名】 記帳法の一。すべての取引を、一旦金錢と交換せられたるものと見做して、これを貸借に仕譯すること。即ち銀行日記帳の類。

げんきん-ばらひ 現金拂【名】〔商〕商品の引渡と同時に、代金の現拂をなすこと。

げんきん-ゆそう-てん 現金輸送點【名】〔經〕『英 specie point』爲替相場の、最高もしくは最低の限度。爲替相場の高低が、一定の度を超えて、不相當に高く、又は低き時は、爲替によらず、現金を輸送すべきが故に、一定の限度あるなり。正金輸送點。

げんきん-もん 玄輝門【名】 平安京舊內裏の內廓十二門の一。內裏の北、安嘉門と徽安門との間、朔平門の背後、貞觀殿(ヂヤウグデン)の前にありしもの。

げんきもんゐん 玄輝門院【名】〔人〕後深草天皇の妃。藤原實雄の第三女。御名は愔子(シ)。伏見天皇の御生母。後、出家して自性と稱し、天德元年薨ず。年八十四。

げんきやう 牽強【名】 無理にこじつくること。強牽。附會。

牽強附會【句】前條に同じ。

げんきやう 檢鏡【名】 顯微鏡にかけて、黴菌などを檢査すること。

げんきやう 喧狂【名】 やかましく氣違ひじみたること。

げんきやう 兼行【名】 かね行ふこと。けんかう。

げんきやう 現況【名】 現在のありさま。「狀。

げんぎやう 現形【名】 ㊀神佛などの形を示現すること、又その形。げぎやう。 ㊁現在の形狀。げんけい。原狀。

げんぎやう 元慶【名】 陽成天皇の御代の年號。紀元一五三七年—一五四五年。

げんぎやうじ 元慶寺【名】 山城國宇治郡山科(ヤマシナ)村大字北花山(キタハナヤマ)にある眞言宗の寺。華頂山と號す。もとは天台宗。陽成天皇降誕の時、僧遍昭祈願を發して建立せしもの。天皇即位の後、元慶元年定額寺(ヂヤウガク)に列し、遍昭座主に任ぜらる。花山天皇この寺の嚴久に歎かれて、剃髮せられたり。中古以來衰退す。一名、應德寺東山寺・花山寺。

げんきやうじん 鉗狂人【名】〔書〕藤井貞幹の御口發を論破せるもの。一卷。本居宣長の著。

げん-きやう 健脚【名】 脚力の強きこと。丈夫なる足。

げん-きやく 蹇脚【名】 ちんば。びっこ。

げん-きやく 現脚【名】 現在せる金錢。現金。運歩色葉集「現脚、ゲンキヤク」

げん-きやくす 減却す【動佐變自】 ㊀へる。すくなくなる。減少す。減損す。 ㊁へらす。減ずる。藝村「櫻狩美人の腹や減却す」

げん-きやう 研窮【名】 けんきう(研究)に同じ。

げん-きよ 堅拒【名】 堅くこばむこと。

げん-きよ 謙遜【名】 謙遜にしてわだかまりなきこと。

げん-きよ 檢擧【名】 犯罪・犯則などの形跡をしらべ、又その證據をとり集むること。

げん-きよ 軒渠【貌】 笑ふさま。

げん-ぎよ 懸魚【名】 げぎよ(懸魚)に同じ。運歩色葉集「懸魚、ケンギヨ」

げん-ぎよ 言語【名】 げんご(言語)に同じ。

げん-きよう 謙恭【名】 きやうけん(恭謙)に同じ。

げん-ぎよう 喉喁【名】 魚が、口を水の上にあらはすこと。あぎとふこと。太平記「轍魚雨を得て、喉喁の脣をうるほす」に同じ。

げん-きよう 元兇【名】 げんあく(元惡)に同じ。

げん-きよく 建極【名】『書經』の洪範篇に「皇建二其有極一」とあるに本づく。極は中の義にて中道なり』民ののっとるべき道を立つること。

げん-きよく 蹉跼【名】 體を曲げちぢむること。「と。

げん-きよく 卷曲【名】〔植〕一方に卷くこと。

げん-きよく 拳曲【名】 まがりくねること。

げん-きよく 元曲【名】 支那元朝の詞曲。「漢史・唐詩・宋文・元曲」參照。

げんきら-ばん 原基羅盤【名】『英 Gbaudard compass』船舶において、針路を定め、物體の方位を測る等、一切の測量用に供する優良なる羅盤にして、他の羅盤の本位となるべきもの。指北力强大にして、方位圈あるものを擇び、船舶の首尾・中央の縱線內に、著大なる鐵具よりは、なるべく遠ざけて備へ附く。本位羅盤。「稱。

げん-ぎり 間切【名】 かうだう(坑道)(二)の舊稱。

げん-ぐ 牽具【名】 物を牽かしむるために、馬の體に裝置する具。「と。

げん-ぐ 賢愚【名】 かしこきと、おろかなること。

げん-く 原句【名】 もとの句。

げん-く 言句【名】 言語と文句と。ことば。ごんく。

げん-く 玄駒【名】〔動〕『事物紀源』に「古今注曰、蟻名二玄駒一何也、曰河內人並レ河見二人馬數十萬、皆如二黍米一動レ遊人以レ火燒レ之、人皆蚊蚋、馬皆大蟻、今人名二蚊蚋一曰レ黍、蟻曰二玄駒一、宜二自レ漢始一也、楊子法言曰、吾見二玄駒之步一云」とあるに本づく』あり(蟻)の異稱。

げんぐ-いんえん-きやう 賢愚因緣經【名】〔書〕『梵 Damamuka-sūtra の譯語』印度佛教小乘部の經。人の賢愚に由りて、因緣の區別あることを說けるもの。略して「賢愚經」ともいふ。十三卷。元魏の慧覺等の譯。太平記「朝參の餘暇に、賢愚因緣經を開き見候ひしに」「寵遇。

げん-ぐう 眷遇【名】 手厚くもてなすこと。

げんくう 源空【名】〔人〕淨土宗の開祖。法然と號す。美作國の人。漆間(ウルシマ)時國の子。十五歲受戒し、後、叡空に就きて、密乘を受く。洛東吉水(ヨシミヅ)に住し、專修念佛を弘め、圓頓大戒を說く。建永元年弟子住蓮・安樂の事に坐して、讃岐に流されしが赦され、建曆二年寂す。年八十。後、慧光普薩華頂尊者・通明國師・圓光大師の號を贈らる。

げんぐきやう 賢愚經【名】〔書〕**げんぐいんえんきやう(賢愚因緣經)**の略。「賢主。

げん-くん 賢君【名】 かしこき君主。明君。

げん-ぐん 懸軍【名】 軍隊の、後方の聯絡なくして、遠く敵地に入込むこと、又その軍隊。『懸軍萬里』『懸軍孤入』

げんくん 嚴君【名】 ㊀嚴格なる君主。 ㊁『易經の下象傳の「家人有二嚴君一焉、父母之謂也」の條の疏に「父母一家之主、家人尊事、同三於國有二嚴君一」とありて、父母に通用せるものの如くなれど、母の上に用ひたる例、他に見當らず』父の敬稱。ちちぎみ。嚴父。家嚴。大人。

げん-くん 嚴訓【名】 きびしき敎。

げん-くん 元勳【名】 國家に盡したる大なる動功、又その動功ある人。

げんくん-じんじや 建勳神社【名】 山城國愛宕(オタギ)郡大宮村に在る別格官幣社。祭神

は織田信長。明治八年の創建。

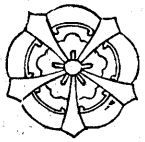
げん-くんぺい 嚴君平【名】〔人〕支那漢代の人。卜筮を業とし、傍ら老子を講ぜり。

げんくらう-はうぐわん 源九郎判官【名】〔人〕みなもとよしつね(源義經)に同じ。

げん-くらべ 驗比【名】互に祈禱して、いづれがしるしあるかを競ふこと。〔古語〕「大鏡中堂にのぼらせたまへる夜、げんくらべしけるを」

げんぐり【名】ちやわん(茶碗)を云ふ。〔信濃國筑摩の方言〕

けん-くわ 劍戟【名】紋所の一。下の圖を見よ。



(わくんけ)

けん-くわ 喧嘩・諠譁【名】■かまびすしきこと。喧騷。讙譁。〔諠譁の街(チマタ)〕■あらそひ。いさかひ。いひあひ。鬪爭。芭蕉「年わすれ三人寄りて喧嘩かな」

喧嘩過ぎての空威張(バカラカ)【句】喧嘩の間は、意氣地なくして、却りて後になりて、勇者らしく振舞ふこと。〔諺語〕

喧嘩過ぎての棒千切(ボウヂギ)【句】喧嘩の果てたる後に、相手を打たんとて、棒。ちぎり木などを振廻すとも甲斐なきがごとく、事既に去りて、いかにあせりても、もはや役に立たず。喧嘩濟みての千切木(チギギ)。會(エ)に遇はぬ花。〔諺語〕

喧嘩濟みての千切木(チギギ)【句】前條に同じ。〔諺語〕

喧嘩同志の軒並(ノキナ)【句】仲惡しき者が隣合ひて住むこと。〔諺語〕

喧嘩に被(カブ)る笠は無し【句】喧嘩は豫防する方法なし。〔諺語〕

喧嘩に毛が生えた【句】喧嘩一層大きくなる。喧嘩に花が咲く。〔諺語〕「語」

喧嘩に花が咲く【句】前條に同じ。〔諺語〕

喧嘩に負けて、妻の面(ツラ)を張る【句】相手に負けたる餘憤を、弱者に對して洩らす。〔諺語〕

喧嘩は降物(フリモノ)【句】喧嘩は豫期せずして起る。〔諺語〕

喧嘩兩成敗(リヤウセイバイ)【句】爭事は、つまり雙方の惡きよりおこるものにて、一方のみ惡きにあらざれば、雙方を公平に處罰すべきなり。〔諺語〕

喧嘩を賣る【句】■自分に仕掛けられたる喧嘩を他人にぬりて、避け逃る。■喧嘩を挑む。喧嘩賣をなす。

喧嘩を買ふ【句】好んで喧嘩の相手となる。他人同志の喧嘩に割込みて、仲間となる。喧嘩買をなす。東海道名所記「喧嘩を買ひにくる奴ども」

犬も喰はぬ喧嘩【句】ふうふげんくわ(夫婦喧嘩)に同じ。

川向(カハムカ)の喧嘩【句】「川向の火事」に同じ。

けん-くわ 謙和【名】けんわ(謙和)に同じ。

けん-くわ 妍華【名】うるはしきこと。

けん-くわ 堅果【名】〔植〕『英 Nux 又 Glans』乾燥果の一種。一箇の種子を藏する單胞より成り、果皮は肥厚して、堅硬となれるもの。櫟(シヂ)・櫟(クヌギ)・椎(シヒ)・栗の殼斗科植物に多し。

けん-くわ 懸果【名】〔植〕『英 Cremocarpium』乾燥果の一種。二胞、中軸の果柄により合生し、胞ごとに一種子を藏し、熟するに及びて、二胞分離し、果柄の上端より懸垂するもの。芹・胡蘿蔔(ニンジン)・三葉(ミツバ)・茴香(ウイキヤウ)等の纖形科植物に多し。「同じ。

けん-くわ 莧科【名】〔植〕ひゆくわ(莧科)に同じ。

けん-くわ 鎌花【名】『雄は腰のくぼき所の義』馬の雄の上にある施毛(ワゲ)。

けん-くわ 鹼化【名】〔化〕『英 Saponification』もと脂肪をアルカリにて分解して、石鹸とグリセリンとを生ずることより起れる稱』エステルを鹽基にて分解し、アルコオル及び鹽を生ずること。例へば脂肪を苛性ソオダと熱して、石鹸及びグリセロオルを生ずること。

けん-くわ 堅臥【名】しかと臥して起きざること。

けん-くわ 嚴科【名】きびしき罪科。嚴刑。

けん-くわ 玄關【名】げんくわん(玄關)の略。

げん-くわ 現果【名】〔佛〕過去の業因(イン)外に餘韻あり」

けんくわい-ぎゐん 縣會議員【名】縣會を組織する議員。縣内の市町村公民にて、市町村會議員の選擧權を有し、且つその縣内にて、一年以來直接國稅年額三圓以上を納むる者が、これと同一の資格を有し、直接國稅年額十圓以上を納むる者より選出す。

げんぐわい-はつかう 限外發行【名】〔經〕外に發行すること。

けんくわい-ぢかけ 喧嘩仕掛【名】ためにする所ありて喧嘩を仕掛くること。たくみて喧嘩をすること。爭をいどむこと。浮世床「中の野郎が、ずっと來てぼんと突當たらう。こいつあ、喧嘩仕掛だなと思ったが」

げん-くわう 玄黃【名】■天の色の黑と地の色の黃と。■天と地と。■黑色と黃色との幣帛。四『楚辭に「謁二玄黃一兮納レ贄」とあり』中央の帝。五『黑色の馬病めば黃色に變るよりいふ』病める馬。

げん-くわう 原鑛【名】〔鑛〕金屬などを製出する原料となる鑛物。

げん-くわう 嚴光【名】〔人〕支那後漢の光武帝の時の處士。字は子陵。嘗て光武帝と同じく遊學せしが、後、帝、物色して、齊國に得、諫議大夫に任じたれど就かず、富春山に隱れて終れり。

けん-くわう-うり 喧嘩賣【名】喧嘩をしかくること、又その人。喧嘩買に對して)

けん-くわう-かはう 喧嘩買【名】元祿より後、暫しの間、江戸にありし一種のをとこだて。强を制し、弱を助けんがために、喧嘩を買はんといひあるきしもの。劍と花と貝とを染出だしたる著物を著、その意を寓したりといふ。

けん-くわう-かひ 喧嘩買【名】喧嘩を買ふこと、又その人。(喧嘩賣に對して) 其魚花に鑓そこのきたまへ喧嘩買」

けん-くわう-かぶり 喧嘩冠【名】鳶口・棍棒などにて打たれても有傷受せぬ豫防として、濕紙四五枚を額際より顳顬(ヒキ)に宛て、その上に堅く手拭を冠ること。

けん-くわう-ぐさ 喧嘩草【名】〔植〕ちやんばぎく(古城菊)に同じ。「する意氣込。

けん-くわう-ごし 喧嘩腰【名】喧嘩をせんとする無賴漢。玄殺油地獄「それが信心の觀音參りか。喧嘩師ののら參り」

けん-くわう-じ 玄化寺【名】朝鮮京畿道開城の東約二里半の地にある寺。高麗時代の石の七重塔あり、高さ二十四五尺、每層佛像を四面に彫刻す。その他、高麗時代の傑作なる石碑あり。

けん-くわう-しゃ 喧嘩者【名】喧嘩を仕掛くる者。喧嘩を買ふ者。

けん-くわう-しゅ 喧嘩衆【名】喧嘩をする人々。

けん-くわう-しょう 喧嘩上戸【名】酒に醉ひて喧嘩をしかくる癖ある者。

けん-くわう-だち 喧嘩太刀【名】喧嘩の時に用ゐる太刀。

けん-くわう-ばし 喧嘩橋【名】東京日本橋區にあり。

けん-くわう-ばなし 喧嘩話【名】喧嘩の話。

けん-くわう-ばやし 喧嘩囃【名】喧嘩の時に囃す囃子。

けん-くわう-ばら 喧嘩腹【名】喧嘩をしかけんとする腹。

けん-くわう-ぶり 喧嘩振【名】喧嘩をしかくる樣子。

けん-くわう-やくしゃ 喧嘩役者【名】喧嘩の場を演ずる役者。

けん-くわう-やめ 喧嘩止【名】喧嘩を止むること。

けん-くわう-よけ 喧嘩除【名】喧嘩を避くること。

けん-くわう-よし 喧嘩好【名】喧嘩を好むこと。

けん-くわう-わかれ 喧嘩別【名】喧嘩して別るること。

けん-くわう-わかれ 喧嘩分【名】喧嘩を止めて分るること

けんくわ-しょくぶつ 顯花植物【名】〔植〕『羅 Phanerogamia』各組織の構造完全にして、判たる花を開く植物の總稱。大別して、被子類・裸子類の二種とす。有花植物。有種子植物。(隱花植物に對して)

けんくわつ 喧聒【名】かまびすしきこと。喧囂。

けんくわひ 堅果皮【名】〔植〕ないくわひ(内果皮)を見よ。

けんくわん 權官【名】一權勢ある官、又その官にある人。二『權は假(カリ)の義』けんくわん(兼官)に同じ。

けんくわん 權管【名】〔佛〕禪宗にて、寺務を管轄する役。

けんくわん 兼官【名】本官の外に、他の官を兼ぬること、又その官。兼攝の官。かけづかさ。

兼官の除目(ジモク)【句】任大臣の節會(セチエ)の時、大臣・大中納言・參議以外の官を任ずる除目。

けんくわん 縣官【名】一『けんない(縣内)』(一)を見よ』朝廷又は天子。二縣の行政事務に從事する官吏。縣廳の官吏。縣官吏。三けんちやう(縣廳)に同じ。

けんくわん 元官・原官【名】もとの官職。從前の官職。

げんくわん 顯官【名】一高き官職。重職。二外記(ゲキ)・史(シ)・式部丞・民部丞・左右衛門尉などの、器量ある者を登用すべき官。建武年中行事「こよひ顯官の擧あり」

げんくわん 現官【名】現任の官。

げんくわん 現管【名】『現に藏に入れて保管する義』勘定の結果の殘金。古寫本節用集「現管、算用殘分也」「ること。

げんくわん 愿款【名】謹直にして、誠意あること。

げんくわん 絃管【名】くわんげん(管絃)に同じ。太平記「流るる水の靡に、絃管の響あり」

げんくわん 玄關【名】一玄妙なる道理の入口。玄妙の門。二禪寺の客殿への入口。三書院造はじまりてより、その入口の出張りたるところ。四家の正面の、室内への入口又その處にある一室。源氏冷泉帝「さてよい所と、祐清は玄關に立出で」五『必ず玄關を構ふる習なりしよりいふ』名主の家の異稱。(江戸時代の語)

玄關で茶漬(チヤヅケ)を食(ク)ふ【句】せはしきことの譬。(諺語)

玄關に横附(ヨコヅケ)【句】玄關に乘物を横附にすること。大柄(オホヘイ)なること。(諺語)

玄關を張る【句】一玄關のみを立派にす。二外觀を飾りて、えらさうに見せかく。みえをはる。

げんくわんがまへ 玄關構【名】玄關を造り構へてあること、又その構へ方。

げんくわんばん 玄關番【名】一玄關に居て、來訪者の取次などをすること、又その人。二先輩又は富家に寄食する書生。

げんくわんばらひ 玄關拂【名】奥へ通すことなく、玄關より歸らしむること。面會せずに歸すこと。門前ばらひ。

げんくわんまへ 玄關前【名】玄關の前の「官」(二)に同じ。ところ。

けんくわんり 縣官吏【名】けんくわん(縣官)に同じ。

けんけ 謙家【名】〔佛〕顯教に屬する宗旨。(密家に對して)

けんげ 謙下【名】けんか(謙下)に同じ。太平記「功を辭して謙下す」

けんげ 見解【名】けんかい(見解)に同じ。

げんけ 幻化【名】〔佛〕實のなきこと。假に姿を成せること。假象。虛假(キヨケ)。徒然「物みな幻化なり。何事か、暫くも住する」

げんけ 源家【名】源氏の家。「源家の寶刀」

げんげ 紫雲英【名】〔植〕れんげさう(蓮華草)に同じ。

げんげ 眼華【名】〔佛〕『がんくわ(眼花)(一)を見よ』空(クウ)を認めて有(ウ)となし、執著(シフヂヤク)を起す譬。

げんげ 現化【名】神佛などの、形を變へて、この世に現れ出づること。げんくわ。けげん。太平記「夢うつつの境も未覺えねども、夜既に明けければ、この僧現化の不思議に驚きて」

けんけい 券契【名】地券・手形・割符などやうの物。券。十訓「富家の領をば、券契を書きて、九條殿に奉りにけり」

けん-けい 建溪【名】一地〕支那福建省なる閩江の上流の一部。二けんめい(建茗)に同じ。太平記「芳甘を酌みて立つる時、建溪の風味、こまやかなり。東坡先生が人間第一の水と譽めたりしも、この中よりや出でたりけん」

けん-けい 堅勁【名】堅固にしてつよきこと。

けん-けい 縣磬・縣磬【名】『左傳の僖公二十六年の條に「室如二懸磬一、野無二青草一」とあるに本づく。杜預の「居レ室而資糧縣盡」と註せしに從へば、「室如」の「如」は「而」の字として看たるなれど、服虔は「言室屋皆發掀、椽桴在、如二懸磬一」と說き、四壁の立てる外、家に一物も無き意とし、劉炫は「罄」は「磬」にて人に譬へ、磬を吊しかけたるが如く、室中人の外、何物も無き意と解せり』一物をも所有せざること。無一物。

けん-けい 劍形【名】〔植〕弓の如く曲りて、兩緣平行し、上端の尖りたる形。

けん-けい 賢兄【代】友人などに對する第二人稱の敬語。大兄。貴兄。(手紙などに用ふ)

げん-けい 原形【名】一もとの形。天然のままなる形。原狀。二進化せざる自然の狀態。原始狀態。

げん-けい 現形【名】げんぎやう(現形)に同じ。

げん-けい 減輕【名】一けいげん(輕減)に同じ。二〔法〕宣告の前に、刑罰を輕くすること。法律上のものに、宥恕減輕・自首減輕・未遂犯減輕・從犯減輕・特別減輕の五つあり。又、裁判上のに、酌量減輕あり。又、減刑は、既に宣告せられたる刑を輕減するものにて、我が憲法上、天皇の大權に屬するがゆゑに、この減輕と混同すべからず。

げん-けい 減刑【名】一刑罰を輕くすること。二〔法〕天皇の大權命令により、特定の犯人に對する刑罰の一部の執行を取消すこと。前條(二)參照。

げん-けい 嚴刑【名】きびしきおきて。嚴科。(寬刑に對して)

げん-けい 原型【名】一もとのかた。二『英 Model』彫刻家が、その造るべき像などの型として、粘土・油土(ユド)・漆喰(シツクヒ)等を材料として製作する像。曾ては、直接に木・石等に彫刻したりしが、今は原型を作ることに苦心し、その成れる後、彫刻家自身に、若しくは工人の手にて、他の材料に移す。

げん-けい 現計【名】一現に存在せる物につきての計算。二現に出納したる金錢につきての計算。

げんけい-しつ 原形質【名】〔生〕『英 Protoplasm』細胞を形成する、最も主要なる部分。生物の生活力は、これによりて主宰せらる。卵白に似て、構造複雜なる半流動性の物質にして、内部に透明なる顆粒あり。その中心に核を有す。西曆一八四六年獨逸人フウゴオ・フオン・モオル(H. V. Mohl)の發見命名せるもの。生活物質。

げんけい-しつえん 原形質分離【句】〔植〕生活原形物質膜が、滲透作用に因りて、細胞膜と分離する現象。

げんけいしつ-れんらく 原形質連絡【句】〔植〕生活細胞内の原形質が、孤立せずして、隣接の細胞原形質と相連絡すること。

げんけい-じやう 減刑狀【名】〔法〕減刑の裁可ありし時、司法大臣が刑の言渡をなしたる裁判所の檢事に送付して、本人に下付せしむる書狀。

げんけい-たい 原形體【名】〔植〕被膜を有せずして裸出せる多核の原形質體。

けん-げう 顯教【名】〔佛〕釋迦が機に應じ、物に接して、明に遍く衆生に說示したる教法、即ち應身・化身(ケシン)の佛につきての教。眞言宗以外のすべての佛教をいふ。(密教に對して)

けん-げう 祆教【名】『まにくわけんけう(末尼火祆教)』の略。末尼は梵 Mani にて寶珠の義、火祆はその光明に名づけたる太陽の德を稱へたる名稱なりといふ』斯波(シバ)のゾロアスタア(Zoroaster)教。二元教にして、太陽を崇拜す。古くより支那に傳はり、唐初には、長安にその祠の建立を見るに至りしが、武宗の時廢止せらる。拜火教。火教。末尼火祆(マニクワケン)教。末尼教。

げんげう 撿挍・檢校【名】一對照勘考すること、又その役。二中世以後、國衙の留守

所又は庄園の吏員。その最上級の者を總検挍といへり。㊁寺社の一切の事務を總管せし職。熊野・八幡・春日(カスガ)・高野山・金峰山・東大寺・比叡山・祇園等に置かれたり。その最上級者を總検挍といへり。㊂足利時代の中葉以後、盲人の長に賜ひし官名。「建業」とも書し、後、員數十人と定まりて、京都に在住し、法印に准じて、紫衣を勅許せられ、その中の一薗の者は、總検挍と稱せり。又、江戸検挍と稱して、江戸に在住せるもありきといふ。總錄。

げん-けう 嚴敎【名】他人の敎示の敬語。

げんげうし 検挍司・檢校司【名】元正天皇養老二年に置かれし臨時の官。釋典の器具を作りしもの。

げんげう-ひやうごーしやうぐん 検挍兵庫將軍【名】奈良朝時代に、兵庫を検挍して、不虞に備ふることを掌りし臨時の職。

けん-げき 嫌隙【名】なかたがひ。不和。隙。

けん-げき 劍戟【名】㊀つるぎと、ほこと。武器。吉野忠信「度度の軍に、血をあやせし劍戟を」㊁たたかひ。戰爭。

劍戟を交(マジ)ふ【句】たたかひをなす。

けん-けつ 欠缺【名】〔法〕完全ならざること。不足不備。「權利の欠缺」「手續の欠缺」

けん-けつ 潔【名】きよらかなること。

けん-けつ 權譎【名】いつはりの計略。かけひき。

けん-げつ 乾月【名】陰曆四月の異稱。

けん-げつ 元結【名】〔人〕支那唐の眞吏。字は次山。道州の刺史より、容管經略使に進み、到るところ民望を得、卒後、禮部侍郎を贈らる。又、詩に巧にして、一家を成す。

げん-げつ 限月【名】〔商〕定期取引の場合に於ける賣買の期限。法令及び習慣上、一箇月・二箇月・三箇月の三種に分ち、通俗に、一箇月の場合を當切(アタリ)、二箇月の場合を中切(ナカリ)、三箇月の場合を先切(サキリ)と稱す。三箇月以上の期限を付するは、違法にして、且つ慣行に反するものとす。

げん-げつ 玄月【名】陰曆九月の異稱。

げん-げつ 弦月【名】上弦又は下弦の月。ゆみはりづき。

げんげつ-ばいばい 限月賣買【名】〔商〕ていきりひき(定期取引)に同じ。

げんげつ-ばな 紫雲英【名】〔植〕れんげばな(蓮華花)に同じ。

けん-けふ 狷狹【名】けんかい(狷介)に同じ。

けん-げふ 建業【名】㊀事業を建設すること。㊁びは(琵琶)の異稱。㊂けんげう(檢挍)㊃を見よ。

けん-げふ 建業【名】〔地〕なんきん(南京)の舊稱。

けん-げふ 兼業【名】二つ以上の業をかぬること。

げん-げふ 現業【名】㊀實地の業務。㊁官署の工場などにおける勞働の業務。例へば郵便局における郵便物發送の類。

げん-げふ-ゐん 現業員【名】通信官署・大藏省臨時建築部、その他陸・海軍の工事等の現業に從事する判任官及び雇員。

けん-けん 件件【名】かの件・この件。しなじな。かどかど。

けん-けん 【名】㊀かけなげ(掛投)に同じ。㊁ちんちんもがもがを云ふ。〔畿内・關西の方言〕

けん-けん 【貌】㊀雉・犬などの鳴聲。けいけい。㊁慳貪(ケン)に物言ふさま。つんけん。女殺油地獄「詞では、けんけんと慳貪に云うたれど」

けん-けん 涓涓・涓涓【貌】水の細く流るるさま。ちよろちよろ。

涓涓の水は、江河を成す【句】『孔子家語の觀周篇に「涓涓不レ壅、終爲二江河一」とあり。江は楊子江、河は黃河』僅少なるものも積れば、高大なるものとなる。塵も積れば山となる。〔諺語〕

けん-けん 娟娟【貌】うるはしきさま。嬋娟(センケン)に同じ。

けん-けん 嶮嶮【貌】けはしきさま。盛衰記「嶮嶮谷深」

けん-けん 繾綣・繾綣【貌】懇に親しむさま。情のまつはりてなつかしきさま。

けん-けん 拳拳【貌】㊀ささげたもつさま。㊁うやうやしきさま。ねんごろなるさま。「拳拳服膺す」「るさま。

けん-けん 眷眷【貌】あはれみて、目をかくていふことば。

けん-けん 蹇蹇・謇謇【貌】臣下の、君のために働くさま。

けん-けん 謇謇【貌】鳥の飛ぶさま。

けん-けん 慊慊【貌】あき足らぬ感じ。

けん-けん 軒軒【貌】㊀高く衆に秀づるさま。㊁驛ふさま。

けん-けん 憲憲・顯顯【貌】興りさかんなるさま。

けん-けん 喧喧・諠諠【貌】やかましきさま。「と。進言。

けん-けん 獻言【名】意見を申し上ぐること。

けん-けん 建言【名】意見を官廳などに申立つること、又その文句。建白。

けん-げん 顯現【名】明らかにあらはるること。明らかにあらはしめすこと。出現。

けん-げん 權原・權源【名】〔法〕『羅 Titulus 英 Title』權利を取得する直接の原因たる法律事實。

けん-げん 權限【名】〔法〕『英 Powers 又は Competency』權利の及ぶ限度、即ち他人よりその行爲を犯さるることなき範圍。

けんげん 乾元【名】後二條天皇の御代の年號。紀元一九六二年—一九六三年。

げん-げん 嚴譴【名】おごそかなるせめ。きびしきしかり。

げん-げん 權【名】〔法〕げんしけん(原始權)に同じ。

げん-げん 原憲【名】〔人〕孔子の門人。字は子思。魯の人。孔子より少きこと三十六歳。性、狷介にして、貧に甘んず。平家「瓢簞しばしば空し、草、顏淵が巷にしげし、藜羹深くとざせり。雨、原憲がとぼそをうるほす、ともいひつべし」「と。

げん-げん 言言【名】一つづつの詞。詞と詞。

げん-げん 舩舩【名】ふなばたとふなばたと。「舩舩相摩す」

げん-げん 元元【名】㊀おほもと。根本。㊁『史記の文帝本紀の司馬貞の註に「姚察云、古者謂二人云一善人一也。因二善爲一元、故云二黎元一、其言二元元一者非二一人一也」とあり』もろびと。たみ。黎庶。百姓(ヒヤクセイ)。

げん-げん 衒言【名】てらふことば。自慢していふことば。

げん-げん 嚴嚴【貌】いかめしきさま。嚴然。手習鑒「嚴嚴と櫟を繕ひ」

げん-げん 玄源【貌】おく深きさま。窅深。

げん-げん-くわうてい 玄玄皇帝【名】〔人〕『老子は、唐朝と同姓なるより、これを贈りしなり』支那唐の天寶中に贈られたる、老子の尊號。

けんげん-けんげん 權限權限【名】〔法〕『獨 Kompetenz-kompetenz』自己の權限を伸縮し得る力。

けんげん-さいばんしよ 權限裁判所【名】『英 Court of competency』權限爭議を裁判する裁判所。但し實際に於ては、未だその官署特設せられずして、樞密院に於て、これを判決す。權限爭議裁判所。

けんげん-さうぎ 權限爭議【名】〔法〕『英 Dispute of competency』異系統の官廳間に於ける事務管轄權の爭議、即ち行政廳又は行政裁判所と司法裁判所との間に起れる事務所管の爭議。同一事件を、互に自己の權限に屬すと主張し(積極的)、又は互に自己の權限に屬せずと主張する(消極的)こと。

けんげんさうぎ-さいばんしよ 權限爭議裁判所【名】『英 Court of dispute of limit of right』けんげんさいばんしよ(權限裁判所)に同じ。

げんげん-しふ 元元集【名】〔書〕天地の始まれる時より、伊勢太神宮の由來及び地神の出生、神器の受授などの起源を記せるもの。八卷。北畠親房の撰。

げんげん-しふ 玄玄集【名】〔書〕『紀貫之、古今和歌集を撰し、更にその中より、玄の又玄なる者三百六十首を選びたるに倣へるものなるよりいふ』圓融天皇・花山法皇の御製を始めとし、庶人の作に係るものをも合せて、作者九十人、歌數百六十餘首を集めたるもの。一卷。能因法師の撰。

けんげん-しよ 建言書【名】建言の趣旨を記したる書。

けんげん-せつ 乾元節【名】「辰の祝日。舊韓國皇帝誕

けんげん-せん 乾元錢【名】次條に同じ。

けんげん-たいはう 乾元大寶【名】次條の略。

けんげん-たいはうせん 乾元大寶錢【名】村上天皇の天德二年より應和三年までに鑄造せる銅錢。面に「乾元大寶」の四字を刻す。徑六分・重量七分のと、徑六分・重量五分のとの二種あり。乾元大寶。乾元通寶。乾元錢。

けんげん-つうはう 乾元通寶【名】前條に同じ。

げんげん-づけ 玄玄漬【名】漬物の一種。玄米を炊ぎて、茄子と共に、少量の明礬(ミヤウバン)を加へて、鹽押にしたるもの。

げんげん-てい 言元梯【名】〔書〕我が國の言語を、五十音順に排列して、その語源を說きたるもの。一卷。大石千引の著。

けん-こ 懸弧・縣弧【名】『禮記の郊特牲篇に「孔子曰、士使二之射一不レ能則辭以レ疾、懸弧之義也」とある條の鄭注に「男子生而設二弧於門左一示レ有二射道一」とあり。弧は即ち弓。さうこ(桑弧)を見よ』古、支那にて、男子生るれば、弓を門の左に懸けしこと。(設帨(ゼセイ)に對して)

懸弧の辰(シン)【句】男子の誕生日。

懸弧の令旦(レイタン)【句】男子の誕生日の美稱。

けん-こ 眷顧・睠顧【名】なさけをかくること。めぐみ。かへりみ。愛顧。

けん-ご 堅固【名】■かたくして、確かなること。たやすくこはれぬこと。宇治「內記上人寂心といふ人ありけり。道心堅固の心なり」■すこやかなること。たっしゃ。健全。日本賢女鑑「女房・嬪、堅固でありしな」■まったく然ること。まるだし。【鎌倉時代の語】宇治「堅固の田舍びとにて、子細を知らず、無禮を現し候ひつらん」

けん-ご 險固【名】險阻の地に據りて、守備の堅固なること。

けん-ご 險語【名】むづかしきことば。奇險なる語。「險語、鬼膽を破る」

けんご 賢護【名】〔人〕**けんごちやうじや**(賢護長者)を見よ。

けん-ご 堅固【副】きっと。かならず。養經「御邊が膝のふるひやうを見るに、けんご叶ふまじ」「つ。

げん-こ 拳固【名】にぎりこぶし。げんこ拳固微塵(ハヂン)【句】拳固の微塵になるまで。こっぱみぢん。百合若大臣野守鏡「息杖の縮かんほど、拳固微塵にさいなんで」

げん-こ 拳固【數】『五本の指を握り固めたるに擬(ナゾ)へていふ』五錢・五十錢・五圓などの如く、五の字の附きたる金高。かたて。「ぎょ。

げん-ご 言語【名】ことば。ものいひ。げん言語蹉跌(サテツ)【句】【醫】腦病のため、單音單語をなめらかに發しえぬこと。

げん-ご 原語【名】譯し又は寫しなどせる言葉に對する、もとの言葉。もとのことば。

げん-ご 源語【名】〔書〕**げんじものがたり**(源氏物語)の略。

げん-ご 玄悟【名】玄妙なる悟。

けん-こう 劍工【名】刀劍を鍛へ造る工人。

けん-こう 懸鉤【名】廻文牒狀など領諾して、その書面を返す折に、自己の名宛の肩に、鉤狀のしるしを加ふること。引鬱。

けん-こう 甄工【名】瓦器を燒造る人。甄者。

けん-こう 鉗口・鉗口【名】口をつぐみて、ものいはぬこと。沈默。

げん-こう 元后【名】『書經の大禹謨篇及び泰誓篇に見ゆ。元は大、后は君の義』きみ。天子。君主。

げん-こう 元功【名】**げんくん**(元勳)に同じ。

げん-こう 原口【名】〔動〕『獨 Urmund』嚢胚の有する口。口の最も原始的なるものにして、原腸はこれによりて、外界に通ず。腔腸動物の口のごときは、原口をそのまま保存するものにして、食物の通路なるのみならず、不消化物もこれより出で、肛門を兼ぬ。

げん-こう 元寇【名】支那、元の我が國に寇(アダ)せし事蹟。むくりのいくさ。蒙古襲來。「文永の役」・「弘安の役」參照。

げんこう 元弘【名】後醍醐天皇の御代の年號。紀元一九九一年―一九九三年。

げんこう 元弘の亂(ラン)【句】次條に同じ。(攝曲風)「元弘のみだれに、公家(クゲ)、うちまけたまひて候ふ」元弘の亂【句】元弘元年後醍醐天皇、北條高時を誅せんと圖り給ひしかど、機至らずして蹉躓(サテツ)し、一時隱岐に遷幸ありしが、勤王の士ども起りて、遂にこれを滅し爭亂。

けん-こうじ 兼講師【名】〔佛〕大法會の時、講師にして、證義を兼ね行ふ僧。

けんごうづ【名】けがれたる水。きたなき水。(甲斐國の方言)

げんご-がく 言語學【名】『獨 Philologie 又 Sprachwissenschaft 英 Philology 又 Science of language はもと文獻學の義、我が國にて、博言學と譯せしは、言語學は文獻學より派生せしものなるが故にて、西洋にても、名稱混同の恐あるより、Sprachwissenschaft 又は Science of language の新名稱起り、我が國も亦博言學の稱呼を廢して、言語學といふに至れるなり』言語の根本・沿革及び規則等を研究する學問。「こと。

けん-こく 建國【名】新に國を興し建つること。

けん-こく 兼國【名】兼任する國國の司(ツカサ)。

けん-こく 兼國の勘文(カンモン)【句】古、京官にして、諸國の權守又は介を兼任するに就きての勘文。續日本紀「兼國の勘文といふは、參議以下、權守介に任ずべき人を、先例勘注たる也、加二懸紙一封レ之」

げん-こく 嚴酷・嚴刻【名】きびしくおごそかなること。苛酷。

げん-こく 原告【名】〔法〕『英 Plaintiff 又 Demandant』訴訟において、裁判を求むる訴訟當事者。民事訴訟のは、自己の名にて訴訟を起したる者、即ち訴訟當事者中、訴訟の開始を要求したる者。刑事訴訟のは、檢事と附帶私訴における民事原告人との總稱。行政訴訟のは、法定の事件につき、法定の方法に從ひて、行政裁判所に出訴したる者。(被告に對して)

げん-こく 現石【名】草高(クサダカ)の中、領主の收入となる石高(コクダカ)。

げんこく-にん 原告人【名】〔法〕■**げんこく**(原告)に同じ。■刑事訴訟における、附帶私訴の原告たる人。(被告人に對して)

けんこく-ぼふ 建國法【名】〔法〕**けんぽふ**(憲法)に同じ。

けんご-くわ 牽牛花【名】〔植〕**けんぎうくわ**(牽牛花)に同じ。

けんご-し 牽牛子【名】〔植〕前條に同じ。

げんこ-じ 元興寺【名】**がごじ**(元興寺)に同じ。

げんご-たい 言語體【名】■**こうごたい**(口語體)に同じ。■〔文〕連句にて、言語をそのまま句にしたるもの。例へば芭蕉の「盃寒し諷ひ候へ」の類。

けんご-だいし 賢護大士【名】〔人〕**けんごちやうじや**(賢護長者)に同じ。

けんご-ぢしん 堅固地神【名】〔佛〕**けんらうちじん**(堅牢地神)に同じ。

けんご-ちやうじや 賢護長者【名】〔人〕『梵 Bhadrapāla(跋陀羅波梨)の譯語』古代印度の大富豪。在家の菩薩にて、傳記は詳かならず。賢護。賢護菩薩。梵花「賢護長者の家にもあること稀なる飯食(ボンジキ)どもなり」

けん-こつ 顴骨【名】**くわんこつ**(顴骨)に同じ。

げんご-てつがく 言語哲學【名】言語に關する原理を研究する學問。言語學。

げんこ-とり 拳固取【名】昔、一つ五文づつなりし餅。丹波與作「拳固取より小さい首、意地づくなら取っていけ」

げんご-ひけつ 源語祕訣【名】〔書〕源氏物語の內、十五箇條の說を載せたるもの。一卷。一條兼良(カネヨシ)の撰。

げん-こふ 減劫【名】〔佛〕成・住・壞・空の四劫の中、その住劫の間に、人の壽命の、無量歲より百年ごとに一歲づつ減じて十歲に至り、更に百年毎に一歲づつ增して八萬歲に至り、又減じ、又增すこと二十回に及ぶ間。(增劫に對して)水鏡「第七の減劫に、七佛の出でたまひしなり」

げんご-ふ 現業【名】〔佛〕**ごふ**(業)を見よ。

げんごべゑ-もち 源五兵衛餅【名】昔、江戶の大佛大師堂にて賣りし名物の餅。色、黃にして、丸かりきといふ。

けんご-ぼさつ 賢護菩薩【名】〔人〕**けんごちやうじや**(賢護長者)に同じ。

けんこん 乾坤 【名】Ⅰあめつち。天地。天地の間。(蜀丸)「支那天竺に到るとも、乾坤を出でずんば」Ⅱ乾(ケン)と坤(コン)と。乾坤一擲(テキ)【句】『韓愈の過二鴻溝一と題する詩に「誰勸二君王一回二馬首一、眞成二一擲賭二乾坤一」とあるに本づく』天下を賭して、のるかそるかの勝負をなすこと。

けんこん 倦困 【名】うみつかるること。

げんこん 眼根 【名】〔佛〕ろくこん(六根)を見よ。

げんこん 現今 【名】いま。ただいま。まのあたり。當時。「略。

けんこんつうはう 乾坤通寶 【名】次條の

けんこんつうはう-せん 乾坤通寶錢 【名】建武元年に鑄造せし銅錢。乾坤通寶。

げんごらう 源五郎 【名】〔動〕**げんごらうむし**(源五郎蟲)の略。

げんごらうぎつね 源五郎狐 【名】延寶の頃、大和國宇陀郡に棲みて、常に百姓の家に雇はれて農業をするに、二三人の業をつとめたりといふ狐。

げんごらうぶな 源五郎鮒 【名】〔動〕鮒の變種。近江國琵琶湖に產し、大なるは、長さ二尺・幅八寸に至る。首小さくして、銀色を帶び、味美なり。あふみぶな。かたたぶな。

げんごらうむし 源五郎蟲 龍蝨 【名】〔動〕鞘翅(シヤウ)類に屬する昆蟲。廣卵形にして、やや綠光を帶びたる赤銅(シヤク)色を呈し、鞘翅に少しく短毛あり、游泳に適するため、後脚は特に扁平、前肢は小さし。幼蟲は孫太郎蟲と呼び、成蟲と共に沼池に棲みて、小魚を捕食し、成蟲はまた夜間空中を飛翔す。げんごらう。

けんごーりん 堅固林 【名】〔佛〕『冬、凋まぬより、堅固と譯す』さるじゆ(婆羅樹)の異稱。

けん-さ 賢佐 【名】賢良なる輔佐。耳佐。賢

けん-さ 驗左 【名】さけん(左驗)に同じ。

けん-さ 權詐 【名】權謀と詐術と。いつはりのはかりごと。「勸むること。

けん-さ 勸茶 【名】〔佛〕寺院にて、喫茶を

けん-さ 檢査 【名】Ⅰしらべあらたむること。ぎんみ。查檢。Ⅱ娼妓に行ふ檢徵。

けん-さ 檢座 【名】德川時代に、裁判所の白洲(スヽ)にて、罪人の見張をせし人。今の廷丁の類。

げん-さ 驗者 【名】**げんじや**(驗者)の約。〔古語〕「こはきもののけあづかりたる驗者、げんだに早くばよかるべきを、さすがに人わらはれにあらじと念ずる」

げんざ 【名】〔動〕さんぼう(蜻蛉)を云ふ。〔常陸國・上野國・下野國の方言〕

けん-さい 險塞・險砦 【名】險岨によりて築きたるとりで。「て。

けん-さい 堅塞・堅砦 【名】堅固なるとりて。

けん-さい 嫌猜 【名】さいけん(猜嫌)に同じ。

けん-さい 兼濟 【名】兼ねあはせて救ふこと。兼ねて成しとぐること。

けん-さい 獻齋 【名】忌日に齋粥を備へて、回向(エカウ)すること。「人。

けん-さい 賢材・賢才 【名】賢德・才智ある

けん-さい 賢宰 【名】賢明なる宰相。

けん-さい 賢妻 【名】賢明なる妻。

けん-さい 縣債 【名】地方債の一。縣といふ地方自治體が、縣會の議決を經て起すもの。「四年。

けん-さい 歉歲 【名】穀物のみのらぬ歲。

けん-さい 兼載 【名】あはせのすること。一緒にのすること。「大地、萬物を兼載す」

けんさい 兼載 【名】〔人〕**なはしろけんさい**(猪苗代兼載)を見よ。

けん-さい 健在 【名】すこやかに生活し居ること。「ること。

けん-さい 顯在 【名】あらはれてあること。

けん-さい 硯材 【名】硯に造るべき材料。

げん-さい 減殺 【名】減らし殺(そ)ぎて、分量を小額ならしむること。「權利の減殺」

げん-さい 減債 【名】債務の減少すること。

げん-さい 幻妻・衒妻 【名】Ⅰ他人の妻を罵りて呼ぶ稱。(大阪の語・尾張國の方言)Ⅱおどれがげんさいは、妻は袖乞して、生米がなくらふさかひ」Ⅲ女を罵りて呼ぶ稱。妹背山女庭訓「けたいなげん妻めら」Ⅳよたか。婬賣婦。(紀伊國の方言)

げん-さい 現在・見在 【名】Ⅰいま。まのあたり。ただいま。Ⅱまのあたり存在すること。現存。Ⅲ現に然ること。實際に然ること。Ⅳ(佛)過去の業因(インヰン)に由りて、現世に受くる五つの果報、即ち十二因緣の中の識・名色・六處・觸・受。

げん-さい 原罪 【名】〔基〕『英Original sin』アダム(Adam)・イブ(Eve)夫妻の墮落の結果として、その子孫たる人類の、生れながらにして有すといふ罪。原始罪業。(自罪に對して)

げんさい-ききん 減債基金 【名】〔法〕『英Sinking fund』政府が、國庫より、年年定額の金、又、臨時に剩餘金を受取りて、これを別途の會計とし、これにて政府發行の公債證書を買入れ、これより生ずる利子を積置き、重利法にて增殖をはかり、幾年かの後、公債の償却に充つることと定めたる基金。英國の制度に倣へるもの。國債整理基金。

げんざい-きん 現在金 【名】現在せる金錢。ありがね。現金。

げんざい-くわんせい 現在完成 【名】〔語〕

はんくわこ(半過去)に同じ。

げんざい-くわんれう 現在完了 【名】〔語〕前條に同じ。

げん-さいけんしや 原債權者 【名】債權者の變更せる場合における、舊債權者の稱。

げんさい-さへゑ 謙齋佐兵衞 【名】〔人〕人形遣の名手。野呂松(ノロマツ)と同時代の人。

げんざい-しちめん 現在七面 【名】謠曲の一。日蓮上人の、身延(ミノブ)山中にて修行の際、七面山の龍女あらはれ、法華經の功德によりて成佛することを作れるもの。

げんざい-しんしやう 現在心象 【名】〔哲〕感官の働により、事物の刺戟に應じて起る感覺又は知覺。表現心象。(記憶心象に對して)

げんざい-しやう 現在症 【名】〔醫〕或疾病において、現に存在する症狀。「同じ。

げんざい-しやう 現在生 【名】〔佛〕次條に

げんざい-せ 現在世 【名】〔佛〕三世の一。現世(ゲンセ)。現在。げんざいしやう。今生(コンジヤウ)。(過去世・未來世に對して)

げんざい-せつ 原罪說 【名】〔基〕人類の憤怒・煩悶等の原因を、原罪に歸せしむる說。

げんざい-ち 現在地 【名】人又は物の現存在せる場所。「品)に同じ。

げんざい-に 現在荷 【名】〔商〕ありしな(有品)に同じ。

げんざい-のう 現在能 【名】能樂の、鬼神・幽靈などに關せぬもの。例へば、「鉢の木」などの類。

げんざい-はふ 現在法 【名】〔文〕『英Vision又Imagery』修辭法の一。過去の事、將來の事、眼前になき物等を、眼前に存するがごとく言ひなす法、即ち過去又は未來の形の動詞を用ふべき箇所に、現在の動詞を用ふるもの。現寫法。

げんざい-ばん 原裁判 【名】〔法〕同一事件が二回以上の裁判を經るとき、現在の裁判の前に受けたる裁判。例へば控訴の裁判に對する第一審の裁判、上告の裁判に對する控訴の裁判の類。原判決。前審。

げんざいばんしよ 原裁判所 【名】〔法〕原裁判を施したる裁判所。

げんざい-ねん 現在員 【名】現にその處にある人員。現員。

けん-さう 驗相 【名】〔佛〕靈驗の相貌。

けん-さう 喧噪・諠騷 【名】さわがしきこと。さわぐこと。「ふこと。

けん-さう 喧爭・諠爭 【名】かまびすしく爭

けん-さう 險相 【名】Ⅰ險惡なる相貌。するどき顏附。Ⅱけんまく。けっさう。「けんさう變へる」

けん-さう 劍相 【名】刀劍の地はだ・燒刃などの模樣。(幹狩劒本地「御鋒の刃先刃の劍相、威力に恐れて飛行を失ひ」

けん-ざう 建造 【名】建て造ること。かまへこしらふること。建設・造營。

けん-ざう 萱草・諼草 【名】〔植〕わすれぐさ

・(萱草)に同じ。

げんさう 現想【名】現實の物事につきて起るかんがへ。現に見聞せる物事につきての感想。「霜」

げんさう 嚴霜【名】きびしき霜。「勁雪嚴霜」

げんさう 舷窓・舷窗【名】船のあかりまど。蓬窓。

げんさう 還相【名】(佛)回向(ヱカウ)二相の一。淨土より穢土(ヱド)に還り來りて、一切衆生を濟度し、佛道に向はしむること。ぐゑんさう。(往相に對して)

げんさう 幻相【名】(佛)無常なる相。實體なきこと。「幽幽(窈崎)「つらつら世間の幻相を觀ずるに、飛花・落葉の前には、有爲(ウヰ)の轉變を悟り」

げんさう 幻想【名】一正確ならざる想念。とりとめなき想像。空想。妄想。二(哲)「に同じ。

げんざう(ぐわんざう) 幻覺「に同じ。

げんざう 幻像【名】(哲)げんざう(幻影)二

げんざう 見參【名】げんざん(見參)の音便。狂言「文相撲」「御目にかかったら、そのまま御げんざうである」「じ。

げんざう 現象【名】げんしやう(現象)に同じ。

げんざう 現像【名】一形像をあらはすこと。又そのあらはれたる形像。二(英 Development)寫眞術にて、撮影したる乾板・濕板又は燒附を行ひたる紙などを、現像液に浸して、金屬を還元せしめ、その映像を現さしむること。

げんざうえき 現像液【名】現像(二)をなすに用ふる藥品の溶液。種類きはめて多し。

げんざうし 現像紙【名】寫眞原板より燒付たるのみにては、畫像を現さず、現像して、始めて畫像を現す寫眞印畫紙。ブロマイド・瓦斯ライト紙など、これに屬す。

げんさうたん 玄霜丹【名】古、用ひられし藥の名。九微丹。和名「丹藥」大唐延年經云、九微丹……一名玄霜丹」「方法。

げんざうはふ 現像法【名】現像(二)をなす

げんざうばり 源藏張【名】大阪市西區四橋(ヨツバシ)の一なる吉野橋の南畔に在る煙管店にて賣れる煙管。

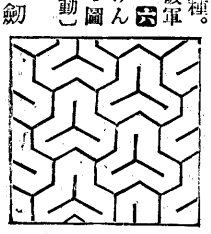
けんざうぶつ 建造物【名】建造したる物、即ち家屋・倉庫の類。

げんさうやく 減裝藥【名】(兵)火砲の演習に、砲の命數を顧慮するため、また擲射の場合に、或量を減じたる裝藥をなすこと。「こと。

げんざうやく 現像藥【名】現像(二)を行ふに用ふる藥品。

げんさうゑかう 還相回向【名】(佛)げんさう(還相)に同じ。

けんさき 劍先【名】一劍の穗さき。きっさき。二けんじり(劍尻)に同じ。三けんさきぶね(劍先船)の略。四伊勢大神宮より出づる神符の一種。五はぐんせい(破軍星)に同じ。六模樣の一。けんきっかふ。下の圖を見よ。七(動)



(六)きさんけ

けんさきいか 劍先烏賊【名】(動)烏賊の一種。鰯烏賊(ムスカイ)と異なりて、眼瞼閉ぢ、形狹小なり。西南海に多く產す。けんさき。やりいか。

けんさきえぼし 劍先烏帽子【名】能裝束の一。頂の劍形になりたる烏帽子。三番叟の著くるものにて、黑色なるを常とし、金色を替(カヘ)とす。

けんさきずるめ 劍先鰯【名】劍先烏賊にて製したる鰯。

けんさきたがね 劍先鑿【名】先端の、劍先のごとく尖りたるたがね。

けんさきのなかじめ 劍先中締【名】紋所の一。薩摩駄「劍さきの中締に、六尺褌樣はぐるぐるぐる」

けんさきぶね 劍先船【名】舳の尖りたる船。賀古敎信七墓廻「繼子・繼嫁・孫君も憎くや憎くやと押出して、詞に尖る劍先船、家中舵をそとりかねける」

けんさきまんじ 劍先卍【名】紋所の一。卍の四つの端が、山形に尖れるもの。

けんさきりうご 劍先輪子【名】紋所の一。薩摩駄「劍さきりうごの鈎鐵・素鐵は伊賀・伊勢の津の御城主」

けんさく 劍笏【名】つるぎと笏と、又それを帶せる人。日中行事「近衞司、けんさくの輩などは」

けんさく 建策【名】はかりごとをたつること。「こと。

けんさく 獻策【名】謀を、長上に進むること。

けんさく 羂索【名】一鳥獸を捕獲するわな。佛敎にては、佛・菩薩の衆生(シユジヤウ)を攝取する象徵とす。不空(カウ)羂索觀音及び不動尊の持するもの、これなり。二(佛)凡夫の心の、我見に縛せらるる「と。

けんさく 檢索【名】しらべて、探し出すこと。

けんさくのこうへき 檢索の抗辯【句】(法)債務履行の請求を受けたる保證人が、まづ主たる債務者の財產に對して、執行をなすべく、なほ不足なる時、はじめて自己に請求せんことを主張すること。

けんさくのりえき 檢索の利益【句】(法)檢索の抗辯をなし得る保證人の利益。保證人がこの利益を主張するには、主たる債務者に、債務の全部を辨濟する資力ありて、且つその執行の容易なることを證明するを要す。

けんさくけん 腱索【名】(醫)『羅 Chordæ tendineæ』心臟の心室の內面に存する乳嘴筋の尖端、狹小なる腱となりて、房室口の瓣膜に附著するもの。

けんさくく 檢査區【名】檢査の便宜のために設けたる區域。

けんさくし 玄賾【名】『玄は玄妙、賾は幽深にして見がたき義』眞理などの深遠なること。奧賾。幽賾。

けんさく 原作【名】はじめの作。もとの作。おりじなる。(複製・模寫・模造に對して)

けんさく 減削【名】さくげん(削減)に同じ。

けんさく 絃索【名】箏・三味線などの如き、樂器の絲。絃。

けんさくくわんおん 羂索觀音【名】(佛)ふくけんさくくわんおん(不空羂索觀音)の略。

けんさくしや 原作者【名】原本の作者。原作の著者。

けんさくくわん 檢査官【名】一或事項につきて檢査をなす官吏。二くわいけいけんさくわん(會計檢査官)の略。

けんさくくわんほ 檢査官補【名】會計檢査官の一。各課に分屬して、課長を助け、又は院長官房或は各部に屬して、審議・立案を掌り、檢査事項に關して、意見ある場合に、院長又は當該部長の承認を經て、議案を總會議又は部會議に提出し得る奏任官。

けんさくわんり 檢査官吏【名】檢査を掌る官吏。

けんざけ 拳酒【名】拳(カケ)の勝負によりて「飲む酒。

けんさつ 檢察【名】一しらべ。ぎんみ。かんがへ。二鎌倉時代に、兩六波羅侍所(サムラヒドコロ)に屬して、主として檢察・巡行の事を掌りし職。三(法)刑事裁判又は懲戒裁判などの準備として、犯罪・犯則等の形跡を搜査し、證據を收集すること。

けんさつ 賢察【名】推察の敬語。御推察。高察。(主に日用文に用ふ)

けんさつ 嫌殺【名】『嫌はすかす義、殺は接尾語』人を欺きだますこと。

けんさつきよく 檢察局【名】臺灣總督府の各法院に附置せられ、その法院に屬する檢察官の事務を取扱ふところ。檢察官及び通譯・書記の職員を置く。

けんさつくわん 檢察官【名】一檢察を行ふ官職又は官吏。二けんじ(檢事)の舊稱。三陸海軍・臺灣總督府法院・關東都督府法院の官吏にて、刑事の訴追・犯罪の搜査等を掌るもの。陸海軍のは軍人中より補任し、臺灣總督府のは勅任又は奏任の文官、關東都督府のは奏任の文官なり。

けんさつくわんちやう 檢察官長【名】臺灣の檢察局の長。檢察局の事務を指揮監督す。檢察官を以てこれに補す。

けんさつはんけつ 檢査判決【名】會計檢査院が、出納官吏の提出したる計算書類により、その保管・出納したる官金を檢査し、判決を下すこと。

げんさま 玄樣【名】げん(玄)三の敬稱。(江戸の遊廓の語)洞房語園「寛文頃、吉原その外、往來の者まで唄ひし流行小唄。げん樣の長羽織、このえい、づべしに張肱ちや」

けんさまへ 檢査前【名】徵兵檢査の濟まぬ年齡、即ち丁年未滿。

けんさん 研鑽【名】物事の道理をきはめ

しらぶること。研究。研討。

けん-さん 兼參【名】かつて見參(ケンザン)せしこと。盛衰記「木工馬允友時といふ者は、八條院に兼參しけるものなり」

けん-ざん 檢算・驗算【名】計算の結果の當否を驗する計算。ためし。

けん-ざん 險山・嶮山【名】けはしき山。

けんざん 建盞【名】『支那福建省泉州府建安の盞(サカヅキ)といふ義にて、支那唐の陸羽が建安にて得たるもの著名なるよりいふとぞ。うさん(胡盞)を見よ』天目の一種。地藥柿色、上藥黑色にして、禾目(ノギメ)あり。

けんざん 乾山【名】■〔地〕『京都の乾(イヌイ)に當るよりいふ』山城國の鳴瀧(ナルタキ)山の異稱。■〔人〕をがたけんざん(尾形乾山)を見よ。■けんざんやき(乾山燒)の畧。生玉心中「親仁の棚から歸手・乾山・音羽燒の、皿の、鉢の、茶碗のと」「り物。

けんざん 獻殘【名】獻上したるあとの殘

けんざん 兼山【名】〔人〕のなかけんざん(野中兼山)を見よ。

げん-さん 嚴粲【名】〔人〕支那宋代の人。毛氏の詩に精しく、嚴氏詩緝あり。

げん-さん 原蠶【名】二度めのかひこ。なつご。「同じ。

げん-さん 減算【名】〔數〕げんぽう(減法)に當るよりいふ。

げんざん 元山【名】〔地〕朝鮮咸鏡南道にある海港。永興灣の南隅に位す。京城の東北五十四里。明治十二年日韓條約により、翌年五月開かれし處。一名、元山津。

げん-ざん 見參【名】『見まゐらすと訓(ヨ)むべきを音讀せしもの』■面をあはすること。まみえ。めみえ。げざん。平家「今生の見參これ最後なりとて、持佛堂に歸り入りて」■長上の見たまふこと。おめにかくること。世繼曾我「染羽の矢先にかけ鳥を二つ續けて射て落し、見參には備へねど、證人紛れ候はず」

見參に入る【句】『「入る」は四段活用。自動詞』まみゆ。御目どほりす。保元「富家殿に見參に入りて、曉ここに參るべし」

見參に入る【句】『「入る」は下二段活用。他動詞』まみえしむ。お目に掛く。十訓抄「板の端に書きて、見參に入れよ」

げんさん-くわ 玄參科【名】〔植〕ごまのはぐさくわ(玄參科)に同じ。

げんさん-くわじょ 卷繖花序【名】〔植〕『英 Helicoid uniparous cyme』聚繖花序の一。單頂花を著けたる花軸の下部より單一の花梗を出して、再び單頂花を著け、その下部より、また單一の花梗を出して、單頂花を著け、幾度も一方にのみ花梗を出して、全形の渦卷狀をなすもの。萱草(ワスレグサ)の花など、これに屬す。蝸牛狀聚繖花序。

けん-さんじょう 縣參事會【名】地方自治體なる縣の議決機關。縣參事會員を以て組織し、知事を議長とす。縣會よりの委任事項、縣會の議決したる範圍内にて、財産と營造物との管理に關する重要なる事項、縣費支辨の工事の執行に關する規定、縣に係る訴訟・訴願及び和解等その權限に屬する事項等を議決し、又、縣會を招集する暇なき場合に、縣會に代はりてこれを議決し、知事より縣會に提出する議案につき、意見を述べ、或は名譽職參事會員中より委員を選舉し、縣に係る出納を檢査せしむることを得。但し全會員の半數以上の出席あるに非ざれば、開會するを得ず。

けんさんじょう-くわいゐん 縣參事會員【名】縣參事會を組織する委員。縣知事・縣の高等官二名及び名譽職參事會員六名なり。縣高等官の參事會員たるべき者は、内務大臣これを任命し、名譽職參事會員は、縣會に於て、縣會議員中より互選す。

げんざん-しん 元山津【名】〔地〕げんざん(元山)に同じ。

げんざん-じょ 見參所【名】武家時代の貴族の家の應接間。「地。

げん-さんち 原産地【名】もとの産地。産

げんさんち-しょうめいしょ 原産地證明書【名】『英 Certificate of origin』貨物の生産地又は製造地を證明する書類。その貨物の輸入者が、協定稅率の利益を受けんがために、輸入申告書に添へて、稅關に差出すもの。

げんざん-の-いた 見參板【名】なるいた(鳴板)に同じ。建武年中行事「見參の板を踏鳴らす」

けんざん-の-ひ 峴山碑【名】だるねのひ(墮淚碑)に同じ。

げんざん-はじめ 見參始【名】始めて見參すること。初對面。孕常盤「主從の見參始いかがとて」

げん-ざんみ 源三位【名】〔人〕げんざんね(源三位)を見よ。「撚摸」うらみっぽい歌ばかりよむ源三み」

けんざん-や 獻殘屋【名】■江戸時代に、"獻殘"を實るを營業とせし家。當時、獻殘は實用に供せずして、獻殘屋に賣下げ、獻殘屋はこれを購求して、獻進の再用に供せしなり。和合人「なんだ、からすみ・雲丹(ウニ)・濱名納豆か、へん、妙な物ばかり餌食にするなう。獻殘屋の鼠のやうだ」■慶事の祝物・結納物(ユヒノウ)などを調製する家。

けんざん-やき 乾山燒【名】『けんざん(乾山)(一)を見よ』京都嵯峨の人尾方乾山の、鳴瀧(ナルタキ)邊の土を用ひて燒きはじめし陶器。樂燒(ラクヤキ)に似て、雅致あり。けんざん。

げん-さんね 源三位【名】■〔人〕『位の字、三の字の韻に引かれて、ミと發音す』みなもとよりまさ(源賴政)に同じ。■よりまさ(賴政)(二)に同じ。

げんざんね-にふだう 源三位入道【名】〔人〕『位の字、三の字の韻に引かれて、ミと發音す』みなもとよりまさ(源賴政)に同じ。

げんざんね-よりまさ 源三位賴政【名】〔人〕『位の字、三の字の韻に引かれて、ミと發音す』みなもとよりまさ(源賴政)に同じ。

けんさやく 檢査役【名】■檢査をする役目、又その人。■〔法〕株式會社設立の際もしくは設立後に、一定の事項を檢査せしむるため、選任又は任命する、一種の機關。■相撲(スマヒ)にて、四本柱の所に坐して、勝負を檢査する者。年寄、これに任ず。

げん-さよう 原作用【名】〔理〕反作用に對する、もとの作用。

げんざり【貌】げざやかに同じ。かなほし「物のけざやかなることを、げんざりと云ふこと、如何」

けん-ざを 間竿【名】地積などの間數を測るに用ふる目盛(メモリ)ある竿。檢地竿。

けん-し 犬齒【名】〔醫〕『英 Dog-tooth』門齒と臼齒との間に位する錐狀・鋭尖なる齒。人類のは、上下二枚づつありて小さけれども、肉食獸のは强大なり。いときりば。角齒。

けん-し 繭絲【名】■繭と絲と、又、繭の絲。■『繭より絲を取るがごとくする義。史記の趙世家に「簡子使尹鐸爲晉陽、請曰、以爲二繭絲一乎、以爲保障一乎。簡子曰、保障哉。尹鐸損二其戸數一とあり』人民より、租稅などを貪り取立つること。

けん-し 檢視【名】■事實をとりしらぶること。■〔法〕犯罪の嫌疑などある場合に、警察官が、死體などをしらぶること。〔檢屍〕

けん-し 檢使【名】檢視のために遣さるる使者。見屆の役人。用明天皇職人鑒「道中まで檢使を立て、そいつに腹を切らせよ」

けん-し 劍士【名】けんかく(劍客)に同じ。

けん-し 妍蝶・妍蛍【名】うつくしきこと、みにくきこと。美醜。妍醜。

けん-し 妍姿【名】姿のあでやかなること、又その姿。

けん-し 賢師【名】賢明なる師。

けん-し 賢士【名】■賢明なる人。川中島合戰「將の賢士を好む、賢に似て賢にあらず」■〔佛〕在家の菩薩。

けん-し 顯示【名】あらはし示すこと。

けん-し 健士【名】■丈夫(一)に同じ。

けん-じ 健兒【名】■勇健なる男兒。血氣壯なる男。健士。■こんじ(健兒)に同じ。

けん-じ 謙辭【名】謙遜のことば。

けん-じ 檢字【名】偏又は傍(ツクリ)の所屬の不明なる漢字を、總畫數によりて索引し得るやうに排列せるもの。

けん-じ 檢事【名】司法官の一。法の適用を職責とする判事に對して、公益の代表者たるを職責とし、司法機關を構成する高等官。即ち刑事に關しては、原告官として犯

罪の捜査、公訴の提起、及びこれが実行を職務とし、判決済みたる後は、その執行を監督し、又、民事に關しては、公益に關係ある訴訟、殊に人事に關係ある訴訟に立會ひて、その意見を述ぶる外、場合によりては、公益のため、訴訟の原告又は被告となり、或は商事會社の解散・禁治産等、種種の請求をなす職務あるもの。

けんじ 劍璽【名】■劍と璽と。■三種の神器の中の、草薙劍(クサナギノツルギ)と八尺瓊勾曲玉(ヤサカニノマガタマ)と。劍璽渡御(ワタマシ)【句】三種の神器を、先帝の御所より新帝に渡したまふ儀式。劍璽の案(ツクエ)【句】御劍と神璽とを奉安せし二階の御棚。清涼殿の夜御殿(ヨルノオトド)の中に在りしもの。

けんじ 肩次【名】**げん**(下肩)に同じ。

けんじ 犬兒【名】犬の子。こいぬ。

けんじ 祆寺【名】祆教の寺。

けんじ 見思【名】〔佛〕見惑と思惑と。

けんじ 見じ【名】見ること。見物。〔元祿時代の大阪の語〕淀鯉出世瀧徳「十四の冬より今年まで、夫にしみたる風俗は、いかな家にも走り出で、お山見じと目をつける」

げんじ 元史【名】〔書〕二十一史の一。支那明の宋濂・王禕が勅を奉じて撰みたる元の歴史。本紀・志・表・列傳の四部に分つ。二百二十一卷。

げんじ 原子【名】『英Atom』■〔理〕**げんし**(原子價)を見よ。■〔哲〕**げんしろん**(原子論)を見よ。〔元子〕

げんじ 原子の和價【句】〔化〕**げんしか**(原子價)に同じ。

げんじ 原始【名】■おほもと。はじめ。もと。■自然のままにて、未だ進化せぬこと。〔元始〕**げんしてき**(原始的)參照。

げんじ 元巳【名】**じやうし**(上巳)に同じ。

げんじ 元子【名】■『詩經の魯頌閟宮篇に「建二爾元子一」とあり。元は首の義』天子の子。一說には、長子。■〔化〕**げんし**(原子)に同じ。

げんし 幻師【名】幻術を行ふ人。魔法つかひ。

げんし 幻視【名】■**げんえい**(幻影)〔一〕に同じ。■〔哲〕『英Visual hallucination』幻覺の一。實際眼前にあらざるものが、實物あるごとく見ゆること。

げんし 原紙【名】■どだいとなす紙。もとの紙。■楮の皮にて、堅く且つ厚く製したる紙。大さは横七寸六分・竪一尺一寸七分にして、蠶卵を附著せしむるに用ひらる。長野縣・滋賀縣などの産、最も名あり。■謄寫版などの原版に用ふる紙。

げんし 原詩【名】飜譯し、又は改作せざる、もとの詩。

げんし 言志【名】『書經の舜典篇に「詩言レ志、歌永レ言」とあるに本づく』し(詩)の異稱。

げんし 言詞【名】**げんじ**(言辭)に同じ。

げんし 元詩【名】支那、元の代の詩。

げんし 玄旨【名】幽玄なる趣旨。玄趣。

げんし 嚴旨【名】■嚴命の旨趣。■他人の趣旨の敬語。

げんし 嚴師【名】子弟に對して嚴格なる先生。(師を尊びていふ)

げんし 眼子【名】まなこ。眼晴。〔謠曲〕〔葵〕「人間有爲の轉變は、眼子の中に顯はれ」

げんし 現示【名】〔基〕**けいし**(啓示)〔二〕に同じ。**しげん**(示現)參照。

げんじ 現時【名】ただいま。當時。目下。

げんじ 言辭【名】ことば。ものいひ。言詞。「言辭、懇篤を極む」

げんじ 言次【名】ことばのついで。話次。

げんじ 源氏【名】■**みなもと**(源)を見よ。正統記「源氏といふことは、嵯峨の御門、世の費を思しめして、皇子皇孫子に姓を賜ひて、人民となしたまふ。即ち御子あまた源氏の姓を賜はる」■〔書〕**げんじものがたり**(源氏物語)の略。金平法問辭「關屋・逢生數數の源氏の卷を書きしるし」召遊「梅の月源氏の噂女房たち」■『源氏物語の五十四帖に擬へたるものなるよりいふ』俳諧の附合(ツケアヒ)の五十四句(初表六句、初裏(ウラ)十二句、二の表十二句、二の裏十二句、名殘の表十二句、名殘の裏六句)より成るもの。

げんじ 源氏五十四帖【句】源氏物語の全部。五十四帖より成る。

げんじ 源氏の四姓【句】清和源氏・嵯峨源氏・村上源氏・宇多源氏の四氏。各その條を見よ。

げんじ 源氏八領(ハツチリ)の鎧【句】『保元物語に出づ』源氏に相傳せし八領の鎧、即ち月數(ツキカズ)・日數(ヒカズ)・源太產衣(ゲンダウダガヘシ)・八龍(ハツチリ)・澤瀉(オモダカ)・薄金(ウスガネ)・楯無(タテナシ)・膝丸(ヒザマル)。

げんじ 源氏六十帖【句】源氏物語は天台六十卷の法文に擬へて作れるものにて、もと六十帖ありしなりといふこと。但しもと宇治强附會の說にて、源氏物語は、始めより五十四帖なりしなり。〔謠曲〕〔源氏供養〕「われ、石山にこもり、源氏六十帖を書きしるし、亡き跡までの筆のすさび」

げんじ 源氏【名】一世(セイ)の源氏【句】皇子の、はじめて臣下の列に下りて、源氏の姓を賜はりたまへるもの。〔古語〕源氏「一世の源氏、また納言・大臣になりて」

げんじあはせ 源氏合【名】源氏物語の歌の、各帖の名に因みたるものの上の句に、下の句を合せて置きならぶる玩具。道中雙六と歌ガルタとを併せたるが如きもの。

げんじあぶら 源氏油【名】髮油の一種。三代男「兵部卿・源氏油のかをりゆかしく」

げんじいちぶきん 乾字一分金【名】次條に同じ。

げんじいちぶばんきん 乾字一分判金【名】**はうえいいちぶきん**(寶永一分金)に同じ。

げんじいと 源氏絲【名】紅白の絲をより合せたる細絲。主にテップと同一の目的に使用す。

げんじしう 研修【名】學藝などを研き修むること。

げんじしう 妍醜【名】容貌のうつくしきと見にくきと。妍媸。

げんじしう 獻酬【名】『酬は受けたる杯を相手に返して、重ねて酒を侑(スス)むる義』盃のやりとり。さしつさされつすること。

げんじしう 褒袖【名】うでまくり。揎袖。

げんじしう 減收【名】收入・收穫などの、減ること。(增收に對して)

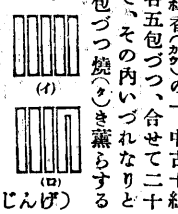
げんじしう 幻臭【名】〔哲〕**げんきう**(幻嗅)に同じ。

げんじうも 源氏打【名】鎧の小札(コザネ)を、一枚づつ、上下にくひちがはせて重ねたる鎧の打方、又その鎧。やまとうち。

げんじおくいり 源氏奥入【名】〔書〕源氏物語を解釋せるもの。藤原伊行の著。

げんじか 原子價【名】〔化〕『英Valency』**くわがふか**(化合價)に同じ。

げんじかう 源氏香【名】■**けいづかう**(系圖香)の舊稱。■組香(クミカウ)の一。中古十組の一。香五炷を、各五包づつ、合せて二十五包をうち交ぜて、その內いづれなりとも、五包取出し、一包づつ燒(タ)き薫らすること。その五包がみな別炷なる時は、これを圖(イ)のごとく記し、第一と第二とが同炷に屬し、他はみな異なる時は、(ロ)のごとく記し、第一と第三と同じく、又第二と第五と同じくして、第四のみ異なる時は、(ハ)のごとく記し、第一と第五と、又第三と第四と同じくして、第二のみ異なる時は、(ニ)のごとく記すなど、次第に圖を作れば、すべて五十二通り(初の桐壺と終の夢浮橋とには圖無し)となる。これを源氏香の圖・香の圖といひ、又訛りて、鴻の巢といふ。



げんじがく 縣視學【名】上官の指揮を承けて、一縣下の學事の視察、その他學事に關する事務に從事する判任官。

げんじがみ 源氏紙【名】源氏繪を書きたる奉書紙。

げんじき 見識【名】■みこみ。かんがへ。意見。見解。識見。■主義又は節操。■**きぐらゐ**(氣位)に同じ。

見識を張る【句】**けんしきばる**(見識張る)に同じ。

けんしき 檢絲器【名】『英Yarn testing machine』絲の强さを計るに用ふる檢力器、絲の或長さにおける撚數を知るに用ふる檢撚器など、すべて絲を檢査する器械の總稱。

げんじき 間食【名】朝夕の食事以外に用ふる食物。かんしょく(間食)参照。延喜式「凡陸奥兵士、間食料米二千八百八十斛」

げんしき 眼識【名】〔佛〕五識・六識又は八識の一。眼根(ゲンコン)を所依(ショエ)として、物の色を識別する作用。がんしき(眼識)参照。夫木「櫻花第四上慮に咲けりとも眼識なくばいかが要せん」

げんしき-によこんじやう-さう 眼色如金精相【名】〔佛〕三十二相の一。眼目清浄にして金色精の如きもの。

げんしきばる 見識張る【動四自】見識あるらしく装ふ。尊大にかまふ。見識を張る。見識ぶる。

げんじ-きん 乾字金【名】江戸幕府の通貨の一。寛永七年四月より享保四年十二月までの間に、鋳造・發行せし、乾字の極印(イン)ある金貨。乾字小判金と乾字一分判金との二種あり。寛永金。乾金。

げんじ-きん 元字金【名】『元の字の極印(インク)あるよりいふ』げんろくきん(元祿金)に同じ。

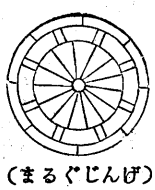
げんじ-ぎん 元字銀【名】『元の字の極印(インク)あるよりいふ』げんろくぎん(元祿銀)に同じ。

げんじ-きんぎん 元字金銀【名】げんろくきんぎん(元祿金銀)に同じ。

げんじ-きよく 検事局【名】〔法〕各裁判所に附設し、その裁判所に屬する検事の職務を行ふところ。區裁判所検事局・地方裁判所検事局・控訴院検事局・大審院検事局の別あり。

げんしきりすとけう 原始基督教【名】〔基〕『英 Primitive christianity』キリストによりて創められ、使徒によりて擴められたるキリスト教。

げんじくも 源氏雲【名】『源氏繪(エ)』にのみ見ゆる模様なりと考へて呼びなしたるべしといふ』畫の中に、金箔を洲濱形(スハマ)に置きて、雲のごとく見するもの。もと金箔の揉砂子(モミスナ)を鏤のやうに蒔きたりしを、砂子の代りに、金箔を用ふるに至れるものなりといふ。徳川反魂香「白茶亭に



(まるぐじんげ)

縫紋、もみうらに源氏雲の裾くくみ」

げんじくやう 源氏供養【名】謡曲の一。安居院(アグ)法印、石山寺に參詣すとて、紫式部の幽靈に逢ひ、その依頼によりて、源氏物語の供養をする事を作れるもの。古名、紫式部。

げんじぐるま 源氏車【名】紋所の一。下「の圖を見よ。

げんじぐわいでん 源氏外傳【名】〔書〕源氏物語を概評して、人情・世態を知る益ありとなし、必ずしも淫猥の書ならざることを論ぜしもの。五卷。熊澤蕃山の著。「吏。

げんしくわん 検視官【名】検視を行ふ官

げんしげいじゆつ 原始藝術【名】『英 Primitive art』原始時代の人の作れる藝術。幼稚・素朴なるを特色とす。

げんしけん 原始權【名】〔法〕他人の不法行爲によりて侵害せられざる以前より存在する權利。原權。第一權。

けんじこばん 乾字小判【名】次條の略。

けんじこばんきん 乾字小判金【名】『乾の字の極印(イン)あるよりいふ』はうえいこばんきん(寶永小判金)に同じ。

げんしさい 元始祭【名】『皇位の元始を祝する意』皇室の大祭の一。毎年一月三日に行はれ、天皇、賢所・皇靈殿・神殿の三所に御親祭あり。明治五年より行はせられ、この日、諸國の官國幣社・府縣社・郷村社に至るまで、すべて祭典を行ふ定めなり。

げんしざいごふ 原始罪業【名】〔基〕げんざい(原罪)に同じ。

けんじ-さう 【名】〔植〕■べんけいさう(辨慶草)を云ふ。〔東國の方言〕■さつまふぢ(薩摩藤)を云ふ。〔丹波國の方言〕

げん-じさん 元次山【名】〔人〕げんけつ(元結)に同じ。

げんし-さんぎふ 原始産業【名】原始時代より行はれたる産業。卽ち狩獵・牧畜・漁業・鑛業・農業などの類。

げんじ-し 現字紙【名】『英 Recording paper』電報を受信する時、電信機によりて、通信

げんじしだい 原始時代【名】『英 Primitive age』人類が未だ進化の源頭にありて、文字なく、産業發達せずして、食を自然物に仰ぎ、殆ど他の動物と同じやうなる生活をなしゐたる時代。原人時代。

けんじしほ 検事試補【名】判・検事登用試験に及第し、検事に附屬して、事務を修習するもの。

げんし-しやくわい 原始社會【名】原始時代の社會。原人社會。

げんし-しゆとく 原始取得【名】〔法〕『英 Original acquisition』所有權所得の一。未だ權利者なきか、又は權利者あるも、その權利者の權利に基因することなく、獨立的に權利を取得すること。例へば先占・添附・時効の類。原始的取得。(繼受取得に對して)

けんじせい 検事正【名】地方裁判所に附設せる検事局の長官。その局の指揮・監督を掌り、及び該地方裁判所管内の検事局を監督す。

げんじせうはせう 源氏紹巴抄【名】〔書〕源氏物語を註釋せるもの。里村紹巴の著。

げんしせつ 原子説【名】■〔化〕『英 Atomic theory 又 Atomism』物質の構造に關する假説。分子は、物理的方法にては、分割すること能はざる物質の最小片なれども、化合物が化學的變化をなす際に分解する事實より想像して、一分子を更に分割するときは、遂に原子と稱する極微片となると見做したる説。化合物の分子は、異種の原子二箇もしくは數箇より成り、單體の分子は、同一種の原子一箇・二箇もしくは數箇より成ると假定せらる。西暦一八〇四年英人ダルトン(John Dalton)の公にしたるもの。■〔哲〕げんしろん(原子論)に同じ。〔元子説〕

げんじ-ぜに 元字錢【名】江戸幕府時代の通貨の一。穿上に元字あり。

げんしせん 元詩選【名】〔書〕支那元の文帝順帝の詩を卷首に置き、その他一百家の詩を抄錄せるもの。卷首一卷、初集六十八卷、二集二十六卷、三集十六卷。清の顧

上の符字をあらはし出すに用ふる、幅狹くして、長く續ける紙。

げんしじだい 原始時代【名】『英 Primitive age』人類が未だ進化の源頭にありて、文字なく、産業發達せずして、食を自然物に仰ぎ、殆ど他の動物と同じやうなる生活をなしゐたる時代。原人時代。

げんじ-そうちやう 検事總長【名】大審院に附設せる検事局の長官。司法大臣の上奏によりて、勅任検事中より補し、その局の指揮・監督を掌り、及び下級検事局を監督す。

げんしたい 原絲體【名】〔植〕蘚苔類の植物の表面に發生する、綠色の絲狀體。

げんじたくぼく 源氏琢木【名】鎧の滅し方の一。啄木絲にて、表を龜甲、裏を矢筈なる貝の口に組むもの。

げんしだん 原子團【名】〔化〕『英 Atomic group』き(基)(二)に同じ。

げんしちへい 現視地平【名】〔天〕『英 Visible horizon』觀測者に見ゆる天と地との界線、卽ち觀測者の目より地球表面へ引きたる、すべての切線のなす表面。普通平面にあらずして、圓錐形をなす。

げんじちやう 検事長【名】控訴院に附設せる検事局の長官。勅任検事中より補し、その局の指揮・監督を掌り、及び該控訴院管内の検事局を監督す。

げんしちやうけいしふ 元氏長慶集【名】〔書〕げんしん(元稹)を見よ。

げんし-つ 堅實【名】堅固なる性質。

げんし-つ 劒室【名】劒のさや。

げんし-つ 權實【名】かりのことと、實のこと。ごんじつ。

げんし-つ 堅實【名】てがたきこと。たしかなること。しっかりせること。

げんし-つ 兼日【名】■期日より前の日。蓍曳「この讃、兼日に敬光朝臣つくりて、前兵衛佐顯仲朝臣清書しけり」■數日を要すべき物事を、一日に仕上ぐること。■數日間に渉ること。

げんし-つ 茨實【名】鬼蓮(ハス)の實。

げんし-つ 言實【名】げんち(言實)の誤讀。

げんし-つ 玄室【名】古墳の石槨内にあり

て、棺を納むる室。

げんしつ 原質【名】 もとのたち。もととなる物。したぢの物。

げんじつ 現實【名】 ㊀『英 Reality』現在の儘なること。現に存在せること。實在。 ㊁〔哲〕『英 Actuality』現に存し又はあらはれたる事實又は狀態。(空想又は理想に對して)現實曝露(バク)【句】人生の裏面に行はれつつある生活上の事實にして、從來隱蔽せられし者を、自然主義の文藝において、事實を事實として憚る所なく表白すること。「現實暴露の悲哀」

げんじつ-かい 現實界【名】〔哲〕現に存し、事實にあらはれてある世界。即ち經驗の範圍。

げんじつ-かん 現實感【名】『獨 Wirklichkeitssinn』現實の生活に對する感覺。

けんしつ-き 檢濕器【名】〔理〕こつちけん(濕度計)に同じ。

げんじつ-しゅぎ 現實主義【名】じつりしゅぎ(實利主義)に同じ。

げんじつ-せつ 現實說【名】『英 Actuality theory 又 Theory of actuality』 ㊀〔理〕エネルギイの活動を物質の本質となし、活動の外に活動の土臺たる物質なしとなす見解。實體說。 ㊁〔哲〕現實に經驗するがごとき精神的出來事の總和が精神にして、精神の特色はあらゆる精神過程を統一する所にありとなし、精神過程の根柢に橫たはる實體を認めざる見解。即ち生命の原理と精神とを同一視するが故に、この見解にては、物質と精神とに嚴しき別を立てず。現實論。實體說。

げんじつ-てき 現實的【貌】『英 Realistic』現實なるさま。

げんじつてき-だんてい 現實的斷定【名】〔哲〕『英 Assertory judgement』その關係が現實に起れることを示せる斷定。例へば、「甲は現に(事實として)乙なり」「今日は雨降れり」といふ類。確實的斷定。

げんじつ-は 現實派【名】〔哲〕『英 Realism』實際の事實又は狀態を基礎として、說を立つる一派。(理想派に對して)

げんじつろん 現實論【名】〔哲〕げんじつせつ(現實說)㊁に同じ。

けんし-てうしよ 檢視調書【名】檢視官が、檢視の顚末を記載して作成する調書。

げんし-てき 原始的【貌】『英 Primitive』原始時代のものに似たる狀。即ち單純・素朴・幼稚・迂拙なるさま。

げんしてき-しゅとく 原始的取得【名】〔法〕げんししゅとく(原始取得)に同じ。(繼受的取得に對して)

げんし-どうぶつ 原始動物【名】〔動〕げんせいどうぶつ(原生動物)に同じ。

げんじな 源氏名【名】源氏五十四帖の題名を、そのまま又はこれに擬せる、優美なる名。例へば夕霧(ユフギリ)・薄雲(ウスグモ)・小紫(コムラサキ)・菊枝(キクエ)・小石(コイシ)などの類。今も普通の女子にて、これを冒せるものあれど、多くは宮中の女官の間に行はる。又、專ら遊女の間に行はれ、突出(ダシ)の時よりこれを用ひ、その前はお字名を用ふる定なり。(於字名に對して)

けんしないしんわう 顯子內親王【名】〔人〕後水尾天皇の女。母は東福門院。女三の宮と稱し、後、岩倉御所と稱す。延寶三年薨ず。

げんしねつ 原子熱【名】〔化〕『英 Atomic heat』元素の原子量とその比熱との相乘積、即ち一原子を溫むるに要する熱量の割合。比熱を原子量にて除する時は、諸固狀元素を通じて、殆と相等しき數(平均六、四)を得ること、佛蘭西のデュウロン(Dulong)・プチイ(Petit)兩氏の發見に係る。

げんし-のうはふ 原始農法【名】〔農〕原始時代に行はれし、簡單なる農業法。

げんじ-の-きみ 源氏君【名】ひかるげんじ(光源氏)に同じ。

げんじ-の-たいしやう 源氏大將【名】前條に同じ。平家源氏の大將の昔をしのびつつ、須磨より明石の浦づたひ」

げんじ-の-ま 源氏間【名】『げんじものがたり』を見よ』近江國石山寺の本堂の側にありて、紫式部が琵琶湖上の月に對して、源氏物語を起草したりといふ室。萬葉千紅「うすぐらき石山でらの源氏の間さしいる秋の湖月一巻」

げんじ-の-ものがたり 源氏物語【名】〔書〕げんじものがたり(源氏物語)に同じ。今鏡「むかしの人の作りたまへる源氏の物語に」

けんし-ばうせき 絹絲紡績【名】きぬいとばうせき(絹絲紡績)に同じ。

げんじ-ばこ 源氏箱【名】源氏物語を入れて、黑棚に飾る箱。

げんし-ひやくいっせう 元詩百一鈔【名】〔書〕げんしべっさいしふ(元詩別裁集)に同じ。

げん-しふ 原隰・原濕【名】『書經の禹貢篇に見ゆ』土地の高く平らかなる處と、低くして平らかなる處と。

けんし-ぶぎやう 檢使奉行【名】室町幕府の職制の一。訴訟の判決を實檢する事を掌りしもの。

げんじ-ぶし 源氏節【名】俗曲の一種。說經淨瑠璃節より出でしもの。太夫は多く妙齡の女子にして、一段の終る每に、名古屋琵琶句を歌ふ。又、語り物の間には、娘手踊として、女芝居を演ず。明治十二年頃尾張國名古屋の岡本美左松(マツ)といふ女太夫、これを創む。同三十八年に禁止せらる。

げんしぶっけう 原始佛敎【名】『英 Primitive buddhism』後人の說の加味せられぬ、釋迦說示のままの佛敎。小乘敎にて、釋迦在世の當時よりその滅後百年までの間、印度諸邦に弘まり、今も暹羅(シヤム)・錫蘭(セイロン)等の地に行はる。「大乘非佛說」參照。

けんし-ぶね 檢使船【名】檢使の乘れる船。

げんしぶんし-せつ 原子分子說【名】〔化〕げんぶんしせつ(原分子說)に同じ。

げんじ-べい 源氏塀【名】數寄屋などに用ふる一種の塀。燒杉を柱とし、腰長押(コシナゲ)と地長押(ヂナゲ)との間は、竹の目板などを用ひて羽目板を太鼓張(ダイコ)にし、腰長押と笠木との間には、欄(キク)を設けたるもの。

げんし-べっさいしふ 元詩別裁集【名】〔書〕ごてうしべっさいしふ(五朝詩別裁集)を見よ。

げんじ-ほ 兼二補【名】〔地〕朝鮮平安南道大同江の下流左岸、平壤と鎭南浦との間にある港。日露戰役に、工兵中佐渡邊兼二の發見して、鐵道材料揚陸地とせし所。

けんし-ほふいん 玄旨法印【名】〔人〕ほそかはいうさい(細川幽齋)の異稱。

げんじまき 源氏卷【名】棹物(サヲモノ)菓子の一種。紅梅餅の類。白色の原料と食料紅(ショクベニ)を加へたる原料とを以て、渦卷の形に捲伸ばし、小口切にしたるもの。

げんじ-まめ 源氏豆【名】ほうらいまめ(蓬萊豆)に同じ。

けん-しん 獻身【名】一身を、その事又はその人に捧げて、專念に盡すこと。

けん-しん 獻進【名】げんじやう(獻上)に同じ。

けん-しん 見神【名】悟を開きて、神の示現を心中に感ずること。

けん-しん 檢診【名】檢査のために診察すること、又その診察。

けん-しん 檢眞【名】〔法〕民事訴訟にて、私署證書の眞否につきて爭ある場合に、舉證者の申立により、裁判所にて、その眞否を裁判する手續。

けん-しん 欠仲【名】欠(ヒク)と背のびと。

けん-しん 堅振【名】〔基〕『羅 Confirmatio』天主敎にて、信者の信仰を堅固ならしめんがために、聖靈とその賜なる銳智・明達・超見・剛毅・智識・孝愛・敬畏の七德とを蒙らしむる祕蹟。司敎、一定の儀式の下に、これを授け、また羅馬法王の特許を得て、司祭これを授くることあり。

けん-しん 賢臣【名】賢明なる臣。

けん-しん 權臣【名】權力ある臣下。

けん-しん 劍身【名】劍の身(ミ)。「銃丸、劍身に當る」

けん-しん 懸針【名】筆法の一。竪の畫(カク)の下端を、恰も針を懸けたるが如く、次第に細くすること。(垂露に對して)

けん-しん 見眞【名】〔佛〕『無量壽經下に「慧眼見眞能度二彼岸一」とあるに本づく』空慧(エク)即ち空理を觀ずる智慧を以て眞

諦(タイ)の理を徹見すること。

けんしん 見眞【名】〔人〕けんしんだいし(見眞大師)を見よ。

けんしん 謙信【名】〔人〕うへすぎけんしん(上杉謙信)を見よ。

けん-じん 縣人【名】その縣の人。

けん-じん 研尋【名】精しくきはめたづぬること。討尋。研究。

けん-じん 賢人【名】■かしこき人。徳の、聖人に次ぐ人。 孕篤鮭されども小松の重盛は日本の賢人」 ■にごりざけ(濁酒)の異稱。賢酒。(聖人に對して) 下學集「賢人、ケンジン、呼二濁酒一云賢人一」

賢人二君に仕へず【句】「忠臣二君に仕へず」に同じ。〔諺語〕

賢人は危きを見ず【句】「君子は危に近寄らず」に同じ。〔諺語〕

賢人は賢人を以て求め、盗人は盗人を以て求むべし【句】「蛇の道はへび」に同じ。〔諺語〕

けん-じん 涓人【名】廉潔なる人。いさぎよき人。

けん-じん 眩人【名】妖術を行ふ者。魔法つかひ。

げん-じん 元稹【名】〔人〕支那唐の詩人。字は微之。河南の人。十五歳にして明經に擢でられ、累進して尚書右丞に至り、武昌節度使に拜す。詞才あり、白居易より少きこと七歳、相倡和するところ多く、元白の稱あり。太和五年五十三歳にして歿し、尚書右僕射を贈らる。その詩集を元氏長慶集といふ。

げん-しん 元心【名】〔佛〕『森羅萬象の元となる意にて、元といふ』絶待・圓滿の心。一心。

げん-しん 玄心【名】〔佛〕玄妙なる心識。

げん-しん 嚴親【名】父おや。父ぎみ。嚴父。保元「嚴親判官殿、院宣を蒙り給ひて」

げん-しん 現身【名】■現在の身。うつしみ。 ■〔佛〕おうじん(應身)に同じ。 野守の鏡「現身にあらはれて成佛すべき別傳は」

げん-しん 源心【名】〔人〕高僧。覺慶の弟子。行業精純にして、善く法華を講ず。永承三年延暦寺の座主となり、同八年寂す。年八十三。

げんしん 源信【名】〔人〕天台宗の高僧。俗姓は卜部(ウラベ)。大和國葛城(カヅラギ)の人。良源に事へ、天台の教觀を究め、横川(ヨカハ)に屏居して、專ら著述を業とし、最も淨土門に意を致す。一乘要訣・台宗二十七疑等、著すところ甚だ多く、又、繪畫・彫刻を善くす。寛仁元年寂す。年七十六。

源信僧都、四十一箇條の起請【句】源信が、自坊にて、門弟のために設けたる、四十一箇條の禁制文。 十訓「源信僧都四十一箇條の起請第十一段に「雖レ有二不レ叶レ心事一、思忍全不レ起二瞋恚一」とありければ」

げん-じん 原人【名】『英 Primitive man』原始時代の人。太古の人。

げん-じん 減盡【名】■減少の結果、全く無くなること。 ■〔法〕減刑の結果として、その刑名を脱するに至ること。

げん-じん 玄參【名】〔植〕ごまのはぐさ(玄參)に同じ。

けんじん-がほ 賢人顔【名】賢人ぶりたる顔つき。けんじんづら。 曾我「しもたてぬ賢人顔せんよりも」

けんしん-き 檢診器【名】ちやうしんき(聽診器)に同じ。

けんしん-き 檢震器【名】おしんけい(地震計)に同じ。

げんしん-くわ 玄參科【名】〔植〕ごまのはぐさくわ(玄參科)に同じ。

けんじん-くわい 縣人會【名】同じ縣の出身の人が集まる會。

けんじん-ごかし 賢人轉【名】賢人と譽めそやしておだつること。

けんしん-さんとく-りう 謙信三徳流【名】兵法の一派。寛永中、栗田因幡守寛政(水戸侯に仕ふ)の創めしもの。謙信流より出づ。

げんじん-じだい 原人時代【名】げんじだい(原始時代)に同じ。

げんじん-しやくわい 原人社會【名】げんしやくわい(原始社會)に同じ。

けんしん-しゆぎ 虔信主義【名】〔基〕けんしゆぎ(敬虔主義)に同じ。

けんしん-だいし 見眞大師【名】〔人〕『明治九年十一月勅諡せらる』しんらん(親鸞)の大師號。

けんしんだいし-き 見眞大師忌【名】しんらんき(親鸞忌)に同じ。

けんじん-だて 賢人立【名】賢人らしく裝ふこと。賢者ぶり。 著聞「さしもはやりたる事に、ただひとりまじりたまはざりつれば、賢人だてかと思ひて侍りけるに」

けんじん-づら 賢人面【名】けんじんがほ(賢人顔)を罵りていふ語。 糠雨卯月の紅葉「扨は傳三郎が賢人づらを見せかけて」

げん-しんどう 原振動【名】〔理〕『英 Fundamental vibration』發音體が原音を發する時の振動、即ち振動體全部が一區となりて振動すること。

げんしん-ぶつ 現身佛【名】〔佛〕おうしんぶつ(應身佛)に同じ。

けんじん-もん 顯親門【名】八省院の二十五門中、西面七門の一。右廂門。

けんしん-もんゐん 顯親門院【名】〔人〕伏見天皇の宮人。名は季子。左大臣藤原實雄の女。天皇の崩後、尼となり、法名を圓常覺と稱す。延元年薨ず。年七十二。

けんしんらし 遣新羅使【名】中古に、我が國より新羅國に遣されたる使者。遣高麗使・遣隋使・遣渤海使の類。

けんしん-りう 謙信流【名】兵法の一派。上杉謙信の創めたるものと稱す。甲州流と共に、我が國兵法中の白眉たり。越後流。

けんじ-もの 源氏物【名】能樂にて、源氏物語の中の事を作れるもの。例へば葵上(アフヒ)・須磨源氏などの類。

げんじ-ものがたり 源氏物語【名】〔書〕中古の繪紳間の有樣をうつしたる小說。全篇を、桐壺・箒木(ハヽキヾ)・空蟬(ウツセミ)・夕顏・若紫・末摘花(スエツムハナ)・紅葉賀(モミヂノガ)・花宴(ハナノエン)・葵・榊花散里(サカキバナチル)・須磨・明石・澪標(ミヲツクシ)・蓬生(モグラ)・關屋・繪合・松風・薄雲・朝顏・少女(オトメ)・玉鬘(タマカヅラ)・初音・胡蝶・螢・常夏(トコナツ)・篝火・野分(ノワキ)・御幸(ミユキ)・藤袴・眞柱・梅枝・藤末葉(フヂノウラバ)・若菜・柏木・橫笛・鈴蟲・夕霧・御法(ミノリ)・幻(マボロシ)・雲隱(クモガクレ)・匂宮・紅梅・竹川・橋姫・椎本(シヒガ)・總角(アゲマキ)・早蕨(サワビ)・宿木(ヤドリギ)・東屋(アヅマヤ)・浮船・蜻蛉(カゲロフ)・手習・夢浮橋(ユメノウキハシ)の五十四帖に分ち、幻までの四十帖は、前篇にして、光源氏(ヒカルゲンジ)を主人公とし、紫上(ムラサキノウヘ)等幾多の才媛を配して、その得意の生活を寫し、雲隱の一帖は、光源氏薨去の意を寓せしものにて、名のみにて文なく、匂宮・紅梅・竹川の三帖は、後篇への連鎖、後篇なる橋姫以下の十帖は、光源氏の子薫(カヲル)大將を主人公とし、宇治の八宮の姫君等を配して、大將の失意の狀を寫し、特に宇治十帖と稱せらる。紫式部の著。げんじ。源氏の物語。紫の物語。

げんじものがたり 源氏物語【名】〔書〕『紫式部、上東門院より物語書きて參らすべき命を受け、石山寺に參籠してその趣向を祈りしに、折しも八月十五夜の月琵琶湖上に映じて、物語の風情心に浮び、須磨・明石の二卷より執筆しはじめたりといふ俗說によりて、湖月の名を命ぜしなり。げんじのま(源氏間)を見よ』源氏物語を註釋せるもの。六十卷。北村季吟の著。

げんじものがたり-ひやうしやく 源氏物語評釋【名】〔書〕源氏物語を評釋せるもの。十四卷。萩原廣道の著。國文評釋全書中に收む。

げんじものがたり-こげつせう 源氏物語湖月抄【名】〔書〕『紫式部、上東門院より物語書きて參らすべき命を受け、石山寺に參籠してその趣向を祈りしに、折しも八月十五夜の月琵琶湖上に映じて、物語の風情心に浮び、須磨・明石の二卷より執筆しはじめたりといふ俗說によりて、湖月の名を命ぜしなり。げんじのま(源氏間)を見よ』源氏物語を註釋せるもの。十四卷。萩原廣道の著。國文評釋全書中に收む。

げんじものがたり-あまき 源氏物語繪卷【名】〔書〕源氏物語の抄本に繪を插みたるもの。繪と筆蹟の美とを主とし、文章は寧ろ客たり。古來、種種の逸品あり。德川侯爵舊名古屋藩主・秋元子爵・蜂須賀侯爵の三家に傳へたるものは、繪は藤原隆能(タカヨシ)、或は隆親、書は世尊寺伊房と傳へられ、早蕨(サワビ)・宿木・東屋・柏木・橫笛・夕霧・鈴蟲・御法(ミノリ)を三卷に寫し、纖柔なる筆意を用ひて、裝飾風の彩色を加へ、鎌倉時代の大和繪の傑作たり。また別に伊豫守隆成の筆と傳ふるものあり。

げん-しや 縣社【名】社格の一。縣より奉幣するもの。府社と同じく、國幣社の下、鄉社の上に位するもの。

けん-しや 賢者【名】かしこき人。けんじん。けんじや。

賢者ひだるし、伊達(ダテ)寒し【句】賢

者は清貧に安んじて餓ゑ、伊達者は容姿のために薄著(ギヤス)して、寒き思をなす。〔諺語〕

賢者も千慮に一失」に同じ。〔諺語〕

けん-しや 懸車・縣車【名】『漢書の薛廣德傳に「與二丞相定國一皆賜二安車駟馬一、黃金六十斤一、蘭德骨一、皆賜二安車駟馬一、黃金六十斤一、龍、廣德東歸レ沛、太守迎之界上一、沛以爲レ榮、縣二其安車一、傳二子孫一」とありて、注に「縣二其所レ賜安車一、以示二榮幸一也。致仕懸レ車、蓋亦古法」とあり』年老いて、仕官をやむること。致仕。〔二〕『白虎通に「致仕、臣七十懸レ車致仕者、臣以二執事趨走一爲レ職、七十陽道極、耳目不二聰明一、跛倚之屬、是以退去、避二賢者一、所二以長一廉恥一也、懸レ車示レ不レ用」とあり』ちし(致仕)〔二〕に同じ。

懸車の年【句】『晉書の劉毅傳に「雖レ過二懸車之年一、有レ可レ用」、又、權德輿の司空李撰讓議に「過二懸車之年一、奉二絕域之使一、受二詔即レ路、視レ險若レ夷」とあり』ちし(致仕)〔二〕に同じ。

懸車の齢(よはひ)【句】前條に同じ。正誤記「その子師房、…大臣大將に昇りて、懸車の齢まで仕うまつらる」

けん-しや 甄者【名】けんこう(甄工)に同じ。

けん-しや 慳者【名】〔二〕慾深き人。やぶさかなるもの。〔二〕邪險なる人。

けん-じや 賢者【名】〔一〕けんしや(賢者)に同じ。〔二〕〔佛〕善道を修して、未だ斷惑證悟せざる者。賢人(ケンジン)。聖者(シヤウジヤ)に對して)**けんじやう(賢聖)**參照。

けん-じや 見者【名】それを見る人。珊瑚「見者歡喜と打ちあげたる程に」

げん-しや 言者【名】ものいふ人。言論する人。說者。

げん-じや 驗者【名】修驗道(シユゲンダウ)の行者。やまぶし。しゆげんじや。げんざ。其「驗者の、もののけうずとて、いみじうしたり顏に」宰。

けん-しやう 賢相【名】賢明なる宰相。

けん-しやう 賢將【名】賢明なる將帥。

けん-しやう 乾象【名】天のかたち。

けん-しやう 劍匠【名】かたなかぢ(刀鍛冶)に同じ。

けん-しやう 顯象【名】あらはれたる狀。「現象。

けん-しやう 顯正【名】〔佛〕中正なる法理を顯示すること。「破邪顯正」

けん-しやう 顯彰【名】あらはすこと。あらはること。

けん-しやう 顯賞【名】あらはし賞すること。「と。

けん-しやう 懸賞【名】希望の條件に適合するものを求むるため、賞を與ふることを約すること。又、優秀なる者に賞を與ふる條件にて、詩歌・文章・考案などを募ること。

けん-しやう 懸章【名】陸軍の高等官・衙副官・週番又は衞戍巡察の將校の、右肩より左脇にかけて佩用する平帶狀の記章。副官は黃白、他は赤白なるを用ふ。

けん-しやう 繰綢【名】〔一〕書物を表裝する薄き絹。〔二〕書物。

けん-しやう 兼掌【名】二つ以上の事を、一人にてつかさどること。

けん-しやう 肩牆【名】(兵)野戰にて、砲手又は砲車を掩護するために、土壤にて築き上げたるもの。

けん-しやう 肩章【名】〔一〕かたじるし(肩章)に同じ。〔二〕有爵者及び文武官の制服の肩に附くる飾章。官職・等級の異なるに從ひて、形狀・樣式一樣ならず、殊に陸・海軍武官のは、將官より兵卒に至るまで、階級により、十數種の區別あり。

けん-しやう 見聖【名】私年號(シネン)の一。推古天皇の二十一年に相當す。

けん-しやう 見性【名】〔佛〕諸種の妄惑を照見して、自性の無我を覺悟すること。自家の佛性を徹見すること。大悟徹底。見性成佛(ケンシヤウジヤウブツ)【句】〔佛〕『達磨の悟性論に「直指人心、見性成佛、敎外別傳、不立文字」とあるに本づく』見性して、一切諸法の覺者となること。野守の鏡「禪宗の見性成佛、皆理によりて、速疾の義を立つれども」

けん-しやう 見障【名】〔佛〕四障の一。諸の邪見を起して、菩提心を障害するもの。

けん-しやう 憲章【名】おきて。はっとが

き。法則。

けん-じやう 勸賞【名】功を賞して、官などを授くること、また奬勵のための賞與。くるんじやう。げんしやう。平家「安藤武者は、文覺えたる勸賞に、一蕨を經ずして、當座に右馬允にぞなされける」

けん-じやう 券狀【名】けん(券)に同じ。

けん-じやう 堅城【名】丈夫なる城。堅固なる城。

けん-じやう 獻上【名】〔一〕たてまつること。獻進。進獻。獻納。〔二〕**けんじやうはかた(獻上博多)**の略。

獻上の鴨【句】『德川時代に、將軍へ獻上する鴨は、その足を白紙にて卷包みしよりいふ』著物はきたなきに、足袋のみ新しく白きを穿きたる姿の譬。「獻上の鴨で、足を飾る」

けん-じやう 肩上【名】肩の上。わたがみ。

けん-じやう 賢聖【名】〔佛〕賢者と聖者と。聖賢(ケンイ)。「じ。

けん-じやう 謙讓【名】けんそん(謙遜)に同じ。

けん-じやう 乾城【名】〔佛〕**けんだつばじやう(乾闥婆城)**の略。

けん-じやう 絃上【名】『**げんじやう(玄象)**を見よ』譜曲の一。藤原師長(モロナガ)、琵琶の祕曲を授からんがために、入唐せんとせしを、村上天皇、梨壺女御と共にあらはれて、これを止め、師長に獅子丸(シシマル)の琵琶をたまひて、祕曲を奏し、舞ひたまふ事を作りしもの。

げん-しやう 減省【名】へらし省くこと。

げん-しやう 還生【名】〔佛〕〔一〕餘業(ヨゴフ)未だ盡きざる等のために、涅槃(ネハン)界より復活すること。〔二〕一旦破戒して、佛海の死屍となりし者の、懺悔(サン)して、正命に復すること。

げん-しやう 現象【名】〔一〕あらはれて見ゆるかたち。顯象。〔二〕〔哲〕『英 Phenomenon』客觀に實存する本體が、吾人の主觀に映ずる相。すべて吾人の經驗し得る事物。五官を通じて、吾人にあらはるるところのもの。(本體に對して)「同じ。

げん-しやう 現生【名】〔佛〕**げんぜ(現世)**に現生十種の益(ヤク)【句】〔佛〕阿彌陀佛を信ずる者の現世に於て受くる十の利益。即ち冥衆(シユウ)護持・至德具足・轉惡成善・諸佛護念・諸佛稱讚・心光照護・心多歡喜・知具報德・常行大悲・入正定聚。現生(シヤウ)十益(ヤク)。(眞宗の語)

げん-しやう 舷墻【名】『英 Bulwark』波浪を防ぎて、旅客船員を保護するため、暴露甲板の兩舷端に造れる墻壁。高さ三四尺あり。

げん-しやう 勸賞【名】げんじやう(勸賞)に同じ。下學集「勸賞、ゲンシヤウ」

げん-しやう 沅湘【名】〔地〕沅と湘との二つの川。ともに支那湖南省にあり、相會して西湖に注ぐ。しやうせう(湘瀟)參照。徒然「沅・湘日夜、東に流れ去つて、愁人のためにとどまることなく、暫くもせず、と云へる詩を見はべりしこそ、あはれなりしか」

げん-しやう 眼象【名】〔建〕唐戶・器具或は九輪下の露盤などに附する裝飾。かうざま。げじやう。〔華乘・外定〕

げん-しやう 玄上・玄象【名】古の琵琶の名器の一。はるかみ。平家「仁明天皇の御宇、嘉祥三年三月に、掃部頭貞敏渡唐の時、大唐の琵琶の博士廉武にあひ、三曲を傳へて歸朝せしに、その時、玄象・獅子丸・青山(セイザン)三面の琵琶を相傳して渡りけるが、龍神や惜しみ給ひけん、波風あらく立ちければ、獅子丸を海底に沈めぬ。今、二面の琵琶を渡いて、わが朝の帝の御寶とす」中務內侍日記「玄上の御撥音、ことに耳のほりて」

げん-じやう 原狀【名】もとの狀態。原態。

げん-じやう 現狀【名】現在の狀態。まのあたりのありさま。

現狀打破(ハ)【句】現時の狀態を打破ること。現狀を變化せしむること。

現狀維持【句】現時の狀態のまま進めゆくこと。現狀を持續すること。

げん-じやう 原上【名】〔佛〕野原のほと


(うやじんげ)

り。原頭。

げん-じやう 現成・見成【名】〔佛〕『現前成就の義』目前に顯はれて、一點も藏さざること。自然に出來あがりぬて、造作按排を借らぬこと。〔禪宗の語〕

げん-じやう 玄奘【名】〔人〕支那唐の高僧。名は禕、江陵の令尹陳慧の子。貞觀三年西蕃の諸國を經て、印度に入り、玄鑑居士に瑜伽論を受け、王舍城に入り、那爛陀寺に止まりて、戒賢論師に瑜伽唯識の宗旨を受け、貞觀十九年長安に歸り、經論凡そ七十五部・一千三百三十卷を翻譯し、帝より三藏の尊號を授けらる。麟德元年寂す。又、西域記の著あり。

けんじやう-いまり 獻上伊萬里【名】皇室に獻上する伊萬里燒。寛文年間、有田(アリタ)の工人辻喜左衞門といふ者の獻上せしより慣例となり、必ず白磁に青華にて、菊花と舞鶴との紋を畫く。

げんしやう-かい 現象界【名】〔哲〕形而下の世界。經驗の世界。感知の世界。現象世界。

げんしやう-かいい 玄裳縞衣【名】〔動〕『蘇軾の後赤壁賦に「玄裳縞衣翩然長鳴」とあるに本づく』つる(鶴)の異稱。

げん-しやうぐん 嚴將軍【名】〔人〕げんがん(嚴頑)に同じ。

げんじやう-くわいふく 原狀回復【名】■もとの狀態にとりもどすこと。■〔法〕『羅 Restitutio in integrum』或行爲その他の事實によりて、法律的狀態が變更を受けたる場合に、その變化を受けざりし以前の狀態に回復すること。

けんしやう-くわうこく 懸賞廣告【名】そのことをなしたる者に、一定の報酬を與ふべき旨の廣告。

げんじやう-さんざう 玄奘三藏【名】〔人〕

げんじやう(-しやう) 玄精(玄晶)に同じ。

けんしやう-しつ 顯晶質【名】〔鑛〕『英 Phanerocrystalline』結晶鑛物の、結晶の個體が、肉眼にて認め得る程度のもの。

げんしやう-しやうおやうじゆ 現生正定聚【名】〔佛〕現生十種の益(ヤク)の一。阿彌陀佛を信じたる者が、現世にて、既に加はる佛・菩薩の地位。入正定聚。〔眞宗の語〕

けんしやう-じやうぶつ 見性成佛【句】〔佛〕けんしやう(見性)の條下を見よ。

けんじやう-じゆ 賢聖衆【名】〔佛〕賢聖の人人。聖衆と賢衆と。梁塵「招二百餘口賢聖衆一」

げんしやう-せかい 現象世界【名】〔哲〕げんしやうかい(現象界)に同じ。(叡智世界に對して)

けんしやう-だう 顯章堂【名】古、八省院内、大極殿の南方に、東西に別れて、六堂づつありし内の西方の一。

げんしやう-てんわう 元正天皇【名】〔人〕第四十四代の天皇。御名は氷高(ヒダカ)。草壁皇子の御女。御母は元明天皇。在位九年(紀元一三七五年—一三八三年)。天長二十年崩ず。壽六十九。

けんじやう-なないろ-がみ 獻上七色紙【名】江戸幕府時代に、土佐侯より幕府に毎年獻上せし、七種の色紙。即ち修善寺・柿色・黃・淺黃・桃色・紫・萌黃。

けんじやう-の-さうじ 賢聖障子【名】『賢聖は佛教の語』古の內裏紫宸殿の母屋(モヤ)の後面の襖障子(フスマ)。總じて九間、東・西に分れ、各十六人づつの支那三代より唐代までの聖賢・名臣の像を畫き、中央に書を負へる龜と左右の下に獅子・狛犬を畫きしもの。宇多天皇の時、支那麒麟閣の圖に擬して、巨勢(コセ)金岡の描きしものといふ。

けんじやう-の-しやうじ 賢聖障子【名】前條に同じ。

けんじやう-はかた 獻上博多【名】『慶長中より織出され、藩主黑田侯より、江戸幕府に獻上せしよりいふ』■博多帶地に、獨鈷(トコ)形の模樣を、縱縞のごとく、五本織出したるもの。獻上。■博多織の獨鈷の入りたるものの總稱。

けんじやう-ひしんけい 劍狀披針形【名】〔植〕劍狀をなしたる披針形。

けんじやう-ひん 獻上品【名】けんじやうもの(獻上物)に同じ。

げんしやう-ふたい 現生不退【名】〔佛〕現生正定聚(ヤウジヤウジユ)の地位に住すること。

けんじやう-もの 獻上物【名】■獻上する品物。ささげもの。■江戸幕府時代に、將軍より朝廷へ、又は大名より將軍へ奉りし品物。獻上品。

けんじやう-らく 獻上物の鰯【句】見かけのみ立派なものの譬。〔諺語〕

けんじやう-らく 還城樂【名】■舞樂の一、又この曲に用ふる假面(メン)。■支那唐の玄宗、皐后を誅して還りし時、作りし曲なりとも、又、見蛇樂(ケンジヤラク)の轉訛にて、西域の人好みて、蛇を食ひ、求めてこれを得る時、舞ひて悅ぶ姿をうつしたものともいふ。大食調(タイジキ)に屬す。■還城樂の假面(メン)の如き形に造れる頗當。

げんしやう-ろん 現象論【名】〔哲〕■『英 Phenomenalism』認識の妥當性、即ち認識の對象に關する立脚地の一。すべての知識は現象の範圍內のみに限られ、吾人は本體その物の眞相を知ること能はずとする學說。又、智識に現はれたる現象は即ち本體にして、智識を離れたる本體は存在せずといふ說。(觀念論・實在論に對して)■『英 Phenomenology』哲學の一部。本體より萬有を成生する所以を究むるもの。

けん-しやく 獻酌【名】盃をさして酒をくむこと。太平記「獻酌順に下りて後」

けん-しやく 顯爵【名】えいしやく(榮爵)に同じ。

けん-じやく 劍尺【名】ものさしの一種。曲尺(カネジヤク)の一尺二寸を、八段とせるもの。刀劍門戶・佛像等の長さを測るに用ふ。刀劍の長さを測り、それによりて吉凶・善惡を評定することあり。玉尺(ギヨクシヤク)。

げん-しやく 玄籍【名】ぶつけう(佛敎)に同じ。

けん-じやうめ 劍蛇目【名】敍所の一。三方を指したる三つの劍先の間に、三つの蛇目を配りたるもの。

げんしやう-はふ 現寫法【名】〔文〕げんざいはふ(現在法)に同じ。

けんじやう-ぶり 賢者振【名】けんじんだて(賢人立)に同じ。蘆、餓鬼の斷食、惡女の賢者ぶり」

けん-じやり 劍舍利【名】〔鑛〕劍先のごとき形に結晶せる石英。かぶとずゐしやう。

けん-しゆ 懸珠【名】『珠を懸けたるごとくなる義。漢書の東方朔傳に「臣朔年二十二、長九尺三寸、目若二懸珠一、齒若二編貝一」とあり』美しき目つきの譬。

けん-しゆ 懸殊【名】〔佛〕けんぜつ(懸絕)に同じ。

けん-しゆ 堅守【名】かたく守ること。

けん-しゆ 賢主【名】賢明なる君主。賢君。

けん-しゆ 賢酒【名】けんじん(賢人)■に同じ。

けん-しゆ 卷鬚【名】〔植〕まきひげ(卷鬚)に同じ。

けん-しゆ 黔首【名】『黔は黑色の義、古、支那にて、身分低き普通の人民は、冠物(モノ)をせず、黑き頭髮を露出せしよりいふ』たみ。人民。黎民。黔黎。庶民。

けん-しゆ 堅首【名】〔佛〕比丘(ビク)を呼ぶ時の尊稱。

けん-じゆ 賢衆【名】〔佛〕賢者たち。(聖衆(シヨウジユ)に對して)けんじやうじゆ(賢聖衆)參照。梁塵「無量・無數の賢衆、來りて」

けん-じゆ 劍樹【名】〔佛〕■枝葉も花も實も、すべて刀劍より成るといふ、地獄の木。つるぎのえだ。太平記「八大地獄の罪人の刀山・劍樹につらぬかん」■けんじゆちごく(劍樹地獄)の略。「同じ。

けんじゆ 兼壽【名】〔人〕れんによ(蓮如)に同じ。

げん-しゆ 元首【名】■『書經の益稷篇に「元首明哉、股肱良哉、庶事康哉」とあり。君主は一國にとりて、身體の頭首のごとくなるよりいふ。元も首の義』國民の首長、即ち君主。太平記「以我元首の將とし、以汝令レ爲二股肱臣一」■『佛 Chef d'état 獨 Staatsoberhaupt』國家統治の最高機關。國家の首長、即ち君主又は大統領。

げん-しゆ 嚴守【名】嚴重に守ること。きびしき守備。

げん-しゆ 原種【名】もとのたね。

げん-しゆ 玄趣【名】幽玄なる旨趣。

げん-しゆ 玄珠【名】『莊子の天地篇に「黃帝遊二赤水北一、登二崑崙之丘一而南望、還歸、

遺二真玄珠一」とあるに本づく』幽玄なる眞の道理。道の本體。〔道家の語〕

げん-じゅ 現壽 【名】〔佛〕現世の壽命。謡曲「江の島」「現壽無比樂、後生清淨と、曇らぬ寶珠を君に捧げんと」

げん-じゅ 賢首 【名】■〔佛〕ひく(比丘)の尊稱。■〔人〕ほふさう(法藏)■に同じ。

げん-じゅう 拳銃 【名】ぴすとるに同じ。

げん-じゅう 顯宗 【名】〔佛〕顯教の宗旨。(密宗に對して) 本來此顯宗の頑德なりしかば、調伏の法行ひたりといふ』

げん-しゅう 玄宗 【名】〔佛〕『玄妙なる宗旨の義』ぶっけう(佛敎)に同じ。

げん-じゅう 元戎 【名】■國内の軍隊を統率する者。元帥。■大なる兵車。「元戎十乘」

げんしゅう-ひさく 玄宗祕蹟 【名】〔佛〕玄妙なる宗旨と、祕密なる奥義と。佛教諸宗の祕奥。げんしゅう(玄宗)參照。盛衰記 法性淵底悉顯、玄宗祕蹟無殘」

げんしゅ-かせったん 玄珠絳雪丹 【名】古の丹藥の名。和名抄「凝階積雪丹、一名流珠白雪丹、一名玄珠絳雪丹」

けんじゅ-がくは 犬儒學派 【名】〔哲〕『英 Cynics もと希臘語 Kynikos(犬の如くなる義)より出でたりとの說により、犬の如き生活、即ち乞食生活をなす學徒の義』小ソクラテス學派の一。正當なる行爲より得たる滿足、是れ即ち眞の幸福なりと唱道し、肉體上の一切の快樂を排斥せる學派、即ち一種極端なる禁慾主義を奉ずるもの。希臘のアンチステネス(Antisthenes)の創立せしものにて、ストア學派の前驅をなせり。しにっく學派。きにっく學派。

げん-しゅく 減縮 【名】へらしちぢむること。へりちぢまること。減少。縮少。

げん-しゅく 嚴肅 【名】おごそかに、つつしむこと。嚴格にして、靜肅なること。

げんしゅく-しゅぎ 嚴肅主義 【名】〔哲〕『英 Rigorism』理性を尊重し、感情を排斥し、人類は他の動物と異なるが故に、前者を以て、後者を抑壓し、もしくは斷滅するところに、吾人の道德は成立すといふ見解。獨逸のカント(Kant)が特殊なる意義にて用ひ、また廣義にては、禁欲主義とも解せらる。

げんじゅ-しゅう 賢首宗 【名】〔佛〕『堅首に至りて大成せし宗旨なるよりいふ』けごんしゅう(華嚴宗)に同じ。

けんじゅ-じごく 劍樹地獄 【名】〔佛〕けんりんじごく(劍林地獄)に同じ。謡曲「歌占」「劍樹地獄の苦みは、手に劍の樹をよぢれば、百節零落す。足に刀山踏む時は、劍樹、共に解(ゲ)すとかや」

けん-しゅつ 檢出 【名】しらべ出すこと。

けん-じゅつ 劍術 【名】木劍・竹刀などにて、相闘ふ術。しあひ。たちかき。たちうち。劍道。擊劍。

げん-しゅつ 幻出 【名】まぼろしの如く出づること。

げん-じゅつ 驗術 【名】奇しき靈驗ある術。

げん-じゅつ 幻術 【名】不思議なる術。魔術。魔法。妖術。恒城島原蛙合戰「幻術自在の四郎、雲霧にまぎれて失せにけり」

げんじゅつ-しゃ 幻術者 【名】幻術を用ふる人。魔法つかひ。げぼふつかひ。

けんじゅつ-つかひ 劍術遣 【名】劍術に巧みなる人。劍客。

げんじゅ-むひらく 現受無比樂 【名】〔佛〕阿彌陀佛を信ずる者が、現世にて、無比の樂みを受くること。謡曲「江の島」「現受無比樂後生清淨」

けん-しゅん 賢俊 【名】賢く人にすぐれたること、又その人。

けん-しゅん 險峻 【名】けはしきこと。

げん-しゅん 嚴峻 【名】おごそかに、きびしきこと。峻嚴。

けんしゅん-もん 建春門 【名】平安城の内裏の外郭十二門の一。內裏の東、宜秋門の前方にあり。左衛門の陣。外記(ゲ)門。

けんしゅん-もんゐん 建春門院 【名】〔人〕後白河天皇の后。兵部少輔平時信の女。名は滋子(ジガ)。高倉天皇を生む。篤く佛を信じ、安元二年薨ず。年三十五。

けんじゅ-もん 驗主問 【名】〔佛〕弟子より問を設けて、師宗の見地を試驗すること。探拔問(禪宗の語)

けん-しょ 見處 【名】〔佛〕『有漏の諸法は、身見・邊見・邪見・見取見・戒禁取見の五見を生起する住處なるよりいふ』うろほふ(有漏法)に同じ。

けん-しょ 券書 【名】けんじゃう(券狀)に同じ。

けん-しょ 賢所 【名】かしこどころ(賢所)に同じ。

けん-しょ 險所 【名】けはしき場所。

けん-じょ 見證・見所 【名】けんぞ(見證)に同じ。〔古語〕著聞「ある人と雙六を打ちけるを、隣にある越前坊といふ僧來りて、見所すとて、様々のさかしらをしけるを」

けん-じょ 卷舒 【名】■まくと、のぶると。巻きつ舒(ノ)びつすること。屈伸。■おのが才能を、世にあらはすと、あらはさぬと。「焉。

けん-じょ 慊如 【貌】あきたらぬさま。慊。

げん-じょ 原書 【名】■げんぼん(原本)■に同じ。■飜譯せられず、歐文のままなる書籍、洋書。

げん-じょ 嚴暑 【名】きびしきあつさ。酷暑。

げん-じょ 還昇 【名】げんじょう(還昇)の略。「へ。〔古語〕

けん-しょう 謙稱 【名】謙遜して言ふとなること。

けん-しょう 顯證 【名】けせう(顯證)に同じ。蜻蛉「山科にて明けはなるにぞいとけんしょうなる心地すれば」

けん-しょう 見證 【名】けんぞ(見證)に同じ。著聞「民部卿見證せられて」

けん-しょう 檢證 【名】■物事をとりしらべて、正確にすること。檢査して證明すること。■〔法〕判事が證明を援くるために、當事者の申出、或は職權に因り、實地に臨みて、物件を實見すること。受訴裁判所に行ふを常とすれども、檢證物の所在地にて行ふことあり、これを臨檢といふ。

けん-しょう 健訟 【名】勝氣(カチギ)にて、少しの物事にも、好んで訴へ爭ふこと。くじすき。

けん-しょう 健勝・堅勝 【名】すこやかなること。たっしゃ。健康。

けん-しょう 兼勝 【名】かれとこれとに、あはせて勝つこと。

けん-しょう 賢勝 【名】かしこくして、すぐれたること、又その人。

げん-しょう 絃誦 【名】琴などを彈き、書を誦(ショ)むこと。(支那にて、古、禮樂詩書の講習を重ぜしより、學問の義となれり)

げん-しょう 現證 【名】現にあらはれたる證據。國姓爺後日合戰「これ大明破滅の現證なり」

げん-しょう 勸蒸 【名】ねのこもち(亥子餅)

げん-しょう 原子容 【名】〔化〕『英 Atomic volume』固狀又は液體の元素の比容を、その原子量にて倍せるもの。即ち諸元素の原子量の比例する量づつの占むる體積。比容は、通常物體の一グラム量の占むる容積を以てあらはすが故に、密度を以て一を除する時は、原子容を算出するを得。例へば金は比重一九・三、原子量一九七・二なるが故に、その原子容は 197.2÷19.3=10.1 即ち一〇・一なる類。

げん-じょう 還昇 【名】『名目抄には「還昇、本音ショウなり。而して、名目ジョ又濁なりとあり、ゲンジョと言ひならはしたりとも見ゆ』殿上人の、昇殿を停められし後、再びこれを聽(ユ)さるること。げんじょ。還殿上(カンヘリデウ)。

けんしょう-じょぶん 檢證處分 【名】〔法〕行政處分の一。檢證物に對して檢證をなす手續。

けんしょう-てうしょ 檢證調書 【名】〔法〕裁判手續にて、檢證を行ひたる時、これを行ひたる裁判官が、その顚末を記載して作成する文書。

けんしょう-ぶつ 檢證物 【名】〔法〕檢證に供せらるる物件。

けん-しょく 顯職 【名】顯要なる職。貴き官職。高官。要職。

けん-しょく 兼職 【名】本職の外に、他の職を兼ぬること、又その職。「同じ。

けん-しょく 儉嗇 【名】りんしょく(吝嗇)に同じ。

げん-しょく 現職 【名】現任の官職。

げん-しょく 言職 【名】言論を以て仕ふる職。意見番、諫議大夫などの稱。

げん-しょく 言色【名】ことばと顔色と。

げん-しょく 減食【名】■食量をへらすこと。■【法】在監者に對する懲罰の一。紀律に違ひたるとき、食糧を七日以内減ずること。刑事被告人及び十八歳未滿の在監者には科せず。

げん-しょく 原色【名】『英Primary colour又Primitive colour』種種の色の基(モ)となる色。適宜に混合すれば、白色、又は任意の色を得べき或數色。卽ち古くは、赤黃青の三色をいひ、これに綠を加へて、四色とする說もあり。又、赤綠菫の三色ともいふ。基色。

げん-しょく 幻觸【名】【哲】『英Tactile hallucination』幻覺の一。外來の刺戟なくして起る觸覺。

げんしょく-ざい 顯色劑【名】直接染料のダイアゾ(Diazo)化合物と化合して、新に一種の色素を生成すべき性質を有する藥劑。

げんしょく-しゅぎ 減食主義【名】『英Fletchrism』己の欲する食物を、十分に咀嚼して攝(ト)れば、現在の食量の三分の一にて足り、健康を增進し、頭腦を明晰にするの効ありといふ說。米國の人フレッチャアの創唱にかかる。

げんしょく-はふ 顯色法【名】染色の一法。或染料を以て染色したる物を、亞硝酸曹達と酸との混和液中に浸し、次ぎにこれを顯色劑の溶液に浸し、相化合せしめて、新に一種の色素を生成せしむること。

げんしょく-ばん 原色版【名】さんしょくしゃしんばん(三色寫眞版)を見よ。

げん-しょらう 現所勞【名】現在病氣にてあること。平家「召されけれども、現所勞とて參らず」

げんしらう 源四郎【名】ごまかすこと。〔大阪の語〕 藤棄毛「お前さんがたの源四郎してぢや、菓子んぢやてて」

けん-じり 劍尻【名】鍼(ハリ)の一種。刃先を劍の如く三角にしたるもの。けんさき。

げんし-りん 原始林【名】げんせいりん(原生林)に同じ。

げんしりやう 原子量【名】【化】『英Atomic weight』くわがふちゆう(化合量)を見よ。

げん-しりよう 嚴子陵【名】【人】げんくわう(嚴光)に同じ。

げんしろん 原子論・元子論【名】【哲】『英Atomism』宇宙一般の根本原理を、原子と稱する單純・不可分なる無數の微物により て說明せんとする說。萬物その性質を異にするは、原子に大小・精粗の別あるに因るとなす。これに原子を物質的なりとする物質的原子論と、精神的なりとする精神的原子論との二派に分る。原子說。

げんじ-わ 源氏輪【名】紋所の一。源氏車の輻(ヤ)と轂(キシ)とを除きたるもの。

げんしわ 原子位【名】【化】くわがふか(化合價)に同じ。

げんじゑ 源氏繪【名】■源氏物語の中にある事がらをゑがきたる繪。千葉萬紅「源氏繪に、北やまのいぬきが放す鳥なれやはるの霞の紫の上」■屋根を葺かず、室内の見ゆるやうに書きたる大和繪。俳諧新選(必化)「源氏繪は屋根なき家の月見かな」

げんじゑ-あはせ 源氏繪合【名】源氏繪にて行ふ繪合。

けん-す 鉗子【動佐變他】■鋏をおろす。

けん-す 檢子【名】〔佛〕寺院の文書の稿本。

けん-す 御璽を捺(ス)す。

けん-す 檢す・撿す【動佐變他】■とりしらぶ。あらたむ。■とりしまる。しめくくる。

けん-す 驗す【動變他】ためす。試驗す。

けん-す 兼す【動變他】かぬ。兼帶す。

けん-す 見す【動佐變他】見る。見物す。素人狂言鼓切形「こうこう、あすこの曲角で、今のを見じたか」

けん-ず 獻ず【動佐變他】■まゐらす。たてまつる。

げん-ず 眩ず【動佐變自】目くらむ。

げん-ず 眩す【動佐變他】目をくらます。

げん-ず 現ず【動佐變自】あらはる。出現す。平家「八幡大菩薩の現じたまへるにこそと」國姓爺合戰「卑しき釣翁と現じ」

げん-ず 現す【動佐變他】あらはるるやうにす。出現せしむ。日本武尊吾妻鑑「身の色、あけの朱をそそぎ、面に忿怒の形を現じ」

げん-ず 減ず【動佐變自】へる。少なくなる。

げん-ず 減ず【動佐變他】■へらす。少なくす。はぶく。■減算を行ふ。ひく。

けん-すう 間數【名】間(マ)のかず。長さ。

けん-すう 件數【名】事件のかず。

けん-すう 軒數【名】家のかず。やかず。戶數。

けん-すう 權數【名】權謀と術數と。

けん-すう 現數【名】現在の數量。

けん-すう 減數【名】〔數〕減算にて減ずる數。(被減數に對して減數を「じ」。

けん-すう 元數【名】(數)そすう(素數)に同じ。

けん-すう 玄樞【名】玄妙なる要機。

けん-すくひ 現掬【名】〔商〕取引市場にて、未入勘定の內、現張(ハリ)によりて利益すること。

げん-すけ 源助【名】心得がほに事をなして、ただちに失敗する愚人。(大阪の俚語)

けん-ずまふ 拳相撲【名】多人數東西の二組に分れ、拳(ケン)を、相撲の如くにして行ふ遊戲。席上に、小さき四本柱を立て、土俵やうの物を造り、これに相對して爭ふ。呼出(ヨビ)・大關(オホセキ)・關脇(セキワキ)・前頭(マヘガシラ)など、すべて相撲に擬し、五番勝負を一拳とし、十拳を一回とし、雙方共に五拳の勝なるを、五五といひ、一方にて十拳悉く勝ちたるを丸といふ。

げん-すん 原寸【名】原物のままの寸法。

げんすん-だい 原寸大【名】原物の寸法通りの大さ。

けん-すゐ 建水【名】『建は傾けて、水をこぼす義』みづこぼし(水翻)に同じ。

けん-すゐ 硯水【名】硯の水。「ること。

けん-すゐ 檢水【名】水質の良否を檢査すること。つりかくること。■機械體操にて、手を或物に懸けて、身體を垂下すること。

けん-すゐ 懸垂【名】■垂直にたれさがること。

けん-すゐ 硯水・間水・間炊【名】■三食以外に、飲食する酒・餅の類。おやつ。間食。運步色葉集「硯水、ケンズキ、咸陽宮作時、依レ高硯水凍、入レ酒硯水不レ凍、餘酒大士飲レ之、今世傳來曰二硯水一也」■ひるめし(晝飯)を云ふ。〔大和國奈良の方言〕「晝食を硯水といふ」■さけ(酒)を云ふ。〔畿內の番匠の語〕古寫本節用集「食物、硯水、ケンズキ、番匠酒名、又作レ間」■灸治の後にて、熱さをこらへたる褒美として與ふる飲食物。〔西國の方言〕

げん-すゐ 元帥【名】■多くの將帥の上に立ちて、これを統率する者。總大將。げんずゐ。■『英Field-marshal又Marshal』歐洲諸國における陸軍軍人の最高官。■我が國にて、元帥府に列せられたる陸・海軍の大將に特に賜ふ稱號。副官として、佐官・尉官各一人を附屬せしめられ、勅を奉じて、陸・海軍の檢閱を行ふことあり。■〔佛〕だいげんすゐ(大元帥)■に同じ。

げん-すゐ 減水【名】水量の減ること。(增水に對して)

げん-すゐ 源水【名】『創業者松井源水の名によりていふ』大道にて、居合拔(ヌキアヒ)・曲獨樂(コマ)などの技を演じて人を集め、齒の療治をなすもの。〔倡の隱語〕

げん-ずゐ 玄水【名】さけ(酒)の異稱。〔僧〕

げん-ずゐ 元帥【名】げんすゐ(元帥)■の轉。

けん-すゐがい-ていし 檢水害提使【名】王朝時代の職制の一。水害にて堤防などの崩壞せし時に、任命せられし臨時の官。文德天皇の時創めて置かる。

けんすゐ-き 驗水器【名】『英Water-gauge』汽罐內の水量を表示するために裝置せる玻璃管。

げんすゐ-きしやう 元帥徽章【名】元帥■の表章として、制服衣の右胸・乳下に裝著すべき金屬製の徽章。縱に長き楕圓形にすべて、聯隊旗と軍艦旗とを打違へたる間に、上部に十六菊、中部に桐の紋章をあらはしたるもの。明治三十一年五月の制定。元帥章。

けんすゐ-くうちゆうせん 懸垂空中線【名】垂線電信にて、送信・受信のために空中に高く懸垂せる導線。

けんすゐ-こっく 驗水コック【名】『英Test

○○○』汽罐中の水量が相當量なりや否やを檢するために、汽罐に取附けたる喞子。驗水嘴子。

げんすゐ-ごま 源水獨樂【名】『松井源水が曲獨樂(キヨクゴマ)に用ふるよりいふ』博多獨樂(ハカタゴマ)の、心棒の甚だ長きもの。

けんずゐ-し 遣隋使【名】古、我が國より隋へ遣されし使者。推古天皇の十五年と二十二年との二回遣され、その後、隋亡びて唐となりしより、遣唐使と稱す。遣高麗使・遣新羅使の類。

けんすゐ-し 驗水嘴子【名】けんすゐこっく(驗水コック)に同じ。

げんすゐ-しやう 元帥章【名】げんすゐきしやう(元帥徽章)に同じ。

げんすゐ-せき 玄水石【名】じしやく(磁石)㊀に同じ。(古語) 和名抄、玄石、本草云、玄石一名玄水石、今案慈石、又有二玄石之名一」

げんすゐ-たう 元帥刀【名】天皇の元帥㊂に親授せらるる刀。黃金作にて、櫛の長さ五寸五分、鞘の長さ二尺六寸、櫛と鞘とに、數箇の金銀線入の劍帶を取附け、紫革の丸紐にて吊る。古の直刀に似たり。大正七年八月公布の勅令によりて制定せらる。

けん-すゐたふり 縣出納吏【名】地方自治團體たる縣の吏員の一。縣知事が縣の官吏吏員の中より命じて、縣の出納事務を掌らしむるもの。

げんすゐ-ぢやう 元帥杖【名】英國にて、元帥に賜ふ黃金作の指揮杖。

けんすゐ-てつだう 懸垂鐵道【名】支柱に軌道をかけわたし、車輛をこれに懸垂せしめて運轉する鐵道。

げんすゐ-ふ 元帥府【名】天皇の軍事上に於ける最高の顧問府。明治三十一年一月設置、元帥㊂により組織せられ、軍事參議會と共に、大元帥陛下に直屬して、その帷幄を組成す。げんすゐ(元帥)㊂參照。

げん-ぜ 現世【名】(佛)人の生命ある間。現在の世。このよ。しやば。うつしよ。現生(ゲンシヤウ)・今生(コンジヤウ)・(過去世・來世に對して)落墓かく、現世・後生、うれしきめ見せつるやありつる」金平法問淨「それ佛法を信ずれば、現世にては、橫難の災をのがれ、未來は、九品の臺に生ず」

げんぜ-あんらく 現世安穩、後生(ゴシヤウ)善處【句】(佛)『法華經の藥草喩品に出づる語』妙法を信ずる人は、現世にては安穩なる生活をなし、後世にては、善處に生るる功德あり。現當二世安樂。(諺語)

げんぜ-ごせ 現世後世(ゴセ)を取外(トリハヅ)す【句】情慾の爲に、現世も未來も佛に救はるる見込なし。(諺語)

げんぜ-を-いのる 現世を祈る【句】(佛)現世の災難を除き、幸福を得んがために、神佛に祈禱す。佛の大悲方便門より、引攝(インジヤウ)・結緣のために、一應はこれをゆるせども、佛道の本意にはあらず。高僧和讃「佛號むねと修すれども、現世を祈る行者をば、これも雜修と名づけて」

けん-せい 權勢【名】權柄を握りて、勢威の高きこと。權力と威勢と。ゐせい。いきほひ。權威。勢力。

けん-せい 牽制・牽掣【名】㊀ひきつけて、自由ならしめぬこと。㊁(兵)敵を我が欲する方向に誘致し、又は抑留して、他方面の我が動作を容易ならしめ、又は敵の行動を妨害すること。

けん-せい 憲政【名】りっけんせいち(立憲政治)の略。

けん-せい 憲政擁護【句】憲法政治の發達を害する藩閥・官僚の政治を排撃する運動。

けん-せい 賢聖【名】せいけん(聖賢)に同じ。

けん-せい 賢棲【名】私年號の一。敏達天皇の五年に相當す。

けん-せい 研精【名】くはしく研究すること。

けん-せい 絣制【名】おさへて自由にせしめざること。抑制。

けん-せい 檢稅【名】租稅を檢査すること。

けん-せい 堅脆【名】堅きことと、もろきこと。

けん-せい 縣稅【名】地方稅の一。地方公共團體の一たる縣の賦課する租稅。縣費の支辨に使用す。

げん-せい 現制【名】現在の制度。

げん-せい 嚴制【名】きびしき法度。きびしきおきて。

げん-せい 嚴整・儼整【名】きびしく整頓すること。「と。

げん-せい 嚴正【名】嚴重にして正しきこ

げん-せい 芫菁【名】㊀(動)はんめう(斑猫)に同じ。㊁かんたりす(羯答利斯)に同じ。

げんせい 元政【名】(人)高僧。山城國深草瑞光寺の初祖。俗姓は石井、名は日政、鷲峰(ジユ)院と號す。京都一條戻橋(モドリ)に生る。姉は井伊直孝に配す。初め宜孝に仕へて、吉兵衞元政と稱す。博覽・強記、和歌・漢詩に長ず。扶桑隱逸傳等の著あり。家集を草山集、谷口山詩集といふ。寛文八年寂す。年四十六。

げんせい 現成【名】(人)奇僧。俗名は龜次郎。もと江戸淺草の船頭なり。水死人を見る毎に、厚く葬りて供養し、又、貧民を救養す。弘化四年寂す。

げん-せい 現世【名】現在の世界。げんぜ。

げん-せい まぼろしの如き世。

げん-せい 絃聲【名】絃歌のこゑ。

げん-せい 減省【名】減じ省(ハブ)くこと。

げん-ぜい 減稅【名】租稅を輕減すること。(增稅に對して)

けんせい-うんどう 牽制運動【名】㊀(兵)牽制㊁を行ふこと。㊁相手を引きつけ、他に向はしめぬやうに仕向くる行動。

けんせい-くわい 憲政會【名】大正五年十一月、舊政黨たりし立憲同志會の大部分と中正會その他の一部とが合同して組織せる政黨。子爵加藤高明を總理とす。

けんせい-くわん 乾政官【名】だいじやうくわん(太政官)の別稱。(淳仁天皇の時、一時改められし稱)

けんせい-し 檢稅使【名】中古、臨時に諸國に派遣して、國司等の財政を檢察せしめし使者。判官・主典等、その下に附屬したり。寶龜七年始めて置かる。萬葉「檢稅使大伴卿」

けんせい-しゆぎ 現世主義【名】現世のみを重んじて、前世と未來とを問はざる主義。

けんせい-せつ 原生說【名】(生)地球上のあらゆる生物は、すべて一の本源より出で、進化發達の相違により、長年月の間に、今日のごとき千態萬狀を呈するに至れりといふ說。

けんせい-たう 憲政黨【名】明治三十一年六月、第十二議會において、伊藤內閣の地租增徵案に反對したる自由黨と進步黨とが合同して、政黨內閣の樹立を目的として組織せし政黨。結黨後、伊藤內閣の後を承けて、內閣を組織したれど、同年九月再び分裂し、舊自由黨は、直ちにその名を襲用し、舊進步黨は、憲政本黨の名を用ひたり。

げんせい-ちゆうりつ 嚴正中立【名】嚴格に中立を守りて、交戰國のいづれに對しても、援助もしくは妨害の行動を取らぬこと。

げんせい-どうぶつ 原生動物【名】(動)『羅 Protozoa』單に原形質の一小塊のみより成り、形微細にして、一滴の水中にも無數に棲息し、顯微鏡にて、纔に認め得る最下等の動物。他動物の體內に寄生・分裂・接合・胞子形成等種種の方法によりて生殖し、その原形質は、內外の二層に別ち得べく、外部に石灰質・キチン質等の殼を有するもの、膠質の厚き皮を有するもの、體の內外に石英針のごとき骨格あるもの等あり。一箇もしくは數箇の核・伸縮胞等の外、別に器官と稱すべきものなし。アミイバ・草履蟲・夜光蟲・ラッパ蟲・鈎鐘蟲等、これに屬す。原蟲。原始動物。單細胞動物。

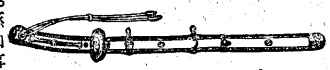
げんぜ-いのり 現世祈【名】(佛)現世の災難を除き、幸福を得んがため神佛に祈ること。「現世を祈る」參照。

けんせい-ぶたい 建制部隊【名】(兵)戰術上の目的によりて、平時より隊伍の編成法を制定して建設する部隊。即ち師團・旅團・聯隊・大隊・中隊等これなり。

げんせい-ぶつ 原生物【名】(生)動植物の原となるべき生活物。

けんせい-ほんたう 憲政本黨【名】けんせいたう(憲政黨)を見よ。

げんせい-りん 原生林【名】『英 Virgin fo-


（うたゐすんげ）

1888』かつて人類の保護又は損害を受けずして繁茂せる、太古よりの森林。處女林。原始林。原林。(施業林に對して)

けんせう 顯昭【名】〔人〕歌僧。藤原清輔の子。太秦寺(ウヅマデラ)に住持す。法橋に敍せらる。寂蓮(レンジャク)法師と深く交はり、會する毎に、顯昭、獨鈷を持ちながら論爭す。世に、顯昭獨鈷、嬉頸(クビ)寂蓮の稱あり。生歿年月詳かならず。神中抄等の著あり。

けんせう 顯證【名】**けせう**(顯證)に同じ。

けんせう 喧笑・諠笑【名】さわがしく笑ふこと。譏笑。

けんぜう 喧擾・諠擾【名】さわがしきこと。「と。

けんせう 減少【名】へりて少なくなること。めること。へり。

げんせう 言笑【名】一物いふことと、笑ふこととと。二打ちとけて笑ひながらものいふこと。「言笑の間に、約を結ぶ」

げんせう 元宵【名】上元の夜。支那の俗、元宵の前後、十三日(上燈といふ)より十八日(落燈といふ)までの六日間を燈夜と稱し、毎夕門前に綵燈を飾る。元夕。元夜。

げんせう-は 源照派【名】琵琶法師の一派。竹永撿挍總一(後花園天皇の頃の人)を祖とす。

げんせ-かい 現世界【名】現在の世界。

けんせ-き 權威【名】權威のある親戚。

けんせ-き 檢責【名】しらべ正して責むること。

けんせき 拳石【名】こぶし程の大さの石。

けんせき 堅石【名】質の堅き石。

けんせき-はくば 堅石白馬【句】「堅白同異」に同じ。平凡如來の權實、徒に堅石・白馬の論となり、祖師の心印、空しく叫喊、怒張の中に墮つべし」

けん-せき 譴責【名】一しかり責むること。督促。太平記「六萬貫を五日が内に沙汰すべしと堅く下知せられければ、使先づ彼所にのぞみて、大勢を庄屋に放し入れて、譴責する事、法に過ぎたり」二(法)公務員に科する矯正懲戒の一。既往の非行を責めて、將來を戒むること。四華族戒飾の一。辭令書を以て失行を糺(タヾ)し、且つ將來を戒飾すること。宗秩寮審議會の審議を經て、宮内大臣これを行ふ。

げん-せき 言責【名】一嘗て述べたる言葉につきての責任。二物事に就きて、是と非とを別ち言ふべき責任。

げん-せき 嚴責【名】きびしく責むること。嚴譴。

げん-せき 元夕【名】**げんせう**(元宵)に同じ。

げん-せき 原籍【名】轉籍前の本籍。

げん-せき 阮籍【名】〔人〕支那晉の隱士。竹林七賢の一人。字は嗣宗。陳留の人。老莊の學を好み、詩酒して意を得るに至ては形骸を忘る。世人多く癡といふ。仕へて散騎常侍となる。志もと濟世にありしかど、世態を慨してここに至るといふ。景元四年歿す。年五十四。

げん-せき 玄石【名】(鑛)**げんすいせき**(玄水石)の略。

げんせきうん 卷積雲【名】〔地〕卷積して、恰も背魚(セイ)の紋に似たる雲。うろこぐも。(卷雲・卷層雲・積卷雲・層卷雲・層積雲・亂雲・積亂雲・層雲に對して)「る土地。

げんせきち 原籍地【名】その人の原籍あ

げんせき-はくば 堅石白馬【句】**けんせき**堅石)の條下を見よ。

けん-せつ 險折【名】路のけはしくして、折れまがること。羊腸。

けん-せつ 權攝【名】『攝は兼ぬる義』かりに兼ね行ふこと。

けん-せつ 兼攝【名】『攝は兼ぬる義』かぬること。兼ね行ふこと。

けん-せつ 建設【名】新におこし造ること。つくり設くること。建造。

けん-ぜつ 懸絕【名】かけはなること。

げん-ぜつ 原說【名】もとの說。

げん-ぜつ 言說【名】言葉にて說くこと。言葉にて示す說。「きこと。

げん-せつ 嚴切【名】きびしきこと。はげしく折檻すること。羊腸。

けんせつ-りそく 建設利息【名】〔商〕『獨 Bauzinsen』株式會社の事業を建設するまで、即ち營業により、利益を得るに先んじて、法定の條件の下に、特に株主に配當する利息。

げんぜ-てき 現世的【貌】思想・言說などの範圍が、現世以外の境に及ばざるさま。

げんせふ-によこわう-さう 眼睫如牛王相【名】(佛)三十二相の一。眼毛の殊勝なること牛王の如きもの。「蜂。

けん-せん 劍尖【名】刀劍のきっさき。劍

けん-せん 健羨【名】甚しくうらやましきこと。「健美に堪へず」

けん-せん 捲線【名】〔理〕**こいる**に同じ。

けん-せん 渲染【名】繪畫の、ぼかし又はにじませたるところ。暈取。

けん-ぜん 健全【名】一すこやかなること。たっしや。二意志の確固として、中庸を失はざる狀態。

健全なる精神は健全なる身體に宿る【句】身體虛弱なるものは、意志薄弱又は偏屈なるものなれば、壯健なる人にして、初めて確固たる精神を抱くことを得。〔諺語〕

けん-ぜん 顯然【貌】あきらかにいちじるしきさま。「さま。

けん-ぜん 喧然・諠然【貌】かまびすしきさま。

けん-ぜん 歡然【貌】不滿足なるさま。あきたらぬさま。「ぬさま。

けん-ぜん 嘵然【貌】口をつぐみて物いはざるさま。

けん-ぜん 元選【名】〔人〕高僧。字は無文。後醍醐天皇の皇子。入元して福州の高伊山梅友の法を嗣ぐ。元中七年寂す。年六十八。

げん-せん 言筌【名】『せんてい(筌蹄)を見よ』筌(セン)は魚を得る手段の具なるが如く、言語は意義を傳ふるための具なるに、言語にのみ拘泥して、魚即ち裏面の眞意を味ひ得ぬこと。

げん-せん 言泉【名】言葉が泉の滾滾とわき出づるがごとく、出でくること。

げん-せん 原泉・源泉【名】水の湧出づるみなもと。

げん-せん 現錢【名】**げんきん**(現金)に同じ。運歩色葉集「現錢、ゲンセン」「に同じ。

げん-せん 元錢【名】**げんのじせん**(元字錢)に同じ。

げん-せん 紘線【名】羊などの腸にて製したる線。テニスのラケットの網に用ふ。

げん-ぜん 現前【名】目前に現はれ出づること。現在目の前に在ること。目のまへ。まのあたり。

げん-ぜん 皎然【貌】目のくらむさま。

げん-ぜん 嚴然・儼然【貌】いかめしきさま。おごそか。嚴。儼。「ほろ。

げん-ぜん 泫然【貌】涙の落つるさま。ほろほろ。

げん-ぜん 現然【貌】まのあたりにかくれなきさま。はっきり。あらはれ。聖德太子繪傳記「當に無量阿僧祇劫に於て、自在の王と成り、現前に讃歎せんこと、今の如くにして異なることなかるべけん」

けんぜん-がく 健全學【名】**ゑいせいがく**(衞生學)に同じ。

げんぜん-くやう 現前供養【名】〔佛〕佛と塔婆とに對して供養すること。

けん-せんじ 兼宣旨【名】大臣に任ずべき人に、豫め何の日大臣に任ずべき由の宣旨を賜ふこと。盛衰記「攝政殿は、十二月九日兼宣旨を蒙らせ給ひて、十四日に太政大臣にならせ給ふ」

けんぜん-しょうしょ 健全證書【名】『英 Bill of health』外國交通の船舶が、發航するに際し、その地の地方長官が、船長の申請によりて、その乘組員及び旅客の健全なりしことを證明する證書。船長は、これを到著港の港長に提出す。健康證明書。

げんぜん-お 現前地【名】〔佛〕**ごじふぢ**(十地)を見よ。

けんせん-はう 捲線砲【名】砲身の抵抗力を增加するため、弱肉の鋼管を內筒とし、これに鋼線を捲纏して强壓し、更にその外部に鋼の被套を施したる火砲。

げんぜ-りやく 現世利益【名】〔佛〕現世に息災延命等の利益を得ること。眞宗の敎義にては、ことさらに現世の利益を祈ることは許さざれども、專修念佛の行者には、念佛の德として、自らこれを得べしと說く。「現世を祈る」參照。

けん-そ 繰素【名】染めぬかとりぎぬ。

けん-そ 儉素【名】儉約にして、質素なること。儉薄。

けん-そ 嶮岨・險阻【名】一けはしきこと。

けはしきところ。嶮峻。用明天皇職人鑑「そもそもこの山、うしろに嶮岨を負うて」㊁人の心のけはしきこと。

けんそ 獻膓【名】釋典の翌日、膓(ロギ)を獻ずること。

けんそ【硯】すこやか。たっしゃ。

けんぞ 見證・見所【名】碁・雙六(スゴロク)等の競技の勝負を見とどくること。けんしょう。けんじょ。けんぞう。(古語) 源氏「侍從の君、けんぞしたまふとて、近うさぶらひたまふに」

げんそ 元素【名】〔化〕『英 Elements』萬物の元質。現今知らるる方法にては、再び分析し得ざる物體。その數八十種を算する中に、約半數は稀有に屬す。或は單體として、又は數種相化合して存在す。便宜上、金屬・非金屬の二類に大別す。酸素・水素・窒素・鹽素・弗素・炭素・珪素・硼素・硫黄などは非金屬元素、金・銀・銅・鐵・鉛・水銀・マグネシウム・アルミニウム等は金屬元素なり。たんたい(單體)參照。

元素の保存【句】〔化〕『英 Conservation of the elements』物質は滅すとも、元素は滅せざるべしと見做さるること。

げんそ 減租【名】租稅の額をへらすこと。

けんそう 檢僧【名】江戸時代に、葬式の際、死人の髮剃(カミソリ)をなす僧。萬一、死人に異狀ある時は、その葬式を差止むることを得。

けんそう 顯僧【名】顯法を行ふ僧。

けんそう 顯證【名】けせう(顯證)に同じ。〔古語〕源氏「われは心に身をもまかせず、けんそうなるさまにもてなされたるありさまなれば」

けんそう 見證【名】けんぞ(見證)に同じ。〔古語〕源氏「げに彼の夕ぐれのけんぞうなりけんに」

見證の公卿(クギ)【句】晴の蹴鞠の時、鞠の巧劣を見分くる證據人。

げんそう 玄宗【名】㊀(人)支那唐朝六代の天子。睿宗の第三子。諱は隆基。在位四十五年。初は天下よく治まりて、所謂開元の治をなし、晩年奸相李林甫を用ひ、楊貴妃を寵するに及びて、天下亂る。明皇。㊁くわうてい(皇帝)㊂の古稱。㊂香(カウ)の一種。木質は伽羅(キャラ)、香(カウ)は楊貴妃よりも濃くして新し。

げんそう 驗僧【名】行法の効驗ある僧。謡曲「龍田」「劍の驗僧の法味に引かれて」

げんそう 舷窓・舷窗【名】『英 Side light』船内に光線及び空氣を取入るるために、舷側に設けたる窓。

けんそう-うん 卷層雲【名】〔地〕高層にある淡き白色の雲。微細なる氷片より成りて、往往日月の暈を生ず。(卷雲・卷積雲・積卷雲・層卷雲・層積雲・亂雲・積亂雲・層雲に對して)

けんそう-し 監送使【名】齋宮の伊勢下向の時、御送りに奉仕する者。納言・參議の中より任ぜらる。

けんそう-てんわう 顯宗天皇【名】〔人〕第二十三代の天皇。御名は弘計(ヲケ)。市邊押磐(イチノヘノオシハ)皇子の御子。御母は荑姫(ハエヒメ)。在位三年(紀元一一四五年—一一四七年)。即位の三年崩ず。壽三十八。

けんそく 健足【名】けんきやく(健脚)に同じ。

けんそく 賢息【名】他人の子息の敬稱。

けんそく 檢束【名】㊀放縱ならぬやうに、慎ましむること。自由なる行動をなさしめぬやうに取締ること。㊁(法)公安を害する虞あるもの、又は泥醉者・自殺を企つる者など、救護上必要と認むる時、その人を二十四時間以內警察に留めおくこと。

けんそく 牽束【名】㊀ひきつけしばること。束縛。㊁かかはりなづむこと。拘泥。

けんぞく 縣屬【名】縣の屬官。

けんぞく 眷屬【名】㊀うからやから。親族。くるんぞく。㊁「けんぞくのこころも心うく見ゆべけれど」㊂(佛)『梵 Parivāra 波儞曬羅』世間の眷屬に准じて、佛陀、自內證の眷屬の意にていふ。『佛陀の分佛、又佛陀に常侍して、說法を聞く諸菩薩等。曇花「三十六部の善神、恒河沙眷屬と共にまもるものなり」㊃常に恩顧を受くる者。家の子。配下のもの。手下。今昔「多くの猛き兵を集めて、眷屬として」大鏡「冠八

「る法則。

げんそく 原則【名】數多の現象に共通なる法則。

げんそく 舷側【名】船の側面。ふなばら。

げんそく 還俗【名】㊀僧侶の、罪科を犯したるため、俗に還さしめらるること。㊁みづから願ひて、僧道を止むること。俗に歸ること。ばうずがへり。歸俗。萬葉「今この山が出たいとは、還俗したい心よな」

げんそく-げ 還俗氣【名】還俗せんと思ふ氣持。津國女夫池「還俗氣がつけば珍重」

げんぞく-しやうぐん 還俗將軍【名】(人)あしかがよしのり(足利義敎)の異稱。

けんぞく-ちごく 眷屬地獄【名】〔佛〕じふろくせうちごく(十六小地獄)に同じ。

げんそく-そ 減速度【名】〔理〕『英 Retardation』單位時間に速度の減ずる割合。負價の加速度。(加速度に對して)

げんそく-どう 減速動【名】〔理〕『英 Retarded motion』進むに臨ひて、その物の速力が減ずること。例へば石を空中に投上ぐるに、その石のいよいよ上がるに隨ひて、速力の減ずる類。(加速動に對して)

げんぞく-のみや 還俗宮【名】(人)ほくぐうのみや(北陰宮)に同じ。

げんそく-はう 舷側砲【名】軍艦の兩側に裝置したる大砲。

げんそく-はうだいかん 舷側砲臺艦【名】多數の砲を甲板の兩舷側に配置し、裝甲を以て、その舷側を防護せる軍艦。

げんそく-はふ 原則法【名】〔法〕法律組織中にて、その基礎たるべき法則、即ち他の特別なる規則によりて制限を受くるに非ざれば、一般の場合に適用せらるべきもの。(例外法に對して)

げんそくれん 原測鏈【名】『英 Standard chain』測量用測鏈を改訂する場合に、その比較に用ふべき測鏈。測量用測鏈は、使用中、溫度の差その他の事故により、多少その長さに異動生ずべきを以て、時時改訂するを要するなり。

げんそく-わたし 舷側渡【名】〔商〕ふなばらわたし(船腹渡)に同じ。

げんそ-しつきりつ 元素週期律【名】(化)『英 Periodic law of the elements』元素の性質と原子量との間の自然的關係を示す、一種の定律。諸元素の性質は、原子量の順によりて、規律よく漸次に異なりゆくものにして、しかも數箇の元素を經るごとに、同一性質の元素に回歸し、その間に週期的關係あること。即ち元素の性質は、原子量の週期的函數なること。週期律。週期定律。

げんそしつきりつ-へう 元素週期律表【名】(化)諸元素の週期律關係を、見易からしめんがため、列記せる表。前條參照。

げんそしき 原組織【名】すべての織物の基礎となるべき經と緯との組合せ方。

げんそつ 現卒・見卒【名】げんぺい(現兵)に同じ。

げんそ-ぶんせき 元素分析【名】『英 Elementary analysis』化合物を組織せる元素を知らんがために行ふ分析。

けんそん 謙遜・謙損【名】身をつつしみてへりくだること。謙讓。謙退。謙抑。

げんそん 減損【名】へること。へらすこと。めり。減少。

げんそん 現存【名】現に存在してあること。

げんそん 儼存【名】儼然と存在すること。

げんそん 玄孫【名】曾孫の子。自己より四等親に當る直系卑族。やしやご。百合若大野亭鏡「この和田丸は房前公の玄孫」

けんそんでん-し 檢損田使【名】中古、荒損田を巡檢せしむるために、臨時に發遣せし使者。けんでん(檢田使)參照。

げんそ-るゐ 元素類【名】〔鑛〕一元素のみより成る鑛物。例へば金・銀・硫黄・金剛石・石墨などの類。

けんだ 倦惰【名】倦きてをこたること。倦怠。

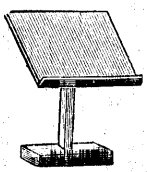
けんだ 拳打【名】にぎりこぶしにて打つこと。めり。

けんだ 健陀【名】㊀(佛)けんだつば(乾闥婆)㊁の略。㊁(地)けんだら(乾陀羅)の略。

げんだ 元太【名】山方より出す檜の丸太。

げんだ 黿鼉【名】〔動〕『黿は大龜、鼉はよろひがめ』龜類の動物。

けんたい 獻替【名】けんてい(獻替)に同じ。
けんたい 肩帶【名】〔醫〕けんかふこつ(肩胛骨)に同じ。
けんたい 兼帶【名】㊀二つ以上の官職を兼ぬること。兼任。㊁二つの物の、二つ以上の役に立つこと。かけもち。
けんたい 劍體【名】帶劍の作の樣子。〔雨夜談〕作人に依って、劍體を知る」
けんたい 劍帶【名】㊀劍と革帶と。㊁有爵者及び文武官が帶劍の時に用ふる帶。
けんたい 謙退【名】『謙遜・退讓の略』けんそん(謙遜)に同じ。
けんたい 倦怠【名】㊀うみてをこたること。倦惰。㊁身心つかれてだるきこと。
けんたい 兼題【名】『兼日の載の義』數日前に出しおきて詠ましめ、會合の時、持寄らしむるやうにせる、和歌俳句などの題。
けんたい 憲臺【名】だんじやうだい(彈正臺)の唐名。
けんたい 見臺【名】『書見臺の略』本を載せて見る臺。左右に一本づつ、又は中央に一本の支を立て、その上に、板を後方を高く前方を低く斜に取附け、その板の上に本を載す。欹案。


(いだんけ)

けんたい 賢臺【代】同輩もしくは同輩以上に對して用ふる第二人稱の敬稱。
けんたい 原態【名】もとの狀態。原狀。
けんたい 現態【名】現在のありさま。現狀。「して」
げんたい 減退【名】へること。(增進に對)
げんたい 現代【名】現在の世のなか。今の世。當世。
けんだいこ 劍太鼓【名】古代切(キリヂ)の一。地色は紺にて、太鼓の輪違(ワヅチ)の間に、劍さきを交へたる模樣あるもの。
げんだい-しさう 現代思想【名】『英Current thought』現代に於ける時代精神。現代思潮。
げんだい-してう 現代思潮【名】前條に同じ。
げんだい-じんりき 現大神力【名】〔佛〕『法華經の神力品に「爾時世尊、於二文殊師利乃至一切衆前一現二大神力一」とありて、その下文に、大神力の所作十種を記せり』釋迦が大神力を示現せる故事。(歌題などにいふ)
げんだい-しよう 減大升【名】孝德天皇の大化の改新の際に、唐の大量に據りて制せられたる斗量。京升の四合五撮八抄有奇に相當す。
げんだい-てき 現代的【俗】現代に順應せるさま。現代思想を露骨に現はしたるさま。當世風。
けんだい-びらき 見臺開【名】僧侶が、衆徒のために、始めて講義をなすこと。學位昇進の記念として行ふ。
げんだいふ 源太夫【名】謠曲の一。尾張國熱田の源太夫神社の由來を作れるもの。
げんだいふの-かみ 源太夫神【名】尾張國熱田神宮の攝社。祭神は手摩乳(テナヅチ)・足摩乳(アシナヅチ)。謠曲「源太夫」「その尾にありし劍を村雲の劍と名づけしこそ、八劍の宮のおん事よ。されば、鍬上(カヂ)の明神は、その時の稻田姫なり。父の老翁、名を變へて、源太夫の神とあらはれ、東海道の旅人を守らんと誓ひたまへり」
けんたい-ぶる【動四自】氣ぐらゐ高くして、他人を眼下に見くだす。異素六帖「けんたいぶる女郎。自眼看二他世人一」
げんだい-もの 懈怠者【名】げたいもの(懈怠者)の訛。
けんたう 遣唐【名】唐國につかはすこと。「と。
けんたう 喧鬪・諠鬪【名】さわがしきこと。
けんたう 甄陶【名】㊀瓦器・陶器などを造ること。㊁民を化育すること。
けんたう 圈套【名】おとしあな。わな。こみ。こころあて。㊁せうしやく(照尺)に同じ。(德川時代の語)
けんたう 見當【名】㊀めあて。みあて。みこころあて。㊁せうしやく(照尺)に同じ。(德川時代の語)
けんだう 劍道【名】けんじゆつ(劍術)に同じ。
けんだう 縣道【名】道路の種別の一。國道と里道との中間に位し、府縣と師團・旅團の所在地とを接續するものを一等とし、府縣廳と郡市役所とを連ぬるを二等、著名の區より郡に往來し、或はその區に往還すべき便宜の道路、又は開港場に連なるを三等とし、四間乃至五間の幅を保たしむ。
けんだう 乾道【名】易に說く、至剛・至健の德。天の道。君主の道。(坤道に對して)
けんだう 權道【名】手段は、當經に反しながら、效果は正道に合すること。變則ながら效果あるはかりごと。
けんだう 險道【名】けはしきみち。險路。
けんだう 見道【名】〔佛〕『道は、學人進取の道路』聲聞(シヤウモン)の三道の一。その初果の稱。四諦(シタイ)の理を始めて認識したるもの。
けんだう 萱堂【名】『詩經の衞風伯兮篇に「焉得二諼草一言樹二之背一」とあり、背は即ち北堂にて、主婦の居る處。諼は萱草に通じ「わすれぐさ」と訓ず』は(母)の異稱。(椿堂に對して)ちんけん(椿萱)參照。
げんだう 原糖【名】げんとう(原料糖)に同じ。
げんだう 現當【名】(佛)『當はたうらい(當來)の略』現在と未來と。この世と、あの世と。現世と來世と。げたう。現未。現當二世。平岩熊野參詣も、現當安穩の御祈請にてこそ候ふらめ」謠曲「千手」「現當の罪を果すこと、前業(ゼンゴフ)よりなほはづかしくこそ候へ」
現當二世(セ)【句】(佛)前條に同じ。保元「本宮證誠殿の御前にて、現當二世の御祈念ありしに」
現當二世安樂【句】(佛)「現世安穩後生善處」に同じ。
げんだう 玄道【名】㊀幽玄なる道。㊁ぶつだう(佛道)に同じ。
けんたう-き 驗糖器【名】『英Saccharimeter』偏光計の一種。特に砂糖の定量分析に用ひらるるもの。半影驗糖器・變遷色驗糖器等、種種あり。
けんだう-さい 獻堂祭【名】〔基〕『英Dedication』その建物を神に獻る意にていふ』會堂の上棟式。獻堂式。
けんたう-し 遣唐使【名】古、支那唐朝の頃、我が國よりその朝へ遣されし使者。宇多天皇の御代に至りて廢せらる。けんずゐし(遣隋使)參照。
けんだう-しき 獻堂式【名】〔基〕けんだうさい(獻堂祭)に同じ。
けんだうしや 劍道者【名】けんじゆつかひ(劍術遣)に同じ。
けんたうちがひ 見當違【名】㊀見當を誤れること。正鵠を失へる見込。みこみちがひ。㊁やにらみ(藪睨)に同じ。
けんだか 建陀歌・揵陀・乾陀(梵Kaṇḍa)【名】悉達(シツタ)太子の王宮を遁れ出でし時、乘りし馬。訛りて揵德(寒特)といひ、又、俗に「コンデイ」といひ、金泥など記す。こんでいご。こんぢご。
けんだか 權高【名】けんたいぶること。
げんだか 現高【名】現在のたか。現額。
げんだ-がうぶぎぬ 源太産衣【名】源家重代の八領の鎧の一。保元「重代相傳仕つて候ふ月數・日數・源太が産衣・八龍・澤瀉(オホカブ)・薄金(クロガネ)・楯無(タテナシ)・膝丸と申して、八領の鎧候ふが」
けんだこ 劍紙鳶【名】下方の形、昔の劍の切先の如くなる紙鳶。
けんだし 蹴出【名】けだし(蹴出)㊁を云ふ。〔江戸の語〕
けんたつ 顯達【名】立身出世すること。
けんだつ 乾闥・健達【名】〔佛〕けんだつば(乾闥婆)の略。「又その布達。
げんだつ 嚴達【名】嚴重に布達すること、
けんだつ-じやう 乾闥城【名】けんだつばじやう(乾闥婆城)㊁の略。
けんだつば 乾闥婆・健達婆・健達縛・乾沓婆(梵Gandharva)【名】〔佛〕㊀『香神。嗅香・香陰(カヲン)・尋香など譯す』八部衆の一。緊那羅(キナラ)と共に帝釋(タイシヤク)に奉侍して、伎樂を奏することを司る神。須彌山(シユミセン)の南、金剛窟中に居り、酒肉を食はず、ただ香を求めて、五蘊(ウン)の色身(シキシン)を資け、又その色身より香を出し、虛空を飛行するといふ。乾闥。乾陀。㊁『生業を事とせず、ただ飮食の氣を尋ねつつ樂を奏して乞求するよりいふ』印度の樂を爲し、舞を舞ふ

者。俳優。樂人。㊁『中有にありては、次生に出づべき香を尋ねて行くによりていふ』ちゅう(中有)に同じ。

けんだつばーじゃう 乾闥婆城・健闥婆城・健達縛城【名】㊀〔佛〕『尋香城の義』乾闥婆㊁の、巧に樓閣を幻作して、人に觀しむるもの。乾闥城。㊁『上記の乾闥婆城に似たるよりいふ』しんきろう(蜃氣樓)に同じ。太平記、大元七萬餘艘の船、同時に博多に押寄せたり…海上の四圍三百餘里、にはかに陸地になりて、蜃氣、ここに乾闥婆城を吐出せるかと」

けんだつばーわう 乾闥婆王・犍闥婆王【名】〔佛〕八大龍王の一。諸の乾闥婆の主長。

けんだま 劍玉【名】玩具の一。長さ數寸の柄の端を細くし、中ほどに絲を結びつけ、絲の他端に球を附け、球には、柄の一端なる細き部分のはまるべき孔を穿てるもの。片手にて柄を持ち、他の片手にて球を旋廻し、回轉に伴ふ動搖の定まりたるを見はからひ、柄を急に持上ぐる氣味にすれば、球は絲に引かれて跳ね上る途端に、柄の細き部分を、球の孔に狙ひ中て受けとむ。柄の他の一端の猪口(ちょく)形に刳りたる方を上に向け、前と同樣の方法にて、球をその猪口の中に受止むる方法もあり。

けんたん 劍鐔【名】つるぎのつば。

けんたん 軒端【名】のきば(軒端)に同じ。

けんたん 健啖【名】よく物を食ふこと。おほぐひ。大食。「健啖、昔日の如し」

けんたん 【名】㊀下等なる遊女。會我虎が鳳鶴が岡の濱茶屋で、けんたん買へやと毒口・苦口」㊁つじぎみ(辻君)を云ふ。〔四國の方言〕

けんだん 檢斷【名】㊀理非をしらべ定むること。刑事の裁判。㊁けんだんしょく(檢斷職)の略。國姓爺後日合戰「左右に檢斷大横目、記錄者は硯に向ひ」㊂おほじょうや(大庄屋)に同じ。

けんだん 暄暖【名】あたたかなること。溫

けんだん 懸談【名】〔佛〕『懸(かけ)に後の事を談ずる意』經論を講ずるに、文前において、まづ一部の要義・綱領を論ずること。例へば天台の法華玄義・淸涼の華嚴玄談の類。玄談。

けんーたん 嚴探【名】嚴重に探ること。

けんーたん 元旦【名】ぐわんたん(元旦)に同じ。

けんーだん 言談【名】はなし。ものがたり。「談話。

けんーだん 女談【名】㊀幽玄なる義理を談ずること。高遠なる談話。㊁〔佛〕げんだん(懸談)㊁に同じ。

けんだん 女壇【名】道士の住する觀(くわん)。

けんだん 嚴談【名】きびしき談判。せめなじるかけあひ。

けんたんか 健啖家【名】大食家。くひて。

けんだんかた 檢斷方【名】室町時代の侍所(さむらどころ)の所司代・小所司代の總稱。檢斷の事を掌るよりいふ。

けんだんかたさた 檢斷方沙汰【名】鎌倉時代の刑事の裁判。關東にては侍所(さむらどころ)、京都にては檢斷の頭人、これを沙汰せしより、侍所沙汰ともいへり。檢斷沙汰。

けんだんざた 檢斷沙汰【名】げんだんかたさた(檢斷方沙汰)に同じ。

けんだんしょ 檢斷所【名】檢斷職の事務を執(と)り行ふ所。

けんだんーしょく 檢斷職【名】㊀室町幕府中葉以後の職制の一。檢斷の事を掌りしもの。後世の町奉行に似たり。鎌倉時代には、侍所(さむらどころ)專ら檢斷の職を掌り、足利時代にも、その前半はこの制に據りしが、侍所の所司・所司代兼職し、開闔ひとりこの職を執り、その補助として、別に檢斷職を置きて分掌せしむるに至り、將軍義晴の時、二人を置きて、兩檢斷職の稱あり。掌るところ、檢斷の外、貸借・質物・過書等の事に及び、京都以外、近畿の雜事をも執りたり。檢斷。㊁足利時代に、京都の在家を領せし者、又は地方の地頭・領家の中、家臣をして、領内の雜事を掌らしめしもの。けんだんかた(檢斷方)參照。

けんだら 乾陀羅・健馱羅(梵 Gandhāra)【名】㊀〔地〕『乾陀は香の義、羅は陀羅の略にて遍の義、域内多く香氣の花を生ずるによりていふ』昔、西印度にありし國。カシュミイル(Kashmir)の西北、五河地方、即ちパンジヤブ(Panjab)の北に當るといふ印度民族と月氏・安息(アルサク)・大夏(バクトリア)等の外國民族との交渉・史實に富める地。月氏國の遮賦色迦(カニシカ)王の根據地たりし頃、佛敎盛んに行はれ、同時に想を佛敎に取り、樣式を希臘・羅馬に得たる、謂はゆる乾陀羅佛敎美術を遺せり。ガンダラ。「犍陀囉」㊁〔植〕印度に產する香樹。その煮汁は、白布を茶褐色に染むるに適するより、僧衣を染むるに用ひ、その色を乾陀羅色(ガンダラじき)といふ。又、香(かう)を製するにも用ひ、これを乾陀羅樹香又は安息香といふ。

けんだら-こく 乾陀羅國・健馱羅國【名】〔地〕けんだら(乾陀羅)㊀に同じ。

けんだら-しき 乾陀羅式・健馱羅式【名】〔美〕がんだらしき(健馱羅式)に同じ。

けんだら-じき 乾陀羅色・健馱羅色【名】けんだら(乾陀羅)㊁を見よ。

けんだら-じゅ 乾陀羅樹・健馱羅樹【名】〔植〕けんだら(乾陀羅)㊁を見よ。

けんだらじゅ-かう 乾陀羅樹香・健馱羅樹香【名】けんだら(乾陀羅)㊁を見よ。

けんち 檢地【名】土地の段別を定め、その品位を檢することを。さをいれ。なはいれ。丈量。方量。

けんち 文祿の檢地【句】こくなほし(石直)を見よ。

けんち 壎篪・塤篪【名】支那の古の樂器なる壎と篪と。「じ。

けんち 間知【名】けんちいし(間知石)に同じ。

けんち 見知【名】㊀目に見て心にさとること。㊁實地につきて檢査すること。㊂『實見・見知實否』㊃敵の士卒の首を實檢すること。

けんち 見地【名】みるところ。かんがふるところ。見識。「こと。

けんち 權知【名】かりに、その事に與かる。

けんち 堅緻【名】堅くして緻密なること。

けんち 賢智【名】かしこく智あること。

けんち 縣地【名】縣下。地方。

けんち 縣治【名】㊀縣の行政。地方の政治。㊁縣廳の所在地。

けんち 兼治【名】兼務して治むること。續紀、兼二治肥後國一」

けんち 軒輊【名】『詩經の小雅六月篇に「戎車既安、如レ輕如レ軒」、又、後漢書の馬援傳に「夫居レ前不レ能レ令二人輕一居レ後不レ能レ令二人軒一、臣所レ恥也」と見え、軒は車の前の高き義、輕はその低き義、その上り下りの意を取りて、優劣いふ』まさりおとり。優劣。高下。

けんち 妍媸【名】みめよきことと、みにくきことと。妍醜。

けんち 硯池【名】硯の凹くして、水を滿ふる所。すずりのうみ。硯海。

けんち 建治【名】後宇多天皇の御代の年號(紀元一九三五年—一九三七年)。

けんち 現知【名】實地に對して明かに知ること。「勢。

けんち 現地【名】現在の土地。現在の地

けんち 女地【名】はるかに隔たりたる地。盛衰記「名を玄地に遁れ、跡を白雲に暗くする人」

けんち 女智【名】玄妙なる智慧。

けんち 女智【名】〔人〕眞宗本願寺の學僧。字は景耀。號は若瀛。河内國の顯宗寺に生れ、京都の慶證寺玄誓の後を嗣ぐ。三經字音考・十二禮冠註・横川法語述讚等の著あり。寬政六年寂す。年六十一。

けんち 言質【名】ことばぢち(言質)に同じ。

けんち 元治【名】孝明天皇の御代の年號(紀元二五二四年—二五二五年)。元治の變【句】江戸幕府の末年における、幕府と長州藩との衝突の結果、元治元年に、長藩の兵、當時佐幕黨の藪淵なりし京都を襲撃せし役。長藩の失敗に歸し、幕府は長州征伐の軍を起すに至れり。

けんちあなーこん 健賀亞那根【名】げんちやなこん(ゲンチャナ根)を見よ。

けんちーいし 間知石・檢地石【名】後方に至るに從ひてせばまりたる形にて、積みて石崖を築くに用ふる石。相州の堅石、又、豆州の凝灰石などを用ふ。けんち。

けんちう 絹綢・絹紬・繭紬【名】支那山東

省より多く産する織物。撚(ヨリ)の無き柞蠶(サクサン)絲を經とし、これに扱糊(コキノリ)を施し、又、撚の無き柞蠶絲の浸したるを緯として織りたる平織(ヒラオリ)。淡茶色を帶び、節あり、用途廣し。けんとん(絹緞)參照。「同じ。

けんちうち 檢地打【名】さをうち(竿打)に同じ。

けん-ちえん 卷織【名】『漢字の宋音』けんちん(卷織)に同じ。

げんちかわ 現地講話【名】目前の地勢につきて、軍事上又は學術上などの講話をなすこと。

けんちき 檢地器【名】〔理〕『英 Ground detector』送電中の電路に、地氣ありや、又は全く地と絕緣せられたりやを檢する電氣裝置。

けん-ちく 建築【名】土・石・木・金等を材料として、宮殿・家屋・堂塔・橋梁等を作ることの總稱。その高尚なるものは、空間美術及び造形美術の一種にして、又、科學と實用とに束縛せらるるを以て、羈絆藝術の一種たり。普請(フシン)。作事。

けんちく-か 建築家【名】『英 Architect』藝術としての建築の設計をなす人。

けんちく-がく 建築學【名】建築に關する事がらを、科學的に研究する學問。

けんちく-けいさつ 建築警察【名】〔法〕行政警察の一。建築物より生ずる危害を防ぐを目的とするもの。例へば石油營業者の石油の貯藏所及びその精製所の構造法、電氣事業の建築物に關する製限、また建築物の屋根に、不燃質の材料を用ふることを命令し、柱の朽腐して崩類する虞ある建築物を、修繕又は壞たしむる類。建築物警察。

けんちく-げふ 建築業【名】建築上の業務を受負ひて生活する職業。

けんちく-さうしよく 建築裝飾【名】『英 Architectural decoration』建築に用ふる繪畫と彫刻との裝飾。

けんちく-し 建築師【名】『英 Builder』建築に從事する職人の頭(カシラ)だてるもの。また建築の請負を業とする人。

けんちく-し 建築史【名】一國もしくは一民族の間に發達せる、古來よりの建築樣式の變遷を敍べたるもの。

けんちく-しき 建築式【名】㊀建築に著手する時に行ふ儀式。㊁建築の樣式。國を異にし、時代を異にするに從ひて、各その特色を有す。

けんちく-じゆつ 建築術【名】『英 Architecture』建築の設計、又は組立の技術。

けんちく-ぢやうぎ 建築定規【名】『英 Construction gauge』鐵道列車の運轉保安上、線路の左右上方に存置すべき必要ある空間の最小限を示せる定規。我が國にては、明治三十三年遞信省令鐵道建築規程により定め、鐵道線路上の諸建造物は、すべてこの定規に從ふべきこととなれり。

けんちく-ぶつ 建築物【名】建築したるもの、即ち家屋・倉庫などの類。たてもの。營造物。

けんちくぶつ-けいさつ 建築物警察【名】〔法〕けんちくけいさつ(建築警察)に同じ。

けんちく-れつしや 建築列車【名】『英 Construction train』鐵道線路上の工事に要する材料を運搬する列車。普通、無蓋車を用ふ。

けんちー-こく 憲治國【名】りっけんこく(立憲國)に同じ。「同じ。

けん-ちざを 檢地竿【名】けんざを(間竿)に

けん-ちじ 縣知事【名】縣の知事。內務大臣の指揮監督を承け、又、各省所管の事務につきては、それぞれ各省大臣の指揮監督を承けて、縣に關する國の行政事務を處理する地方官と、縣令及び縣參事會の議決を執行し、縣を代表する自治機關とを兼ねたるもの。(府知事に對して)

けん-ぢしん-し 檢地震使【名】中古の間民疾苦使の一種。國民が、大地震の被害を受けし時、朝廷より臨時に派遣せられし者。

けんち-ちやう 檢地帳【名】武家時代に、諸侯が領地內の檢地の結果を錄せる帳簿。德川時代には、水帳(ミヅチヤウ)と呼びたり。

けんちつ 卷帙【名】くわんちつ(卷帙)に同じ。

けん-ちん 卷織・卷蒸【名】『漢字の宋音の訛』。卷は黑豆のもやしの義』㊀卓木(ボク)料理の一。黑大豆のもやしを油にて炒(イ)り、鹽又は醬油等を加味して食するもの。もと禪僧の支那より傳へしもの。今はその仕樣さまざまに變ぜり。けんちえん。けんちやん。㊁けんちじる(卷織汁)の略。

けん-ぢん 堅陣【名】守りの堅き陣。

けんちん-じる 卷織汁・卷蒸汁【名】『けんちん(卷織)を見よ』豆腐を布巾(フキン)に包み、よく絞りて水氣を去り、胡麻油にていため、笹掻牛蒡(ササガキゴボウ)・麻の實などを加へて再びいため、別に清汁(スマシ)を作りて汁とする精進料理。けんちん。けんちやん。けんちやんじる。

げんぢん-たん 玄塵丹【名】きんかうたん(金膏丹)に同じ。和名、金膏丹、一名昇仙丹、一名玄塵丹」

けんちん-むし 卷織蒸【名】『けんちん(卷織)を見よ』小鯛を背開にして、中骨を除き、これを醬油に浸し、約二時間の後取出して、腹中に五目煎豆腐(イリドウフ)を詰込み、蒸籠(セイロ)にて蒸したる食品。けんちやんむし。

けん-ちや 獻茶【名】抹茶をたてて、神佛に供ふること、又その茶。「を取扱ふ所。

けん-ちやう 縣廳【名】縣知事がその事務

けんちやう 建長【名】後深草天皇の御代の年號(紀元一九〇九年—一九一五年)。

けん-ちやう 裏帳【名】即位式の時、高御座(タカミクラ)の南面の帳を裏(カク)ること。女王・內侍この役を勤む。古事類苑「花山院御即位之日、馬內侍爲裏帳命婦、進奏之間、天皇令引入高御座內、給、恕以配偶」

けん-ちやう 見丁【名】〔佛〕御修法の時、花香・乳木を取出す僧侶の役。

けん-ぢやう 儉仗【名】中古、鎭守府將軍・太宰帥・同大貳・按察使等に給して、その外出の際、兵仗を帶して護衞せしめられし、判補の武官。また國守等にも、特に給せられしことあり。員數は二人乃至八人にて、時に增減あり。考選・公廨(クガイ)の給等は、史生(シジヤウ)に准ぜられたり。

げんちやう 幻聽【名】〔哲〕『英 Auditory hallucination』幻覺の一。實際外界には何等の音響戰慄なきに、種種の音響或は言語を聞くこと。げんてい。

げん-ちやう 原腸【名】〔動〕『獨 Urdarm』卵の囊胚の內腔。生育すれば、消化器の大部分を形成するもの。腔腸動物の消化器のごときは、成長後も、原腸以上に發育せざるものなり。

げん-ぢやう 現場【名】げんば(現場)に同じ。

げんちやう-き 原腸期【名】〔動〕複細胞動物の發生中に經過する一期間、即ち囊胚の時期。腔腸動物のごときは、終生原腸期以上に進化せざるものなり。

けんちやう-じ 建長寺【名】相模國鎌倉郡山內(ヤマノウチ)村小袋(コブクロ)坂にある寺。臨濟宗建長寺派の本山。鎌倉五山の第一。巨福山と號す。北條時賴が宋僧蘭溪道隆(大覺禪師)を聘して開きしもの。結構すべて宋の寺院に擬し、規模の大、彫刻の奇、頗る見るべきものありが、今は頽廢して、十の一を存するのみ。

けんちやうじ-うちしき 建長寺打鉢【名】古代切(コダイギレ)の一。地は赤色にて、緯は黑く、ななこすかしにて、鹿子(カノコ)のごとし。

けんちやうじ-は 建長寺派【名】臨濟宗の一派。蘭溪道隆を祖とす。鎌倉の建長寺を、大本山とし、その住持は管長を兼ぬ。

けんちやう-ちやう 見丁帳【名】古、現在の正丁(シヤウヂヤウ)・次丁・少丁を調査して記入せし帳簿。續紀「六年見丁帳」

けんちやう-もんと 建長門徒【名】臨濟宗建長寺派の門徒。

けん-ちやく 揀擇【名】〔佛〕思慮を費して選び分くること。

げん-ちやく 顯著【名】げんちよ(顯著)の誤讀。

げん-ちやく 還著【名】〔佛〕もとに歸著すること。

げん-ちやく 還著【名】〔佛〕『法華經の普門品に「呪詛諸毒藥、所欲害身者、念二彼觀音力一還二著於本人一」とあり』みだりに害を加へんとする者ある時、觀音の力を念ずれば、禍は却りて、その害を加へんとしたる者の身に歸著す。〔諺語〕醫曲〔田村〕「げにや、呪詛諸毒藥念彼觀音の力をあはせて、すなはち還著於本人の、かたきは亡びにけり」

けんちやなこん 健賃弩那根【名】『羅Radix gentianae』龍膽(リウタン)屬諸植物の根及び根莖を乾燥せる、暗褐色・苦味の藥物。健胃劑として、腸胃病に應用せらる。

けんちやん 巻纖【名】『漢字の宋音』**けんちん**(巻纖)に同じ。

けんちやんじる 巻纖汁【名】『漢字の宋音』**けんちんじる**(巻纖汁)に同じ。

けんちやんむし 巻纖蒸【名】『漢字の宋音』**けんちんむし**(巻纖蒸)に同じ。

けんちゆう 検注【名】検地を行ひて注記すること。【古語】十訓「彼の國にくだりて、検注を行ひけるに」

けんちゆう 懸注【名】瀑のごとく、高處より注ぎ下ること。

けんちゆう 謙沖【名】『沖は虚の義』**けんそん**(謙遜)に同じ。

けんちゆう 懸柱【名】懸垂せる柱。

けんちゆう 原註【名】もとの註。

けんちゆう 厳誅【名】きびしき誅罰。

けんちゆう 原蟲【名】〔動〕**げんせいどうぶつ**(原生動物)に同じ。

げんちゆう 元中【名】後龜山天皇の御代の年號(紀元二〇四四年—二〇五二年)。

げんちゆう 厳重【名】一おごそかなること。いかめしきこと。厳密。二**げんちよう**(厳重)に同じ。

げんぢゆう 現住【名】一現在その場所に住まへること、又その場所。現住所。現住地。二〔佛〕現世に殘りとどまること。謡曲(舍利)「これなん足疾鬼が奪ひしを、韋馱天取返したまひし現住奇特の牙舍利(シヤリ)の御相好」三**げんぢゆうしよく**(現住職)の略。(先住・後住に對して)

げんぢゆう 還住【名】元にかへり住むこと。盛衰記「還住せん事難治にて」

げんぢゆうあん 幻住庵【名】蕉門の俳人、菅沼曲翠の伯父幻住老人の、今の近江國滋賀郡石山村大字國分(コクブ)に結びし草庵。老人の歿後八年、芭蕉修理を加へて、半歳ここに起臥し、元祿三年四月ここにて作りし「幻住庵の記」は、猿蓑及び風俗文選等に載せられて、有名なり。芭蕉「幻住庵にて、旅ぐせや寢びえわづらふ秋の山」

けんちゆうし 検注使【名】武家時代に、田地を勘檢して、その段別を改正するために、守護・地頭より差遣せし使。

けんちゆうじ 建中寺【名】尾張國名古屋市筒井町にある淨土宗の寺。本尊は阿彌陀如來。業蓮社成譽郭呑の開祖。德興山と號す。慶安四年德川光友の、父義直追福のために創建せしもの。

げんちゆうしふる 源註拾遺【名】〔書〕源氏物語の註釋。七卷。契沖阿闍梨の著。

げんぢゆうしよく 現住職【名】寺の現在の住職。現住。現重(ケンヂウ)。

けんちゆうはうするけいてんぺう 懸柱方錐形覘標【名】陸地測量にて、三角點上に建設して、覘視し易からしむべき標識。木材を組合せて方錐形を作り、その錐心の直下に、礎柱を立てたるもの。

げんちゆうよてき 源註餘滴【名】〔書〕源氏物語の中の言語を解釋したるもの。二十卷。石川雅望(マサ)の著。

げんちゆうるゐ 原蟲類【名】〔動〕**げんせいどうぶつ**(原生動物)に同じ。

けんちよ 顯著【名】いちじるしきこと。あきらかなること。きはだちて目につくこと。著明。

けんぢよ 賢女【名】賢明なる女。けんによ。薩摩歌「いかなる賢女・貞女でも、乳房の母には似もつかぬ」

けんぢよ 蠲除【名】のぞき去ること。除去。遷步色葉集「蠲除、ケンヂヨ」

げんちよ 原著【名】飜譯又は改作などせるものに對して、もとの著作。原作。

げんちよ 玄猪【名】一**ねのこもち**(亥子餅)に同じ。二〔動〕**ぶた**(豚)に同じ。

けんぢよう 權龍【名】寵愛を受けて、權威あること。

げんぢよう 厳重【名】一『漢書の郭解傳に「諸侯以レ此嚴二重之一」とあり』おそればかること。二**げんちよ**(玄猪)の訛。貞丈雜記「厳重といへるは、卽ち玄猪の轉語なり。…明應・文明の頃の記錄にある詞なり」

けんぢよう-のーもち 厳重餅【名】**ねのこもち**(亥子餅)に同じ。

けんぢよく 見濁【名】〔佛〕五濁の第二。末世(マツセ)に至り、衆生(シユジヤウ)の邪見さかりに起りて、世を濁亂すること。

げんぢよく 厳飭【名】きびしくいましむること。厳重なる戒飭。

けんぢよごかし 賢女ごかし【名】他より賢女なりと煽(オダ)てて、拜み倒すこと。蕃門松「奇特な、悟氣せぬ、賢女賢女と、賢女ごかしの拜み倒しに逢うて」

けんぢよじふにしん 建除十二辰【名】九星にて、曆の日取の一。建(ケン)・除(ヂヨ)・滿(マン)・平(ヘイ)・定(ヂヤウ)・執(シフ)・破(ハ)・危(キ)・成(セイ)・收(シウ)・開(カイ)・閉(ヘイ)の十二語。一語を順次一日に配當し、一巡すれば、また始に復り、中絕することなく循環す。除危・定・執・成・開を吉とし、建・破・平・收・滿・閉を凶とし、その値ふ所を見て、吉凶を定む。陰曆の曆の中の一段に記載せるによりて、俗に中段と稱す。「原作者。

げんぢよしや 原著者【名】原書の著作者。

けんぢよたい 建除體【名】〔文〕漢詩の一體。出句の首に、建除十二辰の一字づつを用ひて作りたる五言の雜名詩。支那齊・梁の間に始まれり。

けんぢよだて 賢女立【名】賢女をよそほふこと。園姓奢合戰「賢女立して、すんすんと素氣なき御身が心を表し、梅花を味方に參らする」

げんづ 原圖【名】摸寫・複製等の基本となれる圖畫。根原たる圖繪。

げんつう 現通【名】〔佛〕通力(ツウリキ)をあらはすこと。

けんづか 劍柄【名】劍のつか。けんぱ。

けんつきてつぱう 劍附鐵砲【名】小銃の先端に、劍を附けたるもの。銃槍。

けんつく 劍突【名】あらあらしく叱りつくること、又その言葉。こづく。「けんつくを食(ク)ふ」

けんづく 權盡【名】**けんぺいづく**(權柄盡)の略。(德川時代の語)　艸狩劍本地「權づくに押せど押されぬ笑の枝」

げんづけ 權附【名】**けんぺいづけ**(權柄附)の略。(德川時代の語)　浮世親仁形氣「銀を貸したる古手屋にて、權づけに、ゆきたけの合はぬ絹物をかりて」

げんづし 原圖紙【名】『英Drawing paper』原圖となるべきものを畫くに用ふる、厚き圖引用紙。種類多し。

けんづもり 間積【名】土地の間數を測ること。傾城反魂香「これをもって勘へれば、間づもり・知行高、刹那に相濟み申すべし」

げんづる 削る【動四他】**げづる**(削る)の訛。催馬樂(奥山)「奥山に木きるやをぢ木をやけんづるま木やはけんづるけんづる」

けんつるかたばみ 劍蔓酸漿【名】紋所の一。酸漿の瓣を、複線にて現したる劍酸漿。

けんつるかぎ 鉗鎚【名】『鉗は金を挾むやっとこの類、鎚は金鎚』佛家にて、學人を鍛錬すること。「じ。

けんつる 研槌【名】**すりこぎ**(擂木)に同

けんてい 賢帝【名】賢明なる帝王。

けんてい 賢弟【名】他人の弟又は自己の弟、又は年下の男子に對する敬稱。

けんてい 兼程【名】**けんかう**(兼行)に同じ。

けんてい 険程【名】平坦ならぬ道程。

けんてい 検定【名】檢査したる上にて、可否を決定すること。

けんてい 献呈【名】たてまつること。献上。進上。進獻。

けんてい 献替【名】『可を獻り、否を替(ス)つる義』君に對して、可否を言上すること。けんたい。

けんてい 懸蹄【名】〔動〕偶蹄類の有する四箇の蹄のうち、兩側にありて、小さくして、地に接せざるもの。けづめ。

げんてい 限定【名】一或事物に制限を附して定むること。事物を限ること。二〔哲〕『英Determination』論理上、概念に屬性を附加して、その意義を狹くすること、卽ち外延を廣くし、內包を狹くすること。例へば、「水」より「河水」・「海水」を作る類。(概括に對して)

げんてい 舷梯【名】『英Gangway ladder』船門より舷外に吊下げて、人の昇降用に供する梯子。**げんもん**(舷門)參照。

げん-てい 嚴程【名】『嚴は急切にする義、程は旅程』旅たちの仕度。

けんてい-げんき 檢定原器【名】明治四十二年三月以前、農商務大臣が副原器により製作せしめ、度量衡器檢定の標準に供したる原器。

げんてい-さうぞく 限定相續【名】〔法〕相續の一。相續人が限定承認をなすもの。

けんてい-しけん 檢定試驗【名】■檢定のために行ふ試驗。■けうゐんけんていしけん(教員檢定試驗)の略。

けんてい-しよう 檢定證【名】檢定の濟みたる證書。

けんてい-しよういん 檢定證印【名】檢定の證として捺(オ)す印。

げんてい-しようにん 限定承認【名】〔法〕『英 Limited recognition』相續の承認方法の一。相續人が相續によりて得たる財産の限度においてのみ、被相續人の債務及び遺贈を辨濟すべきことを留保して、相續の承認をなすもの。(單純承認に對して)

げんていしようにんしや 限定承認者【名】〔法〕限定承認をなしたる相續人。

けんてい-すみ 檢定濟【名】檢定を經たること。

げんてい-せんきよ 限定選擧【名】選擧人の資格に制限を設けたる選擧法。(普通選擧に對して)

げんてい-のうりよく 限定能力【名】〔法〕『獨 Beschränkte Handlungsfähigkeit』人の行爲能力の、法律によりて制限せられたるもの。次條參照。

げんていのうりよくしや 限定能力者【名】〔法〕行爲能力に制限を受けたるもの。卽ち未成年者・禁治産者・準禁治産者、又は妻などの類。

けんてい-れう 檢定料【名】檢定を請ふ者の納付する手數料。

げん-てう 玄鳥【名】〔動〕つばめ(燕)に同じ。

げん-てう 【名】げんちやう(嚴重)■の誤。

世諺問答「あのこの日、御げんてうとて、おほやけより、私に分ち給ふことの侍るは、何の故ぞや」

げんてう-き 檢潮器【名】『英 Tide gauge』潮位を檢するための裝置。波動の影響なき所に、大なる浮子(キウ)を泛べ、その昇降を上方の指針に傳へ、又は紙片に自記せしむるもの。

けん-てき 堅敵【名】きやうてき(强敵)に同じ。

けん-てき 硯滴【名】硯にたらすしたたり。

けん-てき 涓滴【名】■しづく。したたり。■少しばかりの物事の譬。「涓滴の微裏」

けん-てつ 賢哲【名】■賢人と哲人と。■才德すぐれ、事理に通ずること、又その人。

けんてつ-だん 堅鐵彈【名】破甲彈の一。鑄鐵製にて、彈肉を厚くし、彈頭を特に堅牢尖銳ならしめ、內部に炸藥を塡充し、彈底に著發信管を有するもの。大口徑砲用にして、西曆一八七三年頃獨逸國グルゾン(Gruson)工場にて發明す。堅鐵榴彈。

けんてつ-りうだん 堅鐵榴彈【名】前條に同じ。

けん-てん 檢點【名】てんけん(點檢)に同じ。

けん-てん 圈點【名】文章の文字の右傍に加へて、妙所・要點などを示すに用ふるし。、●○◎など、種種あり。批點。

けん-てん 喧闐・諠闐【名】かまびすしきこと。

けん-てん 顯典【名】〔佛〕顯教の經典。

けて-でん 檢田【名】田を點檢すること、又それをなす人。今萱田に立ちて、檢田する間に」

けん-でん 喧傳・諠傳【名】世間に言ひはやしつたふること。

けん-でん 縣傳【名】縣より出す傳馬。

けん-でん 硯田【名】文士などが、生活のために、文を草し、字を書くに用ふる硯を、農夫が耕作する田に譬へていふ語。「硯田に筆耕す」

げん-てん 減點【名】點數を減ずること、又その減じたる點數。

げん-てん 原點【名】■運動又は延長の起點。根原となる地點。■〔數〕『英 Origin』角の、その一邊が、他の一邊の位置より起りて、頂を廻りて轉ずると考ふる時のその角の頂。また相交る二直線を縱橫線軸とし、點の位置を定むる時のその交點。

げん-でん 玄田【名】次條を見よ。

玄田牛一【句】「壽生(ヤスナリ)」の折字』他人を罵るなどにいふ語。

けんでん-き 驗電器【名】『英 Electroscope』電氣の存在及びその陰陽いづれなるかを驗する裝置。最も簡單なるは電氣振子。最も便利にして鋭敏なるは、金箔驗電器。その他種類多し。

でんきけい(電氣計)參照。

けんでん-き 檢電器【名】『英 Galvanoscope』常に電信回線中に插入して使用せらるる、簡單なる一種の電流計。その指針傾斜の有無・方向・大小によりて、回線中の電流の有無・方向・强弱を概測し得。數種あり。

けんでん-し 檢田使【名】中古、檢田のため、臨時に諸國に派遣せられたる使。また莊園・私領地等に、檢田のために、各領主より派したる使をも稱したり。けんそんでんし(檢損田使)參照。

けんでん-ちやう 檢田帳【名】古、檢田使が檢田の結果を記したる帳簿。

けん-と 建都【名】都を建つること。國都を建設すること。

けん-と 犬兎【名】いぬと、うさぎと。

犬兎の爭【句】『春秋後語に「韓盧逐二東郭逸一、騰山五、環レ山三、兎窮二於前一、犬疲二於後一、各死二其處一、田父見而獲レ之」とあるに本づく。兩者はすばやき兎、韓盧はその條を見よ』「鷸蚌(イツバウ)の爭」に同じ。〔諺語〕

けん-と 蹇兎【名】■足なへの兎。■極めて弱き者の譬。「韓盧を嗾つて、蹇兎を捕(ト)つ」參照。

けん-と 鉗徒【名】『鉗は首かせを施せる義』つみびと。罪人。「罪人(ケント)」

けんと (英 Kent)

けんとし(ケント紙)の略。

けん-と 譴怒【名】せめいかること。

けん-と 捲土【名】土を捲くこと。勢の烈しきこと。

捲土重來【句】一度失敗せる者が、更に勢力をもりかへし來ること。

けん-と 權度【名】■はかりと、ものさしと。權衡と度量と。■つりあひ。權衡。■のり。規則。

けん-と 犍度【名】〔佛〕『巴利 Khandha(蹇陀迦)・梵 Skandha(蹇犍陀・婆犍圖)。部又は章と譯す。舊譯には、法聚といへり』論律中の部門又は章目。

けん-と 【接】けんとの訛。松風村雨束帶鑑「皆一口は食ふけんど、あとから剝げる生壁の、釘ごたへせぬ續ぞかし」

げん-と 玄菟【名】つき(月)の異稱。

げん-と 玄菟【名】〔地〕支那漢の武帝の元封三年に、朝鮮を征して、新に置きし四郡の一。今の咸鏡道の地。高句麗(クワウ)の强盛に赴くに從ひ、蠶食併合せられて、つひにその名絕ゆ。

げん-と 限度【名】度あひを限ること、又限りたる度あひ。極度。極限。

けん-とう 兼統【名】かれとこれとを兼ねて統ぶること。

けん-とう 乾統【名】『けんだう(乾道)を見よ』天皇の系統。

けん-とう 健鬪【名】したたか鬪ふこと。

けん-とう 拳鬪【名】『英 Boxing 又 Pugilism』前者は、現今も行はるるものにて、法律上一定の制限ありて、鬪技者には必ず手に革袋を著けしめ、後者は角鬪するものにて、慘害多かりしより、十九世紀の半頃より、法律により禁止せらるる』拳(コブシ)にて攻擊し、また防禦する術。我が國の柔術に類し、兩手に一種の革袋をはむ。ギリシヤに起り、中世以後英吉利にて流行せり。

けん-とう 軒燈【名】軒にかかぐる燈火。

けん-とう 獻燈【名】神社・佛閣に燈明を奉納すること、又その燈明。

けん-とう 軒簷【名】高くのぼること。

けん-とう 堅凍【名】かたくこほること。

けん-とう 肩頭【名】かたさき(肩先)に同じ。

けん-とう 劒頭【名】■劒のかしら。きっさき。■劒の先の形に似たる兜(カブト)の前立(マヘタテ)。「訛。

けん-どう 堅貪【名】けんどん(慳貪)■■の

げん-どう 玄冬【名】『玄は黑にて冬の象。

げんえい(玄英)**げんぶ**(玄武)參照』ふゆ(冬)

の異稱。(青春・朱夏・白秋に對して)

玄冬素雪【句】冬の極めて寒きことの形容。 *楠統天皇歐軍法*「玄冬素雪の冬の夜は、我が身を以て、衾を暖め」

げんとう 嚴冬【名】冬のことに寒きころ。嚴寒の時候。「つ。

げんとう 舷頭【名】ふなばた。「舷頭に立

げんとう 原頭【名】はらのほとり。原上。

げんとう 現董【名】『董はただす意、即ち管理の意』現在の住職。現住。

げんとう 舷燈【名】『英 Side lamp』船燈の一。汽船及び帆船の航行中、その進み行く方向を他船に知らしむるために、兩舷の外側に掲ぐる燈火。右舷のは綠色、左舷のは紅色。甲種・乙種の別ありて、大さを異にし、前者は總噸數四十噸以上の汽船及び二十噸以上の帆船に用ひ、後者は總噸數四十噸未滿の汽船に用ふ。**りゃうしょくとう**(兩色燈)參照。

げんとう 減等【名】等級を減じ下すこと。

げんとう 幻燈【名】■『英 Magic lantern』西洋風のうつしゑ。小さき硝子板の映畫を、强き燈火と凸レンズとの間に置き、圖形を擴大して、幕・紙・壁上等に映ぜしむるもの。**うつしゑ**(映繪)參照。■**げんとうきかい**(幻燈機械)の略。

げんとう 言動【名】言語と擧動と。言行。

げんとう 原動【名】運動を起すもと。活動の根原。

げんとう 玄同【名】『文中子に「無レ所レ樂、無所レ苦、無所レ喜、無レ所レ怒、萬物玄同」とあるに本づく』玄妙にして、彼我の差別なく、すべて混同すること。

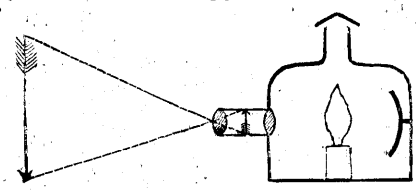
げんとう 幻動【名】〔哲〕運動の幻覺。自ら動かずして動けるが如く感じ、また人に動かされずして動かさるるがごとく感ずること。「人。

げんとうか 拳鬪家【名】拳鬪を巧にする

げんとうき 幻燈器【名】**げんとうきかい**(幻燈機械)に同じ。

げんとうき 原動機【名】『英 Prime mover』原動力(一)の狹義なるもの、機械的エネルギイに變ぜしむべき機械的裝置、即ち汽機・瓦斯發動機・石油發動機・電動機・水車・風車などの類。

げんとうきかい 幻燈機械【名】幻燈を映出せしむる裝置ある機械。箱の中の燈火を、反射鏡により、一方に取附けたる伸縮自在なる二箇の凸レンズと、その中間に置かれたる硝子板に描ける繪畫(或は硝子板フイルム等に燒付けたる寫眞陽畫)とを通過せしめ、繪畫と衝立(スクリーン)又は幕とを、レンズに對して共に焦點となるやうに裝置せる機械。西曆一六六五年獨逸人キルヘル(A. Kircher)の創製に係り、漸次改良せられて、今日に至れり。**げんとうくわい 幻燈會**【名】幻燈を映して、多くの人に見しむる會合。「術。



(いかきうとんげ)

げんとうじゅつ 拳鬪術【名】拳鬪をなすこと。

げんとうちんじん 玄同陳人【名】〔人〕たきさはきん(瀧澤馬琴)の雅號。

げんとうはうげん 玄同放言【名】〔書〕『**げんとう**(玄同)を見よ』見聞したる種種の事がらにつき、諸書を引用して、詳かに考證したる隨筆。瀧澤馬琴の著。

げんとうりょく 原動力【名】■〔理〕『英 Prime motive power』廣義にては、宇宙間に存在するすべての天然エネルギイ、狹義にては、原動機に入りて、機械的エネルギイに變じ得べき天然エネルギイに變ずる主なるものは、燃燒熱・水力・風力など、發電機を回轉すべき汽機軸の力エネルギイ、或は電動機を回轉すべき發電機の電力の如きは、原動機を通じて、すでに一たび變化したるものにて、天然エネルギイならざるが故に、原動力に非ず、また風力も、その源は太陽の熱に在れども、かかる場合の太陽熱も、原動力とは稱すべからず、太陽熱を集めて、汽罐の水を蒸發せしめ、以て汽機を運轉せしむるが如き場合にして、始めて太陽熱が原動力たるなり。**どうりょく**(動力)參照。■事物の活動を起す力。

げんとく 見德【名】**けんとく**(富籤)に同じ。

げんとく 謙德【名】謙遜なるおこなひ。

げんとく 乾德【名】『**けんだう**(乾道)を見よ』天子の御德。(坤德に對して)

げんとく 賢德【名】賢明なる德。 曾我扇

げんとく 儉德【名】身をつづまやかにすること。

げんとく 建德【名】後龜山天皇の御代の年號(紀元二〇三〇年—二〇三一年)。

げんとく 見毒【名】〔佛〕邪見のために、心身を害毒すること。

げんとく 驗得・驗德【名】加持祈禱などによりて、種種の靈驗・奇特を作し得ること。 大藝淨藏定額は、千手陀羅尼の驗得かうぶりたまへる人なり」

げんとく 玄德【名】■奥ふかき德。玄妙なる功德(クヮ)。■天地の玄妙なる理。奧深き眞理。■**げんかん**(下男)を云ふ。〔加賀國の方言〕

げんとく 玄德【名】〔人〕**りうび**(劉備)に同じ。 川中島合戰「仁は玄德、智は孔明」

げんとく 元德【名】〔哲〕**しゅとく**(主德)に同じ。

げんとく 元德【名】後醍醐天皇の御代の年號(紀元一九八九年—一九九〇年)。

げんとくうり 見德賣【名】富籤(クヂ)を賣ること、又その人。

げんとくかひ 見德買【名】富籤(クヂ)を買ふこと、又その人。

げんとくこう 謙德公【名】〔人〕**ふぢはらこれただ**(藤原伊尹)の諡(オクリナ)。

げんとくよ 權德輿【名】〔人〕支那唐の文章家。字は載之。官、累進して刑部尚書に至り、出でて山南西道節度使となり、元和十三年歿す。年六十。左僕射を贈られ、文と諡せらる。

げんとし 玄圃【名】ケント紙(Kent)州より産出する優良なる厚紙。白色リンネル及び木綿の上等破布を原料とし、手漉(テスキ)法により製したるもの。純白にして、光澤を附せず、圖畫用紙として、廣く世界各國に需要せらる。横十九インチ四分一・縱二十四インチ、Kentの文字を漉入れあり。けんと。

げんとだん 玄都壇【名】『だん(壇)(二)を見よ』支那漢の武帝が、長安なる終南山の子午谷中に築きし壇。

けんどちょうらい 捲土重來【句】**けんど**(捲土)の條下を見よ。

げんとどく 源都督【名】〔人〕**みなもとつねのぶ**(源經信)に同じ。

けんとん 犬豚【名】■犬とぶたと。豚犬。■凡庸なる人の譬。

けんとん 絹緞【名】絹綢(チウヂウ)に似て、經絲(タテ)及び緯絲(ヨコ)の一層細く整齊なる織物。

けんどん 粢呑【名】あはせ取ること。幷呑。

けんどん 慳貪【名】■やぶさかにて、むさぼる心あること。■なさけ心なきこと。邪見・苛酷・無慈悲・無愛想。**つっけんどん**(突慳貪)參照。 盛衰記「文覺が所持刀は、人を切らんとにはあらず。放逸邪見の鬼神を切り、慳貪無道の魔緣を拂はんとなるべし」■容器の上下又は左右に設けたる溝により、開閉のたびに蓋又は戶を嵌(ハ)めはづすやう造れるもの、又その蓋又は戶。**けんどんぶた**。■「一杯ぎりにて、無愛想なる意」江戸時代に蕎麥(ソバ)・饂飩(ウンドン)・飯・酒などを、一杯づつに盛切(モリキ)りて、代りをすすめず、賣りしもの。今日の一膳飯屋の類。〔饂飩・見頓・喧鈍〕 長町女腹切「腹の立つた揚句ぢやに、けんどんを取りにやれ」

けんどんおよう 慳貪饂飩【名】『**けんどん**(慳貪)(四)を見よ』一杯づつ盛切りの饂飩。

けんどんぐづれ 慳貪頽【名】慳貪なる行爲のため、家運の傾くこと。 太閤記「財寶

集りたるを施さざれば、慳貪くづれとやらんにあふよしなり」

けんどん-ざい 慳貪罪【名】〔佛〕慳貪なる行爲ありしために受くといふ罪業(ザイ)。

けんどん-ざけ 慳貪酒【名】一杯づつ盛切(キリ)の酒。ぬざけ。

けんどん-じゃ 慳貪者【名】けんどんもの(慳貪者)に同じ。

けんどん-そば 慳貪蕎麥【名】次條の略。

けんどん-そばきり 慳貪蕎麥切【名】太平(ヘイ)椀に一杯づつ盛りて賣る蕎麥切。けんどんそば。

けんどんそば-や 慳貪蕎麥屋【名】慳貪蕎麥切をあきなふ家。けんどんや。

けんどんぢょうら 慳貪女郎。喧鈍女郎【名】『吉原の江戸町二丁目に仁右衞門といふ者の賣初めし慳貪蕎麥切(ソバキリ)の價五分なりしに本づくといふ。一說に、往來の人を呼ぶ聲の喧しく、局(ネヤ)女郎より劣りて見ゆとの意にて、喧鈍と呼べりと』揚代五分なる端女郎。また下等なる遊女。寛文二年の秋、はじめて吉原に出來たりといふ。けんどんよたか。〔江戸の語〕

けんどん-ならちゃ 慳貪奈良茶【名】一杯づつ盛切(キリ)の奈良茶。

けんどん-ばこ 慳貪箱【名】慳貪蕎麥などを入れて、戸外に持運ぶに用ふる箱。

けんどん-ぶた 慳貪蓋【名】㊀慳貪箱の蓋。はめこみぶた。かけはづしぶた。あげおとしぶた。

けんどん-ぶね 慳貪船【名】㊀慳貪女郎を乘せて、淫賣する船。㊁慳貪四をあきなふ船。

けんどん-べんたう 慳貪辨當【名】慳貪箱に入れたる辨當。

けんどん-めし 慳貪飯【名】一椀づつ椀に盛りて賣る飯。一膳飯(イチゼンメシ)。けんどん。

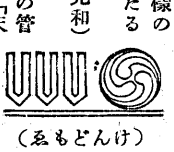
けんどん-もの 慳貪者【名】慳貪なる人。けんどんじゃ。釋迦如來誕生會、慈悲を知らぬ慳貪者が、この世へ生れて貧乏する」

けんどん-や 慳貪屋【名】慳貪蕎麥又は慳貪飯を賣る家、又その人。生玉心中「裏屋、背戸屋(セド)。けんどんや三界、かけ取りに歩くやうな」

けんどん-やらう 慳貪野郎【名】『けんどんぢょらう(慳貪女郎)を見よ』下等なる野郎(ヤラウ)。下等なる陰間(カゲマ)。

けんどんよたか 慳貪夜鷹。喧鈍夜鷹【名】けんどんぢょらう(慳貪女郎)に同じ。

けんどもゑ 劍巴【名】模樣の一。劍と巴とを併せ列べたるもの。下の圖を見よ。



(けんもどんけ)

げんな 元和【名】げんわ(元和)を見よ。

けんない 縣内【名】㊀縣の管轄内。㊁『禮記の王制の「天子之縣内」とある注に「縣内、夏時、天子所レ居州界名也。殷曰二畿内一」とあり。**けんくわん**(縣官)參照』支那にて、古、畿内の稱。

けんない 權内【名】權限の範圍内。(權外に對して)

けんない 圈内【名】範圍の内。(圈外に對して)

げんない 源内【名】〔人〕ひらがげんない(平賀源内)を見よ。

げんない-ぐし 源内櫛【名】平賀源内が初めて造りたる、伽羅(キャラ)の櫛。源内、長崎より歸りし時、多く伽羅を買ひ來りて造れるものにて、背を銀にて飾り、まづ吉原の名妓丁子屋の雛鶴をして用ひしめしより、大に流行せり。

げんなう 患惱【名】〔佛〕煩惱(ボンナウ)のために、心身を苦しむること。

けんなく 見惑【名】けんわく(見惑)を見よ。

けんなは 間繩【名】田畑を測量し、又は播種もしくは苗株の移植に際し、その植附距離を整ふるに用ふる、麻・棕櫚又は藁の繩。一間ごとに、數字を記せる小さき革などの札を附け、長さ五十間を普通とす。

けんなふ 檢納【名】檢査して納入すること。畜牧。

けんなふ 獻納【名】㊀さしあげたてまつること。獻上。奉納。㊁建議。建白。進言。㊂だいなごん(大納言)の唐名。

げんなま 現生【名】物品を以てせず、貨幣のままなるもの。なま。現金。正金。

けんなん 劍南【名】㊀〔地〕『劍閣の南の意。けんかく(劍閣)參照』支那唐の太宗の時、全國を十道に分ちたる一。蜀道。㊁〔人〕『陸遊、蜀に留まる十年、その風土を樂しみしよりいふ』りくいう(陸遊)の異稱。

けんなん 劍難【名】刀物の災難。女殺油地獄「この世こそ劍難の苦はありとも、未來は諸の業苦を除き」

けんなん 嶮難。險難【名】㊀險阻なる難所。險阻。㊁苦しみなやむこと。

けんなん-しかう 劍南詩稿【名】〔書〕『けんなん(劍南)㊁を見よ』支那宋の陸遊の詩集。八十五卷。

げんなり【副】㊀意氣の沮喪(ソサウ)したるさま。うんざり。丹波與作「こちやげんなりとなる程、八奴はいきって、馬を取ったとしがみつく」㊁物に食ひ飽きたるさま。

げんに 現に【副】あらはに。めのまへに。現在。參考「げんにあることならばこそとり申さざらめ」

けんにち 兼日【名】けんじつ(兼日)に同じ。

げんにち 元日【名】ぐわんじつ(元日)に同じ。「古の僧家の語」名目抄「元日宴(グワンエン)今世諸人以レ僧爲レ師、受僧云二元日(ガンジツ)一故爲レ誡レ之註レ之」

けんによらい 見二如來【名】〔佛〕『法華經の見寶塔品に「爾時見下二如來在二七寶塔中師子座上一結跏趺坐上とあるに本づく』多寶・釋迦の兩如來の、多寶塔中に坐せるを見し故事。(歌題などにいふ)

けんにん 兼任【名】二つ以上の職に、兼ね任ぜらるること。兼務。

けんにん 堅忍【名】かたくこらへ忍ぶこと。がまんづよきこと。「に同じ。

けんにん 賢人【名】〔佛〕けんじゃ(賢者)(二)に同じ。

けんにん 檢認【名】〔法〕檢査して、認定又は認證すること。「遺言書の檢認」

けんにん 建仁【名】土御門天皇の御代の年號(紀元一八六一年—一八六三年)。

げんにん 元仁【名】後堀河天皇の御代の年號(紀元一八八四年)。

げんにん 現任・見任【名】現在任ぜられてあること、又その官。

げんにん 還任・元任【名】舊官(キウクワン)に復すること。復官。

げんにん-くぎゃう 現任公卿【名】左右大臣・內大臣・大中納言及び參議の總稱。

けんにん-こく 兼任國【名】或國に駐在する外交官が、その本職外に、他國に駐在すべき職務を兼任する場合、その兼任の國。

けんにん-じ 建仁寺【名】㊀京都縄手通四條建仁寺町にある臨濟宗の寺。五山の第三位。建仁寺派の大本山。東山建仁禪寺と稱す。建仁三年源頼朝の建立。我が國禪寺の最初。開祖は榮西。關ケ原の役、西軍に屬して、徳川幕府に忌まれ、昔日の隆盛に及ばざるに至れりといふ。㊁けんにんじがき(建仁寺垣)の略。

けんにんじ-かいざんき 建仁寺開山忌【名】えいさいき(榮西忌)に同じ。

けんにんじがき 建仁寺垣【名】『京都の建仁寺にて、初めて、この竹垣を塀の代りとせしよりいふ』六尺の割竹を、皮を外にして、平たく並べ、竹の押緣(オサヘブチ)を、三段横に取附け、繩にて結びたる垣。眞草の別あり。今は押緣五段横を普通とす。けんにんじ。

(きがじんにんけ)

けんにんじ-ぎれ 建仁寺切【名】古代切(コダイ)の一。地は、安樂庵と同じく綠色にて、唐草・唐花・蔓の立木にまとへるさまの模樣あるもの。

けんにんじは 建仁寺派【名】〔佛〕京都建仁寺を大本山とする臨濟宗の一派。榮西を祖とし、建仁寺の住職、その管長を兼ぬ。建

仁寺流。建仁門徒。千光派。

けんにん-しゃ 兼任者【名】兼任する人。

けんにん-しょ 兼任所【名】任地に在住する官吏が、その本職以外に、他所に在住すべき職務を兼任する場合、その兼任せる所。

けんにんじ-りゅう 建仁寺流【名】㊀**けんにんじほ**(建仁寺派)に同じ。㊁建築法の一派。僧榮西(建仁寺派の祖)の建仁寺構造の時創めしもの。榮西、支那に入るや、大工飛驒守某を伴ひ、かの國の白馬寺の構造を模せしめ、且つ二三の佛寺造營に與り、歸朝後、筑前に報恩寺・聖福寺、鎌倉に壽福寺、京都に建仁寺を造りしより、その流儀漸く弘まり、四天王流と相並びて、我が國建築史上の二大潮流をなすに至れり。

けんにん-ち 兼任地【名】任地に在住する官吏が、その本職以外に、他の土地に在住すべき職務を兼任する場合の、その兼任せる土地。

けんにん-もんと 建仁門徒【名】〔佛〕**けんにんじほ**(建仁寺派)に同じ。

げんにん-ろん 原人論【名】〔書〕『本書中、第一の斥迷執篇に、老子・孔子の說を排斥せるによりて察するに、當時大いに排佛を唱へし韓愈の說の淺薄なるを駁する意味にて、愈の作五原中の一篇なる原人の名を取りて命ぜしものなるべしといふ』華嚴の宗意を以て、吾人有情の生起を推究せしもの。斥迷執・斥偏淺・眞顯眞源・會通本末の四篇に分つ。一卷。支那唐の終南山草堂寺圭峯闍若沙門宗密の著。

けんによ 顯如【名】〔人〕眞宗の僧。本願寺第十一世。名は光佐。證如の長子。門跡に任ぜらる。當時本願寺は大阪にあり、織田信長と戰ふこと十餘年間、勅命に由りて、遂に城を信長に致す。文祿元年寂す。年五十。

けんによ 【名】**けんよ**(權輿)の訛とも、**けんね**(懸念)の訛ともいふ。次條參照。

けんによもなし 【句】思ひがけなし。けもなし。とはうもなし。〔江戸時代の大阪の語〕『日本武尊吾妻鑑』「手の腹に、指でほの字を知らすれば、なふ興がれや都人、しるしほもない身をとらへ、そんなけんによはない事と」

けんによ 賢女【名】**けんぢょ**(賢女)に同じ。

けんね 懸念【名】**けねん**(懸念)に同じ。謠草「無二懸念一、ケンネモナシ。思ひがけなきなり」

げんね 【名】遺憾なること。心のこりなること。〔薩摩國鹿兒島の方言〕

けんね 【名】德川時代に行はれし賭博(カケ)の一種。丹波與作「けんねじついて、錢儲(ゼニマ)する美しさ」

けんねじちやうじ 劍捻丁子【名】紋所の一。三箇の丁子頭の間に、三箇の劍先を配りたるもの。

けんねん 兼年【名】幾年にもわたること。幾年にも跨ること。

けんねん 懸念【名】**けねん**(懸念)に同じ。

げんねん 儼然【貌】**げんぜん**(儼然)に同じ。運歩色葉集「儼然、ゲンネン」

けんねん-じ 建仁寺【名】**けんにんじ**(建仁寺)㊁の轉訛。

けんねんじ-がき 建仁寺垣【名】**けんにんじがき**(建仁寺垣)の轉訛。

げんねんど 現年度【名】現在の會計年度又は事業年度。(過年度に對して)

げんねんど-しゅつ 現年度支出【名】現會計年度に屬する經費を、現會計年度に支出すること。(過年度支出に對して)

げんねん-やく 還年藥【名】〔佛〕老人の少壯に還るを得るといふ藥。

けんのう 賢能【名】㊀賢くして、才能あること、又その人。㊁賢人と技能者と。

けんのう 權能【名】〔法〕**けんりのうりょく**(權利能力)に同じ。

げんのう 玄翁・玄應・玄能【名】**げんをう**(玄翁)を見よ。

げんのう-わり 玄能割【名】**げんをわり**(玄翁割)に同じ。

げんのう-しょうこ 牛皮消【名】〔植〕『藥用として、効驗顯著なりとて、現の證據の意にて名づく』**ふうろさう**(牛皮消苗)に同じ。

げんのう 玄翁・玄應・玄能【名】**げんをう**(玄翁)を見よ。

げんのうわり 玄能割【名】**げんをわり**(玄翁割)に同じ。

げんのーしょうこ 牛皮消【名】〔植〕『藥用として、効驗顯著なりとて、現の證據の意にて名づく』**ふうろさう**(牛皮消苗)に同じ。

けんのひ 劍樋【名】刀の樋(ひ)の、劍形をなせるもの。義經記「金作(コガネ)の太刀の二尺七寸ありけるに、けんのひかきて、地肌心も及ばざるを」

けんのみ 劍呑【名】**けんつく**(劍突)に同じ。〔東京の俚語〕

けんのん 險難【名】あやふきこと。あやぶむこと。危險。

けんのん-がる 險難がる【動四自】危くおもふ。あぶながる。あやぶむ。

けんのん-しやう 險難性【名】けんのんがる性質。臆病。

けんば 犬馬【名】㊀いぬと、うまと。㊁自己に關する物事の謙稱。

犬馬の心【句】『史記の三王世家に「臣竊不レ勝二犬馬心一、漢書の汲黯傳に「常有二犬馬之心一」とあり』君主のために、犬馬の勞を盡さんとする心。犬馬の情。

犬馬の情(ジャウ)【句】前條に同じ。

犬馬の年【句】「犬馬の齡」に同じ。

犬馬の養(ナシ)【句】『論語の爲政篇に「今之孝者、是謂二能養一、至二犬馬一皆能有レ養、不レ敬何以別乎」とあるに本づく』親を養ふに、口腹を滿たすのみにて、敬愛の意なきこと。

犬馬の齡(ヨハヒ)【句】『「犬の年よりたるやう」を見よ』自己の年齡の謙稱。犬馬の年。馬齡。馬齒。

犬馬の勞【句】他人のためにはたらくことの謙稱。

けんば 劍橫・劍把【名】つるぎのつか。

げんば 現場【名】㊀物事の現在行はれ、又は行はれたるその場所。物事の現に存在し、又は存在したるその場所。げんぢやう。㊁めのまへの容子。まのあたり。實地。㊂(商)**おきどりひき**(直取引)に同じ。〔取引所の語〕

げんば 玄蕃【名】㊀**げんばれう**(玄蕃寮)の略。㊁玄蕃寮に屬する官職、又その官職の人。僧尼講師・讀師のさきに式部・兵部・玄蕃など、左右に列ひきてあゆみつづきたり』㊂**げんばをけ**(玄蕃桶)の略。㊃**げんばいし**(玄蕃石)の略。

けんばい 犬吠【名】犬のほゆること、又その聲。狗吠。〔こと。

けんばい 檢徽【名】徽毒の有無を檢すること。

けんばい 見敗【名】**しちりけっかい**(七里結界)を見よ。

見敗を振る【句】見敗の咒文を唱へて、惡魔を拂ふ。

けんばい 勸盃【名】盃をさして人に勸むること。くゎんばい。增鏡「太政大臣も三日がほどは猶ひ給ふ。上達部に勸盃あり」建武年中行事「殿上の淵酵あり。…、極臈の藏人、勸盃すれば」〔語。

けんばい 倦憊【名】うみつかること。倦疲。

けんばい-い 檢徽醫【名】檢徽をなす醫師。

けんばい-し 女蕃石【名】敗石又は溝の蓋などに用ふるために、扁平・長方形に切出したる石。花崗岩・安山岩に多し。げんば。

けんばい-らく 傾杯樂【名】**げいはいらく**(傾杯樂)の訛。謠曲(放生川)「うかびて見ゆる盃の傾杯樂(ケンパイラク)を舞はうよ」

けんばい-みん 檢徽院【名】醫妓・密賣婦などの檢徽をなす病院。

けんばう 兼房・憲房【名】**けんぼうぞめ**(兼房染)の略。戀八卦柱曆「白むく一重、兼房に、裾模樣ある盧に驚」

けんばう 賢髦【名】すぐれたる士。俊髦。

けんばう 劍鋩【名】劍のきっさき。劍鋒。

けんばう 嫌謗【名】きらひそしること。

けんばう 健忘【名】能く物わすれすること。記憶力の弱きこと。善忘。「と。

けんばう 兼包【名】あはせて包有すること。

けんばう 建保【名】順德天皇の御代の年號(紀元一八七三年—一八七八年)。

げんばう 玄昉【名】〔人〕南都興福寺の住僧。俗姓は阿刀。義淵に就きて、唯識を究む。靈龜二年勅を奉じて、唐に入り、法相宗の深奧を究めて還り、重く朝廷に用ひられ、藤原廣嗣と隙を生ず。後、太宰府に逐はれ、天平十八年筑紫觀音寺落慶の導師となり、俄に寂す。

げん-ばう 言貌【名】ことばつきと、やうすと。言語と容貌と。音容(オン)。

げん-ばう 嚴貌【名】いかめしき容貌。嚴容。威容。

げん-ばう 現報【名】〔佛〕三時業(サンジ)の一。現世に業(カ)を作り、因りて、現世にその果報を受くること。順現受業。今當无道に法花の持者を捕へて縛り打ち責めたるによりて、忽に現報を感ぜるなり」

げんばう-ぎん 元寶銀【名】ばていぎん(馬蹄銀)に同じ。

げんばう-こもん 兼房小紋憲房小紋【名】げんぱふこもん(憲法小紋)に同じ。世間母親容氣「つぎのあたりし古小袖、憲房小紋も七度ばかり目をかへしたるはげやう」浮世風呂「澁紙へ兼房小紋をおいたといふ面(カオ)で、口ばかりむぐむぐしたって」

げんばう-しやう 健忘症【名】記憶力の減退する病症。忘却症。

げんばう-ぞめ 兼房染憲房染【名】げんぱふぞめ(憲法染)に同じ。

げんぱき 兼波器【名】〔理〕『英 Wave-detector』電氣波の到達を檢知する器械。様式種種あり、コヒラアもその一。

げんぱき 現波機【名】〔理〕『英 Undulator』波形の電信符號を現出する受信機。海底電線用に用ふ。「同じ。

げん-ばく 卷柏【名】〔植〕いはひば(卷柏)に同じ。

げん-ばく 臥陌【名】田と田との間のみち。

げん-ばく 儉薄【名】儉約にして、自己に薄きこと。儉素。

げん-ばく 建白【名】㊀『意見を建てて白(ノ)す意』政府などに對して、己が意見を申し立つること。建言。㊁けんぱくしよ(建白書)の略。

けん-ばく 堅白【名】㊀『論語の陽貨篇に「子曰…不レ曰レ堅乎、磨而不レ磷、不レ曰レ白乎、涅而不レ緇」とあるに本づく』他の誘惑を受けず、自己の堅實と潔白とを維持すること。㊁次條の略。

堅白同異【句】次條に同じ。

堅白同異の辯【句】㊀『堅白は堅と白とを分別して考ふる義、同異は、異なる物を同じとし、同じき物を異なりと論ずる義』支那戰國時代に、公孫龍が說きし一種の詭辯。例へば堅く白き石あり。これを目にて見れば、白きを見るのみにて、堅きを知らず、ただその色によりて、白石と呼び、また手を觸れたる時は、堅きを知るのみにて、白きを知らず、ただその値によりて、堅石と呼ぶ。故に堅と白とは異にして、堅石と白石とは同一のものにあらず、と說ける類。また白馬に就きても、同樣の論法を用ひて說きたるより、合せて堅石白馬の論ともいふ。是を非とし、非を是とする、牽强の論。

げん-ばく 元白【名】〔人〕元稹と白樂天と。

げんばく 元伯【名】『元伯といふ法師、酒に醉ひて、屢嘔吐せしよりいふ』酒に醉ひて嘔吐すること。〔江戸時代の語〕

けんばく-くわ 卷柏科【名】〔植〕いはひばく(卷柏科)に同じ。

けんばく-しよ 建白書【名】建白の旨意を書きたる書面。

げんばく-なす 玄白茄子【名】むかし江戸本所砂村邊より產出せし茄子。味美ならず。

げんばく-ぐわん 牽馬丸【名】いにしへ用ひし丸藥の名。和名、牽馬丸、病家、常牽レ馬買レ之、故以名レ之」

げんばく-ざる 玄蕃猿【名】木にて、猿の形を作りたる玩具。德川時代に、有馬玄蕃頭、即ち久留米侯の屋敷の下人の造り出でしものといふ。

げんぱし 現波紙【名】『英 Recording paper』現波機・サイフォンコオダア等に現出する波狀の電信符號を記す紙。幅五分ばかりにして、漉目・繼目なく、表面平滑なり。

げんばち 源八【名】㊀〔人〕金工。加賀國金澤の人。父の好榮は後藤演乘の門人。源八また父に學びて、名工の名あり。㊁〔地〕大阪の郊外、天滿橋の上流の渡船場。今の北區川崎町とその對岸なる櫻宮(サクラ)停車場との間を往復するもの。蕪村「源八を渡れば梅のあるじかな」

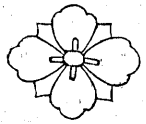
げん-ばつ 譴罰【名】罪をせめ罰すること。譴責・處罰。

けん-ばつ 圈發【名】漢字の四隅を示すために、その四隅に施す圈點。平聲は□、上聲は□、去聲は□、入聲は□。點發。

けん-ばつ 遣發【名】人をつかはすこと。差遣。派遣。「又その罰。

げん-ばつ 嚴罰【名】きびしく罰すること、又は貴族院と衆議院との間などに於ける、憲法解釋の爭議。

けん-はなびし 劍花菱【名】紋所の一。下の圖を見よ。



(しびなはんけ)

げんば-の-かみ 玄蕃頭【名】玄蕃寮の長官。

げんば-の-さくわん 玄蕃屬【名】玄蕃寮の主典。大と少とあり。

げんば-の-じよう 玄蕃允【名】玄蕃寮の判官。大と少とあり。「官。

げんば-の-すけ 玄蕃助【名】玄蕃寮の次官(玄蕃寮)に同じ。

げんば-の-つかさ 玄蕃寮【名】げんばれう

げんばばいばい 現場賣買【名】〔商〕受渡をなすべき商品の、現在する場所にて行ふ賣買。

けん-ばふ 劍法【名】けんじゆつ(劍術)に同じ。

けん-ばふ 拳法【名】拳(シフ)を以て、人と搏闘する技術。拳闘の方法。

けん-ばふ 憲法【名】㊀おきて。のり。法憲。㊁〔法〕『英 Constitution』國權の本體と行政の大綱とを規定したるもの、即ち國家の組織及び作用に關する根本法規。根本法。㊂だいにっぽんていこくけんぱふ(大日本帝國憲法)の略。

げん-ばふ 減法【名】〔數〕小さき數を、大なる數より引去りて、殘りの數を見出だす算法。その殘りたる數を、殘餘又は差といふ。げんざん。ひきざん。(加法に對して)

げん-ばふ 嚴法【名】嚴重なるおきて。

けんばふ-がく 憲法學【名】〔法〕憲法の法理を研究する學。

けんばふ-ぎかい 憲法義解【名】〔書〕ていこくけんぱふぎかい(帝國憲法義解)の略。

けんばふ-きくわん 憲法機關【名】憲法に基づきて設けられたる國家の機關、即ち攝政・帝國議會・國務大臣・樞密院・裁判所・會計檢査院等の總稱。

けんばふ-こもん 憲法小紋【名】憲法染の小紋。兼房小紋。けんぱふぞめ(憲法染)參照。

けんばふ-さうぎ 憲法爭議【名】〔法〕『獨 Verfassungskonflikt』國家の一の機關と他の機關との間、例へば政府と帝國議會と、又は貴族院と衆議院との間などに於ける、憲法解釋の爭議。

けんばふ-さん 權法散【名】昔の藥の一。蠐螬(サイソウ)を乾して、細末にしたるもの。矢の根などの深く身體に刺さりて脫難きに、特効ありといふ。武田信玄の臣高坂彈正の家の祕法といふ。

けんばふ-じかう 憲法事項【名】〔法〕憲法に規定すべき事項。例へば統治權の所在、國家機關の組織・權限等に關する大原則の類。(大權事項・立法事項等に對して)

けんばふ-じふしちでう 憲法十七條【名】推古天皇の十二年四月、聖德太子の執筆撰定せし十七箇條の制法。佛敎思想を基本とし、儒敎・神道をも加味して、君臣の道を明らかにし、各人の則るべき道德律を示せるもの。大化の改新も、その趣旨を敷衍(フエ)せるに外ならず。

けんばふ-ぞめ 憲法染【名】明曆・萬治の頃、京都西洞院(ニシノトウイン)四條の人吉岡憲法(憲房・兼房・建法などさまざまに書けり)の考案せりといふ、黑茶色に小紋を染出だせる模樣。後には、下等の灰汁を用ひて染めしといふ。よしをかぞめ。兼房染。

けんばふ-とりしらべ-きよく 憲法取調局【名】明治九年元老院内に置きて、憲法を調査せしめし所。

けんばふ-とりしらべ-じよ 憲法取調所【名】明治十六年十一月參事院内に設けて、憲法の審議・立案を掌らしめし所。同十七年三月廢せられたり。

けんばふはつぷ-きねんしやう 憲法發布記念章【名】だいにっぽんけんぱふはつぷきねんしやう(大日本憲法發布記念章)の略。

けんばふ-ひ 憲法費【名】〔法〕國家の經費中、君主・議會等、國家成立の要素たる基本

機關の經費。

けんぱふ-ふぞく-はふれい 憲法附屬法令【名】〔法〕『明治二十三年改正の樞密院官制第六條にある「憲法に附屬する法律勅令」とある語を約めたるもの』大日本帝國憲法に附屬する法令。いかなる法令をさしていふべきかにつきては、種種議論ありしが結果、憲法に法律又は勅令の名稱・題號を明記したるもの、即ち議院法・選舉法・貴族院令・樞密院官制を包含せしむることとなり、これらに關する草案と疑義とは、樞密院に諮詢せらるべしと定められたり。

けんぱふ-りう 憲法流【名】劍法の一派。吉岡憲法を祖とす。

けんぱふ-ねはん 憲法違犯【名】『英 Unconstitutional act』國務大臣の責任事項の一。即ち國務大臣の行爲が、憲法の規定に違犯すること。違憲。

けん-ばん 見番・檢番【名】㊀藝者屋の取締をするところ。役員・手代等の職員ありて、藝妓に口のかかる時は、先づここにて取次ぎ、藝妓の送迎・玉代の精算等をなす。㊁**けんばんげいしや**(見番藝者)の略。會所。

けんばん 見盤【名】舊時、鑛山の坑內測量に使用せし羅針盤。

けんばん 鍵盤【名】㊀『英 Key-board』鍵樂器(ケンガク)の鍵(ケン)の排列面。㊁タイプライタアにて印字の際、指にて押す部分。

けんぱん 軒帆【名】車と船と。

けんぱん 嶮阪・險坂【名】けはしきさか。峻阪。

げんぱん 元版【名】支那元朝の時代に出版したる書籍。

げんぱん 原版【名】㊀もとの印刷版。(紙型刷に對して)㊁**しよはん**(初版)に同じ。㊂出版物の、重版飜刻などならぬもの。

げんぱん 原板【名】寫眞の乾板・濕板又はフヰルム等の現像定著を了りて、出來上りたるもの。たねいた。

げん-ぱん 原犯【名】〔法〕二度以上の犯罪に對して、最初の犯罪の稱。

けんばん-げいしや 見番藝者・檢番藝者【名】檢番に抱へ付けの藝者。主として技藝に熟達したるものを選ぶ。けんばん。

げんぱん-けつ 原判決【名】〔法〕**げんさいばん**(原裁判)に同じ。

けん-はんしや 腱反射【名】〔醫〕『獨 Sehnenreflex』腱の器械的刺戟によりて起る筋の攣縮。

げん-はんちやう 舷反張【名】『英 Sheer』船を側面より見て、上甲板の舷が作る曲線。

げん-はり 現張【名】〔商〕當日後場(ゴバ)になしたる定期賣買を、翌日本場(ホンバ)にて轉賣・買戻をなすこと、即ち本證據金の納付期間內にて、賣買の轉賣・買戻をなすこと。〔取引所の語〕

げんばれう 玄蕃寮【名】『玄は遠、蕃は外蕃の義』古、治部省の管下に屬し、鴻臚館(コウロクワン)を監し、外國に關する事柄、並びに寺院・僧尼の名等を取扱ひし役所。寮頭・助・大少允・大少屬の職員を置く。ほうしまらびとのつかさ。

げんば-わたし 現場渡【名】〔商〕『英 Ospra or 又 Spot delivery』取引せる商品を、その所在地にて引渡すこと。(甲板渡・倉庫渡・停車場渡・貨車渡・波止場渡・艀(ハシ)渡・船腹(フナバラ)渡等に對して)

げんば-をけ 玄蕃桶【名】江戸時代に、火災の時などに水を運びたる大なる荷桶(ニナヒオケ)。げんばを。

けん-び 兼備【名】二つ以上の物事の、同時に備はりてあること。かねそなはりて、不足せぬこと。

けん-び 犬鼻【名】惡しき柿の實の異稱。下學集、犬鼻、ケンビ。惡柿異名也」

けん-び 權扉【名】かりの扉。「蒼生を利せんがために、三身の金容をあらはして、三所の權扉を押し開きたまへり」

けん-び 【名】**けんぴん**(卷餅)に同じ。

けん-び 縣費【名】縣の經費。

けん-び 建碑【名】石碑を建つること。

けん-び 賢妃【名】かしこき后妃。

けん-び 賢否【名】賢きと賢からざると。けんぷ。賢愚。

けん-び 顯否【名】あらはるると顯はれざると。人に知らるると知られざると。榮枯窮達。

けん-び 犬皮【名】犬の皮。浮世床「皮の性が悪いから、犬皮の三味線となつては」

けん-び 拳匪【名】**ぎわだん**(義和團)を見よ。

けん-び 倦疲【名】うみつかるること。倦憊。

げん-び 玄微【名】幽玄にして、微妙なること。

げん-び 原微【名】發達の度低く、極めて微小なること。

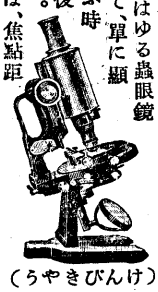
げん-び 元妃【名】妃(キサキ)の中の、最も位高きもの。おほきさき。正妃。太平記「忽に准后の宣旨を下されしかば、人みな皇后・元妃の思をなせり」

げん-び 原被【名】〔法〕原告と被告と。

けんびおんき 顯微音器【名】〔理〕『英 Microphone』極微の音を明瞭ならしむる器械。炭素が接點の壓力如何によりて、著しく電氣抵抗を變化する性を利用し、西曆一八七八年英人ヒユウズ(D. E. Hughes)の發明せるもの。電話の送話器も、これの改良せられたるものなり。微音器。

けん-びき 疾癖【名】**けんぺき**(疾癖)の轉訛。

けんびきやう 顯微鏡【名】『英 Microscope』極めて微細なる物を廓大せしめて見得るやうにする器。單顯微鏡と複顯微鏡とあり。前者は焦點距離の短き一箇の凸レンズにして、謂はゆる蟲眼鏡(ムシメガネ)にして、單に顯微鏡といふ時は、普通、後者をいふ。



(うやきびんけ)

その構造は、焦點距離短き對物レンズと對眼レンズとの二組の凸レンズを、金屬製の圓筒の兩端に插入し、兩者の距離は多少變じ得るやうに裝置し、對物レンズの前なる主焦點外に物體を置きて、その擴大なる實像(倒立)を作らしめ、これを更に擴大して見る。西曆一五九〇年和蘭人ヤンセン(Z. Janssen)の發明に係り、その後、幾多の改良を經たり。

けんびきやう-しやしん 顯微鏡寫眞【名】『英 Microphotography』顯微鏡にて廓大したる像を、撮影すること、又その寫眞。

けんびきやう-てき 顯微鏡的【貌】『英 Microscopic』顯微鏡の力を借るに非ざれば、見ること能はざるほどに微小なるさま。

けん-びし 劍菱【名】㊀紋所の一。菱形の四隅を、劍先の形に尖らせたるもの。㊁『その樽を包める蔦(モ)に、劍菱の紋を書けるよりいふ』攝津國伊丹(イタミ)產の上酒の銘。夢中の印斷「酒商賣の冥利だによって、劍菱一樽出して飮ませければ」

けんびしき 建碑式【名】建碑の儀式。

けんびせう 元祕抄【名】〔書〕和漢の年號および改元のことなどを、勘文の例を引きて、詳記せるもの。四卷。高辻長成の著。

けん-びつ 健筆【名】達者に文字を書くこと、又、達者に文章・詩歌を作ること。達筆。

げん-びつ 減筆【名】筆かずを省略すること。略筆。省筆。

けんびまき けんび卷【名】次條に同じ。

けん-びん 卷餅【名】『漢字の宋音』餅菓子の一。小麥の粉を水にて溶き、砂糖を入れて薄く伸ばし、平らなる銅鍋にて燒き、醬油を燒り、片端より卷きて、小口切にしたるもの。けんぴ。けんぴまき。

げん-ぴん 原品【名】もとのしなもの。原物(ゲンブツ)。

げんぴん 玄賓【名】〔人〕高僧。弓削(ユゲ)道鏡の一族。河內國の人。唯識を興福寺の宣教に受く。道鏡が帝に媚ぶるを憎み、伯耆國に隱る。光仁・桓武・平城三帝に尊信せらる。弘仁九年寂す。年八十餘。其角「玄賓を世に見るさまか千菜賣り」

げんぴん-ひかへちやう 現品控帳【名】〔商〕ありにちやう(在荷帳)に同じ。

げんぴん-やき 元鎭燒【名】尾張國名古屋より產ずる一種の陶器。萬治二年渡來せる、支那明末の亡臣陳元贇より傳授せられしもの。

けんびやう 硯屏・研屏【名】硯の上に立てて、風塵を防ぐ具。青磁・陶銅・唐木などにて造り、形、衝立(ツイタテ)に似て小さきもの。運歩色葉集「硯屏、ケンビヤウ」

けん-びやう 賢瓶【名】〔佛〕常にその中に

財寶を貯へ、他の所願に應じて、分頒滿足せしむといふ寶瓶。吉祥瓶。如意瓶。寶瓶。善瓶。有德瓶。德瓶。「に同じ。

けんぴやき けんぴ燒【名】**けんぴん**（卷餅）に同じ。

けんぴよう 懸氷・懸冰【名】つらら（氷柱）「つごほり。

けんぴょう 堅氷・堅冰【名】かたき氷。あ

けんびるゐ 劍尾類【名】〔動〕節足動物の一類。尾節細長くして銳く尖り、外形は甲殼類及び蜘蛛類に似、內部の構造は軟甲類に類し、分類上の所屬確定しがたし。兜蟹（カブトガニ）など、これに屬す。

けんびん-し 檢非違使【名】**けびゐし**（檢非違使）に同じ。〔源平盛衰記〕檢非違使、ケンビキシ」

けんぶ 劍舞【名】劍を抜き、詩吟につれて舞ふ舞。つるぎのまひ。

けんぷ 絹布【名】絹のおりもの。絹物。きぬ。

けんぷ 賢婦【名】かしこき婦人。「婦人。

けんぷ 賢父【名】かしこき父。

けんぷ 蠲符【名】古の賦役免除の文書。

けんぷ 還附【名】**くわんぷ**（還附）に同じ。〔源平盛衰記〕還附、ケンプ」

けんぷ 乾符【名】『あくふ（握符）を見よ』天子たる符（シルシ）。神器。〔盛衰記〕伏惟、初以二庸昧之身一、忝踏二皇王之位一、握二乾符一今」

げんぶ 玄武【名】**げんむ**（玄武）に同じ。

げんぷ 元符【名】大なる祥瑞。

げんぷ 嚴父【名】きびしき父。〔二〕自己の父の敬稱。家嚴。

けんぷう 檢封【名】〔一〕檢査して封印すること。〔二〕封印をあらたむること。

げんぷう 玄風【名】幽玄なる旨。玄妙なる宗風。〔太平記、式藝觀二業昔一、渺聞二玄風一、桓武皇帝下レ詔、專一基二叡山一者」

げんぶ-がん 玄武岩【名】〔鑛〕『英 Basalt 但馬國の玄武洞が、この岩石にて成れるによりて、この名を附す』火成岩の一。黑色緻密にして、全體均質なる石理を有し、外見、安山岩に類す。玻璃質の石基中に、主成分として斜長石・輝石・橄欖石等、副成分として雲母・角閃石等の珪晶を含めるものなれども、成分鑛物を認めがたきこと多し。又、柱狀節理を呈し、謂はゆる村木岩を作ることあり。我が國にては、山陰・山陽地方に多し。「同じ。

げんぶき 玄武族【名】**げんむぞく**（玄武族）に同じ。

げんぶく 元服【名】〔一〕『大人の冠や服を著くる意。元は頭首の義、冠を著くる意。元服を著くる意ともいふ』男子の成人したる祝の儀式、十五六歲頃に行ふを普通としたれど、或は十歲に滿たずして行ひ、還俗（ゲンゾク）の場合には、四十歲にして行へる例もあり。古は髮を理（ヲサ）め、冠を加へ、大人の服に改め、幼名を廢して、烏帽子名（エボシ）を附けしが、後世は、貴人の外は、略式として、前髮を剃るのみとなれり。うひかうぶり。えぼしはじめ。おげぶく。首服。始冠。冠禮。〔增鏡、建久元年正月三日、御年十一にて御元服したまふ」〔園姓爵合鑑〕月代（サカキ）剃って元服させ」〔二〕婦人嫁して後、眉を去り、齒を染め、丸髷に結びなどすること。今は殆と廢る。

はんげんぷく（半元服）參照。

げんぶく 衽服【名】はれの場所に出づる時に著るうるはしき衣服。はれぎ。

げんぶく-あたま 元服天窓【名】元服して、前髮を剃りたるあたま、又その人。〔江戸時代の京都・大阪の語〕〔園姓爵合鑑〕あっと答へて立出づる、小むつが髮の初元結、諸軍勢の元服あたま」

げんぶく-おや 元服親【名】**えぼしおや**（烏帽子親）に同じ。〔曾我〕北條が事は、助長がために元服親にて候へば」

げんぶく-ご 元服子【名】**えぼしご**（烏帽子）に同じ。〔曾我〕すなはち義時が元服子として後は、江馬の小次郎といひしは、すなはちこれなり」

げんぶく-しや 現福者【名】現に福德を授けたまふ神佛。靈驗のいちじるき神佛。松風村雨東帰鑑「浦島塚とて、壽命を守る現福者參の絕ゆることもなし」

げんぶく-そうぶぎやう 元服總奉行【名】**げんぶくぶぎやう**（元服奉行）を見よ。

げんぶく-そが 元服曾我【名】〔一〕謠曲の一。箱王（曾我五郎の幼名）の、箱根別當の許に出家せしめられんとせしを、兄なる十郎に連れだされて、道にて元服することを作れるもの。〔二〕吾妻（アヅマ）淨瑠璃の一。半太夫節に屬し、「松の葉」に載せたり。

げんぶく-な 元服名【名】**えぼしな**（烏帽子名）に同じ。

げんぶく-の-しだい 元服之次第【名】〔書〕武家の元服の有職（イウソク）故實を記せるもの。一卷。小笠原長時の撰。

げんぶく-ぶぎやう 元服奉行【名】鎌倉・室町兩幕府の職制の一。將軍家元服の時、庶事を統理するため、臨時に補せられしもの。室町幕府にては、元服總奉行と元服奉行二人とを補して、事を執行せしめたり。

げんぶく-よし 元服吉【名】昔の曆にて、元服によしとする日。〔文武五人男〕今日は大吉日、元服よしと候へば、將軍の御裝束、豫て用意仕る」〔曾我虎が塵〕花は時知る曆の日、元服よしは知らねども」

げんぶく-をとこ 元服男【名】元服したる男。〔曾我扇八景〕笠きぬ月に月代（サカキ）の影を並べし元服男」「賢婦。

けんぷじん 賢婦人【名】かしこき婦人。

けんぷつ 見物【名】〔一〕物を見ること。もの見。觀覽。〔心中宵庚申〕存分に自害めされ、見物せんとの一言に」〔二〕**けんぶつにん**（見物人）の略。〔素人狂言紋切形〕評判を聞いたり、見物の心持を窺って、心得を言はうといふものさ」

けんぷつ 見佛【名】〔佛〕〔一〕佛を見ること。〔二〕修行により、佛身を眼前に映出することを。凡夫二乘の分別の識を以て見る所を應身・菩薩の無分別の心を以て見る所を報身とし、宿緣なき者は、應身をも見ること能はざるものとす。梁塵「見佛聞法（ケブモン）の人人」〔三〕自己の佛性を悟りて、佛と一體無二となれること。

げんぶつ 驗佛【名】靈驗の著しき神佛。

げんぶつ 元物【名】〔法〕『佛 Chose originaire』天然果實を生ずる物。例へば果樹・乳牛・金坑・石坑の類。**げんぼん**（元本）〔二〕參照。「じ。

げんぶつ 原物【名】**げんぴん**（原品）に同

げんぶつ 現物【名】〔一〕まのあたりにある物。現在ある物。正物。〔二〕〔商〕實際の物品。取引所にては、賣買の目的に供せらるる公債證書・株券・米穀等の實物を、見本・銘柄（メイガラ）又は取引の先物（サキモノ）等に對していふ。〔三〕〔商〕**げんぶつばいばい**（現物賣買）の略。

けんぶつぞろもん 見物左衛門【名】〔一〕能（ノウ）の狂言の一。見物左衛門が賀茂の競馬・梁草祭より角力まで、見て辛き目に遇ひし次第を物語るもの。〔二〕志賀山流の舞踊の一。

げんぶつ-じや 驗佛者【名】**げんぶつ**（驗佛）に同じ。狂言「居杭」「石山の觀世音と云うて、驗佛者があるが」

けんぶつ-しゆう 見物衆【名】見物の人人。〔太平記〕爰に何者とは知らず、見物衆の中より、年十五六ばかりなる小兒」

げんぶつ-とりひき 現物取引【名】〔商〕〔一〕**げんぶつばいばい**（現物賣買）〔二〕に同じ。〔二〕取引所にて、即時物品の受渡を履行する賣買契約。現物賣買。（直（ヂ）取引・延（ベ）取引・定期取引等に對して）

げんぶつなかがひにん 現物仲買人【名】〔商〕公債・株券等のごとき現物をのみ取扱ふ仲買人。

けんぶつ-にん 見物人【名】見物する人。「んぶつ。

けんぶつ-ば 見物場【名】見物する場所。

げんぶつばいばい 現物賣買【名】〔商〕〔一〕元に商品を備へて、買主に直ちにその商品を引渡し得る賣買。現物取引。現物。（銘柄（メイガラ）賣買・標本賣買・先物（サキモノ）賣買に對して）「す批評。

げんぶつ-ひやう 見物評【名】見物人のなげんぶつ-や 現物屋【名】免許を受けずして、株式取引所の仲買人と同じく、株式の

仲買をなす家、又その人。

けんぷつ-れう 見物料【名】見物する料金。

けんぷつ-れん 見物連【名】見物の連中。けんれん。

げんぶ-どう 玄武洞【名】〔地〕『柴野栗山の命名。玄武は龜。洞の天井の形の龜に似たるに因る』但馬國城崎(キノサキ)郡田鶴野(タヅノ)村大字赤石にある名所。玄武岩より成る空洞。そのさま、數千の石柱を聯立したるが如き奇觀を呈す。

けん-ぶん 検分・見分【名】役人などの立合ひて檢査すること。みわけ。みとどけ。室町千疊敷、死骸檢分の上相違あれば、おのれ等きっと曲事なると」「けんもん。

けん-ぶん 見聞【名】見ると聞くと。みきき。

げん-ぶん 原文【名】改竄・添作又は飜譯せるものに對して、そのもとの文章。

げん-ぶん 言文【名】ことばと文章と。

げん-ぶん 諺文【名】おんもん(諺文)に同じ。

げんぶん 元文【名】櫻町天皇の御代の年號(紀元二三九六年―二四〇〇年)。

げんぶん-いちぶきん 元文一分金【名】次條に同じ。

げんぶん-いちぶばん 元文一分判【名】次

げんぶん-いちぶばんきん 元文一分判金【名】江戸幕府時代の通貨の一。元文元年より、文政元年まで、江戸幕府の鑄造發行せし一分判金。縱五分強・横三分強。背に文の字の刻印あり。古文字(コモジ)一分金。

げんぶん-いっち 言文一致【名】日常の談話する言葉と、文字に書きあらはす言葉とをなるべく一致せしむること、又その文體をなるべく一致せしむること。口語體。

げんぶんかめのどせん 元文龜井戸錢【名】江戸幕府時代の通貨の一。元文二年に、江戸龜井戸にて鑄造せし寶永銅錢。徑八分。

げんぶんきん 元文金【名】元文小判金と元文一分判金との總稱。古文字(コモジ)金。眞文字金。眞字金。

げんぶんぎん 元文銀【名】元文丁銀と元文豆板銀との總稱。文字銀。文銀。

げんぶんきんぎん 元文金銀【名】元文金と元文銀との總稱。

げんぶん-こばん 元文小判【名】次條の略。

げんぶん-こばんきん 元文小判金【名】江戸幕府時代の通貨の一。元文元年より文政元年まで、江戸幕府にて鑄造・發行せし小判金。縱二寸一分餘・横一寸一分餘。背に文の字の刻印あり。元文小判。

げんぶん-さじ 元文佐字【名】次條の略。

げんぶん-さじせん 元文佐字錢【名】江戸幕府時代の通貨の一。元文年間、佐渡國相川にて鑄造せし寶永銅錢。徑八分。背の上部に佐の字あり。

げん-ぶんし-せつ 原分子說【名】〔化〕原子說と分子說と。原子分子說。

げんぶん-せんじ 元文仙字【名】次條の略。

げんぶん-せんじせん 元文仙字錢【名】江戸幕府時代の通貨の一。元文二年陸奥國仙臺石卷(イシノマキ)にて鑄造せし寶永銅錢。徑八分、背の上部に仙の字あり。銅質、紫褐・淡黃・白の三種あり。

げんぶん-ちゅうぎん 元文丁銀【名】江戸幕府時代の通貨の一。元文元年により文政元年まで、江戸幕府の鑄造せし丁銀。縱二寸九分五厘・横一寸零五厘。百分中、凡そ銀四十六分・銅五十四分。

げんぶん-でんぱう 諺文電報【名】朝鮮語にて綴り、朝鮮内地相互にて發受する電報。おんもん電報。

げんぶん-まめいたぎん 【名】江戸幕府時代の通貨の一。元文元年より文政元年まで江戸幕府の鑄造せし豆板銀。縱六分・横九分强。百分中の銀と銅との比は前條のに同じ。

げんぶん-るゐ 元文類【名】〔書〕元代の名文を、四十三門に類集せしもの。七十卷、別に目錄三卷。支那元の蘇天爵の撰。

げん-ぶゆ 見不輸【名】王朝時代に、或期間中、例へば衞士(エジ)・仕丁(シチヤウ)等の役に服せる間、庸調の課役を免ぜられしこと。

げんぺ 【名】賭事(カケゴト)の一種。賽(サイ)を用ひて勝負す。

けん-ぺい 權柄【名】■■。權は秤の錘、柄は斧の柄』人の上に居る者の執る所、即ち生殺與奪の權。權力を有する地位。いきほひ。權勢。威勢。太平記『天下の權柄を捨てたまへること、年久しければ」■權威をふるまへること。横柄(ワウヘイ)。「領城反魂香『皆お廣間へ立ちませい立ちませいとの權柄さ」

權柄晴れて【句】おしきって立派に。天下晴れて。日本武尊吾妻鑑『娘は母につく所在地は東京。憲兵練習所、これに附屬す。

けんぺい-せいすゐき 源平盛衰記【名】〔書〕應保年中より壽永年中まで、二十餘年間における源平二氏の盛衰を、軍記體に記せるもの。その記事、平家物語と類似せる點多くして、文體はそれよりも漢語多く、記事も詳密なり。平家物語を增補したるものならんといふ。四十八卷。葉室(ハムロ)時長の作といへど、詳かならず。盛衰記。

けんぺい-そつ 憲兵卒【名】陸軍憲兵上等兵の稱。

けんぺい-たい 憲兵隊【名】各憲兵隊管區に一隊づつ配置せられ、憲兵の職務執行に從事する軍隊。數憲兵分隊より成り、憲兵隊長(陸軍中・少佐又は大尉)・憲兵隊副官(憲兵少佐又は大・中尉)・憲兵分隊長(陸軍大尉又は少尉)及び憲兵隊附士官・准士官・下士・上等兵の職員を置く。

けんぺい-たい-くわんく 憲兵隊管區【名】憲兵隊を全國に配置するために定めたる管區。一區毎に、一憲兵隊を置き、區内を數箇の憲兵分隊區に分つ。

けんぺい-たい-ほんぶ 憲兵隊本部【名】憲兵隊長の總理の下に、その事務を取扱ふ所。師團司令部の所在地に置く。

げんぺい-たう 源平桃【名】〔植〕げんぺいもも(源平桃)に同じ。

けんぺい-づく 權柄盡【名】權柄にまかせて、物をいひまた事を行ふこと。けんづく。けんぺいづけ。けんづけ。

けんぺい-づけ 權柄附【名】前條に同じ。

けんぺい-づら 權柄面【名】權柄がましき面つき。横柄(ワウヘイ)なる顏つき。

げん-ぺい-とう-きつ 源平藤橘【句】せい(四姓)を見よ。

げんぺい-ぬのびきのたき 源平布引瀧【名】淨瑠璃の一。並木千柳・三好松洛の合

作。源義朝の敗滅後、源氏の餘類の複雑なる事件を脚色せしもの。實盛の駒王丸を助け、白旗を全うする段(實盛物語の段)、及び多田藏人の清盛を刺さんと欲して、琵琶を抱いて、鳥羽の北殿に入り、見あらはさるる段(松波琵琶の段)、最も名高し。

げんぺいまめ 源平豆【名】**げんじまめ**(源氏豆)に同じ。

げんぺいもも 源平桃【名】(植)桃の一種。花の、八重にして、紅・白に咲分くるもの。えどもも。げんぺいたう。さきわけもも。

けんぺいれんしふじょ 憲兵練習所【名】各憲兵隊より士官・准士官・下士及び上等兵を分遣して、學生とし、憲兵の執務に必要なる學術を習修せしむる所。憲兵司令部に置かれ、所長(憲兵中・少佐)副官(憲兵大・中尉)教官(少佐・大中尉及び高等文官)下士及び判任文官等の職員を置く。

げんぺう 原廟【名】おほもとのやしろ。

げんぺう 玄豹【名】毛色の黒き豹。

けんぺき 痃癖【名】■癪(シャク)の一種。頸より肩にかけての筋の攣(ツ)るるもの。肩の凝(コリ)。 瀉歩色葉集「痃癖、ケンペキ」 國姓爺後日合戦「五百も千も首捻切り……首帳つけの筆取に、けんぺきの灸を据ゑさせん」 ■あんま(按摩)に同じ。 今國姓爺「身が覺えた按摩・痃癖」

げんぺきひょう 幻壁氷【名】光線の反對によりて、時として寒帶地方にあらはるる、巨大なる壁氷の幻影。

けんぺけ 痃癖【名】**げんぺき**・痃癖(一)の訛。

けんぺけにする 代玄「けんぺけにするたる炙」

けんぺつ 甄別【名】『甄は明らかに察する義』明らかに察して、わかつこと。

けんぺつ 軒別【名】■一軒ごとに、別別にすること。戸別。 ■のきなみ。毎戸。

けんぺつわり 軒別割【名】**かまどわり**(竈割)に同じ。

けんぺん 軒冕【名】■支那にて、大夫の乘るべき車と、大夫以上の人の用ふる冠と。 ■高き官位。「軒冕の意無し」

けんぺん 揀辨【名】是非・異同等をえらび分くること。

けんべん 權變【名】變に應じて、假に取計らふこと。「の語」

けんべゑ 源兵衛【名】賭博の一種。(關東の讀)。 **けんぼうぞめ**(兼房染)の略訛。松けんぼ黑染に難波江の」

けんぼ 賢母【名】かしこき母。

けんぼ 賢輔【名】賢き輔佐。

けんぼ 健歩【名】達者に歩むこと。健脚。

けんぼ 【名】(植)**けんぼなし**(枳棋)の略。

けんぼ 畎畝【名】■田の間の溝と、田のうねと。 ■ゐなか。田園。民間。「身を畎畝の間に起す」

けんぼ 兼補【名】一の職務ある官吏が、同時に、その他の職務にも補せらること。兼任。

けんぼ 【副】まことに。ほんたうに。しんぞ。眞實。「貞享頃の語」

けんぼ 【名】**しゃうぎ**(娼妓)を云ふ。(陸奥國青森の方言)

けんぼ 原簿【名】■謄寫し又は改作したる帳簿に對するもとの帳簿。 ■**もとちゃう**(元帳)に同じ。

けんぼ 玄漠【名】奥深きはかりごと。

けんぼ 玄圃【名】■支那の崑崙山上の、天帝の居るところ。 ■(地)**こんろんさん**(崑崙山)の異稱。

玄圃の積玉(シャク)【句】『晉書に「葛洪稱、陸機文、猶二玄圃積玉一、無レ非二夜光一焉」とあるに本づく。崑崙山に玉の累積せるが如くに美なる義』文の美なるを稱へていふ語。

けんぽ 還補【名】一旦去りたる職務に再び復すること。

けんぽ 劍鋒【名】劍のきっさき。劍尖。劍鉾。

けんぼう 權謀【名】權變のはかりごと。

けんぼう 元謀【名】はかりごとの張本人。首謀者。

けんぼう 減俸【名】■俸給の額を減ずること。 ■(法)官公吏に對する矯正懲戒の一。譴責に次ぎて、一段重く、俸給を減ずることによりて課す。程度は官職により、一様ならざれども、普通文官又判事は、一箇月以上一年以下の年俸月割額、もしくは月俸三分の一以下とす。「に同じ。

けんぼう 現俸【名】**げんぼうきふ**(現俸給)現俸給。

けんぼうか 權謀家【名】權謀に富む人、又これを行ふ人。策略家。策士。

けんぼうきふ 現俸給【名】現在受けて居る俸給。現俸。

けんぼうつうほう 元豐通寶【名】支那宋の元豐年間に鑄造せし銅錢。元豐通寶の四字の文あり、書體一樣ならず。中古以來、他の支那錢と同じく、我が國の通貨となり、また我が國にて、摸造せしこともあり。

けんぼうるゐかう 元豐類稿【名】(書)『曾鞏は元豐六年に卒せしより名づく』支那宋の曾鞏の文集。五十卷、及び附錄一卷。

けんぽうがなし 枳棋【名】(植)**けんぽなし**(枳棋)に同じ。 松風村雨東帶鑑「園には玉の梢をつらね、西王母が桃、けんぽが梨」

けんぼく 硯北・研北【名】『探光のため、机を南向に据ゑ、人は硯の北に坐するよりいふ』おそば。おひざもと。左右。手紙の脇附に記して、敬意を表はす語。

げんぼく 愿朴【名】生れのままにて、飾りなきこと。質朴。素朴。

けんぼくぼく 【貌】天下はれて、隱しだてのなきさま。おもてむき。 椀城酒呑童子「親且那と三つがなわで、けんぼくぼく晴れて生んで見しよ」

げんぼけん 原保險【名】再保險に附せらるる以前の保險。第一保險。前提保險。(再保險に對して)

けんぼっかいし 遣渤海使【名】古、我が國より渤海國に遣されし使者。遣高麗使・遣新羅使・遣隋使の類。

けんぼなし 枳棋【名】



(しなぼんけ)

【植】鼠李(ソリヤナギ)科に屬する落葉喬木。葉は有柄、廣卵形にして、鋸齒を有す。葉脈は基脚より分岐して、中央のは、羽狀に分岐す。夏季、白色の小花を開く、實は鳥の爪を張りたる如くにて、五本の岐あり。冬、熟して赤みを帶び、果柄は多肉にして、味あまし。材は器具用とするに堪ふ。けんぼのなし。けんぼがなし。てんぼろなし。けんぼ。

けんぼのなし 枳棋【名】(植)前條に同じ。 醒睡天皇廿露雨「から木の種を誰がまきて、くわりん・まるめろ・けんぼの梨」

けんぽふ 顯法【名】(佛)**けんげう**(顯教)に同じ。(密法に對して)

げんぽふ 幻法【名】**まぼふ**(魔法)に同じ。

けんぽん 獻本【名】■書籍を獻上すること、又その書籍。 ■出版書肆より贈呈する書籍。

けんぽん 見本【名】**みほん**(見本)の音讀。

けんぽん 絹本【名】書・畫を書くための絹地、また絹地に書・畫を書きたるもの。(紙本に對して)

げんぽん 原本【名】■もと。根本。本原。根源。元本。源本。 ■謄寫・抄錄・改訂又は飜譯などしたるものに對して、そのもとの書物。原書。 ■(法)『英Original』副本・正本・謄本・抄本の基本たる根本の書類。例へば法律・勅令の原本は、裁可ありしものを、內閣書記官において保管せるをいひ、判決の原本は、その本文の裁判所に保存せらるべきをいふ類。

げんぽん 原本【名】前條 ■に同じ。

げんぽん 元本【名】■**げんぽん**(原本)■に同じ。 ■(法)『英Capital』**ぐわんぽん**(元本)■に同じ。 ■(經)**ぐわんぽん**(元本)■に同じ。

元本の利用【句】(法)元本を他の利益ある物件と交換轉用すること。例へば土地を賣りて、株式を買ふ類。

げんぽんど 還本土【名】(佛)この世に出でたる佛の、もとの淨土に還ること。ぐゎんほんど。

けんぽんなし 枳棋【名】(植)**けんぽなし**(枳棋)の訛。

けんぽんほっけしゅう 顯本法華宗【名】〔佛〕『顯本とは、法華經の壽量品に見えて、釋迦如來の久遠(クヲン)の本地を顯す義』日蓮宗九派の一。もと勝劣派より分れたるものにて、開祖は日仕。京都の妙滿寺を本山とす。妙滿寺派。什門派。

けんぼりうけおひ 間掘請負【名】鑛山にて、坑道開鑿の際、間數又は尺數に應じて、請負賃金を定むること。

けんま 肩摩【名】人の肩と肩とすれあふほどの雜沓。こくげき(轂擊)參照。

けんま 研磨【名】■とぐこと、すること。みがくこと。■研究・練磨すること。

げんま 減摩【名】摩擦を減ぜしむること。

げんまい 玄米【名】籾皮を去りたるままにて、未だつき精(ヅ)げざる米。きごめ。くろごめ。黑米(クロマヒ)。(白米に對して)

げんまい 現米・見米【名】■現にその場に在る米。■ふちまい(扶持米)に同じ。

げんまいけんさかた 現米檢査方【名】大阪堂島米會所の役員。期日受渡米の檢査・格附(カクヅケ)等を掌るもの。

げんまいによしよく 衒賣女色【名】色を賣る女。遊女。賣女。用明天皇職人鑑「天竺佛の國には、げんまい女色と名づけ」

げんまいばん 玄米麵麭【名】玄米を交へて製したる食パン。

けんまきかい 研磨機械【名】機械製作における仕上機械の一。分ちて二種とし、一は既に旋盤又は平削機にて仕上げたる面を更に精密に仕上ぐるに用ひ、一は單に諸機械に必要なる刃物類の研磨をなすに用ふ。ぐらいんぐましいん。ぐらいんだあ。

けんまく 腱膜【名】〔醫〕腱(スヂ)の平らなるもの。

けんまく 劍幕・劍幕【名】怒りはらだちたる容態。元祿太平記「元祿の頃、劍幕荒く、町人百姓に對して」

けんまざい 減摩劑【名】機械の摩擦を減ぜしむるもの。減摩油の類。

けんまはし 拳回・拳廻【名】拳(ケン)の勝負を爭ふとき、相撲(スマヒ)のまはしに擬して、手にかくる甲がけの如きもの。拳錦。

げんまん 拳萬【名】『いつはる時は、拳回にて、一萬回打たるべしとの義』■詐りなきことの喩。■指切(ユビキリ)■をなすこと。〔東京の小供の話〕

けんまんがんくわう 堅滿俺鑛【名】〔鑛〕滿俺鑛の一種。普通のより堅く、六七度の堅度なるもの。

けんまんむすび 華蔓結【名】けまんむすび「同じ。(華蔓結)の訛。

げんまゆ 減摩油【名】きかいゆ(機械油)に同じ。

けんみ 檢見【名】■あらためみること、又その役、又その人。十訓「早く檢見をたまはり、季春が頭を切りてたてまつるべき旨申しける」■鎌倉・室町兩幕府時代に置かれし臨時の職。實檢使よりやや輕きもの。檢見使。■犬追物(イヌヲフモノ)の時、射手の射樣、馬の扱ひ樣、矢の中(アタ)・外(ハヅ)などを糺す役。物を賭けて、勝負を爭ふ時には、內檢見(ウチケン)・外檢見(ソトケン)の二役あり。■今國姓爺「今宵はさんざんの仕合でござる…ええ憎い犬め、檢見を仕損じて、ほうほうの目に合はしたな」■けみ(檢見)に同じ。

けんみ 現未【名】〔佛〕現世と未來と。現當。賀古敎信七墓廻「懺悔の功德に、父母の佛の咎も飜り、兄上の現未を助け、子孫も繁昌致すべし」

げんみ 幻味【名】〔哲〕『英 Hallucination, taste』幻覺の一。外來の刺戟なくして、味覺を感ずること。

けんみし 檢見使【名】けんみ(檢見■)に同じ。

けんみつ 顯密【名】■〔佛〕顯敎と密敎と。眞言宗と、それ以外の他宗と。〔眞言宗の語〕著異「千觀內供(ナイグ)は、顯密兼學の人にて」顯密の學士【句】〔佛〕顯敎と密敎とに關する學者。狂雲「やんごとなき顯密の學士どもを召しけり」顯密の僧【句】〔佛〕顯法と密法とを行ふ顯密の宗門と、密法の宗門と。顯宗と密宗と。顯密の敎【句】〔佛〕けんみつ(顯密)■に同じ。

げんみつ 嚴密【名】きびしくして、ぬけめなきこと。おごそかにてこまかきこと。堅度なるもの。

けんみつあふひ 劍三葵【名】紋所の一。三箇の劍先を三方に放射せる間に、三箇の葵の葉を配りて、ほぼ圓形に作れるもの。

けんみついてふ 劍三銀杏【名】紋所の一。三箇の劍先を三方に放射せしめたる間に、銀杏葉三箇を配りて、ほぼ圓形に作りたるもの。

げんみつかい 顯密戒【名】〔佛〕顯敎と密敎と戒律の宗旨と。顯密戒の三學【句】〔佛〕顯敎と密敎と、戒律の宗旨との三つの學。太平記「則ち顯密戒の三學、淵底に玉を拾ひ」

けんみつがしは 劍三柏【名】紋所の一。三箇の劍先を三方に放射せしめたる間に、柏の葉を一箇づつ配りて、ほぼ圓形に作りたるもの。

けんみつからはな 劍三唐花【名】紋所の一。三つの劍先の間に、三つの唐花を配り、ほぼ圓形に作りたるもの。

けんみつちほふ 顯密知法【名】〔佛〕顯敎と密敎とに精通すること。著異「顯密知法の貴人」

けんみつちやうじ 劍三丁子【名】紋所の一。三箇の劍先を三方に放射せしめたる間に、各一箇づつの丁子を配りたるもの。

けんみつびし 劍三菱【名】紋所の一。三箇の劍先を三方に射出せしめたる間に、菱を各一箇づつ配りて全形をほぼ六角形に作りたるもの。

けんみつぼし 劍三星【名】紋所の一。三箇の劍先を三方に射出せしめたる間に、各一箇づつの圓形を配りたるもの。

けんみんし 遣明使【名】修交のために、室町幕府より明國に遣したる使節。

けんみんせん 遣明船【名】室町幕府の頃、明國に派遣せし使船。明國より送付せし勘合符を帶したり。

げんみやう 元明【名】〔佛〕『元來明らかなるものなるよりいふ』眞如の覺體、又、本覺の自性清淨心。本明。

げんみやう-てんわう 元明天皇【名】〔人〕第四十三代の天皇。御名は阿閇(アヘ)。天智天皇第四の皇女。御母は蘇我倉山田石川麿の女なる姪娘(メヒノイラツメ)。文武天皇及び元正天皇の御母。在位七年(紀元一三六八年—一三七四年)。蹇老五年崩ず。壽六十一。

けんみやく 見脈【名】■脈を見ること。■外見のみにて、脈のありさまを察知すること。持統天皇眩氣法「一療始致さんと顚付けしに、御病氣見脈にあらはれたり」

けんむ 兼務【名】かねたるつとめ。かけもちのやくめ。かけづかさ。兼任。兼勤。兼役。(本務に對して)

けんむ 建武【名】後醍醐天皇の御代の年號(紀元一九九四年—一九九五年)。

けんむ 建武中興【句】後醍醐天皇の、隱岐國を出でて、元弘三年京に歸らせたまひ、光嚴院を廢し、建武と改元し、自ら萬機を統べたまひ、全國再び朝廷の政令を奉ずるに至れること。然るに、わづかに約四年の後、足利尊氏の九州より大擧東上するに及び、延元元年天皇は吉野に潛幸せられ、天下また亂る。

げんむ 現務【名】現に執行中なる事務。「清算人の現務の結了」

げんむ 現夢【名】ありありと見たる夢。醍醐天皇甘露圖「父仲成が魂魄、夫婦が枕に立寄り、夫婦七夜の現夢のつげ」

げんむ 幻夢【名】むげん(夢幻)に同じ。

げんむ 玄武【名】■『玄は黑にて、北方又は冬の象。禮記の曲禮上篇の「前ニ朱雀一而後ニ玄武一、左ニ青龍一而右ニ白虎一、文選の思玄賦の注に「翰曰、龜與レ蛇交曰ニ玄武一」とあり』四神の一。北方に配し、龜をゑがきて、その象とす。げんぶ。(青龍・白虎・朱雀に對して)■次條の略。■家相にて、家の北方に岡ある處。岡なき時は、檜を植ゑて代りとす。■易にて、卦爻に配當する六獸の一。私情・盜賊を掌るといふ。

げんむき 玄武旗【名】龜の象を畫きたる旗。げんむ。

けんむ-しきもく 建武式目【名】〔書〕鎌倉評定衆の遺老なる二階堂道照等が、足利尊氏の下問に對して、政要の一二を答へたる意見十七箇條を記せるもの。

けんむ-ねんちゅうぎょうじ 建武年中行事【名】〔書〕朝廷官府の故實・典例を抄錄したまへるもの。三卷。後醍醐天皇の御作。一に、禁裏政要。

けん-めい 懸命【名】いのちがけ。いっしょけんめい。一心不亂。

懸命の地【句】一所懸命(一)の土地。太平記「死罪一等を許され、懸命の地に安堵して居たりけるが」

けん-めい 賢明【名】かしこくして、物事にあきらかなること、又その人。聰明。

けん-めい 賢命【名】他人の命令の敬稱。

けん-めい 賢名【名】賢明なりとのきこえ。

けん-めい 建茗【名】建溪より産する茶。けんけい。

げん-めい 嚴明【名】嚴重にして明白なること。

げん-めい 嚴命【名】嚴重なる命令。きびしくおごそかなる仰せ。嚴令。

げん-めい 言明【名】明白に言ひきること。

げん-めい 玄冥【名】『玄も冥も黒の義にて、冬の象』ふゆ(冬)の異稱。玄英。

げん-めい 眩瞑【名】**めいげん**(瞑眩)に同じ。

げん-めう 玄妙【名】幽玄にして、精妙なること。

げん-めつ 還滅【名】〔佛〕煩惱(ボン)を滅し、生死(シャウジ)を脫して、眞如に還ること。道を修して、涅槃(ネハン)を證すること。(流轉(ルテン)に對して)

げん-めつ 幻滅【名】『英 Disillusion』幻影の破滅。科學的智識の進歩に伴ひて、ロマンチック時代の思想より目ざめて、理想・空想等の幻影に過ぎずして、到底實生活に實現せられ得べからざることを覺れること。

げんめつ-もん 還滅門【名】〔佛〕還滅の境涯に入る道。(流轉(ルテン)門に對して)

けん-めん 券面【名】■證券のおもて、即ち名稱・數額などを記してある方の面。二**けんめんがく**(券面額)の略。

けん-めん 揀麪【名】小麥粉を鷄卵にて薄くのばし、切りて猪(チョ)の腸及び木耳(キクラゲ)を包み、薄醬油にて煮たる食品。

けん-めん 硯面【名】硯の表面、即ち墨を磨る方。硯のをか。

げん-めん 減免【名】■輕減と免除と。二減等して免除するに至ること。

げん-めん 原免【名】〔法〕罪人の罪を免ずること。しゃ(赦)參照。

げん-めん 原棉【名】植物より採取したままの棉。

けんめん-がく 券面額【名】券面に記載せる數額。けんめんだか。

けんめん-きんがく 券面金額【名】券面に記載せる金額。額面。

けんめん-じゅす 絹綿繻子【名】なんきんじゅす(南京繻子)に同じ。

けんめん-だか 券面高【名】**けんめんがく**(券面額)に同じ。

けんめん-まぜおり 絹綿交織【名】絹絲と綿絲とを交合はせて織りたる織物。

げん-もく 玄默【名】默してゐること。もだすこと。

げん-もく 言默【名】言ふことと、言はざること。

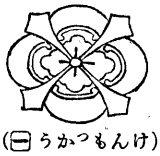
げん-もく 眩目【名】目のくらむこと。目をくらますこと。

けん-もつ 監物【名】古、中務(ナカツカサ)省の屬官。大藏省・內務省などの出納及び倉庫の管鑰を掌りし官。大・少の二等あり。おろしものの つかさ。おはしもの。運歩色葉集「監物、ケンモツ、唐名城門郎」

けん-もつ 獻物【名】獻上する物品。獻上物。

げん-もつ 現物【名】**げんぶつ**(現物)に同じ。運歩色葉集「現物、ゲンモツ」

けん-もっかう 劍木瓜【名】■紋所の一。下の圖を見よ。二〔植〕**まつむしさう**(松蟲草)に同じ。



(一) うかつもんけう)

けんもつ-きょく 監物局【名】監物の執務する役所。

けん-もほろろ 【貶】『けん・ほろろ共に雉子の鳴聲にて、けんに權威の意を言ひかけたるもの』愛想なく、他人の相談を拒絶するさま。酩酊氣質「麹町の井戸へ銀の箸をおっことしたといふ面(ヅラ)して、あいおかちゃじけなうござやいやすと、けんもほろろな挨拶だあ」

けん-もん 見聞【名】**けんぶん**(見聞)に同じ。

けん-もん 權門【名】■位高くして、權威ある家がら。勢家。二『權門に媚ぶる義』**わいろ**(賄賂)に同じ。

けん-もん 劍門【名】〔地〕支那四川省保寧府の北方にある要嶮。劍閣の入口にある門。「こと。

けん-もん 驗問【名】しらべて問ひただすこと。

けん-もん 遣閥【名】**うさはらし**(憂晴)に同じ。

げん-もん 諺文【名】**おんむん**(諺文)に同じ。

げん-もん 玄文【名】〔書〕**ほっけげんぎ**(法華玄義)に同じ。

げん-もん 玄門【名】玄妙なる法門。佛門。

げん-もん 舷門【名】『英 Gangway』船の上甲板の舷側に設けたる出入口。舷梯によりて昇降出入す。一般の習慣上、右舷又は艫部のは上級の人、左舷又は舳部のは下級の人の出入に供せらる。

けんもん-かくち 見聞覺知【名】〔佛〕見ることと、聞くことと、覺(トサ)ることと、知ることと。見るは六識中の眼識の用、聞くは耳識の用、覺るは鼻・舌・身三識の用、知るは意識の用なり。

けんもん-かご 權門駕籠【名】江戸時代の大名の家臣の、主用にて、他家に往く時、乘行きしかご。

けんもんさ 顯紋紗【名】次條に同じ。著

けんもん-しゃ 顯紋紗【名】紋がらを織出したる紗。けんもんさ。けもんさ。

げんや 原野【名】はらのはら。地目の一としては有租地の第二類に屬し、國有・官有・民有に區別せられ、その地價は低廉なり。

げん-や 元夜【名】**げんせき**(元宵)に同じ。

げん-やう 犬羊【名】■犬と羊と。二犬羊の如き奴等(ラヤツ)。(賊徒を罵りていふ)太平記「後生(ゴシャウ)の榮耀を望んで、涙を犬羊の天に淋(ソソ)ぐ」

けん-やう 眷養【名】かへりみ養ふこと。太平記「御邊(ゴヘ)は未だ私の眷養にて、公方(クバウ)の御恩をも蒙らねば」

けん-やう 圈養【名】畜類を檻(オリ)に入れて養ふこと。「こと。

けん-やう 顯揚【名】名をあらはしあぐること。

けんやう-だう 顯揚堂【名】豐樂院(ブラク)の北堂の一。豐樂殿の東南、栖霞樓の南に位す。大嘗會(ダイジヤウエ)・五節會(ゴセチエ)・射禮(ジヤイ)・賜宴・踏歌の儀は、この前にて行はれたり。

けん-やく 堅約【名】堅く約束すること、又その約束。太平記「天下を君の御成敗に任せたりし堅約たちまちに破って」

けん-やく 兼約【名】前もって結びたる約束。運歩色葉集「兼約、ケンヤク」

けん-やく 儉約【名】■放縱又は散漫ならぬこと。しまりのあること。つづまやか。二金錢などを、濫に費さぬこと。入費を節すること。つづまやか。節儉。大鏡「儉約したまひしも、さるべき事のをりの」

けん-やく 險阨【名】險阻。危險。險難。

けん-やく 兼役【名】**けんむ**(兼務)に同じ。

けん-やく 鍵鑰【名】くわんけん(管鍵)に同じ。「くる利益。

げん-やく 現益【名】〔佛〕現世において受

けんやく-か 儉約家【名】儉約なる人。

げんや-だな 玄冶店【名】■〔地〕江戸時代に、幕府の醫師玄冶の拜領せる町屋敷なりしよりいふ』東京神田區新和泉町にあり。二演劇にて、脚本「與話情浮名横櫛(ヨハナナサケヨコグシ)」中、切られ與三(ヨサ)の强請(ユス)の場。但し原脚本には、源氏店妾宅の場とし、鎌倉雪下(ユキシタ)にての事とせり。

けんや-やき 乾也燒【名】文政の末頃、三浦乾也の、破笠に倣ひ、又、乾山の法を摸して製せし陶器。細小の動植物を摸造せるもの多し。

けん-ゆ 見輸【名】『輸の字の首、正しくはしゅ』大賽令の制度にて、現在、調庸・雜徭(ザフエウ)を輸せしもの。(見不輸に對して)

げん-ゆ 原由【名】**げんいう**(原由)に同じ。

げん-ゆ 原油【名】『英 Crude petroleum』地中より汲取りたるままの、黃色又は褐色な

る石油。精製すれば、揮發油・石油及び重油となる。

けん-ゆう 拳勇【名】わんりょく(腕力)に同じ。

けん-よ 肩輿【名】■手輿(シヨ)の類の乗物。■のりもの。かご。

けん-よ 權輿【名】『衡(ハカ)を造るには權(オモリ)より始め、事を造るには輿より始むるによりていふ。輿は車の底、即ち物を載する處』事のおこり。はじまり。濫觴(ランショウ)。

けんよ【名】けんよに同じ。

けんよ けんよもなし【句】『けんよを見よ』けもなし。思ひもよらず。何の事もなし。一代男「長い刀に長脇差をぼっこんで、おせさよいさと唄へど、けんよもない顔してゐる。これはと樣子かへて、松原越えてと踊れば、一度に手を打って喜ぶ」

けん-よう 兼用【名】二つ以上の事に用ふること。

けん-よう 顯用【名】顯職に擧げ用ひらるること。

けん-よう 娟容・妍容【名】美しきかほかたち。あでやかなる姿。美貌。

げん-よう 言容【名】■言語と容貌と。■ことばつき。やうす。

げん-よう 嚴容【名】**けんばう**(嚴貌)に同じ。

けんよう-する 懸筌垂【名】〔醫〕『羅Uvula』軟口蓋の後端の中央に、圓形に突出せる軟性突起。のどびこ。のどちんこ。

けんよう-どうぶつ 牽用動物【名】〔農〕農具等を牽引せしむるに使用する動物。例へば牛・馬の類。

けん-よく 謙抑【名】謙讓して抑遜すること。へりくだること。たかぶらぬこと。

げん-よく 玄黓【名】壬(ミヅノエ)の歲の異稱。

けん-よつからはな 劍四唐花【名】**けんからはな**(劍唐花)を見よ。

けん-よつちやうじ 劍四丁子【名】紋所の一。劍三丁子に、更に一箇づつの劍先と丁子とを加へたるもの。

けん-よつぼし 劍四星【名】紋所の一。中心の圓より、四方に四本の劍先を出し、その間に各一箇の圓形を配りたるもの。

けん-よつめ 劍四目【名】紋所の一。圓を中心とし、それより上下・左右に劍先を出し、その間に、柄ある釘抜を一箇づつ配りたるもの。

けん-よつわちがひ 劍四輪違【名】紋所の一。四輪違の内へ、中心とせる小圓より長き劍先四箇を出し、その間に短き劍先四箇を配りたるもの。

げん-らい 還來【名】かへり來ること。

げん-らい 還來穢國土(クニド)【句】〔佛〕一度淨土に往生するも、再び娑婆の穢土(クニド)に還り來りて、衆生(シュジョウ)を濟度すること。

けん-らう 堅牢【名】堅固にてたやすく破損せぬこと。堅固。

けん-らう 倦勞【名】うみつかるること。

けん-らう 嶮浪【名】けはしき大波。

けん-らう 賢郎【名】他人の子息の敬稱。令息。賢息。

げん-らう 元老【名】■年齢名望・官位のつもりたる國家の功臣。元勳。■その所に在りて、年久しく功勞を積みたる人。

げんらう-くわいぎ 元老會議【名】國家の元老が、國事に關して催す評議會。

けんらう-せい 犬狼星【名】〔天〕星座の一。地球に近き恒星の一にて、二連星なり。三つ星の東南に當り、恒星中にて、光度最も強し。

けんらうちぎ 堅牢地祇【名】〔佛〕次條に同じ。

けんらうぢしん 堅牢地神【名】〔佛〕『梵Pṛithiの譯語』二十諸天の一。大地をささげ居て、これを堅牢ならしむといふ女神。又よく佛法流布(ルフ)の國に到りて、說法の比丘(ビク)、法座に坐する時、その形を隱蔽して、法座の下に在りて、晝夜護衞して離れずといふ。堅牢地祇。堅固地神。堅牢地天。地神。心中引は氷の如且「手を出して、雙親を殺すも同じ不孝人、堅牢地神のいただきに釘を打つとの教あり」近江源氏「堅牢地神の頭には、さざ片岡が蹈む足が、大磐石とこたへやせん」

けんらうぢ-てん 堅牢地天【名】〔佛〕『天は佛教の神、即ち大黑天・辯財天などの天なり』前條に同じ。

げんらう-ゐん 元老院【名】■明治八年太政官中左右兩院の廢止の時、これに代へて、法律案の討議及び天皇の御諮詢に奉答するための機關として設けられたる合議制の官廳、即ち憲法實施以前における立法機關。議長・副議長・議官を以て組織し、正・權大・少書記官等の職員を置かれたり。明治二十三年廢せらる。■『英Senate』共和國などの上院。

げんらうゐん-ぎくわん 元老院議官【名】元老院を組織せし議員。勅任官にして、華族・官吏・勳功又は學識あるものより選任せられたり。ぎくわん。

げんらうゐん-ぎゐん 元老院議員【名】元老院■を組織する議員。

けん-らん 絢爛【名】■織物模樣のきらきらとして、文彩に富むこと。■詩歌・文章のはでやかなること。

けん-らん 絢爛の極(クキョク)、平淡に造(カヘ)る【句】『蘇軾の與二姪書一に「凡文字、少小時須レ令二氣象崢嶸采色絢爛一、漸老漸熟、乃造二平淡一、其實不二是平淡一、乃絢爛之極也」とあり』文を作るに、字句絢爛の極點に達すれば、却りて平易淡泊の佳境に入る。

けん-らん 賢覽【名】見ることの敬語。ごらん。傾城色三味線「ちと賢覽に供へたし」

けん-り 權利【名】■權勢と利益と。■〔法〕『英Right』法律によりて保護せられたる行爲の自由及び利益。公權と私權とに分つ。【權理】■自由に物事をなし得る資格。(義務に對して)

權利の移轉【句】〔法〕權利がその主體を變更すること。「權利の變更」參照。

權利の行使【句】〔法〕權利の主體が、意思を以て、その權利を行使すること。

權利の客體【句】〔法〕■權利の內容。

權利の主體が享有すべき利益の內容。例へば所有權の內容は、使用・收益・處分等の行爲なる類。■權利の內容に缺くべからざる對象。例へば物・人身及び無形の產出物の類。

權利の回復【句】〔法〕裁判所の判決によりて、他人より侵害せられたる權利を回復すること。

權利の創設【句】〔法〕前主の權利に基づき、新なる名稱の下に、その內容の一部を讓り受くること。繼受的取得の一。例へば所有權者が地上權・永小作權・質權等を設定する類にて、原權利者はその權利を喪ふことなく、ただその範圍を狹められたるに止まり、その創設せられたる權利の消滅すると共に、新なる取得行爲を必要とせずして、當然その原狀まで膨脹するものとす。權利の設定。

權利の主體【句】〔法〕權利を享有する者、即ち法律上の人格を有する者。また特定の權利關係につきていふ時は、その關係における權利者をいふ。權利主體。

權利の設定【句】〔法〕「權利の創設」に同じ。

權利の變更【句】〔法〕權利がその存立を失ふことなくして、體樣を變ずること。內容を變ずるものと主體を變ずるものとあり。前者の內、又、一部辨濟のごとき、目的物の分量に關するもの、特定物の引渡を目的とする債務が損害賠償に變ずるがごとき、目的物の種類に關するもの、履行の時期・場所を變更するがごとき、權利の効力に關するもの等あり。又、主體を變更するものは、權利の移轉によりて生ず。

權利の目的【句】〔法〕■權利の內容。■權利の內容の一部たる物、又はその他の材料。■權利の取得によりて、當事者の達せんとしたる趣旨。「同じ。

けん-り 權理【名】〔法〕**けんり**(權利)■に同じ。

けん-り 縣吏【名】縣の吏員。縣吏員。

けん-り 賢吏【名】かしこき吏員。

けん-り 堅利【名】堅きと利(ト)きと。かたくして鋭利なること。「と。

けん-り 兼利【名】自他を併せて利すること。

けん-り 現利【名】現在の利益。庭訓往來「土貢之現利互多也」

げん-り 原理・元理【名】■大もとの道理。■〔哲〕『英Principle』或範圍內の事實に、就きての說明・判斷などの根據となるべき概念。他の眞理の基となる根本の眞理。■〔哲〕『英Principle』倫理上、正しき行爲

の法則。人間の動作の根本的規範。
原理の原理【句】〔哲〕こんぽんげんり、根本原理に同じ。
科學の原理【句】〔哲〕とくしゅげんり、特殊原理に同じ。
げんり 玄理【名】奥ふかき道理。
けんりう 涓流【名】細き流(ナガ)。細流。
げんりう 源流・原流【名】■水の流れ出づるもと。みなもと。■水源と末流。
けんりうき 驗流器【名】『英Current-meter』海流・潮流等の速度を測定するに用ふる器械。種種の様式あり。
けんりかうね 權利行爲【名】〔法〕■權利によりてなす行爲。■はふりつかうゐ、法律行爲)に同じ。
けんりかぶ 權利株【名】■〔商〕『英Potential share』株式引受人が、その會社の成立の際、株主たり得べき權利。故に實際に於ては、寶買の目的物となるも、株主權及び拂込義務は、最初の引受人に存す。■會社が成立の際、功勞ある者に與ふる株主たる權利。
げんりき 驗力【名】修驗(シュ)の行力。異記『猶因二驗力一轍不レ可レ所レ捕』
けんりき 幻力【名】幻化の事を作(ナ)す力。
けんりきょうつう 權利共通【名】〔法〕きょうどうけんり(共同權利)に同じ。(義務共通に對して)
けんりくわんけい 權利關係【名】〔法〕權利と義務との相對立する關係。法律關係。(事實關係に對して)
けんりこうそく 權利拘束【名】〔法〕訴訟が、裁判所に繫屬して、他へ移動せしめ、又は妄に取下げ得ざること。
權利拘束の抗辯【句】〔法〕妨訴抗辯の一。權利拘束の繼續中に、原告もしくは被告より、同一の訴訟物につき、他の裁判所にて、本訴又は反訴を以て請求したる時、その相手方のなすもの。
けんりしちち 權利質【名】〔法〕『獨Pfandrecht am Rechte』質權者が、その質權の辨濟額に充つべき限度にて、債務者の有する權利を、代って行使すること、即ち所有權以外の財産權を目的として設定したる質權。

一種の債權讓渡なり。
けんりしゃ 權利者【名】■權利を有する者。■〔法〕義務者に對して權利を有する者、例へば債權者の類。
けんりしゅたい 權利主體【名】〔法〕「權利の主體」に同じ。
けんりつ 建立【名】『立の字の音、正しくはりふ』建つること。設くること。こんりふ。
けんりつ 縣立【名】『立の字の音、正しくはりふ』縣の費用を以て、設立・維持するもの。「しき刑罰。
げんりつ 嚴律【名】きびしきおきて。きびしき刑罰。
けんりのうりょく 權利能力【名】〔法〕「享有の能力」に同じ。
げんりふ-やき 元立燒【名】寛文年間、大隅國姶良(アイラ)郡帖佐(サツ)村の人、小野元立院が肥前國有田(アリタ)陶工北村傳左衞門を聘して燒かしめたる陶器。
けんりん 乾臨【名】『乾は天の義、臨は天下に臨む義』天子。主上。君王。太平記『乾臨曲げて恩光を蒙らば、速かに繩門の徒と成って」
けんりん 慳悋・慳吝【名】慳貪にして吝嗇なること。運歩色葉集『慳悋、ケンリン』
けんりん 儉吝【名】■儉約と吝嗇と。■甚しきものをしみ。やぶさか。けち。
けんりん 堅林【名】〔佛〕けんごりん(堅固林)の略。「に同じ。
げんりん 原林【名】げんせいりん(原生林)
けんりんかく 乾臨閣【名】『けんりん(乾臨)を見よ』ぶらくてん(豐樂殿)の舊稱。和名抄『豐樂殿、本名乾臨閣、後、以二乾臨閣一爲二神泉苑一』

けんりんぢごく 劍林地獄【名】〔佛〕『智度論に見ゆ』十六小地獄の一部なる八炎天地獄の第四。縱・横五百由旬にして、劍樹即ち枝葉も花も實もすべて刀劍より成れる樹の林あり、大暴風吹きて、その葉を起し、罪人その上に墮ち、手を著くれば、手絕え、足を著くれば、足絕え、その他、身體・頭面傷壞せざるなき苦を受くるところ。劍樹地獄。劍樹。
けんりんほふ 劍林法【名】〔佛〕惡魔を降伏するために、刀劍を使用する法。祕印祕呪を以て行ふ。
けんりめいぎ 權利名義【名】〔法〕權利關係の名義、即ち債權・所有權など。
けんりやう 賢良【名】賢くして善良なること、又その人。才德すぐれたること、又その人。「と。
けんりやう 兼領【名】兼ねて領有すること。
けんりやう 權量【名】權(カリ)と量(バカ)と。
げんりやう 元良【名】極めて善良なること、又その人。
げんりやう 原諒【名】〔法〕『原は物の根原をおしたづぬる義』事實につきて、愼察考慮を要すること。
げんりやう 減量【名】■分量の減(ヘ)ること、また分量を減らすこと。■〔商〕『英Draft』重量を標準として、寶買する貨物の、風袋の重量を差引したる上、なほ慣習として差引くべき、一定の重量。
げんりやうてき 現量的【貌】〔哲〕ちょくわんてき(直觀的)に同じ。「じ。
けんりやく 權略【名】けんぼう(權謀)に同
けんりやく 建曆【名】順德天皇の御代の年號(紀元一八七一年—一八七二年)。
げんりやく 元曆【名】後鳥羽天皇の御代の年號(紀元一八四四年)。
けんりやく-ぎょほ 建曆御記【名】〔書〕きんぴせう(禁祕鈔)に同じ。
げんりゆう-たう 玄龍湯【名】古の煎藥の一。和名抄『玄龍湯』
けんりゆう-つうはう 乾隆通寶【名】支那清(シン)の乾隆三年に鑄造せし銅錢。各府省にて鑄造せしものは、背に地名の一字を記せり。また一種、形大にして、背に龍の圖を顯せるものは、一に慶賀錢といふ。
けんりょ 賢慮【名】■賢明なる思慮。■他人の考の敬稱。おぼしめし。高慮。尊慮。
げんりょ 玄侶【名】『玄學の侶(トモ)の義』僧侶。玄流(リウ)。
けんりょく 權力【名】■いきほひ。ちから。權威。權柄。■〔法〕意志を以て、相手の意志を强制する力。
權力の主體【句】〔法〕權力を享有する者。即ち主權者、又は主權者より權力を附與せられたる範圍内に於ける官廳及び自治團體など。權力者。權力主體。
權力の平均【句】「勢力の均衡」に同じ。
けんりょくくわんけい 權力關係【名】〔法〕權力者が、自己の意思によりて、服從者の意思の範圍に限界を附する關係。即ち一方は絕對無限の權力を有し、相手はこれに絕對服從なる、不平等なる關係。例へば主權者と國民との關係の類。「同じ。
けんりょくしゃ 權力者【名】〔法〕次條に「權力の主體」に同じ。
けんりょくしゅたい 權力主體【名】〔法〕
けんりょくせつ 權力說【名】〔哲〕『英Authoritarianism』道德上の規定は、權力を有する者の命令に基くとし、命令を以て、是非善惡の究極的根據となす、一派の倫理說。
けんりょくだんたい 權力團體【名】〔法〕權力主體たる團體、例へば國家又は國家より、或種の權力を分與せられたる地方公共團體の類。
けんりょん 縣吏員【名】けんり(縣吏)に同じ。
げんる 玄流【名】げんりょ(玄侶)に同じ。
けんる 堅壘【名】堅固にして、攻落しがたきとりで。
けんれい 縣令【名】■支那にて、縣の主宰者。■けんじ(郡司)(二)の唐名。■けんちじ(縣知事)の舊稱。■縣知事の發する行政命令。
けんれい 憲令【名】おきて。のり。憲法。
けんれい 黔黎【名】『黎はれいみん(黎民)を見よ』けんしゅ(黔首)に同じ。
けんれい 娟麗・妍麗【名】容貌の美しきこと。なまめかしきこと。
げんれい 嚴厲【名】おごそかにて、するどきこと。きびしきこと。
げんれい 嚴令【名】きびしく命令すること、又その命令。
けんれい-もん 建禮門【名】平安城の内裏の外廓十二門の一。南面し、春華門と修明

門との間、承明門の前方にあり。異稱、宮門・青馬陣(アヲウマ)・南端門。

けんれい-もんゐん 建禮門院【名】〔人〕高倉天皇の中宮。平清盛の第二女。名は德子。安德天皇を生む。文治元年安德天皇と共に海に投じ、源氏に救はれて、京師に還り、薙髪して眞如覺と號す。建保元年薨ず。年五十七。

けん-れう 見料【名】見るために支拂ふ代金。興行物の觀覽料。貸本の損料等の類。

げん-れう 原料【名】製造・加工せられたるものに對して、そのもととなる材料。

げんれう-くみあひ 原料組合【名】產業組合の一種。生產せる原料の賣却を目的とするもの。

げんれう-たう 原料糖【名】『英 Raw sugar』精製糖を製造するに適したる砂糖もしくは白下(シロ)糖。糖密及び他の夾雜物を含有す。原糖。

げんれう-ひん 原料品【名】貨物の製造に供する材料。

げん-れつ 嚴烈【名】きびしくはげしきこと。こひしくおもふこと。戀慕。

けん-れん 牽攣【名】ひきつること。ひくこと。

けん-れん 牽連【名】つながりつづくこと。かけつらぬること。「に同じ。

けん-れん 見連【名】**けんぶつれん**(見物連)に同じ。

けんれん-はん 牽連犯【名】〔法〕或犯罪の手段又は結果たる行爲が、他の罪名に觸るるもの。例へば人の財物を竊取するに、その手段として、その人の住居に侵入し、又は竊取後、その財物を破壞・消費する類。刑法にては、その手段たり結果たる一團の犯罪を合一して、一罪となし、その最も重きものを刑す。

けん-ろ 賢路【名】賢者の、官途に進むみち。「骸骨を乞ひて、賢路を避く」

けん-ろ 險路【名】けはしきみち。

けん-ろ 蹇驢・蹇驢【名】**一**足なへたる驢馬。**二**=**けんば**(蹇馬)に同じ。持統天皇獻單法「或時は蹇驢に鞭打つて、衣を西山の雨にうるほし」

けん-ろ 涓露【名】少しばかりの水。涓滴。

けん-ろ 顯露【名】明らかに外面に見ゆること。あらはなること。祕密又は幽玄ならぬこと。

げん-ろ 言路【名】下の事情を、上に對して聞え知らする路。進言のみち。

げん-ろ 玄路【名】〔佛〕玄妙の道路。眞理。

けんろう-き 檢漏器【名】電路中の電氣の漏洩(エイ)を檢する器。直流用のと交流用のとあり。

げん-ろく 玄鹿【名】毛色の黑き鹿。長壽を保つといふ。

げんろく 元祿【名】東山天皇の御代の年號(紀元二三四八年—二三六三年)。

げんろく-いちぶきん 元祿一分金【名】次條に同じ。

げんろく-いちぶぎん 元祿一分銀【名】次條の略。

げんろく-いちぶばんきん 元祿一分判金【名】江戸時代の通貨の一。元祿八年より寶永七年に亘り、江戸幕府にて鑄造せる一分判金。縱五分・横三分五厘。背に元の字の極印あり。品質・重量及び價格は元祿小判金に同じ。享保三年通用を廢せられたり。元祿一分判金。元祿一分判。

げんろく-えどざこばんきん 元祿江戸座小判金【名】元祿小判金の一。江戸にて鑄造せしもの。縱二寸三分五厘・横一寸二分五厘。元祿江戸座小判。「略。

げんろく-おほばんきん 元祿大判【名】次條の略。

げんろく-おほばんきん 元祿大判金【名】江戸時代の通貨の一。元祿八年より十一年までの間、江戸幕府にて鑄造せし大判金。縱五寸強・横三寸一分五厘、背に元の字の添極印あり。享保七年通用を廢せられたり。元祿大判金。元字判(ゲンジバン)。

げんろく-きん 元祿金【名】元祿小判・元祿一分金及び元祿二朱金の總稱。慶長の古金よりは、品位低し。元字金(ゲンキン)。元金。

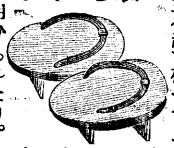
げんろく-ぎん 元祿銀【名】元祿丁銀・元祿豆板銀の總稱。萬分中約十四の金を含む。元字銀(ゲンジギン)。

げんろく-きんぎん 元祿金銀【名】元祿金及び元祿銀の總稱。即ち元祿八年より寶永七年まで發行したる金・銀貨。元字金銀(ゲンジキンギン)。元祿新金銀。

げんろく-きやうざこばん 元祿京座小判【名】次條の略。

げんろく-きやうざこばんきん 元祿京座小判金【名】元祿小判金の一。京都にて鑄造せしもの。縱二寸三分强・横一寸二分五厘。元祿京座小判。

げんろく-げた 元祿下駄【名】楕圓形にて、ばら緒をすげたる、男子用の日和(ヒヨリ)下駄。元祿頃、町奴(マチヤツコ)の用ひたるものなりとて、通人の間に用ひられたり。


(たげくろんげ)

げんろく-こうあん 兼六公園【名】〔地〕『支那宋の李格非の洛陽名園記の湖園記に「洛人云、園囿之勝不レ能二相兼一者六、蔆二宏大一者少二幽邃一、人力勝者少二蒼古一、多二水泉一者艱二眺望一、兼二此六一者惟湖園而已」とある語に取りて、松平樂翁の命じたる名稱』加賀國金澤市舊金澤城の東南にある公園。文政年中、藩主前田齊廣(ナリ)の創設、嗣齊泰(ナリヤス)の修補に係る。明治四年公園となり、水戸の偕樂園、岡山の後樂園と共に日本三公園の名あり。

げんろく-こそで 元祿小袖【名】元祿時代のものに擬したる小袖。即ち殺袖(ソギソデ)にして、摺箔縫模様あり。花見小袖。**げんろくそで**(元祿袖)參照。「略。

げんろく-こばん 元祿小判【名】次條の略。

げんろく-こばんきん 元祿小判金【名】江戸時代の通貨の一。元祿八年より寶永七年まで、江戸幕府の鑄造せし小判金。江戸座・京座の二座にて造りしため、大小一ならず。背に元の字の添極印あり。享保三年通用を廢せられたり。元祿小判。

げんろく-じだい 元祿時代【名】東山天皇の元祿年間前後の時代。學術・文藝・美術等隆盛を極めたりしかども、弊政も亦多く、士民一般に安逸を事とし、華奢柔弱に流れたり。

げんろく-しんきんぎん 元祿新金銀【名】**げんろくきんぎん**(元祿金銀)に同じ。

げんろく-そで 元祿袖【名】元祿小袖に模して、婦女子の用ふるそぎ袖。

げんろく-たいへいき 元祿太平記【名】〔書〕元祿當時の世相を記したるもの。梅蘭堂(傳記詳かならず)の著。元祿十五年の出版。

げんろく-ちやうぎん 元祿丁銀【名】江戸時代の通貨の一。元祿八年より寶永三年まで、江戸幕府の鑄造せしもの。縱二寸五分五厘・横一寸强、背に元の字の添極印あり。

げんろく-てう 元祿調【名】〔文〕正風(シヤウフウ)の俳句。「條に同じ。

げんろく-にしゆきん 元祿二朱金【名】次條の略。

げんろく-にしゆばん 元祿二朱判【名】次條の略。

げんろく-にしゆばんきん 元祿二朱判金【名】江戸時代の通貨の一。元祿十年より寶永七年まで、江戸幕府の鑄造せしもの。縱四分・横二分五厘あり。元祿二朱金。元祿二朱判。

げんろく-はなみをどり 元祿花見踊【名】長唄に合せて行ふ舞踊の一。多人數にて、元祿風の粧をなして踊る。明治十一年守田座にて初めて演じたり。

げんろく-ふう 元祿風【名】元祿時代に行はれし寬闊なる風俗。

げんろく-ぶんがく 元祿文學【名】元祿時代前後に行はれたる文學。荻生(オギフ)徂徠・伊藤仁齋の漢學、僧契沖・北村季吟の國學、近松門左衞門の淨瑠璃、井原西鶴の小說、松尾芭蕉の俳諧など、その主なるものなれど、主としては、近松の淨瑠璃以下の通俗的の作物をいふ。

げんろく-まめいたぎん 元祿豆板銀【名】江戸時代の通貨の一。元祿八年に改鑄せられたり。縱八分・横八分・重量六匁三分。**げんろくぎん**(元祿銀)參照。

げんろく-もやう 元祿模樣【名】元祿時代前後に流行したる、衣裳の模樣。大がたに

て、華美なるもの。はでなる辨慶縞また市松など。

げんろくをどり 元祿踊【名】元祿風の粧をなして、盆踊の如く、多人數にてをどる踊。「謠論。

けん-ろん 見論【名】〔佛〕諸種の執見上の

げん-ろん 言論【名】思想を言語に發表して論ずること。議論。

言論の自由【句】『我が國の憲法第二十九條にも「日本臣民は、法律の範圍内に於て、言論・著作・印行の自由を有す」とあり』言論は文化の發展を助くる途なるが故に、近世の文明諸國にては、これが自由を認むること。但し放任すれば、風俗・治安を害するに至るべきを以て、制限することあれども、制限は必ず法律によるべきものとす。

言論の抑壓【句】言論の自由を認めず、壓制的に禁遏すること。

げんろんかい 言論界【名】言論を以て世に立つ人人の仲間。「と。

けん-わ 謙和【名】謙遜にして溫和なること。

げんわ 元和【名】『和の字、上の元の字の韻に引かれて、ナと發音す』後水尾天皇の御代の年號(紀元二二七五年—二二八三年)。

けん-わう 賢王賢皇【名】賢明なる君主。

賢帝。賢主。太平記「賢王の横言(王賢に成る世の中は、上を下へぞかへしたりける」

げんわう-たん 玄黄丹【名】古用ひられし丹藥の名。和名玄黄丹、一名、黄花丹、一名、散花丹、一名、孔景丹、一名、春花丹」

けん-わく 見惑【名】〔佛〕『惑の字、上の見の字の韻に引かれて、ナクと發音す』我見・邊見などの妄惑。理智に關する諸の妄見。けんじ(見思)參照。

げん-わく 眩惑【名】くらみまどふこと、又くらましまどはすこと。

げん-わく 幻惑【名】幻術を以て、人の心を惑はすこと。

げんわく-しょはっと 元和諸法度【名】『和の字、上の元の字の韻に引かれて、ナと發音す』元和元年に德川家康が僧崇傳・林道春をして草せしめし法度書(ガキ)。

けん-わちがひ 劍輪違【名】紋所の一。劍四つ輪違・劍三つ輪違などの類。

げんわつうはう 元和通寶【名】『和の字、上の元の字の韻に引かれて、ナと發音す』次條の略。

げんわ-つうはうせん 元和通寶錢【名】『和の字、上の元の字の韻に引かれて、ナと發音す』江戸時代の通貨の一。元和三年に德川家康の發行せしもの。銀錢と銅錢とありて、前者は徑八分、後者は七分五厘、何れも元和通寶とあり。元和通寶。

けんわんちよくひつ 懸腕直筆【名】書法の一。腕を物に著けず、筆を垂直に持ちて、文字を書くこと。懸腕。

けん-ゐ 顯位【名】高き位。よき地位。

けん-ゐ 獻遺【名】物を贈ること。

けん-ゐ 賢位【名】〔佛〕小乘教にて、見惑煩惱を十分に滅し盡さざる、修行者の位。

けん-ゐ 權威【名】■おかおそりちいに同じ。他を壓服する威力。權力。威勢。「某氏は現代學界の權威たり」

權威を食(ク)ふ【句】權威に怖づ。浦島年代記「こっちへおことは、法を知らぬ雜言、權威をくふ男でなし」

けん-ゐ 健胃【名】胃をすこやかならしむること。

げん-ゐ 原位【名】■もとのくらゐ。■〔數〕位取(ハクリ)にて、一・十・百・千の稱。一を第一原位、十を第二原位、百を第三原位、千を第四原位といふ。二萬・十萬・百萬・千萬の一・十・百・千も亦原位なり。**だいげんゐ**(大原位)參照。

げん-ゐ 源委・原委【名】『委は末の義』ほんまつ(本末)に同じ。「なる威光。

げん-ゐ 嚴威【名】きびしき威勢。おごそか

けんゐさい 健胃劑【名】胃をすこやかにするための藥。健胃藥。

げん-ゐさん 元遺山【名】〔人〕支那金代の詩人。名は好問、字は裕之。尚書省左司員外郎となりしが、金亡びてまた仕へず、大同三年歿す。年六十八。

けん-ゐん 險韻【名】用ふるに困難なる韻字。むづかしき韻字。「に同じ。

げん-ゐん 現員【名】**げんざいゐん**(現在員)

けんゐ-やく 健胃藥【名】**けんゐざい**(健胃劑に同じ。

けん-ゑ 乾慧【名】〔佛〕實德備はらざるために、その實效の顯はれざる智慧。

げんゑ 玄慧【名】〔人〕學僧。俗姓は藤原、字は健叟、洗心子・獨清軒、又、健軒と號す。京都の人。初め叡山に登りて、天台の教を受け、後、禪宗に入り、權大僧都に任ぜらる。後醍醐天皇の侍讀となりて、宮中に四書新註を講ず。程朱の說を唱ふる、是れを始とす。後、窘氏に愛重せられ、建武式目を撰ぶ。正平五年寂す。年八十二。

けん-ゑん 犬猿【名】■犬と猿と。■仲あしき物の譬。「きこと。

けんゑん 險遠【名】道のけはしくして遠

けんゑん 賢圓【名】〔人〕平安朝時代の佛像彫刻家。六勝寺の建てられし頃、院覺・院朝と共に、多く製作せり。

けんゑん 蘆園【名】『蘆は萱の本字。萱の字、我が國にてはかやと訓じ、徂徠は江戸日本橋茅場(ガヤバ)町に住みしよりいふ』をきふそらい(荻生徂徠)の號。

けんゑん-は 蘆園派【名】『前條を見よ』荻生(ヲギフ)徂徠の唱へし古文辭派。徂徠派。

けん-を 嫌惡【名】きらひて惡むこと。

げんをう 源翁【名】〔人〕『翁の字、上の源の字の韻に引かれて、ノウと發音す』高僧。俗姓は源、名は心照、空外と號す。越後國の人。總持寺の峨山紹碩に師事す。將軍義滿より那須の地一千餘石を施入せられ、後、結城(キ)の安隱寺、會津(ヅ)の廣德寺・慈眼(ジン)寺等に居る。後小松天皇より能照法王禪師の號を賜はり、又、世に那須野の殺生石(セッシャウセキ)を化度(ケド)して、巢をなさざらしめきと傳ふ。應永三年(一に弘安三年)寂す。年七十一。

げん-をう 玄翁【名】『翁の字、上の源の字の韻に引かれて、ノウと發音す。源翁和尚これを以て、殺生石を碎きしより名を得たりといふ』鐵槌(カナヅチ)に似て、頭の兩端共に尖らざるもの。げんのう。玄應。玄能。

げんをう-ばらひ 玄翁拂【名】『翁の字、上の源の字の韻に引かされて、ノウと發音す』玄翁にて、荒石の大塊を拂ひ落すこと。

げんをう-わり 玄翁割【名】『翁の字、上の源の字の韻に引かれて、ノウと發音す』玄翁にて、大石を割ること。

けんをん 喧溫【名】あたたかなること。喧暖。溫暖。

けんをんき 驗溫器【名】**たいをんき**(體溫器)に同じ。

げ-めん 外面【名】■ぐわいめん(外面)に同じ。■〔佛〕外に現れたる顏いろ。外面如菩薩、內心(ナイシン)如夜叉(ショシャ)【句】〔佛〕『唯識論に「女人地獄使、永斷二佛種」外面似二菩薩一、內心如二夜叉一」とあり。大智度論にも出づ』婦人は、顏容美しく極めて柔和に見ゆれども、その心は險惡にして恐るべし。〔諺語〕譬喩經「外面如菩薩、內心如夜叉、たとへその色白くとも、無間(ムゲン)の猛火(ミョウクワ)に黑むべく」「を見よ。

け-もなし 氣も無し【句】け(氣)の條下

け-もの 獸・畜【名】■『毛物の義。一說に、飼物(カヒモノ)の約轉とも』**けだもの**(獸)〔一〕に同じ。和名「獸。爾雅注云、四足而毛曰レ獸、介毛乃」■かちく(家畜)に同じ。紀「畜產、ケモノ」

けもの-あらため 獸改【名】十一月二十一日より二十五日まで、奈良春日(カスガ)の若宮の神官が、祭祀のため獻上すべき鹽(シホ)の獸を改むること。

けもの-ずみ 獸炭【名】『唐書に見ゆ』支那晉の王琇が、豪侈を好み、炭を粉にして獸の形を作りし故事。言水「瓢簞より利休が術を獸炭」

けものだな 獸店【名】獸肉を賣る店。〔德川時代の語〕守貞漫稿「江戸は、麴町に獸店と云ひて、一戸あるのみなりしが」柳樽「傘は獸店からと知った振(ヲ)」

けもの-たふし 畜仆【名】人家に飼養せる畜類を斃死せしむること。〔古語〕祝詞「畜仆志(クフシ)・蠶物(モノ)せる罪」

けもの-へん 獸偏【名】漢字の偏の一。猫・猿・狼等の字の左傍にある犭の字(即ち犬)

の字の變體)。

けものーや【名】『能因法師の說』の(野)の異稱。〔古語〕

けーもん 花紋【名】くわもん(花紋)に同じ。

けーもん 假門【名】〔佛〕低き根機の衆生(シュジョウ)を濟ふために、かりに設けたる教。假益(ケヤク)を與ふる法門。方便の法門。阿彌陀佛の四十八願中の第十九願に、念佛の外の諸行(ショギョウ)・諸善を修して、極樂に往生せんことを欲する者には、臨終にその人を來迎(ライガウ)すべしとの誓ひをいふ。(眞門に對して) 淨土和讚「衆生の假門開きてぞ」

けーもん 暇文・假文【名】いとまぶみ(暇文)に同じ。〔古語〕

げーもん 偈文【名】〔佛〕げ(偈)に同じ。

げーもん 解文【名】『解は上聞に達せしむる意』下より上に對して奏する文。八省以下內外(ナイゲ)の諸司より、太政官又は所管にたてまつりし公文書。げ。げぶみ。〔古語〕 **二**推擧文書。〔古語〕 榮花「顯密共にあきらかなるをば、かれ、すすまねど、阿闍梨のげもんをはなたせたまひ、公・私の御師となさせたまふ」

御駒(オマン)の解文【句】古、八月の駒牽(コマヒキ)の時、馬の毛色などを詳しく記して、國國より奏上せし文書。げづけ。江次第「外記進二御馬解文(入レ筥、於二上卿一)」

けーもんさ 顯文紗【名】けんもんしや(顯文紗)に同じ。

けーもんりよう 花文綾【名】花形を浮織(ウキオリ)にせる綾。源氏「けもんりようを、このごろ摘みいだしたる花して、はかなう染めいでたまへる」「屋。

げーや 下屋【名】母屋(モヤ)に造りかけたる小屋。

けーやか【貌】けやけきさま。きはだち目だつさま。いさぎよきさま。けざやか。けや。

〔古語〕起、大貴、ケヤカニテ」

けやき 欅【名】〔植〕楡(ニレ)科に屬する落葉喬木。高さ數十尺、周圍丈餘に達す。葉は長卵形にして互生し、銳頭・鋸齒を有す。花は早春新葉と共に生じ、淡黃綠色にして、雌雄同株なり。果實は小にして扁平。山野に自生す。材は黃ばみて堅く、木理美しく、建築用又は器具を造るに適す。

けーやき 毛燒【名】鳥の羽毛を去りて後、皮膚に殘れる細毛を燒去ること。

けやきーいた 欅板【名】欅の材にて造りたる板。 桃狩飯本地「わが家へ、わが身として、宛ら盜賊の所爲もけやき欅板、めっきめっきと切破る」

けやきーづくり 欅造【名】欅の材にて造ること、又その物。

けやきばしら 欅柱【名】欅の材にて造れる柱。 賀古教信七墓廻「播州賀古の郡主より大內獻上の槻柱の御通り」

けやきばひ 欅灰【名】欅の材を燒きて得る灰。陶器の釉藥(スリグ)に合せ、また酒を造る時に交へ入るといふ。

けやきふしん 欅普請【名】欅づくりの建築、又その建築物。 「せるもの。

けやきもみぢ 欅紅葉【名】欅の葉の紅葉

けやく 化益【名】〔佛〕化導(ケダウ)して、利益(リヤク)を與ふること。

げやく 下藥【名】げざい(下劑)に同じ。

げやく 解藥【名】解毒の藥劑。毒けし藥。 生寫朝顏話「この丸藥は卽ち解藥、これをさきへ飲みおけば、少しも醉はざる大妙藥」

けやけし 尤けし【形一】けやかにてあり。ことやうなり。きはだちてあり。すぐれたり。けし。けやし。〔古語〕 源氏「いとけやけくもつかうまつるかな」

けやし 尤し【形二】前條に同じ。〔古語〕

けーやすし 消易し【名】消えやすし。〔古語〕 萬葉「はしむかふなせの命は朝露のけやすきいのち神のむたあらそひかねて」

けーやっこ 毛奴【名】毛深き人を罵りていふ語。 雙生隅田川「微の生えたる毛奴と、笑うて散散歸りけり」

けーやふ 蹴合ふ【動四自】けあふ(蹴合)の訛。 狂言(二人名)「そのままただ雞のやうな。そこで蹴やふ眞似をせよ。この太刀を取らせうぞ」

けーやぶる 蹴破る【動四他】 **一**蹴つまづきて、きずつく。 醒睡笑「あやまちに、足をけやぶり」 **二**蹴て、他の物をやぶる。

けやむらーろくすけ 毛谷村六助【名】〔人〕きだむねはる(貴田統治)を見よ。

けーやり 毛槍【名】鳥毛の槍。 心中宵庚申「はや御立と、お供廻りが振出す毛槍」

けやりーあたま 毛槍頭【名】毛槍のさきの如き形の頭。 室町千疊敷「毛槍頭の長慶狸」

けやりむし 毛槍蟲【名】〔動〕環蟲(クワンチウ)類に屬する蠕形(ゼンケイ)動物。體長五寸・幅四五分、黃ばみたる暗紫色を呈し、砂泥より成る厚壁の管狀物の內に居り、ひがたに棲む。

けやれやげやれし【名】〔動〕ほととぎす(杜鵑)を云ふ。〔陸中國岩手の方言〕

げゆ 解由【名】王朝時代に、內外官の、任期終りたる時、その引繼事務の滯りなかりし由を記して、新任者より前任者に渡しし文書。げゆじやう。かげゆじ(勘解由使)參照。〔古語〕 土佐「ある人、あがたの、四とせ・五とせ果てて、例の事どもみなしをへて、げゆなど取りて」

げゆ 外用【名】〔佛〕一の本體ありて、これより外にあらはるる作用。例へば佛・菩薩が衆生(シュジョウ)を濟度するため、神通を示して教へ導く作用。

げゆーじやう 解由狀【名】げゆ(解由)に同じ。〔古語〕

げゆーずゐえん 外用隨緣【名】〔佛〕緣に從って、わが道の應用の自由なること。 鴉鷺合戰物語「外用隨緣の花は、更に津守(ツモリ)の浦の春の風に薰ず」

げよう 下用【名】下(モシ)がかりたる事に用ふること。 運歩色葉集「下用」

げよう-びつ 下用櫃【名】下用に用ふる櫃。卯月の調色「共に三途(ザン)のかはつづら、一荷に手を取り、打渡り、西方淨土に一文字、越ゆるは下品(ゲボン)下用櫃」

けーよそひ 褻裝【名】平常の衣裝。褻(ケ)のよそほひ。〔古語〕 夫木「逢ふことは我がけよそひのきぬなれや年は行けどもさせるひもなし」

けら 螻蛄・螻【名】〔動〕直翅(ジキシ)類に屬する昆蟲。土中に棲み、體長一寸ばかりにして暗褐色を呈し、硬化せる前翅と短小なる後翅とを有す。第一對脚は大きく、尖端楠齒狀をなして、土砂を發掘するに適す。雄はよく鳴く。小麥・葡萄等の根を食す。不完全變態なるが故に、幼蟲も親と相似て、ただ小さく且つ翅を缺く。おけら。けらむし。しやうらいむし。



(け ら)

けら 螻蛄の水渡(ミヅワタリ)【句】『けらざい(螻蛄才)を見よ』器量小さくして、大なる事をなしえぬ譬。〔諺語〕

けら 螻蛄腹立つれば鵜(ウ)喜ぶ【句】『鵜を捕ふるために、螻蛄を餌として縛し置く時、螻蛄の前脚を動かすさま怒れるが如く見え、又それによりて、鵜の寄來るによりていふ』甲乙利害を異にする譬。 鵜飼喜べば、螻蛄腹立つ 世間學者氣質「何れ、世俗の譬にも、螻蛄腹立つりや、つぐみよろこぶ。親仁(オヤジ)がまうけりや、息子が遣ふ」

けら 【名】〔動〕よしきり(葦切)に同じ。

けら 啄木鳥【名】〔動〕きつつき(啄木鳥)の略。

けら 啄木鳥の子は、卵から頷(ウナヅ)く【句】『頷くとは、啄木鳥の、嘴にて木をつつく姿をいふ』「旃檀は二葉より芳し」に同じ。〔諺語〕

けら 【名】〔植〕いぎり(椅)に同じ。

けら 鎌【名】舊製鐵法にて、砂鐵を熔解し、銑鐵を製出するに當り、爐底に沈みて凝結せる物。硅酸並びに石灰分等を多量に含有す。

げら (英 Galley の訛)【名】 **一**ステッキにて組立てたる活字を排列し、又は頁(ページ)に組立てたる活字版を載する、盆形の架。木又は金屬にて造る。活字盤。 **二**げらずり(げら刷)の略。

げら【代】 われ。自分。〔山城國八瀬(ヤセ)邊の方言〕東海道名所記「父(アン)も母(モ)も京へ來たにやあ、我(ラ)も出てにやあ」

けーらい 家禮・家來【名】 ㊀五攝家以外の家柄輕き公家衆(クゲシ)の、朝廷の公事故實を習ふために、攝家に出入せし者。〔家賴〕太平記「公家(クゲ)・家禮の人人には」 ㊁武家に參候する武人。家人(ケニ)よりはやや禮待を加へ、且つ親しみ深からざるもの。 ㊂武家に臣として仕ふる者。家人(ケニン)。いへのこ。內の者。家臣。家隸。本朝三國志「二人の主君に腹切らせし謀叛人は、重恩の家來」 ㊃その家に仕ふる男。めしつかひ。內の者。從者。家隸。

家來ならねば、家來は使へぬ【句】 家來の身になりて、親しく下情に通ぜざれば、上に立ちて、人を使ひ難し。〔諺語〕

けらいーじまん 家來自慢【名】 他に對して、わが家臣をほこること。

けらいーすぢ 家來筋【名】 家來のつづきがら。家來たるべき關係ある者。心中宵庚申「むゝ、山脇三左衞門が悴なれば、身がためにも家來筋」

けらいーぶん 家來分【名】 家來に準ずる身分。川中島合戰「殊に、衞門姫は、親景虎に某所望仕かけ、女房同然、然らば直江兄弟は家來分」

けらいまかせ 家來任【名】 自ら指揮・裁斷せず、家來に委任して顧みざること。

げーらう 下郎【名】『げらふ(下臈)』の轉訛】 賤しくして、人に使はるる者。しもべ。日本振神始「下郎・下人を傭うても、禮を言ひ、賃を出す」

下郎の一寸戸(ノドクチ)【句】「下衆(ゲス)の一寸戸」に同じ。〔諺語〕

げらうーことば 下郎言葉【名】 下郎のつかふいやしきことば。でんばうことば。

けらーき【名】〔植〕いぬぎり(椅)に同じ。

けーらく 快樂【名】くわいらく(快樂)に同じ。 榮花「彼の切利天のけらくを享けて、歡喜苑の內に遊戲するに劣らず」

【句】〔佛〕快樂の永く續きて、退轉することなきこと。 盛衰記「逐時快樂不退の極樂は、欣ばれ候へば」

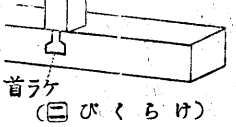
けらく【助動】けりの連體形の延言。〔古語〕 萬葉「神代より言ひつぎけらく」

げーらく 下落【名】 ㊀物價のやすくなること。(騰貴に對して) ㊁等級の下ること。 ㊂だらく(墮落)に同じ。

げーらく 下洛【名】 比叡山などより京都へ下り來ること。平家「山門の大衆、夥しう下洛す」

けらくーてん 化樂天【名】〔佛〕『梵 Nimmanaya の譯語』 六欲天の第五、兜率(トソツ)天の上三十二萬由旬、須彌山(シユミセン)よりすれば、六十四萬由旬の處にあり。ここに生る者は、みづから五塵を化(ケ)して、みづから娛樂し、壽八千歲に至るといふ。化自在天。化天(ケテ)。

けらーくび 蠟蛸首【名】 ㊀槍の穗の、柄に接したる部分。しほくび。 ㊁〔建〕四角の首つきたる接手。主に棰(キヤ)の木貫に仕合するとき等に用ふ。



ラケ(ケ)くび(ら)

けらーげい 蠟蛸藝【名】

けらさい(蠟蛸才)に同じ。

けらーけら【貌】 やや嘲を帶びて笑ふ聲。からから。きらきら。きやらきやら。傾城酒吞童子「けらけらと打笑ひ、はあ改まつた事ばかり、此のお腹が今見えたか」 日本振袖始「岩長、けらけらとあざ笑ひ」

げらーげら【貌】 しまりなく笑ふさま。げたげた。孕常盤「武藏げらげらとえせ笑ひ」

けらけらーわらい けらけら笑【名】けらけらと笑ふこと。 柏狩飯本地「腰元どもに笑はれては恥辱ぞと、心に染まぬけらけら笑ひ」

げらげらーわらい げらげら笑【名】げらげらと笑ふこと。げたげたわらひ。

けらけら笑のごん腹立(ガヲ)【句】喜・怒・哀の表情の著しく外見にあらはるること。〔諺語〕

けらーざい 蠟蛸才【名】 『中華古今注に「蠟蛸：一名、石鼠、有二五能一而不レ成二技術一、其一曰、飛不レ過レ屋、其二曰、緣不レ過レ木、其三曰、泅不レ度レ谷、其四曰、掘不レ能レ覆二其身一、其五曰、走不レ能レ絕レ人」とあり』多藝にして、いづれも未熟なること。蠟蛸藝。石臼藝。

けらーざえ 蠟蛸才【名】 前條に同じ。

けらし【助動】 『過去の助動詞けりと想像の助動詞らしとの合併して、約まりたる語』過去の推量を示す。古今「櫻ばな咲きにけらしな足引の山のかひより見ゆる白雲」

げらずり げら刷(英 Galley proof)【名】 製版の出來上りたる時、試刷し、又は校正のために假刷するもの。試刷。

けらちん(英 Keratin)【名】〔化〕 羽・毛・角・蹄等の主成分。脊椎動物の表皮、魚類及び爬蟲類の鱗にも存す。これらの材料を熱水・酒精・エテル・ペプシン鹽酸液等にて相次いで處理すれば、最後に、硫黃分に富みて不溶解性なる、一種の擬似蛋白質を殘溜す。角質。

げらちん(獨 Gelatine)【名】ぜらちん(ゼラチン)版【名】ぜらちんばん ゲラチン版に同じ。

げらつく【動四自】 げらげらと笑ふ。

けらつつき 啄木鳥【名】きつつき(啄木鳥)に同じ。 下學集「啄木、ケラツツキ」

けらーのーき【名】〔植〕いぬぎり(椅)に同じ。

けらば 蠟蛸羽・蠟羽【名】〔建〕『桁端(ケタバ)の轉訛ならんといふ』 切妻屋根(キリヅマヤネ)の端。上等なるは蠟蛸羽瓦を用ふれど、普通は漆喰(シツクイ)塗とす。慶長本節用集「蠟羽、ケラバ、軒也」

けらばーがはら 蠟蛸羽瓦【名】〔建〕蠟蛸羽(ケラバ)に用ふる瓦。そでがはら。

けらーはご 蠟蛸籠【名】 竹竿に黐(モチ)を塗り、蠟蛸(ケラ)を餌として附け、囮(オトリ)の傍に置くもの。鵙落(モズオ)の類。

げらーばな【名】〔植〕れんげさう(蓮華草)に同じ。

けらーはらだち 蠟蛸腹立【名】 「蠟蛸腹立つれば鷦(ミソサヾイ)喜ぶ」を見よ。雙生隅田川「百連はつぐみの悅、少將はけら腹立」

げーらふ 下臈【名】『らふ臈』を見よ』 ㊀〔佛〕法臘を積むことの少なき者。臈次の下位なる者。〔下臘〕(上臈に對して) ㊁年功を積むこと短くして、地位の低き者。(上臈に對して) **げらう(下郎)**參照。〔古語〕源氏「げらふなりとも、おなじ深きところはべらん」 ㊂身分賤しき者。下人。下郎。下衆(ゲス)。 ㊃**げらふにようばう(下臈女房)**の略。(上臈・中臈に對して) 參考「上臈は五貫、中らふは三貫、下臈は一貫づつ給ふ」 ㊄明治二年十月に定められし宮中の女官の一。中臈の下に位す。同四年七月廢す。

下臈の藏人(クラウド)【句】「六位の藏人」に同じ。 日中行事「下臈のくらうど、申し沙汰す」

げらふーにようばう 下臈女房【名】 攝關家の家司(ケイシ)の女又は賀茂・日吉の社司の女などの宮仕せしもの。げらふ。(上臈女房に對して)〔古語〕源氏「こなたのたいの北おもてにすずみける下臈女房」

げらふーほふし 下臈法師【名】 下臈【二】の法師。身分の輕き法師。源氏「つきづきしき程の下らふ法師に、火ともさせて」

げらふーをとこ 下臈男【名】 げらふの男。榮花「さるべき下臈男どもやなにくれの供奉(グ)たち」

けらまーうり 慶良間瓜【名】〔植〕琉球國慶良間列島より產する西瓜(スヰクワ)。果實は、皮薄く肉緻密にして、味甚だ清冷なり。

けらまーれったう 慶良間列島【名】〔地〕琉

球國島尻(シリ)郡に屬する列島。那覇(ナハ)の西約二〇浬にあり。渡嘉敷(トカシキ)・黒・自志婦(ウジ)・座間味(ザマミ)・赤・慶留間(ケルマ)・屋加比(ヤカヒ)・久場(クバ)の大小九島及び諸礁嶼より成る。渡嘉敷最大にして、周回四里二十町、一名前慶良間といひ、座間味も、殆どこれに等しくて、一名後慶良間島といふ。

けり 鳧【名】〔動〕『鳧の字は、古來けりと訓じ來りたれど、かもと訓ずる方正しかるべしといふ』渉禽(セキキン)類に屬する鳥。千鳥(チドリ)の族。大いさ鳩よりもやや大きく、頭と背とは、灰褐色、胸と腹とは白く、翅は黒白交はり、嘴は黄色にして、先の方黒く、脚も黄色なり。水邊に居て、小魚類を捕へ食す。



（り　け）

けり 【動】(靴)を云ふ。(北海道の方言)

けり 來り【動】【變自】來てあり。きたる。く。「古語」萬葉「見まくほり思ふ間に玉梓(タマヅサ)の使のければうれしみとあが待ち問ふに」

けり 著り【動】【變他】著てあり。「古語」萬葉「わが旅は久しくあらじこのあがける妹が衣の垢づく見れば」

けり 【助動】『俗に鳧の字を宛て用ふることあり』■『過去の助動詞きと動詞あり(有り)との結合せるものなるべし』過去の意。萬葉「ころもでをうちわの里にあるわれを知らずぞ人は待てど來(こ)すげる」■感嘆の意。萬葉「人もなきむなしき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり」

けりが附く 【句】『和歌には助動詞けりにて終るもの多きよりいふ』物事のくくりが附く。終了を告ぐ。終結す。

ける程に 【句】『何何しける程にの略』さるほどに。さうかうするうちに。松風村雨東帯鑑「兄御の行平樣とこのわれらと、一寸したもやもやが深うなって、上る程に、ける程に」

げり 外吏【名】外任の官吏。ずりやう。國司。「古語」後撰「外吏に、しばしばまかりありきて」

げり 下痢【名】大便の頻りに下ること。腸管の蠕動の亢盛、腸管壁の病變乃至病的滲出物に原因す。はらくだり。くだりはら。

げり 【助動】けりの轉。著聞集「艷書を手づから持ちて行きてんげり」

けりーかも 鳧鴨【名】『けりかもは、歌に多く用ひらるる助動詞と助辭となるよりいふ』歌又は歌人を罵りていふ語。

けりーかもめ 鳧鷗【名】〔動〕渉禽(セキキン)類に屬する鳥。鷗(カモメ)に似て小さく、腹白く、背薄黒く、嘴と脚とは赤し。

けりんをん 華林園【名】〔佛〕『華林は龍華樹(リュウゲジュ)の林の義』彌勒(ミロク)佛の成道(ジョウダウ)したる後に、說法せしといふ僧園。彌勒この園の龍華樹の下にて成道し、且つ三會(サンエ)の說法を以て、悉く應慶の衆生(シュジョウ)を度しをはりたりといふ。

けりんをん 華林園會【名】〔佛〕りゆうげゑ龍華會)に同じ。

けりや 【句】助動詞けりの已然形に、接續の助辭ばの附きたる「ければ」の轉。女殺油地獄「その男の聞くまへで、昨夕の如く言はないけりや」

けりやう 家領【名】地方にある公家衆(クゲシ)の領分を支配する人。

けりやう 假令【名】『次條を見よ』ならぬこと。かりそめ。浮世親仁形氣「月・雪・花は、けりやうのたのしみ」

けりやう 假令【副】『假令(ケリヤウ)の字の呉音』■假に言ひてみれば。譬へていへば。■おほよそ。大概。大約。東鑑「參加者、假令可レ及二五萬騎一」■たまたま。都合よく。薩摩歌「十二の年から十九まで、人の盛を拾置いて、けりやう道を守ればこそ、若し氣がそれて、いたづらしたら」

けりやう 家令【名】四品(シホン)以上の親王、三位以上の人に賜ひて、その家事をつかさどらしめしもの。かれい(家令)參照。

けりやく 下略【名】文章の、下文を省きて書かぬこと。(上略中略に對して)

けーりよう 掛陵【名】朝鮮にて、高麗時代より行はれたる陵墓の一種。陵は饅頭形をなし、周圍に十二支に當てたる東石を据ゑて、十二神人を浮彫にし、石の垣を繞らし、陵の前四十間ほどの位置に、石の獅子・文石・武石・華表等を建つ。文武陵。

ける 蹴る【動下一他】足に力を入れて、物を突きやる。くう。くゆ。

ける 蹴る【動四他】前條の訛。

ける 蹴る【動四自】逃走す。〔盜賊の隱語〕

ける 《英 Celts 又 Kelts》【名】往時ゲルマン族に先んじて、歐羅巴の中央部に擴がり居りし種族。アリヤンゴオル・シムリの二族を含み、狹義にてはゴオルと同意義に用ふ。その血統、最も多く佛蘭西人中に傳存せり。けると云ふ。

けるとーぞく ケルト族【名】前條に同じ。

けるとーやき ケルト燒《英 Celtic pottery》【名】古代のケルト人が作りし陶器。粗末なる土製の瓶多く、灰色又は黒色の上に、小刀にて、土の柔かなる間に施せる彫刻の裝飾あり。

けるびん 《英 Kelvin》【助數】『英國の物理學者ケルビン(William Thomson Kelvin, Lord)の西曆一八七九年電力の單位とすべしと提言せし量なるよりいふ』電力の單位。一千ボルトアンペヤに等し。

げるまにや 《獨 Germania》【名】獨逸國にて、その國家を代表せしむるために設けたる女神。佛蘭西のガリヤ、英吉利のブリタニカの類。

げーれう 解了【名】〔佛〕さとること。會得(クヱトク)。合點(ガテン)。了解(レウカイ)。

げれえん 《英 Grain》【助數】ぐれえんに同じ。

けれおそおと 結麗阿曹篤【名】くれおそおとの訛。

げーれつ 下劣【名】卑しくして、劣れること。遲歩色薬集「下劣、ゲレツ」松風村雨東帯鑑「あらぬ下劣の子を以て、若宮に取替へ、上を欺く、私の至り」

げーれつーじょう 下劣乘【名】〔佛〕せうじょう(小乘)に同じ。

げれっぷ 《獨 Gelblotz の訛》【名】〔植〕東印度・南米諸國に産する、黄色素を含有する一種の大木。染料として用ふ。

けれーど 【接】次條に同じ。

けれーども 【接】『形容詞の已然形に、接續の助辭ども の附きたる形、例へば「善ければも」を口語にて「善いけれども」となり、更に「善い。けれども」となりて、つひに形容詞の下ならでも、廣く用ひらるるに至れる語』然しながら。然れども。されど。

けれん 外連【名】■演劇にて、俗受(ケケ)を專らにせんがために、定格に拘らざる演出法をなすこと。ばあたりを取らんがために演ずる一手法。■紛らかすこと。どまかし。欺罔。「人。

けれんーし 外連師【名】前條■を巧になす人。

けーろ 華筥【名】けご(華筥)に同じ。

げろ 【名】へど(反吐)に同じ。

けーろ 華籠【名】けご(華筥)に同じ。

けろーけつ 繫驢橛【名】〔佛〕『碧巖錄の第一則著語に「是甚(サン)繫驢橛」とあり』つまらぬ物事に心の繫縛せらるるを、路傍の驢馬を繫ぐ橛(ケツ)に譬へていふ語。〔禪宗の語〕

けろーけろ 【貌】病氣又は事故などの、跡方もなくなりて、全く何事も無かりしが如き樣子。けろり。平然。

げろーげろ 【名】へど(反吐)に同じ。

げろーげろ 【貌】反吐(ヘド)を吐くさま。

けろっ 【貌】けろりの音便。

げーろん 戲論【名】■戲に論ずること、又その議論。■〔佛〕謬(アヤマ)れる見解。

けろり 【貌】■けろけろに同じ。■何氣無きさま。知らぬふり。■自失したるさま。ぼんやり。〔語。

けろりーかん 【貌】けろりを、少し强めていふ。

けろりーくわん 【貌】前條に同じ。一茎けろりくわんとして鴉と柳かな」

けろりーばん けろり番【名】諸侯の家臣にて、材幹なき者の、廣間の番を勤むること、又その者。(德川時代の俚語)

けーわう 華王・花王【名】〔佛〕蓮華藏(レンゲ)世界の法王、即ち毘盧遮那佛(ビルシャナブツ)の尊

稱。**れんげざうせかい**〈蓮華藏世界〉參照。盛衰記「華王の本土」

けわうせかい 華王世界【名】〔佛〕**れんげざうせかい**〈蓮華藏世界〉に同じ。

けわがふ 假和合【名】〔佛〕事物の存在は、實有〈ジツウ〉にあらずして、因緣により四大の假に和合して成れるものなること、即ち何時しか必ず離散する時あるべきこと。假合〈カガフ〉。

けわたがも 毛綿鴨【名】〔動〕涉禽〈セフキン〉類に屬する鳥。頭は灰青色、胸は赤褐色。腰の兩側は白色、その他の部は、黑色を呈す。北極地方に多く産し、冬季千島地方に來ることあり。羽は柔にして貴重せらる。

けわる 蹴割る【動四他】蹴て割る。天神記「石を蹴割り、木の根を穿ち」

けゐ 褻居【名】常に居る室。ゐま。居室。小座敷。〔古語〕古事談「不レ斷置二酒於褻居棚一」

げゐ 外位【名】古、郡司・軍毅・國博士〈クニハカセ〉・國醫師〈クニノクスシ〉・帳内・資人等の外官〈ゲクワン〉の人に賜ひし位。正五位下より少初位〈ショホ〉下まで、二十階あり。內位に比すれば、やや卑きものとせられたり。後、門地卑き者には、內官・外官の區別なく、これに敍し、その考第に應じて、順次に內位に敍する制度も定められるるに至れり。**にふない**〈入內〉參照。

げゐん 外院【名】齋宮寮の三院の一。寮の被管十二司の衙〈ガ〉に充てし所。（內院・中院に對して）

げが 外衞【名】次條の略。

げゑふ 外衞府【名】天平寶字三年宮城の門外警固のために、當時の中衞府〈チユウヱフ〉に對して設置せられし衞府。四等官を大將・中將・少將・將監〈ゲンザウ〉・將曹といへり。寶龜三年廢せられ、その人員は、近衞〈もとの授刀衞・後の左近衞〉・中衞〈後の右近衞〉・兵衞の三府に分配せられたり。

けをさめ 褻納【名】晴著〈ハレギ〉の料のよろしき物なるべしといふ。〔古語〕宇治拾遺「けをさめのさうぞくども、あまたくだり」

けをる 蹴折る【動四他】蹴て折る。宇治「幕柱を蹴折りて」

こ

發音 ㊀か行第五の音。子音kが母音oに結び附きて發す。その發音の方法・位置に就きては、**か**及び**お**の條下に說けるが如し。濁音**ご**に就きても、同樣、**か**及び**お**の條下を見よ。㊁長音は**こお**又は**こー**、**ごお**又は**ごー**と書す。本書は前者に依れり。㊂下に**う**ふの來る時、即ち**こう**・**こふ**・**ごう**・**ごふ**等の字音は、**こ**・**ご**の長音に發音す。例へば、**こうばい**〈紅梅〉・**こふ**〈劫〉・**ごうしや**〈業障〉・**ごふしやう**〈恒沙〉の類。㊃この上に**つ**・**き**等入聲韻の字音ある時は、その**つ**・**き**等は促音に發音せらるること多し。例へば**こくこく**〈國國〉を**チツコク**、**ごくごく**〈鬱金〉を**ウツコン**、白**こつこつ**〈虹〉をハツコウと發音する類。㊄國語にて、この下に**ふ**・**ほ**の來りたる場合、相合して、長音に發音することあり。例へば**こふ**〈乞ふ〉・**こほり**〈氷〉・**こほろぎ**〈蟋蟀〉等の類。但し、**こふ**〈乞ふ〉のごとき動詞の場合は、口語にては、長音に發音せずして、コウと發音す。㊅濁音を附して**ご**と發音せずして**ごお**と發音する場合は、話の中間及び下に限る。例へば、**かご**〈籠〉・**うごく**〈動く〉・**すくごふ**〈宿業〉の如し。その說明に就きては、**か**の條下を見よ。

字源 平假名**こ**は「己」より、變體假名**な**・**ふ**は「古」より、**ゑ**は「故」より出づ。片假名の**コ**も「己」の略體。萬葉假名としては、清音中、音に據れる者は、如上の漢字三字の外、「許」・「去」・「據」・「擧」・「虛」等、訓を取れる者は、「小」・「子」・「木」・「兒」・「粉」・「處」・「籠」等あり、また濁音には「五」・「吳」・「碁」・「期」・「語」・「御」等、すべて音に據れる者を用ふ。

こ 子【名】㊀人及びその他の動物の男女。雌雄の生殖作用によりて生れたるもの。（親に對して）後撰「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」㊁實子・養子及び繼子の總稱。㊂成人に達せざる人。幼稚なる人。こども。わらべ。小兒。「兒」㊃子孫。血すぢの末。㊄若き人・美しき人・愛すべき人を親しみていふ語。記「みづみづし久米の子らが」萬葉「わが宿のひとむら萩を思ふ子に見せずほとほと散らしつるかも」㊅本より分れて、別に生じたる物。「筍（竹の子）・茸（木の子）」㊆利（利子）に同じ。「元も子も無くなす」㊇こかぶ〈子株〉の略。㊈藝娼妓などを親しみて呼ぶ語。「花柳界の語」「あの子よい子ぢや粋〈イキ〉な子ぢや」

子が思ふより親は百倍思ふ【句】親が子を思ふことは、子が親を思ふより深し。〔諺語〕

子孝〈カウ〉ぜんこ思へごも親待たず【句】『木靜かならんと欲すれど風止まず』を見よ』子が孝を盡さんと思ふ頃は、親は既に此の世にあらず。〔諺語〕梨花・植木しづかならんと思へども風やまず、子孝ぜんと思へど親待たず」

子で子にならぬ子規〈ホトトギス〉【句】子規はおのれの卵を他の鳥にかへさしむるより、孵〈カ〉りたる鳥も、その子は眞のおのれの子にあらず。〔諺語〕心中宵庚申「名殘も夏の薄衣、鶯の巢に育てられ、子で子にならぬ子規」

子こ辜丸〈ツミ〉は荷にならぬ【句】我が子は、愛情のために、邪魔に思はず。〔諺語〕

子にする事を親にせよ【句】子に對するほどの慈愛の心を以て、親に事へよ。子ほどに親を思へ。〔諺語〕

子に使はるる親心【句】親は、子のためには、心身の勞を厭はず。〔諺語〕

子に引かるる親心【句】親は、とかくにつけて、子の愛に引かさる。〔諺語〕

子に迷ふ親心【句】「子ゆゑの闇」に同じ。

子の命は親の命【句】子の生死は、親にとりては、己の生死と等し。〔諺語〕

子の子【句】まご〈孫〉に同じ。

子の心親知らず【句】親は子の胸裏を窺ひ得ず。〔諺語〕

子の恥は親の恥【句】『子の善惡共に親の名の出づるよりいふ』子の恥辱は、親の身にも關係あり。〔諺語〕

子は有るも欵き、無きも欵き【句】子有るものは、子のために欵き、子無きものは、子を得んと欲して欵く。〔諺語〕盛衰記「子は無きも欵き、有るも欵きといひながら、無きほしと樂〈ネガヒ〉ひ思ふばかりなり。有りてはかたがた煩多し」

子は一世〈イツセ〉【句】『佛敎の方便にて、親み薄きものを、特に重くいはんが爲にいふ』親子の關係は現世のみの緣なり。〔諺語〕「子は一世、夫婦は二世、主從は三世、他人は五世」

子は親に似る【句】「親に似ぬ子は鬼子」に同じ。〔諺語〕

子は三界の首枷〈カセ〉【句】親が子を思ふ心のために、自由に行動し得ぬ譬。親子は三界の首枷。〔諺語〕

子は第一の寶【句】子にまさる寶なし。千の藏〈クラ〉より子は寶。こだから〈子寶〉參照。〔諺語〕

子は父の爲に隱す【句】「父は子のために隱し、子は父のために隱す」を見よ。

子は夫婦の中の鎹〈カスガヒ〉【句】『鎹の二つの者を密著せしむるに譬へていふ』夫婦和合せざる時も、子あれば、その恩愛に引されて、親睦融和すること。〔諺語〕

子ほどに親を思へ【句】「子にする事を親にせよ」に同じ。〔諺語〕

子ほど喜ばしにくき者なく、親ほど喜ばしやすき者なし【句】親は子を